KAIZO

改造

六月號

1929

モオリス・ルブラン著◇佐佐木茂索譯

アルセエヌ・リュパン

四六判美裝上製六六六頁
定價壹圓五十錢（送料廿四錢）

上品で
怪奇で
非常に
面白い
小説集

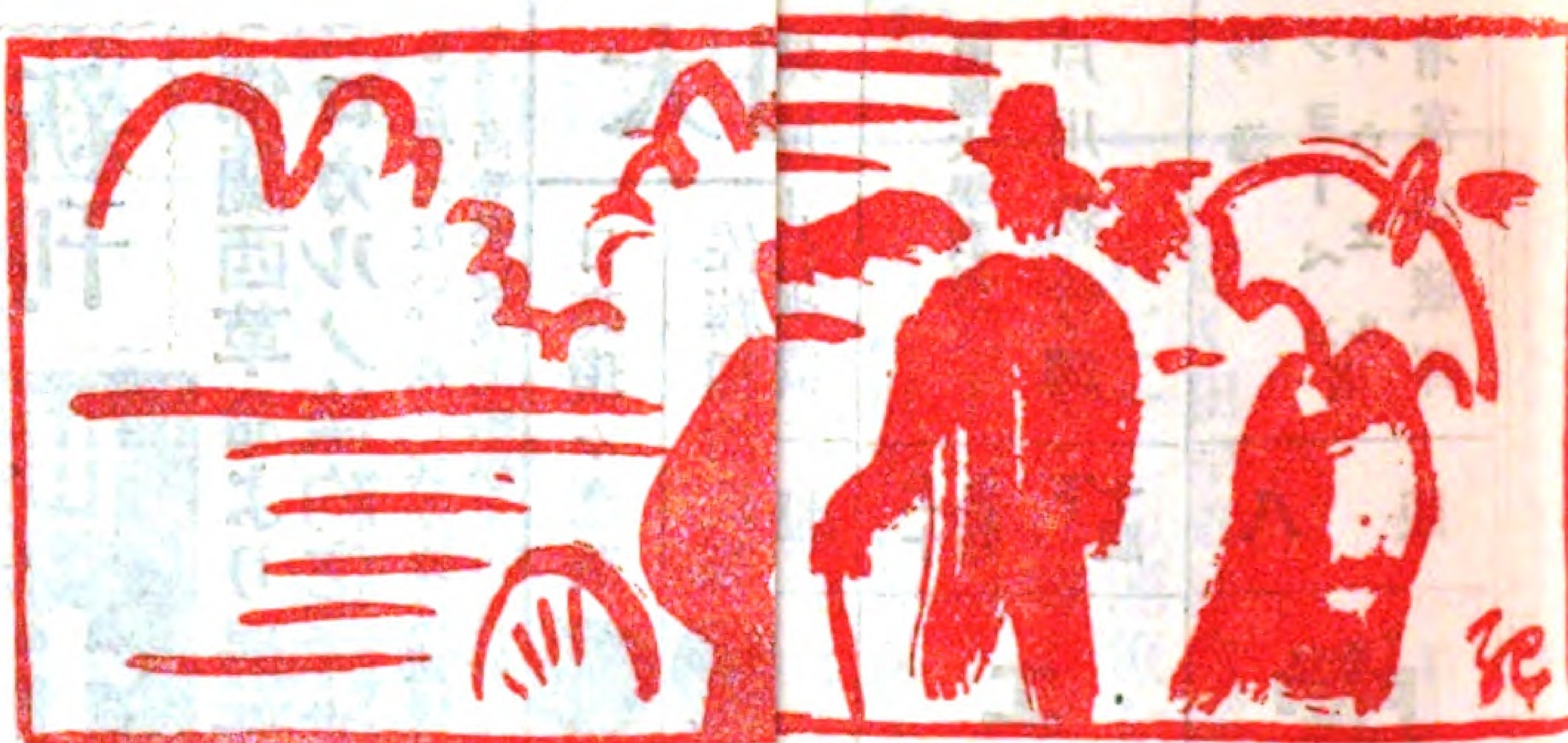
溌溂として若い快活な 諷刺的な容貌！これがリュパンである。竊盜・强盜・詐欺・掏摸！これが彼の生活である。併乍ら彼は同情深く、其一擧手一投足は磊々落々。あの皮肉、あの魅力、あの機智！彼は寧ろ藝術家である。彼の行動は高尚で魅力に富み、騎士道的で典雅である。だから人々は我知らず彼の成功を希ひ、道德さへも彼に左袒するかに見える。凡そ世の中に これ程面白い讀物は又とあらうか。讀み始めたら終る迄やめられない。故芥川氏をはじめ 文壇の大家の殆んど全部が其の愛讀者である。

【内容】**强盜紳士、水晶の栓、輝く雨、リュパンの勝利。**

東京芝區愛宕下町　**改造社**　振替東京八四〇二



改造 六月號 目次



安岡正篤著

東洋倫理概論

新刊

現代人の生活不安は決して經濟ばかりではない。そこにはもつと深刻な靈魂の飢渇がある。人間として、國民としての生活意義の荒廢がある。この飢渇と荒廢とは煩瑣な論理を操り、空虛な概念を弄んで居る講壇の倫理學書や、味も香もない處世訓、直情にぴたりと來ぬ飜譯道德書などでは到底救はれない。此書は著者みづからこの惱みを救はんが爲に多年聖賢の學を尋ねて實參苦修した中におのづから得た原理と確信とを細やかに系統を立てて論述したもので、眞に心から心に贈る智慧の書である。

紙數三百餘頁　定價貳圓四拾錢　郵税十二錢

白耳義文豪 マーテルリンク著　文學士 栗原古城譯　廿一版

死後は如何

附錄「交靈術とは何ぞや」

人間の死後は果して如何、絶滅か、永生か、將た「醒むるなきの睡眠」か。現代第一の文豪たるマーテルリンクは本書に於て此の大問題を解決した。

四六判總布　壹圓九拾錢　郵税十錢

慶應大學教授 戸川秋骨譯　上十九版 下十版

エマーソン論文集

近代に於ける最も幽玄にして最も健全なる思想家はエマーソンである。加之其文辭最も簡潔にして又最も雄勁、句々みな座右の銘とするに足る。譯文亦精透。

上卷 參圓　下卷 貳圓五拾錢　郵各十二錢

獨逸 ショーペンハウエル著　增富平藏譯　八版

處世哲學

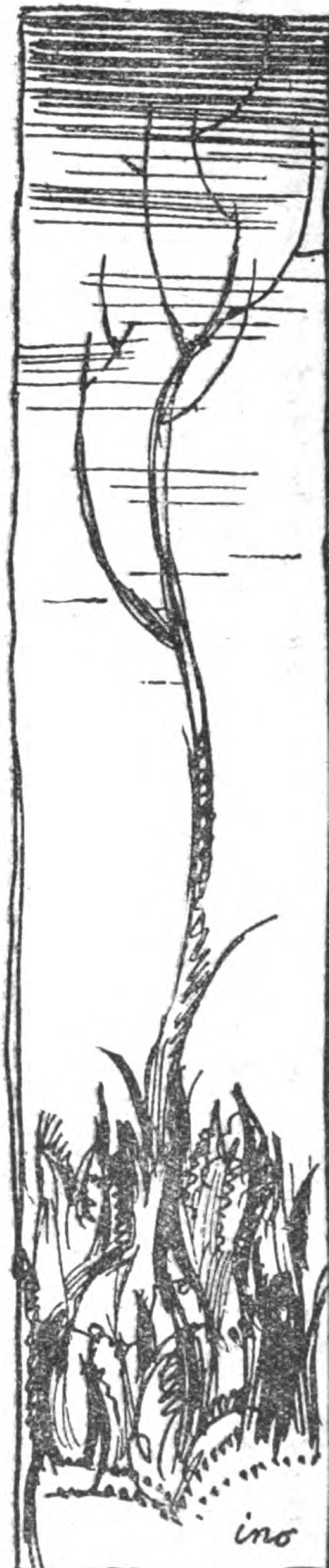
偉大なる哲學者「人間を知れる者」としての著者が晩年に於ける深遠の觀察と老熟の思想とを擧げて人間處世の妙諦を說けるもの。譯文亦明快を極む。

四六判總布　貳圓八拾錢　郵税十二錢

京本郷片町　玄黄社　電話小石川三一九番　振替東京七九九五番

内閣改造は無意義

近く田中君は内閣を改造して人心を新にし、行き詰れる政局の打開を計るの意圖あること明かだ。されど一二の閣僚を取りかへたりとてそこに何等の新味も加へられねば、何等の强味も出でてこない。從つてこれ等の更迭によりて地租委譲や、金解禁その他の問題が解決さるるとは誰も期待しない。殊に刻下の輿論となれる金解禁を斷行するには異常なる決心、周到なる準備がなければ却つてこれがために財界に動亂を惹起せしめ、拾收すべからざる狀態を出現するにあらざるか。田中首相は財界の素人。三土藏相とて國民が財政的に、經濟的に多大に信任しているとは思はれず、またそれほどの手腕力量があるかも疑問である。して見れば外務、拓植の兩相が新任するとしてもその人々のためにこれ等政友會内閣の問題が解決され得ざるは火を覩るより明かだ。結局二大臣の新任はただ單なる事務官の更迭と見るの外ない。内閣を改造しても政策遂行に何等の影響を見ることができぬとすれば、そのこと内閣を改造せないに如くはない。またかりに床次君が一枚加るにしても一人の力で十幾人の頭顱を引きずり廻はして今度の議會で頓挫せる諸問題を解決するは至難である。至難といふよりは不能である。我々は現在樞密院で問題となつている「人民の名に於て」のやうな問題で内閣が覆沒することを望まない、しかし自己の積年高唱せる主要の政策を遂行することができぬときは潔く責任をとるべきだと思ふ。いかに多數を議會に擁しても眞に力量なきものでは國民の期待している緊要の問題を解決することができないではないか。田中内閣はかくして議會を俟たずして野垂死しやうとしている。内閣の改造はそう困難なことでない。しかしその改造によりて自己の政策を遂行することができねば結局は改造そのものが無意義、無意味のものとなる。田中内閣は宜しく天下に公約せる政策を遂行することができないことを民衆に謝して總辭職するが當然だと思ふ。我々は重ねて云ふ、二大臣の新任によりて決して内閣の强味を加へるものでなく、またそれがために重要な政策が解決され得ないことを。



我國外交の基調

高柳賢三

一

最近の外交問題中、實質的には極めて小問題と見るべきにかゝはらず、民政黨の一部の人達對政府當局、樞密院對內閣の政治的爭の對象となつた爲に一大問題たるかの如き外觀を呈し、事柄自體に不相應な程度に、世論を刺戟したのは、云ふ迄もなく、不戰條約第一條に於る問題の字句「人民ノ名ニ於テ」である。

不戰條約は各締約國が國策の手段としての戰爭を廢棄し、國際紛爭を平和的處理方法に依つて解決せんとする原理をば宣明した一般條約である。そして右の文句は此の各締約國のなす宣明が各國民全體の意嚮に合致し、その支持を受け、且つ此の條約が各締約國の全國民に依つて尊重せらるべき主旨を明かにせんとして特に挿入せられたのであつて、不戰宣言に力を加へんとした一の强勢辭であることは條約のテキストの全體に照すも、將た又、不戰條約締結の經過に照すも、極めて明白なりとすべきである。それが各締約國に於ける主權所在の問題を變更したり、又は條約締結權が人民に在りと宣言する主旨でも、又斯かる効果を發生せしむるものでもないことは極めて明白なる事柄であるとせねばならぬ。然るに民政黨の一部の人達は、民政黨が嘗て

「議會中心主義」問題に就て、政友會から、かゝる主義を民政黨が提唱することは國體違反であると云ふ理由から、ひどく虐められたことに對する一の報復手段として、又民政黨が國體を重ずることに於て、決して政友會に劣るものでないと云ふ主旨を國民に知らしめんが爲めの窮策に過ぎないのであつたと云ふ說が正しいとすれば、其處には同情すべきあるものがないでもない。又現內閣が外政上幾多の失敗を重ねた爲に樞密院方面の信望を失ひ、樞密院は之を責めんが爲め責め道具として、問題の字句を借り來つたのだと云ふ說が正しいのであるならば、樞密院の態度をある程度の同情を以て理解し得るであらう。然し斯くの如き內政上の經緯を知らない外國に對しては、我國は內心は不戰條約には反對なので、從來喧傳された樣に、軍國主義意圖を包藏するのではないかの誤解を惹起し、この字句的論爭が我國將來の外交に對して惡影響を及ぼす有害な論爭であつたと見るのが正しい見方であらう。又締結せらるべき不戰條約が、例へば、滿洲に於る我が特殊權益に就て如何に作用すべきかと云ふが如き不戰條約から生ずる實質問題に就ての重要な考察が擲られ、字句の末に就てのみ論議の焦點が置かれたと云ふことは政治的に見て極めて無責任な行き方であつたと云ふ非難を免かれないであらう。外交の問題が政黨的論爭となることは、それが實質的問題についで戰はさるゝ限り、之を是認すべきことであるが、かゝる論爭は眞に有害無益だと見るべきである。然し此等の問題は今之を論外に置き、冷靜に、問題となつた此の現象を觀察しつゝ我々は左の如き感想に打たれるのである。

(一)不戰條約は國策の手段としての戰爭を廢棄し、國際紛爭の解決手段として、平和的處理方法を以て之に代へんとする多數國家間の條約である。それは本質的には國際社會に於ける一の立法行爲と見らるべきである。平和的國際秩序を維持することを目的とした列國の合同(ゲザムト)行爲(アクト)に依る「立法」である。そして不戰條約字句問題は、假令それが條約の實質には何等觸れないのであつたにしても、右の字句が我が國體乃至我が憲法に違反するのではないかと云ふことが問題とせられたのである。換言すれば、それが國內法的秩序に違反するのではないかと云ふことが問題とせられたのである。從て此の問題は、漸次形成せられつゝある國際法的秩序の形成過程に於る、國內法的秩序と國際法的秩序との牴觸問題の一形相であると見られ得るのである。

元來條約の數が近時各國に於て激增しつゝあることは一の顯著なる國際的事實である。我國に就て見ても、殊に最近十年間に於て此の傾向は頗る顯著なものがある。それ許りでなく又條約の內容に就て見ても、古くは條約は攻守同盟、講和條約等所謂純「政治的」內容を持つものを主としたのであつて、これらの條約は私人の權利義務には直接

に影響の少い種類のものであつた。しかるに最近に於てはその內容が多方面に亘るに至り國民の經濟生活、文化生活にして直接に條約に依て規律せらるゝ部分が著しく擴大するに至つたのである。そして此の情勢は國際的交渉の緊密の度を加ふると共に益ゝ増加するものであると觀測すべきであらう。又政治的內容をもつ條約にしても從前の攻守同盟等の如く二國間の條約としては權力均衡を目標とするのでなく、むしろ、多數國家の合同行爲に依り一般に國際的秩序を維持する目的で結ばるゝ種類の條約が益ゝ増加する傾向にあるものと見るべきである。斯くの如く一面に於て、條約の數が著しく増加し、多數當事者間の條約が締結され、他面に於て又、諸國民の經濟生活文化生活を直接に規律することを內容とする條約が急速度に増加するのであるが故に、條約と各國憲法との衝突問題は、當然各國に於て惹起すべき問題であらう。そしてそれは國際法的秩序創造への努力が逢着すべき生みの苦みである。此の意味に於て、不戰條約字句問題も亦新しき時代の新しき問題を表徵するものとしてわれ等に訓ゆる處があるのである。

（二）右の如く、各國民の生活を直接に規律することを內容とする條約が増加するに至れば至る程、各國憲法上所謂「立法事項」に屬すべき事柄が條約に依て制定せらるゝ傾向を益ゝ増加するに至るのである。從て「條約締結權」と「議會の權能」とが各國に於て問題とせらるゝに至るのは又當然の過程であると云はねばならぬ。我國に於ては我憲法上條約締結は大權事項とせられて居るのであつて、條約締結については議會に干渉を許さないと云ふのが我憲法のたてまへである。內閣と樞密院とは條約締結に關與するに拘らず、條約締結に就ては議會に容喙の權利がないのである。此の憲法の規定は條約の性質が所謂「純政治的」であり、且つ之が締結について「秘密」「迅速」を必要とする時代に於ては妥當なる仕組であつたかも知れないが、現代の如く「公開」外交が國際間の通義となり、しかも所謂「立法事項」に屬する多くの事柄が條約に依て規律せらるゝに至つた時代に於ては其處に問題が發生しうるのである。

此の點に就て注目すべきは、最近に於る議會の外交に關する質問が増加し、且つ政府當局が之に對して相當に親切に答辯をなすに至つて居ると云ふ事實である。以前には議員から外交上の質問があつた場合に、政府當局は憲法を楯にとつて「答辯の限りにあらず」とつつばねたのである。然るに最近に於ては外交問題に就ての議會の質問に對して、政府は相當に詳細に答辯をするに至つたのである。又本年の衆議院の委員會に於て鈴木文治氏は國際勞働條約はその經過並に內容につき之を議會に附議することを適當とするものにあらずやと質問し政府委員は之に對し右の趣旨を了承し之から實現につとむべき旨を答へた

のであつた。しかるに大正九年衆議院に於て「最近ノ外交ハ國民ノ利害ニ影響スルトコロ特ニ甚大ナルニ拘ラズ複雜多端ニシテ外界ノ了解ニ困難ナリ仍テ本院ハ外交問題調査特別委員會ヲ設ケ講和外交ノ經過條約ノ內容並ニ之ニ關聯スル將來ノ國際關係ヲ調査シソノ結果ヲ本會議ニ報告セシムベシ」と云ふ決議案が長島隆二氏に依て提出せられたのであつたが、原首相は此の決議案を以て「政府ノ行動ヲ將來ニ制肘シ天皇ノ大權を侵犯セントスルモノ」として之に反對し、政友會總がかりで之を否決したことがあつたのであつた。然しながら條約の範圍が擴大すれば擴大する程、條約締結權と議會の權能との問題は當然白熱化するであらう。そして憲法改正の手續を經ないでも、事實上議會をして條約締結に就て關與せしむるが如き一定のフオーミユラが見出さるべきである。此の意味に於て、官僚外交より議會外交への變遷は事態の性質上當然實現して來るであらう。條約締結に關する憲法の條章は柄としてかはらないでも、その運用は時勢に適應すべきであるは勿論であるからである。此の意味に於て、憲法と共に憲法慣行（コンヴエンションス・オヴ・ザ・コンステイテユーション）の發達が望ましいのであらう。憲法の條章を漫りに改正することが愼しむべきであるとするならば。

又條約締結に就てその範圍が擴大するに從て、外務省のみならず諸官省の官吏が必然的に條約締結に關與する傾向の增大及び國家內に於る諸種の私的團體が條約締結に關與する傾向が顯著になつて來て居る。國際勞働會議へ政府代表のみならず資本代表勞働代表がそれ〴〵派遣せられて、國際勞働條約案の作成に關與して居るが如き、その顯著なる例であつてかゝる傾向は更に增加するものと見るべきである。

（三）不戰條約が締結せらるゝに至る經過に於て、我々は更に官僚外交から國民外交への變遷の一表徵を見出すことが出來る。不戰條約は初め佛國外相ブリヤン氏とコロンビヤ大學教授シヨツトウエル氏との私的會談に始まり、それはやがてブリヤン外相の米國民に對する聲明となり、米國側に於てはバツドラー氏等のブリアンの聲明に對する好意的聲明を惹起した。そしてこの國民的な私的な聲明の應答を具體化するが爲に、そして米佛兩國だけでなく、更に又他の國家との間に同樣の條約を締結せんとする考から、シヨツトウエル、チエンバレン兩教授の考案に成る「恒久平和條約案」なるものが作成せられた。そしてシヨツトウエル氏は、此の案を懷にして一昨年八月ホノルルに開催された太平洋問題調査會第二總會に米國代表として出席し、米國政府の意を受けて主として日本側の意嚮を知らんとしたのである。そして日本代表側に於ても、之に對して大體に於て好意的聲明を爲したのであつた。そして此の案は一昨年の秋から冬にかけて、我國の新聞雜誌に於て既に紹介せられ論議せられたのである。私も亦同年の本誌十二

月號に於て、「日米不戰條約」と題し、ホノルル會議の報告の意味に於て此の案を中心として論評を試みたのであつた。そして米國政府から我政府に對して不戰條約案を提議したのは、斯かる國民的論議のあつた後に於てである。米國政府提案の內容は必ずしもショットウエル、チエンバレン案とは同一ではなく、より簡單であり、より抽象的であるが、その主旨に於ては全然同一である。そして各國との往復文書の交換を經て、不戰條約は昨年の夏巴里で調印せらるゝに至つたのである。そして是等の公文もみな直ちに公表せられたのであつた。右の經過は、條約案が先づ私的會合たる太平洋問題調査會の總會に於て論議せられ、そしてそれが各國政府間の問題とせられたのはそれ以後である點に於て、又それが各國政府間の問題となつた後に於ても、往復文書が常に公にせられ國民の前に提出せられたのである點に於て注目に値するのであると私は思ふ。又太平洋問題調査會の會議に於て、英支代表間の了解が直ちに次の議會に於る「キングス・スピーチ」の中に入り、英國の新對支政策となつて現はるゝに至つたのも之と同時に注目に値する。斯くの如きは、國民外交の一表徵であると云はねばならぬ。

斯くの如く國際的情勢は益々國民外交的趨勢を釀成しつゝあるのである。そして「戰爭か平和か」の大問題が國民全體の關心事であるのみならず、締結せらるゝ條約の範圍が著しく擴張し、益々直接に國民の生活を規律するに至るのであるが故に、一國の外交政策の諸問題は、國內の諸問題と均しく、國民全體として研究し、論議せらるゝことが益々必要となると云はねばならぬ。そして是等の外交上の論議を事實に即せしめ、より聰明ならしむるがためには從來の秘密主義を捨て成るべく外交文書を公刊しその他外交についての智識を國民に普及することに努力するのが外務當局の急務である。

二

現代に於る外交は、國家が中心となつて行はるゝのを原則とする。そして各國の外交政策の根本基調はその國の安全を保護し、その經濟的並に文化的生活を維持促進するに都合よき環境を釀成することに存して居る。それはどこまでも國家本位であり、國民本位である。外交の形式が宮廷外交より官僚外交に移り、更に又國民外交に移つたとしても、その根本基調が國民主義的である點に於て變化があるべきでない。勿論病的現象として外交が國民中の特殊階級の利益のために行はるることもあるのであるが今此所にはこの點には深入せぬ。只外國が自國本位を基調とする點丈を指摘するのみである。又遠き將來に於て、世界國家が成立し、人類の福利の立場から人類間の關係が規律せ

らるゝに至る時代に於ては、外交の根本觀念も亦之に伴つて異つて來るかも知れない。然し當分の間、各國の外交政策は自國本位の立場から行はるゝものと見て差支ないと思ふ。外交上に於る諸種の具體的主義、例へば、帝國主義、權力均衡主義、モンロー主義、門戶開放主義、國際協調主義等その色彩に於て異るところあるに拘らず、その根本基調に於ては一國の安全を維持し、その經濟的文化的生活を維持促進するにあることは云ふ迄もない。この場合に於る各國政府の態度は、政府が國民と對立的に見れば「利他的」であり、又政府が國民と一體をなすものとして觀察すれば「利己的」である。從て少くも現代に於ては、外交の批判はこの根本基準からなされて居るのであり、又なされねばならぬのである

然し外交の根本的基調が、一國の安全、經濟的並に文化的生活の維持促進にあるとしても、第二次的な指導原理に於ては異論を生じ得べきである。その最も極端な形態に於て起つたのは、所謂「軍事的帝國主義」である。軍事的帝國主義は武力に依て領土を擴張し、他國の人格生存を無視して自身國の利益を增進せんとするものである。それは武力に依て領土を擴張し、擴張せられたる領土に於てその經濟的利益を增進せんとするのである。「商業は國旗に從ふ（ザ・トレイド・フオロズ・ザ・フラッグ）」ことをモットーとするのである。現代の世界に於て、尙「領土主權」の概念が強く世界の輿論を支配して居るのであるが故に、此の方法が容易く行はれ得るならば、一國の經濟的利益の增進は、極めて簡單に行はれるものと考へられることは當然である。蓋し一國領土內に於て經濟的利益を增進することと、外國に於て經濟的利權を獲得し、之を保護促進することゝの間には、難易に於て霄壤の差があるのであるが故に、先づ武力に依て一定の地域を自國の領土となすことが、一國の經濟的利益を增進する最も簡易なる方法であると見られ得るからである。然し現代世界の情勢並に輿論に照して、斯かる方法を實行することが實際上に於て極めて困難となりつゝあることは何人も認むるところである。更に又「經濟的帝國主義」なるものがある。先づ一國の商業を外國に擴張し、諸種の利權を獲得し、資本を投下し、此等の經濟的利益を保護する爲に武力を現實的又は恫喝的に使用する方法である。それは「國旗は商業に從ふ（ザ・フラッグ・フオロズ・ザ・トレイド）」ことをモットーとするのである。此の種の帝國主義は、資本主義的經濟組織が國家的保護を受くるかぎり、不可避的なものと考へられて居る。世界列強中此の種の帝國主義的色彩を持たないものは殆どないと云つてもよいのであつて、現代の國際關係に於て最も力強い要因をなして居るものと觀察すべきであらう。更に又經濟的帝國主義に對應するが爲に「排外貨」主義とも稱せらるべき戰術が武力を以て刃向ふことを得ざる弱小國民の間に（假令直接政府に依てよ

はないにしても）取られて來るに至つた。殊に支那印度の如きは此の外國貨物に對するボイコットの戰術を常套手段として用ふる傾向が強くなり、英國が先づ對支彈壓政策に對する反抗運動として此の戰術に出遇ひ、さすがの保守黨内閣も對支自由政策に移らざるをえざるに至つた。そして之に依て、一時その鋭鋒を避くるに至つた。そしてこの鋭鋒は更に移轉して我國に向けられ、殊に田中内閣の山東出兵と共にこの傾向が益々強くなり、濟南、漢口、南京諸事件の解決に依て此の運動が終息するとの豫想も殆ど裏切られ、支那人日貨取引業者に對する反日會系の策動は益々強からんとする形勢にあるようである。この方法は強國の武力、恫喝に對する經濟的反抗、經濟的恫喝である。それは一國内に於て勞資間の鬪爭に於ける「同盟罷業（ストライキ）」「非賣同盟（ボイコット）」等の戰術に均しい。又それが系統化されて永續的に使用せらるゝならば世界大戰中實驗せられた經濟封鎖と等しく、その結果に於て悲劇的である。之をうくる國の「事業家」「資本家」に對してそれが大打擊であるのみならず、事業不振の結果解職せらるゝ其國の勞働者にとつても、それは悲慘なる結果を齎すことになる。更に又國際協調主義なるものが、殊に國際聯盟成立後に於て各國民に依て前途を期待せられて居る。國際間のあらゆる紛爭を司法裁判、仲裁、調停等の平和的手段に依て解決し、戰爭を封じてしまふことを目標とするのである。そして不戰條約は、此の運動に對して、米國が原則的に參加した點に於て重大な意義があるものとされる。然し又國際協調主義は未だその第一步を印したに止まり、その內容に於て極めて貧弱であり、且列國の軍備擴張運動、關稅競爭、移民排斥、排外貨運動等の形で、現實に於て裏切られて居る事實が少しとしない。

此等の情勢の下に於て、日本の採るべき外交政策は如何なる方面に進出すべきであるか。私は日本の外交政策が國際的協調主義の完成に努力する方面に向はざるを得ないのであり、又向ふべきであるとするに傾むくものである。それは永く日本がその生存を維持し、經濟生活そのものを促進してゆく唯一の途ではないかと思はれるのである。

三

我國の經濟生活に於て、相當に永續的な問題として世人の注意を喚起して居るものは、所謂人口食糧問題である。人口食糧問題は富源少き我國のみならず富源に缺くることなき諸國に於て問題とされて居るのであつて、それは主として國民の生活難殊に就職難、失業の現象に關聯して論議せらるる。然しマルクス的意義に於る人口食糧問題であるならば、國內の社會制度經濟組織の××××のみに依て、充分之を緩和することが出來得るかも知れないが、日本やイタリヤの如く上

地狹く、富源少く、人口の增殖の激しい國にあつては、更に又マルサス的意義に於る人口食糧問題が、永續的な問題として殘り得るものと見るべきではないか。人口食糧問題に對しては諸種の對應策が考へられて居る。曰く國內農業の奬勵、曰く植民地農業の奬勵、曰く食糧品の利用增進、曰く內地植民、曰く外國移民、曰く產兒制限、曰く生活程度の簡易化、曰く商工業の新興、曰く失業の防止救濟、曰く社會制度の改革、議論は多岐多樣に亘つて居る。此等の對應策はそれ〲みな重大な功果をもたらし得べきが如くであるが、現在の狀況を前提とする以上何れの方法にも限度があつて、近代的意義に於る人口食糧問題の解決として行き詰ることを免かれない。殊に永遠的意義に於る我國の人口食糧問題に至つては、國內的手段のみを以ては殆んど解決の途が見出され得ざるものとすべきではないか。商工業奬勵を目標とした產業立國策と雖、現在の如き國際情勢が改まらざるかぎり、原料品輸入の問題、商品輸出の問題に至つて忽ち行き詰るに至るのであるので必ずしも之のみに依ることが實際上不可能となるであらう。一時的應急策の問題としては、此等の國際情況を前提とし、諸種の方策をも巡らすことを勿論懈るべきではないが、永續的の問題としては、此等の國際情勢そのものを漸次的に變更することに積極的努力を費さねばならぬのではないか。其處に國民の生活自體を基礎とした我國の外交政策が形成せられねばならぬのではないか。國際的立法、國際的行政の力を益々發達せしめ、國際正義に基いた政治的秩序を發展せしむる途に向ふのが、畢竟我國の永遠的經濟福利を增進する所以となるのではないか。一面に於て列國は他國の關稅障壁の撤廢を叫びつゝ、自國の關稅障壁を益々高むるが如き手段に出でゝ居るのでは、此の情勢は容易に變更することは不可能であるとも見られうるかも知れない。然し乍ら他面に於て、最近各國の識者は、人口問題が國際的に研究せられ解決せられねばならぬものであることを認め、一昨年の夏ホノルルに於て開かれた第二回太平洋問題總會に於ても此の問題が忌憚なく討議せられ、又同年ジュネーヴに於ては、人口問題國際大會が開かれて此の問題に就て國際的研究が試みられたのである。此等は人口の國際的分布、土地の國際的利用、原料品食料品の國際的管理、生產物の國際的交換等の問題が眞に國際的に人類全體の問題として考慮せられ、規律せらるゝに至る萌芽的現象と見らるべきものではないか。そして此の方面に向つての國際的協力を可能ならしむるが如き世界的秩序を創造することに最大の努力を拂ふことは、我國の外交政策として多大の努力に値するものではないか。

之を要するに、人口食糧問題に就て見るも、現代に於てはそれが國家的問題としてのみ考慮せらるゝ傾向が強いのであるが、それが眞に

世界的問題であると云ふ見地に立つてのみ解決し得べきものではないか。そして我國の外交政策は、此の目標を見失はないことに依つてのみ、眞に國民の生活に則したる外交政策たり得るのではないか。此の點は國民と共に眞面目に考慮すべき一大問題である。

四

現在に於ける國際的一大事實は、東洋諸民族の覺醒である。日本先づ覺醒し、その後漸次支那印度その他從來「後進國民（バックウオド・ネイションス）」と呼ばれて居つた諸國民諸民族が覺醒する過程を辿つて居る。此等の國民、此等の民族は、一九世紀に於て旺盛を極めた歐洲列強の軍事的又は經濟的帝國主義の威壓、白色人種の人種的文化的優越感に基く壓迫の下に呻吟した。日本は西歐の文化を吸收し、之を同化し、自らの生活を西洋式に改造することに依つて此の威壓、此の壓迫を切拔けることが出來た。そして或程度迄西歐の軍事的乃至經濟的帝國主義をも學んで、列强の仲間入りをし、後進民族との關係に於てはむしろ之と對立的地位を占めて、國民は國運の隆盛なるを祝した。この日本の興起に對し西歐に於ては、カイゼル其他の人の如き、盛に「黄禍論」を提唱して東洋民族覺醒の傾向の擴大を憂へたのであつた。然るに世界大戰後ウイルソンの「民族自決主義」に刺戟せられて、此等の後進民族の反抗運動は益ゝ激烈となるに至つた。そして「東洋の反逆」の聲が叫ばれ、世界の政局の中心は地中海より太西洋に、太西洋より更に太平洋に移るのであると說かれ、歐米諸國の注目は均しく所謂極東の國際政局に集中せらるゝに至りつゝある。日本は、人種的理由で、米國より人種的差別待遇を受けつゝ、而も尚世界强國の一として、殊に支那に於て「東洋の反逆」の目標の一として選び出されて居る。而も北方ロシヤはその共產主義的な抱負と、世界革命的宣傳と、巧妙なる戰術とを以て東洋の反逆を支持して居る。支那は我國とは稍趣を異にして、內亂の鎭壓、國內諸設備の完成等よりも寧ろ一意專心不平等條約の改訂、打倒帝國主義をモットーとして、急激に對外關係に革命的變化を來たさんが爲に、第三インターナショナル的戰術を支那の對外的特殊事情に適應せしめて利用して居る。弱小民族の唯一の武器たる「排外貨」を以て英國を苦しめ、又更に日本を苦しめて居る。かゝる「東洋の反逆」の情勢に對して我國の外交政策は如何なる態度を取るべきであるか、それは國民の熟慮に値すべき一大問題であらねばならぬ。事態は極めて複雜且デリケートである。それは最高のステーツマンシップを要請する重大問題である。それは將來に對する鋭い透視力と、現在に於ける事態の正確なる認識とに基いた外交政策の確立を必要とする

同樣なる經驗を數十年間味はつた我國民は、此等民族の民族的解放

運動に對して、深い同情の念を懷いて居ることは勿論である。又正義心と仁俠的精神とを傳統的に多分に備へて居る我國民性として、此等多數の抑壓せられたる民族が、經濟的にも社會的にも、又政治的にも完全なる解放を獲得するに至ることを希望して居るのも勿論だ。更に又將來に於る國際社會に於て此等の民族が有力なる組織員として成立することは、日本の永遠の利益から齊眼しても望ましきことであるとすべきであらう。從て本質的には、此等の運動を助成することが我が外交政策の根本的基調となるべきものではないであらうか。

然し此の問題の取扱方は極めて細心の注意を要するものである。米國大統領モンローの故智に倣つて「アジヤ的モンロー主義」を宣言したり、「汎アジヤ同盟」を夢想したりすることは反つて所謂「人種的鬪爭」を激成し、徒らに世界平和を攪亂するのみならず、日本の安全それ自身までをも脅かすに至る情勢を作り出すことに立至る虞があるのではないか。

支那の國權回復運動の指導者が、從來の民族運動的であり、合理的に不平等條約を改訂し、國際關係をして常態に復せしむるにあるならば、日本の之に對する外交政策は割合に簡單であるであらう。然し近時に於る支那人の心理は、相當に變態的な狀態に陷つて居るかに見られる。支那は「外貨排斥」と云ふ有力な武器を發見した。そして此有力なる武器に依てあらゆる種類の不平等條約を撤廢し、しかも、一部の人達は滿洲に於る滿鐵その他所謂我國の「特殊權益」を回收し、臺灣を回收し、朝鮮を獨立せしむる迄はこの有力なる武器を使用すべきであると考へて居るようである。若しもそれが事實であるとすれば、之が爲に經濟的に堪ゆべからざる激變を受くべき日本としては、又さらでだに人口食糧問題に惱む我國としては、自己保存の必要上或種の變態的政策に出づることを余儀なくせらるゝを恐れるのである。

斯かる拗れた狀勢に對應する爲に一時的彌縫策を講じることも已むを得ないことであらうが、然し大局的に見れば、日本は支那の國民的要望の達成を期待し、徐々に之を援助し、列強を導き、同時に又支那をして對外的權利を主張すると同時に、對外的義務を履行することの必要、及びその前提要件たる支那の國内的秩序の完成に努力するの必要を痛感せしむるの策に出づるの外はないのではないか。そして此の目的を達するが爲には、益々國際協調に依て國際的法律秩序の完成に努力することが必要とせられるのではないか。此の點は國民として深甚の考慮を要する點であると私は思ふ。

支那の政情は日々變化して、變轉極まりなきものと考へられて居る。そしてそれには一面の眞理がある。此等の變化する狀況に對して臨機應變の處置に出るべきは勿論である。然し支那の解放運動は「東

洋の反逆」の一形相である。そしてそれは一形相として理解せられねばならぬ。將來の國際政局に於て、此等の國民乃至民族の占むる地位は、國際秩序の内容の構成に於る大きな要因をなすべきであることを忘るべきではない。

五

大戰後成立した國際聯盟と、最近に於て成立しかけて居る不戰條約とは新しき時代を表徴する重要な國際現象である。前者は既に十年餘の生存を維持し、その貢獻並に失敗共に歷史的事實である。後者は未だ海のものとも山のものとも云へないが、而も少くも國際協調主義の根本原理に、從來孤立政策をとつた米國及びロシヤが同意を表明した點に於て歷史的價値がある。國際聯盟規約前文の精神と、不戰條約に表はれたる各國の宣言とは畢竟同一であつて、戰爭を廢棄し、國際紛爭を平和的方法に依て解決せんとするのがその眼目である。それは何れも一九世紀に隆盛を極めた帝國主義に對する反抗的宣言である。それがよく今尙力強く國際政局を動かして居る經濟的帝國主義を緩和し、又は打破する力となり得るや否やは將來に殘されたる問題であり、それは又各國民の意志如何に依て定まる問題である。そしてその道程が平々坦々たるものでないことも亦明かである。然し國際紛爭を戰爭に訴へないで、司法的解決、仲裁調停等の平和的處理方法に依て解決することを約するのみで國際間の紛爭が絕滅するものでないことは明かであつて、一面國際法法典の完成による正義に基いた國際法的秩序の確立及び經濟法勞働法等の領域に於る統一的法規の完成を必要とし、且國際行政の領域に於る法律的及技術的改善を必要とするのは勿論である。そして國際條約の形式に依て漸次立法、司法、行政の諸方面に於る國際的規律が漸次試みられるのであると觀察すべきであらう。その步み方は遲々たるものであるであらうか。

右の國際協調に對する反動的態度も勿論各國に於て相當強いものと見ねばならぬ。然し我々にとつて重要な問題は、我國の外交政策は此の點に就て積極的に斯かる國際法的秩序の建設に努力すべきか、或は又儀禮的に消極的な態度で、大勢の赴くまゝに單に之に追從すると云ふ態度を取るべきであるかである。

我國に於ても國際聯盟や不戰條約の如きは一の理想論の表現にすぎないのであるに止まり、現實の世界を支配する力はないのであると觀察する者も少くない。この論は國際協調主義が容易く行はれるものでないことを指摘する點に於ては眞理を含むものではあるが、畢竟一面のみを強調した觀察に過ぎないのであると見るべきである。

又、國際法的秩序の確立は既得權を確立せしむる傾向を持つのであ

つて、我國の如く自然に惠まれず、且國際競爭に於て立遲れた國民に對しては不利な傾向を齎すものであると云ふ理由で、之に反對する考方もある。此の觀察にも一面の眞理のあることは認めねばならぬ。法律秩序は一般に保守的であり、既得權を尊重する傾向を伴ふものであることは事實である。法律秩序の下に於て、社會革命家は常に迫害を受けるのは法律の歷史に於て顯著な事實だ。國際的法律秩序に於ても亦革命的變革を求むる國民は迫害せられ、壓迫せられるかも知れない。然しながら他面法律秩序の內容は時勢の變遷に伴ひ、輿論の變化に從ひ、常に變化を受くるものであることも認めねばならない。假令一時既得權の保護の色彩を持つ國際法的秩序が確立するとしても、正義公平に反する事實が指摘せられ、論議せられ、それが世界的輿論となるに及んでは此等の國際法的秩序の內容そのものも變化するに至るに相違ない。從て斯かる國際法的秩序を促進することは我國の如き國にとつても必ずしも悲觀すべきではないと見るべきであると私は思ふ。

國際法的秩序の理念の正當性の問題は之を別論として人口食糧問題や資源欠乏問題の如く、我國の遠き將來に向つて重大な問題、弱小民族の覺醒及び反抗の如き將來に於る國際團體の組織に關して重要な意義を持つ問題に照して、我國の外交政策は寧ろ此の方面に一大飛躍を試みるのが我國民の永遠の利益に合致する所以ではないのであらうか。（昭四・五・三）

マルクスのロビンソン物語

——價値法則の背後に在るもの——

大熊信行

1

マルクス主義者並びにマルクスを批判せんとする者、——およそあらゆるマルクス祖述者及びマルクス研究者が、そのいかなる側からなりとも當然手を觸るべくして手を觸れずにゐるところの一點がある。この一點は看過された一點である。何人かが發見するのでなければ、經濟學の視野に入らずにゐるところの一點である。しかも一旦發見されれば再び見失はれることのない一點である。なぜならこの一點の把握はそれ自體新しい宏大な展望を約束するからである。新しい展望とは何か。——マルクス經濟學の發展は、かならずしもヒルファディング的方向のみにあるのではなくして、その逆に基礎理論の深化もまた疑もなく發展の一方向でなければならぬといふことの決定的な示唆。

2

『資本論』の全建築の根柢にうづめられてゐる一つの奇怪な柱、——誰も手を觸れたことのない、觸れても氣のつかない柱、だが確かに全建築の基礎を支へてゐる柱。この柱をひとつ明るみに取りだして見て何人か驚かぬものがあらうか。——なぜ驚くか。それは一箇のロビンソン物語だからである。

理論經濟學の領域においてロビンソン理論を排撃することは、實にマルクス經濟學のもつとも强力な、もつとも得意とする仕事の一つ。——ブハーリンのブルヂョア經濟學批判はその好例である。だがロビンソン物語への嘲評は、ブハーリンをもつて嚆矢とするのではない。カール・マルクスこそかかる理論的方法にたいする最初にして最大の批判者であつた。『經濟學批判序說』のなかに彼はいふ、『我々が歷史を遠く遡れば遡るほど、個人は、從つてまた生產する個人は、非獨立的な、一のより大なる全體に屬してゐるものとして現れる。……社會の外部における孤立せる個人の生產といふことは、——それは稀には文明人が偶然に荒野に迷ひ込んだ場合に起り得るのであるが、かかる文明人は諸々の社會力を能動的(dynamisch)に有してゐる——共に生活

し共に語る個人なくしての言語の發展といふに等しく、一の背理である。」（宮川氏譯マルクス『經濟學批判』四、五頁）と。

かくいふマルクスが、『資本論』全體系展開をその商品分析からはじめるにあたつて、——しかも『價値のあらゆる本質的な規定』に關するもつとも簡明な基本的説明を試みるにあたつて、孤立の生産者ロビンソン・クルーソーを導き入れたといふことは、——しかもそのロビンソン物語がいかなる他の經濟學者のそれよりも一層典型的であるといふことは、どう考へても一應不思議なことではあるまいか。マルクス自身十分にこの一點を闡明せず、すべてのマルクス主義者はこれをかへりみず、あらゆるマルクス批判者はこれを不問に附してゐる。——まさにすべての人々によつて看過された一點。

この物語は、マルクスにおいて單なる氣紛れの挿話や比喩では決してない。これは理論的な部分であり、しかも極めて基本的な部分であり、實に彼の全體系の出發點をなすのである。この事實は、マルクス經濟學の方法論的基礎にたいする從來のマルクス主義者の見解を粉碎しなければやまないやうに見える。——だが、果たしてさうか。眞の問題は、理論經濟學の分野に一個のロビンソンが登場するかしないかにあるのではない。いかなるロビンソンを登場せしむべきかにこそ、すべての問題はかかつてゐる。——マルクスは少しもこれを説くことなしに、無言のまま彼の獨自の物語を提出してゐる。何人かがいでてこれを取上げ、吟味し、そしてその本質が何であるかを突き止め、これを他のすべての經濟學のロビンソン物語と對照し、その鋭い對照のなかから、マルクス經濟學と他の經濟學との理論的方法の對立を闡明しないかぎり、この問題は解決しないであらう。

この一篇は、專らマルクス・ロビンソンの本體を解明するをもつて目的とするものであるが、その方法は、この一點におけるマルクスの科學的分析の限界を明かにし、進んで彼の分析を繼續發展せしめるために必要な道具が何であるかといふこと、すなはち彼の基礎理論の深化はいかにして可能であるかといふことを、示唆するにある。

我等は圖らずも右の方法をブルヂョア經濟學の所有に屬するもののなかから學びとつた。だが、道具はそのまま我等の使用に堪へ得るのではない。我等はその形を變へ、それを摑み直さなくてはならぬ。以下讀者は、その仕方がいかなるものであるかを、見られるであらう。

3

ブハーリンの意見によると、社會現象殊に經濟現象の研究にあたつて我等の執り得る道は二つある。第一は社會現象をもつて個人的現象の一定の結果であるとする考のうへに立ち、個人的生活における合法則性の分析から出發することによつて社會經濟の諸現象と合法則性とを説明しようとするもの、第二はこれに反して社會現象をもつて個人的現象の結果であると觀ずることなく、全體としての社會そのものを直ちに分析することによつて個人的な經濟生活を規定するところの諸關係と合法則性とを發見し得べしとするものである。そして第二の立

場こそ、いふまでもなくブハーリンによつて考へられたマルクスの立場である。第一の立場は墺太利學派の立場であるとともに、同時にまた古典學派の立場であると看做され、したがつてマルクス學派のみひとり純粹に客觀的・社會的立場にをり、他のすべての學派は、主觀的・個人的立場のもとに一括され得るものとなる。そしてそれらの個人主義的徴候の一つは、ブハーリンの見解によれば、彼等がその學派のいづれを問はず期せずしてみなロビンソン物語を好むといふ一點から看取することができる。ブハーリンはこの一事を嘲りの音調をもつて指摘してゐる。

おもふに孤島にただひとりのロビンソンならば、彼の生活のなかに認め得るものは、ブハーリンのいはゆる個人的生活の合法則性を措いて他に何があらうか。誰がそのなかに社會的法則を發見すると主張し得るか。マルクスが『資本論』の根柢にロビンソンを置いたのは、そこに一箇の基本的法則を必要としたからであり、そしてその法則はもつとも簡明な形態において孤立人の全生活のなかから發見し得たからである。これはマルクスの社會的立場をおもふとき、一見して何たる矛盾であらう。社會ではなしに個人的生活の合法則性がマルクス經濟學の基礎を成すといはば、あらゆるマルクス學者は一齊にこれに反駁を加へようと欲するであらう。——だが、マルクスは明かにいつてゐる、このロビンソンの孤立生活の秩序のなかに、すでに『價値のあらゆる本質的な規定が含まれてゐるのである』と

孤立人のなかに價値法則が存在するとは、マルクスは言つてゐない。だが、孤立人の生活のなかに『價値のあらゆる本質的な規定』があるといふ。價値法則そのものではないが、價値の『本質的な規定』が存在するとは、何を意味するのであるか。おもふにそれこそは價値法則の背後にあるところの・そしてその無二の地盤たるところの・他のもう一つの法則の意味であり、その法則なくして價値法則はありえないやうな、かくれたる・背後的なる法則である。それは本來的に社會的な法則ではない。社會的なものとして把握することはできるが、しかもその根元を個人のなかに辿らざるをえない法則である。なぜであるか。それは人間行動の法則であるとともに、その行動を直接指定するものは個人の欲望だからである。マルクスがロビンソンの孤立生活のなかから完全にこの法則を把握し得たことは、この法則がその本質において社會的なものではないといふことの確證以外の何であるか。マルクスのロビンソン物語は、短いなかに多くの冗辯をふくみ、殆ど必要なる要點を掩ひかくしてゐるほどである。それはあまりに簡單に雜作もなく片付けられ、殆どすべての讀者がそこに何が書いてあるかを感知しないうちに消えてしまふ。だが、この物語の唯一の目的は、價値法則の背後にあるものの闡明にあり、そしてその背後のものとは、他の機會に彼がいふごとく、極めて明白な誰でも知つてゐるやうな・『自然法則』なのである。我等はこれを配分法則または配分原理と呼ぶをもつて至當と感ずる。しからば配分法則とは一體何か。いま取りあ

えずマルクス・ロビンソンについてそのいかなるものであるかを見よう。

4

『經濟學はロビンソン物語を好むから、先づロビンソンの島の生活を見よう。』と、——これがマルクスの書き出しである。『經濟學はロビンソン物語を好むから』とは、何と輕妙な修辭法であらう。彼がこんな風に書き改めたのは第二版以後である。『彼れは生れながらにして淡白寡欲な男ではあるが、』と物語作者らしくマルクスはつづけていふ、『それでも樣々な種類の欲望を滿足せしめねばならぬ、そしてそのためには道具を作つたり、家具を製造したり、駱馬を馴らしたり、魚貝を採つたり、狩獵をしたりして、樣々なる種類の有用勞働をなさねばならぬ。祈禱その他これに類似なものは茲で問題とならぬ、なぜといふにわがロビンソンはそれに怡樂を見出し、かかる活動を氣晴しとしてゐるのだから。』(河上博士譯マルクス『資本論』第一卷第一分册一一三、一一四頁)と。

——さてこれからロビンソンの經濟理論である。が、それはわづかに數行である。讀者はいかに注意しても、過ぎるといふ憂ひはないであらう。『さて彼れは、彼れの生產的機能の種々雜多であるに拘らず、それらが同一なるロビンソンの異なれる活動形態に外ならず、從つて人間勞働の異れる仕方に外ならぬことを、よく知つてゐる。必要そのものが彼れを强制して、彼れの時間を彼れの異なれる諸機能の間に正確に配分せしめる。彼れの總活動の中でどの機能がより多くの範圍を占め、どの機能がより僅かの範圍を占めるかは、目的とする效果 Nutzefekt を得るために克服すべき困難の大小によつて定まる。經驗が彼れにそれを敎へる。』そしてマルクスは若干の餘談をこれに附加したあとで、『しかもなほこれらの諸關係のうちには、價値のあらゆる本質的な規定が含まれてゐるのである。』と結んでゐる。

ここに『配分』といふ文字は、ただひとつである。それはロビンソンの行動をあらはす言葉であり、その行動の對象となるものは『時間』である。しからばロビンソンは、彼の『時間』をいかなるもののあひだに、『配分』するのであるか。——それは『諸機能の間に』である。『諸機能』とは何か。——それは『樣々なる種類の有用勞働』の意味である。すなはちロビンソンの生產總部門といふのにひとしい。彼は彼の時間を彼の生產總部門のあひだに『正確に配分』する。しからば『正確に』とは何か。——それは正確の比率においての意味である。そもそも正確な比率とはいかなるものか。一〇〇のものを例へば一〇の部門に一〇宛配分するといふごとき算術的均等の意味か。さうではない。『彼れの總活動の中でどの機能がより多くの範圍を占め、どの機能がより僅かの範圍を占めるかは、目的とする效果 Nutzefekt を得るために克服すべき困難の大小によつて定まる。經驗が彼れにそれを敎へる。』とマルクスはいふ。すなはちロビンソンの『總活動』が各機能のあひだに占むべき『範圍』の大小、換言すればロビンソンの時間が彼の

各種部門のあひだに配分さるべき勞働時間の比率が、算術的に不均等のものであることは、豫め明白である。しかもその算術的に不均等なもののなかに、一つの『正確』な比率が存在し得るのである。その配分比率は、それを變化せしめることによつてロビンソンが恐らく不利に感ずるやうな比率であり、ロビンソンがそのまま維持せんことを欲する比率である。――彼は『經驗』からこれを學ぶ。

マルクスはここに法則といふ言葉を用ゐてゐない。だが、種々なる欲望に適應するところの諸生産物を獲得すべく、ロビンソンがその總勞働を配分するといふ行動は、まさに合法則的な行動である。我等はここに孤立の個人的生活における合法則性がマルクスによつて認められたことを發見する。すなはちマルクス・ロビンソンの全生活を支配してゐるものは一つの配分法則なのである。

5

マルクスの配分法則。――それがどんなものであるかを知らうとするにあたつて、ここに無二の手引きがある。それはマルクスの著書ではなくて彼の手紙である。これは有名な手紙である。はじめレーニンによつて注意され、近時日本のマルクス學の最大の教師によつて再三引用され、紹述されつつあるところの、一八六八年七月十日附クーゲルマン博士宛の一通。――おもふにマルクスが把握した配分法則の性質について、マルクスの言葉がみづから説明したものは、この手紙のみではあるまいか。

手紙のなかでマルクスはいふ、――

『また種々なる欲望に適應する諸々の生産物の數量は、社會の總勞働の種々なる且つ量的に規定されたる數量を必要とすることも、誰でもが知つてゐる。社會的勞働を一定の割合に配分することの斯かる必然性は、決して社會的生産の一定の形態によつて廢除されるものでなく、むしろたゞその現象の仕方を變ずるのみだといふことも、分りきつたことだ。自然法則は總じて廢除されえざるものである。歴史的に異なつた狀態のもとで變じうるのは、かの法則が自らを貫徹するところの形態のみである。そして、社會的勞働の聯絡が個人的な勞働生産物の私的交換として行はれてゐるやうな社會狀態のもとで、勞働のかかる比例的配分が自らを貫徹するその形態は、正にこれら生産物の交換價値である。……ブルヂョア社會の本質は、生産の意識的な社會的な統制が先天的には決して行はれないといふことのうちに、正に成り立つ。合理的なもの及び自然必要的なものは、（かかる社會においては）盲目的に作用する平均としてのみ自らを貫徹する。』（河上博士著『資本論入門』第四分册。これを經濟學批判會編『唯物辯證法』から引用しなかつたのは譯語に相異あるによる。）

右の引用は、問題の手紙の一部分であり、繼ぎ合はされた斷片にすぎない。この手紙については、レーニンが『マルクスに沈潛し「資本論」を讀みはじめんとする何人もが、「資本論」の最初の且つ最も困難な章の研究と同時に……何遍でも繰り返し讀まんことは、まことに望ましきことである』と讀者に勸めてゐるものの由であり、その理由並びにそれに

したがつて日本のマルクス學者がこれを重要視する理由は、ここで本篇の筆者がこれを重要視する理由とは、角度を異にする。だが、もしも本篇の目的のためにこの手紙を引用することが正しいならば、一つの書簡が、かくも種々なる目的と問題とのために決定的な示唆をあたへ得てゐるといふことは、實に面白い事だ。しからば本篇の目的のために抄出された右の斷片は、我等に何を告げてゐるか。

マルクスはここで明かに一つの『自然法則』の存在について、またその意味と性質とについて、述べてゐる。マルクスにしたがへばこの自然法則は『決して社會的生産の一定の形態によつて廢除されるものでなく』、その形態の異なるにしたがつて、『たゞその現象の仕方を變ずるのみ』である。この法則は、いかなる社會的生産からも廢除すべからざる自然法則であり、『歴史的に異なつた狀態のもとで變じうるのは、かの法則が自らを貫徹するところの形態のみである。』――しからばマルクスにおいて、歴史的な法則以外に、非歴史的な法則の存在が認められてゐるといふことは、第一に明かである。その非歴史的な法則の意味は何か。――それは社會的勞働の正常配分比に關するものである。それは人間の意慾からはなれた純然たる機械的法則ではなく、むしろ『合理的なもの及び自然必要的なもの』として本來の合目的性が認められる。社會的勞働を一定の比率において生産諸部門に配分するといふ合理的法則は、社會的生産の或る形態そのものからは說明されがたい。その法則が發見されるのは社會的生産の諸形態を通してではあるが、法則それ自體は社會的生産形態以外のものにその根抵をおく。さればこそそれは社會的生産のいかなる形態によつても廢除されることをえず、却て逆に社會的生産のあらゆる形態を、それぞれ貫徹することによつて、その諸形態に一々統一性をあたへることができるのである。かかる法則こそ、すべての歴史的時代を通じて、人類の生活行動の根元をなす欲望のなかに、その基礎をおくものであり、人間の肉體的組織乃至生理的性質が根本から變化しないかぎり、その基礎は恒久的である。――孤立人ロビンソンの生産がこの法則の支配をうけてゐるといふ事實は、ロビンソン一個のなかにすでにこの法則の基礎たるものが潜存するといふ證據でなくて何であらう。すなはち配分法則の根抵は社會的生産形態のなかに存せずして個人の欲望のなかにあるのである。

マルクスにおいて、彼の經濟學を根本的に特徴づけてゐる歴史的な發展法則乃至『各々の歴史的時代はそれ特有な法則を有してをる』といふ意味の歴史的法則以外に、人間生活のあるところ必ず廢除すべからざる他のもう一つの『自然法則』の存在が考へられてゐるといふこと、そしてそれは配分法則または配分原理と名付くべきものであることは以上によつて明かである。この法則は、その性質において非發展的、非歴史的なものであり、一つの社會的生産形態の理論的理解に一應の安定性と全體性とを賦與するところの靜學的な法則である。一つの生産形態と他の生産形態との對照的な理解を必要とする場合に、缺くからざる最初の把握は、その兩者に通ずる『合理的なもの及び自然

要的なもの』としての『勞働の比例的配分』の均衡である。社會的欲望に對應する勞働配分の合目的性が、いかなる方法と過程とによつて實現されつつあるかといふ視點こそ、右にいふ生產諸形態の對照的理解への鎖鑰である。たとへば『社會的勞働の聯絡が個人的な勞働生產物の私的交換として行はれてゐるやうな社會狀態のもとで、勞働のかかる比例的配分が自らを貫徹するその形態は、正にこれら生產物の交換價値である。……ブルヂョア社會の本質は、生產の意識的な社會的な統制が先天的には決して行はれないといふことのうちに、正に成立つ。』といふごとくである。——しからば社會的勞働の總配分が、意識的に、統制的に行はれる生產形態とはいかなるものか。それこそは社會主義的生產形態に外ならない。

6

社會主義的生產形態における配分關係。——マルクスはこれを『自由人の團體』といふ一つの幻想のなかで、簡淨に說明した。我等は再び彼のロビンソン物語にかへる。マルクス・ロビンソンは、もつとも簡明な配分關係の典型である。つづいてこの配分關係を社會的なものに轉化せんとしてゑがかれたものこそ『自由人の團體』である。——

『……吾々は、眼先きを變へるために、共有の生產手段をもつて作業するところの・そしてその多くの個人的勞働力を意識的に一の社會的勞働力として支出するところの・自由人の團體を想像して見よう。ここではロビンソンの勞働のあらゆる規定が繰返されるが、しかしそれは個人的にではなく、たゞ社會的にである。ロビンソンのすべての生產物は、彼れの全然個人的な生產物であり、そしてそれゆゑに、彼れにとつては直接に使用對象であつた。今問題とする團體の總生產物は一の社會的生產物である。かゝる生產物の一部分は再び生產手段として役立つ。それは社會的なるものに止まる。しかし他の部分は團體員の生活資料として消費せられる。だからこの部分は彼等の間に配分されねばならぬ。かゝる配分の樣式は、社會的生產組織そのものの特殊的な樣式と・それに適應する生產者の歷史的發展程度との・變動につれて變動する。吾々は、たゞ商品生產と對比せしむるために、各生產者に對する生活資料の割當ては、彼れの勞働時間によつて規定されるものと假定しよう。さうすると勞働時間は二重の役割を演ずることとなる。勞働時間の社會的に計畫的な配分は、種々なる勞働機能と種々なる欲望との間に正しき比例を保たしめる。他方において勞働時間は、總勞働に對する生產者の個人的參與の尺度として、そしてそれゆゑに共同生產物中の個人的に消費せらるゝ部分に對する生產者の個人的分け前の尺度として、同時に役立つ。人間の・彼等の勞働に對する・および彼等の勞働生產物に對する・社會關係は、こゝでもまた依然として、生產においても配分においても、すき透るやうに單純である。』（前揭譯書一一七、一一八頁）

この『自由人の團體』と、さきのロビンソンとのあひだにおける生產秩序の根本的な類同は、勞働配分の完全な意識的統制にある。

——ここに河上博士譯の右の一節には幾つも同じ『配分』といふ譯語が見えてゐるが、そのなかで本篇の筆者が圈點を附した唯一つのみが、ここにいふ配分であり、殘りのすべては舊經濟學の四分法にいはゆる分配を

意味する。この兩個の概念は全然別箇のものであり、譯出を二樣にしないかぎり、完全なる理解にまで讀者をみちびくことは不可能であらう。高畠氏譯改造社版においては少くともこの部分に關するかぎり、いかなる曖昧ものこされてはゐない。そこでは『配分』と『分配』との明快に區別された譯出を見る。もちろん大正九年の大鐙閣版以來譯出の方法に變遷はあつた。『資本論』の新舊二種の英譯について見るに、譯者はいづれも同じ用意を怠つてはゐない。一方は『配分』にあたるものを apportionment と譯し、他方は allotment と譯することによつて、ともに distribution から區別してゐる。（分配問題を研究の主題とした二人の學者、リカードとクラークとが、いづれも配分を論ずべきときにあたつて distribute といふ語を避け、apportion といふ語を使用した事實をここに注意しておくことも無意味ではあるまい。）マルクス自身は多少とも兩者の區別についての關心があつたものか、右一節の最後の『生產においても配分においても』といふ個處にあたる部分の『配分』は特に英語を用ゐて Distribution と書いてゐる。――經濟學上の一基本概念を指示するために久しく用ゐられてゐる『分配』といふ決定的な用語が、河上博士によつて近時『配分』と改められた理由は、すべての人のつまびらかにしないところである。本篇の筆者はこの用語問題について、すでに他の機會に論及したから、ここには右のごとき博士の譯出には到底服しがたいものであるといふことを一言するにとどめる。おもふにこの譯出の仕方は、讀者をしてマルクスの眞意を誤らしめ易いものである。――なぜであるか。なぜなら右の一節の主眼は、勞働時間の『二重の役割』を說明するにあり、そしてその役割とは、疑もなく配分並びに分配の兩尺度たることを意味するものであるがゆゑに、マルクスが、in der Produktion sowohl als in der Distribution といつたときの Produktion とそ、正しく配分關係を意味し、Distribution は分配關係を意味すること明白なるためである。この配分關係は、マルクスがさきに『經濟學批判序說』のなかで『生產過程それ自體の內部に含まれ生產の編制を規定するところのもの』すなはち『種々なる種類の生產への社會成員の配分（河上博士譯ではここでは却て逆に分配となつてゐる）』と稱したものに該當する。（拙著『配分學說史考』第一册（同文館）四三頁以下參照）

　しからば配分と分配との概念上の根本的な相異並びにその理論的相關はどう說明されるか。『自由人の團體』とさきのロビンソンとのあひだにおける經濟秩序の根本的な相異は、前者には分配問題が存在するが後者には存在しないといふ一點にある。双方に通ずるものは配分問題であり、前者のみひとり分配問題を併有するのである。配分關係が理論上分配關係から遊離せしめらるべきものであることは、この一點からも直ちに感知し得るところであるが、この兩者を遊離せしめ得るといふこと、――すなはち兩者を支配するものはそれぞれ獨立の原理であるといふことの認識は、おもふに我等の科學にとつてもつとも基本的な課題の一つである。以下我等はマルクスに卽し、しかもマルクスを超えてこの一點を明かにするであらう。

　統制的な計劃經濟においては、『勞働の比例的配分』は、社會的欲望を代表する中樞機關によつて規定され、その過程は河上博士の言葉を用ゐれば『迂餘曲折を經る代りに、直接的で直線的である。』マルクスの言葉を用ゐれば『すき透るやうに單純である。』しかもそのことは、かかる社會的生產形態が、恒久的な人間の欲望を基礎とする配分の

を廢除し得ることを意味するのではなくして、まさにその逆である。同法則はいまや意識され、計劃され、そして實現さるべき一箇の規範的な原理として、社會成員のあひだに把持されなければならぬ。すなはちマルクス經濟學のなかでは、その發展法則のうしろに押しやられてゐるところの・非歴史的な・假面的な・必然法則は、マルクスの發展法則が交換經濟ののちに豫想するところの計劃經濟に至つて、はじめて神秘的な假面をぬぎ去り、その完全な・美しい・合目的性の全裸形をあらはす。ここにおいては勞働配分の原理はすでに經濟的常識の最高規範であり、いかなるものをいかなる分量において、またすべてのものをいかなる數量的比例において、社會的に生産すべきかといふ問題こそ、經濟的實踐の至高の課題であり、至高の困難であり、至高の興味である。

マルクスは、『自由人の團體』すなはち一つの完全な共産社會において、勞働時間が『二重の役割』を演ずるといふ關係を、非常に明快に、無上の簡潔さをもつて、說明したなかで、次ぎの諸問題にたいし、十分な示唆をあたへ得てゐる。その諸問題とは、——第一、いかにして個人的な欲望は社會的な欲望にまで構成されるか。第二、社會的な欲望はいかにして社會の總勞働を配分するか。第三、社會的勞働はいかにして構成され、その總量はいかにして決定されるか。——これらの問題は相關性を有し、部分を單獨に切りはなして理解することのできない或る全體、すなはち一定の生産關係の各部面である。だが右にいふ相關性の意識的な理論的取扱ひをマルクスの右の一節にもとめがたいことはいふまでもない。我等の目的は、できるかぎり明確に、配分の觀念を、彼の半意識的、半睡的な理論のなかからいきいきと導きだすにある。他方分配の觀念については我等は特に改めて學ぶべきもののあることを感じない。兩者の根本的な相異は、前者の觀念の確立によつておのづから判然する。——讀者は以下理論的なもののなかにすすみ入るにあたり、多少の忍耐を必要とするであらう。

7

マルクスによつて想定された共産社會においては、その社會的生産の結果としての『總生産物』は、社會の總欲望に對應する一切の生活資料を包括し、その種類と數量上の比例とは、すでに『總勞働』が許多の生産部門に、一定の比例において配分された結果を、直接に示すものに外ならない。いま生産手段のために割かれた部分をしばらく問題の外におき、生活資料の生産にむけられた勞働總量が、いかにして生産諸部門に配分され、その結果として『種々なる欲望に適應する諸々の生産物の數量』を齎し得たかを問題とする。その各數量を規定するがために先行してゐたものは、『勞働の比例的配分』である。

この社會的生産は統制的な計劃經濟であり、マルクスのいはゆる『すき透るやうに單純』な關係にあるものであるから、總勞働の生産總部門への配分は、直線的に社會の總欲望によつて指導されなければならぬであらう。しかるに欲望は無邊際であり、勞働力は限定された分量

であるとすれば、限りある勞働力をもつて、比較的もつとも滿足な結果を購ひ得るやうな比例において、これを各部門に配分し、それぞれの部門における欲望を一々或る限度において切り棄てることが必要でなければならぬであらう。——讀者よ、消費者の購買力配分を分析するところの『限界利用均等法則』に關する諸君の知識が、ここでおのづから活動しはじめるのを禁じ得るか。——もしかくのごとくにして配分された總勞働が、その『比例的配分』において正常均衡を得たとするならば、その配分均衡こそ、勞働配分の合目的性を完全に具現し得たものといはなければならぬであらう。すなはちその反面には、右の正常配分比を失ふならば、社會の總勞働時間は同一なるにかかはらず、その齎し得るところの經濟的厚生の內容たる欲望充足總量——明かに主觀的なもの——は減少するとの意味を含むのである。その減少の程度は配分比の如何によつて極端なるものとなり得べきことも容易に推定し得る。マルクスにあつては、欲望の切り棄てに關する推理に到達するまへに、彼の分析は挫折してしまふが、彼のいはゆる『勞働の比例的配分』とは正しくこの意味であり、この意味以外のものではあり得ない。

さてしかるに、社會的勞働の配分を直接に行ふ社會的欲望なるものは、事實において社會を構成する各成員の個人的欲望の『算術的合計』に外ならぬ以上、各個人の欲望こそ或る過程を通して社會的勞働を配分しつつあるのであり、その過程とは彼等の消費者としての所得配分以外のものではないであらう。すなはち彼等はおのおの消費者としての配分の自由を確保しなければならぬ。ただこの自由は、彼等が生產に參與した勞働時間に比例して分配されるところの分配分の限度における自由であり、その分配分は明かに社會的總勞働の或る部分または或る範圍に對應するものであるがゆゑに、彼等はおのおのその限度に對應するだけの社會的勞働の一部分を、種々なる部門に配分すべく指命することができるであらう。言をかへていへば、各個人は生產參與者としての反面に消費者としての自由をもつであらう。その自由は彼等が生產參與者として獲得した自由であり、彼の受けとつた分配分の範圍における自由である。

この分配分の範圍における自由の意味を考へてみるに、第一に分配分の意味である。それは總勞働に對應する社會的總所得の或る部分であり、そしてその尺度はマルクスのいふごとく勞働時間である。すなはち彼等は社會的總勞働時間の一小部分をそれぞれ支配し得るのであり、彼等の自由とはこの小部分の社會的勞働を、その欲望の赴くままの諸生產に配分するの自由である。一成員にとつての分配分たる社會的勞働時間の小部分は、彼にたいしてあたへられた總量であり、彼はこの總量を彼自身の『種々なる欲望に適應する』やうに『正しき比例』において許多の部門に配分しなければならぬであらう。ロビンソンの時間配分におけると原理において何等異るところはない。ただロビンソンは直接に彼自身の總勞働を配分したが、共產社會の成員は彼が支

配し得るかぎりの社會的勞働を彼自身のために配分するのである。

マルクスの幻想たる共産社會を一層精密に描破しようと思へば、我等はさらに次ぎのやうに考へなくてはならぬ。この共産社會の成員は、恐らく次ぎの經濟期間における彼自身の分配分の豫想のうへに立ち、その豫算的な消費配分表を總生產統制の中樞機關に提出することが必要であらう。社會成員のすべては、かくのごとくにしておのおのその消費配分豫算表を右の機關に提出し、この配分表の總計はすなはち次期の社會的生產における總勞働配分表を形成するに至るであらう。すなはち總勞働時間の社會的配分は、各成員の消費配分の總和として形成され、生產配分は消費配分から直線的に『すき透るやうに單純』に指導されるであらう。——かくて勞働時間が配分に缺くべからざる尺度たることは明かであるが、他のもう一つの役割は分配における尺度たることである。

すでに見たごとく、分配における分配物は、事實何等かの具象的な生活資料であり、その分量の共通尺度たるものは社會的勞働時間であり、これを受けるものは生產參與者たる人間である。しかるに配分における配分素材は、人間勞働であり、その配分を受けるものは、直接人間ではなしに生產諸部門である。もちろん生產諸部門の背後にはそれぞれ人間の欲望が控へてゐるとはいへ、その欲望はおのおの一つである。ゆゑに配分の觀念は、その到達點たる配分部門にとどまるべきであつて、さらにその先を考ふべきものではない。さらにその先を考へるといふことは、實は配分の觀念から轉じて再び分配問題にすべり込むことである。分配の到達點が必ず直接に全き個人でなければならぬのに反し、配分の到達點は欲望諸部門である。配分においては人間はつねに配分者の地位に立つ。分配の理念は正義または公平にあるが、配分の理念は厚生にある。分配における完全なる正義の實現は、それ自體のなかにいささかも完全なる厚生の實現を意味し得るものではない。分配における理想狀態は、同時に配分における最惡の狀態たることを得る。マルクスの幻想に浮んだ『自由人の團體』における生產關係こそは、配分と分配との兩者における理想狀態なのである。

以上をもつて配分と分配との理念及び理論の相異を明かにするとともに、第一、いかにして個人的な欲望が社會的な欲望にまで構成されるか、第二、社會的欲望はいかにして社會の總勞働を配分するかといふ問題の說明を簡單に終つた。最後に、社會的勞働はいかにして構成され、その總量はいかにして決定するかといふ問題のみは——殊に後半の問題は殘されてゐる。以下その分析にうつる。

一體社會的な生產配分は、總勞働時間の決定を前提せずしては不可能である。しかるに配分總量たる社會的勞働時間は、社會各成員の自由支出によつて決定し、各成員の自由支出は彼等が取得せんと欲する分配分の大小によつて決定するとすれば、配分總量としての社會的總勞働なるものは、各成員が取得せんと欲する(すなはち分配にあづからんと欲する)分配分の總和でなければならぬであらう。しかるに各

人が取得せんと欲する分配分はすでにそのなかに彼の完全なる消費配分を豫想するものであるから、社會的な總勞働の決定は、そのなかにすでに社會的に完全なる消費配分を豫想してゐるのである。ゆゑに社會的總勞働の決定とその總配分比の決定とは同時相關的であるといふことが判明するであらう。說明の順序としては一應配分總量をあたへられたものと前提し、次ぎにその配分の說明に移るが、その完全な理解においては、總量の決定と配分比の決定とは同時でなければならぬであらう。かくして社會的配分の理解のなかに社會的分配の理解をふくみ、個人的分配分の理解のなかに個人的配分の理解をふくみ、個人的配分の理解をとほして再び最初の社會的配分の理解に回歸する。――配分と分配との理論的關聯性は、かくして聰明かであるが、我等はすでにマルクスの理論的分析の限界を飛び超えてゐる。この點における彼の科學的分析力のあからさまな限界は、彼が生活し、そして讀み且つ思索した時代の經濟學の、一般的な限界であるといふことを考へなければならぬ。彼は彼の限界を超えて分析を繼續するために必要な武器または鍵をもたなかつた。おもふにその鍵は、ゴッセンからカッセルに至るまでの新しい經濟思想の一系列のなかに繼承されつつある科學上の一公產であるが、マルクス並びにマルクス經濟學の繼承者が、曾てその目的をもつてこれに注意をむけたことのないものである。我等は再びロビンソン物語に立ちかへり、マルクスの科學的分析力を檢するであらう。

8

『商品世界のすべての神秘、すべての魔法妖術は、……吾々が他の生產諸形態に逃避するや否や直ちに消滅する』といひ、そしてマルクスが讀者を逃避せしめた最初の場所こそ、ロビンソンの孤島である。ゆゑにマルクス・ロビンソンが彼の經濟理論のもつとも基本的なものを悉く包括するといふことほど當然なことはない。しかもこの場合における彼の分析の過程は極めて短い。それは出發すると殆ど同時に挫折してしまふ。彼はその挫折にみづから氣がつく代りに、その設例を諧謔的に取扱ひ、皮肉まじりにいぢり廻したあとで、拋り出してしまつたのである、彼の不必要な過剩の諧謔は、彼の分析力の消失と不可分の關係にある。もしマルクスにして一層深い分析の方法を知り、したがつてここで取扱ひ得る問題の性質を十分に理解してゐたならば、これはかかる諧謔を弄すべき場合ではないといふことを氣ついたであらう。

ロビンソンは孤島にただひとりの孤立人。――彼は生きなければならぬ、しかも人間として。『人間自身は、彼等が彼等の生活資料を生產しはじめるや否や、自分を動物から區別し始める。』すなはち彼は『樣々な種類の欲望』を充足するために、生產に從事しなければならぬ。問題の要點は、『必要そのものが彼を強制して』彼を生產のなかに、すなはち生活活動の一定樣式のなかに導き入れるといふ點にあるが、ここに注意すべきは、欲望が一種類でなくして多種類であるといふ一點で

ある。この事實は一見その莫迦らしいほどの矛盾にもかかはらず、經濟學上價値問題の存するところ、必ずその地盤をなす。充たさるべき欲望が一種類でなくして多種類であるといふとき、ここにはじめて生產上の一規定が發生しなければならぬのであらう。

充たさるべき欲望がただ一種類であるとき、生產における秩序はまだ一つの規定を必要とするに至らない。この場合の問題はただ生產をどこで打ち切るかである。この第一の問題は最も基本的な生產秩序の問題であり、したがつて第二の問題の發生によつて消滅するものではなく、却て發展する。第二の問題とは、充たさるべき欲望が二種以上であるとき、これを充たさんがための生產秩序はいかなる規定を必要とするかにある。これこそはロビンソンの問題であつて『必要そのものが彼れを強制して、彼れの時間を彼れの異なれる諸機能の間に正確に配分せしめる。彼れの總活動の中でどの機能がより多くの範圍を占め、どの機能がより僅かの範圍を占めるかは、目的とする効果を得るために克服すべき困難の大小によつて定まる』すなはち生產をどこで打ち切るかといふ第一の問題は、彼の總活動のなかでどの機能がいかなる範圍を占めるかの問題と變じ、この問題は生產各部門において同時併行的に發生するのである。しかもその箇々の問題は、それぞれ獨立して決定するのでなしに、相關的な問題としてロビンソンの決定を要求する。すなはち個人的な勞働總配分の問題であり、この問題の決定は説明上勞働總量の決定を前提するであらう。しかもロビンソンの勞働總量がいかにして決定するかの問題は、マルクスによつて何等の解答もあたへられてはゐない。その解答への示唆すらもない。この微細な一點こそマルクスの配分理論の限界點である。我等はなほもマルクスに即し、マルクスを超えて、その理論的分析を展開すべく試みるであらう。

マルクスはロビンソンのために彼の多くの『活動形態』を列擧したのちに『祈禱その他これに類似なものは茲で問題とならぬ、なぜといふに、わがロビンソンはそれに怡樂を見出し、かかる活動を氣晴しとしてゐるのだから。』と附言してゐる。だがこれこそはマルクスの科學的分析がここで挫折したことを告げるものである。彼にとつての理論的な問題は、道具を作つたり、駱馬を馴らしたり、魚貝を採つたりするといふ生產的な『活動形態』のみであり、それ以外の『祈禱その他』の『活動形態』は、それ自體が『怡樂』であり『氣晴し』であるといふ理由によつて、彼の問題の外に排除される。だがなにゆゑ『生活資料として、すなはち享樂の對象として』の生產物の獲得を目的とする活動形態のみが理論的な問題となり、享樂それ自體を目的とする活動形態は問題外におかれるのか。

『必要そのものが彼れを強制して、彼れの時間を彼れの異れる諸機能の間に正確に配分せしめる。』とマルクスはいふ。この時間配分はロビンソンの生產的な活動諸部門を對象としながら、それ自體享樂たる『祈禱その他』の活動部門を排除するのであり、したがつて彼の配分總量

を形成するものは、彼の勞働時間のみである。この理論はその目的とする範圍において謬つてはゐない。だが、この理論は一旦次ぎの發問に遭遇した場合、いかなる答をも用意することができぬ。その發問とは、右にいふ配分總量としての總勞働時間なるものは、そもそもロビンソンにおいて、いかにして決定したかといふこと是れである。もしマルクスがこの一點に科學的分析の餘地を發見し、また分析の必要を感じたならば、恐らく彼は『玆で問題とならぬ』といつて振りすてたところの『祈禱その他』の活動諸形態を再び取りあげ、それらの諸形態が、この答へがたき問題にたいして何等かの示唆をあたへ得るか否かを考察しなければならなかつたであらう。そしてもしもその考察の結果として、彼が何ごとかを發見したとするならば、それは恐らく次ぎの一事ではあるまいか。

あらゆる生産的な活動諸形態が抽象的な人間勞働に『還元』され得たやうに、生産的な活動諸形態とその他の活動諸形態もまた何ものかに『還元』され得べきものである。それは何か。——それは人間生活のもつとも本原的な、もつとも普遍的な配分總量としての時間と精力とである。時間は人間生活の全過程がそのうへを走るところの一制約であり、また他の見地をとれば、與へられたる定量である。あらゆる人間は、その欲すると否とにかかはらず、免るべからざる時間を、彼等の一切の生活活動に配分せざるをえない。その一部分は彼等の生理的必要から、睡眠と運動とに、その他の部分は彼等の生存的及び精神的必要から、種々なる活動と慰安とに、配分されなければならぬであらう。ロビンソンもまた彼の總生活時間を、勞働とその他の活動とに配分するのであつて、この配分こそ、『必要そのものが彼を強制』した最初のものではあるまいか。すなはちロビンソンにおける總勞働時間はいかにして決定したか、といふ發問に答へ得んがためには、勞働時間以外の生活時間を不問に附しがたいのであり、總勞働時間は全生活時間の一部分であり、それはすでに第一次的な配分の結果としてあたへられた一箇の配分量であるといふことを發見するであらう。實にかくしてのみ總勞働の決定は、一元的な、安全に理論的な説明をうけとることができるのである。このことはロビンソンのみならず『自由人』の勞働の自由支出についても、再びかへりみて適用されるであらう。

次ぎにマルクス・ロビンソンの生産的な總活動のなかで、『どの機能がより多くの範圍を占め、どの機能がより僅かの範圍を占めるかは、目的とする效果（高畠譯では『利用上の效果』Nutzefekt）を得るために克服すべき困難の大小によつて定まる。』といふのは、總勞働のなかでどの種の勞働がより多くの時間を占め、どの種の勞働がより僅かの時間を占めるかの問題を論ずるものであるが、ここでもマルクスの分析力は忽ち挫折する。彼が答へていふところの『克服すべき困難の大小』とは何か。マルクス・ロビンソンにおいては、いかなる種類の『困難』といへども、これを『克服すべき』方法は勞働をおいて他にないのであり、その形態の如何を問はず、それは『同一なるロビンソンの異なれる活

勞形態に外ならず、したがつて人間勞働の異なれる仕方に外ならぬ』のである。すなはちここに『克服すべき困難の大小』とは、支出さるべき勞働力の大小の意味であり、したがつてそれは配分さるべき勞働時間の相對的分量(各範圍)の意味に外ならない。

しからば問題およびその答は次ぎのごとくである。——わがロビンソンの活動諸部門に配分さるべき勞働時間の範圍の大小を決定するものは何か。それは『目的とする利用上の效果』を獲得するために必要とする勞働時間の範圍の大小である。——だがこれは殆ど同義反復ではあるまいか。マルクスにおけるこの同義反復は、わづかに『目的とする利用上の效果』といふ言葉の、積極的な一解釋によつて救はれる。すなはち勞働配分の規制は勞働そのもののみに存するのでなくして、勞働諸部門においてその配分を要求しつつある『利用上の效果』であるといふことがマルクスによつて幾分なりとも指示されてゐるからである。それこそは實にカール・マルクスにおける配分理論の極限である。もし我等にしてさらに前進せんと欲するならば、そのより精密なる分析的推理の發展は『ブルヂョア經濟學』の數學的方法によつてのみ表現さるべきことを發見するであらう。

9

以上をもつて、マルクス『資本論』の全建築の基礎をなすところの一つの柱、すなはち一箇のロビンソン物語の本體に關する分析をひとまづ終つた。社會現象をもつて個人的現象の結果として視ることなく全體としての社會そのものを直ちに分析することによつて個人的な經濟生活を規定するところの諸關係と合法則性とを發見し得べしとするマルクスの立場が、なにゆゑに猶且つ孤立的な經濟人の想定をその全體系の根柢から排除し得ないかといふ理由は判明した。それはマルクスの客觀主義的・社會的觀點が不可避的に全體的なもの の理論的把握を內含し、そしてその全體的なるもの は必ずや封鎖的・自己完了的なものでなければならず、——封鎖的・自己完了的なものの典型をもとめて、そのもつとも單純な形態に至るときは、それはつひに一社會ではなくして一個人であるといふに歸着するからである。すなはちマルクスの理論的思索は、社會的・全體的なもののエレメンタルな形態を求めて期せずして個人に到達した。しかもマルクスが個人に到達したのは、個人的生活における合法則性の分析から出發して社會經濟の諸現象と合法則性とを説明しようとの企てにもとづくものではなく、まさにその逆である。——ここに個人的立場と社會的立場との綜合を可能ならしめる一契機がかくれてゐはしまいか。

マルクスにおける社會的なものたるや、その經濟理論的內容を思へば、全體的なものの意味に外ならず、そして全體的なものとは、すべての部分が相關性において一箇の統一物たるものを意味するに外ならない。マルクスはその統一物の雛型を孤立人ロビンソンにもとめたのである。たとひマルクスの所期は社會的生產の總秩序を典型化するにあるにせよ、個人的生活にして本來配分法則の支配を受けるものでな

いならば、どうしてロビンソンの生活が彼の說明の手段たり得やう。マルクス・ロビンソンは――恐らくマルクス主義者の所信に反して、――配分法則が元來個人的な法則であることを暗默のうちに證明するものなのである。

だが我等はその問題のうへに停止してはならない。我等は、マルクス・ロビンソンの生活が、一箇の全體としての秩序體であるといふことに注意し、この點を他のすべての經濟學者のロビンソン物語と對照しなければならない。マルクス經濟學があらゆる他の學派のロビンソン物語を嘲評しつつ、みづから一箇の典型的なロビンソン物語を所藏するといふ矛盾は、單に外觀的な矛盾にすぎない。本篇にしてもし目的とするところを謬つてゐないならば、上來述べ來たつたところは、すなはちこの一點を鞏めて明かにすることを得たとおもふ。

スミス・リカードのロビンソン物語、すなはち獵師や漁夫の獲物の交換に關する理論は、マルクスのいふごとく『十八世紀の想像を加へざる幻想に屬する』としても、その幻想たること自體は何等非難さるべきではない。非難に値するのは、海狸と鹿との交換が、何等社會的總生產の勞働配分における『正しき比例』を豫想することなしに、ただ技術的な投下勞働量それのみによつて規定され得るものであるかのごとく說かれてゐるといふ一事である。一個の假想世界において勞働價値の原則が支配するためには、その總交換者をもつてひとつの全體とするところの社會的生產が前提されてゐなければならず、そしてその生產關係の內部には、總生產の編制を規定するところの一定の配分關係が嚴存してゐなければならぬであらう。――この配分關係、すなはち社會的總勞働の生產總部門への正確なる配分を、第一に確認することなくして勞働價値法則を說くものは、兩脚なくして人間が起立し得ることを說くにひとしい

墺太利學派の新しいロビンソン物語が、消費生活者の心理を基礎として成立した理論であるといふことは、また必ずしも非難するにはあたらない。マルクス・ロビンソンの勞働配分といへども、その反面に消費者としてのマルクス・ロビンソンを思ふことなくしては、配分規制の發動は考へることを得ない。非難に値するのは、個人的な消費經濟の全體性を把握することなくして『沙漠の旅役者』『難破した人々』等の綺談漫語のなかに、價値の新說を誇ることである。だが限界利用學派はその發展の過程において漸次かかる綺談的說話を廢棄し、消費生活者の內面的秩序性すなはち個人的生活における合法則性を基礎とするとによつて社會經濟の諸現象と合法則性とを說明しようと企てつつある。この學派のなかにあつてすぐれたものは、いづれもその出發點におくところの個人的現象を、まづ一應その全體性において把握せんとする。すなはち一方にはあらゆる商品の價格を前提し、他方には個人の一經濟期間における購買力を限定することによつて、個人的な消費秩序の內面的完了性を解明するのである。その理論的展開は、後段に及んで個々人の內面的完了性を否定し、總體における一因子としての個人の

他のすべての因子との相互依存關係を力調するに至るとも、その說明の最初の階段においては、有機的・社會的均衡を組成する細胞的因子としての個人の內面的均衡性が、一つの遊離的方法によつて詳論されるのである。——しからばその全體性乃至均衡性を、經濟理論的に內容づけるものはそもそも何か。

限界利用學派並びにその發展として客觀主義的傾向をとる學派の、すべてに通ずる消費秩序の原理は、種々なる名稱をもつて呼ばれ、また幾多の形態を執るとはいへ、ゴッセンからカッセルに至るまでのすべての『均等法則』は、實に配分原理以外の何ものでもない。——この見解は本篇の思想を形成する基本であるとともに、本篇の所說を他のあらゆる學者の所說から際立たしめる發端である。カッセルはこれを欲望充足均等の原理といふが、その內容はゴッセンの第二法則と同じものである。おもふにこの原理は、人間行動の合法則性を、受動的な、享受的な、消費心理的な、主觀的な側面から理解しようとしたものであり原理そのものの客觀的性質は、むしろ人間の總活動の合法則性を把握したものであると稱するを至當とする。すなはちそれは行動の原理としての配分原理であり、もつと正しくいへばその配分原理の消費心理的、主觀主義的表現なのである。マルクス・ロビンソンの說話において我等が作者マルクスの分析を超えて、さらにその分析を繼續し得たのは、實にブルヂョア經濟學の『均等法則』を道具としたによる。だが我等はこれをそのまま使用したのではない。我等はこの道具の形を變へそして新しく摑み直した。

カール・マルクスは、すでに見たごとく、ロビンソン物語のなかで、消費心理的、主觀主義的觀點からの分析をいささかも企ててはゐない。だが客觀的に、——徹底的に客觀的に、人間行動の普遍的・合理的法則としての配分原理を把握し、これを『資本論』全建築の根抵においた。ヘルマン・ハインリッヒ・ゴッセンをして經濟學上のコペルニクスなりとみづから昂らしめた彼の學理は、カール・マルクスの『資本論』においては『誰でもが知つてゐる』平明な眞理として、しかし彼の理論的構造の不可欠の柱として、その土臺のなかに藏されてゐる。

およそ二つの學說の對立は、兩者がいかにその課題を異にするかを比較するのみでなく、共通の課題にたいしておのおのいかに答へ得てゐるかを明かにすることによつてその對照をもつとも銳くすることができる。『配分』といふ語辭は、マルクスの價値論のなかにあり、ジェヴォンスの價値論のなかにある。敢ていふならば、今日まですべての學者はこの一點を看過したのである。——看過とは、この語辭が兩者において全く同一の意味に用ゐられてゐるといふこと、さらに兩者ながらこの語辭を用ゐてそれぞれ一つの法則を說いてゐるといふこと、そしてその法則とは、マルクスにおいてもジェヴォンスにおいても、ともに勞働の配分に關する法則であるといふ重大な事實への不注意である。なほさらにつけ加へて、この勞働配分の法則は、マルクスにおいてもジェヴォンスにおいても、ともに均衡法則であるといふこと、したがつ

て勞働配分の均衡に關する法則が兩者によつて把握されてゐるといふ事實への不注意である。この均衡をいひあらはすのに前者は客觀主義的に勞働配分の『正しき比例』といひ、後者は主觀主義的に『最終利用の均等』といふ。いづれもともに勞働配分の學説であり、ただ一方は客觀主義、他方は主觀主義の理論をもつて同一事物を把握するものたるにすぎない。いふまでもなく、この『配分』は、種々なる欲望にもつとも適應するやうに、生産諸部門にたいし合理的に總勞働を按排充當するの意味であり、舊經濟學の四分法（生産・分配・交換・消費）にいはゆる分配とは全くその意味を異にし、またその理念を異にするものである。

かくしてマルクス・ロビンソンにおける時間配分の理論と、ゴッセンの第二法則とのあひだに存する內面的關聯性を指摘し、あるひは限界利用學派の基本原理たる『限界利用均等法則』がその客觀主義的形態においてすでにマルクスの全建築の根柢に儼存することを指摘することは、究竟的に何を意味するか。――勞働價値の觀念は決して限界利用説をもつて代位し得べき觀念に非ずといふことの決定的な示唆。

この觀念は一枚の部厚い布地にも譬へられる。あるひは一枚の衣服である。

限界利用説は一本の針、――あるひは一把の絲である。――鋭い分析の針、强靱な均衡の絲。

勞働價値思想は粗末に縫上げられた衣服に過ぎないかも知れない。だがそれは衣服である。限界利用説は鋭利な針、あるひは强靱な絲であるかも知れない。だがそれは竟に針と絲とであつて、衣服ではない。

限界利用説殊にその數理派の針と絲とは、勞働價値思想のあらゆる部分を刺しとほすことができる。だがそれは生地をいよいよ固く縫ひとるのであつて、破るのではない。限界利用學派は、今日まで布地なくして衣服を仕立て上げようとした裁縫師である。その作りあげたものは單なる無用のあみもの――風に飛ぶレースである。勞働價値思想はいまだ縫ひ上がらぬ衣服である。――マルクスによつて永久にその仕上げは完了されたと考へるごときは、人類思想の休止なき發展を忘れたものである。マルクス主義者は過去幾十年マルクス價値説の擁護のために鬪ひ、敵をして一指をもこれに觸れさせまいとした。――と同時に、自分達もこれに指を觸れまいと決心して今日に及んだのである。――（一九二九・四・二九）――



ユイスマンの藝術

――A Rebours に就いて――

山田珠樹

『デ・ゼセントの考によるとどの火酒もその味が必らず或る樂器の音に相應じてゐるものである。例へば強いキュラソオは酸い音を持つてゐる低音のクラリネツトに、キュンメルは鼻にかゝる調子を高く響かせるオーボアに、マントとアニゼツトは砂糖と胡椒をきかせて雛鳥が啼くやうな和らかな音を出すフリユートに、これではコンセルに足りないからキルシュが喇叭を激しく吹き立てる。ジンとウイスキーはピストンとトロンボンの耳を裂くやうな響で口蓋を壓倒する。溶糟から造つたブランデーは耳を聾する大喇叭の躁音を出して喚めき立てる。……醉がきいて繊巧で鋭くつて上等な古ブランデイの表はすバイオリンと、これより一層唸り聲の一層低いラムで模倣したアルトと、ヴイオロンセロのやうに心を裂く如く余韻をひきその悲しい調子は人の心をいたはるやうなヴエストロと、交り氣のない古いビツターのやうに強くて丈夫で暗いコントル・バスを使へば、四つの樂器のコンセルを上顎の下で演らせることが出來ると考へた。若し五つの樂器のコンセルがやらしたければ第五番目の樂器としてハープを加へることも出來る。ハープは一寸眞僞の見別が難しい程の類推でもつてキュマンの波動性の味、斷續する鋭い金屬性の調子を模倣する。

この類似の範圍は更に擴がる……商賣人が綠色シヤルトルーズと呼んでゐる火酒を長音とすれば、ベネヂクチーヌはその半音を表すものと云へる。

これらの原則を認めた上で科學的な經驗を積んだ結果、聲なきメロヂー、音なき大仕掛のフユーネラル・マーチを舌の上で奏させることも出來るやうになつた。……

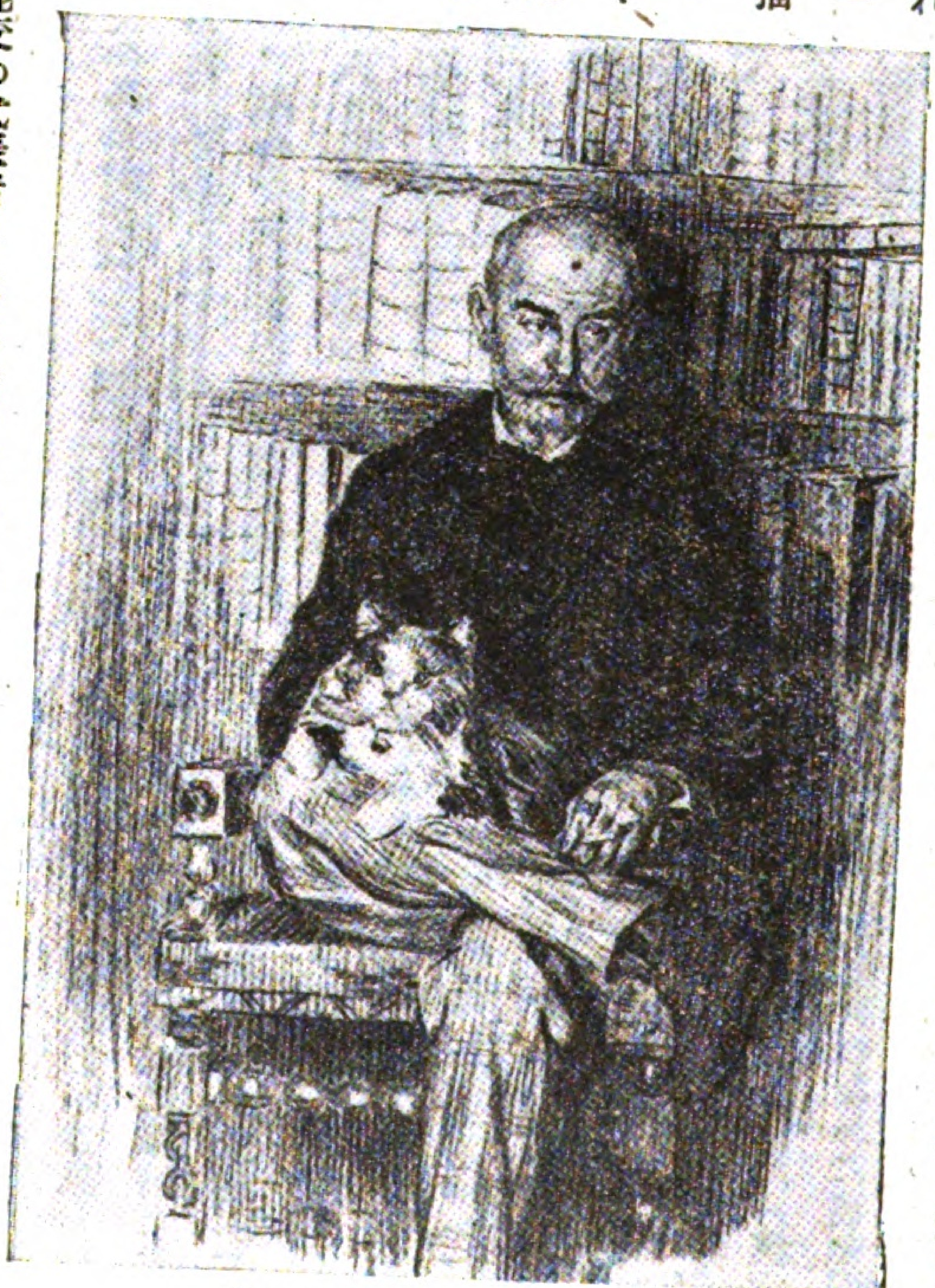
更に進んでは火酒の聯合、隣接對照、或は科學的混合により作曲者の意志のまゝにその思想なり効果なり色合なりを一歩一歩と再現させて、實際の樂譜を腮の上に移すことが出來た。

自らメロヂーを作つたこともあつた。眞珠を轉がすやうな鶯の啼を咽喉のなかに轉ろがして具れる程よきカシスでもつて牧歌を作つた。』

(第四章)

十九世紀末の歐州文學に親んだものは誰れもユイスマンのこの感覺

混交の描寫を知つてゐる。ランボオのアルファベットの色彩と共によく人の語るところである。そして恐らく一般にはユイスマンと云ふ人はこの一事だけで知られてゐるのではないかと思はれる。これは甚だ氣の毒だと思ふ。ユイスマンにも氣の毒なり、文藝に親む人にとつても――少し云ひ過ぎかな。誰れでも此の感覺混交の描寫には一寸興味を惹かれる。然しこの描寫の記載されてゐる A Rebours と云ふ小說を繙いた人は恐らく極めて稀だらうと思ふ。それは餘り殘念だ。文學青年の口調を借りて來れば、それはユイスマンに對する冒瀆である。ユイスマンは過去の藝術家かも知れない。歷史的遺物かも知れない。歷史的遺物にしても國寶としてもよいものである。それを感覺混交の代表者として片附けてしまつては勿體ない。十九世紀にフランスに咲き誇つた文藝の最も上の梢にマラルメがゐる。ユイスマンも決してマラルメから遠い所にはゐない。人の考にもよるだらうが先づマラルメと同座してゐると云つてもよからうか。ユイスマンは二十世紀文學には關係のない人である。然しあの壯嚴な美しさに輝いた十九世紀文學が纖巧の極に達したものの一つである。浪漫派、寫實派、印象派、自然派、表徵派と灼熱の坩堝の鍛煉を經てこそ初めてユイスマン、マラルメの輩が生れるのである。二十世紀文學が十九世紀文學と全く別の道を行つてゐるのも、この十九世紀文學の進んで來た道はマラルメ、ユイスマンに至つて極致に達し、これから進まうと思ふものは方向轉換が必然のこととなつたからなのである。このユイスマンの全般は知られなくとも、せめてその著作のうちの最も奇異なるもの A Rebours の全斑位は知つてゐなくてはなるまい。A Rebours とはいかなる意味か位は自分の意見をまとめておいてもよからう。普通に「逆に」「倒さまに」と譯される A Rebours をなんと譯してよいか。これは各人の意見による。ここにこの奇異なる小說の內容を紹介して、讀者諸子各自の判斷にまつことにする。


ユイスマンの肖像

この小說の主人公をデ・ゼセントと云ふ。フランスのさる名家の末裔であつて、二世紀間の血族結婚の結果加速的に衰退して來た一家の

漸く一人殘つた繼續者である。少年時代の病身な生涯のために精神だけが極端に鋭敏になつてしまつた。父は殆んど家にゐたことがない。母は重い神經病のために常に日光の少しも入らないやうに特に作つた部屋のうちに起居してゐた。少年期の中頃から學問のためにジェジュイット派の學院に送られた。彼の勉强のしかたは恐ろしくむらだつた。拉典語に夢中になつて、希臘語、現代語及び科學は全然顧みなかつた。神學に就いては居城に大伯父のある僧が殘して置いて呉れた藏書によつて早くから研究を積んでゐた。そのうちに兩親も死に、間もなく成年に達して遺産をうけたので、學舍を去つて巴里に出て來た。自分の親戚の客間に出入する上流の人々に交つて見ると鼠臭くつて彼一人が『羊歯の葉のうちに置かれた百合の花』のやうな氣がしたので、これと別れて次には若者の仲間に入つて見た。然るに彼と同じく宗教學校を出たものは『この世に從順で淸淨な人間を送りたいと云ふ教師の願をかなへてやつて得々としてゐる吝嗇野郎で』あり、その外のものも『血と神經を涸きたゝせる』やうな放蕩を知らず、たゞ『競馬やトランプなぞと云ふ凡て頭の空な人間の愛好する娛樂』に浮身をやつす輩であることを覺つた。次いで彼の入つた文士仲間では『復讐を目的とする狹量な批評や、俗なこと教會の門の如き會話』に反抗心を起すだけであつた。かくて漸次デ・ゼセントには人間に對する侮蔑の心が增して來た。『彼の心のやうに鋭い影の入つた心を』持つもののないことが確かになつて來た。『頬髯を生じ便々とした腹をつき出してゐる百姓や口髭を生やした著飾つた男の體に法官や軍人の首がまるで聖體の如く嚴そかについてゐる』人間、『詐僞と金錢だけに頭を占められ、凡庸な心賤しき者の娛樂である政治にのみ適つた頭の』商人、この『驚くべき野人の苗床』なるこの社會を嫌ふに至つた。（序說）

その人嫌ひは彼に樣々な悪戯をさせるに至つた。或る時彼は獨身者俱樂部の一人が結婚したいと云ひ出した時對手の女をきいてその結婚生活が破綻に終ることが豫見し得たので、特に熱心にその結婚をすゝめた。そして豫定通りに離婚となるや『豫想した策戰が見事に成功した參謀官の味ふ如き滿足を感じた』又ある時は十六位の少年を女郎屋に連れて行つて、三ケ月間月二回この快樂を味ふ金を女郎屋に拂つて來てやる。これは三ケ月後にこの特典のなくなつた後この子供に×をさせ××をさせたい爲であつた。かくて『俺達を苦める厭ふべきこの社會に對して×を一人創造する手助をした』ことにするためであつた。貧人の目を『無理に開らかせて、彼等を取り卷く不都合な運命と、之と反對な寬大な運命を見させて』苦痛を擴大させる『現代の教育法の諷示』をするためであつた。（第六章）

この厭ふべき世のなかに彼を引きとめておくものは女であつた。この爲めに特別な××を作つたこともあつた。その部屋には光線が鮮紅色の繻子を通つて來るやうになつてゐた。そしてこの肉色の和かな光線のうちに踊る嬌態を四壁に設へた鏡が無限に互に反映し合ふのであつた。時には葬式の宴といふ奇拔な宴會を催したこともある。庭の小

路には炭の粉を散らし、玄武岩で圍こまれた池にはインクが充たしてある。部屋には黑幟が張りつめられ、食事は同じく黑のテーブル掛の上に運こばれた。皿は黑い緣をとられ、裸體の女黑奴の手で給仕された。物蔭の樂隊は葬列行進曲を奏した。（第一章）『筋肉は鋼鐵の如く、腕は鑄物の如く』であつた曲藝師の女を對手にしたこともある。『萎貧病質の小娘が、抱かれれば潰されてしまひさうな偉丈夫を慕ふやう』にこの女を慕つた。（第九章）

そのうちに彼の神經病が昂進して來た。そして『凡てを盡したことに滿足した彼の五官は疲憊の極無感覺となりやがて不能力の狀態が來るのも遠くない』ことを思はせた。それにその頃はその世襲財產の大半を浪費してしまつてゐた。そこで彼は僅かに殘つた自分の居城を賣り放つてこれを公債にし年利息五萬法の收入を計り、『人間の愚さの不斷なる洪水から遠く遁れることの出來る……方舟』を造つてこれに住むひ心をした。かくて巴里郊外に一軒の家を買ひ入れ、これに特別な裝飾を施した上で、古くから使つてゐた召使夫婦と共に突然この家に引き移つてしまつた。

召使は二階に住はされたが、階段は建物の外に設けられて、二階には厚い物を敷かせ、厚い上靴をはかせて一切足音のしないやうにした。階下は大體書齋食堂化粧部屋寢室に分かれてゐる。彼は寢室は快樂の場所とするか或は隱退の場所とするか孰れかの形式をとるべきものとしてゐる。此の場合彼の寢室は凡て僧院の僧房に似てつくられた。その裝飾の方針は『素晴らしい布を使つて襤褸の感を出さうといふので『見苦しい擬ひの布で贅澤な高價な布の代用をさせてゐる戲場の遊を行かうといふのであつた』（第五章）食堂は船室そのまゝである。この部屋の壁は二重になつてゐて、その間に設へた窓は同時に水槽になつてゐる。『かくて彼は色彩のエッセンスを幾滴か滴らすと、望のまゝに綠色とか鹹水色とか蛋白石色とか銀色とか、眞の河の水が空の色合、太陽の熱の强さ、雨の大袈裟な威嚇によつて……起る調子を生ぜしむることが出來るのである。』（第二章）

この隱退所にゐて夜起きて晝寢る普通の人と反對の生活の記錄が卽ちこの一篇の小說になつてゐるのである。夜起きてゐるのは『夜の方が一層落ち着き一層孤獨だと考へる』ことが出來たからである。生活の記錄と云つても實はデ・ゼセントが生活の記錄に形を借りた藝術觀乃至人生觀の發表なのである。それで筋を逐ふことを樂としてゐる人には小說としての面白味け薄いかも知れないが、十九世紀の藝術觀なり人生觀の終局の彿が窺へる點に深い興味がある。常軌を逸した神經病者の幻想として、變質者の記錄として、精神病學の一文献として片づけてしまふことは決して出來ないと思ふ。

先づこの一編の評判を高くした纖巧化せる感覺の描寫について見て見る。味覺については曩きに火酒の音樂について述べた如くである。視覺についてはデ・ゼセントが新屋の壁紙の色彩を選擇するところに述べられてゐる。『網膜の細工が粗雜なために各の色に特有な韻を認め

ることも、色の段階と色暈の持つ不可思議なる魅力を認めることも出來ない平凡な人間は問題外である。顫動する力強い色の示す豪奢な趣、勝ち誇つた態度に對してなんの感も起らない俗人の眼は考の外である。文學と藝術とに鍛へ上げられた纖巧なる瞳の所有者だけについて云ふならば、理想を夢み幻を逐ふ人は……一般に青色か或はモォブ、リラ、グリ・ド・ペルルの如き青色から枝れて來た色に親しみを持つ。但しこれも條件がついてゐる。この色が和かな色合に止つてゐなければならない。且つその個性を失つて純粹な菫色や正しい灰色に變じてしまふ閾を超えないことを必要とする。之に反して武張つた人、多血質な人……事の發端にも途中の挿話にも興味をひかれず夢中となつて一途に飛びかかつて行く人は、多く黄や赤の眩しい光、目を盲にし醉はしめるヴエルミヨン、やクロームのシンバルの響を喜ぶものである。最後に疲憊した神經質の人、敏感なる貪慾は燻蒸し鹽水に漬して鹽味をつけられた肉のみを求める人の瞳、過度に刺戟されて疲れた眼は、いら〳〵して病的で、謎めいた光と酸性の熱を持つ橙色を慕ふ。』この藝術家の感覺性と好みの色彩との間にある『殆んど數學的な正確さを持つ法則』に從つて彼は元より橙色が好きなのであるが、『赤と黄とは光線に遇ふと莊嚴化するけれど、その混合色なる橙色はこれと同じに行かず、怒り易くてともすれば金蓮花の紅色や火のやうな紅に變つてしまふ』恐があるために、燈火のもとで橙色に屬するあらゆる色彩を調べて見たのである。（第一章）

『デ・ゼセントは數年前から匂を聽く術に秀れた腕を持つてゐた。彼は嗅覺も聽覺や視覺と同樣な享樂を體驗しうるものと考へてゐた。白然に適つた處置と博識なる丹精によれば、各感覺に新らたな印象を受けしめ、或はこれを強め、或は共に作用させてその總合體をして一つの藝術的作品とすることも出來る。……但し研鑽によつて發達した特別な直覺が』なければならない。『今日ではデ・ゼセントは、變化に富み且つ文藝語と同じ魅力ある、この香料の言葉をよく理解する。見たところはいかにも動搖して捕捉し難いやうであるけれどその實この上なく簡潔なその句態を明決に解釋することが出來る。これがためには先づ文法を研究して香料の文章學を會得し香を支配する法則に悟入しなければならない。一度この言語を會得したならば、次にはアトキンソンとリユビン、シヤルダンとヴイオレ、ルグランとピーズといふやうに名工の作品の比較研究をしなければならない。名工の句は各々その仕組を解いて語の分配法や拍手の配置法を定量して見るのである。』彼は夏水仙と薔薇とをヴアニラの一滴で結び之に橙を加へてヘリオトロープの正しい調子を再現し、合歡と菖蒲を混ぜて茶を組み立てたのを手馴らしとして、次には荳科植物とミツチヤムの剌賢挃爾と香豌豆とを霧吹で部屋に注いで牧場の幻想を起こさしめ、これに夏水仙と橙と巴旦杏の花精を導いたところ、リラの花と菩提樹の葉の揺りを感ずることが出來た。かくの如くして『燃の匂をさせる』香料と木犀の微量を使つて『太陽を浴びて踊り狂ふ喜びを思はせる』幻を描いたり、

ボオドレエルの「イレパラアブル」や「露臺」の構造を借りて來て香料の詩を作り、これを搖藍としてそれに搖られながら憂欝と倦怠の無限の底に沈んで行くこともあつた。（第十章）

同じく纎巧化せるその趣味は彼の寶石に對する好厭にも見られる。或る日彼は家の『阿剌比亞絨氈のアラチン色の黄と相木色の紫との緯糸の上を流れる銀色の光を眼で追つてゐた時——なにか動く者でその濃い色が敷物の鮮明の度を强めるものを』置きたいと思つたので、生きた龜甲を買つて來て、之を絨氈の上に這はせた。然るに甲羅の暗褐色は絨氈の銀光を冷たい鉛色にしてしまつた。そこで彼はこの甲羅に金色の鱗形を入れさせた。甲羅は絨氈の上でヴイジゴートの大楯の如くに光り輝いた。しかし彼はまだ不滿足だつた。彼はこれに花の咲いた植物の模樣を寶石で鏤ばめさすことにした。かくて彼の寶石の撰擇が初まる。東洋産のルビーもエメラルドも乘合馬車の赤と綠の燈を思ひ起こさせる。トパーズは錢つきの簞笥を寶石で一杯にしたい女房の愛玩物である。アメチストルは宗教的感銘を與へるが、本物の石を持ちたい屠牛者の女房の指にのるために下落してゐる。サファイアのみが淸冷な水の上に霧を降らすやうな汚されない光を保つてゐるが、不幸にして光線に逢ふと輝やかなくなる。彼の撰んだものはクリゾベール、ペリド、オリヴーヌ、アルマヂーヌ、ウヴァロヴィード、人造土耳古石、猫眼石、シモファーヌ、サフィリンなぞといふ見慣れない天然或は人造の寶石をのみであつた。（第四章）

以上にも見られる如く彼の趣味には非常に技巧を好むところが窺へる。この技巧崇拜こそデ・ゼセントの藝術觀の根本觀念なのである。『要するに或る事の虜となつてそのものの上に自分の精神を集注し飽くまでそのものに沒頭すれば、幻覺を惹き起し現實の夢でもつて現實そのものの代りをさせることが出來る』と彼は考へてゐる。この點ではたゞ異常なる想像力と云ふに過ぎない。更に彼は自然は單調に過ると考へてゐる。『平野と樹木は單調』であり『山と海は平凡』である。從つて『自然が創り出したもので人間の才能で創り出せないほど緻密で宏大なものは何一つとしてない。……どんな森でも、どんな月光でも電氣を充分に使つた裝飾が再現し得ないものはない。いかなる瀧も水力機械で正確に模倣し得ざるものなく、いかなる岩も厚紙細工が眞似し得ざるものなく、いかなる花も特製の薄琥珀や薄色紙で作り出せないものはない。』かゝる自然は眞の藝術家に見捨てられ、今は技巧をもつて自然に代らせる時代が來てゐる。自然の創造物のうちで最も獨創的な美しさを持つものとされるのは女性である。然もこの『××の快樂のうちに孕まれ、子宮の苦痛のうちに生じた』女性の最も秀れたものも大北線上を走る二種の機關車の姿ほどの魅力は持つてゐない。『ラ・クランプトン型は……ブロンドである。聲鋭く、その巨きくして細き脛は鋼の煌々と輝くコルセットのうちに閉ぢこめられてゐる。鎖をなよ〳〵と神經質的に延ばして艶かに粧つた金髪の美人である。……レンゲルト型は陰鬱なるブリュンヌである。……太く短い腰は鑄

造の甲に堅く包まれてゐる。黒煙の亂れた靈を持つ……恐ろしい獸である。』確かに『人間は獨特の方法でその信仰する神と同樣に巧みに萬物を創造した』のである。（第二章）『懶惰な自然が數世紀を經なければ生ぜしめることが出來ない淘汰を、人類は數年の間に成就することが出來る』『自然はまづ素材を提供する。萌芽と土壤と、培ふ子宮と木の要素を。それを人間が思ふがまゝに育て上げ……粗塊を粗砥にかけ、型をつけ、果ては自分の美術的封印をつけたりする』（第八章）

デ・ゼセントは食堂にゐて船旅の幻想を恣にする。『時計器械の如くネヂで卷く美事な金屬性の魚は（水槽中の）人造の草にかゝる。時には豫め吹きこまして置いた瀝靑の香を嗅ぎながら、壁にかけた』汽船會社の彩色畫や航路圖賃金表を眺めたり、航海物語を讀む『かくて彼は少しも體を動ごかさずに長旅の感を急速な瞬間的な感で味ふことが出來た。元來移動の快樂といふものは現實實際に動いてゐる瞬間にはなくて記憶のうちにのみ存在しうるものなのである。』（第二章）

彼は急に英國旅行を思ひたつた。そして長旅の用意をして雨の日に巴里に出た。先づ馬車を馳つて旅行會社に案内記を買ひに出かける。『荒天の下の巴里にゐると既に英國にゐるやうな氣がした。雨に烟る厖大なる倫敦は熱い溶礦と煤とを吐き霧のうちに煙を絶間なく上げてゐる姿となつて彼の前に現れた。續いて見渡す限り丈丈と連る船渠が彼の眼前に横たはつた。起重機、卷轆轤、小荷物は到るところに見える。無數の人が或はマストに鳥の如くに止り、或に帆桁に跨る。岸壁には幾千とも知れない男が、脊を上に露はして酒樽を押して行く……凡てがマストの大森林、空の鉛色の雲を貫く梁の森のうちに動いてゐる。或る列車は蒸氣のあらん限りの力を盡くして空のうちを走り、或る列車は恐ろしき叫聲を擧げ井戸の口から煙の塊を吐きながら下水のうちを走る。大通と云はず小路と云はず凡ての道には、永遠の黄昏のうちに醜き大袈裟なる廣告が輝く。眼を前に突き出し肘を腰に口もきかずに忙がしげに歩む人の列の間には乘物の流が走る。』彼は英國式裝幀の本を見た。耳馴れぬ外國語を喋り立てる外國婦人の間に入つた。ベデカーで『グスターブ・モローが下繪をかいて、貧血症のミケランジエロが刷毛を入れ、靑色に溺れたラファエルが筆を加へ』然も『激しい幻に惱まされてゐる學識高き空想家の一英國人……の人格が判然と輝いてゐる』ワットの畫の敍述を讀んだ。酒店ボデガでポルトを飲みながら『臟物商人の赭ら顏、犬の鼻面、卒中患者の頭、トマトのやうな耳、充血した白痴の眼、大猿の腮鬚』を持つた牧師、『麻屑のやうな髮、アルルチシヨオの芯の如き白毛を腮に生やした』英國紳士、『燻製の筋肉、球根の如き鼻をして、口の毛むくぢやらな穴にシガーを一本植ゑこんだ』海員を見た。彼はこのうちに曾つて讀んだヂッケンスの小說中の人物を悉く再現させた。かくて『今まで既に英國の生活に飽和してしまつた。下手に體を動かしてこの感を失ふのは餘程馬鹿な話だ。……頭の拵へ上る幻覺を惡いことと思つたり、まるで靑二才のやうに旅の必要だとか面白さを考へたりするなぞとは、とんだ

錯覺を犯したものだ』と思つてその夜また荷物を持つて家に歸つて『實際長い旅をしたやうに體にも心にも疲勞困憊を感じた』（第十一章）

彼は絶對的に食慾の減退した結果昏倒し、その治療法として滋養灌腸をうけた。『人工に對する彼の嗜好は慮らずも最高の聽許を獲たのである。これ以上には進めない。かゝる方法で食餌を攝ることは確かに人間のなし得る最も甚しい自然を離れた行である』と思つて歡喜する。そして灌腸の度に料理やで獻立表を持つてこさせるやうに灌腸液の內容の處方を持つてこさせたり、自分の氣のまゝの獻立を作つたりする。（第十五章）

更に進んではデ・ゼセントは自然を技巧化して眺めるに至る。一夜窓外の景色が月光に照らされてゐるのを彼は眺めてゐた。『丘陵から落ちてくる影で狹められた平地の中央は澱粉を撒かれた上に白いコールド・クリームで塗られたやうに見えた。色の褪せた草を煽り香料の腱しい匂を灑ぐ冷しい大氣のうちに、月光で白堊を塗られた木が蒼白い葉の茂を亂して幹を露出してゐる。幹の影は黒い畝となつて石膏のやうな土に區劃をつける。地上には燧石の層が食器の光のやうに突いてゐた。この假裝とその技巧的な調子はデ・ゼセントに不愉快なものではなかつた。』（第二章）

彼は花に對しては特別な興味を感じた。始めは一般の花に平等に向つてゐた感情もいつか『糟粕や沈滓を悉く取り除かれて澄まされ、云はゞ精製されて來た』『遠くから運ばれて來て暖爐から發する溫度の目盛のついた空氣で造つた人工赤道帶の內に巧みな注意によつて貯へられた』溫室の花のみが眞底から彼の眼を喜ばすに至つた。更に進んでその技巧趣味からして『眞實の花を捨てゝ彈力護謨、糸、裏地木綿、薄琥珀、紙、天鵞絨などの魅力によつて自然の花の姿を作り上げたものを選ぶ』に至つた。一歩進んでは『造花を模寫した自然の花が欲しくなつた。』かくて『犢の透明な肋膜や豚の透明な膀胱を截つて造つたり』亞鉛に綠の彩色を施し油繪具や鉛丹で汚ごしたやうなカラヂウム類を愛でたり、或は『黴毒や癩病で潰れたやうに紅疹が大理石模樣のやうについてゐて、泡狀皮疹を浮織にしたやうな鉛色の肉がついて居る。或るものの色は口の閉ぢかかつた傷痕の如く鮮紅に、或るものは出來上りかけた痂蓋のやうな褐色をして』ゐるものに氣をひかれ、或は『暖爐工が鉛鋼を截り拔いて造つた暖房管の一片』とも云ふべきアロカジア・メタリカに驚嘆したりした。（第八章）

以上は凡てデ・ゼセントの體驗である。更にデ・ゼセントの他人の藝術に對する批判を見て見やう。一言にして云へば彼の文學趣味乃至藝術趣味は同じく纖巧の極に達したものと云ふべく『篩にかけられた作品、苦しみ且つ銳敏な腦髓によつて蒸溜された作品』のみに執着を感ずるのである。

ラテン文學に就いては彼の愛賞するものは、『ソルボンヌが選む悲しむべき講義に躾けられた頭が敗頹期文學と概稱するもののみであつた。』『されば『優しきヴイルヂイル、俗人がマントウの白鳥と呼ぶヴイル

ヂイルは……古代に生れ出たもののうち最も恐るべき術學者であり最も厭むべき饒舌家と思へた。……亜鉛板や石油罐をたゝきながら、術學的にして乾燥無味なる一定の處方に從つて各々幾リートルと秤にかけた無數の言葉を引き延ばして行くのがその詩の構造であつた。荒鑢をかけたゴツ〱の詩が大禮服を着て文法に叩頭してゐるもの』である。オヴィドは『明らかに汚い言葉』であり、ホラースは『道化役者が輕浮なる輕口を使つて冗談を云ふ時の救ふ道なき老犬の饒舌』を弄するものである。シセロンもセザールも『記憶の不姙症と信じ難き程頑固なる內存的便秘』を特長としてゐる。そして彼が眞に愛したラテンの著者は、『鋭い觀察家であり、微妙な分解家であり、驚嘆すべき描寫家』であつて『心靜かに、片よらず倦まず、ローマの日常生活を描き、サチリコンの簡潔なる短章のうちに時代の風習を物語る』ペトローヌである。『大世紀と稱する時代に行はれた制限と束縛から脫して』『ローマに流れこんだあらゆる方言から表現法を借りて來た』筆で『ソドムの兎の色沙汰』『戀人と夫婦の快樂と苦惱とを、すんぐりした腕の冴で分解したものである。』更に『各地から集まつた各種の水が流れ寄つて、相混じて異國趣味の强い嶄新なる一つの色に溶けこんでゐる』アピュレの「黃金の驢馬」は特に一四六九年に印刷された四折本の第一版を手に入れて愛讀してゐた。彼の書棚にはこの外基督敎作家や中世紀暗黑時代のラテン作家の作品が多く積まれてあつた。そのうちには「南瓜の譽に獻ぐ」る詩を作つたスタラボ、詩で處方を描き草木の魔力を說いたフロリデスなぞがあつた。（第三章）

彼は『ラブレの哄笑』にも『モリエールの堅實なる滑稽』にも心を惹かれない。これらは『お祭の興を添へるかの蠟燭を矢鱈に立てた』興業物と同一視してゐる。ヂドロのサロンも『馬鹿げた道德や初心な憧憬に』過ぎない。彼はフランス文學に對する趣味は十九世紀に入るまでは全く基督敎文學に限られてゐる。ブウルダルウ、ボシユエ、パスカルを愛讀した。この基督敎文學に對する彼の特別なる傾は十九世紀のものにも及んでゐる。『彼は勇氣を奮つてこの敎會下の窖に潜りこみ、……詰らないものの山と積まれたなかから眞の巨匠の手になるものを撰み出して來た』大部分は十七世紀の文章を套習したもので近代人の心の琴線に觸れない。僅かにラコルデールの『新發明の發想法、大膽な言葉、戀愛の調子、跳躍、輕快な叫び聲』に充ちた文章を樂み得たに過ぎない。むしろ十九世紀の宗敎文學者としては敎會外の人にデ・ゼセントの興味は向けられた。例へば『狼の巧みな操縱者であり、人間の魂の賢き工人であり、頭腦の器用なる時計工である』エルネスト・エロである。時に『神に獻ぐべき讃辭と祈禱とを惡魔に振り向けると云ふ禁ぜられたる快樂』を魅力とするサヂスムの後繼者、『熱き信仰と不純なる心を併せ有し』『狂信者の廐にゐる去勢馬中の一匹の種馬の如き』バルベイ・ドオレヴイリーを愛讀し、その「ヂアボリツク」の一篇を『カルヂナルの用ふる緋色の綾をとつた正銘の羊皮に司祭の用ふる紫色インクで印刷させたものを』一部愛藏してゐた。（第十

二章)

『金屬の帶を鋼鐵の針金製造機に通すと整一にして輕い細條となつて出て來る』彼は現代文學に對して同じ操作を行つた。『自分の氣質に一番よく適ふ作品を選んだ。』然るに『彼の快樂は洗錬の上に洗錬を望んだので非常に限定されてしまつた。』その結果その本により彼が『補助薬に導かれるやうに或る雰圍氣のうちに入つて行つて』そのうちに『昇華された感覺が彼に思ひがけない震盪の感を與へ』うるやうな作品は非常に少くなつた。(第十四章)

ボオドレールには『云ふに云はれざる魅力を認めた。』ボオドレールは『汲めども盡きぬ鑛脈の底まで降りて行つた。そして人に見捨てられ或は人の知らない鑛坑の廊下を越えて更に奧に行き、遂に思想の物凄き植物が種々に分布されてゐる魂のどん底に達したのである。錯誤、疾病、淫亂の神秘なる破傷風と熱き熱病犯罪のチブスと發黄熱の棲むこの魂の限界近くに於いて「倦怠」の陰鬱なる覆の下に陰れて感情と感念が恐ろしい若返りをしてゐるのを見たのである。感覺の晩秋に達した精神の病的な心理を明にしたのである』(第十二章)

文藝作家は『自分の環境なり或は無理に自分と關係を結んで來る人間なりを調べて見て、このうちに自分を慰めて與れるに足りる觀察も分析も樂むことが出來ないと……自分の生活する時代の鐵冶監から亂暴にも脫獄して、近頃の夢とよりよく妥協出來さうに思へる違つた時代のうちに大手を振つて歩き廻るやうになる。』この心はフロオベルにあつては『神秘的にして氣位高き人物を配する野蠻にして壯嚴なる舞臺』を描かしめ、『現るる快樂の平凡なることに恐ろしく失望し、甚しき落膽と狂へる望』を抱く女の姿となつて現れる。『ゴンクウルにあつては……永遠に消え去りたる社會の典雅なる姿に再び歸らんとする心となつてゐる。』ゾラにあつては『前世紀の人工的なる優美或は化粧せる萎黃病には見向もしない。古き東方の聖職的に莊嚴なる邇獰猛なる殘虐心は顧みない。……彼は烈日の下に血の湧き立つ理想境にまぎれ入つたのである。彼は夢幻的なる天の發情、地の長き悶絶、花にむせぶ器官のうちに散りかゝる豐かなる花粉の雨に想到したのである』この三大作家はボオドレールと共に最もデ・ゼセントの心を捉へたものである。更に進んでは不完全だけれども『刺激の多い、一層食慾をすゝめ、一層酸味の勝つた蕭を蒸溜しうる』デカダンスの作者を好んだ。『魂の明らかならざる彼岸、思念の極めて聲低き囁語』をよく表すことが出來たベルレーヌがその一人である。『嘲笑を粧ひ、我慢し難き旅商人の默謔に耽る……亂雜のうちに、滑稽にして奇拔なる思想や怪しげなる愛嬌が閃き、突然ヴイオロンセロの切れた絃の如く鋭い苦痛の叫聲が奔る』トリスタン・コルビエールがその一人である。同じ珍味はテオドル・ハンノンのうちにも見出せた。それにも增して彼の冥想に生れた願に最も親しく感せられたのはボーである。『ボーは病的心理のうち特に意思の境を闡明し得たのである……感覺を麻痺する麻痺劑の如く、運動神經の要素を無とする毒素の如くに、意思の上に作用

する恐怖の威壓的影響を』人に示したものである。『息もつまる雰圍氣のうちに生體を解剖する精神的外科醫の注意が一度散漫となるや……夢遊病的にして又天使に近き幻を快き瘴氣の如くに舞ひ上らしめる。この腦髓の手術室こそデ・ゼセントにとつて倦むことを知らざる揣摩臆測の源泉であつた。』この『娟樂』を試みて後は凡ての文學に味がない。唯ヴイクエ・ド・リラダンのみに『一層反逆的な觀察や一層煩擾的な震動を認めることが出來る』これは『アメリカの作家の暗い蜃氣樓とは異なつて、冷しき滑らかなる殆ど朗らかとも云ふべき幻影となる』然し『彼を呪文の如くに壓倒し』去るものはマラルメである。マラルメは『悟性の突然の閃と腦漿の幻覺』を『凝結されたる文學、本質的の煮凝、藝術の昇華物となつた』文體により人に傳へるものである。（第十四章）

かくの如き調子でもつて主人公デ・ゼセントは繪畫を語り、モロー、ヤン・ルイケン、ブレスダン、ルドン（第五章）、ゴヤ、レンブラン（第九章）を論じてゐる。或は音樂を論じては中世紀教會音樂、ワグネル、シユーマンを論ずる（第十五章）。或は彼れの宗教に對する傾動を解剖して、ショペンハウエルと基督教の人生觀の比較論を試み（第七章）、或はカフエ論を試みる（第十三章）。これらは悉くその一端たりともこゝに紹介すべきであるけれども今はその暇を持たない。

これらの叙述の間にデ・ゼセントの樣々なる囘想が物語られる。第四章に於いてはケレオソートの味から嘗つて齒の治療をうけた時のことを連想し、香料の文字からは普請中の家の石灰の香或は夕立の雨が斑點をつけた埃の香のみを好む妙な女を囘想したりする。（第十章）

そのうちに主人公の神經病は昂進して來た。全身の苦痛が起り、甚しい咳に苦しめられた。樣々なる幻想に襲れる。花を觀賞してゐるうちに騎乘の黴毒に逐ひかけられる異常なる惡夢を見る（第八章）、匂の幻感が執拗に彼につき纏ふ（第十章）。暑氣に逢つては激しい嘔氣を催し（第十三章）、遂には絕對的無食慾の狀態に陷つてしまつた。醫者は彼に生活の革命を宣言した。彼は强制的に巴里に轉住させられることになつた。彼の創造したこの世外の生活は死滅しなければならぬ時が來た。『さあ凡ては終だ。まるで津浪のやうに人間の凡庸さの浪が天まで上つて來てこの隱家を呑み込まうとしてゐる。いやいや乍ら自分はこの隱家の壘を決つた。自分には勇氣も缺けてゐる。胸も惡い。神樣、疑を懷く基督信者をお憫み下さい。……只一人夜に船出をしようとするものです。自分を慰めて吳れた昔の希望の燈臺はもう空を照して吳れません。』かゝる言葉を以つてこの小說は閉ぢられてゐる。

デ・ゼセントの今後の變化についてはこの小說に續く、同じく奇妙なる署名の小說 LA-BAS を繙けば知ることを得やう。しかしこの A Rebours はたゞこの一篇を以つて充分獨立の意義を持つてゐるものである。奇妙なる題名 A Rebours の示す意義を持つてゐる筈である。その意味の解釋は讀者各自がつけるべきである。繰り返して云ふその意義位は十九世紀文學の愛好者は自ら定めておくべきものなのである。

堀切新市長論

鶴見祐輔

一

『立憲政治とは、硝子張りの家の中の生活である』といつたカーライルの言葉を、そのまゝ地でゆくのが、新東京市長堀切善次郎君の公の生活である。それは彼の過去でもあり、また將來の約束でもある。さうして、そこに彼が前例なきまでの人氣を背負つて登場してきた社會的空氣の根柢がある。

東京市民は今までの暗い市政に飽き〱してゐた。今までの玄人じみた市長振りに飽き〱してゐた。さうして秕政百出の後、なほ執拗にその舊劇を上演せんとする人々の態度を憤つてゐた。さうゆう一切の空氣が、ぴんとはね返つて堀切君を東京市役所に抛り込んだのだ。丁度紐育で多年のタマニー・ホールの因襲政治に反撥して、素人ばかりで寄つてたかつて三十六七のミッチェルを市長につき出したときと、心持がよく似てゐる。

そこへ、この役を買つて出てきた堀切君が、丁度誂へ向きにその場面にぴつたり來た。そこで市民が半分は市會やその背後のある勢力に對する面當て氣分で、やつさやつさと江戸前に、堀切君を市役所に擔ぎ込んだ形だ。理屈から言へば市會が選擧したに間違ひはない。しかし一般市民の氣分から言へば、一寸民衆の氣持ちで市會を押し付けて公選したやうなところもある。近來珍らしい出しもので、大分大勢の人に溜飲を下げさしたところがある。如何にも江戸の五月節句らしい氣分だ。

何といつても「新」といふ字は、強い字だ。例は違ふが亞米利加でウイルソンが、大學總長をやめて政治に乘り出してきたときは、素破らしい景氣だつた。あれ程のローズヴェルトでも、一寸足許にも寄り付けなかつた。大河の長堤を決して氾濫するやうに全米國に瀰漫したものだ。今度の堀切君の一番の強味は、この「新」といふ一字だ。今まで役人をしてゐて世間耳目の外にゐた。一度も政治にも市政にも關係してゐない。從來の市長とまるで型が違ふ。若い。無垢だ。こんなことの一切が競合して、如何にも新しいといふ感じを與へた。

相撲取りが初めて幕に入つて、新進といふ氣分で押し切つて來るときは強いものだ。さうゆう同じ感じが堀切君に付いてゐる。それが、何といつても堀切君の大きい財產だ。

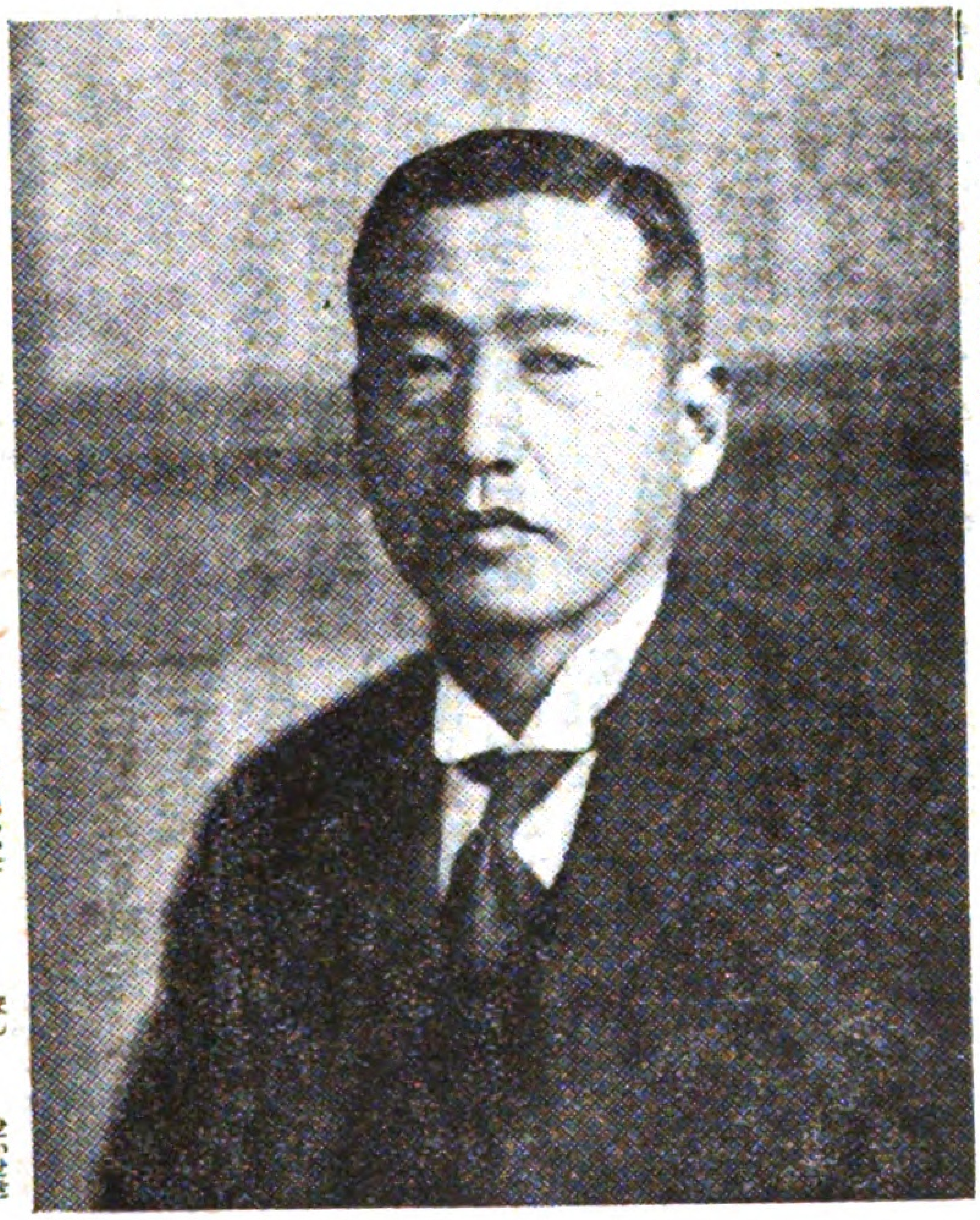
その新といふことは、堀切君の場合には、玄人政治家に對する、すぶの素人といふことだ。從來の市長に對し、如何にも年が若いといふことだ。その名前が他の知名の人々と違つて、少しも店晒しになつてゐない、從つて未知數から起る好奇心を牽き易いといふことだ。

故に堀切君の市長就任は、色々な新しい社會的意味を隨伴した。色々な問題を暗示した。

二

我々は堀切君の過去を一瞥して見る必要がある。

堀切君は明治三十五年に一高の獨法に入學して、四十二年に東京帝大獨法科を卒業してゐる。卒業してすぐ役人になつて、丁度二十年間內務省の飯を食つてゐたのだ。この間、一度歐行してきた外は、殆んど判こで捺したやうな平坦な、乃至は平凡な途を歩いてきてゐる。



堀切新市長

一たい今日彼の過去を論じることは、見當違ひだ。彼はこれから仕事をする約束を持つてゐるので、今の若さで過去を論じられては、本人としても、頗る迷惑であらう。しかし、今日の彼を論じ、未來の彼を卜ふ爲めには、その索引として、彼の過去を一と通り調べて見る必要はある。

一高時代の彼は、少し柔道をやつた位で、その外は平凡であつた。學生としては同級の山岡國利君や、英法の青木得三君などの秀才ぶりには遠く及ばなかつた。大學に入つて後も、初めの間は、藤井眞信君や清水行恕君などに比して、一籌も二籌も輸してゐた。ところが卒業試驗のときに俄然として頭角を顯して首席となり、つゞいて文官試驗も東京方では一番よい成績だつた。それで大體所謂秀才としての折紙はついたのだが、それでも當時の同輩達は、たゞ勉強家位にしか見てゐなかつたらう。從つて役人になつてからも、同級の前田多門君や、丸山鶴吉君などの方が、早く頭角を現はして世間の問題となつてゐた。

堀切君は福島縣と京都府に暫らく出てゐた外は、殆んど東京詰で、警視廳の監察官や内務本省の監察官などをしてゐた。大體音無しい能吏になるだらうと、同僚の仲間は思つてゐたらしい。

その堀切君が突然として天下の問題になつたのは、先夫人を失つて後、今の夫人を迎へたときであつた。保守的な官界に於て、タイピストをしてゐた人を迎へて妻とするといふことは、可成りの英斷で、その時初めて彼が世間の評判などかまわず思ひ切つたことをする人間だといふことを、一部の人が知るやうになつた。

しかし、かうゆうことは新聞の社會部種になるから人の眼につき易いので、本當の堀切善次郎といふ人間は、その當時から、仲間のうちでは、次第にその硬骨を認識せられてゐた。例へば彼が、會計課長をしてゐたときに、内務省の大先輩たる安河内麻吉が、神奈川縣知事であつたが、彼は安河内の出してきた豫算を、思ひ切つて、ずばりと削減した。こんなことは事勿れ主義で目前的の出世に拘泥してゐる人間には一寸出來兼る藝當で、當時周圍の者は、彼が音無しいやうで、案外度胸があることを知つた。

都市計劃局長のとき、彼は東京市が永田市長辭職の後、中村市長の出來るまでの空位を埋めて市長事務管掌をやつたが、この時丹羽道路局長をやめて、内務省から牧梅士をその後任につれて行つた。これなども當時としては可成り思ひ切つた英斷だつた。

こんな風にづけ／＼やつて居乍ら、彼は民政黨の内閣にも、政友會の内閣にも憎まれずに重用されて、土木局長から、神奈川縣知事、それから復興局長官と、トン／＼拍子で昇つていつた。別に官界遊泳も何もせずに、彼が出世の梯子段を順序よく昇つていつたところには確に彼としての特色があつた。

彼を屢々使つたことのある或る人は、これを評して言つた。

「堀切の強味は、如何にも彼が純眞なところにある。彼は裏も表もない。さうして思つた通りやつて、しくぢるとすぐ正直に、惡かつたと自ら認める。決して作り飾りしない。だから人に憎まれない」と。

之れが彼の過去と現在とを物語る適切な評言だ。現に彼は市長になつてから、四五日して英國のグロスター公の見えた歡迎のとき、市會議員の列ぶ場所が氣に入らなかつたとかで、議員達が集まつて、わい／＼騷いで市長の出席を求めると、すぐ出驅けて行つて『その結果については責任を認めます』と、あつさりやつて引去つた。

三

彼が世上の問題となつてきたのは、神奈川縣の知事から、復興局長官になつたときだ。

一たい神奈川縣は、彼の知事になつたときは復興事業が頗る後れて困りぬいてゐたのだが、彼が就任するとてきぱき片附け出した。なんでも就任の日登廳するとすぐ横濱の地圖を出さして、色々な意見を聞

べて下僚を面喰らはした相だが、こんなところに事務好きの彼の性格が現はれてゐる。しかし、此當時彼は午後になると程ケ谷のゴルフ倶樂部へ出驅けて、下手なゴルフをやつてキヤデイを泣かすといふ餘裕ぶりを示してゐた。

それから復興局長官になつて初めて彼の眞骨頂が現はれてきた。彼は登廳した翌日か翌々日かに、九段坂の設計を根こそぎ變更した。それはあすこへ大きな陸橋がかゝることになつて既に着手しかけてゐたのを、そんなものをこしらへては、下が暗くなつて帝都が陰氣になると言つて、路面を削つて今の坂道に變更した。

當時復興計劃が捗々しく行かないで豫定年度內に完成しさうもなかつた。彼はすぐ豫定計劃を一年延期して、昭和三年度完成を、四年度末完成に變更して、所要豫算を取つた。

しかし帝都復興事業の難關は何と言つても區劃整理であつた。これは大正十一年に東京市政調査會が出來て、米國からビアード博士を聘して、市政硏究が日本朝野の視聽を集めた當時からの問題だつた。市政革新のためには受益者負擔や特別賦課の制を採用しなくては駄目だといふことは、專門家の定論だつたのだが、これが仲々因習的な勢力に妨げられて實現出來なかつた。そこへ大正十二年の大震火災が來たので、帝都復興にはどうしても直接受益者に負擔させなくてはいけないといふことになつて、山本地震內閣の內相の後藤伯が復興計劃を議會に出したのだが、これが審議會でも議會でも大分揉めて仲々面倒だつた。

しかし兎に角、區劃整理を實施して地面の一割を無償で地主から提供さすまでに定まつた。ところが、この實行に當つては異論百出し、當路や選擧運動まで混入して大騷ぎをやつて、仲々片附かなかつた。

これに一番手古擦つたのは、清浦內閣の下で復興局長官をやつた直木倫太郎君で、あの當時の直木君の苦心は、世人は買つてやらなくてはうそだ。その次に清野長太郎君が長官になつた時分は、區劃整理の騷ぎは、餘程下火になつて、事業が進捗し出した。

これが堀切君の時代になつて、ばた〳〵と片附いて、來年末にはようやく復興事業が完成するまでにいつたのだから、その功績は沒すべからざるものがある。殊に堀切君が、長官に新任して見ると、豫算がどうしても、一億二千萬圓內外足りないといふことを發見して、一方には大削減を行ひ、他方には大藏省に交涉して七千萬圓程の增額を取つてきたのは大手柄だつた。これは一見容易のやうで決してさうでない。役人の仕事で大藏省から豫算を取る位七面倒臭いことはないんだから。

區劃整理のみならず、公園、道路、橋梁などの計劃も彼は大分手をつけてゐる。そこに事務好きの彼の性格が出てゐる。

併し、此處に我々の見逃し難い重大な點がある。それは彼の幸運といふことだ。

區劃整理の完成は無事であつたに違いないが、彼が直木時代に長官

になつたら、果してあれだけ手際よく完了し得たか疑問だ。市來、湯野と苦しみぬいた後に彼が現はれて、最後の仕上げをする役廻りに爲つたといふところに彼の幸運がある。

人間の一生は大部分は運命の仕業だ。幸運に見放された人間は何も出來ない。堀切君にはこの幸運が付いてゐるやうだ。今度の市長就任の前後の空氣などが、同じくそれである。私は彼が四十六で市長になつたから、若い出世だなどゝ言ふ意味で幸運といふのではない。

四十六で東京市長が若いなどゝいふ考が、頭から間違つてゐる。ローズヴェルトは四十六のときは大統領になつてゐる。ムッソリーニーの天下を取つたのは三十八だ。日本だつて大きい仕事をした人間はみんな三十臺に責任の地位に立つてゐる。四十六の堀切君を青年市長などゝいふのは人を馬鹿にした話だ。

彼が幸運であるといふのは、如何にも彼の働けるやうな舞臺が、彼の前に來てゐるといふことだ。即ち彼は東京市長として、一番よい汐時に乘り出してゐるのだ。

四

公人の事業は要するに時代の潮に乘ることだ。上げ汐に船を進めることだ。退き潮のときは、どんな不世出の英雄だつて、何も出來るものではない。堀切君は今上げ汐に乘つてゐるのだ。彼がどこまでこの汐に乘つて乘り切るか、又は汐を見誤つてふり落されるか、といふことが彼の前にある大きい試金石だ。

今までの彼は、自分の權限内の仕事を、權力をもつて行使してゐればよかつたのだ。困難はあつても事務的の困難だけだつた。ところが今度彼は初めて、社會的乃至は政治的の試練にぶつかつて來たのだ。

彼は二つの力を背景に持つてゐる。一つは新聞によつて代表される市民の人氣で、いま一つは、彼が永く住んでゐた官僚社會の同情である。ところが、彼は一つの困難を目前に控へてゐる。それは市政の實權を握つてゐる市會との關係である。

どこの國へ往つても、民衆がすぐ政治をするところはない。民衆の選んだ機關を通しての間接の政治だ。ゆゑに民衆の人氣といふものがすぐ政局を支配する國は、絶無といはざるまでも、頗る稀だ。ゆゑに國政は議會、市政は市會によつて左右されることは當然だ。その議會とか市會とか言ふものは、民衆の人氣を正確に反映するものではない。制度としての當否は措いて、それが事實なのだ。だから紐育市民がいくら惡口を言つてもタマニー・ホールが紐育市政を支配してゐる。それはタマニー・ホールが選擧上手で市會を握つてゐるからだ。あれ程市民の人氣を背負つて立つたミッチェルでも、とう〳〵タマニー・ホールに散々に叩かれてしまつた。

かうゆう玄人政治家の集團である市會を相手として、堀切君がどれだけ市長としてやつてゆけるか、といふことが一般世人の興味を以つて眺めるところだ。彼は今まで一度も試みたることなき政治手腕の有

無を、日本人民の前で試驗されてゐるのだ。

政治の實際は利害と感情の非常に錯綜した關係だ。大學教授が生徒に講義するやうな理屈一點張のものではない。若し理論一式で政治が出來るものなら、そこら邊の誰だつて伊藤博文にもカヴールにもなれる筈だ。

東京市會の實勢力を握つてゐる三木と中島が、今は世間の手前で遠慮してゐる際だが、これがさう永くはつゞくまい。この時堀切君の骨の折れる時が來るのだ。

かゝる現實勢力に對して輿論の後援といふものは實に心細いものだ。山路愛山は輿論の攻撃を、輿論の水鐵砲といつた。米國の新進政論家のリツプマンは『幻影のごとき民衆』といふ本まで書いて、輿論の實際政治に無力なることを嘆じた。

堀切君を押し出した力が、輿論であつて、これを支持するものが官僚であるといふことは、今日の彼の立場を如何にも明るく、小氣味よく、純白に感ぜしめるが、しかし一方に於て、彼が市會の中に彼自身の勢力を有せざることが、如何にも危なつかしく感ぜしめる所以である。彼と市會との戰爭は塹壕戰である。輿論の後援は大砲の煙である。輿論は二百十日の大風のやうに荒れる。しかし、威力を示すのは年一回か二回である。反之、市會は太陽のごとく日々出沒する。任期四年の間に、堀切君は如何にしてこの關係をさばいてゆくか。

五

彼は就任すると、報知講堂に現はれて演說した。新しいやり方だ。彼が輿論を背景として仕事をしやうといふ氣持が看取される。

彼は登廳するとすぐ三つの變つたことをした。

その一つは市會議員の私宅訪問を廢したことだ。その二は、市長の招待會は一切、日本料理を廢して西洋食とす、といふことだ。その三は、市長の面會人は無斷で市長室に入るべからず、秘書を通じて來意を告ぐべし、といふことだつた。

この三つは一見簡單のやうで、實は可成り重要な意味を持つてゐる。その底を流れる一貫した氣持は、市長の事務に能率を上げたいといふことだ。卽ち、市會議員や新聞記者や一般訪問客の操縱よりも、市政自身に全力を注ぐのだぞ、といふ宣言である。如何にも堀切式である。少しも當てつ氣がない。世間もこれを新しがりの當てつ氣と取らずして、事務に忠實な新人らしい態度と見た。そこに彼の强味がある。

これに對する反對はすぐ現はれてきた。彼は官僚式であるといふ新聞記事である。事實は少しも官僚式でないに關らず、官僚式だと銘打をつけた。その次に出た反感は、市長と助役の俸給減額だ。しかし、これ等は前衞戰に過ぎない。これから面倒が蝟集してくるものと思はなければならない。

然らば彼は、如何なる途を歩いてゆくであらうか。

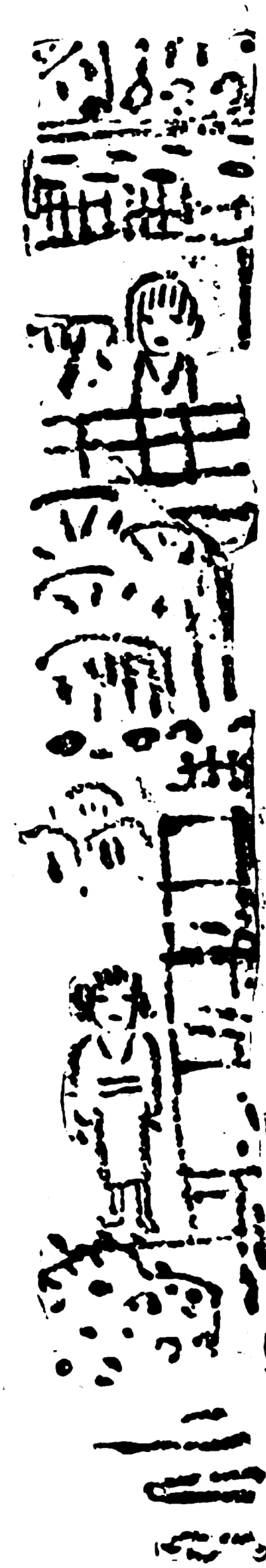
思ふに彼は、その晴れ〱した容貌の物語るごとく、明るい太い線を引いて無遠慮に進んでゆくであらう。市會に於ける人的關係や、利害關係を一切眼中に入れないで、忠實なる『都市支配人』の仕事をやつてゆくであらう。さうして氣に入らなければ、いつでもさつさと市役所を引上げてゆくであらう。

其處に彼の強味がある。こちらから賴んで市長になつたのでもなく市長で大に當てやうといふ氣もないやうだ。米國で近來市政改良の一方法として採用せられてゐる『都市支配人』の氣持で、東京市に這入つてきたやうだ。卽ち、市の政治をしやうといふのでなくて、市の行政事務を處理しやうといふのだ。たゞ一つの困難は、米國の都市支配人の場合には、これを任命する市長や市參事會が背後にあつて、支配人に充分の手腕を振はしめるが、彼の背後には、彼のために市の政治を扱ふものが居ない。ゆゑに彼の志は市の行政事務に專念するにあつても、全然市の政治と無關係たるを得ない。ことに市長の職は復興局長官と違つて、權力もなく課財權もない。行政を行政として行ふことが出來ないのが、日本の市町村制の缺陷だ。この現狀に於て彼は果して、如何にして行政的能率を發揮することが出來るか。

たゞ彼のゆくべき唯一つの途は、飽く迄も『硝子張りの家』のうちに住むことだ。卽ち、市長としての一切の公生活を、あけすけと市民の面前に公開して、細大洩らさず天下公衆に周知せしむることだ。而うして、知識に基く賢明なる輿論を常に彼の味方とすることだ。そのことは彼自身の生きる途であるのみならず、日本の市政、率いては日本の政治を明るくする所以であつて、彼のごとく純眞な明るい性格の持主のみに可能なる仕事なのだ。

今まで外國の政治家の常にしたことで、日本の政治家の一度もしなかつたことは、『玄人政治家の頭上を飛び越して直接に民衆へ』といふことだ。ローズヴェルトでも、ウイルソンでも、スミスでも、議會や州會が、判り切つたよい事に反對するときは、いつでも全國民に呼び掛けて、輿論を作ることに努力した。堀切君も愈よ辛抱し切れなくなつたら、問題を提げて街頭に出て市長として一般市民に呼び掛けて見るがよい。そうして賢明なる輿論の裁判を受けるがよい。しかし、市會が五月蠅いからとて、街頭で一戰もせずして市役所から退却するやうなことでは、彼は今日の大勢の同情者の期待を裏切ることになるのだ。

彼は出る時の人氣が素破らしかつただけに、これからが仲々困難であると言はなければならない。しかし、やつてやりばえのある仕事だ、東京市長といふ仕事は。(終)



第二貧乏物語

河上肇

第四回

辯證法的唯物論については、私はすでに前回においてその大體を說明し了へた。ところでエンゲルスは、『唯物史觀と剩餘價値による資本家的生產の秘密の暴露と』をもつて、吾々がマルクスに負ふところの『二つの偉大なる發見』となし、『これらの發見によつて社會主義は科學となつた』と、言つてゐる。辯證法的唯物論――唯物史觀――剩餘價値論――社會主義、これらのものはマルクス主義において如何なる內的連絡をもつか？　各々のものは如何なる主要をもつてその內容となすか？　私は進んでこれを明かにすることにより、今吾々に課せられてゐる社會問題の解決は、如何なる理由によりて可能であり、如何なる仕方によることが不可避的であるかを、次第々々に明かにするであらう。

七、唯物史觀（その1．社會の一般的運動法則）

レーニンは『マルクス主義の三つの源泉と三つの構成部分』において、つぎの如く述べてゐる

『マルクスは、哲學的唯物論を深化し發展せしめつゝ、これを最後まで押し進め、自然に關する唯物論的認識を人間社會の認識にまで押しひろめた。科學的思想の最も偉大なる勝利は、マルクスの史的唯物論〔唯物史觀〕であつた。

『今日まで歴史および政治に對する見解の上に支配してゐた混亂と獨斷とは、一の社會的生活の組織が、生産諸力の發展の結果として、如何に他のより高級な組織へ發展するか――例へば、如何に農奴制が資本制に成長するか――を示すところの、驚くべく完全な・整然とした・科學的理論によつて、置き換へられた。

『人間の認識が、彼れから獨立して存在する自然すなはち發展しつゝある物質を反映してゐると同じやうに、人間の社會的認識（すなはち種々なる哲學的の・宗教的の・政治的の・學説および見解）は、社會の經濟的組織を反映してゐる。

『政治的機構は、經濟的基礎の上に立つ上層建築である。例へば、吾々は、近代ヨーロッパ諸國の各種の政治的形態が、如何にプロレタリアートに對するブルヂ・アジーの支配を强めることに役立つてゐるかを、見るのである。

『マルクスの哲學は、完成されたる哲學的唯物論である。それは人類に――殊に勞働者階級に――偉大なる認識の武器を與へた。』

（瓜井・直井氏共譯『マルクス、エンゲルス、マルクス主義』七六頁による）。

右の章句のうちには、辯證法的全唯物論と史的唯物論との聯關ならびに史的唯物論そのものの主張が、極めて簡潔に且つ正確に表現されてゐる。私の仕事としては、たゞその解説が殘されてゐるだけである。

レーニンの言へる如く、マルクスは、辯證法的唯物論を自然界に局限することなく、これを人類社會に押し擴げることによつて、『唯物論の哲學をその上部に向つて竣工した』。唯物史觀（史的唯物論）はかくして生まれたのである。私は以下その大體を述べよう

人間の現實的な生活――すなはち『政治經濟學批判』の序言中にあるマルクスの唯物史觀の公式の冒頭にいふところの『人間の生の社會的生産』、またはエンゲルスのいふところの『現實的な生の生産および再生産』――は、最初から二重性をもつた一個の關係として現はれる。その二重性の一方は、人間の自然に對する關係であり、他方は、人間相互の關係――『如何なる條件のもとに、如何なる仕方で、如何なる目的のためにたるを問はず、多くの人々の共同の働きといふ意味

においての、社會的な關係』――である。けだし人間は、その生活に必要な物資を得るために、外界の自然に働き掛けねばならぬが、しかし斯かる働き掛けは、個々の個人が孤立して之を行ふのではなく、社會的に連絡された多くの人々が共同して之を行ふのである。だから、人間の現實的な生活を捉へて見れば、そこにはいつでも、人間の自然に對する關係と・人間の人間に對する關係と・の二つの側面が、存在するのである。

ところで、人間が自然に働き掛ける場合に、それに役立つものとして、人間社會に歸屬してゐる諸々の力は、マルクスの謂ふところの『生産諸力』であり、また人間が自然に働き掛けるために彼等の間に結ばれる社會的諸關係は、マルクスの謂ふところの『生産諸關係』(これが總和は社會の經濟的構造を形成する)である。

かくて吾々は、この生産諸力と生産諸關係とが、人間の物質的生活といふ統一物のうちに見出されるところの・不可分離的な對立的契機であることを、發見するのである。何が故にこれらのものは對立的な契機であるといふか? 生産諸力は人間の自然に對する關係のうちに現はれるに反し、生産諸關係は人間の人間に對する關係のうちに現はれるのであるから。しからば、何が故にそれらのものは不可分離的な契機であるといふか? 人間の自然に對する働き掛けは必ず社會的な連絡のもとに行はれるのであり、從つて現實における生産諸力の發揮は必ずそれ自體のうちに生産諸關係の存立を含むのであり、生産諸力の發揮はありえないのであるから。

吾々は先きに、『統一的なるものの分解と、その矛盾に滿ちたる構成分の認識とは、辯證法の本質である』ことを、述べた。今、生産諸力と生産諸關係とは、人間社會の歷史にとつての最も一般的な・最も根本的な・對立的契機である。社會の經濟的構造の發展――一定の經濟的構造の成立、發展、および沒落、より高級なる構造による代位――は、たゞかゝる對立物の鬪爭過程としてのみ、始めて根本的に把握されうる。

吾々はこゝで、後々の理解のためにも、生産諸力の構成分につき、少しく立ち入つた分析を試みることを必要とするであらう。

マルクス主義の文獻において吾々はしばしば『社會の生産諸力』および『勞働の生産力』なる言葉に出逢ふ。しかも單數および複數の區別を明確にしがたき日本語においては、前者も後者も、しばしば一樣に『生産力』と呼ばれる。だがこれら二つのものは、これをはつきりと區別せねばならぬ。

社會の生産諸力とは、使用價値(有用物、財、富)の生産に役立つ

ものとして一定の社會に歸屬してゐる諸々の力の總稱であり、それには次ぎの如きものが網羅される。

一、人間によつて占有されたる自然力(水力、風力、等々)
二、人間
　(a)自然力としての人間(勞働者の數、その性質、等々)
　(b)社會力としての人間
　　(イ)勞働の社會的組織、等々
　　(ロ)×××階級、等々
三、人間の生産物
　(a)物質的生産物、生産手段—原料、道具、機械、等々)
　(b)精神的生産物(科學)

唯物史觀が人間社會の歷史の根本動力と認めるところのものは、右の如き意味の生産諸力である。ところで、人間による自然の加工に役立ちうる・これらの生産諸力が、現實に自然に働き掛ける場合には、いつでも人間の勞働を媒介とする。それゆゑに、社會に歸屬せる生産諸力の發展は、原則として、社會的勞働の生産力(生産能力、生産性)の發展となつて現はれる。こゝに勞働の生産力とは、一定の勞働が有用物を生産しうる力のことであり、そしてかゝる力の強さは、一定分量の勞働(勞働の分量は勞働時間によつて測られる)と・その勞働によつて生産される有用物の分量と・の比率によつて、測定される。ところで、一定の社會が利用しうる生産諸力(例へば機械)の總量にして增加するならば、それにつれて、一定分量の使用價値(有用物、財、富)を生産するために必要とされる勞働の分量は減少するのであり、逆にいへば、一定分量の勞働をもつて生産されうる使用價値の分量は增加するのである。そしてそのことは、取りも直さず勞働の生産力の增加を意味するのである。此の如く、勞働の生産力の增加は、社會における生産諸力の發展に適應する。だが、一定の社會形態の運䡄(その成立、發展、沒落)にとつてその根本動力となるものは、當該社會の生産諸力であり、勞働の生産力は、たゞかゝる生産諸力の發展程度の指數たるにすぎない。用語の類似するゆゑをもつて、この二つの概念を混同せざることは、マルクス主義の文獻を正當に理解するための一條件である。

さて社會の生産諸力とは、以上述ぶるが如く、一定の社會が有用物を生産するために役立つものとして當該社會に歸屬してゐる一切の力の總稱であるとするならば、こゝに明かなことは、一定の生産諸關係もまた、一定の條件のもとにおいては、それ自身一の生産力として、生産諸力の一構成分となる、といふことである。かくて生産諸力と生産諸關係といへる二つの對立物は、一定の條件のもとにおいては、同一である。これが先きに(四、辯證法的唯物論、細論の2において)いふところの『對立物の同一性』なるものである。

だが、一定の生產諸關係は、生產諸力の或る程度以上の發展に伴ひ、それらの生產諸力と調和しがたくなり、生產諸力のそれ以上の發展に對する桎梏となる。それは一の生產力から、その反對物たる破壞力に轉化する。『萬物は流轉して已まざるものであり、如何なる現象も遂には自己を否定せざるをえないものであり、如何に有益なる制度も最後にはその反對物に・有害物に・轉化せざるをえないものである』といふことは、やはり吾々の先きに述べたところであるが、吾々はこゝにまたその一例を見出すわけである。

ところで、すでに一定の生產諸關係が生產諸力の發展に對する桎梏となるに至れば、それは必ず廢棄されざるをえない。生產諸力および生產諸關係なる二つの對立物のうちでは、前者が後者に比しより强きものに屬する。もしこれらのものが互に衝突するに至るならば、前者は必ずその鬪爭における勝利者となる。何故といふに、人間は外界の自然を彼等の生活に役立つやう加工することなくしては、彼等の生活を維持してゆくことができないのであり、從つてまた、外界の自然を彼等の生活に役立つやう加工するための力（生產諸力）を增大してゆくことなくしては、彼等の生活を發展しゆくことが出來ないのである。だから、社會全體が沒落する場合ならばいざ知らず、さもないかぎり、生產諸力の絕えざる發展は、歷史の進行のための不可缺な條件であり、社會問題の解決にとつての不可避的な前提である。だからまた、現存せる生產諸關係が生產諸力の發展のための妨害物となれば、それはやがて破棄され廢止されて、新たなる・より高度の・生產諸關係にその席を讓らねばならぬ。人類社會が今日まで課せられて來た問題——社會問題——は、かゝる原因から起り、またかゝる仕方によつて解決され來つたのである。

一定の經濟組織（一定の生產諸關係の總和）は、譬へば吾々が身に纏つてゐる衣服の如きものである。（だからマルクスも、比喩的には、資本主義的な外被などといふ言葉を用ひてゐる）。かゝる衣服は、吾々の生活のため缺くべからざるものである。だが、宇宙間の到るところに行はれてゐる辯證法的な法則は、如何なるものをもその反對物に轉化せしめずにはおかない。この法則には、宇宙間に一つの例外もない。嘗ては如何に有用なものであつても、事物の發展につれて、それは例外なしに無用なものとなり、遂に有害なものとなる。そこで譬へば、一定の衣服は小供の生活のために缺くべからざるものであつたとしても、それはその小供の成長につれて次第に窮屈になり、そして小供の成長がある點以上に達すると、それを無理やりに着せておくことが小供の發育に對する桎梏となる。かくして成長しゆく小供のからだと着物との間に矛盾撞着が起る。そして遂には、着物の方が張り裂けてし

まふ。それは内部からの壓力により、風船玉が爆發する如くに、爆發するのである。マルクスが、資本家的社會の末路を敍述せる際、例へば『資本論』(第一巻、カウツキー版、六九一頁)において、『生産手段の集中と勞働の社會化とは、それが資本主義的な外被(Hülle)と兩立しえざる點に達する、かくて外被は爆裂(gesprengen)する』といふやうな言葉を用ひてゐるのも、そのためである。

大人の着物を小供に着せるならば、小供は手足の自由を失ふ。それは小供の活動のための桎梏となる。だが、その小供がすでに充分に成長して大人となり、古き衣を脱ぎ棄てた段階においては、大人の着物が恰も彼れに合致するものとなつてゐる。問題は古き衣を脱ぎ棄てゝ新たなる衣を纏ふことによつて解決される。生産諸關係は生産諸力の發展程度に適應せねばならぬ。その適應が失はれんとするときに問題が起る。だが、かゝる問題が提起されるのは、すでに生産諸力が從來の生産諸關係のうちに包容し切れなくなつたがためであり、問題の提起される時は、より高度の新たなる生産諸關係の成立を可能ならしめるための前提條件たる・一定の程度以上に發展せる生産諸力が、すでに具備されてゐる時なのであるから、問題はいつでもその解決の手段と共に發生するのであり、問題の解決はいつでも問題それ自身のうちに含まれてゐるのである。マルクスが『人間は常に自ら解決しうる問題をのみ問題とする、何故といふに、より正確にこれを觀察するならば、問題それ自體は、いつでも、その解決に必要な物質的諸條件がすでに存在してゐるか・あるひは少くともその生成の過程にあるか・の場合にのみ、始めて發生するものであるから』と言つてゐるのは、正にそのためである。だからこそまた吾々は、現代の社會問題を解決するために、單なる個人的主觀によつて構成されるところの一切の恣意的空想を排斥し、專らその解決の手段を現代社會の科學的分析のうちに求めんとするのである。

一定の社會における生産諸關係の總和は、當該社會の『經濟的構造』を形成するところのものであり、そしてかゝる經濟的構造こそは、後に至つて說明する如く、當該社會の『實在的な土臺』となつてゐるものである。かくて生産諸力と生産諸關係との衝突のために發生せる社會問題は、當該社會の經濟的構造の××によつて解決されると同時に、それにつれてまた、かゝる土臺の上に生ひ立つてゐる政治的上層建築や觀念的な上層建築も、あるひは徐々に・あるひは急激に・×××、かくして×××××が全般的に成就される。そして人間の歴史の上に從來大きな段階を劃し來つたものは、かゝる意味の××××なのである。

マルクスは以上のことを、『政治經濟學批判』の序言において、つぎ

の如く定式化した。

『社會の物質的生産諸力は、その發展の或る一定の段階において、從來それがその内に活動してゐたところの現存の生産諸關係と、あるひはたゞその法的表現にすぎざる所有諸關係と、衝突することになる。これらの諸關係は、生産諸力の發展形態から、その桎梏に轉化する。こゝにおいてか××××の時代が到來する。經濟的基礎の變動につれて、巨大なる上層建築の總てが、あるひは徐々に・あるひは急激に・××する』

かくてこれを一言にして蔽へば、すべて從來の歴史は、生産諸力と生産諸關係との鬪爭過程に外ならぬのである。吾々は歴史をかく把握することにより、始めてこれを、『その自己運動において・その自發的發展において・その生ける實在において・認識する』ことができる。唯物史觀の・歴史に對する辯證法的把握の・本質は、實にこの點に横たはるのである。

社會全體の（社會そのものの）滅亡は、當該社會の生産諸力の萎縮減退に基づくが、これに反し、社會形態の××（すなはち一定の社會が一の組織形態を脱ぎ棄てゝ新たなる他の組織形態へ移行すること）は、當該社會の生産諸力の發展增大の結果である。このことを明白に理解しおくことは、吾々が現にそのもとに住みつゝある現代の資本主義的社會が、正に××××××××××××××、眼前の諸現象を正當に理解するため、特に必要である。（このことをさへ明確に理解してをれば、現代社會の諸矛盾を生産諸力の發展によつて解決せんとする一切の政策の窮極的無力は、直ちに看取されうる。）

昨年八月九日、コミンテルン第六回大會の席上で、ブハーリンの述べた演説のなかには、つぎの一節がある。私はこゝにそれを引用しよう。

『吾々は、マルクス、エンゲルス、およびレーニンの根本的見解と完全に一致して、社會主義を一の不可避的な自然史的な現象と認める。資本主義の動態に關する諸法則の記述は、吾々の綱領草案の基本的な部分において最も重要な要素となつてゐる。吾々は、資本主義の崩壞に關する吾々の理論を、資本主義の體系内における諸矛盾の再生産の過程に關する分析の上に、基礎づけてゐる。吾々は、吾々の綱領草案において、資本主義は絶えず段々に弱くなつてゆき、プロレタリアートは絶えず段々に強くなつてゆく、と言つてはゐない。資本主義の最後の段階たる帝國主義の段階は、次第々々に内部的頽廢の諸兆候を現はすとはいへ、また寄生蟲的傾向は、資本主義的體系の枠内において、次第々々に著しくなるとはいへ、それにも

拘らず、現時における資本主義國の多くのものにあつては、生産諸力は引續き有力に發展してをり、技術は益々改善されつゝある。資本主義が全線にわたつて崩壞するであらうと吾々が××してゐるのは、それがその總ての部分において次第々々に弱くなるからではなく、資本主義によつて發生せしめられ且つ互に連絡せしめられてゐるところの・內部的および外部的の・大なる諸矛盾が、資本主義の發展の進行につれて、益々ひどい撞着と衝突とを惹き起すに至るからである。對立せる諸勢力の斯かる撞着の間において、社會の資本主義的形態は××し××してしまふであらう。」

右に述べてあるやうに、吾々は、資本主義の崩壞(すなはち資本主義的な社會形態の廢棄)が、一の不可避的な・必然的な・自然史的過程であることを、科學的に確信しつゝあるものであるが、しかし吾々は、この資本主義崩壞の過程を、譬へば風船玉が內部的壓力の減少のためにすぼむやうなものとは思つてゐない。風船玉を段々膨らしてゆくと、內の氣體が外に向つて擴がらうとする力と・風船のゴム體が內に向つて縮まらうとする力と・これら二つの相對立した力の矛盾衝突が起り、そのために風船玉は、それが膨脹し切つた極點において遂に破裂してしまふ。すなはち、それが最も力強く膨脹し切つた刹那こそは、正にその破滅の直前における瞬間なのである。そこでは突然に反對物への轉化が起る。それと同樣に、過去の如何なる社會形態の內部においてもさうであつたと同じやうに、現存の資本主義的體系の內部においても、生産諸力の發展は最後まで行はれる、從つて生産される富の分量は益々增加してゆく、それは恰も風船玉のなかへ吹きこまれる氣體の分量が次第に增加すると同じである。だが、此の如く飽くまでも發展しゆく生産諸力を、いつまでも資本主義的な生産諸關係のなかへ閉ぢ込めておくことは、次第々々に困難となつてくる。益々發展しゆく生産諸力と從來の生産諸關係との間における矛盾衝突は、年毎に激化する。恐慌および戰爭による生産諸力の破壞――××および×の恐るべき規模における×××××――は、そのために起るのであり、起らざるをえないのである。「かゝる××によつて一時的な均衡がしばらく保たれる。だが間もなく、同一の矛盾が、今度は以前よりも更に擴大されたる規模において再生産される。そしてかゝる矛盾の激化のためにこそ、資本主義的な社會形態の外被は、遂に××し××するに至るのである。

資本主義の最後の段階たる帝國主義の時代において、生産諸力と生産諸關係との間における矛盾衝突の激化のために、世界的規模における戰爭が如何に不可避的なものとなつてゐるかは、吾々が後の章にお

いて科學的に立證せんとするところである。こゝではたゞ、その災害について一言するに止めておく。

第一次の世界戰爭は、一九一四年から一九一八年にわたつて行はれた。それが世界史上未曾有なる慘害を齎らしたことは、周知の如くである。この戰爭においては、最も健全な・最も勞働に適した・約七千萬人の人間が、生產事業から引きさらはれて、死の脅威と斷壕内の苦痛にさらされた。戰死者九百萬人、負傷者千九百萬人、(死傷者合計二千八百萬人)、これが人間の生きた肉體に對する直接の損害であり、その外の物質的富の損害の多大なりしことは、今一々列擧するまでもない。此の如きが、資本主義の最後の段階において必然的なものとなるところの・生產諸力と生產諸關係との衝突に基づく・生產諸力の××であり富の××である。

第一次の世界戰爭は、かゝる夥しき犧牲を提供することによつて、帝國主義列强間の勢力を再び一時的の均衡に齎らした。列强は再び武裝的平和(戰爭の他の形態)の時代に入つた。かくてまた、甚しく破壞され攪亂されたる生產諸力も次第に元に歸り、現に一九二五——二六年代に至つては、世界經濟はほゞ戰前の狀態に恢復し、生產諸力は今やまた再び急速なる發展を遂げつゝある。

本年一月十五日に至るまでの最近四半期におけるヷルガの年報には、世界經濟の一般的狀態について、つぎの如く述べてある。

『一般的に言つて、資本主義的生產の容積は、一九二八年度においてさうであつたやうに、一九二九年度においても、引續き向上線を辿るであらうといふことが、推定されうる。かくて吾々は、つぎの如き根本的に重要な事實に出喰はす、すなはち一方、サヴエート・ロシアにおいては、すでに資本主義が顚覆され、社會主義の發展が進行中であり、また西ヨーロッパにおいては、資本主義が成熟しすぎてゐて、來るべき××の波によつて洗はるべき運命にあるに拘らず、他方においては、資本主義がたゞに前進しつゝあるのみでなく・若々しい急速な前進をなしつゝある・廣い領域が、なほ世界のうちに殘つてゐる、といふことである。』

資本主義が今日若々しい急速な前進をなしつゝある主なる領域は、トルコおよびアフガニスタンである。これらの兩國は、經濟的にも思想的にも、今や極めて急速に封建主義から資本主義へ推移しつゝある。同樣にまた、イギリスの諸領地および南アメリカの若干の國々においても、資本主義は急速に發展しつゝある。かくてこれを世界全體について見れば、『一方においては、資本主義的經濟の體系一般の上に衰落の兆候が益々著しく現はれて來てゐるとはいへ、他方において、資本主義的な生產樣式はなほ地理的に擴大され、資本主義的に生產さ

れる貨物の分量は次第に増加しつゝあるのである。』

要するに、資本主義はその總ての部分において次第々々に弱くなりつゝあるのではない。むしろ『現時における資本主義國の多くのものにあつては、生産諸力は引續き有力に發展してをり、『技術は益々改善されつゝある。』だが、正にそのことのために、かく急速に發展しつゝある生産諸力は、その國家的な限界と益々撞着の度を高めるのである。

第一次世界戰爭によつて設定されたる世界列强の勢力範圍は、──後の章において吾々がなほ立ち入つて研究するであらうところの種々なる原因に基づき、──今や日を追うてその均衡を失ひつゝある。このことは、世界再分割の必要が──すでに殘る限なく分割されてゐる世界を新たなる實力に順應して分割し直ほすことの必要が──今や刻々に迫りつゝあるといふことを、すなはち第二次の世界戰爭がすでに眼前に切迫してゐるといふことを、意味するものに外ならぬ。

現に世界の列强は、この來るべき戰爭の準備のために、全勢力を擧げてゐる。諸國における膨大なる軍事豫算の編成を見よ。陸軍における現役ならびに豫備の兵員數の増大、巡洋艦・潜水艦・航空母艦の著しき増加、水陸飛行機の建造數の躍進的增加、等々は、何を語るか？世界は今何によつて脅かされつゝあるのであるか？『恰も一九一四年の戰爭の直前におけると同じやうに、今や再び大氣には焔硝の臭が籠つてゐる』。米國の提督プランケットは、戰爭が間近に迫つてゐるといふことは、『吾々が今この部屋に坐つてゐるのと同樣に確實である』と、昨年ニューヨークの或る公會の席上で明言してゐる。

ところで來るべき第二次の世界戰爭の殘虐性は、第一次のそれに比べて、到底比較にも何にもなりはすまい。私はそのことを推定すべき材料として、たゞ次ぎの如き一個の事實を指摘しておく。

世界戰爭の全期間を通じて、ドイツの空軍は二八〇トンの爆彈を、イギリスの領土に投下した。その人命に及ばせる損害は、死者千四百十三名、負傷者三千四百八名である。しかるに、現在のフランスの空軍は、たゞ一回ロンドンを襲擊しただけで、同じだけの分量の彈藥を投下することができる。恐るべき人間殺戮の技術は、日夜科學的に研究されつゝ、此の如く驚くべき速度をもつて發達してゐる。殊にこの空軍は、來るべき世界戰爭において、現在における吾々の想像以上に、その慘害の度を深刻にしその範圍を擴大し、たゞに出征軍人に對してのみならず、内地に居殘つてゐる一般市民に對しても、眞に恐ろしき危險を作り出すであらう。それは實に火を睹るよりも明かである。

第一次の世界戰爭が造り出した死傷者二千八百萬人といふ數は、すでに世界史上未曾有なる驚くべき慘害であつたが、來るべき第二次

世界戰爭の慘害は、更にその何倍何十倍に達するか、殆ど測り知ることができない。必ずやそこには、世界開闢以來の最も殘酷なる無間地獄の國が、なまなましくも廣く地球の表面に展開されることであらう。益々深刻化する・益々擴大されゆく規摸において再生產される・かゝる慘禍の周期的襲來を、大衆は果して何處まで忍耐し續けるであらうか？　この質問は風船玉のゴム膜の强靭さを尋ねるに等しい。しかもこの質問への解答のうちに、今や全世界の運命が橫たはつてゐるのである。

思ふに、以上述べたるが如き慘禍にして、もし資本主義の體系内における生產諸力と生產諸關係との矛盾撞着の必然的表現に外ならずとするならば、苟くも現在の資本主義的組織の存續するかぎり、これを防止するの方法は、明かにたゞの一つだもありはしない。今や世界は地球上に棲息せる一切の人間を擧げて、かゝる難關にぶつかつてゐる。文明は將に窒息せんとしてゐる。

だが、一層立ち入つてこれを觀察すれば、人間は今自ら解決しうる問題としてゐるのである。益々狂暴化せんとする戰爭を、吾々は如何にして防止すべきであり且つ防止しうるか？　吾々は如何にしてこの未曾有なる慘禍をその反對物に轉化すべきであり且つ轉化しうるか？　マルクス主義レーニン主義は、これに對して唯一の的確なる答をなすことにより、世界の人類に向つて高く向上の一路を標指しつゝあるところのものである。マルクス主義レーニン主義の旗の上にしるされてゐる理想と目的とは、資本家的社會の客觀的發展の科學的分析のうちに深く深く根をおろしてゐる。それは殘る隅なく萬物を支配してゐる辯證法的な世界の自己運動に、吾々の行動の指針を合致せしむることにより、吾々をして意識的に宇宙の化育に參加することをえせしめる。それは今の時において全人類を塗炭の苦から救ひ出す唯一の道を打開する。それゆゑにこそ、マルクス主義レーニン主義のために××ことは、現在の吾々に與へられてゐる×××の××である。そのために最も×××なる××を××することは、吾々が人類のためになしうる最上の慈悲である。『新たなる戰爭に反對しこれを防止し・人類を死滅と沒落とから救ふといふ・この偉大なる任務の前には、經濟、政治、科學、藝術の領域における人類一切の創造も、その影をひそめる』。だからこそレーニンは、一九一七年十一月三十日、その名著『國家と××』の跋において、ロシア革命の諸經驗を省略せることの理由として、『××の×××について書くよりも、これに××する方が、より愉快であり、より有益である』と言つてゐるのである。全人類を解放する斯かる事業の前には、如何なる科學的勞作もその價値を爭ふことができない。たゞに科學的勞作には止まらない。この偉

大なる事業の遂行のためには、吾々は、自分自身の生命はもちろん、千人や二千人やの同志の生命をすらも、敢て惜むに足るとはしない。何故なれば、それは實に何千萬乃至何十億といふ人々をかの無間地獄から永久に救ひ出すための唯一の道であるから。

私は生まれながらの臆病者である。幼時祖母に手をひかれて歩いてゐた頃は、人力車が來ると、一町も手前から、それを路端によけてゐた。といふことだ。七八歳の頃、柿の實を剝くために、誤つて庖丁で指先を切り、長いこと泣いたさうだが、その折の傷痕は、今もなほ指先の指紋に殘つてゐる。それが私の今日まで受けた・たつた一つの・傷であるといふほどに、私は身に切傷を受けることを、この上もなくこわがつて來た一個の臆病者だ。しかしマルクス主義の××のためにならば、今では、たとひ鋸で首を挽き切られたとて、たじろきはしない覺悟でゐる。もちろん生來の臆病者だから、いざといふ場合には、忽ち青くなつて逃げ出すに決まつてゐるが、たゞ口先だけでも斯樣なことが言へるのは、一切の領域における人類の如何なる創造も、その前には影をひそめるところの、一の×××××が今各々の前に横たはつてをり、そしてそのためには、吾々は如何なる犧牲・如何なる苦痛・をも忍ばねばならぬと、固く信じてゐるからである。

話が横道にそれた、——といふよりも、先きへ飛びすぎた。私は物語の本筋における順序に立ち歸らう。

時評

勞働黨勝たば

山川均

英國の總選擧は二旬のうちに迫る。ロンドン電報は、しきりに政戰の酣を報じてゐる。東洋におけるイギリスの現在の內閣が、謂ゆる怪文書や怪聲明によつて總選擧の形勢を有利に導びかうとしたやうに、眞物の英國の現在の內閣は、例のジノヴイエフ書翰事件の狂言が當つたゝめに、筋書通りに政權を握つた內閣であつた。しかし何時の總選擧にもジノヴイエフの書翰が落ちてゐるわけではない。『赤露の魔の手』で嚇かされて算盤を取り落とした英國の小ブルジョアも、氣を落着けて採算してみると、大資本の內閣保守黨の內閣で、これだけ儲かつたといふ數字は出て來ない。遙かの前方に見える赤露の魔の手よりももつと怖ろしい、英國資本主義の凋落に伴ふ不安は後ろに迫つて來る。そこで總選擧の形勢は、どうやら勞働黨に有利に展開してゐるらしい。

今度の總選擧について、何人も興味を持つことは、新たに擴張せられた五百萬の婦人の投票が、いづれの黨に向つて投ぜられるかといふことである。本來、保守黨と自由黨とか立脚する社會層の性質には、五年前と五年後と少しも變りはない。しかし保守自由兩黨が代表する社會層の外には、多かれ少かれどつちつかずの層がある。一九二四年一月には勞働黨を勝たせ、十ヶ月後には勞働黨を敗つて保守黨を勝たしめたこの浮動的な投票が、五百萬の婦人の新投票と共に、英國の次の政權を決定する。

この決定は、勞働黨に有利に行はれるといふのが、一般の豫想であるらしい。新聞電報は選擧の形勢は『全般的に勞働黨に有利であると報じてゐる。そこで早くも、この『社會主義政黨』の政權獲得に對して、保守自由兩黨は協同戰線をもつて當るべしといふ主張がある、これは必ずしも不可能なことではない。現にボールドキンは、歐洲大戰後の何づれの國の政府よりも貿易の發展に成功した保守黨か、大膽な踏掉を意味する『社會主義政黨』の政權か、といふ公式をもつて有權者の選擇に訴へる。ところがロイド・チョージは、保守黨が選擧に敗れても「社會主義者の黨派」に內閣を組織せしめることには、絕對に反對する。そこで苟も『社會主義政黨』の政權獲得に反對しては保守自由兩黨は協同戰線を形成する充分な根據を持つてゐるもゝ如くであるが、この協同戰線論に對しては、保守黨の側からも自由黨の側からも、斷乎とした反對がある。保守黨の欲するものは、足手纏ひになる自由黨の道連れではなくて、百パーセントの獨占的大資本の獨裁である。自由黨の方でも、一方には勞働黨に對し、他方には保守黨に對し獨占的大資本に對して、一か八かの最後の一戰を試みる積りらしい。保守の五百九十名勞働黨の五百六十名、の立候補に對し僅かに四十二名の議員を持つ凋落の自由黨が、五百名の候補を押し立てゝゐるところを見ると、この一戰に運命を決しようとしてゐるかのようである。既に存在の理由の大部分を失つた自由黨が、頽勢を挽回しようとするこの最後の努力は恐らくは自由黨の辿つてゐる道程を一變はしないで、この道程における一つの道標として殘るだらう。いづれにせよ、謂ゆる『社會主義政黨』が政權を獲得するといふ威嚇の前にも、本來のブルジョア兩政黨がその力を結合することが出來ないといふ事實は、一つには、ブルジョア陣營の弱點を示してゐるが、一つには、勞働黨內閣の脅威が、それほど恐しくない脅威だといふことをも表はしてゐる。英國の政局が、自由黨の存在によつて謂ゆる『不安定に』なつてゐることは爭はれぬ。總選擧の結果、もし自由黨が多少ともその勢力を盛り返へすとしたならば、この『不安定』の要素がそれだけ增加する。ロイド・チョーヂは、本質的には同じではないがその外觀は、東洋のイギリスに於けるわが床次氏の役割を演じてゐる。そこで總選擧の結果、假りに勞働黨內閣が現はれたなら、イギリスの床次氏がどのような態度を取るかは興味がある。

これに對する反對勢力も二つに分れてゐる。一九二四年の總選擧では、共產黨は原則として勞働黨の候補者を支持した。當時、勞働黨に對する英國共產黨の方針は自黨に向つて勞働黨の門戶を開放せしめることであつた。言葉を換へて云へば、共產黨は勞働黨において、英國の組織された勞働者の壓倒的な多數との協同戰線を實現しようとして居つた。今日は、この形勢は一變した。昨年二月、共產黨インタナショナルは、英國の政治上經濟上の形勢の變化に基づき、共產黨の新方針を決定したが、この新見解は、英國勞働黨が決定的にブルジョア第三黨に變質したものと認め、從つて勞働黨に對する英國共產黨の方針が根

時評

勞働黨勝たば

山川均

英國の總選擧は二旬のうちに迫る。ロンドン電報は、しきりに政戰の酣を報じてゐる。東洋におけるイギリスの現在の內閣が、謂ゆる怪文書や怪聲明によつて總選擧の形勢を有利に導びかうとしたやうに、眞物の英國の現在の內閣は、例のジノヴイエフ書翰事件の狂言が當つたゝめに、筋書通りに政權を握つた內閣であつた。しかし何時の總選擧にもジノヴイエフの書翰が落ちてゐるわけではない。『赤露の魔の手』で嚇かされて算盤を取り落とした英國の小ブルジョアも、氣を落着けて採算してみると、大資本の內閣保守黨の內閣で、これだけ儲かつたといふ數字は出て來ない。遙かの前方に見える赤露の魔の手よりももつと怖ろしい、英國資本主義の凋落に伴ふ不安は後ろに迫つて來る。そこで總選擧の形勢は、どうやら勞働黨に有利に展開してゐるらしい。

今度の總選擧について、何人も興味を持つことは、新たに擴張せられた五百萬の婦人の投票が、いづれの黨に向つて投ぜられるかといふことである。本來、保守黨と自由黨とか立脚する社會層の性質には、五年前と五年後と少しも變りはない。しかし保守自由兩黨が代表する社會層の外には、多かれ少かれどつちつかずの層がある。一九二四年一月には勞働黨を勝たせ、十ケ月後には勞働黨を敗つて保守黨を勝たしめたこの浮動的な投票が、五百萬の婦人の新投票と共に、英國の次の政權を決定する。

この決定は、勞働黨に有利に行はれるといふのが、一般の豫想であるらしい。新聞電報は選擧の形勢は『全般的に勞働黨に有利であると報じてゐる。そこで早くも、この『社會主義政黨』の政權獲得に對して、保守自由兩黨は協同戰線をもつて當るべしといふ主張がある、これは必ずしも不可能なことではない。現にボールドキンは、歐洲大戰後の何づれの國の政府よりも貿易の發展に成功した保守黨か、大膽な賭博を意味する『社會主義政黨』の政權か、といふ公式をもつて有權者の選擇に訴へる。ところがロイド・ヂョージは、保守黨が選擧に敗れても『社會主義者の黨派』に內閣を組織せしめることには、絕對に反對する。そこで苟も『社會主義政黨』の政權獲得に反對しては保守自由兩黨は協同戰線を形成する充分な根據を持つてゐるもゝ如くであるが、この協同戰線論に對しては、保守黨の側からも自由黨の側からも、斷乎とした反對がある。保守黨の欲するものは、足手纏ひになる自由黨の道連れではなくて、百パーセントの獨占的大資本の獨裁である。自由黨の方でも、一方には勞働黨に對し、他方には保守黨に對し獨占的大資本に對して、一か八かの最後の一戰を試みる積りらしい。保守の五百九十名勞働黨の五百六十名、の立候補に對し僅かに四十二名の議員を持つ凋落の自由黨が、五百名の候補を押し立てゝゐるところを見ると、この一戰に運命を決しようとしてゐるかのようである。既に存在の理由の大部分を失つた自由黨が、頹勢を挽回しようとするこの最後の努力は恐らくは自由黨の辿つてゐる道程を一變はしないで、この道程における一つの道標として殘るだらう。いづれにせよ、謂ゆる『社會主義政黨』が政權を獲得するといふ威嚇の前にも、本來のブルジョア兩政黨がその力を結合することが出來ないといふ事實は、一つには、ブルジョア陣營の弱點を示してゐるが、一つには、勞働黨內閣の脅威が、それほど恐しくない脅威だといふことをも表はしてゐる。英國の政局が、自由黨の存在によつて謂ゆる『不安定に』なつてゐることは爭はれぬ。總選擧の結果、もし自由黨が多少ともその勢力を盛り返へすとしたならば、この『不安定』の要素がそれだけ增加する。ロイド・ヂョーヂは、本質的には同じではないがその外觀は、東洋のイギリスに於けるわが床次氏の役割を演じてゐる。そこで總選擧の結果、假りに勞働黨內閣が現はれたなら、イギリスの床次氏がどのような態度を取るかは興味がある。

これに對する反對勢力も二つに分れてゐる。一九二四年の總選擧では、共產黨は原則として勞働黨の候補者を支持した。當時、勞働黨に對する英國共產黨の方針は自黨に向つて勞働黨の門戶を開放せしめることであつた。言葉を換へて云へば、共產黨は勞働黨において、英國の組織された勞働者の壓倒的な多數との協同戰線を實現しようとして居つた。今日は、この形勢は一變した。昨年二月、共產黨インタナショナルは、英國の政治上經濟上の形勢の變化に基づき、共產黨の新方針を決定したが、この新見解は、英國勞働黨が決定的にブルジョア第三黨に變質したものと認め、從つて勞働黨に對する英國共產黨の方針が根

本的に一變された。ブルジョア第三黨に對して、共產黨が加盟の資格を要求する理由も必要もないことは、云ふまでもない。考へ得られることは、唯だ對立と抗爭である。この新方針は、今度の總選擧にも現はれる。そこで今度の總選擧では、英國共產黨は保守黨自由黨に對すると同一な立場においてブルジョア第三黨に對立し、完全に獨自の戰ひをすることになる。一九二四年の選擧戰では、大多數の地方では、共產黨は勞働黨候補を助け、勞働黨が政權を獲得するために、云はゞ椽の下の力もちをした。共產黨の實勢力は、勞働黨のそれと混ざり合つてゐた。今度の總選擧では、選擧戰における英國共產黨の有りのまゝなる實力がそのまゝ現はれる。こゝに非常な興味がある。

そこで、この總選擧に勞働黨が勝てば何うなるか？保守黨は總選擧に臨んで、主として過去の功績を數へてゐる。『吾々が有權者に求むるところは、保守黨をして、成功裡に著手せる事實を更に繼續實施せしめ之を完成せしむる機會を與へられん事である。』これに反して、三つの黨派のうちで、最も多くの政策を積極的に掲げてゐるものは、何と云つても勞働黨である。勿論、勞働黨の掲げてゐる政策が、勞働黨內閣によつてどれだけ實現せられるかは別問題であつて、これは例へば總選擧の結果が、勞働黨に絕對多數を與へるか、それとも單に第一黨たる地位を與へるかによつても、違つてくる。少なくともロイド・ヂョーヂと自由黨とは、この第二の場合を期待してゐるらしい。眞物のイギリスにも、キャスチングヴォートの味の忘れられぬ人間がもう一人ゐる譯だ！

英國勞働黨は、よしブルジョア第三黨に過ぎないとしても、このブルジョア第三黨の存在は、床次氏の一族郎黨の第三黨とは、全く異つた意義を持つてゐる。それは財閥と財閥との確執ブルジョア利權團と利權團との利害の衝突を代表するものではなくて、大資本の階級に對して一定の異つた社會層を代表する。勞働黨が純然たるブルジョア黨であるとしたならば、それは唯だ純然たる小ブルジョア黨でなければならぬ。小ブルジョアジーは大ブルジョアジーに率ゐられることが出來る。けれどもこれを率ゐることは出來ぬ。特に帝國主義的資本主義の時代において小ブルジョアの政策が獨占的帝國主義的大資本の所要を代表する可能は少しもない。そこで政權が、保守黨の手から勞働黨の手に移るといふことには、よし勞働黨が純然たるブルジョア第三黨以外の何ものでもないにして、尙ほかつ、政友會內閣から民政黨內閣への政變のうちに含まれてゐない或るものが含まれてゐる。即ち第一には、眞實の意味でのブルジョア政治勢力の不安定が含まれてゐる。第二には、政權がそれだけ左の方に推移することを意味してゐる。勞働黨は政府組織の改造を約束し、失業問題の解決を約束し、住宅問題の解決を約束し、『貧乏の撲滅』を約束する。これらの問題は勞働黨の手によつては例へ解決することは出來ないにせよ（勿論解決することは出來ないが）或る程度の改善的な施設を豫期することが出來る。國際政局の上にも、相當の變化が起る。たとへば英露國交の恢復は、勞

農ロシアの國際的地位を一そう强固にする。國内的には、保守黨によつて制定せられた反勞働組合法の撤廢の如きも、豫期することが出來る。さらに重要なことは、勞働黨と共産黨との指導の爭ひが、勢ひ前景に押出されて來るに違ひない。

しかしながら勞働黨の政策がどの程度に實現せられるかは、何よりも先づ第一に勞働黨の勝利の度合にも懸つてゐる。そして勞働黨がどの程度に勝利を得るかは、何人も豫言することが出來ぬ。

けれども何人も豫言して過たぬことは、よし勞働黨がこの總選擧に最大の勝利を得ようとも、イギリ資本主義帝國に何らの根本的な、、も起らぬといふことである。一九二四年には、勞働黨内閣の出現を見て、資本主義から社會主義社會に推移するもう一つの直接の通路が歴史の上に開かれたものとして、囃歡した人々が(少くとも日本には)あつた!

しかしこれは固より、保守黨が敗れて勞働黨が勝つことに——即ち英國の政權が左の方向に推移することに——重大な意義のあることに何らの妨げともならぬ。

魚臭ふんぷん

近頃の新聞紙を賑やかしてゐる問題の中で、その登場人物(なほ其上に樂屋の俳優)においても、その筋書においても、例のカムチヤツカ漁區を横取り問題ほどに傑出した悲喜劇はないと云つてよい。

尤も問題は簡單明瞭である。從來日魯漁業會社が六十四萬ルーブルで租借してゐた漁區を、出し拔けに他の資本家企業家の一團が現はれて三百萬ルーブルの入札をしたゝめに、その方に落札したといふだけのことである。日魯漁業の漁區を横取りしたと云へばしたとも云へようが、かう云ふ横取りは、資本主義の常則ではないか。六十四萬ルーブルと三百萬ルーブルとの差が二百三十六萬ルーブルである以上は、三百萬ルーブルの方に落札するのに不思議はないらしい。日魯側では頻りに不當な租借料だと云つてゐる。しかし肝腎の三百萬ルーブル拂はうと云ふ當人が、高くはないと云へばそれまでゞはないか。現に横取り側の聲明書には『漁獲高六十萬石を生産する目當てがあるから此代金は極く安く評價しても約一千三百萬圓……だから其の一割未滿位を税金として納付する事は國際間の商業道德でもあり、且つ當業者に取つても斷じて苦痛ではありません。況んや將來……三千萬圓位のものは收め得る確信があるに於ておや』とある。『競賣といふのは商賣上の自由競爭であるから高い者に落ちるのは毫も不思議がない筈であります』なるほどその通りだ。これがどうして世の中の大問題となり、殊に政界の大問題となるかといふことの方が、遙かに不思議である。

かうして横取り派は『國際商業道德』と『自由競爭』の名に於いて行動する。横取られ派はどうかと見ると、これは又、、、と社會の名に於いて行動する。租借料の差額の外に間接の損害を加へると、一ケ年の損失約五百萬圓となる。この損害が、日魯漁業會社の損失でない

ことは云ふまでもない。この、、、入札者は、一ヶ年五百萬圓づゝ、、を、、、に賣るものだ。横取られ派は慷慨悲憤する。何といふ虧もしい熱烈な愛國心だらう。日魯漁業會社は愛國心の罐詰をこしらへて三割の配當をする會社のやうである。それだけではない。横取り派の攪亂のために、萬一本年の出漁が不可能となつたなら、それこそ多數の從業者が失業する。これは一大社會問題だ。この一大社會問題に對する唯一の解決の方法は、横取られ派によれば、云ふまでもなく、問題の漁區を——それも、、の、によつて——日魯漁業會社の手に取戻すことに外ならぬ。こゝに慈悲深い、只管に漁業勞働者の生活を心配する模範的な傭主がある。

この範圍においては、この筋書は慥かに喜劇である。けれどもこの出來事が財閥間の競爭、利權團の爭奪戰、株式市場の陰謀、これらのものが現代の、、と、、とに、切り離すことの出來ないように織り込まれてゐること、そしてこれらの利權と利害とが、、、そのものゝ間にさへも、從横無盡の錯綜交叉をもつて代表せられてゐること——すべてこれらの醜惡な、、、、、、の腹綿を、この一小事件が遺憾なく、壓縮した形で暴してゐる點においては、この上もない悲劇と云はざるを得ぬ。

無産政黨の地方自治體進出

市町村選擧の總結果は尙に未定であるが、四月末日までの調査によると、社會民衆黨の當選者九十五名、日本大衆黨の當選者九十六名、政權同盟の當選者約三十名、外に福岡縣下における大衆黨の當選見込み五十三名と傳へられてゐる。（五月一日東京朝日新聞）

この結果は一般に、地方自治體への無産政黨の異常な進出と認められてゐる。ことに八幡市に於ける選擧の結果は、特殊な注目を惹いた。これは第一には、八幡市が重要な工業地であつて、勞働者の密集する點において、全國的にも代表的な都市であり、これらの勞働者の投票權が如何に行使せられるかは、何人も知らんとするところであつたばかりでなく、政友民政兩黨によつて殆んど獨占せられてゐた八幡市會が、無産黨の進出を防止する明白な意識と計畫の下に、昨年八月突如として全市を六區に分つ小選擧區制を實施したことは、尙ほ人々の記憶に新たであつたからである。かように政權爭奪の內輪喧嘩によつて、政黨の階級的性質を曖昧ならしめてゐるブルジョア政黨が新興勢力の脅威の前には、完全に單一な勢力に轉化するといふことによつて政黨の階級性を證據立てた最も代表的な事實は、吾々はこれを八幡市に見ることが出來た。そこで八幡市會の選擧は、すべての人々の注意を惹くに足るものであつた。

人口十三萬の八幡市を六區に分け、しかもその分け方は、勞働者の勢力を分散せしめる上に、極めて巧妙に出來てゐた。北九州における選擧運動の壓迫は、全國にその比類を見ぬものだつた。政友民政兩黨の協同戰線は『演說會で多少づゝに政黨主張を振りまくものもあつた

が、いづれもその結論に無産政黨を選出するなといふことに一致してゐた』と報道せられてゐるやうに、選擧運動を通じて完全に維持せられた。そして選擧の結果は、政民兩黨の二十二名に對して、無産政黨側は十四名の當選者を出した。これは慥かに『異常の進出』として報道せられるに値ひする。

八幡市において地方的に起つたことは、多くの全國的な暗示を含んでゐる。現に政友會と床次黨とは、議會選擧における小選擧區制の實現を夢みてゐる。獨り政友會と床次黨ばかりでなく、すべてのブルジョア政黨が、新興勢力に對して明白な協同戰線を張ることによつて、大衆をして政治勢力の分野を一そう鮮明に見せしめる日が遠からず來るに違ひない。

地方自治體への『進出』は、無産政黨運動の上に、色々な新問題を提起する。それと同時に無産政黨そのものゝ生長と發達の上にも、恐らく重要な影響を與へるものと思はれる。無産政黨の必要は、實際的には全國的な政治運動においてよりも、先づ地方的な政治運動において一そう痛切に感ぜられた。農民組合が、無産政黨樹立の運動に重要な役割をしたのも、一つにはその爲めであつた。ところが現在では、いづれの無産政黨も中央における首頭部の活動に比して、全國的な實際の組織が伴はぬ觀がある。地方選擧における成功の結果は、無産政黨の生長する幾多の小中心が全國的に確立せられることゝなり、これらの小中心に集積せられた勢力をさらに全國的な組織に鍛冶することが必要となる。地方支部の生長發達と共に、緊密な組織と有力な統制との必要は一そう增大する。

それと同時に、地方政治は全國的政治よりも遙かに實際的、ないしは實務的である。これはやゝもすれば眼前脚下の利害から向うにあるものを無産政黨の眼から遮斷する。地方選擧における成功の一歩は、無産政黨の墮落の一歩ともなることが出來る。

何者かの名に於いて

世の中には、、、、、、、、、、、。『人民の名に於いて』が國家最大の問題となつたことは、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。

『人民の名に於いて』は、いま尚ほ内閣に死活の大問題として、樞密院の入口で引掛つてゐる。最近には、これに關する著書さへも現はれた。『人民の名に於いて』は愈々以つて嚴肅の度を增しつゝある。この眞面目な顏つきが、その眼に笑止しく映じた人の一人には、アドヴァタイザー紙の主筆バイヤス氏があるらしい。

バイヤス氏は、よく日本を知る人である。『私は數年日本に滯在し日本の國柄を辨へてゐるから、この句によつてまき起こされた政治的波瀾の意味を了解することが出來る。しかし日本を知らない世界一般の人々に對しては、如何に説明してもこれを了解させることは困難である。』(四月二十五日、東京日日新聞、バイヤス氏の寄書)。これがバイヤ

ス氏の詐らざる所感である。

『人民の名に於いて』といふ言葉は、パイヤス氏によれば、たゞ通り一遍の『修飾的文句』である。パイヤス氏は、『人民の名に於いて』といふ言葉が、肝腎の英語國民の間では、もと〱何ら重要な意義を持たぬといふことを教へることによつて、この文句にこだわることの愚かをさとしてゐる。しかし『人民の名に於いて』といふ言葉が、、『、、』は、愈々以つて『世界一般の人々に對しては、如何に說明してもこれを了解させることは困難』な國柄であるといふことにもなつて來る。

『人民の名に於いて』といふ文句が、通り一遍の挨拶であり、口癖の一種であり、單なる修飾的文句であり、ないしは虛飾的文句に過ぎないことは、少しも疑ひがない。、、、、、、、、、、、、、、、、、『人民の名に於いて』、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。けれども間違ひにも、『資本家の名に於いて』とか、『銀行家の名に於いて』とかいふ文句が口癖とはならずに、『人民の名に於いて』が口癖となり、人々が『利權國の名に於いて』といふ文句によつて修飾しようとしないで、『人民の名に於いて』その行動を修飾しようとすることには、充分な意義がある。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、『人民の名に於いて』修飾することを知らない政治家も、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。、、、、、『、、』、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。（五月九日）

無産者運動の諸進路

借家爭議と其戰術

松谷與二郎

一

殖えるは殖えるは實に借家爭議が殖える。此頃の裁判所では借家爭議が民事々件の大半を占めてゐる。精確な統計は今手許にないから判然した事は分らぬが、此處四五年前と今日とでは恐らく借家爭議は二倍以上に增加して、居るであらう？　何故に近時かく借家爭議が增加するのであらうか？　それには色々の原因もあらうが、第一は世の中が極端に不景氣となつた爲めだ。第二は復興に基く區劃整理に依る借家人と家主の爭だ。第三に家賃が高いと云ふ此の三つの原因が近時の借家爭議の最大原因ではなからうか？

處で世の中が不景氣で家賃が拂へない場合と復興に基く區劃整理に依る爭議とはその原因が止めば爭議も自然止まう。併しながら家賃の高いのは其の家賃を引下げない以上は絕對に借家爭議は止まない。否前の二原因も家賃さへ安ければ、そう大した問題とならず解決するであらう。結局借家爭議の原因は此の家賃の高いのにあると言はなければならぬ。

果して然らば吾國の家賃は一體どれ位の標準であらうか？　田舍の家賃は知らぬが、都會就中東京の家賃は大體其月收の三分の一乃至四分の一と云ふのが標準となつてゐる。例へば百圓の月收あるものは大概二十五圓から三十圓見當の家に住つてゐる。又商店などになると其の收入の半額位も家賃に取られてゐる。之を外國都市に比較すると、米國紐育の月收の四十分の一、英國倫敦の三十分の一、獨逸伯林の二十八分の一等で、吾國都市はその七八倍乃至十倍の高い家賃を支拂つてゐることになる。何れにせよ吾國は家賃に於ては世界一高い國と云つて差支へない。

何故吾國市民はそんな高い家賃を支拂はねばならないのか？　英米獨佛の建築樣式と吾國とは大分異つてゐ、從つて外國の例を採つて直ちに吾國に適用することが出來ない事情

もあらうが、それにしても餘りに高過ぎはしないか。普通我國の借家は大抵五年たてば建築元金が回收され、之を商賣とすればこれ程堅い甘い商賣が他にあらうか？　此處に借家爭議の原因が潜んでゐる。家主の甘い儲けは借家人の苦痛とする處である以上、この儲けを平衡して家賃を引下げるならば今日の借家爭議の大半は消滅するであらう。

以上は只單に家賃を標準としての所論で、これ以外に敷金權利金と云ふ名義で家主は多額の金を貪つてゐる。これは前述の家賃の計算以外で、此の敷金は大抵半年分を普通とし、それに表通りとなると大抵の家に千圓二千圓の權利金なるものが附いてゐる。無法な家主になると建築費の半額以上もの權利金敷金を取つてゐる。是は日本橋の人形町にあつた實例だが、其家は二十年前から借りて居り、震災前までは家賃四十圓敷金二百圓であつたが、震災後はバラックで家賃百圓敷金五百圓となつた。それが今度の復興區整の結果改築され、家賃二百圓敷金千圓權利金二千圓と云ふ法外な値となつた。併もその建築費は全部で四千五百圓で、家主は復興局から移轉料として千八百圓取つて居り、結局敷金權利金を合すると三百圓の御釣りが來る勘定になる。それでも毎月二百圓を借家人から家賃と云ふ名義で搾取するのだから耐らない。餘りの無法に借家人が家主に掛合ふと、家主は冷嘲いて『それで厭なら御止しなさい。他に幾らでも借手がある』と云ふ言葉だ。借家人も其處に先代から住んで居り商賣上どうしても其處に住なければならぬので、とう〳〵泣寢入りとなり家賃を少し負けさせて住むことゝなつた。これはホンの一例に過ぎないが家主の因業（いんごう）はそれに止まらない。借家人が家主に朝夕の挨拶をしないとか、差配に盆暮の附屆をしないとか、ヤレ小供が多いの少ないの、日本人だと思つて貸したら朝鮮人だつたから出て行けのと言ふ理不盡なのすらある。そうかと思へば主人が半年から病氣で寢てゐるのに家賃の催促をしロぎたなく言罵り、さては暴力團を雇つて來て病人を表へ抛り出した上家を釘附けにする家主もある。こんな實例を擧げてゐたら改造一冊ではとても書き切れない程澤山ある。

一體こんなにされても借家人には之に對抗する權利がないのであらうか。然り吾國現在の法律では借家人の權利なるものは殆んど認められて居ない。家賃を一ヶ月滯納しても明渡を要求せられ、敷金を如何に多く納めてあつても、權利金を如何に澤山取られて居ても、只家賃を一ヶ月滯納したと云ふ事實だけで家屋を明渡さなければならぬ規定になつてゐる。又家賃を完全に納付して居ても家主の都合で明渡せと言はれゝば六ヶ月の豫定期間を置いて其家は明渡さなければならない。まるで借家人は船にでも乘つてゐる樣で安心して住居することが出來ないのである。こんな狀況の下に東京市民の九十八パーセント即ち九割八歩迄は皆借家住ひをしてゐる、自分の家に住居してゐる者は百人中二人に過ぎず、他の九十八人は何時家主の氣嫌を損じて出て行けを喰はされるか分らない。これでどうして市民は其住居に安住することが出來よう？

第一に此の法律を改正しなければ國民の生活は安定しないのである。

　米國のフウバアは大統領當選の即夜多數の新聞記者の包圍を受けた時卒直に其の施政の一端を漏して『大統領としての自分の抱負は只米國々民をして平和の家庭に安住せしむるにあるのみ』と言つた。吾國には中々立派な政治家が多い。曰く田中總理大臣、曰く濱口民政黨總裁、曰く床次新黨總裁等々、此の人達は口を開けば、ヤレ對支外交がどうの、不戰條約がどうのと言つて世界の平和を高調し、世界を一人で背負つて立つてゐる樣なことを言つてゐる。併しながら誰一人として國民の生活や家庭の平和に對して論及してゐる者がない。吾々國民は對支外交や世界の平和は少々位曲つてゐてもよい、只國民として生活の保障が出來、平和な家庭に安住することが出來たら滿足である。對支外交や不戰條約や世界の平和は二の次である。

二

全國借家人同盟は此の趣旨からして出來てゐる。

一、疲れたる者の生活を保障せよ！

二、住居の安定を保證せよ！

と云ふのが借家人同盟の叫びである。然るに近時借家人同盟に對する當局官憲の態度は只管彈壓の方針を探つてゐる。借家人同盟の演說會に對しては注意中止解散が附物である。文句を言ふ者は、、、、、され、演說會の、、、、、、、される。が借家人同盟は吾國體を變革し或は私有財產を否定しようと云ふのではない。住居權の確立と惡德家主の糺彈を高唱してゐるに過ぎない。にも拘らず此の彈壓振りとは一體何事であらう。

　警察官憲の彈壓の外に、嚴正公平なるべき裁判官の態度に對しても私は、、を持つてゐる。、、、、、は借家人にあると大抵の場合裁判官は、、、、、、、、、がある。十日許り前の東京區裁判所で次の樣な實例があつた。震災直後千圓を自分で負擔し從來の家主の許可を受けて借家人がバラックを建て、建築不足金七百圓を家主に借りたに對し、家主は借家人の建てた家を自己の名義にした上七百圓の利子二割地代稅金その他二十七圓を家賃名義で支拂はしめる契約をした。處が昨今の不景氣と子供の病氣で其の二十七圓が七八ヶ月滯るに至つた。すると家主は辯護士を賴んで家賃滯納を理由に家屋明渡を要求した。借家人は辯護士も賴まず自身出廷してクド〳〵と其の理由を裁判官に訴へたが、裁判官から家を家主名義とし家賃として二十七圓宛支拂つてゐた以上明渡を要求せられても仕方があるまい。他に言ふことがないかと問ひ、結審せんとしたが家主代理辯護士の申出に基き二ヶ月間だけ明渡を猶豫することで和解解決を見た。私はそれを傍聽席から見てゐてハラ〳〵した。一體其の家屋は何人の所有であらうか？　假りに家主の所有だとしても住居人の出した千圓は一體どうなつたのであらうか？　二十七圓を七八ヶ月滯納したために千圓を棒に振らなければならぬ、、、、、であらうか？　其の日の法廷が如何

繁忙であつたとしても、今少し判事が借家爭議に同情と理解とを持つてゐたならば何とか外に裁判の仕樣もあつたであらう。無論私は借家人の全部を善人と見、家主差配が凡て因業であると言ふのではない。借家人にも隨分圖々しい惡いのもある。がそれは千人に一人、萬人に一人で、誠に九牛の一毛の例外に過ぎない。にも拘らず當局官憲はこの例外を恰も全般の如く考へ凡ゆる、、を敢へてし、別けてそれに借家人同盟の者でも關與しようものなら尙更感情を、、、、、、、、、に終始するのである。

三

然らば此の不合理不條理を如何にして匡救すべきか？　私の理想論からするならば、第一に凡ての住宅は國家の管理に移し、住み心地よいものに改造し國民をして住居の安定を得せしめるにある。がそれは吾國現時の財政狀態と社會事情がこれを許さない。次善の策は、現在の獨逸の如く市町村をして現在の借家を調査登錄せしめ、其坪數、間數、家の新舊、近隣の狀況等を參酌し一定の借家料を定めて賃貸せしめることである。さすれば家主が借家人の足許をつけ込んで高い家賃を取る慮れも無く、一方家賃を滯納する借家人には市町村の公力で其の立退を强要する制度にすれば借家人も助かり家主も助かるのである。

今一つの方法は現在の極端に高い家屋稅及びその附加稅を免除することである。日本大衆黨東京府聯合會の調査に依ると南葛二十ケ町村稅收入豫算總計二、三七九、五四〇圓中家屋稅收入は一、四一一、九七九圓で稅收入の過半を占めてゐる。これを地租收入に比較して見るに、龜戶町に於ては地租收入四千二百二圓に對し家屋稅收入二十萬八千百二十圓で地租の約四十倍、吾嬬町の地租收入は家屋稅收入の三十分の一たる八千四百八十九圓に過ぎない。こんな狀況で少くとも現在の府縣市町村は土地からは極めて少額の稅金を取立てるに反し、家からは其三四十倍の稅金を取立てて居る。而して此家屋稅が直ちに借家人に轉嫁し重い負擔を借家人が背負つてゐることになるのである。此處にも、、者が如何に無產階級に對し理不盡の搾取を敢てして居るかが明瞭である。處で私はこの不合理を改め府縣市町村の家屋稅の撤廢を要求し其撤廢に依る負擔を家賃より輕減せしめたならば現在の家賃の約二割は裕に値下せらるるのである。而して此の代り財源としては官數土地から之を取立てればよいのである（此點は今少し詳論したいが後日に讓る）

四

然らば全國借家人は如何なる手段により現在の不合理なる家賃を値下せしめ如何なる方法に依り借家人の住居權の確立を圖るべきか。

そは他なし全國借家人は一致團結して借家人同盟の旗の下に集り大衆の力を以て其法律の改正を議會に迫ると同時に或は街頭に或は法廷に、死力を盡して之れが權利の獲得擁護に努むべきである。總て權利は他人の思慮寄

與に俟つべきものでなく自己の力に依つて獲得すべきである。天帝は吾等を地上に産みたる以上、吾等は地上に生きるの權利がある、此權利は天帝より得たる吾等の當然の權利である。

吾等の生活を奪ひ吾等の安住を妨ぐる者があつたならそれは吾々の、、であり、天帝の反逆者である、吾々は此天帝より命ぜられたる當然の權利に基き吾々の、、たる反逆者に對し徹底的に之を糺彈すべきである。（終り）

最近農民組合進出の種々相

杉山元治郎

昨春以來日本に於ける農民組合の運動は暴風の吹き荒狂ふ眞唯中に戰鬪を續けてゐるので、一面から見れば反動退嬰期に入つたと云ふても良い。地主資本家の、、であり、、、其者の様な田中內閣は彈壓に次ぐに彈壓を以つてし、右翼組合たると左翼組合たるの見境なく、農民組合に關係せる小作人とし云へば僅かばかりの小作料輕減のために地主の宅を訪問しても、、、、に引掛けられ、何でもなきビラを撒布したと云ふては、、、、、、、、、、、、に問はれ、小作料を少しく滯納すれば何等の容赦なく立毛の差押、土地の立入禁止等の最後的手段を以つて臨むに至つたのである。而して官權は口でこそ『穩健なる農民運動は何等妨害するものでない。寧ろ是を大に助長する様に勉むるものである』などと稱へてゐるが、、、、、、、、あらゆる方法を以つて前述の如く合法運動すらも、、せんとしてゐるのである。だから所謂穩健なる農民運動も、、、、、、、し、合法的運動も漸次姿を消して、、、、、、、にならんとしつゝあるのである。去月大阪市天王寺公會堂に開かれた全國農民組合第二回大會の樣子を親しく目擊した人は、合同以來著しく、、、、の濃厚になつたことに一驚を喫したであらう。是は正に當局者が角を矯めんとして牛を殺したもので、農民組合の、、、、、は自ら蒔いたものを自ら刈るの運命に逢着してゐるのである。兎にも角にも全國的に農民組合は、、、し、、、、、、、、、になりつゝあることは注目すべき現象である。

次に最近農民組合の全國的進出として著しいものは各種の政治行動であらう。農民組合は前述の如く單なる經濟的行動のみを以つて終始することが出來ない。經濟的行動の一歩後ろに政治的行動が控へてゐるのである。だから農民組合は創立の當始より政治運動を肯定し、全國的單一無産政黨の設立を提唱したるのみならず是が實現に一意邁進し、殊に最近の反動內閣の彈壓振りと普通選擧法の施行とは農民をして政治的進出を著しく促したの

である。

此の前に於ける町村會議員の選擧に當つても多少の農民組合選出議員は無きにしもあらずであるが、折角選出したる多くの議員は羽織を着、袴を付けてブルジョア議員と肩を並べてゐる内に、何時しか木乃伊取は木乃伊になり、議員の教養と階級意識の不足に苦杯を嘗めさせられたのである。此の苦しい經驗に徴し今度の町村會議員選擧に當つては、平生より日常闘爭を通じて訓練せるのみならず代表者選出を嚴重にし、斯る悔を再びせぬ樣に勉めたのである。恐らく今後に於て奮闘見るべきものがあるであらう。其と共に今度の市町村會議員選擧に當り農民組合員の政治的進出の見るべきものがある。未だ各地の正確なる情報に接しないが、今日までの報告を綜合して見るに、多少とも農民組合員の存在する所では必ず候補者を立てゝ戰ひ、必ず一二名の當選者を獲得し大阪府下に於ても今日までに最早二十數名を選出してゐるのである。其内には議員の過半數を占める町村も幾多出來るであらう。例へば群馬縣新田郡強戸村の如く過半數を全國農民組合員で占め村長は勿論農會長より産業組合長に至るまであらゆる名譽職をも全部小作人が占領し、農民組合唯一の村として今日まで知られてゐるが、今度の選擧の結果山梨縣北巨摩郡鹽崎村の如きも、十二名の議員中全日本農民組合員が七名の絶對多數を獲得し、同組合の常任理事保坂富三郎氏が村長に當選したのである。第二の強戸村たることも近き將來であらう。また大阪府下に於ても彼の竹槍事件で有名なる北河内郡山田村の如きも十二名中五名當選し、全國農民組合員の三木喜三郎氏が助役に當選し事實上村の實權を掌握してゐるのである。

斯の如く今や農民組合の市町村會選擧戰を通して報告を見るに、從前よりも數段の好成績を示して時代の推移を如實に物語り、巨人の如き確乎たる足取りを以つて無産黨議員の進出と躍歩とを現はしてゐるのである。

第三に最近農民組合内に著しき進出と見るべきものは協同組合の仕事である。一時協同組合は階級意識を鈍らすから不可であると稱へられたこともあつたが、全國農民組合第二回大會に於ては『協同組合實現の方法如何』が議題に上ぼされ、熱心なる討議の結果いろ〳〵なる調査研究が發表せられたのである。彼是思ひ合せて感慨無量なるものがある。

私は雜誌「協同組合」一月號に「農民運動と協同組合」に就いて述べた内、『農民運動の行詰りと共に協同組合運動熱は再興して來た』と云ふた記事に對し、雜誌「マルクス主義」で某氏は運動は闘爭によりて益々發展するのだ、其樣なことはダラ幹の云ふことだと仰せになつたが私は其を拒むものでない、其も眞理の一面であるが、併し階級意識の薄い農民達が此の反動期を前にして運動が不活潑になり、或は脫退消滅してゐることも事實である、是は運動の正道から正しいこと善いことでないが事實であるから仕方がないのである。又農民運動が前衛運動でなく、少なくとも經濟的大衆運動であるならば是等の人々をも共に引き連れて行き、教養し、意識化せし

むることは我等のなすべき務めであるまいか、私は此處で議論するのでない、農民組合により利益を得た人々は協同組合により又利益を得んとしてゐることも事實である。

　協同組合を初めるには單なる利益ばかりでない。其の外にいろ〳〵の原因もあらう。希望も計劃もあらう。其は何れにしても良い。農民組合の陣營內に協同組合熱の勃興して來たことは事實である。設立に關する質問は日に多きを加へるのみならず、各所に於て徐々に設立せらるゝのである。例へば既に堂々たる成績を收めてゐる強戶村の產業組合を初めとして、京都府綴喜郡草內村の協同組合の如き一萬餘圓の資產を擁し、肥料、日常品の共同購入を初めとして農機具の共同使用等をなしてゐるのである。又大阪府聯合會の一部に設立したる農村消費組合の如き醬油及び酢の取次販賣を行ふてゐるが非常なる發展である。兵庫縣加古郡伊保村中島支部も早くより日常品の共同購入幷に分配をなし、或は電力による共同作業等をも行ふてゐるのである。佐賀縣鳥栖町にある、佐賀縣聯合會、宮崎縣延岡に於ける宮崎縣聯合會等も着々協同組合を進めてゐるのである。其の他中部農民組合の本部に於ても研究に研究を重ね滿を引いて今や矢を放たん許りである、全日本農民組合の山梨縣聯合會では已に肥料の共同購入をなせる支部も二三あり、藁細工、鷄卵等の生產物をも共同販賣せんとするものもあるのである。

　斯の如く今や農民組合內に已に設置したるもの、新らしく設置せられたるもの、今正に設置せんとするもの等非常なる勢を以つて協同組合運動が擡頭しつゝあることは著しい事柄である。（四、四、三〇）

最近の水平運動

深川武

一

吾々のこゝ二、三年來最大の關心事にして且つ重大なる惱みは「如何にして水平運動を挽回すべきか！」であつた。今日も依然惱みは惱みとして殘されてゐるが、從つて「水平運動は斯くして挽回せり矣!!」の報告文を草し得ないのは殘念だが、事實は如何とも爲し難く、たゞ卒直に水平運動の現勢を述べ、挽回の方策を小論して大方の批判を仰ぐことにした。しかし、筆者等は尙微笑を湛えつゝ此の一文を草するだけの餘裕を持つてゐることを附記して置く。

二

一體、吾國の社會運動はどこかしら神經質

な一面が多過ぎる。何の運動も仲間訌めに精力の幾分を、或は大分を費してゐるやうに思はれる。到る處に仲間訌めがある。例を「改造」にみても、毎號殆んどやつつけ合つてゐる。これは眞理を探ね、主義を奉ずる以上止むを得ないことだとするも、今少しやりやうがありさうなものと思ふ。大衆は往年のアナボル鬪爭を漸やく忘れかけて來たのに、今又やれ共產主義だ、民主主義だに迷はされてゐる。其他にもうんざりする程の對立抗爭があるが、由來この仲間喧嘩は、どんな學者でもどんな理論家でも知らず識らず調子に乘り過ぎる傾きがありはしないか？ そして近しいほど憎み合つてゐるのも人情の陷り易い弊らしい。それは支配階級と抗爭するより容易いからかも知れぬが、日本人の島國根性が禍ひするのではなからうかとも思ふ。吾々の運動はこの下らない根性に確かに禍ひされてゐる。これが直らなければ、どんな立派な運動方針を持つてよしんばその運動が成功したとしても、それは部分的成功に過ぎないであらう。吾々は、過去の經驗から今、漸やくいろ〱の要領を學んで、朗らかな再出發を準備しつゝある。

三

全國水平社は、昨年七月奈良縣高田町に於て府縣代表者會議を開き、過去の運動を清算して新らしい運動方針書を作製し其後理事會をして審議せしめつゝあるが、吾々はこれを運動挽回への最初の試みであると爲してゐる。その內容は再錄を省くが（長文でもあり各方面に發表されてゐると思ふから）要するに六千部落の隅々、三百萬部落民の胸にピツタリと合ふ運動方針を確立しやうといふことゝ、政黨が有つてゐるやうな政策とを決定したのである。

三月廿七日、今年度最初の中央委員會が開かれたが、主なる議案は

一、挽回方策を決定せんとする第八回全國大會を九月名古屋で開くこと

二、從來の町村水平社を支部組織に改めること

等である。

其他の出來事としては直訴事件の北原君が舊臘大阪から姬路陸軍教化隊（舊懲治隊）へ送られ、彼の階級的獄疑事件としての福聯事件の犧牲者、松本中央委員會議長等の上告も遂に却下され下獄の餘儀なきに至らしめられてゐることである。

四

吾々の運動が難澁するのは直接參考になる運動理論のないことである。世界的にはレーニンの民族問題の引例を開くが、それは公式過ぎる。國內的には無產階級運動の指導論客は直ちに水平運動の指導論客であるべく、餘りに吾々の運動が特殊的であるためか、又は遠慮のためか論ぜらるるものが少いやうである。あつても下手な飜譯を讀まされるやうなものでは手のつけやうがない。ブルジョア政府の一部落をブルジョアの陣營內に誘惑し「溫く」意圖の下に組織されてゐる融和團體側に

は多くの豫算を計上して文獻、資料を豊富に蒐集し、金と暇とに任せて種々の意見が發表されてゐるが、しかし此の種の意見は要するに五十年前、明治革命時代に必要であつて、今日大して役に立たざる部落解放論である。否、凡ゆるものが資本主義の影響下にある現在に於ては、部落解放論だといふよりその結果に於て或は資本主義擁護論と見らるべき性質のものではなからうか。例へば吾々を苦學生とするならば右の一團の人々はこれを學資豐かな樂學生（？）と謂へやう。この學資豐かな（而も政府の庇護を受けつゝある）學生諸君の運動（？）の間からさへ融和運動行詰りが叫ばれてゐる一事にみても、その感を深うする。

參考理論のないことゝ同時に指導者若くは鬪士の問題も難澁の原因である。何の運動にも少いと思ふが、吾々は海のやうな、又山のやうな人格の指導者、及び質のいい鬪士の必要を思ふ。

五

近年、吾々は左翼理論に名を藉れる解體論に等しい意見（凡てを階級運動に合流、合體せしめんとする意見らしい）を耳にするが水平社內部には未だ纏つた說はない。外部のこの說に對して吾々は斯う考へる。水平社の旗を下ろすことは敵に陣地を明け渡すに等しいことである。地方政黨を全國的政黨に統一するのとは譯が違ふし、さなきだに保守的大衆は、その特殊組織を失はんか、牙を磨けるブルジョア反動の餌食たること火をみるより明かである。一方、水平運動に未だ組織されざる多くの部落大衆は今日に於てさへ既に反動の餌食となつてゐる現狀に徵し、右の意見は水平運動組織（小部分は例外）及び未組織陣地の完全なる拋棄であるといつても過言ではない。

吾々は彈壓下にある、、、樹立運動の惱み或は醜聞問題に絡まる大衆黨の惱み等を思ふが、吾々も亦徒らに尨大なる陣地を橫たへての惱みの粒々たるものあることを否定せざるを得ぬ。寧ろ、前者の世界的、歷史的である點に於て魅力を持ち、信ずる道のために、、、、、を爲すも本望であらうことをさへ思はれるのであるが、しかし、今日のこの落目のこの厄介千萬な水平運動陣營の盛り返しも、眞に意義あることゝ信ずるのである。華々しき運動ではないが、それはかゝる受難を豫想せる荊冠旗に誓つたエタの子の當然殉ずべき道なのである。

他方、無產階級側から見ても、水平社の解體云々は得るところ（若し階級的（？）に結成し得ると云ふならば）ありとしても失ふところの大を先に述べたが、吾國社會運動綜同の如き水平運動の挽回が成ると否とは吾國社會運動其ものゝ成否を決定するバロメーターであるとも別言出來ると思ふ。

六

運動挽回の方策に就て前記方針乃至政策の外に吾々は左の如き考へを持つてゐる。

一、消費組合を組織して經濟的基礎を、水平學校を興して教育運動を旺んならしめ以て運動の土臺石を築き直すこと

二、全無產階級を友誼團體とする現實的差別撤廢運動

三、水平運動の階級的役割として大無產階級戰線統一の產婆役を勤むること

右の內二、に就ては、從來の全國水平社(本部)は左翼の一部をのみ友誼團體としたかの觀があつた。そのために却つて各種の思想を持つた國の戰線は亂れ勝ちであつたが、反資本主義團體は總て之を友誼團體と規定し、親密なる交際を續くるは勿論、その機關紙に水平運動の出來事を報じて所屬大衆に差別撤廢の宣傳をして貰うこと、水平社に於ても各友誼團體の主なる出來事を公平に——假令ば十行宛でも——自らの機關紙に報じ、以て部落大衆に無產階級運動を理解せしめんとする一擧兩得的趣旨である。吾々の運動の最も親しい友は何と云つても無產階級諸團體であらねばならぬ。吾々はその諸團體の指導方針を云爲して幾何の効果があるかより、その幾十萬の所屬大衆に差別撤廢を訴ふる絕好の機會を見す見す失つてゐた事の損失をよく知つてゐる。三、は運動方針書に「……從來の如き單に公式理論に拘泥した追從的行動であつてはならない。水平社は飽迄部落民獨特のイデオロギーに在つて部落民解放のための闘爭である……」と規定したが、しかし、階級的役割は大いにあり得ると思ふ。

七

筆者は昨年來から本年初頭へかけて開かれた各黨大會を見學したが「吾黨のみが無產階級を解放する正しい運動である」といふことゝ他黨の批判を負けず劣らず開いた。それと前後してだつたか、一夕帝劇に澤正の坂本龍馬を觀て戰線統一に關するサムシングを考へさせられた。當時、薩、長の聯合問題は幾度か決裂に瀕したのを坂本、中岡等が所謂戰線統一のために闘つたのである。その闘ひ方が眞劍である所である。彼等は遂に生命を犠にされたが、今日爲されてゐる戰線統一問題は體のいゝ、懸引たつぷりの頗る非現實的なものたるを免れてゐない。當時の情勢が所謂最後の段階であり、今日の情勢が然らざるの故かも知れぬが、大衆は、ヒステリックな運動に懲りてゐる。秋田の牢獄で死んだ和田久太郎氏の書簡集に「日本中の組合を集めても、それが幾何になる！」意味のことがあつたが、太い線の運動が生れて欲しいものである。如何に鋭く對立しても、如何に華々しく論戰しても、それが無產階級陣營內に於てゞは、餘り氣の利いたことでもあるまい。

吾々の水平社が實力を養ひ、着々挽回運動に成功し、諸團體との交誼進み、彼の坂本、中岡等の事業に當るといふ案は蓋し實現不可能のことではないと考へる。今日に於ても實力ある地方水平社は行つてゐるし、吾々の地位其ものが之を遂行する適任の立場に置かれてゐると思ふのである。左翼的であることを階級的であると爲した從來の一部水平社の考へより水平運動としてはこれが本格に行つた階

級的任務ではないかと思ふ。もとより吾々は眞理を敵ひ、對立鬪爭を單なる仲間喧嘩と云ふのではない。果てしなき被壓大衆共通の惱みから此の聲を揚げるのである。(昭和四年五月一日)

現在の失業狀態と職業紹介事業

豐原又男

過去數年に渉り最も社會の注意を喚起し、あらゆる方面に於ける論議の對象となつたものは、勞働者問題及その解決法であつた。生産に於ける勞働の價値、勞働條件の改善乃至經濟組織の改造等は、最も派手な積極的な問題として、絶え間なく主張せられ批評せられて居た。併し勞働者問題にはその半面に、極めて陰鬱な消極的の方面が存在することを忘れてはならぬ。如何にして職業を得むかの問題は、勞働契約の改善を如何にして達成せんかの問題より一層深刻であり痛切である。職業能力と就職の欲望とを有しつゝ而かも職業を得ること能はざる悲哀は、單なる賃銀の低廉、時間の過長に伴ふ苦痛に比し、より以上人生の奥底に響く根本的の問題と云はねばならない。加之當今の如く財界の不況は繼續して日々に失業者續出の狀勢あるに際し、失業者並に失業者全體の蒙る經濟上及政治上の損害は勿論、一般社會の蒙る此等の危險を如何にして防遏し、若しくば緩和し得られやうかと云ふ場合に於て、一層その緊切なるものあるを感ぜしむる。

要するに失業なるものは直接には勞働者を害すると共に、間接には國家經濟上に損失を蒙らしめ、更らに社會に對する不安を惹起するに至るもので、其影響する所頗る大なるものがある。夫れのみでなく吾々の最も重要視し且つ懸念する所のものは、より以上錯雜にして根本的なる思想問題の範圍に於て、失業なる事實が齎す影響である。人生に於ける諸乃至幸福の奈邊にあるかは之を別とするも、人類に就て生の欲求を否認し能はざる以上、生存條件に向つて不公平不平等の壓迫が加へらるゝことは、實に堪へ難き不安であり脅威であると云はなければならない。此の意味に於て失業の防止と失業保護の事は一日も輕視し等閑視することを得ざるものである。是れ卽ち社會が失業の防止救濟に關し、調査し畫策し實行することは、社會自身に對し絶對的必要であるのみならず、主觀的には存續の爲にする自衞であり、客觀的には自己の分子を保護すべき直接義務の履行といふべきであらう。

斯く觀ずるとき失業問題が如何に經濟上にも思想上にも關聯する所大なるものあるを知

ると共に之が防止救濟は國家社會の實行せざるべからざる最少限度の社會政策と云はなければならない。之に就て豫め知るべきことは我邦に於ける現在の失業狀態は如何の程度にあるか、其實際的狀態を知悉することは極めて重要なることである。

乍併我邦の失業狀態を知悉する爲めには、之に關する完全なる資料を缺くが故に、之を記述することは頗る難いのである。吾々は平素「我邦の失業者數は幾何なりや」との質問に遭遇すること屢ゝであるが、乍遺憾失業統計の完備せざる爲めに適確なる數字を擧ぐることは出來ないのであつて、何時も推測を以て答ふる外ない。去る大正十四年十月に第二囘の國勢調査が行はれたる際、全國二十四市町及其附近に於ける失業調査が行はれたことがあるが、其際の失業者總數は十萬五千餘人で其內俸給生活者——月收二百圓未滿の——が二萬餘人、勞働者が四萬四千餘人、日傭勞働者が四萬一千餘人であると發表せられたのである。併し當時に於ける調査には幾多の缺陷があり、調査漏れもあつたかのやうに聞知したのであつて、之が實數であつたとは信ずることが出來ず、寧ろ其餘りに少數なるに驚かされたのである。

此の他一二の都市に於て失業調査を行ふたものもあるが、夫れは部分的のものであつて全國的狀態を知るの資料とはならないのであつて統計的觀察は困難なる狀態である。之以外に依るべきものと云へば、全國各地の職業紹介所に於て取扱たる求職者數は比較的推測の資料に供するに足るものがある。併し該統計に於ても多少の重複もあるから之を以て直ちに實數となすことは出來得ない。要するに我邦に於ては全國に涉り失業調査が行はれたこともなく、又失業統計に關する制度も不備であるから實數を知ることの出來得ないのは已を得ない。今假りに全國各職業紹介所の求職者數を擧ぐれば次の如くである。

大正十四年	八七七・九八二
大正十五年・昭和元年	七八〇・六一五
昭和二年	七九四・六八六
昭和三年	七五〇・七一九

以上の數字は一般勞働の求職者數を擧げたもので、此の他日傭勞働者があり營利的の職業紹介所を經るものがあるから、求職者の數は之れ丈けでなく尙多數存するのであるが、單に之れ丈けであるとしても失業者の數は大體に於て七八十萬の間を往來して居ると見ることが出來る。尙ほ職業紹介所を經由せざる知識階級にして、失業し居るもの近時著しく增加せるの傾向があるから、現在我邦の失業者總數は是等總てを綜合せば、非常なる大多數となり或は百萬に近かきものあるにあらざるかを推測せらるゝのである。若し果して如上の狀態にあるとせば、之が對策は一日も忽諸に附すべきものでなく、之が防止救濟は焦眉の急なりと云はなければならない。

失業保護の施設として行はるるものは、失業狀態が平常時に於ける場合と、非常時に於ける場合とに於て、之を異にするものあるは勿論であるが、勞力の需給調節に關する組織の改善と、新事業の創設とは常に提唱せらる

ゝ所のものであつて、職業市場たる職業紹介事業の發達完成が企圖せらるゝのである。而じて職業紹介の事業は勞働の需要と供給とを調節し其圓滑を圖ると共に、求職者と求人者との間に介在して之を媒合せしめ、産業組織をして出來得る限り合理的に進ましめんとするもので、失業の主因が勞力需要の變動の不調和に存するとせば、世界市場の趨勢を詳にし、事業と勞力との按排に對し、完全なる調査機關の存在に依り之を排除し得べきである。加之勞働を需要する者と、職業を求むる者とが、各異なりたる方向に途を辿りて遂に相會せざることあるが如きは、少くとも現在の社會に於ける時代錯誤であると云はなければならない。貨物に取引所があり、資本に金融機關あり、而かも勞力調査の爲め完全なる機關の存せざることあらば、寧ろ近代文明に對する皮肉ではあるまいか。この意味に於て吾々は職業紹介事業の必要を認め、其機能の圓滿なる發達を期待するものである。

併し顧て我邦に於ける現在の各公益的職業紹介事業は、果して其使命と機能を發揮するに十分なる用意あるや否や、想ふに之を先進諸國のものに比し設備不完全にして、其衝に當るものゝ訓練を欠き、加ふるに産業界需要の激減せる今日に於て、上述せる如き百萬の失業者を處理するの、甚だ覺束なきを遺憾とするものである。されば我邦の職業紹介事業が今後一層其機能を高め、其使命を全うするに努めなければならぬ。從て各地の職業紹介事業は孤立的より共同的に、小地域より府縣並に全國の廣きに及び、更らに進んでは國際的聯絡の理想、並に國際的一致協同の端緒へと進展するの要がある。

併し乍ら勞働市場としての職業紹介事業が眞に其の重要性を認めらるゝに至つたのは、近代に於て機械技術の發明されて以來のことに屬し、交通手段の擴張、巨額なる資本の累積は、經濟組織を今日の如き複雜なるものたらしめた。斯る經濟組織の下に於ては、雇主のための事業といふことが一般原則となり、一雇主の頤使の下に全力を擧げて働かねばならぬ工場勞働者の數は著しく增加し、工業方面に對する就職口は、從前に比し甚しく多岐多樣たるに至つた。勞働需要供給の增加、分業主義の普及、地理的單位と考へらるゝ地域の擴大に連れて、勞働市場は益々複雜となり、勞働者は愈々適當なる就職口を得難く、雇主は適當なる勞働者を雇入るゝことが困難となつた。此の困難に加ふるに矢繼き早に襲來する不景氣、産業の衰微、峻嚴なる就職機會の制限等が起り、失業は助長せられ個々の勞働者を死地に陷れるのである。此に於て救濟的事業の要求が起つたのであつて、爾來職業と勞働者とを接觸せしむる計劃、即ち職業紹介事業は恒久的のものとして發展するに至つた。最初に於ては職業紹介所なるものは、通常産業團體に於て經營され、若くは個人の手に依つて開始されたものであつたが、次で公益團體又は公共團體の手に其經營が移さるゝに至つた。勞資の兩團體は何れも之を掌握せんとし、一時は産業界の兩階級爭鬪の具に供せられた觀がないでもなかつた。併し乍

擴大に若し弊害を防止することが出來るならば、正に此等紹介所の經營は兩階級の利益を代表する者を參加せしむると共に、假令勞資の兩團體が平等に經營に參加するとしても、兩團體の何れにも嚴正中立を守り協力する者の下に、經營せらるゝ公益職業紹介所の必要なることが、一般に認めらるゝに至つたので、地方的公益職業紹介所制度が各國に於て發達したのであり、我邦に於ても亦之に倣うたものである。

要するに職業紹介所は勞働市場として、求職者及び求人者の爲に相互間の疏通を圖り、兩者間に立ちて媒介の勞を執り、極力失業者の發生を妨げ、縱しや一旦失業事實の發生を睹るとも失業日數を制限し、結局此媒介行爲に依り失業人員の減少に努力するにある。併し勞働の需給は要するに各一個の圓の如きものであつて、此の二つの圓は、未來永劫決して一つの貝の双殼を合はす樣に甘く合致するものでない、そは畢竟各自の範圍が不同であるからであつて、職業紹介事業の及ばざる所である。

是からが無政府主義の世界だ

石川三四郎

無政府主義の運動は、現代の日本の社會に於ては、、、、に進むより外に道はない。併し「、、、とは云ふもの丶、生命の運動であるから、時にはその呼吸が外面にも表はれる。その呼吸の工合によつて察すると、その生命は非常な勢ひで日本の社會の內面に發育してゐることが感じられる。

世界の無政府主義運動が、露西亞革命の經驗と世界各國の反動的形勢の影響とを受けて今ま新らしい生面を開からうとしてゐる如く、日本の無政府主義運動も、是から陣容を整へて大發展をしようといふ意氣込みが見える。岩佐作太郞君が久しく姿を現はさず、また大杉の後を受けた勞働運動社が解散して舊い闘士達が四方に散つてゐることは淋しいが、其一味の人々の意氣は相變らず盛んであるから再び旗上げする時機が遠からず到來するであらう。黑色青年聯盟も多くの闘士が刑務所に行つてゐるので思はしい活動は目下の處では出來ないであらうが、八太舟三君其他血氣の人々は徐ろに捲土重來の元氣を養つてゐるものと見て差支ない。アナルシスム或はアナルコ・サンヂカリスムの勞働團體は全國的に連帶網を張つて廣大な、、力を植付けつゝある。自由聯合主義の勞働聯盟が二派に分れてゐるが、何れも經驗と熱誠とを持つた猛者達が血みどろの戰陣を敷いてゐる。ブルジョア新聞を利用して世間的にジャーナリスムに沒頭する樣なことを極端に卑しむところに彼等

の眞劍味がある。『全國自聯』も『自聯協議會』も共に事務所を東京に置いてあるが、後者の機關紙『自由聯合運動』は大阪で發行してゐる。日本に數多く勞働團體があるけれども、多くは知識階級又はブルジョアが指導者となつて、羊の群を引率してゐるのだが、右の二團體だけは純勞働者のみを以て、一切の仕事を運んで行く。こゝに此兩團體の特徵があり、强味があり、未來性があり、生命がある。此兩團體が、何時かは好き機會に於て聯合又は合同するであらうが、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。

『全國自聯』と提携してゐる同じ傾向の勞働諸團體中で芝浦勞働組合は有力なものの一つである。此團體も勿論一切を純勞働者で處置して行き月刊機關紙『芝浦勞働』に依て確實に陣地を擴張してゐる。

思想的又は文藝的方面に於ては、數知れぬほど種々な雜誌が、出たり止んだり迭迎にいとまのない有樣であるが、それけ勞働團體の如く財政的基礎を有せず、生活の安定しない靑年或は學生が經營する結果である。其中にあつて昨年來引續いて堅實な姿を吾々に見せてくれるのは、宮島資夫君を中心とする月刊誌『矛盾』と靑年連の經營する『黑色戰線』とである。此外に純學究的立場にあつて無政府主義の、、、、、することに努めてゐるクオータリイの『社會理想』がある。『矛盾』は主として個人主義的傾向を持つた人々の經營に成るものであるが、必ずしも排他的ならずアナルシストたる崇高さを以て吾々の如き共產主義的サンヂカリスト の文章をも歡迎する。『黑色戰線』は文學的傾向を持つた多數の靑年が協力して經營してゐるものであるが、併し、これも極めて寬容の精神に溢れ、筆者の如き極めて文學に緣遠いものゝ文章の爲にも、貴重な紙面を割いてくれる。『社會理想』に至つては年四回發行といふ極めて優長な經營ぶりであるが、併し無政府主義の如き人生、、、、、、、、、しやうといふ人々のことであるから、却て其心意氣の如何にも堅實なことを見るべきである。この雜誌は純研究的のもので、是れより更生して二十世紀の世界社會運動の本流たらんとするアナルシスムに新らしい理論と生命とを吹きこんで行かうといふ大望を懷いた靑年達の熱血の結晶したものである。長老新居格君を始めとして有爲の靑年達が恐ろしい沈着さと執拗さとを以て此仕事を守り立てやうとしてゐる。筆者もこの鋭氣に充ちた靑年達の驥尾に付して些か仕事を分擔させて貰つてゐる。以上の外に『文藝ビルデング』といふ雜誌が此頃めきめき發展して來た。是れはアナルシスムの雜誌とは言へないが、アナルシストの經營するものだ。

名聲を求めたり、榮譽を求めたり、權勢を欲したりするものは、元よりアナルシストになぞなりつこはない。從てアナルシストの陣營內には非常に多くの純情の人、天才の人、至誠の人がゐるにも係はらず、決して世の中に現はれない。また現はれやうとしない。アナルシストの魂は『人類』の中に溶け入つて了ふからだ。

歐羅巴に於ける社會改造運動としてのアナ

ルシスムはその大半の勢力をサンヂカリスム運動の中に投入して了ひ、殘るところの大部分は一種の道德的個人的の生活原則としての此思想を採用してゐる。此道德的生活原則としての發展は近時漸く著しく、或はトルストイヤン的生活運動となり、或は二十世紀のヂイオゼエンと言はれるアンソネエルの如き個人主義となり、或は純然たる教育運動となり、更にまた『土に還へれ』の生活となつてゐる。殊に近時のアナルシストの多くが『土に還へれ』の生活に關心を持つてゐることは顯著な事實で、自給自足の土民生活の群れが、西歐諸方に散見される樣になつて來たのでも其れが分る。日本に於ても、こうした傾向が近時漸く世の耳目に觸れる樣になり、『土に還へれ』といふ叫呼が單なる文學者又は著述家の聲でなく、眞劍な生活者の聲として聞かれる樣になつて來た。鑓田研一、犬田卯、加藤一夫氏等の『農民藝術聯盟』なぞも矢張り此傾向を持つたものと言へやう。そして此聯盟の指導精神がアナルシスムの理想にあることは言ふまでもあるまい。尚ほ昨年來、『クロポトキン全集』が多大の成功裡に發行を續けてゐることも、無政府主義發展の一徵證と見ることが出來やう。

要するに日本のアナルシスムの運動はこれからだ。最近四五年の間、共產黨の諸君は極めて熱心に、極めて巧みに、吾々の爲に道を開拓してくれた。けれども共產主義者の開く道は一雨降るとすぐ崩れて凸凹が出來て了ふものだ。矢張りどうしてもアナルシスムのコンクリイトで磨きをかける必要がある。アナルシストの仕事は之から始まるのだ。それに、、、、といふものが愚劣極まるものであることは、如何な蒙昧な無產者にも大ていは分つたらうからな。

——一九二九・四・二八——

無產青年運動の意義とその現勢及將來

安達 嚴

一、帝國主義日本の現勢と無產青年の地位

帝國主義日本は現在極めて深刻なる國內的國際的情勢に當面してゐる。

國內に於ける勞働者農民の窮乏化、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、ソヴエツト・ロシアの强化發展等々の事實は、高度に發達した日本資本主義の生產力に適應した市場の不足を招來し、國內に於ける階級鬪爭の、、、と相俟つて、その發展を妨げ、その安定を不確實極まる安定たらしめてゐる。

斯る切迫せる狀態より脫れんがために、帝國主義日本は、、、、、、、、、、と、資本主義的產業合理化にその全努力を集中しつゝある。而も斯る努力は、必然的に國內、、、、、、大衆の、、、、、、、を惹き起す。從つてその、、運動の鎭壓は、現日本帝國主義ブルジョアジーの意圖の遂行のための必須的條件となつてゐる。

昨年三月の日本、、の、、、逮捕以來打續く無產階級運動の、、なる彈壓、また、治安維持法改正緊急勅令事後承諾案の第五十六議會通過等々の事實はそれを雄辯に實證するものであり、これ等の事實は、また帝國主義日本ブルジョアジーの困難なる諸狀勢の愈々尖銳化し來つたことを意味するものである。

資源及市場の地としての支那、、、、、を目的とする、、、、、、準備の完成は第五十六議會を通過した十七億に剩る尨大なる、、豫算の內容によつて明白に觀取される。

國內に於ける產業合理化は、大經營に於ける大量的馘首、中小經營の沒落によつて產業豫備軍を增大し、賃銀値下、時間延長等によつて勞働大衆を飢餓線上を彷徨するの止むなきに至らしめてゐる。斯る狀勢は、生產過程に於ける無產青年の役割を愈々重大ならしめてゐる。

注意深き搾取は年若き勞働者の上に增大し、その經濟的地位は益々劣惡化してゆく。

產業の合理化による勞働手段の單純化は、成年勞働者に比して低廉なる賃銀で、より酷使し得る青年勞働者の凡ゆる產業部門に於て演ずる役割を益々重大ならしめる。その最も顯著なるは、徒弟制度である。この徒弟制度は發育盛りの青年勞働者の慘酷なる犧牲の上に强いられ、年期後は街頭に投出されるか、或は劣惡なる條件で搾取を續けられて行くのである。

以上の外、、による、、、、、、、、、、、、、、、、への强制加入等々によつて、多くの、、、、的犧牲を强要されてゐる。そして斯る狀態の下に置かれた無產青年のその不平不滿を政治的に表現すべき選擧權は與へられず、反つてその不平不滿を、、し、反動に轉化せしめんがために、種々なる努力が遺憾なきまでになされてゐる。

二、無產青年運動の任務

以上の如き帝國主義日本の諸狀勢は、無產青年運動の必要とその發展の必然を物語るものであり、また、同時に、現狀勢の下に於けるこの運動の主要任務を、次の如く規定せしめる

(一)、、、主義鬪爭——、、、、、、、、及その危機に對する鬪爭は、わが無產階級の中心的任務であるが、就中、、、、、、、、の直接の犧牲たる無產青年は、その全活動を之に集中し他の一切の運動を之に從屬せしめ精力的に鬪爭しなければならぬ。

(二)經濟鬪爭——產業合理化の必然的結果たる賃銀低下、時間延長、馘首、等生活の惡化に對する鬪爭、同一勞働に對する同一賃銀支給のための鬪爭はまた現下の青年運動の重要なる任務である。

(三)政治的自由獲得闘爭——無産青年は言論集會出版結社の自由も、選擧權被選擧權も完全に剝奪されてゐる。政治的自由獲得のためにも極力闘爭しなければならぬ。

(四)無産階級教育のための闘爭——帝國主義日本のブルヂョアジーの搾取の合理化と、、、、、、合理化のための驚嘆に値する宣傳煽動に對する闘爭もまた絕對不可缺の闘爭である。これ等の闘爭を全無産階級運動の一翼として戰ひ拔くことこそ、無産青年運動當面の主要任務である。

三、無産青年運動の現勢

以上の理解に基いて無産青年運動の現勢を觀るに現在我國の青年運動には、三つの異れる傾向がある。

卽ち社會民主々義的青年運動、左翼社會民主々義的青年運動、、、、、、青年運動これである。

(一)社會民主々義的青年運動——勞働總同盟、社會民衆黨傘下の青年によつて社會青年同盟が、昨秋結成された。この青年同盟は社會民主々義的青年運動の中堅である。最初この同盟結成の運動は、戰闘的勞働青年の手によつて捲起されたのであるが、社會民衆黨幹部の阻止に會つて、『社會民衆黨の指導精神に立脚し』云々の文句をその綱領に挿入するの止むなきに至らしめられ、完全にその階級性は骨拔きにされてしまつた。

(二)全國勞農青年同盟——本春具體化した七黨合同によつて成立せる日本大衆黨傘下の青年分子を主とする同盟である。この同盟は日本大衆黨支持の日本勞働組合同盟の社會民主々義幹部の手によつて結成されようとしたが結成の過程に於てその指導權は戰闘的勞働青年及左翼社會民主々義者の手に移り、それと共にその組織は急速に擴大し、その闘爭も相當活潑に展開さるゝに至つたが、その結成以來未だ數ケ月も經過せざるに早くも、同盟內部に左翼社會民主々義者と戰闘的勞働青年との對立は激化し、去る四月二十一日の東京府支部創立大會に於てその對立は公然の對立となり、對立は極度に尖銳化するに至つた。戰闘的勞働青年はこの大會を機會として、勞農青年同盟を社會民主々義青年同盟なりと規定して、、、、、青年同盟の强化擴大に協力するの立場を明白に宣言した。少數の左翼社會民主々義者の影響下の青年を殘してこの同盟內の戰闘的青年は前進しつゝある。

(三)勞農青年協議會——昨春我國唯一の戰闘的青年同盟として活躍しつゝあつた全日本無産青年同盟は、勞農黨、評議會と共に解散を命ぜられた。その後新青年同盟準備會の名の下に再組織運動が進められたが、この運動の過程に於て斯る方針が誤謬であることが確認され、方針は一變さるゝに至つた。

卽ち資本家地主の支配よりの解放のための闘爭には、眞に階級的なる一つの黨、一つの青年同盟あるのみであつて、この階級的黨及階級的青年同盟は現在その合法性を剝奪されてゐるのである。而してその合法性は支配階級によつて與へらるゝものに非ずして力によつて獲得すべきものである。故に以前の如き

官許青年同盟を再び結成することは解放運動の原則に背反するものであるとの理由によつて、、、、階級的單一青年同盟の强化擴大、並にこの同盟の貯水池としての勞働組合青年部、農民組合青年部確立の方針が採用さるゝに至つたのである。勞農青年協議會は、勞働組合、農民組合の各自主的青年部の具體的共通的共同鬪爭のための一時的協議機關である。今や、白色テロルの嵐を衝いて全國の戰鬪的勞農青年は自主的組合青年部の結成へ、階級的單一青年同盟の强化擴大へのスローガンの下に力戰しつゝある

四、無産青年運動の將來

、、、、、、の危機の切迫、暴れ狂ふ白色テロルの嵐、資本主義的產業合理化の勞農青年に及ぼす深酷なる影響等々は、階級的青年運動の發展の必然を約束するものである。だが斯る階級的青年運動の擡頭に脅える支配階級は、極度にその强化發展を暴壓し、以て間接に社會民主々義的青年運動發展の客觀的條件をつくるであらう。また左翼社會民主々義的青年運動は階級的青年同盟の彈壓による一時的なる陣營内の混亂に乘じてこの或程度迄の發展を約束づけられてゐる。

だが未來は被支配階級のものである。階級的青年運動こそ眞に勞農青年解放のための運動であることは、遠からぬ將來に於て事實が何よりも明白に立證するであらう。(終)

本邦消費組合運動の現在と將來

緒方清

本邦に於て、消費組合運動が社會改造の理想を輝す民衆の自助的運動として乃至消費經濟合理化の手段として世人の注目を蒐むるに至つたのは、歐洲大戰終了後に屬するけれども、その歷史は遠く明治十一、二年の交に遡る事を得べく、運動の先驅者、共濟社の設立以來三十有餘年間に於ける幾多組合興亡の跡を討ぬるは頗る興味深く、現狀の批判にも必要不可缺事ではあるが、この事に付ては已に最近私の發表した小篇「本邦消費組合運動」(同文館發行久我貞三郎氏譯デード消費組合論附錄)に於て取扱つたから玆には繰返さない。本文に於て私はその後の發達に注目しつゝ本邦消費組合の現狀を檢討し、その將來に付て考察を加へて見たいと思ふ。

本邦に現存する消費組合の總數に關しては正確な數字を擧ぐる事を得ないけれども、約百五十組合、その組合員數約十二三萬人と見れば大過なからう。この總數を農業組合の現狀に比すれば九牛の一毛に價せざる貧弱さではあるが、消費組合運動が過去三十年の間、農業組合の如く、政府の手厚き保護指導を受く

る事なく、否寧ろ政府によりて冷眼視せらるゝ裡に、これ丈の業績を擧げ得たる事は同運動關係者の努力を多としなければならぬ。

さはいへ、本邦消費組合の基礎は未だ甚だ薄弱にして單に生活改善の一手段と看ても十分にその効果を發揮してゐるとはいはれない、況や社會改造運動としての理想より相去る事甚だ遠い事は掩ふべからざる事實である。

試みに組合に關する二三の事實及數字を擧げんに、運動の中心地は大體東京阪神地方であつて、殊に新興勞働者の組合は東京及その附近に限局せられてゐる。而も此等百五十の組合は勞働者の組合廿一を除き何等中央聯合機關を有せず、形式的に產業組合中央會を通じて一般協同組合に連結してゐるに過ぎない又近時東京市內の各種消費組合の間に消費組合協會が成立したが、實質的に提携する迄には未だ餘程時日を要するであらう。だから今日の處日本の消費組合は先づ群雄割據の姿にあるといつて差支ない。現存消費組合の過半は設立後未だ十年も經過せざる若き組合であつて死亡率は極めて高く而も平均組合員數五〇〇人以下のものが半分以上を占めてゐる。大正十四年度に於ける調査組合數百廿九に於ける一組合員當り平均購買高は百七十八圓餘で、取扱品の大宗たる米が比較的高く且組合總數中市民組合の割甚だ大なるに不拘英國に於ける平均購買高の約半分に過ぎない。而も右百廿九組合中餘剩金を示し得たものは九十三組合であつてその平均は一組合員當り二圓廿八錢、市民組合の如きは僅に三十九錢である。

本邦消費組合は大別して凡そ次の四種に分たれる。

(一)は良品の廉價供給を主たる目的としてゐる組合であつて、產業組合中央會發行「市街地購買組合調査」に一般市民組合及俸給生活者組合として分類せられたるも、大部分は此に屬する。例へば東京市內の共同會、共榮社廣島の鯉城組合の如き是である。この種組合に於てはロッチデールの原則を忠實に實行するもの少く、掛賣は廣く行はれ、多數の御用聞配達人を雇傭し、購買高分配を行ふもの少く、ソーシャル・ワークの如きに對しても無關心なるものが多い。竊に聞く處に由れば近時東京地方の此種組合中には消費組合の理想に近くべく多大の努力をなすものありて、現に去月末に松江市に開かれたる產業組合全國大會には彼等としては相當急進的なる提案をなしたといふ。併し乍ら多年の惰性のためか、これ等の努力は遺憾乍ら未だ組合經營上には反映されてゐない。

(二)はロッチデール式經營法の嚴守に努むる組合であつて市民組合中例へば神戶消費組合の如き二三の組合及勞働者組合の大部分は是種に屬するものと看る事が出來る。勞働者組合は已に一言したるが如く大部分は東京市の內外に集中してゐるのであつて、關東消費組合聯盟所屬の組合は現在廿一、その組合員數約七千人と號してゐる。此種組合は基礎必しも堅固ならず、その數字的勢力は他種組合に比し未だ甚だ微弱であるか、此等の組合に

は階級意識が強く働いてゐるから、生氣に富む組合が少くない。勞働者組合の指導者中にはモスコウ式經營法の信奉者も少くないと傳聞するが、少くとも表面上に於てはロッチデールの原則の遵守に努め政治上中立の主義に立てゐる。從て我國には未だデート教授の所謂社會主義型消費組合たる事を標榜してゐる組合は存しないと看なければならぬ。而して最近同聯盟年次大會に於ては所謂「右翼的」傾向を帶びたる決議がなされ、經營第一主義が高調されたといふから、市民組合との提携も今後益進捗するであらう。

第三の型は温情的施設としての消費組合であつて、會社及官廳附屬の消費組合の大部分は是に屬する。此等は形式上は消費組合であるが事實上は單なる廉賣所（Economat）と相去る事遠からざるものが多い。此種の組合は現在僅に一七を算するに過ぎないが、組合員數に於ては第一種組合を凌駕し、尨大なる賣上を有し、外觀上成績の良好なるものが多い事に注意せねばならぬ。例へば三池共愛組合の如きは大正十四年末の組合員數二萬人餘、その賣上高は、四百十萬圓を超えてゐる。

第四種は學修的消費組合であつて、學校內消費組合卽ち是である。既設同種組合中注目すべきは早稻田及拓殖大學々生の組織した東京學生消費組合であるが、東京商科大學に於ても近時同共益部（消費組合）に大改造を加へ消費經濟合理化の目標に向つて著々その步武を進めつゝある。學園消費組合に付ても論ずべき事多にあれど紙面に限あれば他日を期する。

惟ふに消費組合運動は現代資本主義の中より生れ且つその手段を利用する事によりて新しき理想の社會組織を生み出さんとする努力に外ならない。從てその成功には組合員及管理者がよく組合の理想を解し、且その理想實現のために異常なる犧牲的精神を以て組合事業に一臂の力を假す決心と覺悟を必要とすると共にその經營は資本主義的企業と同じく否以上に合理的に且ビスネス・ライクに行はれなければならぬ。消費組合運動の根本的困難は實に茲に存するのである。我國消費組合全體を通して未だ猶群雄割據的傾向頗る濃厚に、ロッチデール式經營法が廣く行はれず、御用聞配達の制度及掛賣の弊害に惱みつゝあるのは要するに組合員及その管理者に自覺が不十分であるか、若し自覺ありとするも、萬難を排しても理想に向つて邁進する覺悟がないからであらう。現在本邦消費組合の發達を阻害する重大なる原因は右述べたるが如く主として內部にあると看るを正當とするけれども、外部的障碍と看るべきものもないではない。例へば大戰後大都市に設けられたる公設市場の如きはその一に數ふべきである。東京に於ける公設市場は小賣價格の統制其他に於て相當の成績を擧げつゝありと稱せられてゐるが消費組合の方から云へばそれ丈新組合員の加入を牽制せられてゐると云はねばならぬ。現に消費組合中賣價の決定に付て公設市場に引きずられてゐるものが少くない。併公設市場は今日以上の發展を見る事は條程困難であらうから消費組合としては非常に恐るゝ必要は

ないであらう。次にデパートメント・ストアの發達が組合運動に及す效果をも見逃してはならぬ。百貨店はその巨大なる資本の力により且新式小賣方法とも云ふべきサーヴイス本位の政策によりて中產以下の顧客の吸收に努力しつゝある。實にナイストロム氏の云へるが如く百貨店は廿世紀に於ける人心の弱點を捉へたる經營法であつて、中產以下の人々にて單にその優越感を滿足すべく百貨店にて購買する人も少くないのであるから消費組合としてはその對策を眞面目に研究する必要がある。チエーン・ストアは少くとも今暫くは我國に於ては大した問題とはなり得ないと考へらるゝ。

最後に從來政府は消費組合に對して頗る無關心なる態度を採つて來た事は事實であつて、此意味に於てその消極的政策は消費組合の發達に好影響を與へなかつた。併し乍ら近時政府は少くとも消費經濟合理化の一方法としてその價値を認めこの運動に對し好意を示すのみならず積極的にその發達を獎勵せむとする覺悟を示すが如くである。私は嘗て志立鐵次郎氏が述べられたるが如く「政府に於かれましては特に消費組合を補助する必要はありませぬが、その發達を妨ぐる障害は出來うる丈除かれてその發達に專心されん事を」希望せざるを得ない。一部の論者は現在の產業組合法の規定は明に消費組合の發達を阻害するが故に獨立の消費組合法を制定すべしと主張するけれど、私は購買組合中日用品の共同購買を目的とするものを消費組合と改稱せしむる外差當り改正の必要はないと思ふ。（尤もこの外英國式に員外販賣を行ふ事を法律上許すか否かは研究の餘地ある如く思はれる）それよりも私は組合關係者が今少しく組合の使命に覺醒し、各種組合ともロッチデール式組合の原則の下に組合事業の振興を計り、消費經濟の合理化、進では社會改造の理想に向つて邁進せん事を切望せざるを得ない。私は我消費組合の前途に付て必しも樂觀說を採る事は出來ない。さりとて一部論者の如く望なしと悲觀するの要はないと思ふ。歐洲に於ける運動の歷史が示すが如く消費組合の發展には長きに亘る努力を必要とするのである。而して我國に於て消費組合運動を決定的に阻止するが如き障碍は見出し得ないのである。

（四、五、六）

無產者病院設立運動

馬島僩

一、序言

醫術の出發は何と云つても神樣の出顯と甚だ密接な關係がある。見方によれば、神樣と

云ふものが醫術或は魔術に由つて其の存在を意味づけられ、是に由つて活きて來たのであるとも云はれるであらう。今でこそ神學書の中に醫學の原理などは記述してあるまいが、醫術を應用しなかつた宗敎傳道創始者は無いと云つても良い位である。處が途中からと云つても僅々二百年にも過ぎない近年になつて醫學は科學としても最も長足の進步をした。今や實驗を基礎としない一切の假說は葬り去られ樣として居る。それならば吾々の醫術は今日其の科學の指示する通に、神樣を離れ魔術祈禱の姿を沒したかと云へば遺憾ながらまだ〱そうではない。と云ふの外はない有樣である。全然必要の無い藥が多勢の患者達に與へられる、その中には診察料請求の意味を含めたり、或は慰めの言葉を秘めてもある。効力の定まつても居ない注射液が無暗に人々の血の中に注射されて居る、其の液には醫者自身の神樣への願ひやら、患者のそれ、やらが同時に流れ込んで居る事もあらう。只吾々は無害の保證をすればそれで足りる事が決して少くない。斯樣な矛盾が吾々に精神的治療法なる新科學を推定せしめ、博士號治病科なる新部門を設けさせた。是等の新しい科學や醫術と對抗して、否競爭して無數の有名、無名の治療家達が免狀持ちの醫者を尻目にかけて世界の何れの地にも蜂起した。是等は元祖の神樣の流れを汲んで居ない丈けに活潑で計算的で、奇想天外的で國法の擁護が無い丈けに責任の一切が解放されて居て虛無的自由でさへあり得る。彼樣な醫術の流行は果して何を意味するかと云へば、醫者程錢を儲けるに都合のよい仕事はないと云ふの外殆ど考へる餘地がない。搾取ではないかも知れぬが、詐取である事丈けは認めねばならぬ。解放運動の新しい展開の中には詐取反對の旗をも揭げねばならぬと想ふ。　科學の正しき認識の爲めに、醫術の徹底的民衆化の爲めに。

二、解放運動と恩惠的病院

アヘンを函の中に納めて居る醫者は國法の保護の下に是を自由に使用し得る特權を有して居る。是丈けは確に神樣と離れた證據になれるであらう。處が神樣は近頃出來る丈け醫者と接近しようとする。赤十字、白十字、などは其の最も古くて分り易いもので、宗敎の冠詞の附いた病院や診療所は無數に存在して居る、是等の團體や病院は確かに良い事をして居る、少くとも積極的な意味で解放運動の妨害をして居るとは云へない。けれども解放運動の積極的な擁護をして居ない事丈けは明瞭である。その上是を以て運動の緩和を計る氣分が是等の仕事を守る人々に醫者に或は此等の仕事に寄附をする人々には云ふまでも無く、ある事を認めねばならぬ。詐取橫領的な施設で無い代に恩惠、慈悲的なものである丈けにである。

社會事業と云へ社會政策と云へ、今日醫術程大事がられ、其れ程多くの費用を消し、其れ程資本家に取り附き易いものはあるまい。元より尙甚だ不足ではあるが是等の病院で多勢の無產者が守られて居るし此からも段々其の施設が增加され樣として居る。資本家地主

の政府が善政の一端として是等の保護と奬勵とをする。けれども常に恩惠と慈悲とを忘れぬ樣に心懸ける。彼等が函の中のアヘンを巧みに使はうとする事を氣付かないで居れるだらうか。勞働者の手に由つてのみ解放運動が遂行される事を認めて居る人々は何故に今日まで病院を無産者の手に入れる事の計畫をしなかつたかを疑ふものである。

三、實費診療所と解放運動

デパートメントストーアが非常な勢で發展する近代都市では小賣商人が影薄くなつて薄利多賣便利重寶式のものでなければならなくなつた、大衆は是に感謝さへもする。

彼樣な意味と似通つて實費診療所が出來て居る。近代生活の必須的なものとして、否少くとも無産者の味方の意味で發達しつゝある。けれども其の資本への配當はやはりデパートの其等と大差のない狀態であるとすれば是が果して無産者の味方であらうか、將來は實費診療株などと云ふのが市場で相當の値を呼ぶかも知れない。事實は其以上であらう。大病院大診療所が大資本を背景にして資金のかかつた博士を看板に營利的な經營をし出せば群小の開業醫は自然今日の小賣商と軒を並べる樣になるに相異ない。其の良否を論ずるのでは無い、今や重要な時季に際會しつゝある。解放運動の手の中に眞に資本家の手を離れた病院を診療所を作る爲めには是等既成の實費診療所とは旗色を異にした實費或は無賃式の病院を建てねばなるまい。

四、醫業國營論

醫業國營論も結構である。それは議論であつて實踐ではない。況や解放運動の先驅ではあり得ない。資本家地主の政府が醫業權を統制するのはまだしも醫術の實施にまで一々指揮命令をする樣な事になつたら、、、、の、、、達はどんな治療を受けしめられるか知れたものではない。解放運動の成果を擧げ得た後ならば知らず、今日國營論をなす事は無産政黨としても如何であらう。鐵道や煙草の國營と並列すべくあまりに危險が多過ぎることを惧れるのである。

五、無産者病院の計畫

(イ)設立資金　勤勞無産者の少額出資に由る外諸種の興行例へば音樂會、演劇會、花賣無産者デー、原稿料の分割等々の利益に依る。

(ロ)經營者　無産黨或は解放運動を支持する個人、或は其等の特別團體。

(ハ)實施法　資金千圓内外を一つの基本として勞働者街、小住宅地等の便利なる位置に小診療所を分散的に設け、將來は其等の結合による中央病院を患者收容設備となして設くる事。

(ニ)經營法　治療を受くる個人の收入と資力とに應じて其最大限の支拂を要求するのであるが概算的には一ヶ所に醫師二名看護婦三名調劑受付事務一名、雜役一名、位として一ヶ月の經營費約五百圓を要すると假定し、一日五十名の外來患者を有すれば一人一日分が十五錢位の治療費で濟むから約一割は支拂不能

として約二割の人々には平均一日治療費二十錢乃至二十四錢位を支拂つて貰ひ、他は十五錢としてよい。是等の詳細な計算は玆には避けることとする。

六、無產者病院の任務

恩惠的社會事業でなく、溥利多賣主義的資本化を排して純粹の解放運動の先驅に交る事は何と云つても吾々の最初の任務であらねばならぬ。其處に於ては醫療の科學を守り、欺瞞と魔術とを排し、醫者と病人とがコムラードである事を必要とする。けれども病人の思想に對しては治療の範圍ではコスモポリタンであり度い、病院經濟を公開し、其と共に患者の生活實體を露出して貰へば無理なく、非難もなく經營されるであらう、是に由つて其の診療所は一方に於ては其、、、な、、、、の、、、となる事を心懸けねばならぬ。

一年を經れば少くとも一千戶の吾々の得意先を作る事が出來るであらう。其の御得意こそは吾々の永久に失つてはならぬ者である。

私が今次の選擧戰に際して痛切に感じたことは、當初から最後の日まで一度も心配する事が出來ぬ程此の意味の得意先を信賴する事が出來た事である。歲費のみを當にした選擧費の借金も充分の自信を以つて返却する事を約束したし、一切の事業を其儘經營し、診療しながら夜每の演說に出た丈けで濟ませた。或人は豫め選擧の準備がしてあつたらうと想はれるかも知れぬが、選擧の初まるまで私は政黨（社民黨）の人ではなかつたし、未だ政治運動に關係した事もなかつた。黨內の選擧通の人には最後まで危ぶんだ者もあつた。けれども既成政黨の通達は反つて私を恐れて居た樣である。二千戶に餘る得意を本所內に有して居るのに僅かに千五百の當選數をも得られないなどと想像する事が出來なかつたから若し是の事實が裏切られるならば吾々の診療所の無產大衆に對する信用の否定の外何者でも無いと考へて居た。とは云へ今日私は政黨人としての將來には非常に煩悶せざるを得ない。

私の任務は寧ろ、只、、、、、、、にあり、無產者病院の設立にあり、吾々の診療所は其の眞の任務を遂行すべく尙多くの餘地を殘して居るからである。

七、結語

無產者病院に望はあれ、全日本の無產運動に呼びかけられても居るが、其の醫者を得る事が困難で行詰つて來た。解放運動の尖銳の中に居る若い醫士達はまだ極く少數であるがそれ等の人達も陰慘な第四階級の人々に混つて地味な診療所經營をしたり、夜も晝も無報酬の診務を繼ける樣な根氣は出て來ない、のではあるまいか、鬪爭意識のみ先走つて忍苦の沈思は出來ないのではあるまいか、それとも資產家や中ブルの子等ばかりで社會科學の研究はするが、或は指導者にはなるが、或は學位でも取つたらやるが、等々の災であらうか、科學の他の部門には醫者程大衆に直接するの特權を有する業務は無い是程人々の心持に喰い入る事の出來る仕事も無い樣である。醫が仁術であるなどと古臭い言葉を止めよ、

解放運動は吾々の手の中に在るではないか。

無產婦人運動概觀

山川菊榮

普通に無產婦人運動といふと、一般的な無產者運動から獨立したもので、特殊の婦人團體を主體とした、特別な運動であるかの如く解せられてゐる。けれども事實が示すようにそれは單に一般的な無產者運動の內部で、婦人が主體となつて起す特殊な活動を意味するにすぎないので、從つて時には婦人團體が主體となることもないではないが、普通には、政治運動、經濟運動のあらゆる方向にわたつて、一般的な無產者團體が、無產婦人運動の主體でもあれば、その指導的地位を採るものでもある。

政黨、勞働組合、消費組合その他の團體は原則として婦人の加入を認め、性別によらず政治上の意見又は經濟的利害の一致によつて結合するのを常としてゐる。けれども日本の場合には、治安警察法第五條によつて婦人の政黨加入が禁ぜられてゐるので、婦人は政黨に附屬する婦人團體――婦人同盟――を通じて黨の運動に參加してゐるのである。

政黨以外のすべての無產者團體は、名實共に婦人に開放せられ、婦人は男子と共に戰線に參加してゐる。各種無產者團體を通じて組織されてゐる婦人の總數については、目下のところ正確な調査が存在しないらしい。戰線の分裂は諸分派に屬する群小又は(群大)團體の競爭意識を極度に刺戟して、所屬員數の如き、單純な事實についても、互ひに虛勢を張り、誇大な報告を競はうとする傾向があるので、比較的公平な立場に在り、かつ內部的事情に通じた個人又は團體の調査の得られぬ狀態に在ることは遺憾である。

大正十五年十月現在、產業勞働調査所の調査によれば、勞働組合に組織せられた婦人總數は約一萬となつてゐた。その後年を追ふままに深刻化した不況と分裂鬪爭の激化、及び彈壓政策は、互ひに相俟つて一般的に組合運動の發展を阻止し、その沈衰を來さしめた。謂ゆる自然發生的な諸所の爭議には、殆んど婦人の參加しないものがなく、かつその刹那に於ては男子にも增して勇敢に、獻身的に戰ふのがその常ではあるが、さういふ緊急な瞬間が過ぎ去ると共に、彼等はその姿を戰線から消してしまふことが多い。これは一時的、局部的な經濟鬪爭に參加した婦人を、永久的に組織し訓練する運動の未發達を示すものである。かような傾向は、日本のみならず、どこの國でも勞働婦人の運動に共通のもので、二重の隸屬、二重の搾取のもとにある資本主

義下における婦人としては、或程度まで避け難い所ではあるが、日本の場合に特にその程度が甚しいのは、何としても日本婦人の特殊的地位と關聯して考へられねばならぬ所である。

大正十五年度に於て總同盟所屬婦人組合員約三千人、組合評議會三千人、官業總同盟一千人が女子組合員一萬人の主たる內容をなしてゐた。其後分裂により、總同盟の女子組合員中約二千名は、日本勞働組合同盟に屬することゝなつた。この二全國團體は各々婦人組合員のために、平易な啓蒙的機關誌を發行してゐる。最近に舊無產大衆黨系の指導分子によつて無產婦人聯盟が創立されたが、まだ婦人の組織に對して十分な活動を行ふだけには至つてゐないらしい。

農民組合は戶主を單位とするので、原則として戶主でない婦人は、殆んど加入して居らず、婦人はたゞ組合員の家族として、間接に組合の影響下にあるといふにすぎない。每年の日本農民組合大會では、婦人部充實の件が吉例の如く提案されながら、具體的には何らの進展を見ずに終つた。

勞働組合は、婦人を獨立の經濟的要素として、近代的產業勞働者としての資格で組織する。しかし農民組合は、家族關係を基礎として婦人を組織してゐるもので、婦人は正規の會員でなく、その團體の外廓をなす漠然とした、緩かな補助團體をなしてゐるものである。勞働組合の場合にも、組合員の家族を組織する所の、かゝる補助的な團體の必要は屢ゝ認められ、現に着手せられた例もないではなかつたが、未發達のまゝに終つてゐる。しかし婦人の大衆動員のためにはこの種の組織は極めて必要であり、運動の進展と共に將來再びこの問題が取上げられるに相異ない。

消費組合には約五千名の婦人が加入してゐる。これは思想的對立による分裂の行はれて居らぬ、唯一の大衆的經濟團體であり、かつ無產階級の婦人を、主婦として、消費者としての日常の利害に訴へて組織する上に、最も有利な組織の形態である。しかし長期仕拂ひ及び御用聞き並びに掛買制度の如き、封建的な經濟制度の遺習が今なほ吾々の消費生活に相當深く根をおろしてゐるので、消費組合の運動は、さうした因習と戰ふために相當の時日と精力とを費さねばならぬ。從つて現在では、消費組合の利用される範圍と程度とは極めて限定されて居り、無產消費者のうちの一少部分が、その日用品のうちの一部を消費組合に仰いでゐるといふ程度にすぎない。消費組合が營利主義の商業と鬪ふ唯一の武器は、よい物を廉く賣るといふ點にある。然るにその組織が小規模である間は、この唯一の武器がその機能を發揮することを許されず、從つて物質的利益を度外視した少數先驅者の犧牲的な努力によつて維持せらるゝに留まり、無意識的な大衆を獲得することが困難である。從つて政治的立場の如何を問はず、一人でも多くの會員を得ることが此運動の目的を達する上には特に重要である。特に政治運動、勞働組合運動は、家庭生活と直接の關係なく、或程度まで家庭から獨立してゐることを必要

な資格とするために、家庭婦人の參加を困難ならしめてゐるが、消費組合の場合は、家庭婦人たることが障害でないのみか、却つて本氣に參加させる上に有利な條件として働くものであるから、無産者運動の圏外に取殘されてゐる家庭婦人の大衆を組織するために、大々的に利用されねばならない。

　無産政黨に所屬する婦人團體には、現在、社民黨の社會婦人同盟及び日本大衆黨の無産婦人同盟がある。このいづれも支持團體たる組合の婦人及び黨員の家族を背景としたもので、政黨の運動に婦人を動員する役割を務めてゐる。昨年二月の總選擧以來、各團體は無産階級の政治戰の陣頭に立つと同時に、小ブルジョア婦人團體と提携して、婦選獲得共同委員會を組織し、婦人の政治的權利獲得について戰ひを續けて來た。從つてその宣傳的效果は相當に著しく、特に下層小ブルジョア婦人——職業婦人等の間に隱然たる勢力を植ゑつけたことは否まれない。然し組織運動の進展は依然として遲々たるものがあり、勞働者貧農の婦人の間に、堅固な地盤を築くことはまだ容易でない。政治運動は家庭を離れた運動である。然るに婦人の大多數は家庭に縛りつけられてゐる。勢ひ家庭的責任の輕い少數の年少婦人のみが主としてこれに參加し、おくれた家庭婦人の利害や感情とかゝはりのない、それを代表するには餘りに高踏的な、獨りよがりの運動に陷りやすい。若い獨身の職業婦人や、昨日女學校を出た許りの鬪士の妻君から成る無産婦人團體の代表者との演說が內容の空疎貧弱を包み切れないに反して、主婦として、母親として、職業婦人として、遙かに多くの勞苦と經驗を積んだ小ブルジョア婦人の演說の方が、遙かに實際的、具體的で婦人大衆を動かす力が多かつたことは、總選擧以來屢々耳にしたところである。演說のみならず、實際の運動の上にも、この種の批評は他山の石として役立つであらう。

　私は事實を枉げることによつて何人をも益し得るものとは考へない。覊き奴隷生活に對する叛逆の烽火が、全國到る處に上げられ、無産婦人の鬪爭が各地を席捲しつゝあるが如き一部の人々が好んで弄ぶ煽情的な筆致は、運動の現狀とは相距ること遠きもので、實際には、不況と反動政治の下における全運動の沈衰の影響をうけ、更に一般より一段おくれた婦人運動の現狀は、決して拱手してたゞ樂觀して居ればよいようなものではない。一方における勞働者農民の窮乏と奴隷化、他方における頽廢的な享樂主義の流行は、無産婦人の向上心と健全な反抗とを共に麻痺せしめて、支配階級の奴隷乃至玩弄物としての屈辱的な運命に永久に滿足させようとしてゐる。無産婦人をこの狀態から救はんがために、眞實に力强い運動を發達させるためには、過去及び現在における誤謬弱點を十分に認識してかゝる必要がある。何といつても婦人運動は婦人自身の自主的な行動が基礎的な條件で男子の理解や支持は勿論重要ではあるが、補助的な任務しか果すことができない。この點について婦人指導者の責任は特に重大である。

東阿弗利加土人の話

大山卯次郎

一　人種と其由來

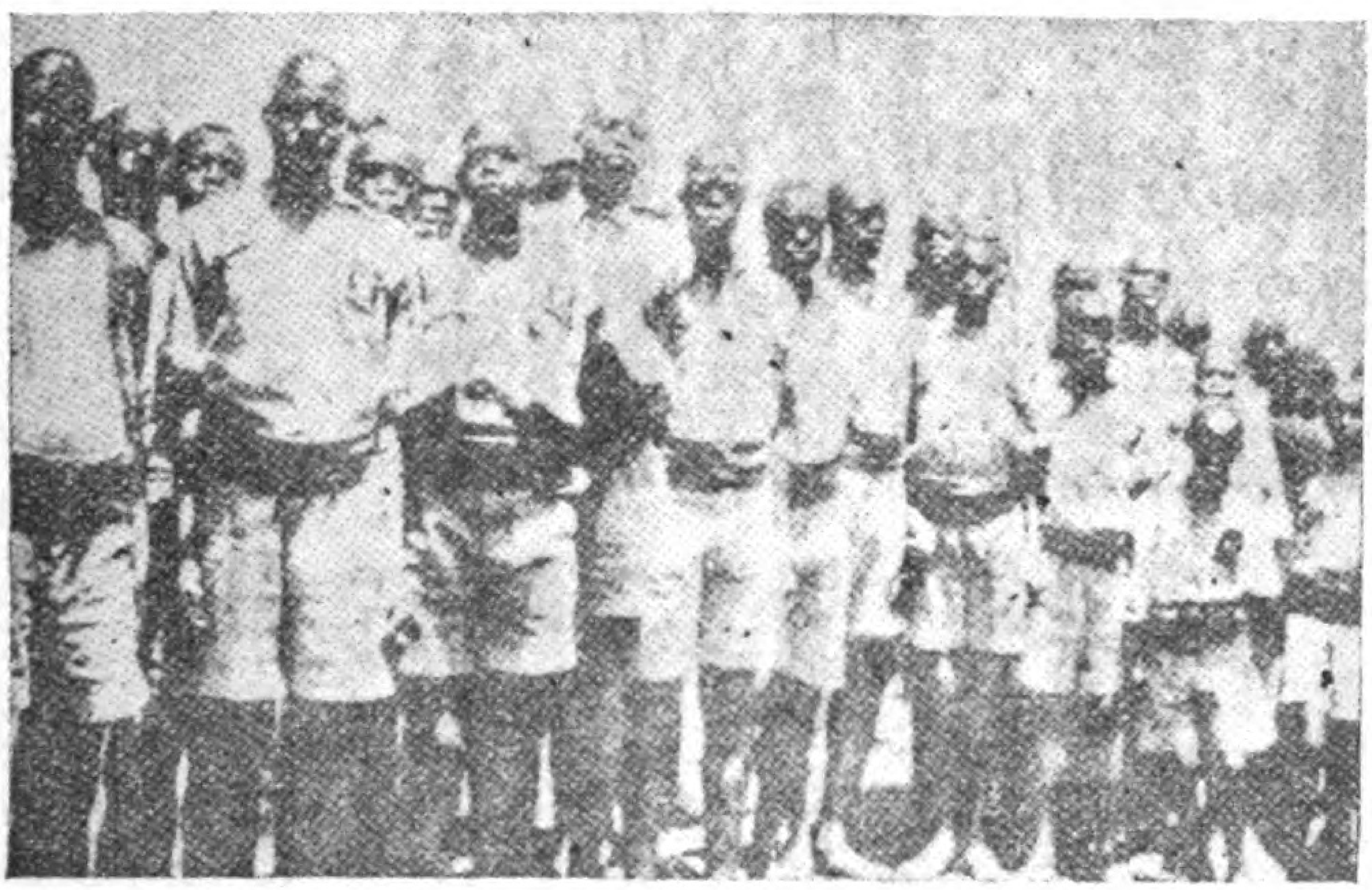
阿弗利加の土人は云ふ迄もなく皆な黒ん坊である、そうして孰れも頭の髮が縮んで居る。彼等は一寸見た所では同一人種の樣ではあるが些細に點檢すると夫が非常に多くの種族に分かれて居り、最も顯著な特徴のみに依り區別するとしても其數が五十を下らないと言はれて居る。現に吾等が旅行中見た丈けでも彼等の内には墨の樣に黒い者もあれば剝げた樣な淺黒い者もあり、髮の大縮れもあれば小縮みもある、或は手足の長いの短いの、頭や顏の丸いの長いの、又は肉付の良いの惡いの抔色々な種類に分れて居り、夫が互に違つた風俗や習慣を維持し又異つた言語を使つて居るのである。尤も是等の土人が如何にして阿弗利加に入り込み又は繁殖したかは明でないが、多くの人種學者は阿弗利加の原人は或小人種であつたと云ひ、今日南阿の奥地に發見せらるるブッシュマン又はウガンダ、コンゴーの森林中に居るピッグミーと呼ばれる小人等は即ち其遺種族であると云はれて居る。併し原人種の事は之を別とし阿弗利加に於て最も廣く知られて居る先住人はニーグローであつて、專門家の說に依れば彼等は少くとも今より大凡二萬年位前既に阿弗利加の各地に繁殖して居たのであつて、是が狹い意味に於て今日の阿弗利加土人の祖先であると見做されて居る。其後ハミチックとか又はセミチック抔に屬する異種族が、或は東歐地方から、或はアラビヤ又はペルシヤ等の西亞細亞方面から此大陸の北部又は東北部に入り込み、一旦埃及、アビシニア又はソマリーに根據を作り、夫より更に南に向て發展し、又は後に侵入した強者の爲に壓迫せられて南に退き、同じ事が幾度か繰り返へされつつある間に先住人と侵入者との混血が行はれ、遂に複雜な今日の種族を見る樣に成つたのだと云はれて居る

二　代表種族

イ　阿弗利加に於ける日本人

ケニヤの奥地で印度洋岸から大凡七百哩程内方の内地にウガンダと

云ふ英國の保護國がある。其面積は約九萬四千平方哩であつて日本の約三割七分程に當る小國なるが、其處の土人は大體に於てバンツー種族に屬し、非常に恰悧で且つ中々進歩的である。多分阿弗利加の土人中で最も優秀な者の様に思はれる、夫で英國人は此土人の事を阿弗利加に於ける日本人と云ひ、ウガンダの事を書いた或書物抔はジヤパニース、イン、アフリカと云ふ名をつけて居る。詰り進歩的阿弗利加人と云ふ意味である。現に彼等は相當に事務的才能を有つて居り、好んで店員とか吏員とか又は其他の智的方面の職業に從事すると同時に、技術的方面に於ても可成克く發展して居る。記者の實見した處に依れば英國統監府の印刷所とか又は各種の製作所抔では監督が英國人であつた外は書記も技術者も總てウガンダの土人を使用して居り、又諸官廳でも商社でも受付帳簿方又はタイプライター掛抔の様な下級の職員は悉く是等の土人であつて其成績は甚だ可良であると云はれて居た。斯う云ふ様な事は他の土人の間に於ては決して見られない所であつて、之を阿弗利加の日本人と云ふのは強ち不當ではないと考へる。茲に一言附け加へて置かねばならぬ事は、此種族の土人は概して禮儀が正しく非常に丁寧な事である。彼等同志が挨拶して居る所を見ると恰も日本人の夫の様に低く腰を曲げて居る。



阿弗利加奧地のモダンボーイとも云ふべきウガンダ
青年のフートボールチーム

　此土人の事に付最も面白く思はれるのは有名な探險家スタンレーが一八七四年英國で公表した阿弗利加探險記の一節であつて、夫れには大要次の様に述べて居る。

「阿弗利加に於て代表的土人と其風俗とを知らんと思はば宜しく赤道直下のウガンダに就て之を見るべきである。至る所に廣潤な沃野があつて滿目の綠は恰も水が滴る様である。其心氣の爽快な事、植物の發育の速かな事、バナナの克く繁茂する事、其幹も葉も其實と共に偉大な事は實に此地方獨特である。然もバナナは土人の食物である。食物が豐富なれば一般の氣風も亦自ら悠長である。彼等は此處彼處の樹蔭に太平な顏して涼氣を求めて居る、云ふ迄もなく自然が微笑する所に人も亦微笑して居るのである。之をエデンの神國とも云ふべきか。されば此邊の土人は目元涼しく何となしに穎敏の相を顯はし、體格は肉肥へ骨太く色は艷々と滑かに唐金の如く如何にも壯健な様である。之を他の部落の倭陋で汚穢なのに比ぶれば同じ阿弗利加人とは思はれない、殊に其智識と能力との優秀な事、

謹倹の敦厚な事は其特色とする所であつて、此には裸體で徘徊するものがなく孰れも皆鼠色の裾凋き服を着て居る抔は其最も變つて居る所である。而して家々の周圍には畑を作り豆、甘藷、甘蔗、珈琲、烟草の類を植ゑ、畑の傍には無花果、芭蕉などが繁茂して居る。然も其手入の善く行き屆いて居ることは文明國の農家の有様に變らない。婦女の容姿は他の黒女より幾分か上等なれども歐洲人の目に留る程の者は見當らない。國王ムテサの王宮には宮女が凡そ五百人居る。予は幸に夫等の者を一見したるも眼を注くに足る者は僅々二十名に上らない。其内秀麗と認められたものは只三名に過ぎないが、孰も黒白雜種の色にて鼻隆く唇薄く眼は鈴張りの樣なれど、恨らくは頭髪縮みて短かく黒人種固有の特徴を失はない事が其缺點である位である。併し此三名の佳人は他の鼻低く唇厚く肉の肥へた黒女の樣に王の寵愛を受けないとのことである」云々。

以てウガンダ土人に就き其大要を窺ふに足ると思はれる。

ロ　重寶なスワヒリ種族

本種族は東阿沿岸地方並にザンジバル島に於けるバンツー種族とアラビヤ人との雜種であつて、之をスワヒリと云ふのはアラビヤ語で沿岸人と云ふ意味なのである。蓋しアラビヤ人は太古の時代より東亞弗利加の海岸地方に植民し又は之と通商を營んで居た關係上久しく此地方のバンツー種族と混血して居たのであつて、其の雜種人を沿岸人と云ふのは彼等の居住地が沿岸地方であるからである。而して此土人は色は黒いが流石に人品の良いアラビヤ人の血統を受けて居る丈けあつて、他の土人に比し遙に男前と女前が良い。又其言葉は云ふ迄もなくアラビヤ語とバンツー語との雜語であつて、嘗てアラビヤ人が内地の土人に對して勢力を有つて居た爲に、南はナタルから北はアデン迄、又東はモムバサ、ダレサラーム、ザンジバルを中心とした沿岸一帶の地方より、西はコンゴーの奥地迄殆ど各地の土人により理解されて居る。從つて此言葉を知つて居る時は大抵の内地の旅行には殆ど不自由を感じない。殊に此言葉の特色とする所は語格が簡單であり、又發音が鮮明な事で、アラビヤ語とバンツー語の發音の困難な所が全然除かれて居り、外國人には非常に語り易く又聞き取り易い利益がある。

次に此の種族の特色とする所は、彼等が古き昔の時代よりアラビヤ人に接觸して居た爲智識が割合に進歩せる事にて、彼等はアラビヤ人に依りて生活を營み、其家庭並に店舗の使用人として雜用に從事し、内地旅行又は貨物運搬の際には常に其人足として使用せられた爲、鐵道開通又は自動車使用前迄は東阿に於ける主たる運搬機關なりしのみならず、今日にても鐵道又は自動車に依らない運搬は尚此人種に依りて行はれ、歐洲人其他の外國人の家庭又は商社、官廳の小使、人足等は殆ど彼等に依り獨占せられて居る。

ハ　勇猛なマサイ種族

マサイはハミチックとニーグローとの雜種で、普通之をニロチック人種と云ふて居る。蓋し彼等は嘗て或北方の地點から南に侵入しナイル河の盆地に於て繁殖し、夫より東南に進んでケニヤの高原に出でウ

アシン、ギシユーとして知られる肥沃地を根據地とし、東はタナ河附近、南はタンガニカのキリマンジヤロ地方に進出したるものなるが、今日ではウガンダ鐵道本線とマガヂー支線とによりて包まれたタンガニカとケニヤに跨るマサイ留保地に收容せられて居る。

此土人の特色とする所は彼等が非常に勇猛な事である。一體阿弗利加の土人は戰鬪氣分に乏しいのが特前の樣である。從つて彼等は嘗てアラビヤ人から野獸の樣に狩り立てられ奴隷として諸方に賣り飛ばされたのである。併し獨りマサイは非常に慓悍で他の土人から恰も鬼神の樣に畏れられ、流石に獰猛なアラビヤ人の奴隷狩も之には閉口したと見え、マサイの地方を境とし夫より奧へは寄り付くことも爲し得なかつた。吾等は克く楯や槍を持つた勇猛さうな阿弗利加の土人の繪を見ることがある、夫は大抵マサイの勇士を描いたものであつて、如何にも其面貌に戰鬪的氣分が漲つて居る。夫で此種族には暴れ獅子を手槍で突き止めたとか又は豹を組み伏せたとか云ふ樣な岩見重太郎的な武勇談が澤山にある。最近東英國人の目撃談として傳へられる話に斯んなのがある。



マサイの勇者

或時羊の一群が麗かな朝の日光を浴びつつ牧場に草を食つて居た。其處へ何處からか突然一匹の牝獅子が顯はれて瞬く間に其五六頭を噛み掲ゑた。此時其の傍に立つて居たマサイの青年、其年の頃は大凡十六七才なのが忽ち身を躍らし鎗を振つて獅子の頸を突き刺いた。そうすると獅子は奮迅の勢で青年に飛び懸り、左の肩先から右の脇腹に手を觸れた。然るに、其時遲く此時早く、青年は一聲高く修羅王の樣な勢で鎗先鋭く其獅子を突き止めた。其瞬間の光景は唯々電光石火と云ふ外なく見る者皆膽を奪はれ滿場只寂として微動だもする事が出來なんだ。然かし青年は神色自若として靜かに獅子の死を見定めた上、傍の白人に膏藥を求め其傷口に手當てした。其勇氣と豪膽さとは眞に人間術とは思はれなかつた云々。

又或時マサイに一人の青年があつた、彼は幼少の時父を失ひ祖父の手一つで育てられて居た。軈て十六才の頃祖父が老衰したので生活の責任は總て青年の肩に掛る樣に成つた。然るに隣村に三人の兄弟があつて常に老人と青年とを馬鹿にし、其蜂蜜を盜んで仕方がない。或る時老人と青年とが連れ立つて隣村に行きつつあつた所が、例の三人兄弟が又も蜂蜜を盜んで居る。そうすると三人は惡事を見られたのに心付き老ボレと小供を疊んで仕舞へと、いきなり老人を目がけて打つて來た。此時青年は何を小癪なと電光の樣に手鎗を振

ひ先頭の者の心臓を狙つて一撃に突き斃し、後から飛んで來た第二の者の頸を突き刺いたので、第三の者が又飛び掛つて來た。青年は横に鎗を着はして其肩先きを突き立てたので、流石の悪黨も辟易して逃げ去つたが青年の勇氣と沈着とは眞に驚くの外はない云々。

此類の武勇談は殆ど無盡蔵である。然かし彼等の文化の程度は極めて低い。職業上から云ふと彼等は全然遊牧人であつて農業を好まない。彼等はスワヒリが人足業を立看板とする如く、好んで牧畜に從事するも農業には少しも趣味がない。其代りに心から家畜を愛し、其所有する家畜の多いのを仲間に對する一種の誇として居り、昔から屢々他の種族を襲撃したのも其目的は家畜を捕獲する爲であつたのである。

二　農業に趣味を有つキクユ種族

キクユはマサイとバンツーとの雜種であつて、ケニヤの高原の奥地に於てウアシン、ギシユーと相並び最も肥沃地と云はるるキクユ地方に據がつて居る。此の種族は其勇猛な事に於てマサイに似た所はあるが、農業を好む點に於てマサイと違ひ、又スワヒリとも異つて居る。

從つて歐洲人の移住者が農業を營むに當りマサイ、スワヒリ等の土人は農園の労働者として殆どダメなるも、キクユは好んで其雇人に應じケニヤの開發に最も有用な人種と認められて居る。



キクユの娘

三　裸體から着物へ

現在の土人の開化の程度は、一言にして言へば裸體から着物へと進みつつある所である。即ち彼等は從來赤裸、又は樹皮若くは毛皮抔を身に掛けて居た位の處から、段々と着物を着る様に成りつつあるのである。例へば沿岸の諸港、都會地、大きな汽車驛のある處抔では外來の影響を受けることが多い爲土人の生活状態も次第に改善し、餘り裸體姿を見ない様に成つて居る。併し奥深く内地に行くと、未だ未だ樹皮や草の葉抔から作つた小さな切を前に垂らした許りの裸體の土人が澤山居るのであつて、阿弗利加の前途も中々遼遠の感がする。現に吾等一行がタンガニカの奥地のキゴマに往つた時、其處はダレサラーム港から約八百哩の内地でこそあれ、中央鐵道の終點驛であるから可成重要な處なるも、地方

から出て來る人足共を見ると何れも皆肩から全身に毛皮を掛けては居たが、前のものは全然御構ひなしである。然かも彼等は夫に少しも神經を惱まさない。多分夫は身體の一部であるから手足と區別する必要は無いと云ふのが彼等の哲理であるかも知れない。併し哲學的理由が何れに在るとしても彼等が所謂世界の文明から餘程隔つて居る事丈けは事實である。

然らば右に云ふ土人の着物の材料は何んであるかと云ふと、夫は總て木綿である。尤も其約半分は生木綿其他は晒、更紗、染色等の品であつて、生木綿の過半は日本より供給し、加工品に就ても日本からの輸入は少くない。此外都會に居住し又は都會に出入する土人は段々瀬戸物、硝子器、エナメル器抔の様な輸入品の味を覺へ、年々實行を增しつつあるのであるが、日本からも大分輸入されて居る、併し詳しい事は省略し、玆には東阿弗利加に對する日本からの是等の輸入高は一ケ年に大凡千五百萬圓位であつて、其約半分は英領諸國へ、其他はアビシニアに赴くものである事を記錄するに止めて置く。

四　樂天的で無邪氣な土人

土人は孰れも非常に樂天的である。先づ第一に彼等は生活の苦勞を知らない。土地は廣いし、食物は充分であり、又贅澤と云ふものを知らないから世間的に何等心配する事が無い。唯困るのは政府へ人頭稅を納めねばならぬ丈けである。從つて此稅金を支拂ふ爲めに余儀なく歐洲人の耕地又は町に出て勞働するも、此必要さへ無ければ彼等は決して働くことを好まない。尤も政府が人頭稅を徵收するのは土人を働かせ樣とする方便であつて、其爲に土人が働かねばならぬと云ふ事は政府の豫定の計畫であるから致方が無い。蓋し土人の側から云へば彼等は衣食住の苦勞がなく、眞に生活の滿足を感じて居るのだから何も齷齪と働く必要がない。貯金などして老後の謀をする抔は彼等の思ひも依らない所である。併し土人が働かない爲に困難するのは歐洲人の移住者である。彼等は東阿弗利加に於て農業を計畫し、土地の拂下を受け、多額の資本を投じ、漸く事業に着手して見ると、土人の勞働者が得られない。其處で是等の移民達は政府に向つて頻りに苦情を並べ立て、土人に勞働を強制する樣喧ましく請求して居るのであるが、奴隷制度に反對する文明國の政府としては、直に其要求に應ずる譯にも行かない。併し本國の移民に勞働者を供給する事は政府に於ても其必要を認めて居るのであるから如何にして奴隷制度の形式を避け、實際上土人に勞働を強制し得るやと云ふ事に就き中々苦心を凝らして居る樣である。其處で政府は其手段の一つとして、土人に對し過重な人頭稅を賦することと爲し、普通十六歲から六十歲迄の男子に對し一人に付一ケ年拾二志即約我六圓、又或地方に對しては參拾志即ち我拾五圓を徵收し、若し小屋一ケ所に付男子の納稅者が無ければ人頭稅一人分に相當する小屋稅を納附せしめて居る。右は天井も無く床板も無い小さな掘立小屋に住む裸一貫の土人の負擔としては中々の重稅なる

も、政府は之を勞働強制の意味には解して居ない。單に土人を産業の爲めに指導し啓發する一の教育制度と見做して居る樣である。

右に付政府の困難とする所は、土人が右の稅金を納入しない場合に如何ともすることが出來ない事である。勿論稅金を納めねば監獄に入れる事にして居るも、土人は夫れを恥辱とは考へない。然かも彼等が刑期を終へて出獄すると、仲間の者から新智識として迎へられ日本で云へば恰も洋行歸りと云ふ樣に大持てに囃立てられるのだから堪らない。又監獄と云つても文明人が經營する以上は彼等の小屋以下の設備にはせられない。又食物も相當な物を與へなければならぬ。從つて囚人等に取りては、却て部落に居るよりは遙に優待せらるゝ結果と成るのであるから、彼等は夫を少しも苦痛としないのである。現に最近聞く所に依れば、此種類の囚人四名が或日曜日に一人の看守に連れられ近傍の湖水で游泳中に其看守が誤つて溺死した。若し彼等が監獄に繋がれるのを苦痛とするならば此時こそ逃亡の最好機會であつたのである。併し彼等は入獄を洋行位に心得て居るのだから逃亡する抔と云ふ事は彼等の思ひも寄らない所である。其處で四人の囚人は悠々と其場を引揚げ打ち揃ひ監獄へ歸つて來たとて此頃一つの笑話に成つて居る。併し土人も近頃は政府の課稅及勸誘並に宗教家の教化に依り、漸次勞働の道に入り、又少々ながら外來の文明に觸れ、衣服及器具等の輸入品を使用することを覺え、是等の物品を購入する爲自然の必要から勞働する樣に成り、次第に勤勉の風に化せられつゝあることは吾人の大に注目すべき所である。夫で事業家の側でも土人を使ふ爲めには色々と工風を凝らし、彼等の好奇心を挑發する樣なことを遣つて居る。或時勞働者を集める手段として毎朝錢投げをやつて見た所が大層土人の人氣に投じ、最初の内多數の土人が集つて來たので、主人公は大得意と成つて居た。然るに其後土人の方で餘り氣乘がしない樣に成つたから何故かと尋ねて見ると、土人の代表者の云ふには投げ錢は大變結構ではあるが、吾々大人が小供達と一所に成つて錢を拾ふのは甚だ體裁が惡いから、大人は大人同志、小供は小供同志に區別して貰ひ度いと云ふ事を申出たと云ふことだが、土人も小供扱には閉口したと見える。

夫から彼等は概して非常に無邪氣である。詰り生活上の不安と云ふものがなく、激しい浮世の波に揉まれて居ないから、氣分が自然と暢んびりして居るのであつて、面白いと思ふ事には萬事を忘れて夫に現を拔かすと云ふ風がある。其代り彼等は極めて物に感じ易く、少しの事を怒るかと思へば、又些細な事を非常に喜ぶのみならず、氣分の轉換の速かなことは恰も小供の樣である。併し其結果として彼等には少しも自制力がない。例へば人足業を專賣の樣にして居るスワヒリ人の如きは、終日重い荷物を頭の上に置き、運搬に疲勞して居ても一旦夫れを下に降し食事を濟まして一休みすると忽ち今迄の苦勞を忘れて笑ひ、歌ひ、巫山戯ると云ふ鹽梅であつて、其氣分の輕快なのは文明人の間には一寸見難い所である。殊に面白いのは彼等が西洋人抔の從者

として數週間又は數ケ月間內地を旅行する場合に、愈最後と云ふ時に至り急に家鄉が戀しく成ると他の事は全然打ち忘れ、長い間の給料も貰はず、主人の許から逃亡することさへあると云はれて居る。尤も彼等と雖も或場合には中々慾張る樣ではあるが、氣に向けば計算は御構ひなしに一週間も十日も餘計に働くそうであつて、世智辛い社會の者には一寸想像し難い樣な多くの可憐性に富んで居る。

又土人が非常に柔順なと同時に遲鈍であることは一般の定評あるが、キクユ種族の者は特に其傾きがあつて、彼等は主人の命令とあれば如何なる事も正直に遵奉し、植木に水を遣れと云はるれば雨が降つて居ても矢張り命令通りに水を遣るそうである。

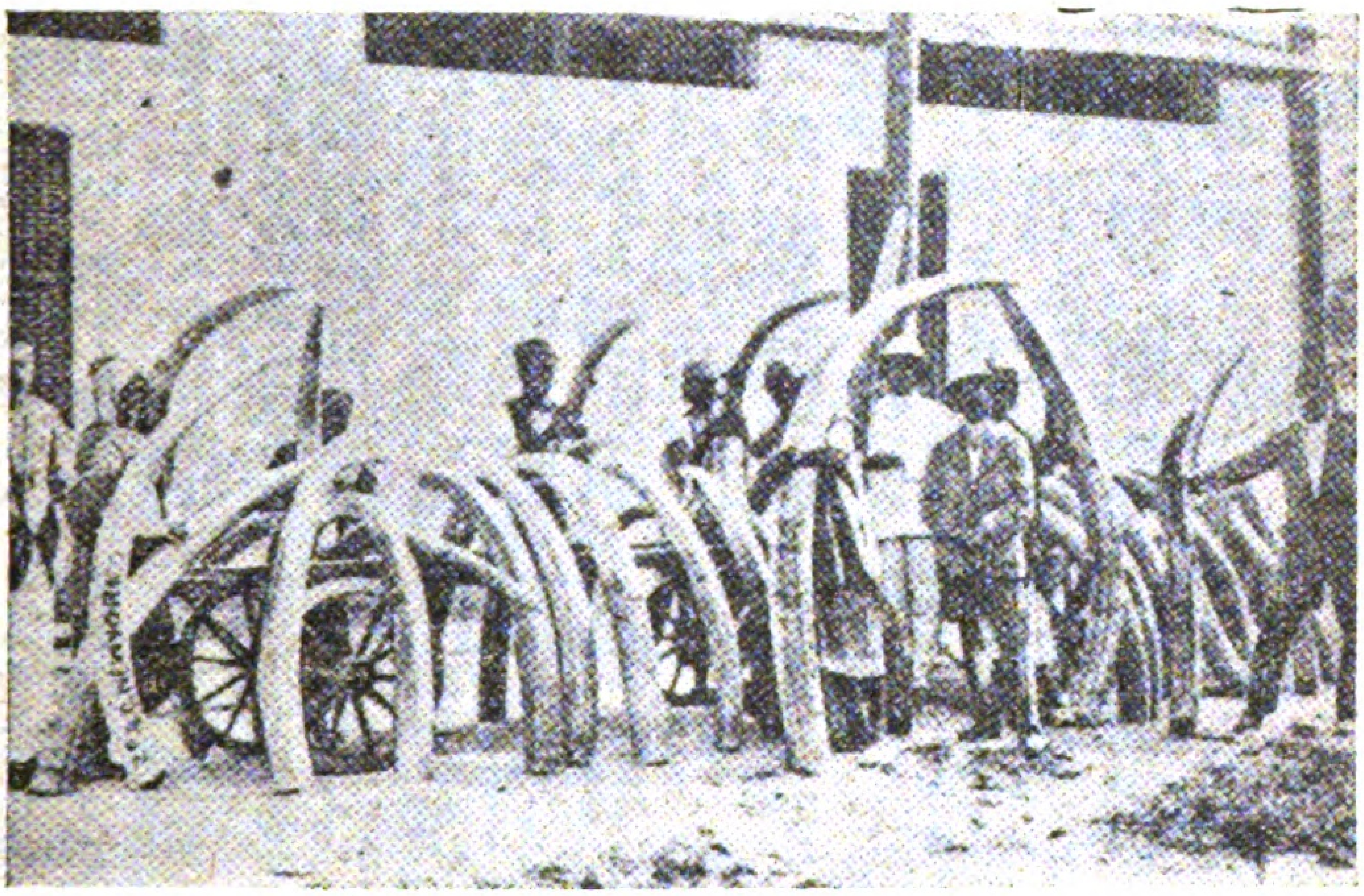
次に土人は無邪氣ではあるが平氣で泥棒をするさうである。然かし彼等は夫れを大した惡事とは思ふて居ない「夫れは俺のものだ、返せ」と云へば「そうか」と云つて平氣で返へすさうである。

最一つ面白いのは亞弗利加では至る處に人力車が流行して居る事である。モムバサやダレサラームの樣な開港地は勿論、八百哩も內地のウガンダに於てさへ土人が盛に車を挽て居る。尤も夫れは日本の人力車よりは遙に大きく、孰れも二人乘であつて、普通一人が前で挽き二人が後から押して居る。さうして夫が何とも名狀し難い氣の輕い陽氣な調子で唄を歌ひながら元氣に走つて居るのである。或時其車に乘つた或西洋人が、餘りに面白そうな唄であつたから通譯者に其意味を尋ねた所が、夫れは

「此外人は餘り肥り過ぎて居る、チット食物を減したら良からう」

「重い重い顚つくり覆へして頸の骨を折つて遣れ」

と云ふ意味であつたと云ふことで、大分驚かされたさうではあるが、其氣分の快活さは中々無邪氣で面白い。吾等が乘つた人力車の挽手も矢張り愉快らしく歌つて居たが、賢明なる吾等は敢へて其意味を聞かなんだ。が多分御世辭の唄であつたと解して居た。



「ダレサラーム」市に於ける輸出象牙の檢査

五　出生から死亡まで

土人は云ふ迄もなく無教育である。無論文化抔と云ふ程のものはな

い。然かし彼等も亦時代を經た古い人種である。從つて昔から長い間に色々な風俗並に習慣が發達して居り、其内には極めて奇怪な事もあれば又頗る教訓的な事もある。今彼等の四大事件と稱せられる出生、割禮、結婚、死亡に付其習慣の大要を說明し、彼等の生活狀態研究の一助に供したい。

イ　出生

土人は出生を人生の四大事件の一つとして極めて丁重に取扱つて居る。即ち新婦が始めて姙娠すると吉日を卜し牛を屠り親戚、知人を招待して盛な祝宴を催す事に成つて居る。其時には結婚媒介人其他結婚の式に關係した重立つた人々は悉く招かれるのであつて、一同が集まると男の客と女の客とが二組に分かれ、男の組は近所の森林又は原野の中に良人を伴ひ、女の組は姙婦と共に内に止り、孰れも姙娠中の心得を注意し、夫が濟むと酒を飲み土人一流の唱歌亂舞を演ずるのである。

次に姙娠六ケ月目に又同じ連中を呼んで御馳走をする。其時は招待せられた連中は姙婦に毛皮の着物、食物及び籠を贈る事になつて居る。但し毛皮の着物は姙婦に風を引かぬ樣暖かにせよと云ふ心、食物は滋養物を勸める爲、又籠は生れる子供の生立ちが善い樣に姙婦が食事の度每に食物を少々づつ其内に入れて置き、外出する時に夫れを携帶し、途中出遇ふ小供に與へる樣にと云ふ意味なのであつて、中々面白い人情美のある習慣と思はれる。

最後に生み月に成ると又々同じ連中を招いて御馳走をする。併し其時には若い連中は招かない。夫はいざ出產と云ふ時の心得事を教はらねばならぬから、若い者が居ては不都合であるからである。其處で來客が又々男女二組に分かれ、男の組は良人を原野又は森林に連れ出し、女の組は姙婦と共に家に止り、夫れ夫れ出產前後の心得事を教へるのであるが、特に女の組は姙婦に勇悍である樣に注意し、恐怖すると難產するとか、又生れる子が虛弱に成るとか云ふ樣な事を云ひ聞かし、客の一人が產婦、他の一人が產婆、更に他の者が母親又は手傳人杯の眞似をして出產の仕方を實演して見せる。さうして其間に他の人々は歌を唱ひ興を添へる役目を努めるのださうである。夫れから姙婦は其翌日父の家を尋ね、母に食物の土產物を贈り、若し母が第二夫人の場合には第一夫人にも同樣の贈物をせねばならぬ。さうすると母及右の第一夫人も亦姙婦に相當の土產物を持たせて歸へす事に成つて居る。

其處で愈々出生の時になると、武器は若し生れる子供が女の場合には不吉だと云ふので、槍や楯を產部屋から取り除き、急いで產婆を迎へ、良人は一生懸命に妻の安產を祈るのである。但し難產の場合には平素怨みのある女の仕業だと云ひ、心當りの人へ赦免を賴みに行くさうである。さうすると賴まれた方では、神樣に怨みを忘れるから助けて遣つて貰ひ度いと云ふ祈りをするのが習慣であるとのことである。其處で愈々子供が生れると先づ第一に姑が夫を產婆から受取るのだそ

うであつて、夫に何等不思議はないが、或場合には姑が夫を舌で奇麗に嘗めると書いてある。若し夫が本當なれば姑たる事も中々容易ではないと思はれる。

次に不淨物は姑又は姑がなければ他の目上の婦人の手で産褥に近い所へ埋めるのが習慣だそうである。又産後の養生法は種族に依りて異なるもキリマンジヤロ方面の土人は出産後三ケ月間産婦を外出させない事に成つて居り、其間牛乳、生血、脂肪、肉等を充分與へねばならぬと云ふ樣な八ケ間しい規則があると云ふ事である。尤も初の四日間は姑が側に居て看護し、其後は婦の實母が來て萬事の世話をする事に成つて居る。夫で産婦は右の養生の期間が無事に濟むと頭を剃り耳輪、頸輪、足輪等を着け滿艦飾と云ふ出立で部落の中を一廻はりするのであるが、其時は部落の者一同から凱旋將軍の樣に祝辭を浴びせかけられ、又産婦に充分養生をさせた良人も大變に賞讃せられるそうである。

夫れから子供の命名にも中々六ケしい習慣がある。先づ吉日を選んで命名の日と定め、其日には毛色の美しい牡牛を屠り、部落の者を招待し、例の通りに歌つたり踊つたり大騒をするのであるが、其名は長男は夫の父方の祖父、長女は夫の母方の祖父、次男は婦の父方の祖父、次女は婦の母方の祖父の名に因んで付ける事に成つて居る。其時マサイ種族の習慣では産婦が先づ産兒を牛小屋に伴ひ牝牛の背に載せて乳を搾る儀式をする。そうすると良人が三人の長老と共に其處に來て命名するのであつて、後に屠殺した牛の皮は長く家内に保存し、其頭骨は家の入口に置かねばならぬ事になつて居る。併し牛を屠る事は都合に依りては小供が成長し割禮の式を行ふ時迄延期しても差し支へないそうである。併し面白い事にはキリマンジヤロ地方の土人は、男の子が死んだ後に第二の男の子が生れると其子の耳朶を少々切つて棄てる事になつて居り、若し何かの都合で其通りしない場合には、胸にエンダレットと云ふ特殊の頸飾をかけ、右足の二番目の指に指輪を挿さねばならぬと云ふ事である。又小供が生れて六ケ月に成ると、豆のスープを作つて婦の里方の祖父母及其他の目上の婦人を招待し、其小供に頸輪、腕輪、足輪を付け、其糞便をバナナの根本に棄てる式をするそうである。

次に小供に取り最も大切な事は齒の生へ初めである。若し不幸にして下の前齒が先きに生へる場合には非常に不吉と見做され、夫れが男の子の場合には殺して仕舞ひ、女の子の場合には婦を其子と共に里方に歸す事さへもあるそうである。又小供が死ねば婦は二ケ月間夫と同衾する事が出來ない。若し其間に小供が生れると非常な不吉として其子を殺す習慣があると云はれて居る。更に又男女の双子が生れると男の子を殺し、男のみの双子の場合には初めに生れたものを殺し、婦を他の子供と共に里方に歸すそうである。

ロ　割禮

吾等に最も珍しい事は彼等の間に割禮と云ふものを行ふ事である。是れは廣く各地の土人に共通する習慣であつて、其儀式は部落に依

り多少の相違はあるが、孰れも小供が青年期に入る頃行ふのであつて、之が濟まぬと男も女も一人前の人間とは認められない事に成つて居る。蓋し此習慣は太古の時代より廣く猶太人間に於て行はれて居るのであつて、阿弗利加の土人の外には多く其類を見ない世界の一の奇習である。阿弗利加土人の此習慣と、猶太人の夫との間に如何なる關係があるかは不明なるも、能く研究すれば或は兩者の間に多少の因緣が發見せられるかも知れないと思はれる。

マサイ種族の習慣に依ると、子供が割禮の式を行ふ爲めには、先づ以て父が淸めの式を行はねばならぬ事になつて居る。其方法は先づ酒を造つて部落の者を御馳走し、夫から物忌の小屋を建て、身心を淸めて駝鳥の羽の頭飾を被り、猿の皮の足飾と腕輪、小牛の皮衣、山羊の腰卷、若し獅子又は豹を殺した者なれば其衣皮を着し、刀、槍楯等の武器を携へ、山羊の胃袋で作つた水呑を腰にぶら下げ、いざ戰場へと云ふ樣な出立で三日の間其處に立て籠る事に成つて居る。其間の食事は無論自分の內から運ぶのであつて、其處では炊事をする事を許されない。四日目の朝になると村の長老が迎へに來る。そうして夫に連れられて自家の門前迄歸ると、長老が貴樣は是れから一人前の親に成るのだと云ふ意味で一際高く「さあ內に這入つて老人に成れ」と云ふ。併し本人は謙遜して內に這入らない。其處で長老が又同じ言葉を繰返し、夫れを五度累ねた後漸く「夫では御免を蒙ります」と云ひつつ家に入り、身に着けた裝飾物を脫ぎ棄て、其時集つて來た部落の人々に挨拶をする。すると一同が何誰の父と呼び懸ける。夫に對し本人が「はい」と答へ、同じ事を四度び繰返へして式を終り、夫から亂ちき騷ぎの御馳走をするのであつて、其後は何日でも小供に割禮を行ひ差支ない事になるのである。

其處で割禮の式を行ふのは何う云ふ風にするかと云ふと、何れの部落に於ても每年、又は兩三年の間に一度吉日を撰び、其部落內の似た年輩の少年に對し同時に行ふのであつて、キリマンジヤロ地方の土人は酋長の子供が其儀式を行ふ時迄待ち合はし、一緒に行ふ事に成つて居る。從つて酋長の子供の年齡に依り、他の一般の小供の割禮が一兩年早くなる事もあれば、遲く成る事もあるが、若し酋長に子供が無いとか、又は子供が尠い爲めに他の少年が迷惑する場合には、酋長の許を得て臨時に其式を行ふ事もあるのである。併し其時には各一頭宛の牡牛を酋長に獻上する習慣だそうである。

次に此儀式は人生の大事である丈けに、孰れの部落に於ても中々嚴重な規則がある。併し其第一條件は當人の身心が最も淸淨でなければならぬ事である。夫故儀式の初に兩親から先づ過去の一切の過失に對し赦しを與へ、次に神に犧牲を献げて罪障の消滅を祈る事になつて居る。是は少年の敎育上極めて有効な結果のある事と思はれる。

男子に對する儀式

男子に對する儀式は女に對する夫と多少異なる所がある。マサイの習慣に依ると先づ手術を受け樣とする少年が身心を淸め、腰に小刀を

釣り、手に牧畜用の鞭を持ち、一同揃つて牡牛と蜜とを拵へ手術者を尋ねて手術の依頼をせねばならぬ。そうして其承諾を受け儀式の日が定まると一同は大喜びで顔や身體に彩色を施し、歌つたり踊つたり大騒ぎをして部落内の各戸を訪問し、夫れより各我家に歸り靜かに其日を待つのである。軈て其日が來ると、普通は一日で濟むのだが、マサイの習慣では夫が三日に渡つて行はれるのであつて、其第一日には先づ少年の頭を剃り、羊又は牡牛を屠り、親戚知人等を御馳走し、第二日目には少年にエルラチムと云ふ祝の木を森から伐つて來させ、夫を我家の入口に建てて惡魔を拂ひ、第三日目には夜の明けるのを待ち、清水を汲んで來て齒朶の葉を浸し夫で少年に顔を洗はせ、旭の昇るのを待つて門を開き、牡牛の皮を右側の門柱の傍に敷き、其處に少年を坐らし、軈て手術者の來るのを待ち、手術をして貰ふのである。其時少年が恐怖して卑怯な擧動をする時は、本人は云ふに及ばず兩親の爲め非常な恥辱と成るのであつて、そう云ふ場合に兩親は世間に恥ち夜逃げする事さへあると云はれて居る。斯うして割禮の式が濟むと、少年はシボリオと云はれ、初めて大人の仲間入りをするのである。次に傷が癒えるともう一度頭を剃り、夫れから後は其儘髪をのばし、勇者の仲間に這入るのである。併し此場合にキリマンジヤロ地方では手術後尚三ケ月間外出を禁ぜられ、夫が濟むと頭を剃り外出する事を許されるさうである。そうして何れの部落に於ても同時に割禮の式を濟ませたものを一つの階級と做し、夫に特別の名前を附し、其階級に屬する者は特に親密な交際を結ぶのださうである。

少女の割禮

少女も亦年頃に成れば割禮を行ふ事に成つて居る。夫は處女を破る式とも云ふのであつて、其儀式は大體に於て男子の場合と變らない。併し少女の手術は屋内に於て行ひ、又泣いても恐れても差支ない事になつて居る。

茲にキリマンジヤロ地方に於て他の地方と聊か變つて居る事は、割禮を受けやうと云ふ少女に其儀式を濟まさずに死んだ姉がある場合には、式を行ふ前日にはバナナで其姉に似た人形を造り、夫に對し割禮の式を行ひ、妹の割禮が無事に濟むやうに又妹が手術を恐がらないやうに祈らねばならぬ事になつて居る。其處で愈々儀式の當日になると、親戚知人の婦人達が穀物の土産を持參して祝の詞を述べる。それから一番目上の婦人が少女を近所の小川に伴ひ「是れから新しい生涯に入る爲めに身の汚れを濟めてあげる」と云ひながら右足の指に水を懸けて家に連れ歸り、婦人達一同で其身體に油を塗り、それから手術を受けさせるのであるが、其儀式が首尾よく終ると、母親は非常に喜び、脂肪で娘の顔や身體を塗り、夫より酒宴に移り、歌つたり踊つたり大騒ぎを演ずるのである。次に夫から三日目に手術者が傷口を洗ひに來る。そうすると其謝禮として曩に客人から祝に貰つた穀物を提供する事になつて居る。然るに兩親に取り最も心配なのは娘が果して處女であるや否やと云ふことである。若し右の手術を受ける時に娘が

處女でないと云ふ事を發見せられると、夫は本人は勿論兩親に取り非常な恥辱となるのであつて、少女は將來第二夫人以下でなければ容易に嫁入が出來なくなるのである。玆に至つて土人の道德觀念も決して馬鹿にはならぬと考へる。

右の通りにして割禮の式が濟むと少女は初めて一人前の婦人になるのであるが、キリマンジヤロ地方の土人は夫より伯叔母又は適當な人の家に預けられ、家事の手傳を爲しつつ舅姑に仕へる道、妻の心得、炊事其他の事を學ぶのだそうである。

八　結　婚

結婚は主として當事者の兩親が定める事になつて居る。併し本人の意思を無視する譯けではない。最後の撰擇は矢張り本人がするのだそうであるから、兩親が豫備的取極をすると云ふのが適當であるかも知れない。從つて或場合に男女が知り合ひ双方に結婚の意思が出來ると、男の方で先づ兩親の同意を求め、夫より改めて女の父親に結婚の申込をする事に成つて居る。尤も申込の方法には色々あつて、或は男の父から、或は仲介人から、或は友人から、或は直接本人から、女の父に申込むのであつて、話が纒まれば其處で結納の額を定める。但し結納は婿から嫁の父に牛、羊及山羊何頭かを贈るのであるが、妙な事には結納は結婚の時許りでなく、其後も小供の生れる度每に引き續き嫁の里方に贈らねばならぬ事に成つて居り、或場合には孫の生れる時迄も其義務が繼續する事がある。從つて一度結婚すれば婦の里方は永い間婿の方から色々の理由で家畜を貰ふ事に成るのである。其處で日が經つに從ひ贈る方に段々と惜みを生じ、夫が原因になつて婦の里方と不和を生ずる事が尠くないとの事である。但し婦の里方からは婿の家に對して何も送らない事になつて居る。



「マサイ」族の母と子　兩手と頸の裝飾は針金で造り携へてゐるのは瓢簞の水入

右に付マサイ種族では、結婚の約束が調ふと婿からムラカと云ふ仲介人を通じ嫁の父へ若い牝牛參頭、牡牛二頭、嫁と嫁の姉妹に頸飾を贈り、キリマンジヤロの土人は嫁の祖父にも羊及山羊各一頭を贈るそうである。其處で愈結婚の日が來ると、普通は婿が嫁を迎へに往く事に成つて居る。併し其方法にも色々違つた習慣があつて、中には抱腹に堪へない樣な事もあれば、又極めて教訓的な事も尠くない。マサイ種族の習慣は婿が仲介人並に友人二名と共に牝羊一頭と小

羊二頭とを持つて嫁を迎へに往き、牝羊を嫁の母に贈り、小羊は嫁の父から提供する同數の小羊と共に屠殺して同人への贈物とし、嫁の仕度の調ふのを待ち之れに寶貝の模様を鏤いた瓢簞を背負はし、其家の老婦一人を伴ひ、成るべく遠廻りして緩々歩みながら自分の家に連れて戻るのである。又キリマンジヤロの土人の習慣は、最初婿が仲介人と共に嫁を迎へに往くと其父親が之を迎へて、先づ第一に「今日は何の御用があつて來られたか」と尋ねる。夫に對し仲介人が「頭の黑い牝牛が欲しくて參つたのであります」と答へると、父は又「夫は何う云ふ種類の牝牛ですか」と尋ねる。仲介人が「夫は貴方の娘さんの樣なのです」と答へると、父は「其樣な物が宅に在りませうか」と尋ねる。そうすると又仲介人が「はいお宅に在る事を存じて居ります」と答へるのだそうである。其處で嫁の父が列席の親戚其他一同の者に向ひ娘を何の誰に遣はす由を語り、結納取極の顛末を述べ、嫁を一同に紹介する。すると仲介人が婿と嫁との兩人に夫婦の務に就て一通りの教訓を與へ、最後に嫁の父又は其代理人が嫁に告別の詞を述べ、夫で式を終ると、仲介人が急に嫁の頭から着物を被らせ、電光石火と云ふ勢で背中に負ひ逃げ出す樣な眞似をする。そうすると列座の人々が大騷をして後から追ひ掛け、引き戻さうとして道を塞ぐ。其處で仲介人が夫等の人々に贈物又は贈物の目錄を與へ道を開けて貰ふと云ふ段取りに成るのであるが、之と同時に嫁も亦、負ふさりながら否だ否だと跳ね廻るので婿と仲介人等が夫を宥め、成るべく遠路を迂廻しながら連れ歸るのだそうである。夫から嫁が家に到着すると、姑が夫を迎へて顏や身體に脂肪を塗り、又其他色々と心を盡して可愛がり、親戚友人に紹介し、終夜酒を飲み、歌つたり踊つたり土人一流の大騷をするのであるが、列席者は夫婦者に限られて居る。

併しキクユ種族では男が女を見初めると、友人と共に其女を尋ね、直接に結婚を申込むのが習慣である。其時娘が同意ならば父に尋ねて下さいと答へるのだそうで、夫から先きは萬事女の父と協議をするので、始め二回は本人が友人と共に酒其他の土産を持つて女の父を尋ね、其後は双方の父と父とが萬事の話を纏めるのであつて、相談が調ふと婿が嫁を迎へに行き、連れて歸るのだそうである。

新郎新婦の住家は普通新築する事に成つて居る。元來土人の家は天井も床もない小さな小屋だから、大勢の家族が一所に住むと云ふ事は實際上不可能である。其處でいざ結婚と云ふ時には近所に適當な場所を選定し、夫に分家を新築するのであつて、其場合には近隣の人達が寄り集まり、其日の内に棟を上げ屋根を葺き、夕方迄に全部を仕上げて仕舞ふのである。兎に角幼稚な社會であるから物事が簡單に運ぶ爲めでもあるが、其處には實に人情の淳朴さが現はれて居る。然し新婦を連れて歸つても直接に右の新小屋に行くのではない。先づ最初兩親の家に入り、兩親への挨拶、兄弟親戚への紹介、其他色々な儀式があつてから新小屋に移る事と成るのである。尚其場合に新婦の里方でも、新郎の親元でも、盛大な祝宴を開き、終夜亂痴氣騷ぎをするのは

前に述べた通りである●

土人は總て一夫多妻主義を實行して居る。併し多妻の内で最も勢力のあるのは矢張り第一夫人で、色々な儀式の場合に第二夫人以下は第一夫人と對等の取扱を受ける譯には行かない。盛大な結婚の儀式を行ふのも第一夫人丈けで、第二夫人以下には行はないそうである。但し第二夫人以下を娶る場合には普通第一夫人の同意を求め、其承諾を得てから迎へるのであつて、其時には第一夫人から新婦に小牛を贈る事に成つて居る。尤も各夫人は夫れ夫れ獨立の小屋を持ち別居するのであるから、普通斯う云ふ場合に有り勝ちの家庭の面倒は餘り起らないそうである。併し或場合に夫人同志の嫉妬から主人先生何れの夫人の小屋を尋ねても他の夫人の小屋へ往けと云つて拒絶せられ、宵から朝迄部落の内を彼方此方と迂路つき廻はされる事もないではないと或る土人は笑ひながら語つて居た。

夫から感心な事には私通は一般に非常な恥辱と認められて居る。夫れ故娘が人から私通者と云はれると聲を立てて泣くそうである。併し姦通は年齢の似た者同志の場合にはさして非難せられない。只若者が父の階級に屬する者の妻を侵す時には、仲間から非常に非難せられ、贖罪の爲め村の長老に牡牛壹頭に酒を附けて送らねばならぬ。併し老人が少女と私通する事は最大の惡事と見做され、他の老人達が集つて其家屋を破壞し、勝手に家畜を屠殺して制裁を加へるとの事である。

結婚の資格に就てはマサイ種族は嘗て他の部落を襲ふて誰かの首を擧げねばならぬ事になつて居たが、今では政府で取締つて居る爲め其習慣は全然癈たれて仕舞つたそうである。

夫に夫婦の間が不和に成つた場合には良人が屢々婦を打擲する事がある。そんな時には婦が堪へられなくなると良人と同年輩の者に訴へて仲裁をして貰ふ習慣がある。其時に良人は嫌でも同年者の仲裁に聽かねばならぬそうである。それで若し其後良人が再び其婦を打擲する時は同年社會の者を侮蔑したと云ふ事になるので、其の仲間の制裁が喧しい爲めそう云ふ事を繰り返す者がなく、婦の身柄が大變安全になるのである。然し婦に何か重大な過失があり、良人の同年者に訴へ難い場合には親許に歸つて父に訴へ、父から改めて牡牛一頭を送つて貰ひ、其罪を謝し片を附けるとの事である。

二 死亡

土人が病氣を治療する最も普通の方法は鬼神に犧牲を供へ、巫を呼んで祈禱をして貰ふ事である。併し如何程祈つても効驗が顯れないで病が重くなる場合には、家から一切婦人を遠け、重立つた男子のみが止まつて最後の犧牲を獻け、森から蛇の木を伐つて來て恰かも正月の門松の様な案配に屋敷の入口に建てて置く。そうすると部落の人々は其處に大病人がある事を知り病家の迷惑とならぬ様、其近所に近寄らぬ様にするそうである。

其處で病人が死ぬと、大抵は屍を野原又は森林に棄て、野獸に喰はせるのであつて、之れを埋めるのは酋長又は其他の勢力家の死んだ

場合にのみ限られて居る。

マサイの習慣に依ると、彼等は其場合に日沒を待つて屍を屋敷の西方の日影地又は森林に運び、身體の左側を下にして横たへ、頭を北に向け、左手を枕に右手を胸に當て、其上に足を曲げ寢た様な姿にして棄て置くのであるが、老人其他大事な人の死んだ場合には屍の傍で牡牛を屠つて親戚知人を饗應し、屍と一緒に骨を捨て置く。そうすると狼に似たハイナと云ふ野獸が來て夫れを食ふて仕舞ふのだそうである。併し酋長其他の有力者が死んだ場合には特に埋葬し、其時には牡牛を屠り、其脂肪を取つて屍に塗り、夫を牛の皮で包んで日影の場所に運搬し其儘埋葬して其上に小石を積み累ね墓標とする。そして其處を通行する人は知ると知らざるとに拘らず必ず小石を拾つて其上に置き、死者に對し敬禮せねばならぬ事に成つて居る。

又キリマンジヤロ地方の土人は、嘗て子供を設けた事のある既婚者丈けを埋葬し、其他の者は森林又は叢の中に棄てる事に成つて居たのであるが、近頃は夫婦者でも、獨身者でも、大人でも小人でも、又小供も有ると無いとに拘はらず、總て埋葬する事に成つて居る。目下行はれて居る同種族の上等社會の習慣に依ると、人が死ねば先づ生きて居た儘の姿で牛小屋に座はらせて親戚及部落の者に最後の別れを爲さしめ、夫より裝飾品を取り外づし、其代はりに蛇の木の葉で裝飾し、次に第一夫人が顏に化粧を施しながら「私が今御化粧をして差し上げます、今迄善い時にも惡い時にも貴方と苦樂を一緒にしましたが、此で御別れをせねばなりませぬ、どうぞ御機嫌善う迷はずと往つて下さい、貴方が惡魔に遇ふた時に家族の者が此部落に殘つて居る事を御話しなさらぬ様に願ひます。又敵に遇ふたなら敗けない様に祈ります」と云ひ、夫より第二夫人以下各夫人、小供、兄弟、親戚の人々が順次に同じ様な言葉を繰返へし、更に又皆が前の通りの順序で「長旅ですから充分召し上がれ」と云ひつつ牛乳脂肪抔を死人の口に入れて最後の供養を爲し、夫が濟むと牡牛の皮で屍を包み、長男と末男とが主に成り、男の子一同で第一夫人の家の中央に穴を掘り、其處に埋葬するのであるが、穴に屍を入れると皆で「御機嫌善う」と云ひつつ其上に牛の糞を抛げ込み、夫れから土をかけて式を終り、一同に對し牛肉の御馳走をする習慣に成つて居る。但し死人の義姉妹以外の婦人は夫が存命な場合には其御馳走を食べてはならぬ。又父が生きて居る場合に子も亦夫と同様之を避ける事に成つて居る。孰れも良人及び父の長命を祈る爲めである。尙此儀式の後四日間死者を祭り祖先を祭る儀式があつて、夫れが終ると親戚一同が頭を剃り、相續人が財産を繼承する事と成る。但し第二夫人以下の未亡人等が頭を剃ると剃らぬとは各自の自由で、再婚を欲する者は必ずしも頭を剃るには及ばない。又親戚の者でも夫のある婦人は頭を剃らない事に成つて居る。但しマサイの女は如何なる場合にも髮を蓄へないのが其種族の習慣である。

右の儀式は有福な者の間に行はれる習慣であつて、各人皆此通りにする譯ではない。財産の豐かでない者は牡牛の代りに山羊を屠り、又

は羊か山羊の子、又は肉の小切を用ひ、又牛の皮の代りにバナナの葉を用ひ、身分に依り如何樣にも節約する事に成つて居る。

　マサイ種族では死後の服喪に就き極めて嚴重な習慣があつて、父の死に對しては家族は一ヶ年の喪に服し、未亡人も娘も女達は皆一切の裝飾を取り去り、男子は小供も大人も總て頭を剃る事に成つて居る。併し他の家族の死亡した場合には女は耳輪及頸に掛けた大きな鐵輪は外さないが、小さな裝飾は全部取り外し、男は一ヶ月間丈け頭を剃り、赤ん坊の死んだ場合には母親丈けが裝飾を外すのだそうである。

　土人には死人に就て色々な迷信がある。マサイ種族は屍を森に棄てた場合に夫が狼又は其他の野獸に喰はるれば魂が夫で死んで仕舞ふものと思ひ、埋葬した場合には身體が腐れば魂は蛇に成ると云ふ傳說を信じ、蛇は祖先の化身で家族殊に小供の安全を守護するものと思ふて居る。夫れ故大變蛇を可愛がり屋敷で夫を發見すると牛乳を與へるのが一般の習慣に成つて居る。又キリマンジヤロ地方の土人は家族の者が死んだ後六ヶ月以內に誰か病氣をすると、夫れは死人が牛乳の催促をするのだと云ひ、有福な土人は乳の出る牝牛を屠り、夫を死人の爲め犧牲に供すとのことである。又葬穴を造る事に就ても大分迷信があつて、一旦墓所を定め穴掘りに取懸る時は、必ず夫を仕上げないと餘分な穴は不用だから、誰かが斃て死ぬ樣な事になると云ひ、又穴を掘る際に足を踏み入れるのも同樣に不吉だと云ふて居る。然し或他の地方では夫れと反對に穴が掘れゝば相續人が一應其處に這入つて檢分をせねばならぬと云ふ習慣があるそうである。

　又マサイ種族の面白い習慣は、死人の名を呼ぶ事を非常な不吉として居る事であつて、出來得る限り夫れを云はない樣に注意して居る。夫れ故人が死んだ場合には後日の不便を避ける爲め、豫め別な名前を作つて置き、入用の場合に夫を使ふ事として居るそうである。併し長老又は特に有力な人の場合は例外であつて幾代も其名を繼承し、永く其人を追慕する樣な事を遣つて居る。

ホ　遺產の相續

　土人の財產は多くの場合に於て家畜である。而して所有者が死んだ場合に夫を相續する者は普通死者の長子と云ふ事に成つて居る。マサイは土人の內でも最も牧畜の盛んな種族であるが、主人に多數の妻がある場合には平素所有の家畜を幾組かに分ち、各に一組づつ世話させる事に成つて居り、主人が存命中は孰れも主人の所有物ではあるが、主人が死ぬと夫れ夫れ其儘妻の家族の所有と認められ、其各々の長子が母の預つて居る家畜を相續する事と成るのである。併し若し是等の妻の誰かに子供が無い場合には、本人の預つて居る家畜は主人の遺產と共に其長子に依りて相續せられる事と成つて居り、若し何れの妻にも子が無い場合には其財產は兄弟が相續し、妻は異母の兄弟が引受ける事に成つて居る。又キリマンジヤロ地方に於ても死者に子供が無ければ其遺產は兄弟に依りて相續せられるも、其場合に相續者は未亡人の誰かと結婚せねばならぬと云ふ事である。

『阪神沿線』

富田砕花

『阪神沿線』！　それを想ふことは、やがて幾つかの田園都市の連續から成るマッスの映像を浮び出させる。そこにはこの邦の富の全體の何分と云つた巨大な額を一擧手一投足の勢で動かし得る財神たちの邸宅もある。その名をアト・ランドムに拾ひ上げて行つてもそれは驚くべき數であるらしい。從つてそこには可なりに洗練された上層階級者の生活が素晴らしい階調を漲らせて存在してゐる譯だ。有線は、齒を喰ひしばつて瘦せ世帶を張つてゐる田舍のかいいいなでの貧乏都市などが及びもつかない歳計を年々歳々非常な勢ひで膨脹させて行きつつある『村』の數も一二では無い、況んや『町』をや、『市』をやである。試みに見よ、その或る一村の役場なるものの建物を、宛として少しく控へ目にした都廳のそれだ、壯觀想ふべしである。

若しそれ地貌にも人格を賦與する神話作者たることを許容されるならば、所謂『日本の玄關』たる神戸市と、物質的には恐らく人體に於ける心臟の位地を占めるであらうことに何人も異議を挿むまいところの大大阪市との間に介在して、一斛、清楚にして、潑溂たる意氣を漲らし、その颯爽たる姿を示してゐる青年、それは『阪神沿線』では無いか。自分は解剖學者を倣ふ者では無いから、しばらく冷徹なメスはこれを棄てゝ顧みることをせずに先づ讃嘆の聲を上げたのだ。たゞ空を見よ、山を見よ、南は一年の大よそを清澄明朗な旦暮に幸されてゐる内海に臨み、北は標高千メエトルを上下する六甲連嶺に抱かれてゐる世にも幸福な自然兒、阪神沿線！　輕快なナッシュを飛ばして、そこを貫く大動脈、新國道を一氣に疾驅するもよからう、またそれを中心に靜脈のやうな十數條の軌道は諸君をその欲するところに隨つて東西南北に運んで呉れる。さらに諸君が素撲な徒歩者ならばそこの自然は一層親愛の情を寄せて吝むことをしまい。疲れたら乘り、氣が向いたところで車を棄てることにして先づ歩き出して見よう。

『阪神』といふ特殊な香氣を持つたグルウプに入れるべくは少しく大阪のそれが勝ち過ぎてゐるやうに思はれる尼ヶ崎は、甲蟲を想はせる。感じがどこか堅牢だ。そこの郊外には工場が多いから旺んな煙を

吐いてゐる衝突の數も多いのだ。從つて勞働大衆が活潑に動いてその點近代都市の風丰はあるが、市街はもと城下町だから一寸複雜な相を見せてゐる。殊にその舊國道筋が。その中心とも思はれるところへ、とても今の世紀のものとは受取れさうに無い舊式の汽車が、一日に幾度と數へ得るほど發着してゐるのがいかにもおどけてゐる。然しその汽車が、神崎あたりで省線を跨ぐあたりの高架式の路線のうへの小停車場で、それが到着するのを待合はせてゐるのなどは堪らなくうれしいものの一つだ。春でゞもあれば、眼路のかぎり菜の花の黄金が咲きつゞいて、佇立してゐる人を忽ち醉はせるやうな香に包んでしまふ。尤も西の方から來てそこの町から大坂を指してゐる蟲の觸手のやうな電車の路線は別問題だ。こゝの、歴史を持つた港へは船の出入が未だに激しくて、和船の檣の林立が、ゴミゴミしてゐる町を歩いてゐるとひよいと横町からのぞかれるなどは散歩者にとつては微笑される景物だ。

舊城をめぐらした濠川のあとはいふまでも無い、郊外の堀割などの水もとても陰慘な色調を湛へてゐるが、晴れた秋の日など、それのうへにうつる空の色はさすがに詩情を動かすに足りる。地勢の關係からだらうが、神戸の方から來れば、大よその川は、雨の後でゞもあれば兎に角、水が極めて乏しい、或はまるで無い白い川床の砂を見るに慣れた眼に、この邊に來て急に變化を與へられるからでもあらう。

尼ケ崎の町はづれ出屋敷のあたりからはまだまだ耕地が連續してゐて武庫川に出る。この川の流域は古來隨分變遷のあつたものなのは推測するに難くないが、近年改修をしたのでその痕跡の生々しい感じがせぬでも無いが、この邊での大きな川幅を持つてゐるので眺めるには氣が晴々としていい。お多分に洩れぬ電車會社の施設とあつて、冬期はとにかくとして、大坂あたりの散策者を吸引するのに惡どい方法が講ぜられる、默つて棄てゝ置いてもこれだけの絶好なピクニックの場所であるのに、豫め蜆を川のなかに埋めて置いて堀らせるなどに至つては惡趣味も甚しい、それを鳴物入で客を引寄せるに至つては言語道斷だ、もつと靜かな、落ついた方法を採れぬものか知らと眉をひそめさせる、實にコムマアシヤリズムの弊竇甚しいと云はねばなるまい。こゝの堤防の松は古來名高いものだつたさうだが、僅かにその名殘を見せてゐるところも無いではないが、これは必ずしも此處に限つたことでは無いけれども未練氣も無く薙ぎ倒した傷々しさは堪らない。そこの兩岸をづつと上流の方から川口まで往復するドライブは快適は快適であるが、自分はむしろ大散歩道として保存して置かれたいものだと願ふ。遠くない將來にさうした欲求を人々が心から望む日が來るであらうことを豫想して。

鳴尾は苺の産地で、名物の競馬場がある。踏めばさくさくと音を立てる砂地を耕して、苺の苗が年々その版圖を擴大して行きつゝある。

武庫川やその元あつた支流から汎濫しては流した土砂が積つてからした地質にしてしまつたとかいふことだ。現在の武庫川寄りには多少の水田があるだけで苺の畑になつてしまつた。その面積は近縣一帶の需

要を充たしてなほ餘りあるほどださうだ。阪神の車窓から遙くに見える競馬場の建物のいかにも古風なのがどこか一時代前の思想情調を偲ばせる。その村の一部には大鐵傘を持つた甲子園の球場がある、そこは元の枝川の三角洲のあとだ。川床の低地ではあるが、この屋根は隨分遠くからでも見られる。そして何ものであるか正體を知らぬ人でゞもあつたら恐らく怪物としてより以外に網膜にうつつて來ないであらうほど尨大なものである。熱球飛び、健棒が戞然と鳴るのは夏期の全國中等學校優勝野球大會の開かれる時を以つてその高潮に達する。そこは幾萬のファンの熱狂が醸し出す一種名狀すべからざる空氣によつて占められ終る。然るに戰ひたき平常のそれはひつそり閑として宛かも希臘か羅馬あたりの廢墟のそれを裹むものと一脈相通ずる凄慘な氣がこゝを領してゐる。

此處の海岸はいい。茫莫とした草原が海岸の砂地にまで擴がつてゐるし、そこから眺める六甲の峰々はまた一際美しい。冬に入る少し前など、連峰に圍まれた或る山のうへの一部の草原が、他の部分の紫黑色なのに對照をなして青いままに殘つてゐるのを見せてゐるなどは朝夕この山に對してゐる人々にさへまた別種の新鮮な感じを覺えさせずには置かない。

海岸へは一條の軌道が分岐されて走つてゐて、若しそれが普通の日の午後ででもあるならば、たゞ一臺の車輛がその支線を往復してゐるだけで、恐らくはたゞ一人の乘客として便乘する自分を發見することも稀れで無い。距離に比して大ニッケル一個は必ずしも廉であるとは云ひ難いが、車室全體を單獨で占領できるのは一種異様の優越感を覺えさせる。

灘五郷の一つであつた今津、いまは勿論町制を布かれてゐるが、數年前、自分が鳴尾の競馬場から——その時分は、まだそこで中等學校の優勝戰が行はれてゐた——競技果てゝ後一時に殺到する電車の混雜を避けて、畑地を横切つて、里餘の道を歸家しようとしたことがあつたが、終日のエクサイティング・マッチの疲れを全身に感じながら足を運んでゐたときのこと、極めて鄙びた細い徑を挿んで軒を列ねてゐた昔ながらの田舍町の光景を忘れることができない。家の建て込んでゐた小路から稍々廣い往還のとある一軒に「兵庫縣武庫郡今津村役場」と辛うじて讀めた木札が吊るされてあつたのを思ひ出すことは現在のこの町の發展をおもへばそれこそ隔世の感がある。そこの町の或る停留場へは、北方からも軌道が一つ來てゐる。それは西宮北口で「阪急」の神戸大阪間の路線を跨いで一路寶塚方面に接續ができる。從つてそのあたりを中心に潰されて家の建てられてゆく畑地が急速の勢ひで殖えてゆくのは風景を滿喫し度く望むものにとつては傷々しいほどである。

町を南北に貫いてゐる小さい川は、小さいながらに潮の干滿のあるの、興趣を添へてゐる。その下流の大きな火力發電所のあるあたりから海近くまでの景色はこの邊では一寸珍らしいものだ。何處か外國に

でもありさうな風景で、川を上つて來る海の魚を漁つてゐる少年の姿を見出すのもうれしい。

少し前途を急がう。

西宮は往昔からの船着で、世に謂ふ灘の生一本の元になる宮水の湧くところだ。季節になると昔はここの港から魚崎とか、御影とか、新在家とか云つたあたりへ水船でそれを汲み取つて運んだものださうだが、今は味もソツ氣も無い、ビヤ樽の大きなやつへ水を詰めて貨物自動車でアスファルトの新國道をドンドン運搬するのだ。尤もそのトラックの姿を散歩などしてゐるときに、偶々新國道のうへで見ることは、それが宮水であることを知ればそれほど散文的では無いと云へぬことも無い。

酒藏の建ち並んでゐるあたりは、何處となくどつしりした感じがする。溝の汚いのには少々窮るが、そして夏など荷馬車がガタゴト通つて行つた後に埃がパッと舞ひ上つて濛々と咫尺を辨じなくなるのはとても耐へ得る以上だが、新酒を仕込む時分の勇ましい杜氏の歌はこのあたり特有の情調を漂はせてさすがに成上りの都會などは足元に及びもつかない重厚さと豐さを見せてゐる。プラボー、パツカンテ！　酒徒萬歳！

內海の各地から出入りする和船が港には澤山錨を下ろしてゐる。そこはまだ昔ながらの港町らしい空氣が橫溢してゐるのだ。だがさうした漂ひ殘つてゐる懷しい空氣を、それは慌しい速度で失はれつゝあるのだが、永年この沿線に住んでゐても氣づかぬ人が隨分多いことでであらう。

その昔、そこから千石船につんで江戸の方へ送られて新川に荷揚げをされた酒は、熊野灘や遠州灘の難儀な航海で、程よく搖られて、洛陽の酒徒たちの眼を細くさせる眞新しい吉野杉の木の香が味ひに沁み込んだものださうだ。灘へ行けば何處にでもいい酒がころがつてゐるやうなことを云ふのは半可通の世迷言で、一歩譲つて、成程、何處でも安い錢で相當なものを飲けさすといふならそれは承認してもいい、が、瓶香のするリットル瓶――ペッ、ペッ！――から注がれる酒に灘の生一本プロパアの風味があつて耐るものか。今の時世に少し不向の云ひ方か知れぬが、酒の位は矢つ張り花のお江戸へ出して取ることになつてゐるのは今も昔と變らないその道の動かすべからざる事實なのだ。ガソリンの臭氣を遠慮なく吐き散らすトラックや、安石炭を焚いて突ッ走る陸蒸氣につかつて道中しなければならない酒こそ氣の毒なものだ。

杜の少ないこの沿線に我神社の椎や樟の森は難有い限りである。この社の本體は專門家の間でもまだ問題となつてゐるのださうだ。が、そんなことはどちらでも關はない。あの若葉の頃の燃え上るやうな、光つた新綠は尊いものに感じられる。社家の簡素な住居も新しく店出しをした神さまのゴテゴテした虚假威と異つて奥床しさを覺えさ

せる。この近くの香爐園を流れてゐる夙川の夙は死戸の訛つたもので、大昔にはこのあたり放浪遊藝人の群れ——傀儡舞の人々がゐたといふことだ、その人々の一番落魄したのは山窩であつたことはいふまでもあるまい。今はその川を挾んで、殊に阪神の停留場から下の川西の方には主として大阪の富豪たちのけばけばしくない、落着を見せた別莊が次ぎ次ぎに建ち並んでゐる。なかでも贊成の意を表し度いのはこゝの松林だ。願はくば永久に改修などの事勿れ！ 但し夏が來ると、何時も何とかならぬものかと思ふのは、海水浴場までの松原のなかにこれはまたイヽ粗末な、まるで大震災直後の東京や横濱の町を想はせるやうな急造バラック建が櫛比して客を呼び込む狂態だ。

海岸の壞れた舊砲臺の殘骸も物語めいてゐる。また海からヨットでも走らせて見る松林に圍まれた病院の赤く塗つた建物が、六甲連嶺を遠景に、多少、構圖に陳腐の嫌ひが無いでも無いが、一幅の水彩畫を想はせていい。

●

香爐園からまた少し人家が途切れて打出に入る。こゝはもう隣の村だ。打出は昔からの小村落でもあるし、附近には阿保親王の墓とか、親王寺といふ由緒ある寺もある。こゝらまで來ると山と海との距離が大分近寄つて來る。山の方は一帶に劍谷と云つこ大部分は國有林になつてゐる。樹は松が重だ。秋には松茸が出る。自然に林泉が具つてゐて散策者には誂へ向の場所だ。蘆屋寄りに宮川と稱ばれる川が流れてゐる。川幅はいふにも足りないほとだが、少しばかり殘されてある松並木はいい。その海に注ぐところに未だに漁家があつて、そこの海で漁れる小さい魚を煮干にこしらへてゐる。昔は宮川の雜魚と云つて京都あたりでは珍重されたものださうだ。夜など漁夫の網を曳くホウホウといふ掛け聲が海の方から風につれてわびしい然しいかにも鄙びたその響を村のづつと遠くの山手へまでも聞こえさせたものだが、此頃では靜かな夜半でも無ければ建て詰つて來た人家のために聞くことも出來なくなつた

蘆屋には在昔内裏があつたといふ、今の字名の三條とか津知などいふのがその名殘だといふものがある。業平卿など、このあたりまで女の許に通つて來たものらしい。現在では影も形も無くなかつたがつい先頃までは西國街道が田圃の間をうねらしてゐたものだつた。とにかく蘆屋乙女などの傳説もあるし、蘆屋道滿の城址と云はれる城山が山手に近く聳えてゐて、その小高くなつた谷には水車小屋の跡が段々になつて殘つてゐる、そこは蘆屋川の上流で、少しの勞で、とてもこんな近くにこんなところがあらうとは思ひもかけられぬ素晴しい溪谷が抱かれてあるのだ。このあたり風景のいいところに住むことを好んだと傳へられる先住民族の穴居の跡らしいものもある。

業平橋、錦光橋、鵺塚橋などいふ名の橋が川には架つてゐる。少し雨でも降れば山から落ちて來る水で忽ち急流に變ずるが、晴れた日が續けばそこは淺間しいほどの汚い川床を見せる。土砂そのものは花崗

岸の粉末で美しいものであるが、村の財源の一つとして採取を許してゐるので、それが掘れば掘り放しでそこにもここにも醜い凹みをつくり、おまけに川原へ持つて行つて塵芥を棄てる不心得者が絶えないといふのだから呆れざるを得ない。この川も大々的の改修工事をして、すつかり風景を荒してしまつたが未だに殘つてゐる新國道から山手の方までの堤防の松原は昔のままの俤を止めてゐていい、願くばせめてこゝだけの地域だけでもいい、このまゝにして置いてほしい。月の夜などこの川畔に立てば、美觀は筆舌に盡し難いものがある。十年ほど以前までは、停留場で電車を降りると、鼻孔を衝いて來る松の香がしたものだつた。松露採りの姿を時として見ることもあつた。おのづからオゾーンの多量なのが首肯できるほどであつた。この頃ではそれはもう夢になつてしまひさうだ。好況時代には一日に一軒半とかの割合で家屋が新築されて行つたといふ、そのためか以前は大きな邸宅だけが目立つたものであつたが、近頃では頃合の小住宅もウンと殖えた。折角の典雅な風は消されて新開地らしい趣も見えかけて來た。

村には煤煙を吐く工場といふものが一つも無い、やや目立つものは錢湯の煙突が二三本位のものだ。此處は關東の鎌倉と逗子を合せたやうな感じのところだが、それらよりはづつと明るい、殆んど陰影といふものが無い。

こゝの停留場は沿線で一番、美しい人たちの乘降りするところださうだ。さうかも知れない。美容院の看板だけでも隨分目につく。これはと思ふやうな小さい住宅からでもピアノの音が洩れて來るのは珍らしいことでは無い、だがそれが鳩ポッポを出でない程度のものが多いのだから內容に至つては保證の限りで無いこと勿論だ。さういへばさうした人たちの讀書力などでも心細いものらしい。せいぜいのところ××××程度の婦人雜誌あたりを低迷してゐる位のものといふから察しはつく。美しきものよ、たゞ美しくあれ、か。人世それで滿足できるなら何のいふことは無い、畢竟それは匂ひを有たない空花ではないか、澎湃として漲り寄せて來る『新時代』への準備はそれだけであつてはなるまい。

村內五十錢均一のタクシイが縱橫に走るやうになつた。狹い路をひよいと曲る途端にヘッド・ライトに眼を射られて面喰ふと云つたやうな危險な場合も多くなつた。『阪急』がその沿線に海を持たない弱み？から直營の乘合自働車を蘆屋川の停留場から川に並行して海岸の渚近くまで運轉させ始めた。夏になると裸の少年や海水着一枚の娘さんたちが五十錢タクシイや乘合に滿載されて山手の方から降りて來るなども一寸他所では見られない光景であらう。村長さんが僅か五六丁がところを大型の自家用自働車で役場へ出かけるといふのも豪勢な話。さう云へば省線の列車も、一わたり朝のラッシュ・アワアが濟んだ後は、二等車室はこゝの驛から乘つて大阪や神戸へ通ふ大會社の重役や大商店の主人たちの定期客で座席も無い、そのくせお隣の三等車室は

空つぽで走るといふ始末だそうだ、以つて察すべしといふものがある、新國道の完成と相俟つて自家用自働車で飛ばさうとした人たちも急速に殖えつゝある。

大阪の大新聞はこのあたりに目標を置いて『阪神版』なるものをつくつてゐる。そのために貴重な二頁が割かれてある。材料はお膝元の特別版と神戸版との持寄り世帶の合ノ子のわけだが何を云つても高が極限された小部分の地域のことだ、ともすれば記事に精彩が乏しく箸の轉んだほどのケチな警察種まで麗々と書き立てるのは少々苦々しい。

このあたりから所謂『阪神沿線』と『阪急沿線』とが餘程接近してゐるわけだが、從つて與へられた題とは自然と遠ざかる、がもう紙數が無い。『阪神』のグルウプに入るべきところはさらに魚崎、本山、住吉、御影から新在家あたりまでであるのだが疲れもしたし、こゝいらで一服するとしよう。だが蘆屋には氣持よく輕く茶か珈琲を飲まして與れるカフェなるものは一軒として無いのだから、川の端の遊廓の松原にでも坐り込むことにしよう。そしても一度繰りかへして云はう。空を見よ。山を見よ。

アパート生活者の悲哀

畑耕一

「合理的に」——

難有い言葉である。

文明とか文化とか文字を使つて、なにか一つの事相を解釋する時に、この言葉は必らずその急所々々に繰りかへされなければおさまりはつかない。社會生活、社會制度、いや、個人の生命、個人の反省——そんな批判の場合、「合理的に」は最も活用されなければならない合言葉の一つである。

げに、人間は、古往今來、この合言葉のために、どれだけ齷齪したことか知れない。學問に、信仰に、あらゆる思想に、「合理的に」を叫ばんとして、彼等はどれだけ爭ひもし戰ひもしたことだらう。悲壯なる殉教者と、無殘なる犧牲者との名——千載の史乘に徵して、僕たちは今さらながら、謹んで弔意を表すべき多くの例證を學んでゐる

——と、大きく出て置かないと、このアパートメント生活者の悲哀が、もつたいらしく聞えない。僕だつて、憚りながら「合理的に」の合言葉に虐げられた、いや、られつゝある一人なのだ。文化主義が今の時代精神であるなら、僕たる者、まさに時代の一殉難者なのだ。記憶せられよ。諸君。

ところで、史乘に傳へらるゝ彼等は、みな「合理的に」と求めて與へられなかつた人々である。彼等は悲嘆痛恨の聲を放ちつゝ、敗滅の淵に投じ或は投せられた。が、僕の場合は彼等と一點大いに趣を異にしてゐる。僕は求めて與へられたのである。與へられてしかも敗滅したのである。ワイルドは、失戀の悲哀よりも得戀の悲哀のはうが遙かにいたましいといつたが、僕のもまさに失「合理的に」でなく得「合理的に」の悲哀である。「合理的に」への受苦受難、この意味あひからいけば、僕のだつて深刻とは申さないが、痛切くらゐの形容はさせて頂きたい。——まつたくの話、過去三年間、僕は「合理的に」生活を求むべく、アパートメント住居を試みて、しかも與へられたる「合理的に」を樂しむことができず、遂には「合理的に」の犧牲者であると思ひ込むまで、われながらいともみじめな、いとも氣の毒な日を送つて來たのである。

敢へていふ。僕は下手な智惠と、戸惑ひした神經とをもつた男である。が、また、敢へていふ。僕は一方、痼性な常識主義と、潔白な凡俗主義を奉じてゐる男である。むやみな反撥性、興奮性あると同時に、しほらしい順應力、同化力も、如才ないまでに備へてゐる人間である。自分自身を處理するには、隨分

われながら無器用、没批判なことをやるが、自分の周圍には大いに頓着あり觀察ある態度をもつてゐるつもりである。――感情の上はどうにもならないほどのわれとわが身のまづさ加減に愛想をつかした僕、そこで、せめて衣食住の上にでも、生活を「合理的に」あらしめたいと念じて、苦勞した結果、文化生活を宣揚して、「現代科學の示す合理的生活を營むに足る所得を受くる人達の日常生活を益する合同住宅」と銘うつて經營されつゝあるBアパートメントへ引越して見たのである。――自動エレヴエーター、浴室、塵埃燒爐、社交室、食堂、煖房、電話、給水、通風、採光など、一々科學的思慮をもつて、一々經濟的分別をもつて、工夫され按配され、まつたく敬敬服々、僕はこゝへ落づいた當日から、あゝやれ／＼、これで身柄の始末だけはどうやら「合理的に」なつたわいと、よろこんだものである。――

このアパートメントは、財團法人の組織で、理事長、理事、評議員にいかめしき人々の名が連つてをり、生活問題の研究、國民生活の向上、文化恩惠の普及といふ、三つのモットオを掲げてゐる。信用と例の「合理的に」では、誰だつて無條件にうなづける威容をそなへてゐる。僕も實は無條件にこゝへ入つて見たくなつた。なんでも入る時に、一冊のアパートメント・ハウスに關する講義録を、買つたか貰つたかした。すつかり讀めばよかつたのだが、忙がしい仕事をかゝへてゐる身體だし、住んで見ればわかると思つて、その本は書架のうしろへ投げ込んで置いた。

――朝起きる。掃除女が來る。叮嚀に靴まで磨いてくれる。食堂も清潔だ。浴室も快い。べつに交際こそしないが、住んでゐる人達も上品で靜肅だ。原稿の投函、撮影所へ用務の電話、來客のしらせなど、事務員も親切だ。いちばんよいことは、僕のやうな時間を不規則に出入りする者は、鍵さへ大事にポケットに入れてゐれば、氣兼ねなしに夜十二時過ぎでも部屋へ歸れることである。病氣もした。家政婦や看護婦も雇へる。――部屋代の三倍の敷金、部屋代、家具を地下室にあづけた藏敷料、ベツトやデスクの借賃、電燈代、電熱器代、電話代、風呂代、水道代、掃除代、使ひ賃――まづこんなところは文句はない。文句をいつたつてはじめつから承知の上で入つたのだ。高いと社會改良家のI女史は、或る時半公開的の席上でいはれたし、世間でもさう噂してゐるが、經營者は普通の借家からいへば、一坪にどれだけの經費がかゝるのを、こゝはどれだけで濟ませるとかなんとか係數的に辯明したのを聞いてゐるので、僕は野暮らしく高い安いは考へやうともしない。

――が、どうしても變なのは、このアパートメントの契約法だ。

これも、こゝに住んで三年後にはじめてわかつたほど迂遠な僕なのであるが――契約は一年を一期として改めるのである。そしてこゝを出る時には、すなはち解約する時には、その豫告の日が明け渡し前一箇月の時は十日分、一週間の時は十五日分の部屋代にあたる解約金を徴收されるのである。すると契約のその日キツカリにこゝを出れば、いや應なしに十日なり十五日分なりを徴收されるわけなのである。たとへば五月一日に入つたものは翌年の五月一日に出る以外には、なんといつてもこの解約金をとられるわけだ。その一日

前なら一年に滿たざる理由をもつて、またその翌日なら、契約書を改めるのだからこれまた一年といふ契約期限內に出るといふ理由をもつて、斷乎としてこの規定に服從せしめられるのである。

合理不合理の言葉を考へる前に、そんなべら棒な話があるものかといふ心持で、その時は馬鹿々々しさよりも一種の義憤に似た心持で、書架のうしろに投げ込んで置いた例のアパート講義をひつぱり出し、住宅利用申合なる項を讀んで見ると、住宅利用料及び敷金は評議員の決議によつて定めるとあつて「但し利用の月は利用證書記載の日より解約の月は第×項の場合に限り住宅明渡濟の日より十日後まで日割をもつて計算すること」と、まるで意味の通らない、曖昧模糊たる文句がある。第×項といふのは、一箇年を一期として契約するといふ意味の項目なのだ。――で、一應これをたゞすと、驚くべし、一枚の別に印刷した同じ申合なる紙片をくれた。それにはちやんと前出の說明がついてゐて、アパート住居の常識に誠意をもてとか、この申合の精神を紳士協約として尊重せられよとか書いてある。

「なにか規約で御不滿がおありなさるなら、御解約になつて結構です。」

これが、そのついでに、監理者の威丈高なお言葉だつた。

嫌ならよせ――これは或る意味からいへば、また合理的な言葉でもある。どうもしかたがない。こゝにゐる以上どこまでも御規約を遵奉しなければならない。ついでに、講義錄とまたこの印刷紙とを反讀して見ると、たしかに浴槽の使用料は取らぬと明示してありながら、僕は毎月三圓半を一人分とした風呂代を取られてゐる。御規約づくめに服從せねばならない以上は、この御規約をも遵奉させて頂きたいものだといひたくなる。――申合せと體のいゝ言葉を使つてあるが、これは申渡の誤りだらうと我慢する。

なほその上に、この頃になつて、部屋の掃除代を、突然、無警告で二圓あげられた。べつに僕の部屋が自然天然ふくらんだわけではなし、トランク一つの置き場を變へただけなのに、どうしてかうめざましい進出を見せたのだらうと伺ひを立てゝ見ると、お掃除の規定は掃除女一人一時間二十五錢の割合で、貴宅は毎日二人で二十分より三十分位ゐかゝるからいつたいなら六圓餘も頂きたいところを、月極めにつき五圓請求いたしますといふ返事。――掃除女が近頃變つたのだが、今までの掃除女は早かつたのだ。べつに僕のはうから變へろといつたのではなし、彼女等が掃除に馴れぬために速度が變つたのだ。その速度まで僕の頭にふりかゝつて來る。もつとも現代はなんでもスピードの世の中なんだから、これも觀念するか。

食堂に日本料理がないため、二年間苦しんだのを、この頃やつと近所に適當な仕出屋を見つけて、うまい味噌汁にありついてゐる。科學的食堂といふので、カロリーといふことに注意されてゐるが、人間、カロリーだけで生きてゆくのだとしたら、はなはだ不愉快である。食物の改良問題を單にカロリーで解決しやうとするところに、科學は畢竟明日の臆說で、經濟は畢竟昨日の經驗に過ぎぬといふ理由がある。それは文化を單なる物質生活の上の、知識や法則による功利性の確實といふことだけで解釋しやうとする者の逃げ口上

美的生活——生命主義からの本能や愛の上に立つべき生活價値をわきまへぬ無雜な無趣味な人間の生活を、僕は嘗て「豚の悲劇」だといつたが、これも、云ひたくなければよせ——だからそのまゝ沈默。

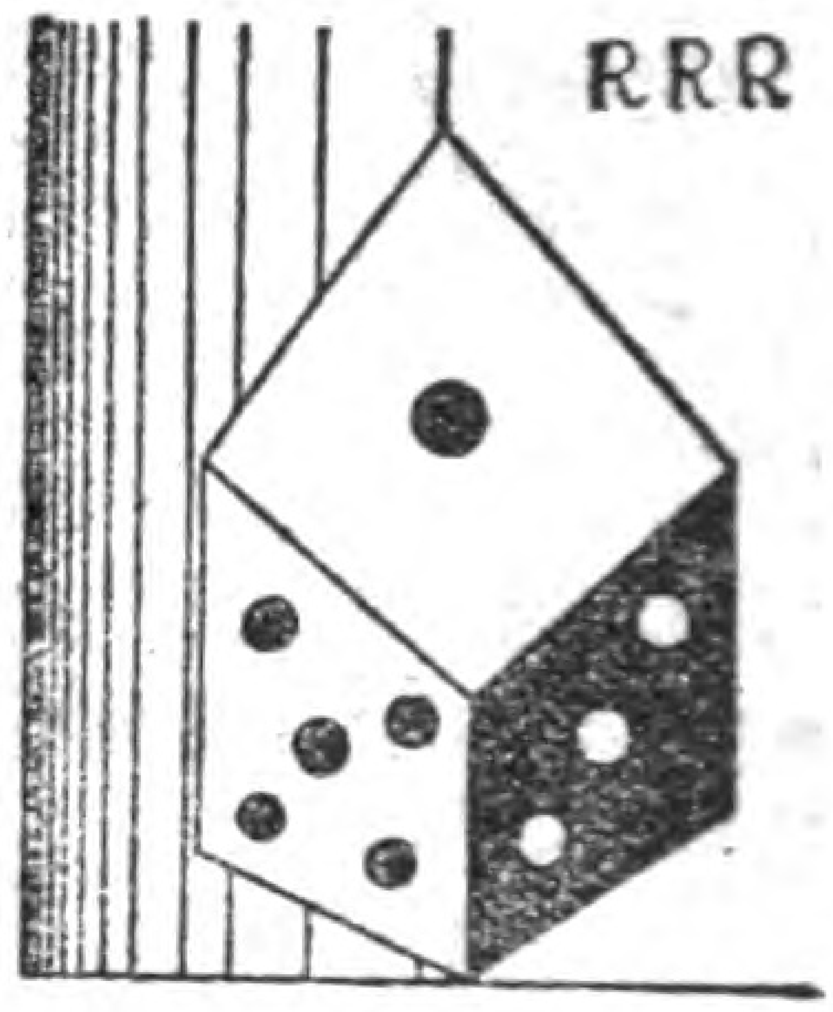
——こんなわけで、僕は、もつと面白く快活に、アパートメント生活を紹介しやうと思つた。が、案外理窟と愚痴になつてしまつた。いや、理窟と愚痴をいはねばならないほど、今のアパートメント生活は文化の眞意義から離れてゐるのかも知れない。「合理的に」不合理千萬なのが、今のアパートメント生活なのだとも思ふ。近頃、だいぶ方々にこの計畫や經營があるやうである。よろこばしいことながら、どうか國民性、民族的意識を考慮した氣持のいゝアパートメントの設立が望ましい。生活樣式よりも生活組織といふことをまづこの計畫者經營者は眼目に置くべきである。アメリカニズムを直譯したやうなアパートメントを建てゝなにゝなるといひたい。勿論、その學ぶべきは學び、倣ふべきは倣つていゝ。それからは日本人の趣味と精神に「合理的に」あるべきである。また、かうした生活改善を標示する以上は、十分公益的、民衆的でなければならぬ。宿屋の亭主や、ホテルの支配人やよりは、營利我慾の念を去らなければいけない。なるほどアパートメントの効用は、やうやく一般に理解されて來た。從つてその需要者も多い。多いどころではない。今の東京にある各アパートメントは、申込みに殺到されて、その需要の十が一にも應ずることができないと聞く。が、その機に乘じて、嫌ならよせの態度を「合理的に」取られてはたまつたものではない。こうした根性をもつ經營者に限つて、需要者に紳士淑女的儀禮を要求する。——紳士と呼ばれ淑女と呼ばるゝ者は、見得の上からでも少々のことに文句をつけないし、その作法の上から、はなはだ御しやすき一方面を持つてゐるからである。

アパートメントは、どこまでも國民性からの外的な又內的な習慣機制を尊重し考慮して計畫經營されねばならない。生活を改良するの善導するのといつたところで、國民性を拔くことはできない。民族精神は一つの信仰であり信念であるからだ。——大正九年東京府が政府から三百萬圓とかの低利資金を借り受けて、府內の公共團體や住宅組合に分配貸與し、今はそれが內務省の管轄のもとに運用されてゐるのだが、その結果はむしろ惡いと識者から斷じられてゐる。僕の住んでゐるアパートメントなども、嘗ては新聞などでかなり非難攻擊されたとか聞く。が、僕はこの點についてはなんにもいひたくない。たゞ、如上にいつたやうなこの經營者の「合理的に」と示めしたものを、どうにも常識から——それこそアパート生活の意識から——一圓合點がゆかぬと感じたまゝ、これだけまづ書き立てたのだ。このアパートメントが、個人經營でなく、財團法人といふ公共的の意味をもつてゐるから敢て世間にお尋ねして見たいのだ。

——愉快であるべきアパートメント生活を、悲哀として物語らせるのは、僕自身の下手な智慧からなのか？　戸惑ひした神經からなのか？——それとも、また、下手な科學的態、戸惑ひした經濟主義からなのだらうか？

——いつかアパートメント生活を棄てた時に、その時の生活から比較して、また改めてこの心持のどつちが間違ひであるかを考へても見たいし、書いても見たい。

モダン生活の氾濫



モダン綺語

丸木砂土

耳

日本の女のモダン振は、まづ耳かくしといふ髮の結ひ方から初まつたと見ても好からう。この髮はその名の通りに若い女の耳を隱す結ひ方で、温雅と可憐とを兼ね備へた美しい形である。けれどもその耳隱しの後に侵入してきた斷髮と比較すると、遙かに女性的であると同時に耳隱しと斷髮との間に現れた顯著な差異は、今迄耳の後に愼ましく隱れてゐた耳が、斷髮によつて見るに耳の外へ躍り出たといふ點であらう。

勿論斷髮にも髮を長めに切つた「小性型」の如きでは、まだ耳は隱れてゐるが、それが紳士型の斷髮になればなる程、女の耳は全く外に現れて來てゐる。耳を隱さうとした女が、耳を出さうとするに致つたのはなぜか。

僕はそれを女が新しい知的美を現さうとしたものだと見てゐる。耳を隱した女は、僕等に妖艶、愛撫、幼稚、淫逸等の印象を與へる場合が少くない。けれども必ずしも斷髮でなくても、耳の後にかき上げた滑かに襟筋に結んだ髮は、その髮の波の下に一點の耳が微笑する事によつて、耳隱しに見馴れぬ美を今更氣が付くのである。耳を出すといふ事は、女にとつて一種の不安な、露骨な、自暴自棄風な心持を抱かせるに相違ない。最も愼ましき日本の髷では、耳は常に隱されてゐる。けれどもこの耳を出した女の美は、耳隱しに全く豫想出來ない、智的な、種族的な、輕快と果斷と明晰の美である。殊に美しい額を持つた女は、耳を現す事によつて一層麗朗たる輝きを增す。もしそれが若い顏であるならば、更に快活と勇氣と新鮮とを加へるものである。

然らばどんな耳でも髮の後から現れる事によつて美しいかといふと、勿論さうではない。所謂わすれな草のやうな耳が、最も美しく愛すべき逸品である。醜惡を極めるのは、市村羽左衞門風の尖つた薄い耳である。あれは惡魔の耳である。もし女が羽左衞門のやうなメフイ

スト的耳を持つたらば、よろしく愧死すべきであらう。

新聞で讀む所によると、この頃の新しい流行として、若い女は耳隱しを片方の耳丈に止めて、他の耳の上にくる髮を耳の後に纏めて、つまり一つの耳丈出すといふ結び方があるさうである。耳の後に纏めるといふのは、どんな風にするのか僕には分らないが、獨逸語に耳の後に何かを持つといふのは、見かけによらぬ狡猾だといふ意味である。或は眞理かも知れない。

ビデエ

今日になつて避姙を罪惡だと思ふ人は、まさか世の中にはあるまい。避姙を説くものには、希臘にプラトオあり、アリストテレスあり、更に聖書のモオゼ傳がある。今日になつては極めて卑俗な婦人雜誌の題目としてももう古い。けれどもその方法として説明されるものは、甚だ非人情的のものもあり、餘りに技巧的のものもあり、多くは實行困難だと聞いてゐるが、僕等に最も露骨に、簡單に、しかも最も目的化したものと考へられるのは、西洋生活に見るビデエの設備であらう。

西洋生活の浴室は、風呂と化粧鏡と便器とを備へる事によつて、最も明快清淨な愛すべき一室であるが、さすがに多くの家庭ではまだそこにビデエを備へるには至つてない。ビデエを持つた浴室は、正に近代的なホテルの上等の二人部屋にしかまだ附屬してゐない樣子である。勿論熱湯と冷水とは、常に用意されてゐなければならぬ。ビデエは、明に清潔と衛生との外に、避姙の意味に備へられてゐるものと斷言しても好いと思ふが、唯僕等はかういふ浴室のビデエを見ると、寧ろ雪の如きタイルや、軟かな乳色の大理石や、微に漂ふ蒸氣や、輝く大鏡、オオ・ド・コロンの赤い瓶の點綴、化粧水の青い小さい形等に交つて、そこに避姙の爲らしい一種の感情を持つ事なしに、反つてすがすがしい清冽明朗たる快感を得るのである。それは極めて健康的な、衛生的な清潔の快感である。便器と風呂とビデエとを一室に集めた西洋の浴室を、僕は人間生活の健康と清潔とを甚だ目的化したものだと思つてゐる。僕等は日本の便所に於て、一々甚だ形式的な手の洗滌を強ひられる。僅に指先を濡らす事によつて、衛生を感じるのは、無意味に近い鈍感である。厠へ行つて手を洗ふ必要を感じるならば、それは餘程不潔なる厠であり、不潔なる肉體に觸れる爲であらう。誰が白く明かなる西洋浴室で例へ用便の後でも不淨を感じるものがあらうか。ビデエに至つては更に徹底した清潔の快感を與へ、唯物的な衛生の意識を抱かせるものである。僕は日本の女の健康と青春の爲に、このビデエが一日も早く日本に設備されるのを望んでゐる。

ビデエの種類にもいろいろあるやうだ。これに類似したものは、日本の妓樓にも用ひられると聞いてゐるが、僕等の求めるものは、どこ迄も近代的な概念である所謂「痛くなる程」の爽快の情感である。我らの新しい日常生活は、どこまでも溌溂たる健康から出發しなければならぬ。

ピジヤマ

佐々木茂索作「ある鄕愁」といふ短篇は、この作者の名作には數へられないものかも知れないが、讀者としての僕には、頗るおもしろい

印象を與へた。それはこの小說に描かれた女主人公は、毎晩ピジャマを着て寢るといふ事が書いてあつたからである。恐らく日本の小說に初めて描かれたピジャマであらう。

　ピジャマは誰も知る通り、上着とズボンからなり立つた西洋式の寢卷である。僕は單純なる讀者として、この斷髮の美しき女主人公が、長襦袢も浴衣も嫌つて薄い薔薇色か空色のピジャマを着て身を横たへる光景を想像し、又その小く頼りなげな肩と、だぶだぶの絹のズボンと、少女のやうな胸に申譯丈についた肋骨の紐の可憐なる形を心に描いて、少からず快感を覺えたのである。永井荷風の小說「二人妻」には、この小說の女主人公は、長襦袢の寢卷とネルの寢卷との比較を寢物語に夫の耳にささやく處が描かれてゐるが、さすがに今日の生活では、長襦袢の寢卷となると、考へる丈でも甚だ暑苦しい。

　僕は今日の日本の若い女の方々、ピジャマを着て寢られる方がどの位あるか、一寸想像は出來兼ねるが、今後は次第にその數が殖てきやしないかと思つてゐる。ピジャマは新しい肌着ではあるが、その發生は歐洲ではなくして、寧ろ東洋である。ベッドで寢るよりもクッションの上に寢る土耳其波斯の東洋から、印度の船乘りによりて歐洲に傳はつたものだと言はれてゐる。獨逸でも昔のヘッセン伯爵領の大名のお抱え仕立屋が「絹製御婦人寢卷ズボン一着五タアレル」と書いた勘定書が殘つてゐるので、ピジャマ史の上には有名である。

　獨逸の女にピジャマを着せた姿を見せてくれるのは、エエデキンドの戲曲である。僕はマリア・オルスカといふ小猫の如き女優が、ピジヤマのズボンの先から媚めかしき爪先を出して、素足に青い鞣し革の上靴をはき、口に巻煙草をくはへたルルの姿を見たが、異常なる刺戟を與へたのを忘れない。今日までの多くの女の寢卷は、レエスの飾りをひらひらさせた「朝の上着」といふ種類で、その柔かな幅の廣い襞物は、微笑的な、弱々たる可愛い女の姿には適當してゐるが、今日のスポートによつて鍛錬された大膽なる半魔女には、餘りに古めかしい十九世紀趣味ぞと言はなければならぬ。ピジャマはその太く又は細いズボンにより、長く又は短く紳士型に仕立てた絹の上着により、或は廣く又は狹い帶が肋骨により、その媚めかしき仄かなる色合によつて、無遠慮な、輕快な、侵略的な、しかも好色的な新しい女性美を作り出したものである。しかも僕等の忘れてならないのは寢卷であるべきピジヤマが今日の家庭の朝と夜とに於て、一種の家庭服と成りつゝある事である。ピジャマを着て、朝のうれしい訪問を受ける事は、親しい友達に一層親しい感を與へる事はあつても、淫らなる無禮だとは見られなくなつた事である。ある英國の判事は、一つの離婚訴訟に於て、ピジャマを以て淫猥なる衣裳とは解釋しない判例を作つてゐる。

　女が家庭に於てピジャマを着るといふ事は、「ズボンをはく女」としての一段階である。「ズボンをはく女」とは、男を統御する意味の女である。今日の女が「ズボンをはく女」に成りつつある事は、誰の目にも明かだ。從つてしどけない長襦袢姿は寧ろ嫌厭すべきものとなり、浴衣は餘りに非煽情的でありとすると、日本の女は反つてあの短篇「ある鄕愁」の女主人公のやうに、ピジャマを愛用するやうになり、明に夜のズボンをはく女となり、同時に新しい寢室美を作り出すに至らう。ピジャマのズボンをはいた日本の女の姿は、またいかなる畫家も

描いてない。ピジヤマに好んで用ひられるほのかな薔薇色は、漆の如き日本の黒髪にこの位よく映る色合はあるまい。まして小さく纖巧な若き女のピジヤマ姿は、意外に妖艶可憐なものかも知れぬ。唯突如として細くしなやかなる絹のズボンをはいて、大膽に身を横たへた若き夫人の姿を見て、驚倒する愚なる夫の顏は、想像する丈でも愉快である。(昭和四年五月)

モダン生活と變態嗜好性

權田保之助

街路樹が新緑に蘇つて、ペーヴメントに初夏の陽が躍ると、假令バラックに厚化粧をしたのだとは云へ、シンガポールかバルセローナの町ぐらゐのエキゾテイックな匂ひはする銀座の街を、ラツパヅボンに、おかつぱ頭はとうの昔の流行の殘品、澁いやうで派手なハンテイングと、女のスカーフにでもしたらと思ふ色合のや、羽織の紐にも間違へられ相な細いネクタイとの間を覗き出してゐる象牙の面のやうに無表情なノツペリとした顏と、太く短い脚は永い間の因襲の悲しむべき遺物として致し方がないにしても、映畫で馴染みのアメリカ女優好みの輕い衣裳も小ぢんまりと柄にはまり、カフエーの女給の纏ふやうな派手な模樣のキモノを着付けて、口紅を濃く、頬紅を猿の如く、眉毛を細く長くへの字に描いたコケツテイツシユの顏とが續く。映畫館がはねて人雪崩が押し出す時、カフエーの灯が紅く、ダンスホールにチヤツの音が冴える頃、そう云つた男や女の群が、最も勇ましく登場して、潑溂として躍る、活きる。

此の所謂「モボ」と「モガ」とで象徴されてゐる「モダン生活」といふもの、それは一體どんなもので、其處に現はれて來てゐる一種の趣味――變態的嗜好性とでも云ひ度い趣味性は、どうして出て來たのだらうか。無いやうで、しかも有ることを否定出來ない此の「モダン生活」と、或る魅力と或る嫌はしさとを同時に等分に具へてゐる此の「變態嗜好性」と、それは見遁がすには餘りに惜しく、さりとてあげつらうには又餘りに詰らぬ社會事象ではある。

○

「モダン生活」といふ、それは一體何處にあるのか？

汗と土とで固められてゐる田舍に無いこと丈けは確かである。それは所詮は、都會の産であるらしい。それならば、都會では何處にでも、それは轉がつてゐるのか？否。

それは大傳馬町とか本石町とか云ふ舊い江戸時代の臭ひが殘つてゐるあたりには見當らないものである。どうしても新しい時代の生活が動いてゐる地域に限つたものだ。已に「モダン」と稱するのだから。所が、然らば此の所謂新しい時代の生活が營まれてゐる所は何れも皆、「モダン生活」の場所かといふに、決してそうではない。

東京郊外の俸給生活者の「家」の中にも、藝術家の集團の住む何々文化村にも、本所深川の勞働者街にも、それらしいものにはぶつからない。つまりは新しい生活の營まれてゐる都會の中の或る特定の場所

にのみ局限された生活表現であるらしい。卽ちそれは「銀座」とか、「丸ビル十字街」とか、「日比谷」とか、「新宿」とか、「神楽坂」とかいふ極く狭い地域にのみ限られたものであり、何々ビルの四五階の一室のダンスホールや、カフエーや、ソーダファウンテンや千疋屋の二階にのみ發見される存在であり、映畫館の椅子席に、音樂會場の廊下に、そしてレストランのサロンにばかり營まれる生活である。

然しながらそれは、銀座や新宿や神楽坂に在る家の中に住む人達によつて營まれる所の生活とは全然別物なのである。カフエーの女給、料理番や、映畫館の案内女、出方やなぞの營む生活でもありはしない、それは其のやうな場所に集まつて來る他の地域に住む人々の生活なのである。それは要するに、前に擧げたやうな種類の地域や場所には住んだり働いたりしてゐるのではなくて、しかも夫等の地點に集まつて來る人達が、その地域や場所で營む生活だといふことになる。卽ち「モダン生活」は街頭の生活なのである。ブルヴアールの生活であり、シユトラーセの生活である。そしてカフエー、バー、レストラン、映畫館、ダンスホール……夫等は何れも、この街頭の延長として、シユトラーセの一形態として「モダン生活」の座となるものである。だからそれは「家」の中では榮え得ぬ生活である。「街頭」に於けるモダン生活の立役者たるモボもモガも、「家庭」に歸つては、髭を切られた猫の如く、牙を拔かれた虎のやうなものである。

「モダン生活」は街頭の生活である。それは詮ずる所、かゝる「街」を創り出してそれを榮えしめて行く近代的大都市といふ怪物の所産なのである。

「モダン生活」、それは終日、二六時中、常住不斷に營まるゝ生活ではない。それは勞働の生活とは緣の無い種類の人間の時間や、生產の生活から離れた餘暇の時間が、此の「街頭」にある間だけ、消費される過程なのである。

○

其處でモダン生活の主體は何であるかと云へば、その生活者の最も純粹な形は勞働生活、生產の生活に無關係な種類の人間によつて構成される。

卽ち階級的に云へば、有產有閑階級者少くともプテイ・ブルヂョアの階級に屬するもので、生產の生活には直接緣が無くて、唯だ消費にのみその生活を築き上げてゐる種類の者である。年齡的に云へば、モダンボーイ、モダンガールといふ名稱がそれを表はしてゐるやうに、それは青年の男女である。職業的に云へば、無職を原則とするのであつて、學生がその最も純粹な形式であり、假令職業があつても、それによる收入で扶養すべき義務を負はされてゐるやうな種類の人間ではなしに自分の儲け得たるもの全體を自己のみの欲望に消費し盡し得る所の、言ひ換ふれば、少くとも餘暇に際しては無職者と同じい地位となり得る種類の人間、具體的に云へば、獨身者の俸給取りと云つた種類のものである。

要するに、勞働生活とは緣のない、生產の外にはあかの他人であり、所帶の苦勞には風馬牛である連中が、モダン生活の主體をなすものではある。

○

此のモダン生活者にも、扨て仔細に觀察し來ると、色々な種類があるやうだ。今之を分類すると、「本質的モダン生活者」と「二義的モダン生活者」に二大別されるが、後の二義的モダン生活者は更らに分れて「一時的モダン生活者」と「モダン生活業者」となると思ふ。

「本質的モダン生活者」といふのは、卽ち已に前述したやうなモダン生活の各條件に適合してゐる種類の人間を云ふのであつて、つまり「モボ」「モガ」なのである。實にモボとモガとは、モダン生活の精髓であり、越幾斯である。

一時的モダン生活者といふのは、階級に、年齡に、職業に、又所帶に於ける關係に、本質的モダン生活者たり得ない種類の人間で、然も一期間內だけ本質的モダン生活者の境遇、狀態に身を置き得る人が、その期間內に於ける一時的な生活狀態にある間のその人を指すのである。

文藝家、美術家、文筆家等で此類に屬する者は尠くなく、その中には「常習的一時的モダン生活者」とも呼ぶべき連中も乏しくない。又分別盛りの年配で鹿爪らしい職業を有つた者の中に「偶發的一時的モダン生活者」が出現することも珍らしくない。けれども夫等は何れも皆、メツキのモダン生活者であり、付燒刄のモボであり、モガである。何處かに所帶染みた蔭がさし、糠味噌の臭ひがして、里心がチラ付く。

モダン生活業者とは、モダン生活を營むもの、爲めに、已れも亦、外形的にモダン生活の一部を生活し、以てそれを營業としてゐる人々を云ふのである。それは新しい命名であり、最新造語である。つまりはモダン生活者のお相手であり、パートナーである。カフエーやバーのウエトレス、ダンスホールのダンサー等がそれである。それはつまり形式的のモダン生活者であるのに過ぎない。

此のやうな本質的モダン生活者と一時的モダン生活者及びモダン生活業者とが入り亂れて、街頭に、又街頭の延長の上に、描き出す渦捲きが、卽ち「モダン生活」なのである。

○

モダン生活は二個の社會的因數の上に成立する。その二つの因數とは、曰く「生產生活の捨象」と、「近代に於ける生活解放の主潮」とである。

近代の社會生活が有產有閑階級者の子女を、卽ちモボ、モガとなり得る資格を具備した青年男女を多く世の中へ送り出した。のみならず近代的大都市の生活といふものが、其處に生活し職業するものをして、いよ〱生產の原型から遠ざかつた仕事にたづさはらしめ、生產を捨象した生活の情調を構成させるやうになる。それでも「家」はなほ生產の原則が通用し、勞働の重荷から全く脫し得ぬ所である。所帶の苦勢があり、扶養の義務が控えてゐる。其處で「街頭」にその情調を盛るべき生活が現はれねばならなくなる。

所が近代に於ける生活解放の思潮、大衆主義の大きな潮が、自由不羈な無拘束な生活を隨所に打ち立てることを認容する。階級による地位による職業による其他各種の條件による生活構成の封建制は打ち倒されて、各人自由に、しかも同等の權利を以て、その生活を建設し享樂することが出來るやうになつた。斯くて生產生活を捨象した生活が、それを構成するのに最も都合のよい種類の人間によつて、無拘束

に鮮明に意識されるやうになつた。

○

モダン生活、その言葉を耳にして、様々な感じは起るにしても、其の中には明るい軽い甘い快さを伴ふ一種の感じが潜んでゐることには誰にも異存はあるまいと思ふ。善悪の善ではなしに、「一寸いゝですね」といふあのいゝ感じが、それに就いて感じられるのは、何人からも否定され得ない。それはモダン生活が所有する明の側面であり、その身上である。そしてそれがモダン生活を、忌はしい數多くの属性にも拘らず、近代人が唾棄して仕舞ふことが出來ずにゐる理由なのである。而してそれはモダン生活成立の一因數「近代に於ける生活解放の主潮」に根差す側面であるからに外ならない。

所がモダン生活には、必然的禍殃としての嫌やな側面が一際立ち勝つて現はれてゐる。それが即ち變態嗜好性なのである。勞働が比較的均衡を得、勞働に裏付けられた生活に現はれる趣味は、正常な健全な發達を遂げるのである。之に反して勞働の均衡が甚しく破れ、餘りに過重なる勞働か、又は餘りに寡少にして全然勞働を忘却した生活に現はれる趣味性は異常な展開を示す。斯してモダン生活の成立の極めて大きな因數としての「生産生活の捨象」の上に、モダン生活に於てはその趣味性は畸形的な變態的な發達をなすべき宿命に置かれてゐる。

生産の生活を捨象し、勞働生活と絶縁したその生活に現はるゝ趣味性が足の地に就かない、底力の無い、浮つ調子の、氣まぐれの、繊弱でしかも奇矯な、そして權威に對する妄模倣としての外國模倣、フエミニスティツシュな、ノイラステーニツシュな、デイレツタンティスムスに堕ち込んで行くのは、寧ろ當然な成り行きなのであつて、これがモダン生活の辿つて遂には落ち行く道筋であり到達點なのである。

頬紅、口紅、描き眉毛、ボッブの頭で銀座を流すあの趣味も、スクリーンの上の二枚目俳優がそのまゝ抜け出したのかと思はれる風姿と仕草で、カフエーの夜を更かすあの趣味も、濃艶な映畫趣味も、妖艶なレヴユー趣味も……も、所詮は「勞働」を捨象し「生産生活」を離脱した生活の上に、徒らに根もなく繁り亂るゝ趣味に外ならないのである。

○

然しながら此處に私は一寸考へて見度い。と云ふのは生産生活を捨象した生活と、之れに伴つて出現した變態嗜好性は現代社會に於てのみの産物であるのか、どうかと。私はそうだとは思はない。

何時の世とても遊民はある。生産生活の心情に少しの理解もなくて、人の勞働の所産の上にその生活を築いて行く生活者がある。そう云つた種類の人間の生活には、何時でも變態嗜好性が發生する。現代に限つた話ぢやない。

徳川期にもさうであつた。然し此の變態的趣味性は當時の社會的約束と制扼とで固められてゐた當世間では、それが不遠慮な開展を見ることが出來ずに仕舞つた。それは、それらが思ひ切り自由な無碍な擴充を期するが爲めには、時代の封建的階級制度の鐵則が行はれ得ぬ自由な境の出現を必要としたのである。斯くて其處に忽焉として出現したものが、あの「吉原」であつた。當時の遊廓なのであつた。醫者の

外乘物無用、武士も町人も一切平等、實生活の法則から脱却して、ただ情と意氣とが支配した流通無碍の此の境に於て、始めてあの生産生活を捨象した生活者が、その變態的趣味嗜好性を思ふ存分に發揮せしめ得たのである。當時の最も大きなフイナンツマンであつたあの藏前の札差といふ存在と、吉原といふ存在との間にこそ、あの「十八大通」といふ變態的嗜好性の眞骨頂が生まれ得た譯なのである。

所が現代はどうか？　生活に對する封建的階級制度は倒れて、凡ての人に生活表現の自由が、凡ての時、凡ての場所に於て許されるやうになつた。斯くて現代はその生産生活を捨象した生活に由來する變態嗜好性の展開の爲めに、特に「吉原」を要しなくなつた。そして此の「吉原」から解放された現代の變態嗜好性は、銀座に、日比谷に、カフエーに、映畫館に、レストランに、ダンスホールに、……に、つまり「街頭」に、その遺憾なき發展と無碍なる成熟とを樂しむことになつた。初夏の陽に映ゆるペーヴメントの上に、新緑に覆ろふベンチのあたりに、冷たいマーブルの卓の傍に、モダン生活的變態嗜好性は躍つてゐる。

モダン商賣往來

小汀利得

一　交通を妨害(?)する圓タク

何しろえらいことになつた。つひこの間の晩のこと、僕は尾張町新地のカフエー・ライオンの前に立つて、右手を擧げて合圖をした。それは向ふ側に待たして置いた友人を呼ぶ爲めであつたんだが、間も無く僕の前には五六臺の圓タクが立ち停つてしまつた。オヤツと思つたが、もう仕方が無い。友人はそこまで來て居るのだが、この恐ろしい圓タク軍の一隊の爲めに渡つて來ることも出來ない。

癪に障るけれどもしやうがないから、『僕が手を擧げたのは自動車を呼ぶ爲めではなかつた。呼ぶには呼んだんだが、それは向ふ側に立つて居る美人を呼んだんだよ』と、特に美人のところへ力を入れて釋明に及んだので、運轉臺の左側から一齊に顏を出してた助手は忌々しさうにピシヤ〳〵扉を閉めて、また銀座の街をば『交通妨害』すべく遊弋し初めた。

圓タクの去つたあとへ、漸く友人A君はやつて來た。A君はいきなり『何だ、君は克明にあの朦朧圓タク共に辯明してたぢやないか、僕はあんな時には、知らぬ顏をしてそつぽ向いてしまふよ、お前達に用事は無いと云ふしるしに』と云つた。

それから新橋の停車場までと云ふもの、二人の話題は圓タク問題に終始した。出雲町の角まで來た時に、僕が資生堂へ寄つてアイスクリームを食べることを、提議したのでA君も早速賛成し、出雲町の交叉點を横切らうとすると、また圓タク御難に遭つた。此方は電車、圓太郎、靑バスそれに圓タク、自轉車＝自轉車は流石に夜になると少いが＝とあとから〳〵來るので、一先づ杜切れるのを待つて、向ふ側へ渡らうと思つて右左を命掛けで見て居るのに、圓タク先生われ〳〵をお客と見てか、特にスピードを緩めて前へ立ち塞つてしまふのだから、

塞がつたもんぢやない。今度は僕が悲鳴をあげた『オイ君、これぢや全く交通機關ぢやなくて、交通妨害機關だね』と。

交通妨害にもなる筈だ、警視廳で調べて見ると東京府内丈に營業用乘用自動車と云ふものが三月末の現在で九千三百臺あるさうだ。昭和元年には之れが四千七百臺だつたが、二年末には六千四百臺となり、三年末には九千百臺に殖えた、最近は一ヶ月に少くとも百臺は殖えると云ふから、今ぢやもう九千五百臺の自動車が昔の人力車に替つたわけで、しかもこの中の大部分が圓タクで、それが夜になると場末に居たつて商賣にならないもんだから、みんな銀座へ淺草へ神樂坂へと人出のありさうな場所へ集まるんだから、田舍者なんか交通巡査の保護なしには、夜の銀座は絶對に横切れやしない。

かう云ふ勢ひで自動車の數が殖えるもんだから、年々の自動車やギヤソリンの輸入高も殖える一方で、世界大戰の終りの大正七年に、たつた七百六十萬圓の輸入だつた自動車及び部分品は、昭和二年には千八百萬圓となり去年はとう〳〵三千二百萬圓になり、ギヤソリンの使ひ方も大したもんで、大藏省あたりでは、日本の國際貸借改善の爲めに、自動車やギヤソリンの輸入制限をやらうかと云つて居る位だ。

二　ギヤソリン孃のロマンス

自動車と云へば、圓タクが殖えるに從つて、市中到る處にギヤソリン・スタンドが出來たことも、モダン東京に特異な情景だ、東京丈でも少くとも二百以上このギヤソリン・スタンドがある。なんでも東京や横濱市内でこのスタンドの權利を取れば、大變な儲けになるので、市會議員とか、政黨員とかの、院外團の有力者になつて居るさうだ。何しろ場所にもよるが、いい所ならいつでもこの權利が一萬圓には賣れると云ふから大したもんだ。

しかし權利を取るもの、それを買つて商賣を初める者はいゝが、あのお巡りさんの交番よりも窮屈な三尺四方のボックスに、三百六十五日を暮すギヤソリン孃は樂ぢやない、精々五十圓位の月給であの勤めでは、僕は女にあまい譯ぢやないが、ギヤソリン孃に滿腔の同情をそゝぐね。一體あのスタンドで一日どれ位の商賣があるかと云ふに、之れも春夏秋冬、季節によつて餘程違ふが、春ぽか〳〵暖かく、人の動きの盛んな時には、一日に二百五十ギヤロン位の賣上げがあると云ふから、一ギヤロン六十錢として一日百五十圓。

一臺のギヤソリンスタンドのお客は大凡百五六十臺で之れが一日平均三十臺以内來ると云ふから、ギヤソリン孃はお客とは大抵顏馴染だが、對手が忙がしいショファーだから、あまりぺちやくちやおしやべりはして居ないが、それでも少しはロマンスも生れる。

三　最高級のモダン商賣

モダン商賣で極く高級のものに照明顧問、經營顧問、金融顧問なんかゞある。

照明顧問は說明するまでもなく建築の照明設備の設計や改善の相談に應ずるので、それはちやんと銘打つて商賣をやつて居るのが、東京高等工業學校の教授をして居つた伊藤至二郎博士だ。かう云ふのはいまの中はビルヂングのやうな大建築に限られるだらうが、ゆく〳〵はカ

外乘物無用、武士も町人も一切平等、實生活の法則から脫却して、ただ情と意氣とが支配した流通無碍の此の境に於て、始めてあの生產生活を捨象した生活者が、その變態的趣味嗜好性を思ふ存分に發揮せしめ得たのである。當時の最も大きなフイナンツマンであつたあの藏前の札差といふ存在と、吉原といふ存在との間にこそ、あの「十八大通」といふ變態的嗜好性の眞骨頂が生まれ得た譯なのである。

所が現代はどうか？　生活に對する封建的階級制度は倒れて、凡ての人に生活表現の自由が、凡ての時、凡ての場所に於て許されるやうになつた。斯くて現代はその生產生活を捨象した生活に由來する變態嗜好性の展開の爲めに、特に「吉原」を要しなくなつた。そして此の「吉原」から解された現代の變態嗜好性は、銀座に、日比谷に、カフエーに、映畫館に、レストランに、ダンスホールに、……に、つまり「街頭」に、その遺憾なき發展と無碍なる成熟とを樂しむことになつた。初夏の陽に映ゆるペーヴメントの上に、新綠に緊ろふベンチのあたりに、冷たいマーブルの卓の傍に、モダン生活的變態嗜好性は躍つてゐる。

モダン商賣往來

小汀利得

一　交通を妨害（？）する圓タク

何しろえらいことになつた。つひこの間の晚のこと、僕は尾張町新地のカフエー・ライオンの前に立つて、右手を擧げて合圖をした。それは向ふ側に待たして置いた友人を呼ぶ爲めであつたんだが、間も無く僕の前には五六臺の圓タクが立ち停つてしまつた。オヤツと思つたが、もう仕方が無い。友人はそこまで來て居るのだが、この恐ろしい圓タク軍の一隊の爲めに渡つて來ることも出來ない。

癪に障るけれどもしやうがないから、『僕が手を擧げたのは自動車を呼ぶ爲めではなかつた。呼ぶには呼んだんだが、それは向ふ側に立つて居る美人を呼んだんだよ』と、特に美人のところへ力を入れて辯明に及んだので、運轉手の左側から一齊に顏を出してた助手は忌々しさうにピシヤ〳〵扉を閉めて、また銀座の街をば『交通妨害』すべく遊弋し初めた。

圓タクの去つたあとへ、漸く友人A君はやつて來た。A君はいきなり『何だ、君は克明にあの朦朧圓タク共に辯明してたぢやないか、僕はあんな時には、知らぬ顏をしてそつぽ向いてしまふよ、お前達に用事は無いと云ふしるしに』と云つた。

それから新橋の停車場までと云ふもの、二人の話題は圓タク問題に終始した。出雲町の角まで來た時に、僕が資生堂へ寄つてアイスクリームを食べることを、提議したのでA君も早速贊成し、出雲町の交叉點を橫切らうとすると、また圓タク御連に遭つた。此方は電車、圓太郞、青バスそれに圓タク、自轉車＝自轉車は流石に夜になると少いが＝とあとから〳〵來るので、一先づ杜切れるのを待つて、向ふ側へ渡らうと思つて右左を命掛けで見て居るのに、圓タク先生われ〳〵をお客と見てか、特にスピードを緩めて前へ立ち塞がつてしまふのだから、

怒鳴つたもんぢやない。今度は僕が悲鳴をあげた『オイ君、これぢや全く交通機關ぢやなくて、交通妨害機關だね』と。

交通妨害にもなる筈だ、警視廳で調べて見ると東京府内丈に營業用乘用自動車と云ふものが三月末の現在で九千三百臺あるさうだ。昭和元年には之れが四千七百臺だつたが、二年末には六千四百臺となり、三年末には九千百臺に殖えた、最近は一ヶ月に少くとも百臺は殖えると云ふから、今ぢやもう九千五百臺の自動車が昔の人力車に替つたわけで、しかもこの中の大部分が圓タクで、それが夜になると場末に居たつて商賣にならないもんだから、みんな銀座へ淺草へ神樂坂へと人出のありさうな場所へ集まるんだから、田舍者なんか交通巡査の保護なしには、夜の銀座は絶對に横切れやしない。

かう云ふ勢ひで自動車の數が殖えるもんだから、年々の自動車やギヤソリンの輸入高も殖える一方で、世界大戰の終りの大正七年に、たつた七百六十萬圓の輸入だつた自動車及び部分品は、昭和二年には千八百萬圓となり去年はとう〳〵三千二百萬圓になり、ギヤソリンの使ひ方も大したもんで、大藏省あたりでは、日本の國際貸借改善の爲めに、自動車やギヤソリンの輸入制限をやらうかと云つて居る位だ。

二　ギヤソリン孃のロマンス

自動車と云へば、圓タクが殖えるに從つて、市中到る處にギヤソリン・スタンドが出來たことも、モダン東京に特異な情景だ、東京丈でも少くとも二百以上このギヤソリン・スタンドがある。なんでも東京や横濱市内でこのスタンドの權利を取れば、大變な儲けになるので、市會議員とか、政黨員とかの、[illegible]の[illegible]になつて居るさうだ。何しろ場所にもよるが、いい所ならいつでもこの權利が一萬圓には賣れると云ふから大したもんだ。

しかし權利を取るもの、それを買つて商賣を初める者はいゝが、あのお巡りさんの交番よりも窮屈な三尺四方のボックスに、三百六十五日を暮すギヤソリン孃は樂ぢやない、精々五十圓位の月給であの勤めでは、僕は女にあまい譯ぢやないが、ギヤソリン孃に滿腔の同情をそゝぐね。一體あのスタンドで一日どれ位の商賣があるかと云ふに、之れも春夏秋冬、季節によつて餘程違ふが、春ぽか〳〵暖かく、人の動きの盛んな時には、一日に二百五十ギヤロン位の賣上げがあると云ふから、一ギヤロン六十錢として一日百五十圓。

一臺のギヤソリンスタンドのお客は大凡百五六十臺で之れが一日平均三十臺以内來ると云ふから、ギヤソリン孃はお客とは大抵顏馴染だが、對手が忙がしいショファーだから、あまりべちやくちやおしやべりはして居ないが、それでも少しはロマンスも生れる。

三　最高級のモダン商賣

モダン商賣で極く高級のものに照明顧問、經濟顧問、金融顧問なんかゞある。

照明顧問は説明するまでもなく建築の照明設備の設計や改善の相談に應ずるので、それはちやんと銘打つて商賣をやつて居るのが、東京高等工業學校の教授をして居つた伊藤奎二博士だ。かう云ふのはいまの中はビルデングのやうな大建築に限られるだらうが、ゆく〳〵はカ

フエーやバーやダンスホールのやうな、夜を重にする商賣や個人住宅にまで及ぶことにならう。

經營顧問と云ふのは、もう疾くに生るべくしていまゝで生れなかつたのが、世の中が段々不景氣になつて來てつひに生れたのだ。法律に專門の辯護士があり、特許に特許辯護士があり、病氣に醫者が必要であるやうに、經濟活動にも顧問は要るから將來は相當この種の商賣が盛んにならう。いまでは丸ビルに一軒小山五郎氏が初めただけ。

金融顧問も、やつと三年程前に廣津政二君が丸ビルに、ヤサカ商會の名で初めたが、なか／＼繁昌して居る。尤も繁昌は顧問の方よりは、直接金を廻す方かも知れない。

四　ボロイ爲替ブローカー

商賣そのものは新しくないが、世界大戰中貿易が盛んであつた當時に興り、大正十三年秋の爲替暴落以來、特に繁昌するやうになつたものに、爲替ブローカーがある。爲替ブローカーはいま東京丈に十五六人居るが、この商賣には資本は一文も要らない、事務所を持つて電話を引いて居る者は別だが、大部分は郊外に住んで居て、朝銀行の開業時間に東京驛へ現はれると、常備の人力車に乘り爲替銀行、貿易商の店を廻つて支配人席へ行つて、オフアーを貰ふ。コミツシヨンは取扱高の十六分の一パーセントだから、百圓についてたつた六錢二厘五毛だが、大きい商賣になると、一口に百萬ドルなんてのが有るから、さう云ふ仕事を物にすりや一口で千二百五十圓になり、一ヶ月は遊んでゝもいゝと云ふ、この世智辛い世の中には滅多にないボロイ商賣だ。その代り爲替が動かなくなると、商賣は上つたりになつてしまふから、日本の經濟界が擧つて祈つて居る、爲替の安定は爲替ブローカーに取つては大禁物、支那人の博奕だらうが、ヤンキーの買賣り叩きだらうが、構やしない、何でもかでも圓爲替が滅茶苦茶に動いてさへ居れば萬々歳と云ふところだ。近頃は大藏大臣や商工大臣までが與太を飛ばして呉れるので、お誂へ向きに爲替は動搖する、銀行も貿易商も迷つて賣つたり買つたりするので、このところブローカー大當り、金解禁をするとかしないとか云ふ記事が新聞に出る間は、飯の喰ひつぱぐれはないと、ブローカー連中舌を出して居る。

唯この商賣のいやなことは、爲替銀行や貿易商の若い支配人や係長にペコ／＼頭を下げなければならず、おまけに偶々から云ふ連中が重役から叱られたりしたあとへでも、飛び込まうものなら、奥さんからお小言を頂戴したおさんどんがポチを叱り飛ばすやうに、劍つくを喰はせることだ。

五　嶄新奇抜なブローカー種々相

ブローカーと云へば近頃新案のブローカーは生命保險の『解約ブローカー』と云ふやつだらう。何しろ生命保險の契約爭奪戰は、隨分烈しいもんだから、正直に保險について呉れと云つて歩いたつて、この不景氣の時世にオイソレと新契約をするものはありやしない。

そこで智慧を絞つたのが、この解約勸誘で、景氣のいゝ時にすゝめられてついたものゝ、今ぢや毎年の掛金にも困つて持て剩すと云ふのが少くない。この弱點につけ込んで『如何です保險證券をお高く頂戴

[redacted]務を讓り受け、それを會社に持ち込んで、解約返戻金との差額をせしめる仕組だ。この解約ブローカーは最初の程は福岡を中心とする北九州で行はれて居たが、忽ち全國各地方に傳染して、今では茨城、栃木、群馬と關東地方で、最も盛んに流行つて居るので、保險會社ではすつかり手を燒いて居るさうだ。

ブローカーにはまだ〳〵色々ある。古い所では各商賣にそれ〴〵ついて居るブローカー、穩田の神樣こと飯野吉三郎や、杉山ホラ丸のやうな政治ブローカー、世界大戰中船腹の足りなかつた時代に、幅を利かした船のブローカー船腹ブローカー、この中には內田海軍政務次官閣下のやうな、優秀な人材もあつたが、一昨年の金融恐慌の後は、全國のボロ銀行を通じて日本銀行へ集まつて居る、株や土地や建物を嗅ぎつけて買つて歩く『整理ブローカー』と云ふ新手が現はれてなか〳〵活躍して居る。もつともこの整理ブローカーの中には研究會あたりの貴族院議員子爵××閣下なんかもあり、前××銀行總裁なども加はつて居つて、之れが盛んに明躍、暗躍して居る、この連中の手で太平生命や太平火災が潰れた村井、左右田の手から、日本銀行を經て望月軍四郎の經營に移つたり、若尾の擔保に入つて居た東電株が小林一三君一派の手に入つたりした。

この整理ブローカーは、どこでも銀行會社の潰れたのばかり狙つて蝟集すること、街上の腐肉を中心に群がる野犬のやうなもので、嘗て神戶の鈴木商店が潰れた當座は、毎日臺灣銀行と大藏省の間にお百度を踏んで居た。

六　殘されたモダン商賣の數々

これは少くとも正當な商賣ではないが、不景氣利用の新手の詐欺が大分ある。その中で最も奇拔なのが、今度出來上つた三井の新館を利用した奴で、それはかうだ、三井の司廚長の名を利用して、大きな魚屋、肉屋、八百屋、食料品店等へ出掛け『俺は司廚長の友人だが、今度新館の食堂へ材料を納めるやうに運動してやらう』と申込む。普通の詐欺のやうにその場で金をせしめやうとしない。

そこで儲からないで弱つて居る商人共、こいつ一つ物にしてやらうと思つて、早速三越の切手かなんかを持參して宜敷御願ひしますとやつたもんだ。

これおや詐欺にもならないで當局でも弱つて居るさうだ。

一寸考へて馬鹿々々しいやうで、近頃どうかからうか商賣になるのは、血壓をはかる商賣だらうな。素人が他人を診察投藥すれば醫師法違反になるが、血壓をはかる丈なら一向差支ない。そこで血壓計を一つ持つて、日本橋京橋あたりの店頭へ現はれ、初めは買物でもするやうな恰構をして、不圖思ひついたやうに、旦那あなた少し顏色が惡いですが、血壓をはかつてあげませうてなことで渡りをつけ、それから一月二回位廻つて家內中、店の者まで血壓をはかつてやるのだが、之れで一人口位は立派に喰べられると云ふから面白いもんだ。

商品切手や勸業債券を賣買する切手屋はもう古い商賣だが、近頃はそれにプレーガイドを一緒にしたテイケット・ストアなるものも生れた。

横濱植木會社なんかは本職の百合根の輸出の暇な時には、『庭園設計顧問』等を初めた、之れは技師を派遣して、庭を設計し、それ〴〵値段に應じて植木や石を入れ、人夫も入れるので、大變重寶がられて居る。

この商賣なんかは洋式家屋が殖えるに從つて將來ます〳〵發展すること請合ひだから、大學の農學部を出る人なんかでかうした新しい庭師になれば面白からう。

ダンスホールはもう古いが、今度いよ〳〵外國流のキャバレーが許されるさうだから、銀座あたりではあの異國情調の食べながらレヴューを見たり踊りをながめることが出來るやうにならう。

×

貧乏の享樂化

赤神良讓

私の中學時代からの友人の一人が、一膳飯屋の主人公になつてゐる、そして私は今迄彼から教へられた幾多のものをば持つてゐる。いや寧ろそれは教へられたといふよりは、叱られたといふ方が適切であるかも知れない。

私は食通を以て自ら任じてゐた、そしてそれは私の自惚として、可成私の友人の間にも知れ亘つてゐる事柄であつた。而も私をして食通たらしめて來た動機は、深い學理的根據によるものである、と私は自負してゐた。或はそれは安煙草を喫んで、高い煙草を喫んだ積りで、その差額だけを貯蓄し、「煙草を喫めば喫む程貯金が出來る」と公言し、醫者から「貴方は、餘り貯金をなさつてはいけません」と忠告された、マルクスの理論に似通ふてゐる點もないでもないが、私はまだ當分その確信を變更しやうとはしない、そしてその理論はこうである。今私が百圓を銀行に年五分の利率で定期預金をして、十年たつたとするならば、所得税を差引くことなしに、百六十三圓十一錢の元利合計を受取ることになるであらう、然るに物價はどうであるか、最近の趨勢では十年間に三倍し、或は少くとも二倍の増加率を示してゐる。だから私は貯金をすればする程損をしなければならない、若しその物價が三倍になつたとしたならば、私は百圓を定期預金として十年後に、百三十六圓八十九錢の損失を蒙り、二倍にしたとするならば、三十六圓八十九錢の損失となる。而もその金は集められて大資本家の手の中に流込み、米の買占となつたり、砂糖の買占、住宅地の買占となつたりして來る。考へて見ると貧乏人は、自分の貯金で自分の頸を絞上げ、自分のどてつ腹を自分の泥足で蹴飛ばしてゐる樣なものである。そしてそこから私の結論が來る、「如かず私は食つて了ふ」といふ結論が出て來たのであつた。その時々にその金を腹に入れてさい了ふならば、その金の値打は決して暴落しやしない、銀行利子より物價の騰貴率が下るまでは、私は「食つて了ふ」といふ主義を必ず變更しまいと決心した、そこに又私の食通が、結果されねばならぬ羽目となつて來たのであつた。

所がこの食通が、一膳飯屋の主人公からお叱を受けた。中學の同窓

[redacted]會か丸ノ内の或る大きなレストランで開かれた、仲よしの私と彼とは相向にその席を取つた、その翌日である、私は彼から六錢を貼つた手紙を受取つた。その中で彼は散々私の食通を扱下し、「君の食通も當てになつたものではない、昨夜のチキンカツは腐つてゐたではないか、それをどうするかと見てゐたら、君は平氣で平げて了つた、高い有名な料理屋に行くのばかりが食通ではないぜ、腐つた物を食つて身體を毀したらどうする、今少し上等の物を食つて見給へ、家に來る勞働者だつて、『今から手前一合の酒を吝嗇々々したつて、一生の中に三井や岩崎の旦那になれるものぢやあるまいし、飲め飲め』といふ、君だつて一生の中にあの世界一の富豪ロスチャイルドとかいふ男を、凌駕することが出來るなら又それは考へ物だ、が兎に角食ふんだね、腐らない物を、そして味覺の修練をもつと積まねば、食通も糸瓜もないぜ」と云つて來た。

社會學の鼻祖と言はれてゐるオーギユースト・コムトが、學者と貧乏人とは、その考へ方に於いて、その思想に於いて共通な所がある、だから兩者はお互に提携して行けると力説してゐる。それは眞の學者の多くが貧乏人である爲めかも知れないが、私が一膳飯屋に日々通ふ勞働者と同じい考へ方をしてゐたことを、甚だ痛快だと思つた。

×

もう一つ私は、彼から叱られた事を書こう。彼は私に、「君は社會學を研究してゐるといふが、何故俺の家に來ない、俺の家の錢箱を見ないで、社會學も何もあつた物ではない、そもそも俺の家の錢箱は、巨額の國費を投じてやつてゐる中央氣象臺の何とかいふお天氣博士の天[redacted]よりもより幸福である。[redacted]必ず明日は好天氣であり、賣上げが少くなかつた時には、雨、中位の日には、翌日は曇天と必ずきまつたものである。何故かつて？勞働者にとつては、『雨の三日も降れば死ぬ』と言つてね、明日の天氣が命の親だ、一日の仕事を終へて、富川町の停留場へどやどやと降りて來ると、俺の家の繩暖簾と空模様とを七分三分に睨分ける、そして明日が好天氣だと思ふなら、元氣よく俺の所の繩暖簾を押除けて、『おい一本頼むぜ』と來る、少し怪しいと思ふなら、二本飲む所は一本、一本の所は半本にして、腹掛の丼の中に小錢をチャラつかせて歸る、雨ときまれば、怨めしそうに暖簾の前を素通する人もある。何にしろ二軒の支店を合せて、一日に三千人からの勞働者が入るんだから、その判斷は外れつこない。彼等は明日天氣でさいあるなら、本當に宵越の金は使はない、綺麗さつぱりにその日の中に使つて了ふ、割引電車の切符代――明日の資本だけは殘してね。是非來たまへ、彼等の心持を理解しないで、現代に何の社會學があるかね」と啖呵を切つた。

私はそこで考へさせられた、成程その判斷は所謂大數の法則による、卽ち統計學上の原理による判斷である、だからそれは當る確率を持つてゐる筈である。けれども私がそれよりも考へさせられた事は、私と同じい原理に立つてゐる彼等の金使である。或る經濟學の大家にその話をしたら、「人間といふ奴は、貧乏すればする程享樂的になる者であるからである、試みに君も一萬圓ばかり溜めて見給へ、吃度謫合つてそれからは吝嗇漢になるから」との有難い御宣託であつた。

では何故貧乏すればする程享樂的になるか、それは現代社會に對す

る叛逆であり、面當であり、又諦めであり、自暴自棄である。それは又現代社會が貧乏人の生活に與へてゐる、怖しい不安に對する自己瞞着術である。佛蘭西大革命の恐怖時代に、一齊射擊が街頭に行はれ、貴婦人がカフェーの扉によろめきかかつてゐるのに、その扉一枚の中には、銃聲と群衆の喚聲とを聞きながら、酒と女と亂踏との享樂に波を打返してゐた。又カロリーの發見者であるラボイジールが、「貴樣は餘りに有名であつて、吾が革命の精神たる平等の敵である」と斷頭臺に引立てられ行く時に、その地下室では接吻と賭博で、夢中になつてゐた人々があつた。革命はいつも享樂を呼んでゐる、それは不安であるからである。だから革命運動は又何時も淫賣窟から芽生へて來てゐる。佛蘭西革命もそうであつた、露西亞革命もそうであつた、又日本の明治維新の元勳者は、殆ど青樓に酒を買ひ、美人の膝にそのまどろみの枕を求めてゐた、恰もそれは殺人犯が、必ず酒と女とを求めて、遊廓又は私娼窟に走ると、同じい心理である。そしてそれと強弱の差こそあつても、それと同種の享樂心理が、貧乏と結附いてゐるといふことを、吾々は理解せねばならない。

然し巴里の大通りのカフェーの前で、一杯七錢五厘の珈琲を甜めながら、何時間も腰掛けてゐる勞働者の群れがある。友人の話す所によると、彼等はそのカフェーの前場に行く美くしい女の、自働車から降る際に、そのスカートから一寸現れる太股を、盜み視しやうとするのである。そしてそれは彼等の苦痛なる一日の生活を、彩る唯一の享樂であるそうである。けれどもそれは享樂としては洵に果敢ない享樂である、ブル階級のそれに比べて話にならぬ程貧弱なる享樂である。却つて貧乏人は、貧乏だと云ふことから、ブル階級の過剩エネルギーを發散せしめる爲の享樂の道具となり犧牲となつてゐる。小作人は地主に搾取される、彼は娘を藝妓に賣つてそれから搾取せざるを得なくなる、娘は又地主の享樂手段となることによつて、地主を搾取し返さればならない。斯くして貧富の甚しき懸隔は、そこに享樂の犧牲者を増加することによつて、社會を二つの方面から享樂化しやしないか？

モダーン、しんぶん・ざつし・えいがまんだん

保篠龍緒

◇

「これこそほんとの Double-cross だ」
「Procisoly, yes ビル公、町にはゐめえ」
「今度、君が會つたら何うする」
「大笑ひさ。見ねえはう、俺に金はないよ」
「金？」僕は苦笑した。「Ah do'n want it No' Mo!」
「Just like that! soo!」

こんな書き振りで、じようじ・たにが「新青年」に現はれた頃、銀の灯と黃色い室の銀座や青い灯と赤い室の道頓堀のカフェの片隅で、「ゆう」だ「みい」だといふやうなメリケン・ジャップ風の會話をする

[redacted]でもない代物」がこれこそ「サムタイムあつた」事である

それから又「もをだん・ぼをい」だの「ばにちい・ふえいあ」だのと外國語の發音を平假名書きにすることも、まづこの邊から宣傳されたもので。

とにかく、新聞や雜誌や映畫は「近代的」に對して、特殊の感覺を持つてゐる。そしてこの尖鋭な感覺は、一つはニュースとして、一つは流行として、一つは商賣として、夫々特異な宣傳力を發揮する。

例へば銀座に現はれたステッキ・ガールが、まづ新聞記者の感觸からニュースとして取扱はれると、雜誌はステッキ・ガールを主題として記事の幾頁かを作つて、メーン・タイトルとする。と拔目のない活動屋が直ちに『ステッキ・ガール』を一本、スクリーンの前におつ立てる。斯くしてステッキ・ガールといふ實物と名稱とが、モダニテイの一存在として立派に確立されてしまふ。

モガもモボも、そして又ストリート・ガールまでもが、斯うした宣傳によつて、一般の好奇にそゝられ、若い人々の流行となり、生活の存在となつてゆくのである。

◇

と同時に、一般の人々も、新聞雜誌の讀者も「モダーン」な事、「モダーン」なものに對しては可なり特殊な興味と激しい好奇心とを抱いてゐる。

曾て「アサヒグラフ」で讀者から漫畫の課題を募集した時、幾萬通といふ讀者の注文課題の大半が「モガ」と「モボ」についてのことであつたので驚いた事がある。

[redacted]

モガを街頭でスナツプして、之れを精神醫學の某博士に診斷を乞ひ、寫眞と記事として紙上に掲載してセンセーションを起し喝采を博した事がある。

博士はモダーン病患者の多くは早發性痴呆症にかゝつてゐるもので、その中でも衒氣症のもの、感受性昂進症のもの變態性模倣症のものが多いといつた。

隨分思ひ切つた診斷であつたが、讀者には可なり強い感じを與へたやうであつたが、斯うした「モダーンの病的傾向」に對しては、一般は好奇心の中にも反感が相當根強くなつてゐるらしく思へる。

然し「モダーン」といふ事物に對する一般の好みを唯だ單に好奇心とのみ片付けてしまふ譯には行かない。其處には近代人としての感情や趣味や、嗜好が働いてゐるのであつて、新聞にしろ、雜誌にしろ、又映畫にしろ、其處に近代人を讀者とする以上、それだけの編輯的な用意が必要になつて來る。

無論、すべての記事に表現に、寫眞に、そうした近代意識といふか、近代感覺といふやうなものは全體的に相當強く、意識的又は無意識的に表はされてゐるけれども、特に「モダーン」な事象を取扱ふ場合、新聞ではニュースとして、又紙面のうるほひとし主として取扱つてゐるが、雜誌になると、可なりそうした色彩を強調してゐるものがある。

「新青年」が若い人々の間に持てはやされるのも、「婦人公論」の最近がそうした傾向にあるのも、一つの表はれであるであらう。

◇

そうした近代相を内容的にいへば、殊にモダーンの尖端を行くものに、ナンセンス趣味がある。

小話、地口、駄洒落、川柳……等が江戸時代のモダーンな流行であつた如く、近代人の心に、ことには若い人々の間に、ナンセンスを愛好する傾向が可なりいちじるしいやうに見える。垢抜けのした、明るい、晴やかな、そしてウイットに富んだナンセンス、それは最もモダーンな趣味の一つであるに相違ない。これを漫話でいへば、「ジッグス」の趣味とは別殊な「アダムソン」の味である。「樂天」の趣味でなくて、「久夫」の感覺である。

この「ナンセンス」の形を變へた流行に「マンダン」がある。落語は餘りにも時代が離れてゐる。「司郎」の「漫談」ががぜん都會青年の感情に一致すると、新聞にも雜誌にも「まんだん」が現れ出した。「隨筆」ではない、ナンセンシヤルなエッセイだ。

然し、雜誌に現はれる、垢抜けのしない「まんだん」なるものは、殆ど唯だ文字の「まんだん」であつて、早晩、ほろぶべきものではないだらうか。そしてこれに代るべきものは、英米に見るやうな、あのすつきりとした「エッセイ」でなければなるまい。丁度司郎君の「まんだん」が高座やお座敷へ移つて行つたやうに……

けれども、ナンセンス趣味が青年の間に根をはりつゝある間に、最近の流行の一つであつた「探偵趣味」が婦人雜誌の方へまで足をのばし出した。今迄婦人雜誌は大衆小説からも劍俠物からも探偵物からも離れてゐたが、最近、「主婦の友」も「婦女界」も探偵小説をトップに取扱つてゐる。

つまりはスリリングな味、サスペンスの興味、それが近代婦人の心の底に流れ出したのであらう。歐米では、探偵小説の愛讀者が多く婦人であることから押しても、婦人界にデテイクチーブストリーが入り込む事は當然な理由があるだらう。

と同時に又、面白い事には一時婦人雜誌で盛んに取扱はれたいまわしい性問題が、今度は一般の娯樂雜誌へ形を變へて現はれた。

六月號のある娯樂雜誌なぞ、ひどく挑發的な挿畫まで入れて、強姦事件の犯罪實話みたやうなものを廣告した。「女優情史」だとか、映畫スターの性的戀愛告白などを大々的に取扱ふ流行は、よしんば、それが、カフエーのほのぐらい青い灯から生れ出て來る傾向であつたとしても、いやなモダーン味ではある。

◇

劍俠物、所謂大衆小説が、近代人の趣味に投じて恐ろしい讀者を持つ事は、それが餘りにもモダーンでない、反對現象として不思議ではあるが、然しあの維新物の中には、階級鬪爭がある、壓迫された、近代人の或る種の思想に對する一つのバルブであるからであらう。

維新物から「、、」といふ二字を抜きとつてその内容を考へたらばどうだらう。階級、反抗、鬪爭、謀計、殺人、戀愛、官能、其處には舊い衣裝をつけた近代人の思想の活躍である。

斯うした大衆物に對する、小唄とジャッヅの流行はセンチメンタリズムな近代人らしい面白さである。

パリ小唄「ジョンネエマール」を樂譜附で雜誌に發表されたが、今

後は映畫と蓄音機だけでなく、新たに雜誌によつてジャッヅと[illegible]か
取扱はれて來るに相違ない。

嘉子と良一とか「青い灯と赤い灯」の「行進曲」の流行にさきがけした。「行進曲」はジャッヅ流行の先頭にたつて、雜誌、新聞に盛んに太鼓をたゝいた。「義江」は「港の唄」や「君戀し」をはやらせて、映畫がそれをひろめた。

それ等を、みんなが「モダーン」といふ。モボにモガに、平假名のスラングに、まんだんに、カフエーに、ジャッヅにステッキ・ガールに、行進曲に、君戀しに、夫等を新聞や雜誌では「モダーン」といつてゐるやうだ。だが、それは「モダーン」の病的な一部分ではないだらうか。

「モダーン」がそんな尖端なものだつたら丁度演歌師のバイオリンの音見たいなものに相違ない。

「モダーン」はもつと他のものでなければならない。そしてそれが新聞に、雜誌に、映畫にもつとはつきり、取扱はれるやうになるであらう。

今のモダーンはしんぶんのニュースで現はれて、ざつしの記事と寫眞で報告されて、えいぐわで擴められてゐる。いやぢやあありませんか。ごつでむ！

といつた氣ざさ加減である。

遊臺灣日記

蘇峰迂人

二 日月潭

二水驛から外車埕の間に集々驛あり。此處は新高郡役所の所在地にて、三輪郡守來會した。此處から新高山への登山路が始まる。我等は汽車の窓から、双峰の雲表に抽んでたるを眺めた。

＊ ＊ ＊ ＊

此の附近、山嶺、水涯、概して芭蕉畑である。此れは本島人が、勝手次第に耕作しつゝあるものにて、中には總督府にて、折角植林したる樟苗の間に芭蕉畑を作る者もあり、其の或者は、唯だ一個の鍬を手にして、山中に分け入り、幾年をも經ずして、數千金を儲にして、其の故郷に還りたる者ありと云ふ。兎に角漢民族の稼ぐには、世界何れの民族も、追ひ付く者がない。

＊ ＊ ＊ ＊

外車埕から埔里に至る八里八町間の軌道臺車は、南溪角板山間のそれに比すれば、頗る完全に幾きものだ。されど概して上り坂を推し行くものであれば、五城、魚池、大林までは時間がかゝる。併し大林から埔里までは、下りにて、實に眼が廻る程、自然の惰力もて疾駛する。魚池、大林邊は、何れも海拔二千數百尺、而して下りて埔里に至るも、亦た一千四百八十尺、臺灣の中央蕃峰の中に在り。我等は狹き溪谷の窮まる所、洞門を過ぎ、端なく眼前に平原の展開せらるゝを見て、桃源とは斯る所にやあらんと、吾心を躍らしめた。

＊ ＊ ＊ ＊

此の盆地は、全く擂鉢の底にて、二方里の平地である。其中

には水田あり、甘蔗畑あり、水田には早苗もあれば、植付以前のものもある。甘蔗畑には穂が槍尖の如く高く抽んで、成熟期を示してゐる。

＊　＊　＊　＊

此處は氣候も臺灣中にて、最善と聞けども、交通の不便だけが、申分がある。此程の土地を、殆んど全く封じ込みて置くのは、餘りに心外千萬だ。此には埔里の人々も、何とか憤發す可きであらう。

＊　＊　＊　＊

此處は梓にて製したる杖の名所だ。曾て明石總督が、此地を巡視して、梓杖二個を予に寄贈したることを想起し、坐ろに故人を懐うた。而して古藤郡守亦た杖を携へ贈つた。予亦た若干を購ひ求めた。

＊　＊　＊　＊

此地に於ける有力者の一人、林醫師亦た同郷人だ。而して前に瑞穂丸にて同船したる坂元君とは、偶然此地に於て相見た。君は鹿兒島人にて、此地の有力者だ。

昭和四年二月十八日午前六時半　虎尾に於て。

二三　大林

二月十七日、今日は實に強行的道程である。午前五時五十分、埔里を發して、臺車に上る。大霧模糊咫尺を辨ぜず。暗中に官民諸氏の見送りは、如何にも心痛に存ずる。

＊　＊　＊　＊

七時半に大林に着した。如何にも好天氣だ。此處には臺灣電力會社の平田君出迎られ、我等夫婦は、各々四人擔ぎの椅子的轎に乘り、自餘の諸氏は、二人擔ぎの臺灣轎――何となく花嫁の乘物に似たる――に乘り、若しくは徒歩した。

＊　＊　＊　＊

我等は陂を過ぎ、阪を上下し、司馬按の水電事務所を斜に觀、兒子田を過ぎた。此邊背に青山を負ひ、其の兩側に修篁を帶び、小高き所に、朱く塗りたる門があり、其奥に家根が出で、其の附近を竹笠を頂きたる農夫往來す。正に是れ一幅南畫である。惜らくは翠雲子をして、此の妙趣を看取せしめざることを。

＊　＊　＊　＊

斯くて急阪を下りて、日月潭の湖岸に著し、モータ船に乘り、湖面を徘徊した。湖を環る四山、何れも處女林である。何となく北海道の支笏湖の趣きがある。但だ水が聊か濁りてゐる。

＊　＊　＊　＊

我等は四手網を見て、漁翁をして之を卸さしめたが、唯だ扁平なる小魚二尾を得たるのみであつた。此れから向岸の化蕃に至りて、蕃婦の杵歌を聞いた。蕃婦幾十名、相合して、各々長短の杵を手にして、これを地上の石に叩きつけ、一種の音を發す。其韻淸越、其歌悠揚。

＊　＊　＊　＊

彼女等は豫じめ予等の來訪を待ち受け、何れも滿艦飾をしてゐた。其の住家なども、餘りに掃除が行き屆いてゐた。蕃人學校でも、蕃女歌謠でも、既に一種の觀物化しつゝありては、博物館に赴きて、其の標本を見るも同樣だ。されど見ざる聞かざるよりも、尙ほ優れりとす可きであらう。

＊　＊　＊　＊

去りて臺中州營の旅館涵碧樓に上りて、午餐す。此方からは日月潭の全部を見晴らし、眞に湖山の秀容を把ることが出來る。

剜舟一棹去迢迢。老大憐聽蕃女謠。
靑嶂如レ眉湖似レ鏡。湖心水暖長二魚苗一。

剜舟は獨木舟のこと、湖面には何れもそれを使用してゐる。午餐の鷄の鋤燒は、生駒臺中知事の馳走と承り、遙に好意を謝して置く。食膳には別に湖鮒の刺身などあつた。而して食了りて偶然にも、丸茂交通部總長の巡視と出會した。

二三　日月潭より二水驛

日月潭上の涵碧樓を辭して、椅子的轎に上りたるは、午後一時半であつた。此處は水社と稱してゐる。此から道路は處女林の中を貫いてゐる。木は概して內地の樫に似てゐるが、何れも二十間乃至三十間もあらん。內地の木よりも、其の幹の長大なるが特色だ。而して其の幹の中程には、概して種々の寄生木がある。何やら名を知らぬ鳥が啼いてゐる。又た篠なども自然に生えてゐる。

＊　＊　＊

斯くて臺灣名物の鐵線橋を過ぎ、急阪を下つた。上る時の苦

勞もさるとながら、下る時の心配は一層だ。予は幾回か轎上から、轎夫の足元を眺め、南無阿彌陀佛を唱へたくなつた。されど兎も角も無事に三時半過ぎ五城に着く、先づ一息ついた。直ちに此から臺車に乘り換へたが、此れから外車埕までは、下り阪一方にて、其の疾驅は愉快の度を過ぎて、寧ろ心配であつた。此れにも拘らず、外車埕に着したる際は、發車時刻を、既に四五分も經過してゐたさうだが、特に驛長の好意にて待ち受け吳れたと云ふ。此れは途中にて撮影の爲め、斯く時間を後らしたのであつたとは、後で聞いた。今更ら恐縮の次第である。

＊　＊　＊　＊

五時五十二分、二水驛に着するや、否や、例の二水總督增澤君や、桑原員林郡守、及び同鄉諸君出迎られ、直ちに增澤君の邸に入り、其の南科植物、及び其他の植物苑を觀る。而して增澤君夫婦、及び伊東夫人、高木夫人、其他の接待にて、晩餐の馳走に預る。此間約三十分、箸を投じて、六時三十二分二水驛を發し、七時六分には斗南驛に着し、鈴木大日本製糖會社取締役、塚本虎尾郡守其他の出迎にて、直ちに社線に乘換へ、虎尾驛に着したのは、八時少し前であつた。

＊　＊　＊　＊

斯くて臺春館に入り、一浴の上、鈴木、入來、衣斐、庵地等幹部諸氏と閑談し、更らに增澤君邸の晩餐の二次會を此處に延長し、午後十時に漸く了つた。卓上何れも珍味であつたが、特に西瓜は渡臺以來、始めて最も其甘きを覺えた。

＊　＊　＊　＊

此日は臺車や、轎や、舟や、輕便汽車や、汽車や、一日の中に乘物を交代する幾回なるを知らず。而して午前五時から午後八時まで、殆ど間斷なく奔走した。世人嘗て國翁を嘲りて、『匆忙なる老人』と云うたが、予自身も亦た自から何の故に斯く忙がしく、漫遊せねばならぬかを疑はざるを得ない。

昭和四年二月十八日午前八時虎尾に於て。本日は先妣第十一回の命日だ。

二四　虎尾

二月十八日、昨夜は實に明月であつた。虎尾停車場から、臺春館に至るの際、端なく『人影地に在り、仰で明月を見る』の句を想起し、古人の我を欺かざるを知つた。而して今朝も亦た旭日は硝窓に映じ、庭前の小川に、數百群の家鴨は、嬉々と

て相戯れてゐた。

* * * *

臺灣には歐洲の『ジプシー』に類する、一種漂泊の民あり、幾千百の家鴨を趁うて、臺灣を南北に上下して生活するものありと云ふ。而して其の南より北に達する頃には、卵から食用期の家鴨に成長する頃になると云ふ。其の數尺の一竿にて、家鴨を指揮進退せしむる動作は、如何にも上杉謙信が青竹もて、三軍を指揮するの趣きがある。

* * *

虎尾は全く大日本製糖會社によりて成り立ちたる市街だ。我等は鈴木重臣君其他の案内にて、舍宅街を經、其の並樹――鳳凰木――の實に堂々たるを見、而して此れが二十餘年前には、全く一木なき荒原であつたとを聞き、如何に人力の造化を補ひ、天功を亮くるかを感じた。虎尾神社に詣し、明石總督手栽の樹が、漸く方さに拱を成さんとするを見た。此から小學校、會社工場、それから清交俱樂部の樓上にて、官民諸氏及び熊本縣人諸氏と相ひ會し、鈴木君の挨拶に對し予も一場の感想を語つた。鈴木理事は、實に典型的好紳士、臺灣に於ける大日本製糖會社の今日ある、同君の努力によるもの、恐らくは多大であらう。

* * * *

大日本製糖會社は、實に其の淵源を明治二十九年一月、故鈴木藤三郎氏に發し、爾來漸次に膨脹し、發展し、以て今日に至つた。其間には酒匂社長の負責自殺あり、所謂る衆議院議員買收の日糖事件あつたが、一たび藤山雷太君の社長となるに及んで、頓に其の旗幟を一變し、以て今日の隆昌を致した。臺灣のみにても、一萬二千甲歩の社有地を有し、其の所有する鐵道も三百哩に達し、内九十八哩は營業線となつてゐる。

* * *

我等は清交クラブにて、午餐の馳走を受け、それより乘車す。鈴木君及び令孃、林虎尾肥後會長など相送りて斗南驛に至り、此れから南北縱貫線に乘り換へ、嘉義に向うた。此日は頗る暑熱を覺え、扇を手離すとが出來なかつた。

二五　嘉義概觀

嘉義に著するや否や、佐藤郡守、枝德二君、眞木街長、其他同郷諸君の出迎を受け、直ちに嘉義名物の隨一たる製材所に

[illegible]

七八百年の樹齡ある大物を、大根か豆腐を切る如く、勝手に料理する手際は、實に面白かつた。此處では年々八萬石の材木を、此の如くして處分すと云ふ。一石と云ふは、云ふ迄もなく十六方尺のことだ。

* * * *

此れから嘉義林業試驗所に至り、熱帶諸植物の試植を見、轉じて農事試驗所に至り、平間所長から、實物に就て、それぞれの說明を聞き、秩父宮の御休憩遊ばされたる小亭に導かれ、此處にて苑中に成長したるレモンの水やら、鳳梨などにて渇を潤し、甘藷の花や、實や、其の實から生じたる蔓や、其の甘藷の諸種改良の手續き等を見た。試驗所の小丘には、偉大なる械樹の枝幹を中天に張りたるを見る。此れは定めて四五百年の物であらうと思うたが、聞けば一百二十餘齡と云ふ、其の成長の速かなる驚く可きものがある。

* * * *

大概臺灣に於ては、樹齡二十年になれば、既に物になる樣だ。樟などは此の限りにあらざれども。それは地味に惠まれた

[illegible]

此から嘉義神社に參拜し、嘉義ホテルに至り、一浴して、嘉義官民及び熊本縣人聯合歡迎會場なる公會堂に赴いた。此處では演說抜きの臺灣料理にて、最も好都合であつた。獻立は眞木街長の考案と聞いたが、如何にも氣が利いてゐた。

* * * *

嘉義は今尙ほ街であるが、實力に於て、市たる資格がある。清國の康熙年間から開けたる土地にて、臺灣でも寧ろ舊臺灣に屬するもの。然も一方には阿里山の製材事業を控へ、他方には各會社の製糖事業を擁し、新式の市街として、頗る發達してゐる。而して其の鐵道は縱貫線以外、阿里山線其他各製糖會社の諸線相ひ通じ、實に四通八達である。而して其の市街も、數十年前の大震災以來、市區改正が出來、衢區井然、却て禍を轉じて福となしたるものに幾し。

昭和四年二月十九日午前六時　嘉義ホテルに於て。此より阿里山に上らんとす。

二六　阿里山に登る

二月十九日、今日は此行第一の快心事たるべき、阿里山上りの當日だ。何よりも天氣に惠まれた。午前七時十五分に、嘉義北門驛を發した。嘉義營林所長福本君、總督府營林所の渡邊君等、案内役たり。有り難くも一車貸切にて行く。

* * *

我等の前なる無蓋車の荷物の上には、生蕃の親子二人が便乘してゐる。十三四の生蕃娘が、其父に傍うてゐるのは、如何にもいぢらしくある。可憐である。

* * *

竹崎まで約七八哩の間は、平地である。此れから山路にかゝる。木履寮、樟腦寮を經て、彌よ獨立山頂を攀づるとゝなる。即ちスパイラル線に入る。此處では遮二無二急勾配のところを上るから、線路を螺線的にくるくるつけてゐる。されば汽車窓から、凡そ四回樟腦寮の停車場を回看するとが出來る。されど機關は後邊にあるから、煤烟に煩はるゝ心配はない。

* * *

途中には最初に莿竹の林があり、次には蔴竹の林があり、更に桂竹の林となる。莿竹はとげがある。最も繁殖力に富み、一節を切りて地にさせば、やがて新芽を吹く。本島人は之を防風林となし、家の城壁となし、而して家それ自身も殆んど此にて造作してゐる。蔴竹は其の幹巨大にして、筏を作るに好、桂竹は日本の眞竹の類にて、此邊にては專ら製紙の用に供してゐると云ふ。

* * *

又た龍眼樹が、隨處に森をなしてゐる。此れは龍眼肉は勿論、用材として堅緻である。沿道何れも總督府の造林がある。チーク樹、相思樹、シツク樹がある。シツク樹は朱欒類ひの材として用ひらる。されど上るに隨ひ、滿目只だ桂竹と云ふも不可なき程だ。

* * *

我等は此くの如くして獨立山を越え、梨園寮を過ぎ、平林寮にて一寸車を停め、展望した。斯くて交力坪、水社寮等を過ぎ、奮起湖驛に達したのは、十一時頃であつた。此處は阿里山鐵道の中間驛にて、小市をなしてゐる。警官派出所もあれば、旅館もある。嘉義を距る二十八哩、海拔四千五百六十四尺。されど停車場の附近には、菊の殘花もあれば、蘭が既に莟を綻

して居る。此の附近から専ら[illegible]杉即ち[illegible]杉が[illegible]してゐ[illegible]る。

二七　阿里山途上

奮起湖から哆囉嘓驛を過ぐれば、大塔山、小塔山は一大水成砂岩の山脈をなして眼前に横る。而して奮起湖までは、熱帶林にして、概して榕樹類であるが、此れからは暖帶林となり、樟科の濶葉樹が多くある。何れも斧斤として千古斧を入れざる處女林だ。

＊　＊　＊　＊

此れから十字路驛を過ぐれば、愈よ蕃界に入る。此から不老那驛を過ぐれば、山は暖帶林より溫帶林に接し、針葉樹類の王國となり、先づ眼に入るものは、紅檜である。紅檜は世界中、唯だ臺灣のみを產地としてゐる。其葉は普通の檜に類して、其色やゝ赭、之を板にすれば、亦た淡紅色を帶ぶ。今日では扁檜と其の價格に甲乙なしと云ふ。

＊　＊　＊　＊

二萬平驛は、嘉義を距る四十一哩餘、海拔六千五百尺、二萬平[illegible]あるから此れがある[illegible]。但し果して二[illegible]あるや否[illegible]は知らぬが、山間の平地としては、先づ廣々とある。此處から十六分の一の急勾配となるから、八輪の車を六輪に減じて行く。此れからは紅檜、扁柏、及びツガなどの巨木が相ひ送迎し、所謂る神木驛を過ぎ、神木を遙拜して行く。斯くて沼の平に至れば、意外にも市邑を見出した。嘉義から四十四哩、隧道を過ぐる七十二。海拔七千四百五十七尺。

＊　＊　＊　＊

我等は一切の手荷物を倶樂部に預け、更らに二哩七分を過ぎ、海拔七千六百九十一尺の塔山驛に至り、更らにガソリン機關車を運轉する小形の汽車に乘り換へ、約一哩を過ぎ、營林所派出所主任田村君の斡旋にて、伐木工夫の木登りを見た。此れは唯だ一條の繩と、其端に一本の小棒とを結び、それを樹身に投げかけ、それを階子として上り、追々とそれを繰り返して樹の頂上に達し、更らに其繩を手繰りて、地に達する作用にして、見るからに別段危險を感ずる程ではない。

＊　＊　＊　＊

此れから伐木作用を見た。樹齢五百五十年、長さ百〇二尺、

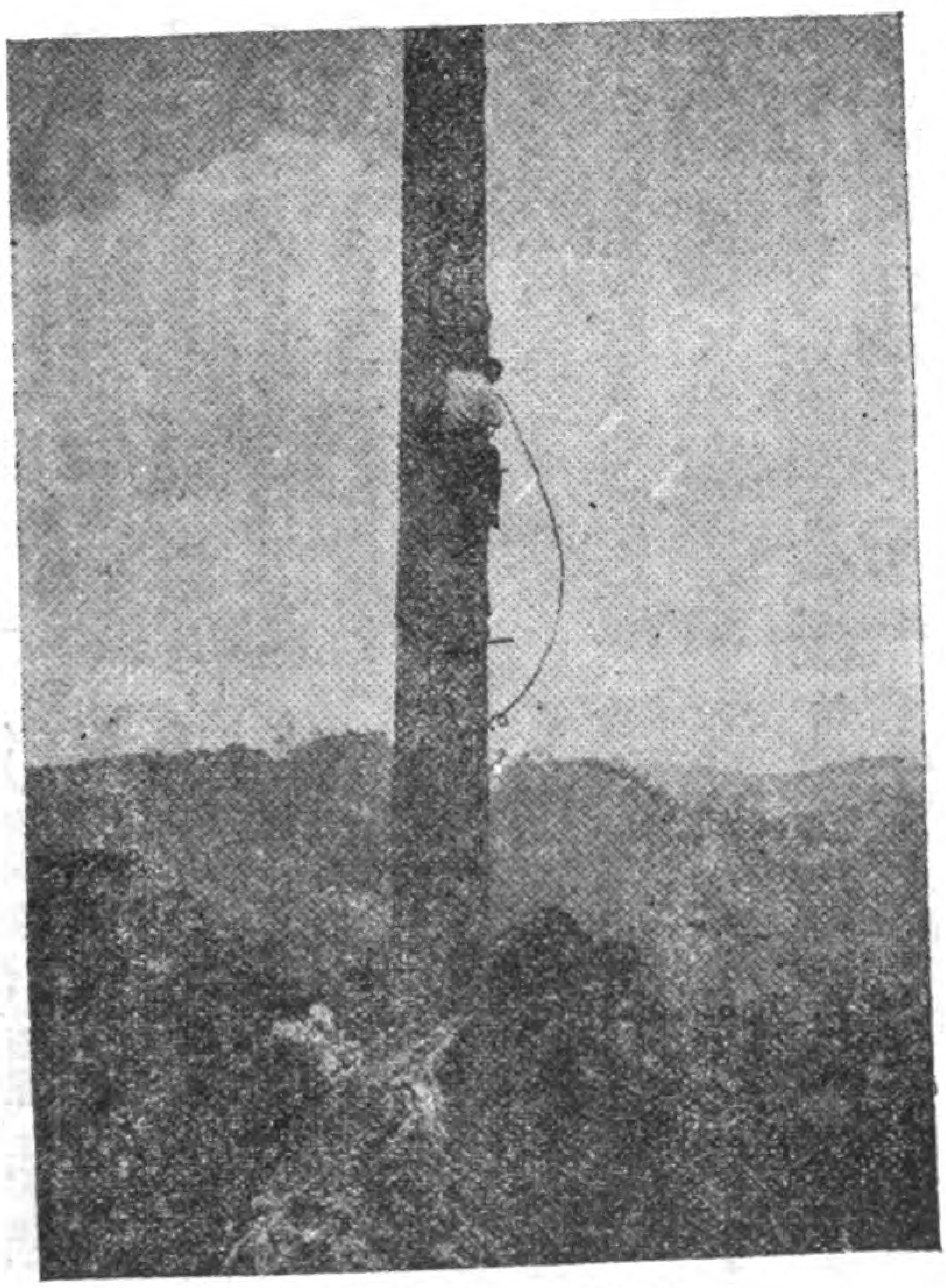
之を材木とすれば、四十五石を得ると云ふ。其の倒るゝ樣は、實に巨人の最後を見るが如く勇ましく、且つ凄じくあつた。此れから材木の集配作業を見、沼の平に還り、阿里山倶樂部の客となりたるは、既に午後五時頃であつた。

＊　＊　＊

本日沿道にて最も珍らしかつたのは、山中處々に臺灣の緋紅が滿開であつたことだ。而して倶樂部にて、ランプをつけ、石のストーブに、檜や、紅檜を惜氣もなく焚き、而して下界は一面の雲海を現じ、上には碧天水の如く、唯だ闌干たる星斗と、一輪の明月のみ。

山深夜寂寂。爐冷復添レ薪。
脚底雲千疊。嶺頭月一輪。

昭和四年二月二十日午前六時　阿里山倶樂部の一室、爐火盛に燃ゆる處にて。寒暖計五十二度。



阿里山伐木夫の木登り

二八　阿里山概觀

今ま玆に一寸阿里山の概念を得る必要がある。阿里山は新高山の西側に連亙起伏せる一團の大森林にて、面積約一萬二千町步、其の最高峰は、海拔八千八百尺、而して其の山脈は馬脊の如く、新高山に連つてゐる

＊　＊　＊

臺灣に於ける植物帶は、概して四分することが出來る。先づ熱帶林にて、阿里山を標準とすれば、約二千五百尺以下、即ち獨立山停車場以下は、龍眼樹や、榕樹、相思樹、キワダ、イヌビワ、芭蕉等の類が能く繁茂してゐる。次は二千五百尺乃至五千五百尺即ち平遮那停車場邊迄は、暖帶林で、樫、柯、及び楠仔類の常綠濶葉樹林が、自然の林相

[redacted]も少くない。内地で云へば、四國、九州邊に當るところだ。

＊ ＊ ＊ ＊

此れから次第に常緑濶葉樹が減じて、針葉樹帶となる。即ち五千五百尺乃至一萬尺、二萬平驛附近からが紅檜、扁柏、亞杉「臺灣杉」栂、姫子松と云ふ順序で、次第に出で來り、然も時には相混生してゐる。兎も角も針葉樹として、最初に現はれ來るのは、紅檜の老木である。其中には樹高二十數間、幹圍六十尺のものがある。然も亞杉、栂、姫子松は、約二割に過ぎず、其他は全く紅檜と扁柏にして、臺灣檜の名は、此の二種によりて世に轟いてゐる。

＊ ＊ ＊ ＊

阿里山伐木採材の營業を開始したのは、大正三年からで、昭和二年度迄搬出總高は、約二百四十石。而して昭和二年現在の針葉樹現在四百三十石、濶葉樹約三百五十石を剰し、更らに、阿里山の峰續きの大學演習林の針葉樹も、伐採する筈なりと云へば、年十五萬石の生産として、今度十五年は持續せらる可しと云ふ。

此れと同時に、阿里山鐵道沿線六千町步の造林面積、約百二十町步を合せ、年々二百二十町に近い造林をなしつゝある。就中福州杉、即ち廣葉杉と、吉野杉、鹿兒島杉は、何れも成長尤も迅速である。福州杉の如きは、十七八年にして幹圍平均三尺となつてゐる。但だ日本內地の扁柏は、其の成長頗る遲々としてゐる。

＊ ＊ ＊

予は阿里山伐木を見て、たゞ木を伐るばかりが能事ではあるまいと考へたが、其の鐵道の沿線に、造林の行はれ、阿里山峰頭の伐木の跡には、新樹が萱や、笹の間から、其の亭々たる幹を出しつゝあるを見て、頗る人意を強うするを覺え、左の一首を口占した。

登登七十二洞門。古檜喬杉半斧痕。
寄語山雞浪莫レ恨。向レ榮新樹沿レ途蕃。

昭和四年二月廿一日午前五時半　嘉義ホテル電燈下に於て。

二九　阿里山を下る

二月二十日、阿里山の朝は寒かつた。予等は室内に於て、右侍

造のストーブに、惜氣もなく檜材を燃して暖を取り、ランプの火にて、紀行文を綴つた。海拔七千三百五十尺と云へば、斯くある可き筈だ。

＊　＊　＊　＊

午前七時半、倶樂部を發した。予と妻とは轎に乘つた。此れは普通の椅子でなく、腰を掛けて後に倚りかゝり、兩脚は紐にて軾に繋いである小板に蹈み掛くるものにて、支那泰山に於ける轎に類してゐる。尤も輕便にして、且つ尤も乘り心地がよい。擔夫は二人にて、二本の棒を、各々兩肩に擔ひで行く。

＊　＊　＊　＊

我等は新高山登山道路を横りて、二十四町を上り、祝山に至つた。此處は海拔八千二百六十三尺、阿里山主峰を中心として、一萬尺以上の山凡そ十三を一眸の中に鍾む。其側なる仰高岑は、實に四千尺の斷崖絶壁にて、泰山の捨身巖も、此れ以上ではない。

＊　＊　＊　＊

我等は此處にて飽迄高山氣分を味ひ、山を下りて、沼の平に至り、先づ阿里山神社に詣し、學校を見、阿里山寺を經て、所謂る神木の側に出でた。

＊　＊　＊　＊

神木は紅檜にて、樹齢三千年、目通周圍六十四尺、枝下長さ四十五尺、材積千八百石、之を伐れば、其株は約二十疊敷となる。如何にも巨木である。其の附近に第二の神木あつたが、今は燒けて、唯だ空洞の一部を存するのみだ。此邊の木、何れも千年以上、材木としては餘り老齢は、好ましからずと云ふが、我等の眼からは、巨木には何やら神靈が宿りてゐる心地がする。

＊　＊　＊　＊

我等の汽車には、狩から還り來る生番八名が、隣りの無蓋車に乘り込んでゐた。此れは全く無償の客であると云ふ。彼等は蕃刀を帶び、獵銃を携へ、特に弓と矢とは、我等に取りては、別して珍らしかつた。其弓は竹であつたが、矢根は鐵の矛形をなし、其の兩刃はヤスリの如くあつた。但だ獲物は一も無かつた樣だ。

＊　＊　＊　＊

山上の寒に引き代へ、山腹の熱は八十度を越えた。我等は上衣を脱し、扇を揮ひ、午後四時に嘉義に着した。而して同

夕は眞木街長等の厚意にて、本島人の瑞鳳叶麟の舞を見た。就中獅子舞に至りては、尤も興を惹いた。

昭和四年二月廿一日午前六時　嘉義ホテルに於て。今日は此から臺南に赴かんとす。

三〇　嘉義より臺南

二月二十一日、午前七時三十五分嘉義を發して臺南に向ふ。やがて畑の中に標石の突起を見る。此れが北回歸線の分界だ。此れから彌ゝ熱帶に入る。

* * * *

沿道は一望無際、實に廣漠だ。漠の字を添へたのは、地味が臺中地方に比して、如何にも痩せてゐるからだ。滿地甘蔗畑、田は所謂る看天田とて、雨が降らねば植付が出來ないから、切株のみ殘りてゐる。之を嘉義以北の植付最中と比較して、如何にも貧弱に感ずる。

* * * *

此中に於て獨り大なる煙突より煙を吐きつゝあるは、製糖會社の工場あるのみ。此邊は明治製糖、臺灣製糖の勢力範圍らしく思はれた。而して鹽水港製糖會社の直營にかゝる、大農式甘蔗畑の如き、亦た旅客の注意を惹くに足る。

* * * *

九時三十七分臺南驛に着するや、官民及び熊本縣人諸氏に出迎へられ、直ちに横光内務部長、松尾市助役等の案内にて、臺南神社を參拜す。此處は官幣中社にして、北白川宮能久親王を祀りてゐる。而して神殿の後に廻りて、親王の薨去遊ばされたる御室、御寢臺、御寢具、其他當時御携帶の軍用鞍、途中御使用の擔架などを拜見し、感慨轉た深きものがあつた。轉じて孔子廟に赴き、其の祭典の當日とて、一切の準備が整うたるを幸ひに、悉く之を觀た。但だ大牢、小牢の牲として、牛や羊や豚が、生のまゝ、血を流し、臟腑を出して、壇前に供へつゝあつたのは、如何にも殘刻らしく見受けた。明年からは俑、俑羊豚に改良したら如何と思ふ。若し肉を頒く必要あらば、それは肉屋より購ふも可ならん歟。

* * *

祭典見物せんと思うたが、炎熱久しく石疊の上に立つに堪へ難し、それも唯だ三拜九拜の式のみなれば、失敬して此から紀碑を見る。此れが乾隆年間臺灣平定の紀功碑にして、滿漢兩文

にて、九個の大石碑が駢立してゐる。轉じて纍々たる基石を經して、五妃廟を見る。五妃は寧靖王の五人の妃が王に殉死したるを合祀したのだ。其側に一大榕樹がある。其蔭には千人を生せしむ可し。

＊　＊　＊

此から郊外なる開元寺に赴く。此處は鄭成功の妻董氏養老の邸にして、その儘寺としたるものと聞く。住僧は日本語を操り、極めて氣轉の利きたる案內振りなれば、貴僧は定めて內地に留學せられたるならんと云へば、然り私は名古屋生れであると答へ、何となく禪の問答らしかつた。此處では鄭氏時代の古井を見た。

＊　＊　＊

此れから開山神社に詣した。此れは鄭成功の廟を、開山神社と改めたものだ。即今修繕中であつた。半ば日本人の血を享けたる鄭成功も、延平郡王としてよりも、開山神社としての方が、滿足であらう。予等が柏手を打つて禮拜したのは、彼に取りても決して不快であるまいと思うた。

三一　臺南見物

市公會堂の熊本縣人諸君の午餐會に赴けば、樓上には臺灣に關係多き書畫、骨董の類、及び明治初期の史料など陳列せられてあつた。滿座の諸君、何れも欣々として予等を迎せられ、恰も家郷に還りたる心地がした。而して此から臺南安平間の運河に沿うて、鹹水養殖試驗所に赴いた。此處は二十萬坪に餘る面積にて、盛んに虱目魚を養殖してゐる。別に鯔や、鱸や、蝦の類もある。されど主としては虱目魚だ。此れは寸餘の魚苗を此地に養ひ、一年餘にして其の長大なるものは三尺となる。即今の產出實に二百萬圓以上と聞く。其の養殖の方法たるや、池面を干して、それに肥料を施し、其の肥料から蟲がわくに從し、潮水を導き池となし、魚を其中に投じ、之を魚の肥料とするもの。されば予は一見此れは疏漫ならんと思うた。予は斯る多量生產の魚に虱の字を冠するは、面白からず、何とか改名しては如何と發議したが、然らば先生之を撰定せよとのことにて、他日を約して去つた。

＊　＊　＊

此れから安平製鹽會社に赴き、其の作業を見、和蘭人の遺蹟たる赤嵌城址に上り、濱田彌兵衛の事を偲び、赤錆びたる淸國嘉慶年間の製鐵の大砲を撫し、和蘭人のバタビヤから齎らしたりと稱する磚の破片を拾ひ、安平港を一覽し、臺南なる赤嵌樓に上つた。此れは西暦一六二四年和蘭人の建てたるプロビデンチア城址にて、一に紅毛城と稱してゐる。鄭氏の世には火藥庫となり、乾隆年間には安平縣署の一部を移し、今は海神廟と文昌閣とになりてゐる。

＊　＊　＊

轉じて關亭廟、媽祖廟を見舞ひ、臺南公園を快駛し、始めて吾宿なる東屋にて汗を流したるは、既に五時半を過ぎてゐた。而して六時半から又しても市公會堂に於て、官民諸氏の歡迎會に招待せられ、之に赴いた。然も臺灣料理にて、獻酬の心配もなく、津田毅一翁、富地臺南新報社長、遠藤市尹、許廷光などの諸君と談笑して、一夕を過したるは、眞に愉快であつた。

＊　＊　＊

臺南は實に史的氣分が濃厚である。予はせめて今一日此地にありて、徐ろに懐古の情を暢べたいと思うた。臺南は眞に愛す可き地である。

昭和四年二月二十二日午前六時十二分　臺南東屋に於て。

三二　嘉南大圳

二月二十二日、午前七時三十五分の汽車にて、臺南を發し、兎角昨來の道を番子田驛まで戻る。臺灣の鐵道は、單線にて、發車時刻は後れ勝だ。此の旅行の經驗によれば、五分十分の後れは、殆んど當然の事と認められてゐる。

＊　＊　＊

番子田驛には嘉南大圳の管理者枝君、技師八田君など出迎られ、直ちに大圳線に乘り換へ、烏山頭の事務所まで輕便列車にて向うた。沿線の地は所謂看天田、即ち雨を見て田植をする土地のみにて、如何にも瘠地らしく見受けらる。而して途中約三百年前、和蘭人の移植したるマンゴー樹は、蓊鬱として林をなしつゝあるを見る。和蘭人の勢力は、此邊まで波及したるものであらう。

＊　＊　＊

此れから自動車にて事業展望所に至り、八田君から實際の作

業に就て、それぞれ說明を受けた。極めて大雜把に謂れば、嘉南大圳は、看天田約十五萬甲〔一甲は約一町歩〕に灌漑し、是等の土地を一年は水田、一年は甘蔗、一年は雜作として輪作せしむるものにして、其の經費は四千八百十六萬餘圓、最近五百三十五萬圓を追加したれば、合計實に五千三百五十一萬圓となる。而して其の事業は、大正九年九月に着手し、昭和四年度の終りを以て完成する由にて、現時既に濁水溪を水源とする、北港溪以北の五萬二千三百餘甲には、大正十三年以來順次灌漑を開始し、其の効果を收めてゐる。

＊　＊　＊

烏山頭の約十萬甲に灌漑するものは、曾文溪の水と、其の流域の雨量とによるものにして、其の貯水池たる官田溪の堤防は高さ實に百六十五尺、頂部延長七百間、底部巾一千尺、頂部巾三十尺、實に其の土沙を持ち運び、それを水力にて壓洗し、漸次積み上げつゝある作用は、目覺ましきものだ。

＊　＊　＊

事業主任八田君は、二十五歳にして帝大工科を卒業し、直ちに臺灣に來り、本年四十九歳と云ふ、卽ち其の一半生を臺灣に送りたるもの。其人其勞、洵とに嘉す可し。

＊　＊　＊　＊

予は堤防の中流に舟を浮べ——一千尺の兩側から土砂を盛り、水力にて壓洗するから、自然に中は川の如く、以て舟を浮るに足る。本年末には此川は、突起して、堤防の中心となる可きもの——其の作堤の模様を見、更らに工事中、石器、土器の類を掘り出したる地域に於て、採集をなした。地層に黑き數寸の一線を劃し、其中には土器の破片など續々と出で來つた。但だ石庖丁などの類ある由なれども、それは見當らなかつた。斯くて展望臺にて、辨當の馳走を受け、又た番子田驛に引き返し、一路臺南を經て、高雄に向うた

三三　臺南より高雄

臺南から高雄までの地味は、最も甘蔗の糖分多くして、當業者に歡迎せらるゝ由、此れは雨量少く、光と熱とが多き故であらう。高雄に近く頃には、未だ青田と云ふ程ではないが、早苗が風に戰いてゐた。植附を濟して、既に一個月も經たらしく思はれた。

＊　＊　＊　＊

午後二時半停車場着、太田知事、齋藤市尹等及び郷友諸氏に迎へられ、直ちに市尹の案内にて、港口に至り、更に說明者長尾技師と共にランチに乘り、港口を出でゝ其の防波堤の邊から、更らに港内を殆んど一巡した。

＊　＊　＊　＊

高雄の活力は、頗る旺盛、岸壁には約七隻の汽船が繋がれてゐた。灣内にも汽船や、大小の戎克が、無數であつた。今は砂糖の季節とて、船は何れも其の運搬の爲めであらう。尚ほ西瓜が、港に面する倉庫に山積してあつたが、此は東京に直送するものと云ふ。

＊　＊　＊　＊

此れから上陸し、壽山に上り、貴賓館に至り、庭上から高雄市及び其の港灣を、双眸の中に收め、今上陛下の、攝政殿下として、御一泊あらせられたる御室を拜觀し、茶を喫して去り、更らに山上なる高雄神社を參拜し、市中を一巡して、一浴するや否や、再び壽山の下西仔灣の海水浴場なる官民の歡迎會場に赴いた。

＊　＊　＊　＊

長風萬里我襟を吹き、落日は海波を射りて、其色黄金色より、深紅色に變じ、其の漸次海中に沒するの光景、正に是れ一幅造化の大作と云はねばならぬ。

＊　＊　＊　＊

予は齋藤市尹の挨拶に對し、高雄は今や午前九時頃だ。其の希望は前途にあり。築港完成の曉は、更に高雄のみと云はず、臺灣全土の血の巡りが、善くなると信ずる旨を告げた。而して御馳走の第一としては、此の風光絶佳の場所、第二には卓上に、あらゆる南方の菓物の標本を、陳列せられたる厚意を謝した。而して我等は見るのみでなく、是等の珍菓を試食した。

＊　＊　＊　＊

壽山は一名猿山と云ふ。猿猴尤も多く、種々の惡戯をなす。現に貴賓館の避雷針の如きは、數個の狙公相ひ群りて、之を搖かしつゝあり、即今一棟は漸く修理を了したるも、他の一棟は此の如しと、其の半ば傾きつゝある避雷針を、留守居のお婆さんは指し示した。併し我等に取りては、是亦た一興、惡戯は兎も角も、猿猴なども、成る可く驅逐せさる樣ありたしと、

市尹まで希望を陳し置いた。從來は舟に乘るか、然らざれば壽山の半腹を踰えねばならぬところを、昨年來隧道を通じた爲め、高雄市から此の西仔灣の海水浴場にも、容易に往來が出來、至極好都合にて、夏分には――四月乃至十月――臺中、嘉義邊からも、來遊者少からずと云ふ。左もある可し。但だ鐵道の複線と、自動車道路の修築が、尤も望ましき一である。此れは高雄海水浴場の爲めのみではない。臺灣全土の問題として。

昭和四年二月二十三日午前六時　高雄市吾妻旅館に於て。高雄は今が冬期と申すも、室内八十度にて、外出すれば、流汗淋漓。坐ろに東京の寒氣が慕はしくなつて來た。

三四　高雄より鵞鑾鼻

二月二十三日、今日は彌よ臺灣の最南端に達する日だ。午前八時三分高雄を發して、屏東線に乘り、一路稻田蔗圃を經て、九時三十四分潮州驛に到り、直ちに郡守津下猪太郎君の案内にて、自動車にて鵞鑾鼻燈臺に向ふ。一路平坦、栴檀樹の並樹は既に花を開いてゐる。滿目甘蔗畑にして、何れも臺灣製糖の勢力範圍と聞く。山本二峰君經營の勞想ふ可し。

やがて木麻黄の並樹となり、彼是二十餘里、斷又續。木麻黄は葉は木賊の如き針葉樹にして、其の成長尤も速かに、且つ屢風に耐ふると云ふ。我等は右に海岸に沿ひ、左に山を望みつゝ行く。朱一貴の亂に、此地の廣東人等が防戰したるを、清帝が褒賞したるを表彰する褒忠門を過ぎ。乃木將軍が明治二十八年十月十一日に上陸したる、枋寮の記念碑を過ぎ、十一時頃南勢湖の警察派出所に至れば、街道に沿ひ、小亭を設け、花木清雅、恰も一個の花園の趣あり。小亭は街道を隔てゝ、直ちに海岸に接す。滄海渺漫一望際なし。我等は亭側のタンクから水を汲み、顏を洗ひ、辨當を使うた。山口警部、田中巡査夫婦、迎接尤も到れり。田中巡査夫婦は、何れも熊本縣八代郡の生にて、花園の主である。山口警部は生蕃語を善くし、蕃人來襲の際に於て、九死一生を得たる老功者である。折節田中巡査が、今日釣れたとて、新鮮の刺身を饗したるを、何れも快喫した。而して更らに木瓜が盤に上つた。予は二個までも喫した。御禮には明日歸途に、何か書くからとて、墨を摺り置く可く申し殘した。

恒春郡境にて、津下郡守と分れ、不破警部出で迎へ、同君の案內にて、一路恒春に至り、此處にて西村郡守其他に迎へられ、更らに大板埒に至れば、今朝二頭の鯨が取れたとて、恰も料理最中であつた。松井主任の所說によれば、昨日も二頭取れたと云ふ。

* * *

此れから墾丁寮に於ける先住民族の遺蹟を見た。磨製石斧、打製石斧、土器の破片、及び種々の貝類を採拾した。場所は道傍の畑にて採集には何の苦もないが、餘りの熱さにて、大抵にして切り上げ、約二十七里を、一氣に自動車にて快駛し、日本帝國の最南端鵝鑾鼻の燈臺に着きたるは、午後二時半前後であつた。

三五　四重溪

鵝鑾鼻の燈臺では中村所長から、其の尤も誇りとする木瓜を饗せられた。同行の須佐美君が、高雄から携へ來れる西瓜をも喫した。汗を拭ふ間もなく燈臺の最上層に登り、展望した。天晴れ氣滿く、眼前には捕鯨船の往來する以外、唯だ漂渺の際、紅頭嶼を望むるのみ。

此れから無線電信所に至れば、同署人長谷川局長途中まで出迎へ、同君の案內にて、高原を縱橫に馳せ廻り、臺灣の西海岸と、東海岸とを、一時に双眸の中に收めた。歸途鯨寮に至れば、中村主任指點して、彼處に鯨が潮を吹きつゝありと云ふ。立ち留り見れば、今や捕鯨船と鯨とは、互ひに秘術を盡して勝負最中だ。鯨は巧みに逃んとし、船は之を追かけつゝある。

* * *

歸途は恒春種畜場に立ち寄り、帖佐所長から印度種と、臺灣原種との雜種牛の蕃殖の現況など示され、新鮮の牛乳にて渇を醫し、明治七年征臺の際、西鄕都督の本營龜山を過ぎ、車城を經、西鄕都督の名により碑文を誌したる、生蕃に虐殺せられたる琉球藩民の墓を弔し、更らに四重溪を經て、石門に抵り、當時苦戰の跡を緬想した。

* * *

石門は呼んで字の如く、兩崖嶄立、宛も門をなしてゐる。其下は四重溪の碧潭が廻縈してゐる。暮色蒼然、偶ま蕃刀を帶びたる生蕃の童兒二人、溪を涉りて山中に入るを見る、蓋し蕃社

に還るものであらう。所謂牡丹社は、此れから三里の山奥と云ふ。

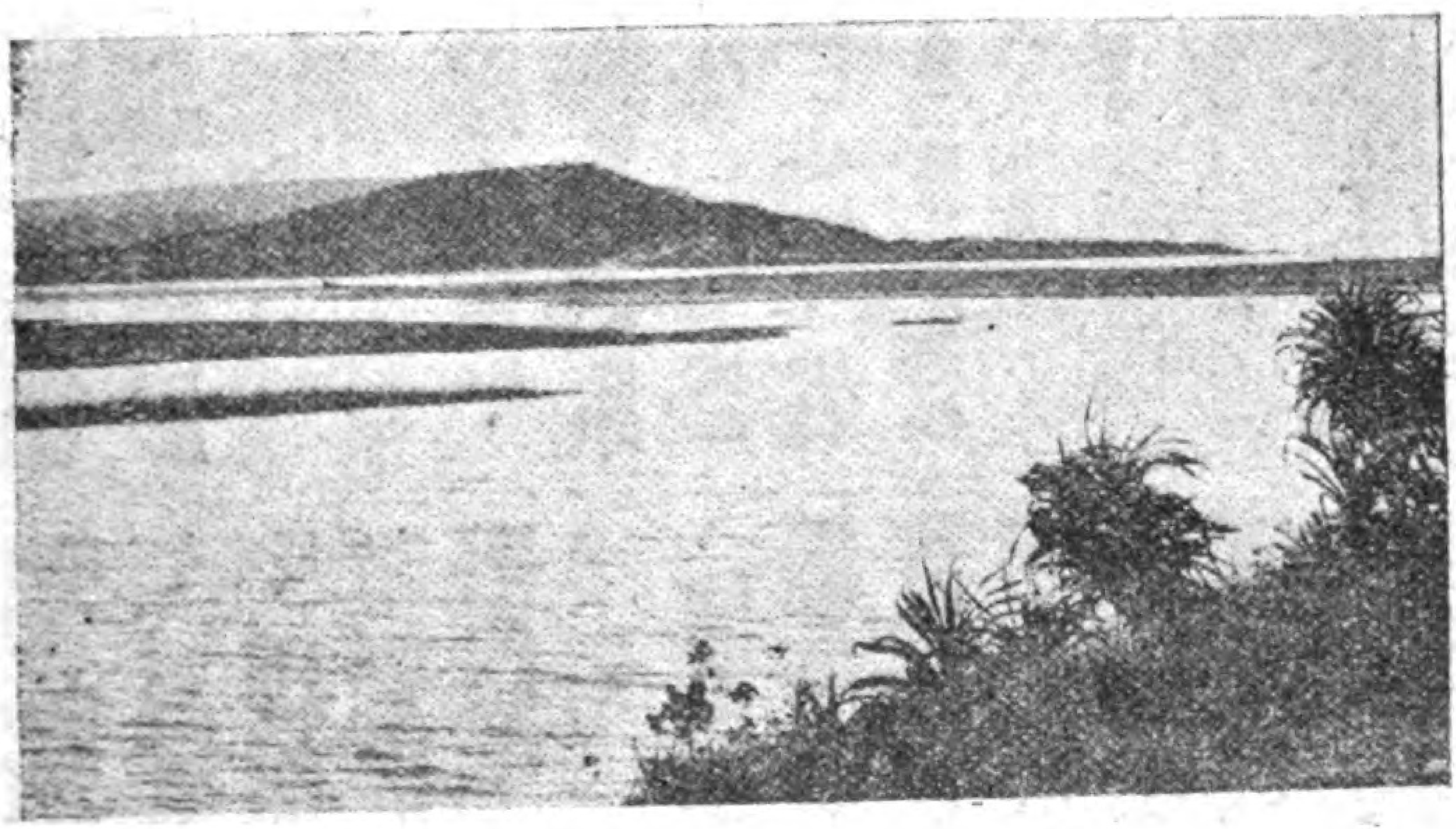
＊　＊　＊　＊

四重溪に至れば、正しく午後六時、取り敢へず温泉に一浴した。當夜は舊暦十四夜にて、明月皎々碧天に懸り、蛙鳴、蟲聲四壁に滿ち、何とも名狀し難き快味を覺えた。

一碧高天大月明。　蛙聲閣閣雜二蟲聲一。
恒春二月輕衫節。　客倚二篠牀一詩未レ成。

＊　＊　＊　＊

温泉は無色透明にて、眞に骨までも洗ひ淸むる心地がした。西村郡守の來り携へたる鴨やら、前に大坂埒にて見たる鯨の雜物や、其肉の刺身や、又た宿の主人が前溪に釣りたる鮠の天プラやら、種々の珍味が盤上に列せられた。而して主人濱津君亦た熊本縣玉名郡の人、夜は郡守とは郡政を語り、主人とは釣を語つた。主人は附近に於ける川釣り撰手である。



恒春郡龜山　西鄕都督の上陸本營地

昭和四年二月二十四日午前六時半　四重溪温泉に於て。

三六　北上の途に就く

二月二十四日、本日は愈よ踵を廻らして北歸する日だ。臺灣漫遊も漸く其の峠を越した。四重溪の一夜は、實に靜なる一夜であつた。起き出づれば、夜來の大月は、尙ほ皎々として、一天水の如し。

＊　＊　＊　＊

西村恒春郡守とは、郡界にて別れ南勢湖の駐在所に至れば、津下潮州郡守は待つてゐる。前日の約束通り、田中巡査の爲めに、扁柏の板に、『潮來天地靑』の大字を請す。此句は吾ながら場所柄に相應すると信ずる。若し亭號を撰まば、潮靑亭と稱す可し。警吏派出所に潮靑亭も亦た妙ならずや。

忙しく西瓜と木瓜とを喫し、更に自動車を驅る。

色同牛酪乗尤滋。形似二甜瓜一香更奇。
艶説荔枝三百顆。坡仙此味不二曾知一。

此れは木瓜を詠じたるもの。東坡先生が『日啖荔枝三百顆。不レ辭長作嶺南人』を揶揄したるもの。

＊　＊　＊　＊

潮州驛には豫定より十分早く着した。津下郡守相送りて西勢驛に至る。屏東驛に着すれば、武田郡守、渡邊街長、平山臺糖取締役、村田青菓會社々長、及び同縣の諸氏出迎られ、直ちに大觀亭に赴き、午餐の馳走を受く。時計を眺めつつ、ナイフとフォークを使用す。渡邊街長の挨拶に、予答へた。渡邊君は『將來の日本』から、『昭和一新論』『中庸の道』まで、通讀したる一人である。座中特に此地名物の胡蝶蘭を飾り附けられた。



四重溪石門　明治七年西郷都督の苦戰せし處

＊　＊　＊　＊

卓上の菓子皿に、手を着くる隙なく、匆々諸君に擁せられ、公園を貫き、胡蝶蘭を賞し、屏東（阿緱）神社を參拜し、村田君の案内にて、林綿順氏の芭蕉園に赴き、バナナの發生より成熟までの現狀を見、轉じて臺灣製糖會社に赴き、先づ瑞竹の叢を拜觀す。此れは先年今上天皇の攝政王殿下として、御渡臺の砌り、便殿に供す可く、蔴竹の柱を、臺中より取り寄せたる、其の枯竹の節から芽を生じ、それを移植して此に至りたるもの。而して其中の一株は花を開らき實を生じ、其の實地に墜ちて、更らに幾株の新苗を生じ、それを更らに移植して、別に一つ竹林をなしてゐる。尚ほ台臨記念館を拜見し、此れより工場を一巡す。工場整頓、規模宏大、前社長山本二峰君の勞想ふ可し。乃ち瑞竹拜見の所感一片を、

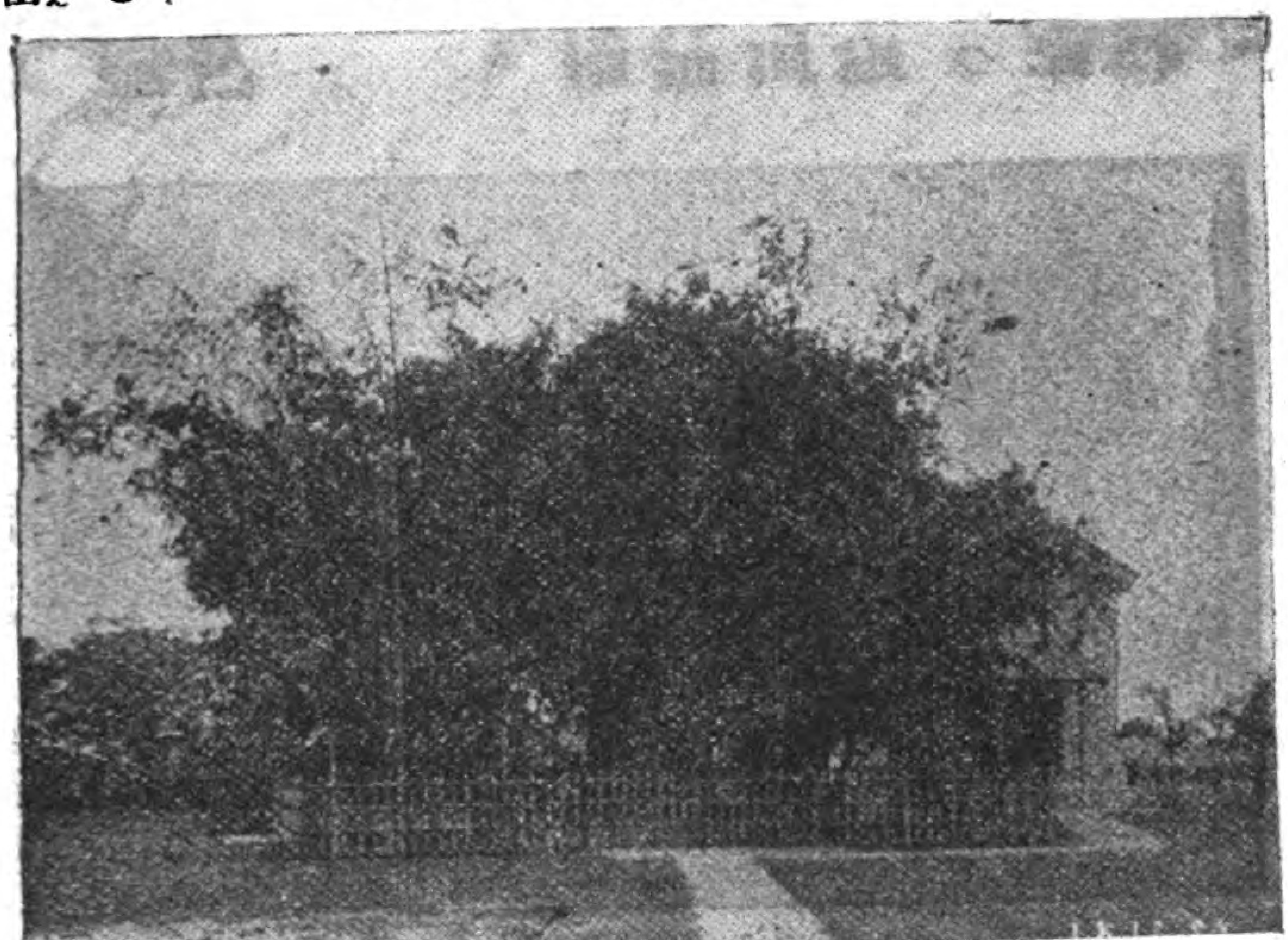
二峰君に電致し、停車場に至れば、汽車は正さに發せんとしつつある。我等は倉皇橋を上下したが、一行の若者達は、線路を横ぎりて、漸く汽車に飛び乗つた。此れが短かき時間に、多くを視察せんとしたる報いである。

三七　屏東と鳳山

屏東は砂糖、米の本場である。芭蕉之に次ぐ。附近に四十萬坪の飛行場を有する飛行聯隊がある。一切の物質は汽車にて高雄に輸送してゐる。されど自動車路が未だ開通せざるは、如何にも殘念だ。

* * * *

此れから日本第一の長橋と稱する五千〇〇七呎の鐵橋を渡り、鳳山驛に着すれば、細井郡守、橋本鳳梨會社取締役其他に迎られ、直ちに曹公祠前に至つた。此れは當地方の一萬數千甲に、灌漑の用水渠を開鑿したる鳳山知縣の曹瑾を祠りたるもの。鳳山は臺南と共に、南部臺灣の古都である。其の市街なども、殆んど從前の支那街たる面影が存してゐる。南臺一帶の本島人が、結婚用具などは、概して此處にて其用を辨ずと云ふ。左もありなん。城隍廟などもあり、群集雜沓、支那流の人形芝居などもあつた。



屏東に於ける今上天皇の御便殿の竹片より新芽を生じ
遂に竹林を成すに至りたる瑞竹叢

* * * *

橋本取締役に案内せられ、鳳梨罐詰會社に至り、其の作業と、鳳梨畑とを見、鳳梨の馳走になり、無線電信所の長柱を眺め、自動車にて一氣に高雄に向ふ。

* * * *

道は所謂縱貫道路にして、廣けれども、破損の場所少からず。路塵濛々、咫尺辨し難し。午後五時前高雄に著し、一浴、一假睡、やがて熊本縣人の歡迎會に、

西仔灣鹹水浴場に向ふ。場所は去る二十二日の官民歡迎會場である。然も來會者は寧ろ多かつた。中には縣人ならざるも、縁故者として加入せられたる諸君もあつたと云ふ。

＊　＊　＊　＊

本田女學校長の挨拶に予は答へて、我等熊本縣人は、職業に於て、趣味に於て、凡有る點に於て、各自主持する所あるも、歷史的に見れば、尊皇の精神、忠義の志趣に於ては、其揆を一にしてゐる。乃ち菊池氏以來、加藤清正に至り、細川家に至り、富田、本木、長岡、其他の諸先生に致り。特に横井小楠の如きは、世間から種々の誤解を受け、その爲めに慘禍に罹りたるも、然も其の尊皇愛國の精神は、今上天皇即位の御大典に際して、識認せられ、正三位に叙せられた。されば吾人も此の熊本の傳統的精神を把持し、擁立し、以て大いに前輩に酬いねばならぬと語つた。

＊　＊　＊　＊

此の會合に於て、最も予等を感謝せしめたのは、其の献立が悉く熊本流義であつたことだ。何から何まで一切の熊本式の料理にて、熊本に還りても、とても斯る馳走は六ケ敷と思ふ程であつた。諸君の好意、實に感謝す可し。

昭和四年二月二十五日午前七時　高雄吾妻旅館にて。

三八　高雄より鹿港

二月二十五日、早起餘儀なく塗鴉數葉、午前九時十分急行車にて高雄を發し、北歸の途に上る。太田知事、齋藤市尹、同縣の原田、白石其他の諸氏及び夫人達相送る。此日は天候聊か變態を示す。されど車中は蒸し熱く、煽風器は頻りに廻轉しつゝあり。岡山驛にて須佐美君と相別る。君は豫て書面のみにての知友であつたが、這回は予等の爲めに、周旋尤も勗めたる一人である。

＊　＊　＊　＊

車中にては今朝落手したる『改造』四月號の『蘇峰自叙傳』を校正した。車中動搖、端なく山陽が輿中に於て、詩稿刪定の事を聯想す。

＊　＊　＊　＊

臺南、嘉義にて、それぞれ停車場まで出掛けられたる諸君に別れ、午後一時十四分、員林驛にて、桑原員林郡守、及び夫人、今井彰化郡守、臺中の松岡君及び同縣の諸氏に出迎られ、

直ちに郡守の官舍に入り、頃ろ阿里山の奥から捕へたるミカド雉子を見、其の愛培したる蘭科諸植物を見る。夫人は故土井香國翁の姪にして、細川劉翁の女、劉翁は新聞記者としては予の先輩だ。十五六歳の時、屢ば翁の文を『東京日々』紙上に見て啓發したることを記憶す。曾て臺南に於ける宴會の席上、翁の列席したるを知らず、遂ひに膝を接して往事を談ずるの機を逸し、深く憾とした。乃ち夫人に託して、存問の意を通じ置いた。

＊　＊　＊　＊

斯くて改良の豚舍及び芭蕉園を見る。豚は純バークシヤ種にして、其他食用兎、皮用兎、及び產卵用の鷄舍等を見る。豚の食料には豆粕を與へ、其の排泄物を芭蕉園の肥料となすと云ふ。此れが則ち一擧兩得と云ふ可きものであらう。

＊　＊　＊　＊

員林方面は、尤も集約的農業行はる。寸土尺地も、其の地力を盡してゐる。竹林の中には、芭蕉園あり、芭蕉園の隣には、椪柑園あり。此邊の地價は一反步六七百圓と云へば、內地に比しても、決して廉價ではあるまい。而して椪柑園からは、一反步にて、五百圓乃至千圓の收入を得るもの少からずと云へば、農民の富饒なる以て知る可し。

＊　＊　＊　＊

我等は永靖庄の庄長陳慶雲氏の邸に入り、其の北白川宮親王殿下の御宿泊の遺跡を拜觀し、其の模範的椪柑園を見、此より桑原郡守と相別れ、今井彰化郡守の案內にて、鹿港に向うた。

三九　鹿港概觀

此頃より天候彌よ險惡となり、疾風は殆んど自動車を吹き飛ばさんとし、遂ひに雨さへ挾んで至つた。午前中扇風器を假りたる我等は、今や毛布を頭から被りて、寒氣を防がねばならぬ始末。天候の反覆も、人情の反覆以上と云はねばならぬ。

＊　＊　＊

溪口を經て鹿港に着したるは、旣に四時頃であつたらう。鹿港は鄭成功の渡臺以前よりの港にして、對岸なる厦門との貿易は、專ら此の港を經由したと云ふ。市街は狹くして、東京の芝日影町程もなく、先づボンペーの故址同樣、一間半位であらう。街路面は煉瓦にて疊み、上には板屋根を葺き、雨中でも日中でも、日よけ雨よけなくして、往來が出來るやうになつて

ゐる。

＊　＊　＊　＊

予は鳳山の市街を、最も支那風の舊態を存したるものと觀たが、鹿港に至りて、更らに其の然るものあるを觀た。公會堂の前にて、當地の官民、及び同縣人諸君、別けて臺灣きつての名物男辜顯榮翁、及び其の一族諸君に出迎られ、望樓に上りて、遠く鹿港の港灣を眺めた。從前は千石船が此の附近まで出入したと云ふが、今や碧海變じて沙丘となり、稻田となり、港は一里餘の先きに推し出し、然も漸く若干の戎克の出入するのみにて、一個年の輸出入も極めて僅少と云ふ。

＊　＊　＊　＊

我等は辜顯榮翁の堂々たる邸宅に赴き、特に豫期せざる御馳走を享けた。翁は豫じめ予等の來るを知り、前日臺北より來りて、此處に待ち受けたりとて、其の接待至らざる所なかつた。今井彰化郡守は頻りに其の前途を急ぎ立てたから、我等は殘り多くも箸を措き、翁及び其の一族の方々に別れ、一氣矢の如く彰化に赴き、農業倉庫を見、彰化神社の前に予等を待ち受けたる、同縣人諸君に挨拶し、彰化神社を參拜し、今井郡守と相別れ、臺中の松岡君邸に入つたのは、既に午後六時半に近かつた。

＊　＊　＊　＊

予等は去る十六日松岡君邸を發し南行し、十日目に還り來つた。予等の面目が漸く臺灣色を帶び來つたと、松岡君夫婦から證狀を受取つた。既に辜顯榮翁の許にて、一通りの晩餐は喫したが、更らに松岡君邸に於て、令夫人の手料理にて、第二次の晩餐に有り附いた。

昭和四年二月廿六日午前六時十五分　臺中松岡君邸に於て。

＊　＊　＊　＊

諺に豫言者故郷に尊まれずと云ふ。予は固より豫言者でない。且つ熊本縣人として、熊本縣に何等の功德をも無い。然るに臺灣に於ける同縣の諸君は、知ると知らざるとに論なく、予等の爲めに歡迎會を催ほし、予等の爲めに物を貽り、其の懇款を極む。寔とに恐悚、慚愧の至りである。然も諸君の厚意を無にするも、心なき業なれば、有り難く之を受くるとした。

四〇　重ねて臺中に抵る

二月二十六日、臺中松岡君邸に於ては、夜來談笑興に入つた。松岡君の家と吾家とは、二代の通家だ。而して君と予との間に、共通の一友人がある。其人の消息に接せざる十數年。相

共に舊を語り、悵恨之を久うす。

* * * *

早起直ちに松岡君の爲めに、禁を破りて數紙を書す。墨精毫佳、覺えず數十葉に至る。唯だ發車の時間が、偶然にも後れたる爲め、午前九時二十二分臺中發の急行に間に合うた。我等は來時海岸線を取りたる爲め、去時は山間線を取つた。トンネルの多きは、山間線の缺點の一だ。

* * * *

車行北するに從ひ天氣漠々、宛も內地五月雨の頃に似たり。臺中は臺灣に於ける氣象上の分界點にて、其の以南と其の以北とは、丸るで別乾坤の趣きがある。

* * * *

午後二時二十四分、臺北停車場に下れば、諸友出で迎へられ、何れも予等の行程の、滯りなく相ひ濟んだるを祝せられた。或る高官は、お祖父さんやお祖母さんを迎ふるつもりで出で來たと申された。而して予等の顏面の著しく臺灣化したるに、何れも驚きつゝあつた。臺灣化とは日にやけたることである。

* * * *

到著後は客を謝して、東京に於ける文債を片附けた。債務の中にても、文債、書債は、旅行の興味を殺ぐ大方ならず。されど既に債となれば、之を了せざれば、更らにより多くの苦痛を感ず。

* * * *

斯くて同行者が購ひ來れる馬場恒吾君の『德富蘇峰論』を一讀した。實は今少しく手緊しく切り込まるると覺悟してゐたが、餘りに寛裕なる筆鋒にて、却て痛み入つた。惟ふに馬場君も餘程斟酌せられたものであらう。併し精讀者は、之を見て如何に馬場君が、予の長短得失に就て、其の所見を語つてゐるかを察するであらう。馬場君は如何なる場合でも、曲筆の出來る人ではない。但だ何人に對しても、何事に就ても、善意に解釋する美質、若しくは美德の持主である。

* * * *

本日から明日は、臺北附近を逍遙するつもりだ。予等は臺灣を去る日の、日一日迫りつゝあるを、名殘り惜しく思ふ。

昭和四年二月二十七日午前六時半　臺北鐵道ホテルの一室に於て。

歌壇近事

——無産派短歌に就て——

松村英一

今、歌壇には二つの流れが明らかに觀取される。一つは『アララギ』に依つて導かれた寫生的な從來の歌風と、一つはそれに反撥されて起つたプロレタリア・イデオロギーの標語の下に結成された新興短歌の一團とである

勿論、プロレタリア・イデオロギーの標語の下に集團をつくつた人人は、數から言へば極めて少數であつて、これを從來の歌風に導かれてゐる者とは到底比較にはならぬのであるが、その時代的であることと、時代の惱みを或る一つの目的意識によつて方向附けられてゐることと等によつて漸く近來問題となりつつあるやうである。

昨年の二月、『短歌雜誌』に發表せられた石榑茂君の『短歌革命の進展』は、その運動の尖端を切つたものであつた。論議の對象が歌壇の主力である『アララギ』であつたこと、『アララギ』の反動化を指摘して、その打倒に目標をおいたことが、稍沈滯に陷つてゐた歌壇に一脈の生氣を注入したやうである。尤もこの石榑君の論文も、そのまゝ默殺されたならば斯様な効果は持ち來さなかつたであらうが、齋藤茂吉氏の如き好敵手を得て、幾度か連續して論難し得たが爲に、一般歌壇の注目を惹くに至つたのである。

その論議の勝敗は、經驗に乏しく、殊に體驗に淺い石榑君は老獪な齋藤氏の論鋒に全く射すくめられた形であつた。加ふるに論據に多くの弱所を持つてゐたが爲に、問題は根本から離れ勝で、大部分は枝葉論で終つたが、若く新しき時代の短歌が、如何なる方向を執るものであるかを、たとへ少數でも一部の人々に理解させ、その共鳴を買ひ得たことは、結果から見て確かに期待に背かなかつたやうである。唯私共からいふと、石榑君の如き考へを持つ同志が尠くなかつたであらうに、誰一人敢然として齋藤氏の論難に立ち向ふ者の無かつたことは遺憾と言はざるを得ない。齋藤氏は『アララギ』の代表者であると同時に、新興歌人の人々から言はせれば、舊歌人の代表者でなければならない。從つて同氏を克服し盡さなくては、新興短歌の存在を確立する

譯には行かないのである。然も齋藤氏の言論には幾多の缺陷があつた筈であるが、遂に石榑君一人の戰に終つて、折角の好機會を逃したことは殘念な次第と言はなくてはならない。思ふに新興歌人の力量は、作歌に對する信念の上でも、またその熱情の上でも、同氏等に一籌を輸さなくてはならぬ狀態にあるのであらう。殊に最大の缺陷は、純理で或る點まで人を導いても、その實作が多くの場合これに反する高價値あるものとなし難いことである。尤もこれらは既に新興歌人の大半の人々はよく認めてゐることで、現在は進展の途上にあるものとして刻苦をつづけてゐるやうであるから、やがてはその言說を裏書きするに足るものを制作される時代が來るであらうことを私共は信じたい。

　新興短歌に對して、歌壇の多くの批評は大凡そ非難に傾いてゐるやうである。内容を形式の揚棄といふことをそのスローガンに揭げてゐるからである。短歌が短歌として存在するのは、そこに定型があるから、この定型は永久不變のものである。これを變改することは、新しき詩の創造であつて、決して短歌そのものではないといふのである。これに對して石榑君は、定型の變改を行ふのではなく、飽迄も揚棄するのであつて、定型律と對立して發達すべきものであると言つてゐるが、そしてこの言葉は是認してもいいが、そこに實作として示されるものは如何にして見ても定型律に準據したものとは見えないやうである。私共は、定型律に準據する位ならば、從前の歌風に即すべきで、若しそれに不滿がありとすれば、その定型を破壞し、用語を革命して新しき短歌を作ることが自然ではないかと考へるのである。然し、石榑君らから言へば、定型律に準據する所に短歌に對する愛着があるのであつて、全く別のものを創造するといふやうな立場に立つたら、潔く短歌を捨て去るのかも知れない。この矛盾と撞着が石榑君らの新短歌運動に於ける一つの大なる苦痛となつてゐるのではあるまいか。

　然し乍ら新興短歌が或る一つの勢力となり行くであらうことは私共にも豫想が出來る。その理由の第一は、時代の苦痛を認識して、被支配者の反抗と鬪爭を極めて赤裸々に表現してゐるからである。勿論、新興短歌と稱してもその包括する所は廣い。さういふ社會思想的の背景を持たず、末梢神經的の感覺歌をも同じ名稱の中に加へてゐるが、これらは區別せられなければならぬものであらう。また社會主義的思想を有つたものでも、甲と乙との藝術に對する態度に異なるものがある。例へば石榑君らの『尖端』一派と、伊澤信平君らの『短歌戰線』とはその主張に尠からず距離があつて必ずしも同一ではない。石榑君らは歌としてのよさは、洗練されたる用語によつて、その直感が統一されて表現せられなければならぬとして居るのに、伊澤君等は先づ何よりも第一に鬪爭精神の發現が無產者短歌の立場を確保するものであるとして、短歌を手段化せむとするの傾向が見ゆる。從つてこの觀點の相違が、曾ては兩者の間に『新興歌人聯盟』が結成されたにも拘は

らず、忽然として內部から崩壞し去つた一原因となつたのではないかと思ふ。

ただ私共として注意しなければならぬことは、これら諸々の新興短歌が、必ずしも時代流行の風潮に誘つて激成されたものでないといふことを認めることである。『黎明』の田邊駿一君は、『藝術と自由』の西村陽吉君を嗤つて、新興短歌の勃興に同君が與り知らぬものの如く否定したが、これなどは新興短歌の歷史過程を顧みぬ所から起つた錯誤であらう。西村君の思想に、それがたとへインテリゲンツイヤの遊戲的なものであつたにせよ、社會主義的傾向のあつたことは決して近頃のことではないのである。成る程西村君は、思想的方面ではこれといふ成果は擧げなかつたらうが、少くとも口語歌といふ一種の武器が新興短歌に無くしてならぬものであることを認めさせた功は沒却出來ないやうに思ふ。現在の新興短歌の製作者は、西村君の如く口語であつて同時に定型を守るといふ側の人ではない。その多くは所謂破調である。然し口語で發想するといふ表現方法は、西村君に依つて力說され、西村君に依つて大成されたと見てもいいのでないか。その恩惠を受け乍ら新興短歌の勃興に與らないといふ批評は、功を人に歸するを惜しむと言はれても爲方があるまい。

私共は新興短歌の勃興と歌壇的進出は、一に時代の然しむる所であらうと思ふのである。『アララギ』によつて風靡した寫生主義は、それを信ずる人にとつては無上の寶典ではあらうが、資本主義制度の下にその窮屈な壓迫から脫出しようと志す者にとつては餘りに無力過ぎるのである。勿論『アララギ』の人々が說く寫生は、直感の直寫であつて、さういふ人々もまたその表現を寫生に頼るのが最も正しき道とするのであらうが、今やそれは精神の滅びた形骸とのみしか見ないが爲にこれに從はふとはしないのである。殊に新興短歌の重大なる要素として公約されたることは、プロレタリア・イデオロギーをすべてに有つといふことである。これが今までの藝術觀に慊らず、プロレタリアはプロレタリアの藝術觀によつて藝術を製作し鑑賞せねばならぬと言はれるやうになつたのである。この道行は、恐らく一般文壇に無產派の思想が浸潤したのと似てゐやう。歌壇が一般文壇と步調を共にせず、稍おくれて此頃に致つてかういふ現象を呈するやうになつたのは、短歌といふ藝術が極めて制約された形式を有し、傳統的に庇護されるところがあつたからであらう。だが、それも今日では決して安穩ではなくなつた。

さて私共はここで當然の成行として新興短歌の具體的例證を擧げなければならない。如何に外貌を描くとも、例證がこれに伴はなければ何らの意味をなさないからである。然らば作家としてどのやうな人々が數へられるであらうか、試みに言はふなら、『尖端』では石榑茂、前川佐美雄、五島美代子の諸君、『短歌戰線』では伊澤信平、渡邊順三、坪野哲久、淺野純一の諸君、『黎明』では田邊駿一、田邊一子の諸君、『まるめら』では大熊信行、浦野敬、島貫廣吉の諸君、そしてこの他

に猶いくつかの團體があり、新興短歌の勃興運動に參加してその力を致してゐる人々があるやうである。西村陽吉氏の『藝術と自由』の人々、石原純氏の『三角洲』の人々も、その思想的傾向に著しいものを見ないまでも、この機運を釀成する上に、何か役立てる役目を盡して來たことは爭へぬ事實であらう。然してこれらの人々の作品に對する歌壇批評は、思想的に背馳してゐるものは別として、多少の理解を持ち、多少の同情を持つ者にしても多くの場合非難が先に立つやうである。無產派イデオロギーを標榜するものにまだ十分に清算しつくされぬ資本主義的殘滓が見られるといふのであるが、もつと根本的の問題は詩にまで高揚されてゐないといふ致命的批評の行はれてゐることである。この批評を代表するものは、太田水穗氏の『潮音』四月號に現はれた「歌壇時事」の論文中に極めて顯著に示されてゐる。この一文は多分日本新聞に寄稿されたものを轉載されたものであらうが、今それを參考の爲に引くならば、

「新興短歌といふ言葉がこのごろちよいちよい聞えるので、さういふ人達の標榜する作品をしらべて見たのだが、一向短歌らしいものになつてゐない。短句また短文とも云ふべきもので、主觀を貫く感動が無い。ちよつと見ると感動らしく見えるのであるが、感動では無く、陰性な言葉を綴つたノートブック風な語錄である。それが直觀的な語錄ででもあればまた相應な面白味が無いではないが、何といふか、先づ以て思案の結果になつた、たどたどしい語錄の一綴であるのが眼を惹く。これを强ひて短歌の標榜の中に入れようとするのが解釋に苦しむ。歌といふやうな舊觀念などは蹴り落して生活章とか無產派語錄とか勇敢に進出したらばよいと思ふのであるが、そこにはなほ一脈の未練をのこしてゐるところに、この新興短歌の未來の弱點を露顯してゐる。

となして、近世の俳句が短歌から分離し、獨立した藝術形態を作つた點に說き及ぼして「形や名目はどうでもいい。實質がよい詩であれば人は翕然としてここに赴くのである。」と明らかに無產派短歌が詩としての味に甚だ遠いものであることを述べてゐる。『潮音』では尙ほこの外に、「短歌合評」の名に於いて、新興短歌や社會主義の歌や宣傳藝術の問題をも社中同人が論じてゐるが、それらを要約すれば、前に揭げた太田水穗氏の言と略同一で若し相違があありとしても僅な小異を認めるに過ぎないのである。事實、

○　　　　五島美代子

誰一人本當の事を敎へて吳れない寂しさの中に私は育つた

○　　　　小池龍

、、、を食物にして大きくなつた身代がなんで自慢にならう

○　　　　渡邊順三

俺の靑春は過勞と粗食のなかに日の目もあはずしぼんでしまつた

○　　　　伊澤信平

國許に呼び戻されて行く友よつよくかぶりを振つて鬪爭の中に立ち歸れ

○　田邊駿一
中止々々を連發する官憲に俺達は、、、、、、する

○　田邊一子
今日の治療代と思つて居る一圓を貸して呉れといふから恨みたくなる

○　大熊信行
それならあなたが生れた時に僕はたしかに十二の少年だつた

これらは一例であるが、これを詩として讀むに堪へる作品となし得られるであらうか。取材の上に相違があつても、彼の死んだ若山牧水君が曾つての日の名言であつた『さうですか歌』の範圍を出でないものではないか。文章の一節、語錄の斷片と見られることも止むを得ない。殊に私共から訝しく感じられることはこの中の實に甘つたるいセンチメンタルなものの混入である。斯樣なるものは、恐らく既成作家と雖も既に遠い昔に振ひ落してしまつたものであるに拘はらず、これを新興短歌壇の人々の間に見出さうとは意外の感じがしないでもない。斯かる缺陷は夙に作者自身も氣附く所で、聰明なる或る一部の人は、事件報告的短歌、短歌樣式を持つた難文を排し、どこまでもプロレタリア意識の下に、實感味の濃い、感動の直寫された、讀者の心に鼓働きかける力の籠つたものの創作にその努力が向けられなければならぬとしてゐる。『短歌雜誌』四月號で花岡謙二君が「作歌指導者出でよ」と叫んでゐるのも、『黎明』四月號の所說も、或はまた『まるめら』の大熊信行君の「自由律論者への對立」中に於ける言說も、この惱みを惱みとして明らかに認めてゐる所から生じたものであらう。私共は無產派短歌の動向が今後如何なる方面に動いて行くか指示し得ないが、作者の體驗の深まるにつれて更に飛躍をなすものであらうといふことだけは信じられる。

自傳的に見た日本社會主義運動史（五）

堺利彦

——目次——

一　××××と中江兆民

我々は既に社會民主黨創立者六人の人物を叙した。次には同黨禁止以後の事實に入るべき順序である。然し猶すこしく、こゝで、××と兆民との關係を語りたい。それには××自身の著『兆民先生』の梗概を作つて見るが一ばん善い。

この書『兆民先生』は、××が『年初めて十八、食を先生の門に執』り、『教養撫育の恩深く心肝に銘』した所の其の師に對し、『追慕の情を遣る』ため、師の死後約半年の後、一夕、『終宵寢ねず』に書きあげた小著述である。故にこの書は固より、××が『無限の悲み』『無窮の怨み』を以て、彼の『見たる兆民先生』彼の『追慕する兆民先生』を『描き』『寫』したのであるが、それが同時に亦、甚だ善く彼自身をも描き寫して居るのである。

二　兆民の『少壯時代』

『兆民先生は弘化四年高知城下に生れ』た。『幼名は篤、長じて篤介と改めた。『年十三にして』父を失ひ、『家甚だ貧、而も母堂貞烈にして氣膽あり。』『先生幼にして穎悟』『母堂懸々』人に『語つて曰く、篤介少時溫順謹厚にして女兒の如く、深く讀書を好みて鄕黨の賞讃する所となりき。而して今や即ち酒を被つて放縱至らざる無し、……余の痛心に堪へざる所也。』『然れども先生』は『其生涯を通して『母堂に事へて

主義」であつた。

これだけの所、兆民と××と、性質境遇、殆んど符節に同一であつた。只だ酒と放縱との一點に於いては、××遠く其の師に及ばなかつた。

『先生十七八歳始めて洋學に志し、……和蘭の書を學び、慶應元年十九歳にして高知藩留學生となりて長崎に遊び、……始めて佛蘭西學を修め』『坂本龍馬を崇拜し』た。『居ること二歳』『學大に進』み、後藤象二郎に知られて『江戸に遊』び、『佛蘭西學の泰斗』村上英俊の塾に學び、『王政維新となるや』更に箕作麟祥の塾に入り、後ち大久保、後藤、板垣等の助を得て『司法省出仕』となり、『佛蘭西留學を命ぜられた。』『時に明治四年、先生歳廿五。』

兆民は佛國に於いて『先づ小學校に入り、』『次いで『里昂の某狀師に就て學』び、『司法省の派遣……に拘はらず、專ら哲學、史學、文學を研鑽し』『孟子、文章軌範、外史の諸書を佛譯し、』『チエール、ガンベツタの諸英雄』の行動に『感得する所あり、』『西園寺公望、光妙寺三郎等と『交遊』した。『先生、明治七年……歸朝し、元老院書記官となつたが、『元老院幹事陸奥宗光君と善からずして罷め、』『次で外國語學校長とな』つたが、『又幾くならずして罷』めた。『是より先、先生自ら佛學塾を番町に起し』た。

三 『丶丶の鼓吹者』

『先生の佛國に在るや、深く民主共和の主義を崇奉し、……、……の如く、……、……の如く『民權は他人の惠に賜與せらるべき者に非ず、自ら進んで之を恢復すべきのみ、』『古今東西、一たび、……して、能く眞個の民權を確保し得たる者ある乎』と論じ、かくて『先生は……の鼓吹者とな』つた。

『而して先生は……更に……の……、……たらんとし』たが、『屢々困頓し、蹉跎し、滿腔の不平遣るに所なく、竟に酒を被り世を罵つて、放縱度なきに至』つた。

『先生壯時より勝海舟翁の知を得て、深く其人物に推服』して居た。『先生又海舟翁の談に依て西郷南洲翁の風采を想望し、欽仰措か』ざるものがあつた。

『明治十四年、自由黨創立の前後より、民權自由の思想は燎原の火の如く、』『河野廣中等の福島事件』『赤井景韶等の高田事件』『宮安正安等の加波山事件』『村松愛藏等の名古屋事件』『大井憲太郎等の大阪事件』『其他飯田事件』『靜岡事件』『高崎事件』などの『爆發を見るに至』つたが、それには『先生の手中に運らすの一管、與かつて大に力』があつた。

『而して風雲は漸く急』に、『明治二十年井上伯の條約改正失敗するや、全國の志士……、を抱いて輦轂の下に集る者數百人、政府狼狽して急に保安條例を發布し、疑似の者を捕へて東京三里以外に放つ。而して先生亦逐客となる。』『時に十二月二十五日、朔風凛冽の夕なりき。』

先生歳四十一。」この時、××は（前記の通り）『林有造君の書生』であつたが、彼も亦た「保安條例により退去を命せら」れ、『東海道を徒歩西下』したのであつた。

『翌明治廿一年、先生……東雲新聞を大阪に發行し、自ら之に主筆たり。』『先生神韻の文、天馬の空を行くが如く、名聲忽ち關西に籍甚たり。』××が『先生の門に入れるは實に此時に在り。』前記の『年譜』には『中江篤介先生の學僕に住込めり』とある。

「先生、當時猶ほ甚だ貧」『新聞社より得る所、僅かに五十餘金のみ』「然れども此時や、先生の意氣と文章と正に冲天の勢あり」『日に酣醉淋漓として卓落豪放の態を極め』『其長髪鬖々として、頭に眞紅の土耳其帽を戴き、身に東雲新聞の印半纏を着て出入せしも此時』であつた。

『明治廿二年春、憲法發布せらるゝや、全國の民歡呼沸くが如し。先生嘆じて曰く、吾人賜與せらるゝの、、……玉耶將た瓦耶、未だ其實を見るに及ばずして、先づ其名に醉ふ、我國民の愚にして狂なる、何ぞ如此くなるやと。』

『先生其著、三醉人經綸問答に於て諷して曰く、世の所謂民權なる者は自ら二種有り、英佛の民權は恢復的の民權なり、……世又一種、、的の民權と稱す可き者有り……と。然り先生は決して、、的民權を以て滿足する者にあらざりし也。』

『嚮に保安條例に拘して退去の命を受くる者、憲法發布に際して皆な解除せられ、政治運動の中心又東京に移れり。時に後藤象二郎君、大同團結を唱道して政界に横行す。』『而して其雜誌『政論』を日刊となすや、先生を聘して主筆たらしむ。先生乃ち……東京に還る。』××も亦それに從つた。

『幾くもなく後藤君、其友を賣つて入閣し、大同團結』も『解體し』た。『先生同志と共に自由黨を再興し、……專ら民黨の糾合を圖り、縱横の策、最も力む。而して議會開設に及んで、大阪より選まれて議員とな』つた。

四　議員と商人

『先生……謂らく、議會劈頭第一の事業は……專制政府の顛覆に在らざる可からず』『吾人は直ちに憲法の改正を請はざる可らず』と。『是れ實に先生の大抱負』であつた。

『然れども當時又一人の先生に聽く者』がなかつた。『而して先生猶意を政界に絶たず、日々握飯を竹皮に包みて議院に出』で『政府在野黨の衝突するや、以爲らく藩閥を殪す此の一擧に在りと。』『然るに『民黨の猪突驀進して藩閥の壘に肉薄するの時』『自由黨中の所謂土佐派なるもの款を敵に通じて……九仭の功を一簣に缺き、民黨爲に潰走し、藩閥政府萬歳を謳はんとは。』

『先生此時、眦爲に裂』け、『直ちに「無血虫」なる一文を草して……反覆者を罵倒し、次いで辭表屆を議長……に呈した』が、『其文に

曰く、アルコール中毒の爲め、評決の數に加はり兼ね候に付、辭職仕候と』

『先生議員を罷むる後、…自由、改進兩派の聯合を主張し』竟に大隈板垣兩君をして一堂に會見せしむるを得た。』『此聯合や、蓋し先生が政治運動に於ける最初の成功にして、又最後の成功』であつた。即ち民黨の聯合は只、『第二議會の解散』と『所謂二十五年の選擧干渉』とを招き得たるに過ぎなかつた。

（先生は少年時代に於いて、（前記の如く）土佐の先覺、坂本龍馬を崇拜し、坂本が薩長二藩の連鎖となつて幕府顚覆を計つた事跡に學び、後に自ら自由改進二黨の聯合を計つたのであつた。然るに××は又窃かに先生の志を繼いで、萬朝報時代に於いて、『奇計を以て犬養と尾崎に說』き、野黨の聯合を計つたりした事、本篇の（一）に記した通りである。）

『先生…家益々貧にして逋債益々多し。（明治）廿五年、小樽の有志、北門新報を創し、先生を聘して主筆たらんと乞ふ。先生…遂に政界と文壇とを退き、家を札幌に賃して紙店を開き、次で北海山林組なる看板を掲げ、貨殖に汲々たるに至れり。』『先生は實に、『方今の世、阿堵物なくして能く何事を爲し得んや』と考へたのであつた。

『廿六年より廿七八年に至る間、…先生、家益々貧に、衣服典し盡し、藏書賣り盡して、晏如たり。』『嘗て（××に向つて）笑つて曰く、…汝等姑らく待て、予の陶朱翁たる近きに在り、予にして十餘萬金を得ば、新聞起すべし、政界に縱横すべし、汝を携へて歐米に遊ぶべし、而して大著作を爲すべしと。』『而して先生の一たび牙籌を取るや、酒を廢し、行を愼み、殆ど別人の如し。後ち死に至るまで、曾て一杯を口にせざりき。』

『先生の事業は、日清戰役の後、會社熱勃興の時に方り、毛武鐵道の創立に少しく利するありしのみ。其他河越鐵道と云ひ、常野鐵道と云ひ、京都パノラマと云ひ、遊廓設置と云ひ、中央清潔會社と云ひ、某々山林拂下と云ひ、皆な損失に了らざるは無』かつた。

『先生の曾て群馬に娼樓を設けんとするや』××はそれが『先生の德を累』すべきかを論じたが、先生は『現下の社會に公娼の必要なる所以を論ずる滔々數千言』の後、『公娼既に必要なり、之を營む、何の不可かあらん』『予は既に商人たり、商人の金儲けは…主義理想に累するなし』と喝破した。

『如此にして先生』は『殆んど倒行逆施に甘んぜんとするの意』あるに至つた。そして自由黨が『提携に托して』伊藤内閣の『奴僕たらんとするの狀』を示した時、『先生憤慨措く能はず、再び起て政界掃蕩の事に任ぜんとし、…國民黨を組織し、在野黨聯合の議を說』いたが、『數月ならずして潰散』した。『時に明治三十一年』であつた。

『爾來、先生貧益々甚だし。』『明治三十三年秋、毎夕新聞の乞に應じて、其主事となり、僅に米鹽を支ふ。』『次いで國民同盟會成るや、進んで之に投じ、奔走頗る力』めた。當時、××は先生に向ひ、『國民同盟

會は‥‥帝國主義の團體で』あるのに、『先生の之に與する』は『自由平等の大義に戻るなき乎』と問うたが、先生は笑つてそれを斥けた。『蓋し先生、久しく髀肉の生ずるに堪へず、直情一往、又成敗を論ずるに遑』が無かつたのである。『越えて數月、先生‥‥病を得て卒に起たず。』

五　學問、文章、著作

『先生の學、和漢洋を該ね、諸子百家窺はざるなく。』『佛典語錄の類に』於いても『得る所あり、』『漢文に於て』は殊に『深く自ら任ずる所あり、』『漢文の簡潔にして氣力ある、其妙世界に冠絕す』と爲し、『史記』の『雄渾蒼勁、眞に天下の至文也』と嘆賞した。それらの點に於いて××も亦た實に善く其の師を學んで居た。然し先生は自ら佛語に精通して居たに係はらず、××には漢學と共に英語を學ばしめた。そして曰く『汝先づ英書を講じ、英文を作るを習へ、庶幾くば以て世界の人たるを得ん』と。（××の文は兆民の文に彷彿して居た。然し兆民は××に敎へて云つた。『文士の苦心は實に前人以外に新機軸を出す處に存す。汝の文、予の文を學び、予の文に似たるの間は、遂に予以上に出る能はざるを知らざる可らず』と。そして××はそれに對し、『嗚呼何ぞ其懇篤なるや』と感激して居る。）

『先生の讀書を好む、渴するが如し。』『而も其文を作るや、興來らざれば筆を下すこと少し。』『予は筆を援るよりも寧ろ觚を手にすることを好むと。』『先生の翰を運らすや飛ぶが如く、多くは改竄する所なし。』然れども‥‥『啁嘻の作と雖も、曾て文字の妥貼を失せる無し。』『但だ譯書及び碑銘‥‥に至りては、數回の删正を經ることあり。』『先生、文を草するは大抵朝餐後一二時の間に於てし、晝間は運動、奔走、接客、飲酒に消し、每夜二時頃より夢醒めて讀書し、曉に達するを例とす』とした。

先生の著譯書には、維氏美學、ルソー民約、理學沿革史、理學鉤玄、革命前佛蘭西二世紀事、三醉人經綸問答、平民の目ざまし、一年有半、續一年有半などがある。有名なる『民約』は知らない者がない。『理學』とは哲學の事である。『二世紀事』は『先生得意の筆を以て得意の事を述』べたるもの、『蒼勁跌宕、直ちに史記の壘を摩せんと』するの概がある。『三醉人』は『先生自ら許して』『一時遊戲の作』と云つて居るが、『其縱橫に揮灑し去つて、多く意を經ざるの所、却つて先生の天才を發露し得て餘有り、』『若し夫れ寸鐵殺人の警句、冷罵入骨の妙法』に至つては、『殆ど人目を眩せしむるものがある。『目ざまし』は『平易の文字を以て自由民權を鼓吹』したもので、『その感化する所の大なる、遙かに他の諸書に勝』つて居た。

『一年有半』は先生が喉頭癌に罹り、先生が自ら言ふ如く、餘命『一年半てふ死刑の宣告を受けて以來、』『大いにその『壽命の豐年』を『利用』した隨筆であり、感想錄である。この書が萬朝報の評した如く、『筆路は頗る多岐に渉つて、山あり、河あり、湖あり、大洋あり、花

島あり人物ありで、多恨多情、洵に無限の趣が具はつて』居り、又人物評あり、『東京朝日』が評した如く、『政治論あり、文學談あり、戯曲評あり、人物評あり、……雜々、粒々、恰も居士口頭の款圖を聽くに似』たものがあり、當時『頓に洛陽の紙價を高からしめた』事は、猶ほ世人の記憶に存して居るであらう。この書の『引』に××は次の如く記して居る。『兆民先生病で泉州堺に在り、余を召して至らしむ、八月四日往て候す、先生數帖の草稿を蒲團の下に取り、莞爾として余に謂て曰く、我病勢日に惡しゝ、意ふに餘命幾何もなけん、若し今にして一言の後人に告ぐる有らずんば、豈に讀書の人たるに在らん哉、故に頃來筆を援て此稿を成せり、我瞑目の後、汝宜しく校訂して以て公にす可しと。……』然し××は『直ちに之を刻するを許せ』と請ひ、『先生哂うて甚だ拒まず『惟汝善く之を圖れ』とあつたので、××は『同門の先輩小山久之助君に諮』つた後、博文館からそれを發行したのであつた。この書の『第四版小引』には××が次の如く記して居る。『九月七日兆民先生堺を發し、三泊して京に歸る、予匆惶新橋に迎へ謁す、先生病腫頗る脹起し、聲音全く嗄れて又言ふ能はず、』『幾もなくして本書第二版、第三版を重ぬるを告げ、今や第四版の成るに遭ふ、江湖の愛讀如此きは近來の罕なる所……』

『續一年有半』『一名無神無靈魂』は『兆民先生が、其哲理的所見の一斑を說示せられたもので』××はそれに次の如く『引』して居る。『先生の哲學は、實に古今東西の學說以外、宗教以外に一歩を拔て、別にナカエニズムとも名くべき一家のシステムを持して居られ、』『之を詳密に論述して一大著作を成さうといふのが、哲學者としての先生が、多年の志願であつ』て、『屢ば』その事を××『等に語られたことがあつた。』先生は『九月十日に漸く歸京、』『談話は總て筆談といふ有樣で、』それでも『二ヶ月餘りは大丈夫』と云ふので、『夫ならと』『書き初められたのが、此書であ』り、『切開した氣管の呼吸は奄々として、四肢五體は鶴の如く痩て居るが、一たび筆を取れば一瀉千里の勢ひで、』『大抵は半紙に書』きつゝ、『日に一時間か二時間か』『九月十三日から初めて僅かに十日ばかりで、二十二三日には早や完結を告げ、』『書けば限りがない、……是れ位にして置かう、と言つて』××『に渡された』のが、この書の原稿であつて、『先生の哲學の神髓骨子は、正に此書に依て傳へらるゝであらう。』この書の『結論』には、著者自ら記して曰く、『他日幸に其人を得て此間より一のナカエニズムを組織するとが有るならば、著者に取つて本懷の至りで有る。』『先生は……從來作る所、大抵古人の糟粕に過ぎずして、曾て獨創有るな』きを『深く恥』ぢ、『不朽』なるべき『哲學の組織』を『他日に期』したが、それも『僅かに無神無靈魂の一篇に其鱗片を現はせるのみ』であつた。

六 人物、末期

「先生は實に多感多恨の詩人」であつた。『先生は太白に非ずして少陵』

であつた。『本多佐渡に非ずして、眞田幸村』であつた

『予（××）嘗て曰く、佛國革命は千古の偉業也。然れども予は其慘に堪へざる也と。先生曰く、然り予は、、、也。然れども當時予をして路易十六世王の紋頭臺上に登るを見せしめば、予は必ず走つて劍手を撞倒し、王を抱擁して遁れしならんと。……先生の如何に多血多感忍ぶ能はざるの人なりしかを知るに足るべし。』（この一節、特に深甚の意義を覺える。）

『先生……酒間笑つて予（××）に謂て曰く、……處世の秘訣は朦朧たるに在り。汝義理明白に過ぐ、宜しく春蕩の二字を以て雅號と爲せと。予曰く、先生甚だ朦朧を憎む、乞ふ別に選む所あれ。先生益々笑ふて曰く、然らば卽ち××の二字を用ゐよ、是れ正に春蕩の意と相反す。予壯時此號を用ゆ、今汝に與へんと。予喜んで賜を拜せり。』

『德富蘇峰君、「一年有年」を評するの文に曰く、……著者（先生を謂ふ）は著書よりも品格に於て高く、人物に於て愛好す可きものあり、著者は眞面目の人也、常識の人也、夫として其妻に眞實に、父として其子に慈愛に、友として其交る所に忠なるの人也。……腹黑きが如くにして極めて初心、面皮硬きに似て頗る薄く、自ら濁世の風波に觸るるに堪へざるの身を以て、強て之を凌がんと欲して克はず、爲めに時に酒を假り、時に奇言奇行を藉り、以て其自ら世と容れざるの悶を排せんと試みたるのみ……と。蓋し知言也。』

『故に見よ、先生の晩年与酒を禁じ、行を愼み、一に自然と家庭と道義に向つて樂地を求め、』『其身を持するや、命に安んじ拙を樂み、流離殘敗の餘に處して、嘗て天を恨みず、人を尤めず、悠然安然として榮辱の外に自適し、死生の表に達觀せることを。』

『先生『一年有半』の稿を起すの前、予（××）其自傳を著はさんことを勸む。先生哂つて曰く、我れ一寒儒の生涯、何の事功か傳ふるに足る者有らん哉、且つ夫れ自傳を草する、勢ひ知人故舊の秘密を暴露せざるを得ず。彼のルーソーの如きは忌憚なきの甚しき者、是れ予の忍ぶ能はざる所也と。予其謙遜にして人情に厚きに服し、強て又謂はざりき。』

『一年有半』の中、『夫妻相携へて堺濱を逍遙したる一節』は、蘇峰氏が「轉載せずして已む能はざる」所であつた。『余一夕、妻と倶に步して海汀に到る。偶ゝ天雨を催し、黑雲四方を蔽ひ、……人をして或は意氣壯ならしめ、或は悽然哀を催さしむ、……此夕余笑ふて妻に謂て曰く、卿年已に四十餘、余死したる後ち復た再嫁の望有るに非ず、余と倶に水に投じて直ちに無事の鄕に赴かん乎如何と、兩人哄笑し、途中南瓜一顆と杏果一籠を買ふて寓に歸る、夜正に九時。』

『先生、明治三十四年十二月（十三日午後）を以て小石川……の自邸に歿す。享年五十有五。……天下知ると知らざると、皆な悼惜せざるなし。』『翌十四日午後、親戚……友人……門人……の諸君、先生の遺骸を大學病院に送り解剖に附す、予（××）も亦從ふて往く。』『此夕、遺骸を棺中に斂む。諸君其頭を抱き、予其兩脚を拱す。瞑目する所の

男女數十人、歔欷の聲、室內に滿つ。予亦た涙滂沱として禁せず、走つて暗中に入て慟哭する者之を久しくせり。』

七　光民から××への書簡

『光民先生』の第七八章は、××が『先生曾に予に與ふる所』の『書柬』十餘通を抜き、聊か評註』を加へたもので、正に××の傳記の一部である。

『明治二十八年春、予の廣嶋新聞に執筆するの時に寄せらるゝ者』には、『折角御出込に相成候上は今暫く御滯在可然、且又新紙の爲めにも今暫く御勉強必要と奉存候』とある。××の『評註』には曰く、『予の初め廣嶋に赴かんとするや、先生懇に其不可を諭す、予聽かずして行く、果して先生の言の如し。而して予の直ちに歸京せんとするや、先生又此書を寄せて慰諭して止まらしむ、予又聽かず、留まる僅に二ケ月にして京に歸り、中央新聞に入れり。』

『明治卅年冬、松隈內閣殪れ、伊藤博文代りて立つや、中央新聞之が機關たり。予屑しとせずして去らんことを言ふや、先生書あり、曰く『……主義云々御申越一應御尤之樣に御座候得共御老人も御存在何分此社會は衣食と云ふ必要條件有之幾分の志を曲ぐることは不得已次第にて、……其邊は所謂手加減に御遣り可然歟、唯近日云ふ所の提携又は買收は特に堪き者にて、如何に衣食の爲めとは云へ、左りとは縊死するに劣る事萬々なれば、士君子の宜しく避くべき所に可有之候、此斯樣の世に處しては、伯夷柳下惠の中間を行くこと肝要かと愚考仕候……』

『評註』には曰く、『而して予は又々先生の慰諭を聽かずして中央新聞を去る。先生即ち予を黒岩涙香君に介して朝報社に入らしめたり。』

明治三十三年八月『憲政黨諸子が擧て伊藤博文の膝下に拜跪し、其僕從たらんことを希ふや、先生憤怒して書を飛し來る。曰く『……就ては祭自由黨文と題して大兄之椽筆を揮はれ度……』『此事、筆跡亦龍蛇の飛動するが如く』で、××が『同月卅日の萬朝報に自由黨を祭るの一文を掲げしは、實に這の書簡の爲に炎々たるインスピレーションを與へられしが爲め』であつた。

××が『泉州堺に先生の病床を訪ひ、「一年有半」の稿を抱て京に歸る後、先生屢々寄せらるゝの書簡、一點の涙痕あるを見ずして、而も篇々、自ら不遇なる天才の末路を寫出して』居た。例へば、『歸著に付而は種々御配慮、……難產の婦人が穩婆に遇ひたる時は斯く有る可し、……僅に生み落したる畸形兒を御托し申候上は頭を撫し湯を遣はし、可成不具の醜を去り、且つ健全に肥立候樣至願に御座候』など。

『小山久之助君、先生の歸京を聽き、病を扶けて往て謁す、師弟相見て黯然語なき者之を久しくす。幾くもなく小山君先づ死す。』先生はそれについて次の如く××に書き送つて居る。『小山の死後未だ御目に懸らず、小山を哭するの文御掲載相成、此一世の人より誤解せられて、

惡人と信ぜられたる本人も、一種の道樂に惡黨自慢して、其實極て不惡黨なる飾論の如く、實に小兒の如く、直情徑行、無邪氣無作之愛すべき一個の變漢をよふこそ模寫して御遣はしに相成、本人地下に於てのみならず、彼を愛したる小生に於て涙を攬て謝辭致申候。』

××は『小山久之助君を哭す』と題した一文を萬朝報に載せたので、それが又『兆民先生』に附錄されてゐる。兆民、××、小山、この三人の關係は誠に面白い情趣を示して居る。

××が先生から與へられた書柬を善く注意して見ると、最初の分には『××樣、中江』としてあり、それが中頃には『、、樣、篤介』となつて居り、終には『××賢兄、兆民』或は『××賢兄、先生』となつて居る。これにも心持の變化が窺はれる。

八　社會主義の養育者

『一年有半』に對する萬朝報の批評文は多分黑岩淚香氏の筆に成つたものと思はれるが、その終に『唯一ッ社會主義、勞働問題に言ひ及ばれなかつたは、余に取つて物足らぬ心地がする』とある。私(堺)自身も矢張りその時、同じ心地のした事を覺えて居る。兆民先生は實際、そこまでは踏みこまなかつたのである。然し××に與へた書柬の一通には。『實に其輩の不學無術なる、社會主義とか民主主義等の字面を畏るゝ虎の如し、安ぞ知らん百歲の後、或は三五十歲の後は、復た此等の語を恐るゝに暇あらざらんとを、呵々』とある。

兆民先生は畢竟、自分としては社會主義まで踏みこまなかつたに相違ないが、然し前記の『自由黨左翼』としての社會主義者は、殆んど總て『中江系』であり、殊に酒井雄三郎氏は彼れの直接の門人であり、小島龍太郎氏は彼れの友人（或は後輩）であり、そして最後に、、なる××が現はれたのであるから、彼は矢張り日本社會主義の養育者であつたと云ひ得られる。

九　兆民、××、三申

今、私の手元にある『兆民先生』は小泉三申君の所藏を借りたのであるが、その本には、處々の欄外に三申君の鉛筆の書入れがあつて、甚だ面白く讀まれる。こゝにその數節を寫す。（小泉君が前記の通り××の親友であつた事を記憶せよ。）

『三醉人』の一節を引用してある處の欄外。『兆民の文を讀む、猶××の文を讀むが如し、師弟契合の深き、以て知る可し』（三申の原文は漢文、或は半ば漢文）

兆民先生が大隈板垣を一堂に會見せしめたといふ處。『兩派聯合、誰か新第二の大業を作す所以、今猶昔の如し、兩派融和の功、護憲運動之を擬す。』

兆民先生が『丈夫生れて天下の權を取り、以て其志を行ふ、固に快心の事、然らずんば則ち退いて水を飮み書を著さんのみ』といふ處。

『××常に此言を口にせり』

××が兆民先生に對し、國民同盟會の帝國主義を難じた處。『××當時に於て帝國主義を難ず、但口、、、を以て假す、其所以久しと謂ふべし』

兆民先生が××に漢籍と英書を學ばしめたといふ處。『××文章之素養卽ち此に在り』

××が先生と佛國革命の慘を語る處。『余嘗て××に謂て曰く、、、、、にして足下に興復の事を托することあらば如何、云々』（擧云意味頗る深長。）

蘇峰氏の兆民評の處。『蘇峰の兆民評、移して以て余が××を品するの語となすべし。彼は孝也、悌也、友に忠なり、妻に貞なり』

××が先生から受けた薰陶の處。『余は師なく、教を承くべき父兄も亦無し、××兆民師弟の清韻、誦むに堪へたり』

▲正誤。前號本篇の中、六三頁下段十一行目、『學説』は『茶説』の誤。六六頁上段十七行目、『あるや』は『ある也』の誤。

詩（懸賞佳作）

ある北方的な風景

工藤正一

變屈な腦髓の皺に溜つた感情、
眞冬の紙片をへらへら散らし、
瞳に映つた白晝（まひる）の風景。

澁みのある透明な太陽
皮膚のない生活。

この思想（直情的に）

鼬鼠の思想を知つてゐるか、
頸つ玉に噛りついて新鮮な血を啜る思想を、
剃刀のやうな尖銳な朝の鷄舍を、
飛鳥のやうに襲ふてくるあいつ、
喉笛を常に目標とするあいつ、
この慓悍な思想は亟共を憂鬱にする。

兵士

白い鋪道（ペーヴメント）に兵士がとまつた。白い高層建築（ビルヂング）が横擲りに兵士を浚つて立つた。兵士は引つ憑かれたやうに青い空に向つて發砲した。つづけざまに。

寂囚

―組詩―

府川惠造

[illegible]

＊＊＊

東漸のみぎりを受けて
燃え立つか　地に
公孫樹

ひそやかに
おごそかに
釀し出でんとして
今日も赤日の暮れ方をうち默すなり

＊＊＊

この里に
碎雲のしんがりが落としていつたのは
いのちの火の消えたばかりの
籔の小鳥であつたか
秋が放つ散彈の終り

[illegible]

＊＊＊

洪水のなごりの海に
なぐさめの虹立つ朝
もろもろの腦裡に巣くふ
幻影をなみする船は
眞實の纖を伸ばして
さらさらと虛空に鳴つた
錯綜する飛沫を分けて
虹

＊＊＊

ゆくべき雲は
いつてしまつた
死すべき明るさは

死んでしまつた
どこに惱みと
影があるのか
白薔薇は霜に響いて
蒼凉の氣韻を噛んだ

一切は實にかつちりとしてゐて
無邪氣なゴリラなどが
慘虐な齒をむきだして
笑つてゐるやうではないか

粗砥から
きめのこまかな砥石へと
意志の刃を磨ぐ季節である
微塵ゆるがぬ刹である

寄す

柏文彌

秋冷

昨夜はお前のことを考へてひとりで泣けてゐたらしい。
そしてそのまゝ寢入つたらしい。
今朝起きて、流し元にたつと
どうやら頰つぺたに涙痕がこびりついてゐさうなのだ。
それを洗ふのがちよつと惜しまれて
洗面器に水をはつたまゝ、その中を覗いてゐる。

こんな心が

…………………

こんな心が、未だ私のうちに殘つてゐやうとは思はなかつた。
こつけいな話だが

この頃お前の寫眞を抱いて寢る夜が多くなつた。

二行で書いた「お前」

疾つくのむかし死んだ子に
いまでも乳を吸はしてゐる女……。

乳

うまれて一月も生きないで
可哀さうに子供は死んでしまつた。——
女は胸をはだけて　私に
茶椀で乳をうけさしてゐる……。

献詩

侯御葛稔

母上よ
私の思想は黄色い燈火だ
女によつて怠惰なる性慾を
食物によつて怠惰なる生命を
そしていま私はふるさとの田園のこころに還る

母上よ
私の思想はすべてを肯定する
堆積したノオトと書物　ワイングラス
机上にひろがる怠惰なる時を食べる
そしていま私はふるさとの田園のこころに還る

母上よ
かつて生れて十幾年始めて會つたあなたの顏は
想つてゐたほど華やかなものではなかつた
美しい歌舞伎の話や建物の話　輕井澤や赤倉のことを
私はあこがれをもつて聞く少年であつた
私もあなたも滅多に外に出ることもなかつた
叔母達の家から裏街の二階へ　そして又田園の屋根裏へ移つて
いつた
私はそこから一里半の道を學校へ

あなたは窓から樹木や植物や小鳥を眺めてゐた
私達は健康で清氣があつた
私はあなたに反抗することによつて
あなたは私に反抗することによつて
母上よ
私達はそこに私達の生命のいしずゑを築いた
平凡のなかからの高揚を求めた
そしていまあなたは田園の憂鬱のなかに
そしていま私は都會の憂鬱のなかに
しかも私達のこころは遠くより互にひとつの窓に寄りかかり
私達はそこに私達の生命の礎石をつみあげる
無明のなかからの高揚を求める
私はあなたに温順であることによつて
あなたは私に温順であることによつて
母上よ
私の思想はすべてを肯定する

眼には眼をもつて
楯には楯をもつて
そしていま私は宇宙草昧の氤氳を愛する
母上よ
私の思想は黄色い燈火だ
つねに詩眼を求むる手
つねに青眼を求め得ざる手
そしていま私は宇宙草昧の氤氳を愛する

歸郷詩篇

野を走る褐色の馬を愛す
さらに無聲なるその影を愛す
さらにその影の氷の如き思想なき思想を愛す
野に立ちて永遠にのびんとする樹木の意志を
しかも永遠に達し得ざる樹木の冷き憂鬱を愛す

野にありて五位鷺　しぎ　つぐみの聲に心和らげり
耕人の沈思に心靜穩なるを覺えたり

ああしかもわれふるさとに歸りて
何事を爲さむとするものぞ
廓寥たる田園にあそびて
怠惰なる時を食まんとするか
母あり
褐色の馬あり
樹木あり
野鳥の聲あり
かかる怠惰なる自然を愛さむとするか
心性　水の如く下流し
われ日夜何事をも思考せざらむことをひたすらに願ふなり
唯に眼に映る物象を展望せむこころなり
野に立ちて褐色の馬の走るを眺め
無聲なるその影を愛す
さらにその影の思想なき思想を愛す
われ　かかる氷の如き矛盾を愛す

DURCH LEIDEN FREUDE

あはれなるひとをみてあはれみのこころおこさず
われをあはれむこころ切なり
位高く大きなるひとをみて尊敬のこころおこさず
われのまづしきこころなつかしむこと切なり
物象　心鏡にうつり
心鏡　物象をうつし
ひとをして右の頰を打たしめて更に左の頰を打たしむるを欲せず
われを愛しむこころ切なり
肯定のための否定にあらず

否定のための肯定なり
われのもとむるものはしかも歎なり
悩みを通じての歡をこそ　われに

だんだら詩集

萩原野呂

まる・たん・ぼう

俺のおやぢがあんまり
足をひつぱるので
足が抜けた
俺のおふくろがあんまり
手をひつぱるので
手が抜けた
俺があんまり　あんまり
ダダをこねたので
首が飛んだ

にきび

親が子を生んだ
子が孫を生んだ
孫が子を生んだ
子が親を生んだ
やれ　やれ

やに

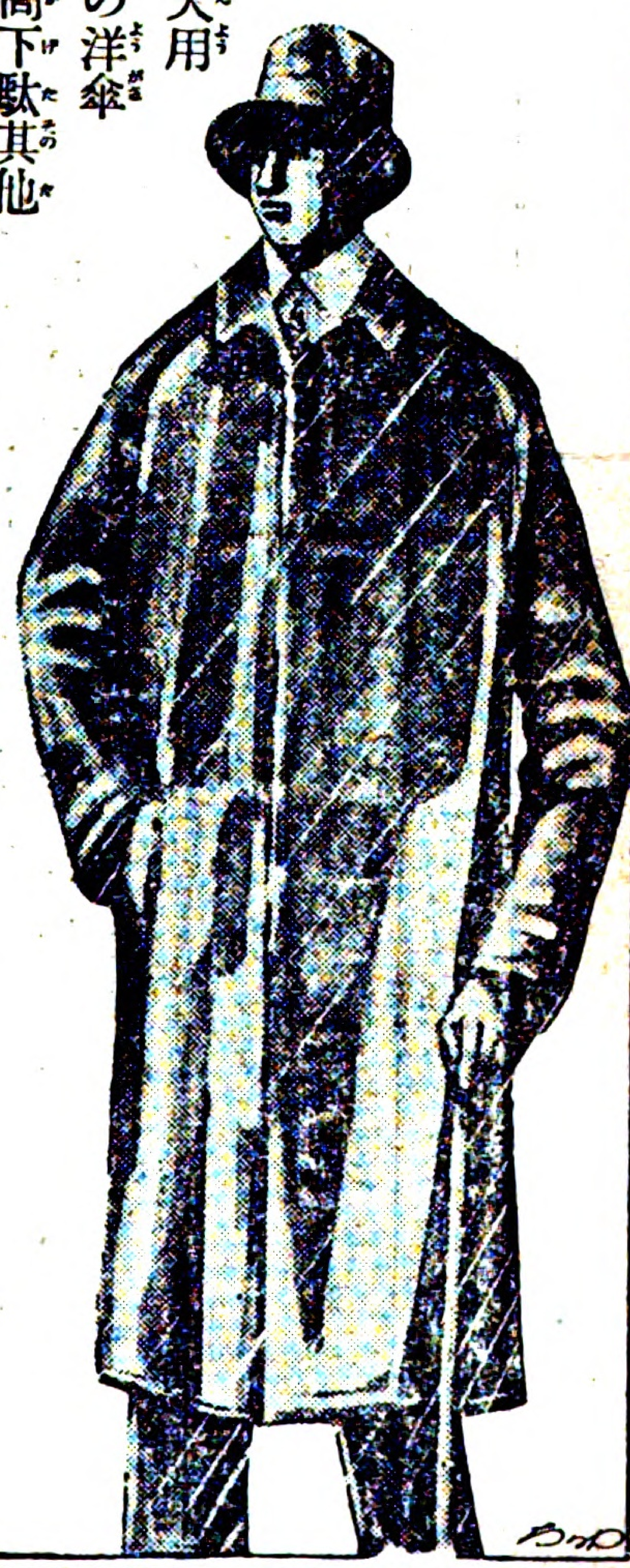
煙管の丸首を嚙ぢりながら
おもうのです
つくづくと
世が厭になりました
色のわかんない
煙草のやにでしょう

緑も煙る梅雨の候となりました三越では優秀なレーンコート、雨天用の洋傘高下駄其他各種の雨具類を澤山に取揃へました。何卒御用命を願上げます

梅雨の御用意は三越

……雨具類を各種澤山に取揃へ陳列致して居ります

- ◆バーベリー　レーンコート……六六、〇〇より
- ◆アイディアル　同……一五、〇〇より
- ◆ラバーシルク　同……一〇、〇〇より
- ◆雨天用洋傘（絹張、男子用）……八、五〇より
- ◆同（毛繻子張、男子用）……二、五〇より
- ◆高下駄（爪革付、男子用）……一、七〇より



三越

◆東京日本橋◆

新刊批評

『社會科學の豫備概念』

三木清著

大森義太郎

この書を手にしてわたしは何よりも著者の精勵に驚異する。我々が三木氏によつて『唯物史觀と現代の意識』を贈られてから僅かに一年にもならうか。しかも早く著者は第二の勞作を世に問はれたのである。三木氏はこゝで前著の見解を承け、そして一歩を進められてゐる。

主内容を形づくるものは、この數ヶ月の間に、其主宰せられる雜誌『新興科學の旗の下に』に相次いで發表された四つの論文である。それに先行して、別に、三木氏が以前に雜誌『思想』に載せられた一の論文が收められてある。この後者は嘗て氏の哲學の主要構成分をなした解釋學的現象學の立場を明かにする。それに對して前者の四論文は、哲學がいま社會科學――現實には、マルクス的なる――の基礎づけをなすべき新たなるべーコン的或はむしろカント的な課題をもつとして、この仕事を果すべく試みられたものである。ただ、中で最後の論文『唯物論とその現實形態』は氏の受けた批判に答へた爭論ふうのものである。

かくのごとき構成をもつたこの氏の近業において我々が興味を掛ける主たる點は、三木氏がマルクシズムを他のイデオロギー、特に他の哲學と聯關せしめつゝ明かにされるところに在る。そしてそれはマルクシズムの生成の過程についても、またその現代の姿に對して、でもある。こゝにおける三木氏の仕事は、氏のこの領域における正確と同時に豐富な知識をもつて、些の危ぶなげも見せない。かうした方面は、必要であるにもかかはらず、わが國のマルクシストがあまり多くに手を染めえなかつた處であつて、それゆゑ、三木氏の業績から我々の受ける示唆は極めて大きい。特にわたしは氏のヘーゲルに關する闡明、またマルクスとの對比に向つて敬意をおくる。――こゝでわたしに第五の論文『有機體說と辯證法』を指して置かう。

これらを通じて、三木氏がはなはだしくマルクシズムに近く來られたことは、この近業を前著に比べるとき、我々の注意を惹いて止まない。むしろこゝではあらゆる機會にマルクシズムの優越が說かれると云つても必ずしも言ひ過ぎではなからう。しかし、もし我々が氏の哲學的立場の構成分を探るならば、それは專一にマルクス―エンゲルスの立場に歸することはできない。すでに氏の哲學にもつとも親しい人々から指摘されたやうに、マルクスとハイデッガーとディールタイと三つの構成分を我々は區別すべきであら

二月十九日、今日は此行第一の快心事たるべき、阿里山上りの當日だ。何よりも天氣に惠まれた、午前七時十五分に、嘉義北門驛を發した。嘉義營林所長福本君、總督府營林所の渡邊君等、案内役たり。有り難くも一車貸切にて行く。

* * * *

我等の前なる無蓋車の荷物の上には、生蕃の親子二人が便乘してゐる。十三四の生蕃娘が、其父に傍うてゐるのは、如何にもいじらしくある。可憐である。

* * * *

竹崎まで約七八哩の間は、平地である。此れから山路にかゝる。木履寮、樟腦寮を經て、彌よ獨立山頂を攀づるととなる。即ちスパイラル線に入る。此處では遮二無二急勾配のところを上るから、線路を螺線的にくるくるつけてゐる。されば汽車窓から、凡そ四回樟腦寮の停車場を回看するとが出來る。されど機關は後邊にあるから、煤烟に襲はるゝ心配はない。

* * * *

途中には最初に莿竹の林があり、次には蔴竹の林があり。更に桂竹の林となる。莿竹はとげがある。最も繁殖力に富み、一節を切りて地にさせば、やがて新芽を吹く。本島人は之を防風林となし、家の城壁となし、而して家それ自身も殆んど此にて造作してゐる。蔴竹は其の幹巨大にして、筏を作るに妙、桂竹は日本の眞竹の類にて、此邊にては專ら製紙の用に供してゐると云ふ。

* * * *

又た龍眼樹が、隨處に森をなしてゐる。此れは龍眼肉は勿論、用材として緊緻である。沿道何れも總督府の造林がある。チーク樹、相思樹、シツク樹がある。シツク樹は朱欒擬ひの材として用ひらる。されど上るに隨ひ、滿目只だ桂竹と云ふも不可なき程だ。

* * * *

我等は此くの如くして獨立山を越え、梨園寮を過ぎ、見晴臺にて一寸車を停め、展望した。斯くて交力坪、水社寮等を過ぎ、奮起湖驛に逹したのは、十一時頃であつた。此處は阿里山鐵道の中間驛にて、小市をなしてゐる。警官派出所もあれば、旅館もある。嘉義を距る二十八哩、海拔四千五百六十四尺。されど停車場の附近には、菊の殘花もあれば、蕨が既に拳を擡起

してゐる。此の附近から專ら福州杉卽ち廣葉杉が稀林してゐる。

二七　阿里山途上

蕃社湖から哆囉嗎驛を過ぐれば、大塔山、小塔山は一大水成砂岩の山形をなして眼前に横る。而して蕃社湖までは、熱帶林にして、概して榕樹類であるが、此れからは暖帶林となり、櫧柯類の闊葉樹が多くある。何れも鬱蒼として千古斧を入れざる處女林だ。

＊　＊　＊　＊

此れから十字路驛を過ぐれば、愈よ蕃界に入る。此から平遮那驛を過ぐれば、山は暖帶林より溫帶林に接し、針葉樹類の王國となり、先づ眼に入るものは、紅檜である。紅檜は世界中、唯だ臺灣のみを產地としてゐる。其葉は普通の檜に類して、其色やゝ赭、之を板にすれば、亦た淡紅色を帶ぶ。今日では扁檜と其の價格に甲乙なしと云ふ。

＊　＊　＊　＊

二萬平驛は、嘉義を距る四十一哩餘、海拔六千五百尺、二萬坪の平地があるから此名がある。但し果して二萬坪もあるや否やは知らぬが、山間の平地としては、先づ廣々とある。此處から十六分の一の急勾配となるから、八輛の車を六輛に減じて行く。此れからは紅檜、扁檜、及びツガなどの巨木が相ひ送迎し、所謂る神木驛を過ぎ、神木を遙拜して行く。斯くて沼の平に至れば、意外にも市邑を見出した。嘉義から四十四哩、隧道を過ぐる七十二。海拔七千四百五十七尺。

＊　＊　＊　＊

我等は一切の手荷物を俱樂部に屆け、更らに二哩七分を過ぎ、海拔七千六百九十一尺の塔山驛に至り、更らにガソリン機關車を運轉する小形の汽車に乗り換へ、約一哩を過ぎ、營林所派出所主任田村君の斡旋にて、伐木工夫の木登りを見た。此れは唯だ一條の繩と、其端に一本の小棒とを結び、それを樹身に投げかけ、それを階子として上り、追々とそれを繰り返して樹の頂上に達し、更らに其繩を手繰りて、地に達する作用にして、見るからに別段危險を感ずる程ではない。

＊　＊　＊　＊

此れから伐木作用を見た。樹齡五百五十年、長さ百〇二尺、

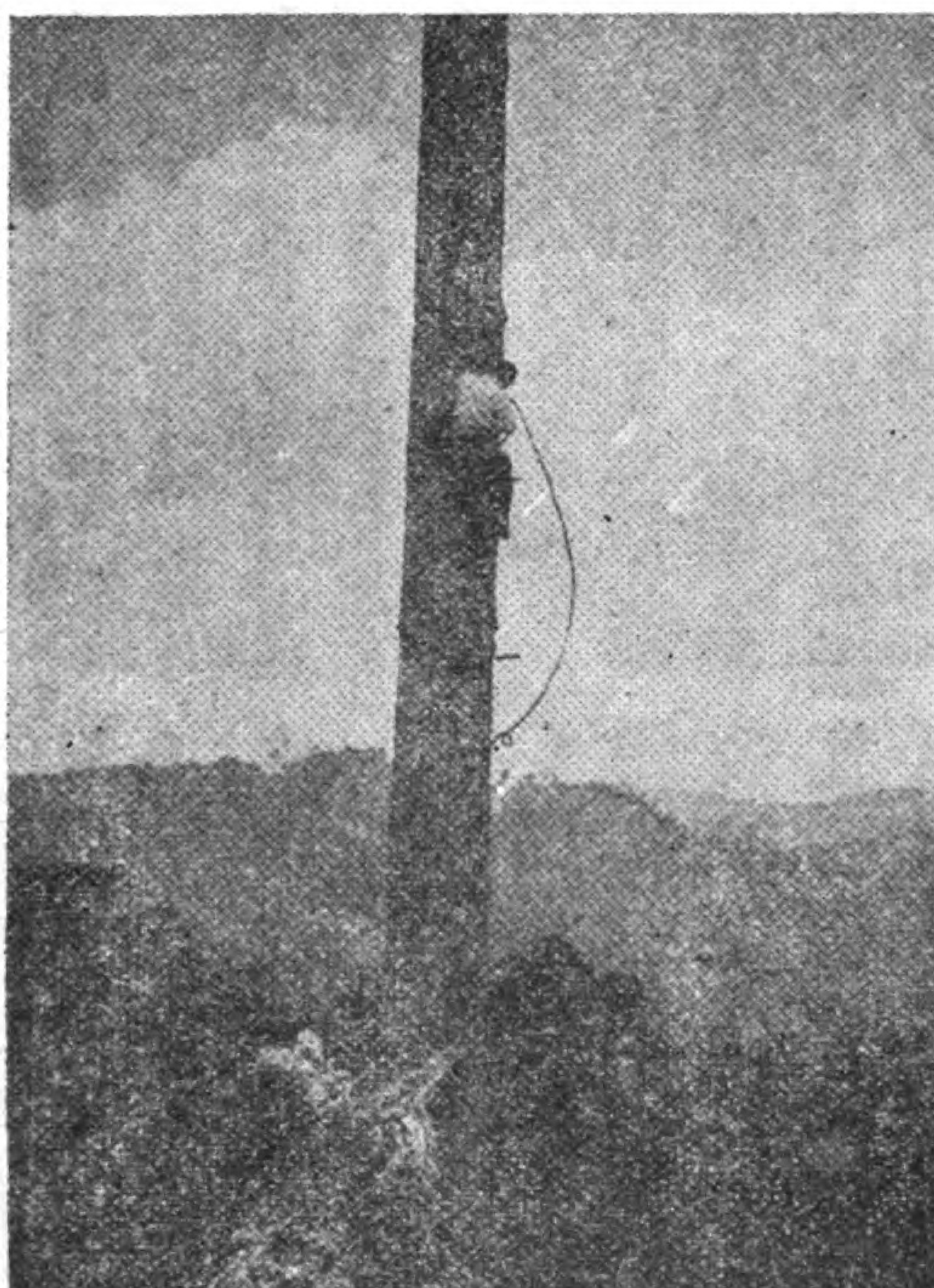
之を材木とすれば、四十五石を得ると云ふ。其の倒る丶様は、實に巨人の最後を見るが如く勇ましく、且つ凄じくあつた。此れから材木の集配作業を見、沼の平に還り、阿里山倶樂部の客となりたるは、既に午後五時頃であつた。

＊＊＊

本日沿道にて最も珍らしかつたのは、山中處々に臺灣の緋紅が滿開であつたことだ。而して倶樂部にて、ランプをつけ、石のストーブに、檜や、紅檜を惜氣もなく焚き、而して下界は一面の雲海を現じ、上には碧天水の如く、唯だ闌干たる星斗と、一輪の明月のみ。

山深夜寂寂。爐冷復添レ薪。
脚底雲千疊。嶺頭月一輪。

昭和四年二月二十日午前六時　阿里山倶樂部の一室、爐火盛に燃ゆる處に於て。寒暖計五十二度。



阿里山伐木夫の木登り

二八　阿里山概觀

今ま玆に一寸阿里山の概念を得る必要がある。阿里山は新高山の西側に連亙起伏せる一團の大森林にて、面積約一萬二千町歩、其の最高峰は、海拔八千八百尺、而して其の山脈は馬脊の如く、新高山に連つてゐる

＊＊＊

臺灣に於ける植物帶は、概して四分することが出來る。先づ熱帶林にて、阿里山を標準とすれば、約二千五百尺以下、即ち獨立山停車場以下は、龍眼樹や、榕樹、相思樹、キワダ、イヌビワ、芭蕉等の類が能く繁茂してゐる。次は二千五百尺乃至五千五百尺即ち平遮那停車場邊迄は、暖帶林で、樫、柯、及び楠仔類の常綠闊葉樹林が、自然の林相

をなしてゐる。其中には周圍三四尺、枝下七八十尺に近きものも少くない。內地で云へば、四國、九州邊に當るところだ。

＊　＊　＊　＊

此れから次第に常綠濶葉樹が減じて、針葉樹帶となる。即ち五千五百尺乃至一萬尺、二萬平驛附近からが紅檜、扁柏、亞杉、「臺灣杉」栂、姫子松と云ふ順序で、次第に出で來り、然も時には相混生してゐる。兎も角も針葉樹として、最初に現はれ來るのは、紅檜の老木である。其中には樹高二十數間、幹圍六十尺のものがある。然も亞杉、栂、姫子松は、約二割に過ぎず、其他は全く紅檜と扁柏にして、臺灣檜の名は、此の二種によりて世に轟いてゐる。

＊　＊　＊　＊

阿里山伐木採材の營業を開始したのは、大正三年からで、昭和二年度迄搬出總高は、約二百四十石。而して昭和二年現在の針葉樹現在四百三十石、濶葉樹約三百五十石を剩し、更らに、阿里山の峰續きの大學演習林の針葉樹も、伐採する筈なりと云へば、年十五萬石の生產として、今度十五年は持續せらる可しと云ふ。

＊　＊　＊　＊

此れと同時に、阿里山鐵道沿線六千町歩の造林面積、約百二十町歩を合せ、年々二百二十町に近い造林をなしつゝある。就中福州杉、即ち廣葉杉と、吉野杉、鹿兒島杉は、何れも成長尤も迅速である。福州杉の如きは、十七八年にして幹圍平均三尺となつてゐる。但だ日本內地の扁柏は、其の成長頗る遲々としてゐる。

＊　＊　＊　＊

予は阿里山伐木を見て、たゞ木を伐るばかりが能事ではあるまいと考へたが、其の鐵道の沿線に、造林の行はれ、阿里山峰頭の伐木の跡には、新樹が萱や、篠の間から、其の亭々たる幹を出しつゝあるを見て、頗る人意を強うするを覺え、左の一詩を口占した。

登登七十二洞門。古檜喬杉半斧痕。
寄語山靈浪莫レ恨。向レ榮新樹沿レ途蕃。
昭和四年二月廿一日午前五時半　嘉義ホテル電燈下に於て。

二九　阿里山を下る

二月二十日、阿里山の朝は寒かつた。予等は室內に於て、石

造のストーブに、惜氣もなく檜材を燃して暖を取り、ランプの火にて、紀行文を綴つた。海拔七千三百五十尺と云へば、斯くある可き筈だ。

* * * *

午前七時半、倶樂部を發した。予と妻とは轎に乘つた。此れは普通の椅子でなく、腰を掛けて後に倚りかゝり、兩脚は紐にて軾に繋いである小板に蹈み掛くるものにて、支那泰山に於ける轎に類してゐる。尤も輕便にして、且つ尤も乘り心地がよい。擔夫は二人にて、二本の棒を、各々兩肩に擔ひで行く。

* * * *

我等は新高山登山道路を横りて、二十四町を上り、祝山に至つた。此處は海拔八千二百六十三尺、阿里山主峰を中心として、一萬尺以上の山凡そ十三を一眸の中に錘む。其側なる仰高峯は、實に四千尺の斷崖絕壁にて、泰山の捨身巖も、此れ以上ではない。

* * * *

我等は此處にて飽迄高山氣分を味ひ、山を下りて、沼の平に至り、先づ阿里山神社に詣し、學校を見、阿里山寺を經て、所謂る神木の側に出でた。

* * * *

神木は紅檜にて、樹齡三千年、目通周圍六十四尺、枝下長さ四十五尺、材積千八百石、之を伐れば、其株は約二十疊敷となる。如何にも巨木である。其の附近に第二の神木あつたが、今は燒けて、唯だ空洞の一部を存するのみだ。此邊の木、何れも千年以上、材木としては餘り老齡は、好ましからずと云ふが、我等の眼からは、巨木には何やら神靈が宿りてゐる心地がする。

* * * *

我等の汽車には、狩から還り來る生蕃八名が、隣りの無蓋車に乘り込んでゐた。此れは全く無賃の客であると云ふ。彼等は蕃刀を帶び、獵銃を攜へ、特に弓と矢とは、我等に取りては、別して珍らしかつた。其弓は竹であつたが、矢根は鐵の矛形をなし、其の兩刃はヤスリの如くあつた。但だ獲物は一も無かつた樣だ。

* * * *

山上の寒に引き代へ、山腹の熱は八十度を越えた。我等は上衣を脫し、扇を揮ひ、午後四時に嘉義に着した。而して同

夕は眞木街長等の厚意にて、本島人の瑞鳳獅麟の舞を見た。就中獅子舞に至りては、尤も興を惹いた。

昭和四年二月廿一日午前六時　嘉義ホテルに於て。今日は此から臺南に赴かんとす。

三〇　嘉義より臺南

二月二十一日、午前七時三十五分嘉義を發して臺南に向ふ。やがて畑の中に標石の突起を見る。此れが北回歸線の分界だ。此れから彌よ熱帶に入る。

＊　＊　＊　＊

沿道は一望無際、實に廣漠だ。漠の字を添へたのは、地味が臺中地方に比して、如何にも痩せてゐるからだ。滿地甘蔗畑、田は所謂る看天田とて、雨が降らねば植付が出來ないから、切株のみ殘りてゐる。之を嘉義以北の植付最中と比較して、如何にも貧弱に感ずる。

＊　＊　＊　＊

此中に於て獨り大なる煙突より煙を吐きつゝあるは、製糖會社の工場あるのみ。此邊は明治製糖、臺灣製糖の勢力範圍らしく思はれた。而して鹽水港製糖會社の直營にかゝる、大農式廿迹畑の如き、亦た旅客の注意を惹くに足る。

＊　＊　＊

九時三十七分臺南驛に着するや、官民及び熊本縣人諸氏に出迎へられ、直ちに横光内務部長、松尾市助役等の案内にて、臺南神社を參拜す。此處は官幣中社にして、北白川宮能久親王を祀りてゐる。而して神殿の後に廻りて、親王の薨去遊ばされたる御室、御寢臺、御寢具、其他當時御携帶の軍用鞄、途中御使用の擔架などを拜見し、感慨轉た深きものがあつた。轉じて孔子廟に赴き、其の祭典の當日とて、一切の準備が整うたるを幸ひに、悉く之を觀た。但だ大牢、小牢の牲として、牛や羊や豚が、生のまゝ、血を流し、臟腑を出して、壇前に供へつゝあつたのは、如何にも殘刻らしく見受けた。明年からは俑、俑羊豚に改良したら如何と思ふ。若し肉を缺く必要あらば、それは肉屋より購ふも可ならん歟。

＊　＊　＊

祭典見物せんと思うたが、炎熱久しく石壇の上に立つに堪へ難し、それも唯だ三拜九拜の式のみなれば、失敬して此から紀碑を見る。此れが乾隆年間臺灣平定の紀功碑にして、漢滿兩文

にて、九個の大石碑が駢立してゐる。轉じて累々たる墓石を經して、五妃廟を見る。五妃は寧靖王の五人の妃が王に殉死したるを合祀したのだ。其側に一大榕樹がある。其蔭には千人を坐せしむ可し。

＊　＊　＊　＊

此から郊外なる開元寺に赴く。此處は鄭成功の妻董氏養老の邸にして、その儘寺としたるものと聞く。主僧は日本語を操り、極めて氣轉の利きたる案内振りなれば、貴僧は定めて内地に留學せられたるならんと云へば、然り私は名古屋生れであると答へ、何となく禪の問答らしかつた。此處では鄭氏時代の古井を見た。

＊　＊　＊　＊

此れから開山神社に詣した、此れは鄭成功の廟を、開山神社と改めたものだ。即今修繕中であつた。半ば日本人の血を享けたる鄭成功も、延平郡王としてよりも、開山神社としての方が、滿足であらう。予等が拍手を拍つて禮拜したのは、彼に取りても決して不快であるまいと思うた、

三一　臺南見物

市公會堂の熊本縣人諸君の午餐會に赴けば、樓上には臺灣に關係多き書畫、骨董の類、及び明治初期の史料など陳列せられてあつた。滿座の諸君、何れも欣々として予等を迎せられ、宛ら家郷に還りたる心地がした。而して此から臺南安平間の運河に沿うて、鹹水養殖試驗所に赴いた。此處は二十萬坪に餘る面積にて、盛んに虱目魚を養殖してゐる。別に鯔や、鱸や、蝦の類もある。されど主としては虱目魚だ。此れは寸餘の魚苗を此地に養ひ、一年餘にして其の長大なるものは三尺となる。即今の產出價に二百萬圓以上と聞く。其の養殖の方法たるや、池面を干して、それに肥料を施し、其の肥料から蟲がわくに際し、鹹水を導き池となし、魚を其中に投じ、之を魚の肥料とするもの。されば予は一見此れは鹽濱ならんと思うた。予は斯く迄多數生產の魚に虱の字を冠するは、面白からず、何とか改名しては如何と發議したが、然らば先生之を撰定せよとのことにて、他日を約して去つた。

＊　＊　＊　＊

此れから安平製鹽會社に赴き、其の作業を見、和蘭人の遺蹟たる赤嵌城址に上り、濱田彌兵衞の事を偲び、赤錆びたる淸國嘉慶年間の製鐵の大砲を撫し、和蘭人のバタビヤから齎らしたりと稱する磚の破片を拾ひ、安平港を一覽し、臺南なる赤嵌樓に上つた。此れは西暦一六二四年和蘭人の建てたるプロビデンチア城址にて、一に紅毛城と稱してゐる。鄭氏の世には火藥庫となり、乾隆年間には安平縣署の一部を移し、今は海神廟と文昌閣とになりてゐる。

＊　＊　＊　＊

轉じて關帝廟、媽祖廟を見舞ひ、臺南公園を快馳し、始めて吾宿なる東屋にて汗を流したるは、旣に五時半を過ぎてゐた。而して六時半から又しても市公會堂に於て、官民諸氏の歡迎會に招待せられ、之に赴いた。然も臺灣料理にて、獻酬の心配もなく、津田毅一翁、富地臺南新報社長、遠藤市尹、許廷光などの諸君と談笑して、一夕を過したるは、眞に愉快であつた。

＊　＊　＊　＊

臺南は實に史的氣分が濃厚である。予はせめて今一日此地にありて、徐ろに懷古の情を暢べたいと思うた。臺南は眞に愛す可き地である。

昭和四年二月二十二日午前六時十二分　臺南東屋に於て。

三二　嘉南大圳

二月二十二日、午前七時三十五分の汽車にて、臺南を發し、昨來の道を番子田驛まで戻る。臺灣の鐵道は、單線にて、兎角發車時刻は後れ勝だ。此の旅行の經驗によれば、五分十分の後れは、殆んど當然の事と認められてゐる。

＊　＊　＊　＊

番子田驛には嘉南大圳の管理者枝君、技師八田君など出迎へられ、直ちに大圳線に乘り換へ、烏山頭の事務所まで輕便列車にて向うた。沿線の地は所謂看天田、即ち雨を見て田植をする土地のみにて、如何にも瘠地らしく見受けらる。而して途中約三百年前、和蘭人の移植したるマンゴー樹は、蓊鬱として林をなしつゝあるを見る。和蘭人の勢力は、此邊まで波及したるものであらう。

＊　＊　＊

此れから自動車にて事業展望所に至り、八田君から實際の作

業に就て、それぞれ説明を受けた。極めて大雜把に語れば、嘉南大圳は、看天田約十五萬甲（一甲は約一町歩）に灌漑し、是等の土地を一年は水田、一年は甘蔗、一年は雜作として輪作せしむるものにして、其の經費は四千八百十六萬餘圓、最近五百三十五萬圓を追加したれば、合計實に五千三百五十一萬圓となる。而して其の事業は、大正九年九月に着手し、昭和四年度の終りを以て完成する由にて、現時既に濁水溪を水源とする、北港溪以北の五萬二千三百餘甲には、大正十三年以來順次灌漑を開始し、其の効果を收めてゐる。

＊　＊　＊　＊

烏山頭の約十萬甲に灌漑するものは、曾文溪の水と、其の流域の雨量とによるものにして、其の貯水池たる官田溪の堤防は高さ實に百六十五尺、頂部延長七百間、底部巾一千尺、頂部巾三十尺、實に其の土沙を持ち運び、それを水力にて壓洗し、漸次積み上げつゝある作用は、目覺ましきものだ。

＊　＊　＊　＊

事業主任八田君は、二十五歳にして帝大工科を卒業し、直ちに臺灣に來り、本年四十九歳と云ふ、卽ち其の一半生を臺灣に送りたるもの。其人其勞、洵とに嘉す可し。

＊　＊　＊　＊

予は堤防の中流に舟を浮べ――一千尺の兩側から土砂を盛り、水力にて壓洗するから、自然に中は川の如く、以て舟を浮るに足る。本年末には此川は、突起して、堤防の中心となる可きもの――其の作堤の模樣を見、更らに工事中、石器、土器の類を掘り出したる地域に於て、採集をなした。地層に黑き數寸の一線を劃し、其中には土器の破片など續々と出で來つた。但だ石庖丁などの類ある由なれども、それは見當らなかつた。斯くて展望臺にて、辨當の馳走を受け、又た番子田驛に引き返し、一路臺南を經て、高雄に向うた

三三　臺南より高雄

臺南から高雄までの地味は、最も甘蔗の糖分多くして、當業者に歡迎せらるゝ由、此れは雨量少く、光と熱とが多き故であらう。高雄に近く頃には、未だ青田と云ふ程ではないが、早苗が風に戰いてゐた。植附を濟して、既に一個月も經たらしく思はれた。

＊　＊　＊　＊

午後二時半停車場着、太田知事、齋藤市尹等及び鄕友諸氏に迎へられ、直ちに市尹の案内にて、港口に至り、更に説明者長尾技師と共にランチに乘り、港口を出でゝ其の防波堤の邊から、更らに港内を殆んど一巡した。

＊　＊　＊　＊

高雄の活力は、頗る旺盛、岸壁には約七隻の汽船が繋がれてゐた。灣内にも汽船や、大小の戎克が、無數であつた。今は砂糖の季節とて、船は何れも其の運搬の爲めであらう。尙ほ西瓜が、港に面する倉庫に山積してあつたが、此は東京に直送するものと云ふ。

＊　＊　＊　＊

此れから上陸し、壽山に上り、貴賓館に至り、此上から高雄市及び其の港灣を、双眸の中に收め、今上陛下の、攝政殿下として、御一泊あらせられたる御室を拜觀し、茶を喫して去り、更らに上層なる高雄神社を參拜し、市中を一巡して、一浴するや否や、再び壽山の下西仔灣の海水浴場なる官民の歡迎會場に赴いた。

＊　＊　＊　＊

長風萬里我襟を吹き、落日は漁波を射りて、其の黄金色より、深紅色に變じ、其の漸次海中に沒するの光景、正に是れ一幅造化の大作と云はねばならぬ。

＊　＊　＊　＊

予は齋藤市尹の挨拶に對し、高雄は今や午前九時頃だ。其の希望は前途にあり。築港完成の曉は、更に高雄のみと云はす、臺灣全土の血の巡りが、善くなると信ずる旨を告げた。而して御馳走の第一としては、此の風光絶佳の場所、第二には卓上に、あらゆる南方の菓物の標本を、陳列せられたる厚意を謝した。而して我等は見るのみでなく、是等の珍菓を試食した。

＊　＊　＊　＊

壽山は一名猿山と云ふ。猿猴尤も多く、種々の惡戯をたす。現に貴賓館の避雷針の如きは、數個の狙公相ひ群りて、之を搖かしつゝあり、即今一棟は漸く修理を了したるも、他の一棟は此の如しと、其の半ば傾きつゝある避雷針を、留守居のお婆さんは指し示した。併し我等に取りては、是亦た一興、惡戯は兎も角も、猿猴なども、成る可く驅逐せさる樣ありたしと、

市尹まで希望を陳し置いた。從來は舟に乘るか、然らざれば壽山の半腹を踰えねばならぬところを、昨年來隧道を通じた爲め、高雄市から此の西仔灣の海水浴場にも、容易に往來が出來、至極好都合にて、夏分には——四月乃至十月——臺中、嘉義邊からも、來遊者少からずと云ふ。左もある可し。但だ鐵道の複線と、自動車道路の修築が、尤も望ましき一である。此れは高雄海水浴場の爲めのみではない。臺灣全土の問題として。

昭和四年二月二十三日午前六時　高雄市吾妻旅館に於て。高雄は今が冬期と申すも、室内八十度にて、外出すれば、流汗淋漓。坐ろに東京の寒氣が慕はしくなつて來た。

三四　高雄より鵞鑾鼻

二月二十三日、今日は彌よ臺灣の最南端に達する日だ。午前八時三分高雄を發して、屏東線に乘り、一路稻田蔗圃を經て、九時三十四分潮州驛に到り、直ちに郡守井下猪太郎君の案内にて、自動車にて鵞鑾鼻燈臺に向ふ。一路平坦、栴檀樹の並樹は既に花を開いてゐる。滿目甘蔗畑にして、何れも臺灣製糖の勢力範圍と聞く。山本二峰君經營の勞想ふ可し。

やがて木麻黄の並樹となり、彼是二十餘里、斷又續。木麻黄は葉は木賊の如き針葉樹にして、其の成長尤も速かに、且つ潮風に耐ふると云ふ。我等は右に海岸に沿ひ、左に山を望みつゝ行く。朱一貴の亂に、此地の廣東人等が防戰したるを、清帝が褒賞したるを表彰する褒忠門を過ぎ。乃木將軍が明治二十八年十月十一日に上陸したる、枋寮の記念碑を過ぎ、十一時頃南勢湖の警察派出所に至れば、街道に沿ひ、小亭を設け、花木清雅、恰も一個の花園の趣あり。小亭は街道を隔てゝ、直ちに海岸に接す。滄海渺漫一望際なし。我等は亭側のタンクから水を汲み、顔を洗ひ、辨當を使うた。山口警部、田中巡査夫婦、迎接尤も到れり。田中巡査夫婦は、何れも熊本縣八代郡の生にて、花園の主である。山口警部は生蕃語を善くし、蕃人來襲の際に於て、九死一生を得たる老功者である。折節田中巡査が、今日釣れたとて、新鮮の刺身を饗したるを、何れも快喫した。而して更らに木瓜が盤に上つた。予は二個までも喫した。御禮には明日歸途に、何か書くからとて、墨を摺り置く可く申し殘した。

恒春郡境にて、津下郡守と分れ、不破警部出で迎へ、同君の案内にて、一路恒春に到り、此處にて西村郡守其他に迎へられ、更らに大板埒に至れば、今朝二頭の鯨が取れたとて、解體料理最中であつた。松井主任の所説によれば、昨日も二頭取れたと云ふ。

＊　＊　＊

此れから墾丁寮に於ける先住民族の遺跡を見た。磨製石斧、打製石斧、土器の破片、及び種々の貝類を採拾した。場所は道傍の畑にて採集には何の苦もないが、餘りの熱さにて、大抵にして切り上げ、約二十七里を、一氣に自動車にて快駛し、日本帝國の最南端鵞鑾鼻の燈臺に着きたるは、午後二時半前後であつた。

三五　四重溪

鵞鑾鼻の燈臺では中村所長から、其の尤も誇りとする木瓜を饗せられた。同行の須佐美君が、高雄から携へ來れる西瓜をも喫した。汗を拭ふ間もなく燈臺の最上層に登り、展望した。天晴れ氣清く、眼前には捕鯨船の徂徠する以外、唯だ漂渺の際、紅頭嶼を認むるのみ。

此れから無線電信所に至れば、同所人長谷川局長途中まで出迎へ、同君の案内にて、高原を縦横に馳せ廻り、東岸の西海岸と、東海岸とを、一時に双眸の中に収めた。歸途燈臺に至れば、中村主任指點して、彼處に鯨が潮を吹きつゝありと云ふ。立ち留り見れば、今や捕鯨船と鯨とは、互ひに秘術を盡して勝負最中だ。鯨は巧みに逃んとし、船は之を追かけつゝある。

＊　＊　＊

歸途は恒春種畜場に立ち寄り、帖佐所長から印度種と、臺灣原種との雜種牛の蕃殖の現況など示され、新鮮の牛乳にて渴を醫し、明治七年征臺の際、西郷都督の本營亀山を過ぎ、車城を經、西郷都督の名により碑文を誌したる、牡蕃に虐殺せられたる琉球藩民の墓を弔し、更らに四重溪を經て、石門に抵り、當時苦戰の狀を緬想した。

＊　＊　＊

石門は呼んで字の如く、兩崖斬立、宛も門をなしてゐる。其下は四重溪の碧潭が廻縈してゐる。暮色蒼然、偶ま蕃刀を帯びたる牡蕃の童兒二人、淵を渉りて山中に入るを見る、蓋し蕃社

市尹まで希望を陳し置いた。從來は舟に乘るか、然らざれば壽山の半腹を踰えねばならぬところを、昨年來隧道を通じた爲め、高雄市から此の西仔灣の海水浴場にも、容易に往來が出來、至極好都合にて、夏分には——四月乃至十月——臺中、嘉義邊からも、來遊者少からずと云ふ。左もある可し。但だ鐵道の複線と、自動車道路の修築が、尤も望ましき一である。此れは高雄海水浴場の爲めのみではない。臺灣全土の問題として。

昭和四年二月二十三日午前六時　高雄市春喜旅館に於て。高雄は今が冬期と申すも、室內八十度にて、外出すれば、流汗淋漓。坐ろに東京の寒氣が慕はしくなつて來た。

三四　高雄より鵞鑾鼻

二月二十三日、今日は彌よ臺灣の最南端に達する日だ。午前八時三分高雄を發して、屏東線に乘り、一路稻田蔗圃を經て、九時三十四分潮州驛に到り、直ちに郡守津下猪太郎君の案內にて、自動車にて鵞鑾鼻燈臺に向ふ。一路平坦、栴檀樹の並樹は既に花を開いてゐる。滿目甘蔗畑にして、何れも臺灣製糖の勢力範圍と聞く。山本二峰君經營の勢想ふ可し。

・・・・

やがて木麻黃の並樹となり、彼是二十餘里、斷又續。木麻黃は葉は木賊の如き針葉樹にして、其の成長尤も速かに、且つ屢風に耐ふると云ふ。我等は右に海岸に沿ひ、左に山を望みつゝ行く。朱一貴の亂に、此地の廣東人等が防戰したるを、清帝が褒賞したるを表彰する褒忠門を過ぎ。乃木將軍が明治二十八年十月十一日に上陸したる、枋寮の記念碑を過ぎ、十一時頃南勢湖の警察派出所に至れば、街道に沿ひ、小亭を設け、花木淸雅、恰も一個の花園の趣あり。小亭は街道を隔てゝ、直ちに海岸に接す。滄海渺漫一望際なし。我等は亭側のタンクから水を汲み、顏を洗ひ、辨當を使うた。山口警部、田中巡查夫婦、迎接尤も到れり。田中巡查夫婦は、何れも熊本縣八代郡の生にて、花園の主である。山口警部は生蕃語を善くし、蕃人來襲の際に於て、九死一生を得たる老功者である。折節田中巡查が、今日釣れたとて、新鮮の刺身を饗したるを、何れも快喫した。而して更らに木瓜が盤に上つた。予は二個までも喫した。御禮には明日歸途に、何か書くからとて、墨を摺り置く可く申し殘した。

・・・・

恒春郡境にて、津下郡守と分れ、不破警部出で迎へ、同君の案内にて、一路恒春に至り、此處にて西村郡守其他に迎へられ、更らに大板埒に至れば、今朝二頭の鯨が取れたとて、解剖も料理最中であつた。松井主任の所說によれば、昨日も二頭取れたと云ふ。

* * *

此れから墾丁寮に於ける先住民族の遺蹟を見た。磨製石斧、打製石斧、土器の破片、及び種々の貝類を採拾した。場所は道路傍の畑にて採集には何の苦もないが、餘りの熱さにて、大抵にして切り上げ、約二十七里を、一氣に自動車にて快駛し、日本帝國の最南端鵝鑾鼻の燈臺に着きたるは、午後二時半前後であつた。

三五　四重溪

鵝鑾鼻の燈臺では中村所長から、其の尤も誇りとする木瓜を饗せられた。同行の須佐美君が、高雄から携へ來れる西瓜をも喫した。汗を拭ふ間もなく燈臺の最上層に登り、展望した。天晴れ氣清く、眼前には捕鯨船の徂徠する以外、唯だ漂渺の際、紅頭嶼を認むるのみ。

此れから無線電信所に至れば、同鄕人長谷川局長途中まで出迎へ、同君の案内にて、高原を縱横に馳せ廻り、臺灣の西海岸と、東海岸とを、一時に双眸の中に收めた。歸途燈臺に至れば、中村主任指點して、彼處に鯨が潮を吹きつゝありと云ふ。立ち留り見れば、今や捕鯨船と鯨とは、互ひに秘術を盡して勝負最中だ。鯨は巧みに逃げんとし、船は之を追かけつゝある。

* * *

歸途は恒春種畜場に立ち寄り、帖佐所長から印度種と、臺灣原種との雜種牛の蕃殖の現況など示され、新鮮の牛乳にて渴を醫し、明治七年征臺の際、西鄕都督の本營龜山を過ぎ、車城を經、西鄕都督の名により碑文を誌したる、牡丹社に虐殺せられたる琉球藩民の墓を弔し、更らに四重溪を經て、石門に抵り、當時苦戰の狀を緬想した。

* * *

石門は呼んで字の如く、兩崖靳立、宛も門をなしてゐる。其下は四重溪の碧潭が廻縈してゐる。暮色蒼然、偶ま蕃刀を帶びたる牡蕃の童兒二人、澗を涉りて山中に入るを見る、蓋し蕃社

市尹まで希望を陳し置いた。從來は舟に乘るか、然らざれば壽山の半腹を踰えねばならぬところを、昨年來隧道を通じた爲め、高雄市から此の西仔灣の海水浴場にも、容易に往來が出來、至極好都合にて、夏分には——四月乃至十月——臺中、嘉義邊からも、來遊者少からずと云ふ。左もある可し。但だ鐵道の複線と、自動車道路の修築が、尤も望ましき一である。此れは高雄海水浴場の爲めのみではない。臺灣全土の問題として。

昭和四年二月二十三日午前六時　高雄市吾妻旅館に於て。高雄は今が冬期と申すも、室内八十度にて、外出すれば、流汗淋漓。坐ろに東京の寒氣が慕はしくなつて來た。

三四　高雄より鵞鑾鼻

二月二十三日、今日は彌よ臺灣の最南端に達する日だ。午前八時三分高雄を發して、屏東線に乘り、一路稻田蔗圃を經て、九時三十四分潮州驛に到り、直ちに郡守津下猪太郎君の案内にて、自動車にて鵞鑾鼻燈臺に向ふ。一路平坦、檳榔樹の並樹は既に花を開いてゐる。滿目甘蔗畑にして、何れも臺灣製糖の勢力範圍と聞く。山本二峰君經營の勞想ふ可し。

やがて木麻黄の並樹となり、彼是二十餘里、斷又續。木麻黄は葉は木賊の如き針葉樹にして、其の成長尤も速かに、且つ鹽風に耐ふると云ふ。我等は右に海岸に沿ひ、左に山を望みつゝ行く。朱一貴の亂に、此地の廣東人等が防戰したるを、清帝が褒賞したるを表彰する褒忠門を過ぎ。乃木將軍が明治二十八年十月十一日に上陸したる、枋寮の記念碑を過ぎ、十一時頃南勢湖の警察派出所に至れば、街道に沿ひ、小亭を設け、花木清雅、恰も一個の花園の趣あり。小亭は街道を隔てゝ、直ちに海岸に接す。滄海渺漫一望際なし。我等は亭側のタンクから水を汲み、顏を洗ひ、辨當を使うた。山口警部、田中巡査夫婦、迎接尤も到れり。田中巡査夫婦は、何れも熊本縣八代郡の生にて、花園の主である。山口警部は生蕃語を善くし、蕃人來襲の際に於て、九死一生を得たる老功者である。折節田中巡査が、今日釣れたとて、新鮮の刺身を饗したるを、何れも快喫した。而して更らに木瓜が盤に上つた。予は二個までも喫した。御禮には明日歸途に、何か書くからとて、墨を摺り置く可く申し殘した。

恆春郡境にて、津下郡守と分れ、不賀警部出で迎へ、同君の案内にて、一路恆春に到り、此處にて西村郡守其他に迎へられ、更らに大板埒に至れば、今朝二頭の鯨が取れたとて、猶も料理最中であつた。松井主任の所説によれば、昨日も二頭取れたと云ふ。

* * *

此れから墾丁寮に於ける先住民族の遺蹟を見た。磨製石斧、打製石斧、土器の破片、及び種々の貝類を採拾した。場所は道傍の畑にて採集には何の苦もないが、餘りの熱さにて、大抵にして切り上げ、約二十七里を、一氣に自動車にて快駛し、日本帝國の最南端鵞鑾鼻の燈臺に着きたるは、午後二時半前後であつた。

三五　四重溪

鵞鑾鼻の燈臺では中村所長から、其の尤も誇りとする木瓜を饗せられた。同行の須佐美君が、高雄から携へ來れる西瓜をも喫した。汗を拭ふ間もなく燈臺の最上層に登り、展望した。天晴れ氣淸く、眼前には捕鯨船の徂徠する以外、唯だ漂渺の際、紅頭嶼を認むるのみ。

此れから無線電信所に至れば、同郷人長谷川局長途中まで出迎へ、同君の案内にて、高原を縱横に馳せ廻り、臺灣の西海岸と、東海岸とを、一時に双眸の中に收めた。歸途燈臺に至れば、中村主任指點して、彼處に鯨が潮を吹きつゝありと云ふ。立ち留り見れば、今や捕鯨船と鯨とは、互ひに秘術を盡して勝負最中だ。鯨は巧みに遁れんとし、船は之を追かけつゝある。

* * *

歸途は恆春種畜場に立ち寄り、帖佐所長から印度種と、臺灣原種との雜種牛の蕃殖の現況など示され、新鮮の牛乳にて渴を醫し、明治七年征臺の際、西郷都督の本營龜山を過ぎ、車城を經、西郷都督の名により碑文を誌したる、牡蕃に虐殺せられたる琉球藩民の墓を弔し、更らに四重溪を經て、石門に抵り、當時苦戰の狀を緬想した。

* * *

石門は呼んで字の如く、兩崖峙立、宛も門をなしてゐる。其下は四重溪の碧潭が廻縈してゐる。暮色蒼然、偶ま蕃刀を帶びたる牡蕃の童兒二人、澗を涉りて山中に入るを見る、蓋し蕃社

に還るものであらう。所謂牡丹社は、此れから三里の山奥と云ふ。

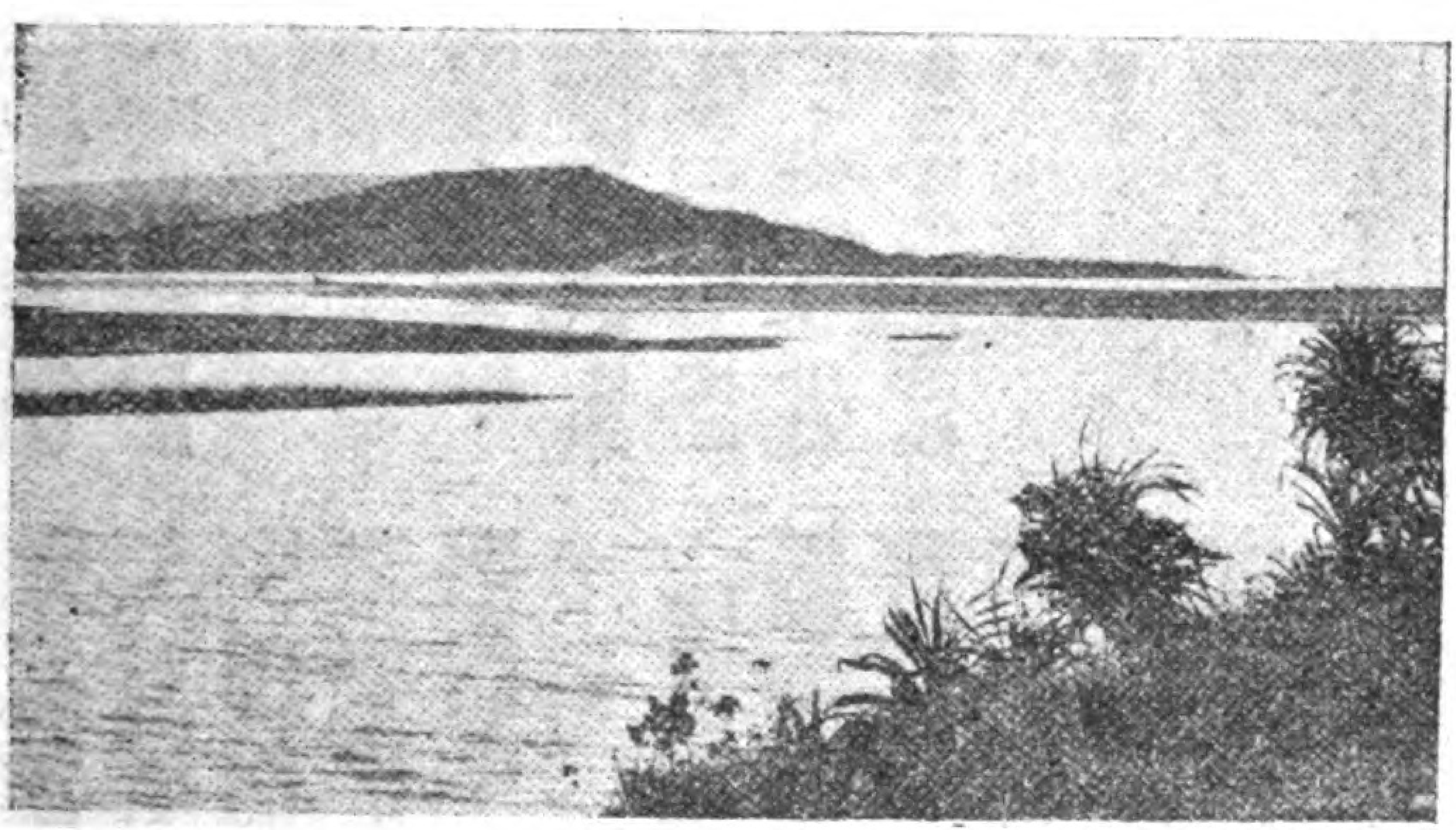
＊　＊　＊　＊

四重溪に至れば、正しく午後六時、取り敢へず溫泉に一浴した。當夜は舊曆十四夜にて、明月皎々碧天に懸り、蛙鳴、蟲聲四壁に滿ち、何とも名狀し難き快味を覺えた。

一碧高天大月明。蛙聲閣閣雜二蟲聲一。恒春二月輕衫節。客倚二篠牀一詩未レ成。

＊　＊　＊　＊

溫泉は無色透明にて、眞に骨までも洗ひ清むる心地がした。西村郡守の來り携へたる鴨やら、前に大坂埒にて見たる鯨の雜物や、其肉の刺身や、又た宿の主人が前溪に釣りたる鮠の天プラやら、種々の珍味が盤上に列せられた。而して主人瀧津君亦た熊本縣玉名郡の人、夜は郡守とは郡政を語り、主人とは釣を語つた。主人は附近に於ける川釣り撰手である。



恒春郡龜山　西鄕都督の上陸本營地

昭和四年二月二十四日午前六時半　四重溪溫泉に於て。

三六　北上の途に就く

二月二十四日、本日は愈よ踵を廻らして北歸する日だ。臺灣漫遊も漸く其の峠を越した。四重溪の一夜は、實に靜なる一夜であつた。起き出づれば、夜來の大月は、尙ほ皎々として、一天水の如し。

＊　＊　＊　＊

西村恒春郡守とは、郡界にて別れ南勢湖の駐在所に至れば、津下潮州郡守は待つてゐる。前日の約束通り、田中巡査の爲めに、扁柏の板に、『潮來天地青』の大字を書す。此句は吾ながら場所柄に相應すると信ずる。若し亭號を撰まば、潮青亭と稱す可し。警吏派出所に潮青亭も亦た妙ならずや。

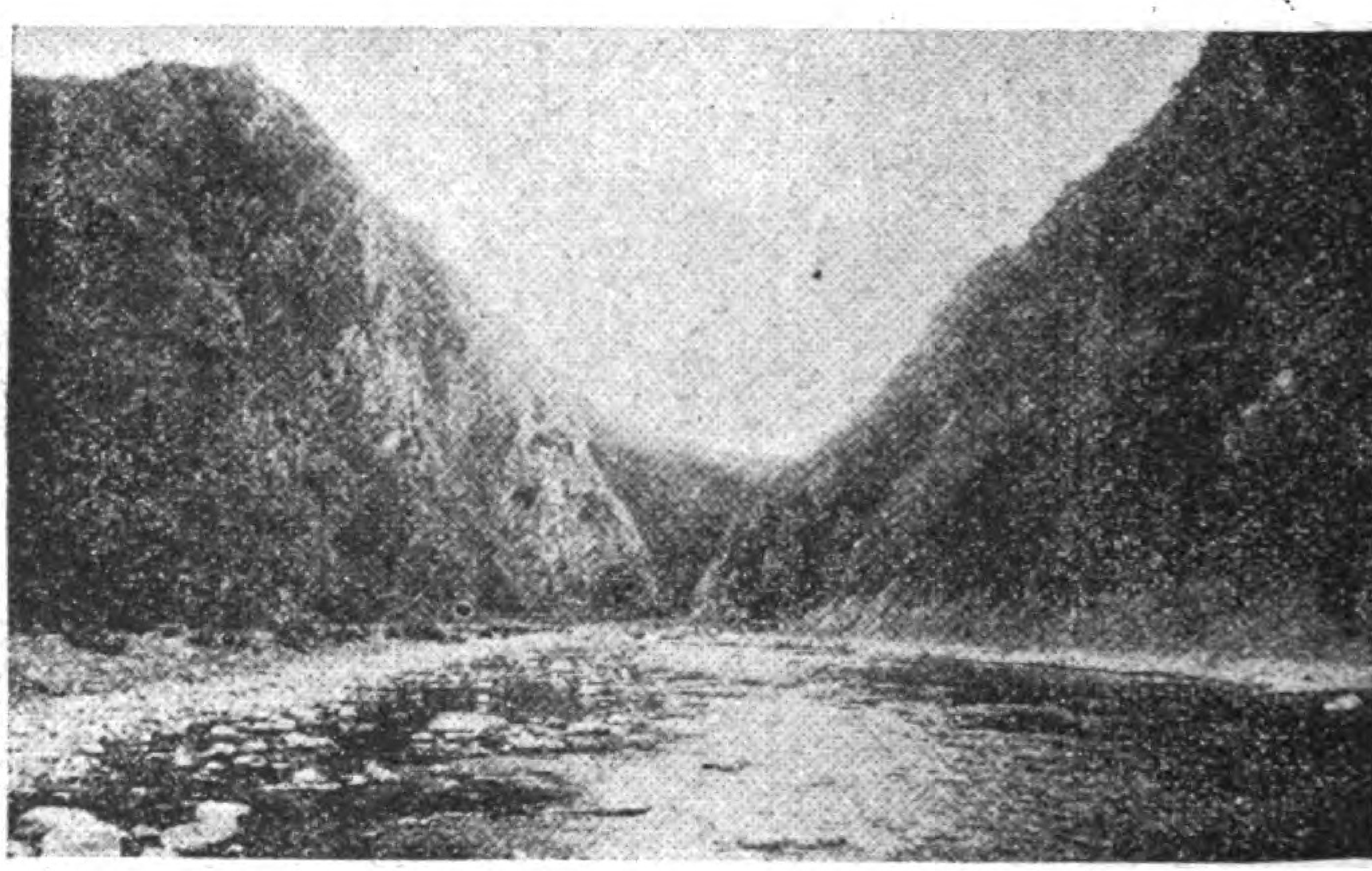
忙しく西瓜と木瓜とを喫し、更に自動車を驅る。

色同牛酪蘋尤滋。形似二甜瓜一香更奇。
艶說茘枝三百顆。坡仙此味不二曾知一。

此れは木瓜を詠じたるもの。東坡先生が『日啖茘枝三百顆。不レ辭長作嶺南人』を揶揄したるもの。

＊　＊　＊　＊

潮州驛には豫定より十分早く着した。津下郡守相送りて西勢驛に至る。屛東驛に着すれば、武田郡守、渡邊街長、平山臺糖取締役、村田靑菓會社々長、及び同縣の諸氏出迎られ、直ちに大觀亭に赴き、午餐の馳走を受く。時計を眺めつつ、ナイフとフォークを使用す。渡邊街長の挨拶に、予答へた。渡邊君は『將來の日本』から、『昭和一新論』『中庸の道』まで、通讀したる一人である。座中特に此地名物の胡蝶蘭を飾り附けられた。



四重溪石門　明治七年西鄉都督の苦戰せし處

＊　＊　＊　＊

卓上の菓子皿に、手を着くる隙なく、匆々諸君に擁せられ、公園を貫き、胡蝶蘭を賞し、屛東〔阿緱〕神社を參拜し、村田君の案內にて、林綿順氏の芭蕉園に赴き、バナナの發生より成熟までの現狀を見、轉じて臺灣製糖會社に赴き、先づ瑞竹の叢を拜觀す。此れは先年今上天皇の攝政王殿下として、御渡臺の砌り、便殿に供す可く、蔴竹の柱を、臺中より取り寄せたる、其の枯竹の節から芽を生じ、それを移植して此に至りたるもの。而して其中の一株は花を開らき實を生じ、其の實地に墜ちて、更らに幾株の新苗を生じ、それを更らに移植して、別に一つ竹林をなしてゐる。尙ほ台臨記念館を拜見し、此れより工場を一巡す。工場整頓、規模宏大、前社長山本三峰君の勞想ふ可し。乃ち瑞竹拜見の所感一片を、

二峰君に電致し、停車場に至れば、汽車は正さに發せんとしつつある。我等は倉皇橋を上下したが、一行の若者達は、線路を横ぎりて、漸く汽車に飛び乘つた。此れが短かき時間に、多くを視察せんとしたる報いである。

三七　屏東と鳳山

屏東は砂糖、米の本場である。芭實之に次ぐ。附近に四十萬坪の飛行場を有する飛行聯隊がある。一切の物質は汽車にて高雄に輸送してゐる。されど自動車路が未だ開通せざるは、如何にも殘念だ。

＊　＊　＊

此れから日本第一の長橋と稱する五千〇〇七呎の鐵橋を渡り、鳳山驛に着すれば、細井郡守、橋本鳳梨會社取締役其他に迎へられ、直ちに曹公祠前に至つた。此れは當地方の一萬數千甲に、灌漑の用水渠を開鑿したる鳳山知縣の曹瑾を祠りたるもの。鳳山は臺南と共に、南部臺灣の古都である。其の市街なども、殆んど從前の支那街たる面影が存してゐる。南臺一帶の本島人が、結婚用具などは、概して此處にて其用を辨ずと云ふ。左もありなん。城隍廟などもあり、群集雜沓、支那流の人形芝居などもあつた。

＊　＊　＊

橋本取締役に案内せられ、鳳梨鑵詰會社に至り、其の作業と、鳳梨畑とを見、鳳梨の馳走になり、無線電信所の長柱を眺め、自動車にて一氣に高雄に向ふ。

＊　＊　＊

道は所謂縱貫道路にして、廣けれども、破損の場所少からず。路塵濛々、咫尺辨し難し。午後五時前高雄に著し、一浴、一假睡、やがて熊本縣人の歡迎會に、



屏東に於ける今上天皇の御便殿の竹片より新芽を生じ
遂に竹林を成すに至りたる瑞竹殿

西仔灣海水浴場に向ふ。場所は去る二十二日の官民聯合歡迎會場である。然も來會者は寧ろ多かつた。中には縣人ならざるも、緣故者として加入せられたる諸君もあつたと云ふ。

*　*　*　*

本田女學校長の挨拶に予は答へて、我等熊本縣人は、職業に於て、趣味に於て、凡有る點に於て、各自主持する所あるも、歷史的に見れば、尊皇の精神、忠義の志趣に於ては、其揆を一にしてゐる。乃ち菊池氏以來、加藤淸正に至り、細川家に至り、富田、本木、長岡、其他の諸先生に致り。特に横井小楠の如きは、世間から種々の誤解を受け、その爲めに慘禍に罹りたるも、然も其の尊皇愛國の精神は、今上天皇即位の御大典に際して、識認せられ、正三位に叙せられた。されば吾人も此の熊本の傳統的精神を把持し、擁立し、以て大いに前輩に酬いねばならぬと語つた。

*　*　*　*

此の會合に於て、最も予等を感謝せしめたのは、其の献立が悉く熊本流義であつたことだ。何から何まで一切の熊本式の料理にて、熊本に還りても、とても斯る馳走は六ケ敷と思ふ程であつた。諸君の好意、實に感謝す可し。

昭和四年二月二十五日午前七時　高雄吾妻旅館に於て。

三八　高雄より鹿港

二月二十五日、早起餘儀なく塗鴉數葉、午前九時十分急行車にて高雄を發し、北歸の途に上る。太田知事、齋藤市尹、同縣の原田、白石其他の諸氏及び夫人達相送る。此日は天候聊か變態を示す。されど車中は蒸し熱く、煽風器は頻りに廻轉しつゝあり。岡山驛にて須佐美君と相別る。君は豫て書面のみにての知友であつたが、這回は予等の爲めに、周旋尤も勗めたる一人である。

*　*　*　*

車中にては今朝落手したる『改造』四月號の『蘇峰自叙傳』を校正した。車中動搖、端なく山陽が輿中に於て、詩稿刪定の事を聯想す。

*　*　*　*

臺南、嘉義にて、それぞれ停車場まで出掛けられたる諸君に別れ、午後一時十四分、員林驛にて、桑原員林郡守、及び夫人、今井彰化郡守、臺中の松岡君及び同縣の諸氏に出迎られ、

直ちに郡守の官舎に入り、頃ろ阿里山の奥から捕へたるミカド雉子を見、其の愛培したる蘭科諸植物を見る。夫人は故土井香國翁の姪にして、細川劉翁の女、劉翁は新聞記者としては予の先輩だ。十五六歳の時、屢ば翁の文を『東京日々』紙上に見て啓發したることを記憶す。曾て臺南に於ける宴會の席上、翁の列席したるを知らず、遂ひに膝を接して往事を談ずるの機を逸し、深く憾とした。乃ち夫人に託して、存問の意を通じ置いた。

＊　＊　＊　＊

斯くて改良の豚舎及び芭蕉園を見る。豚は純バークシャ種にして、其他食用兎、皮用兎、及び産卵用の雞舎等を見る。豚の食料には豆粕を與へ、其の排泄物を芭蕉園の肥料となすと云ふ。此れが則ち一擧兩得と云ふ可きものであらう。

＊　＊　＊　＊

員林方面は、尤も集約的農業行はる。寸土尺地も、其の地力を盡してゐる。竹林の中には、芭蕉園あり、芭蕉園の隣には、柑橘園あり。此邊の地價は一反歩六七百圓と云へば、内地に比しても、決して廉價ではあるまい。而して柑橘園からは、一反歩にて、五百圓乃至千圓の收入を得るもの少からずと云へば、農民の富饒なる以て知る可し。

＊　＊　＊　＊

我等は永靖庄の庄長陳慶雲氏の邸に入り、其の北白川宮親王殿下の御宿泊の遺跡を拜觀し、其の模範的柑橘園を見、此より桑原郡守と相別れ、今井彰化郡守の案内にて、鹿港に向うた。

三九　鹿港概觀

此頃より天候彌よ險惡となり、疾風は殆んど自動車を吹き飛ばさんとし、遂ひに雨さへ挾んで至つた。午前中扇風器を假りたる我等は、今や毛布を頭から被りて、寒氣を防がねばならぬ始末。天候の反覆も、人情の反覆以上と云はねばならぬ。

＊　＊　＊　＊

溪口を經て鹿港に着したるは、既に四時頃であつたらう。鹿港は鄭成功の渡臺以前よりの港にして、對岸なる厦門との貿易は、專ら此の港を經由したと云ふ。市街は狹くして、東京の芝日影町程もなく、先づポンペーの故址同樣、一間半位であらう。街路面は煉瓦にて疊み、上には板屋根を葺き、雨中でも日中でも、日よけ雨よけ沒くして、往來が出來るやうになつて

ゐる。

＊　＊　＊　＊

予は鳳山の市街を、最も支那風の舊態を存したるものと觀たが、鹿港に至りて、更らに其の然るものあるを觀た。公會堂の前にて、當地の官民、及び同縣人諸君、別けて臺灣きつての名物男辜顯榮翁、及び其の一族諸君に出迎られ、望樓に上りて、遙く鹿港の港灣を眺めた。從前は千石船が此の附近まで出入したと云ふが、今や碧海變じて沙丘となり、稻田となり、港は一里餘の先きに推し出し、然も漸く若干の戎克の出入するのみにて、一個年の輸出入も極めて僅少と云ふ。

＊　＊　＊　＊

我等は辜顯榮翁の堂々たる邸宅に赴き、特に豫期せざる御馳走を享けた。翁は豫じめ予等の來るを知り、前日臺北より來りて、此處に待ち受けたりとて、其の接待至らざる所なかつた。今井彰化郡守は頻りに其の前途を急ぎ立てたから、我等は殘り多くも箸を措き、翁及び其の一族の方々に別れ、一氣矢の如く彰化に赴き、農業倉庫を見、彰化神社の前に予等を待ち受けたる、同縣人諸君に挨拶し、彰化神社を參拜し、今井郡守と相別れ、臺中の松岡君邸に入つたのは、既に午後六時半に近かつた。

＊　＊　＊　＊

予等は去る十六日松岡君邸を發し南行し、十日目に還り來つた。予等の面目が漸く臺灣色を帶び來つたと、松岡君夫婦から證狀を受取つた。既に辜顯榮翁の許にて、一通りの晩餐は喫したが、更らに松岡君邸に於て、令夫人の手料理にて、第二次の晩餐に有り附いた。

昭和四年二月廿六日午前六時十五分　臺中松岡君邸に於て。

＊　＊　＊　＊

諺に豫言者故郷に尊まれずと云ふ。予は固より豫言者でない。且つ熊本縣人として、熊本縣に何等の功德をも無い。然るに臺灣に於ける同縣の諸君は、知ると知らざるとに論なく、予等の爲めに歡迎會を催ほし、予等の爲めに物を貽り、其の懇款を極む。寔とに恐悚、慚愧の至りである。然も諸君の厚意を無にするも、心なき業なれば、有り難く之を受くることとした。

四〇　重ねて臺中に抵る

二月二十六日、臺中松岡君邸に於ては、夜來談笑興に入つた。松岡君の家と吾家とは、二代の通家だ。而して君と予との間に、共通の一友人がある。其人の消息に接せざる十數年。相

共に舊を語り、悵恨之を久うす。

* * * *

早起直ちに松岡君の爲めに、禁を破りて數紙を書す。墨精毫佳、覺えず數十葉に至る。唯だ發車の時間が、偶然にも後れたる爲め、午前九時二十二分臺中發の急行に間に合うた。我等は來時海岸線を取りたる爲め、去時は山間線を取つた。トンネルの多きは、山間線の缺點の一だ。

* * * *

車行北するに從ひ天氣濛々、宛も內地五月雨の頃に似たり。臺中は臺灣に於ける氣象上の分堺點にて、其の以南と其の以北とは、丸るで別乾坤の趣きがある。

* * * *

午後二時二十四分、臺北停車場に下れば、諸友出で迎へられ、何れも予等の行程の、滯りなく相ひ濟んだるを祝せられた。或る高官は、お祖父さんやお祖母さんを迎ふるつもりで出で來たと申された。而して予等の顏面の著しく臺灣化したるに、何れも驚きつゝあつた。臺灣化とは日にやけたることである。

* * * *

到著後は客を謝して、東京に於ける文債を片附けた。債務の中にても、文債、書債は、旅行の興味を殺ぐ大方ならず。されど既に債となれば、之を了せざれば、更らにより多くの苦痛を感ず。

* * * *

斯くて同行者が購ひ來れる馬場恒吾君の『德富蘇峰論』を一讀した。實は今少しく手緊しく切り込まるると覺悟してゐたが、餘りに寬裕なる筆鋒にて、却て痛み入つた。惟ふに馬場君も餘程斟酌せられたものであらう。併し精讀者は、之を見て如何に馬場君が、予の長短得失に就て、其の所見を語つてゐるかを察するであらう。馬場君は如何なる場合でも、曲筆の出來る人ではない。但だ何人に對しても、何事に就ても、善意に解釋する美質、若しくは美德の持主である。

* * * *

本日から明日は、臺北附近を逍遙するつもりだ。予等は臺灣を去る日の、日一日迫りつゝあるを、名殘り惜しく思ふ。

昭和四年二月二十七日午前六時半　臺北鐵道ホテルの一室に於て。

歌壇近事

——無産派短歌に就て——

松村英一

今、歌壇には二つの流れが明らかに觀取される。一つは『アララギ』に依つて導かれた寫生的な從來の歌風と、一つはそれに反撥されて起つたプロレタリア・イデオロギーの標語の下に結成された新興短歌の一團とである

勿論、プロレタリア・イデオロギーの標語の下に集團をつくつた人人は、數から言へば極めて少數であつて、これを從來の歌風に導かれてゐる者とは到底比較にはならぬのであるが、その時代的であることと、時代の惱みを或る一つの目的意識によつて方向附けられてゐることと等によつて漸く近來問題となりつつあるやうである。

昨年の二月、『短歌雜誌』に發表せられた石榑茂君の『短歌革命の進展』は、その運動の尖端を切つたものであつた。論議の對象が歌壇の主力である『アララギ』であつたこと、『アララギ』の反動化を指摘して、その打倒に目標をおいたことが、稍沈滯に陷つてゐた歌壇に一脈の生氣を注入したやうである。尤もこの石榑君の論文も、そのまゝ黙殺されたならば斯樣な效果は持ち來さなかつたであらうが、齋藤茂吉氏の如き好敵手を得て、幾度か連續して論難し得たが爲に、一般歌壇の注目を惹くに至つたのである。

その論議の勝敗は、經驗に乏しく、殊に體驗に淺い石榑君は老獪な齋藤氏の論鋒に全く射すくめられた形であつた。加ふるに論據に多くの弱所を持つてゐたが爲に、問題は根本から離れ勝で、大部分は枝葉論で終つたが、若く新しき時代の短歌が、如何なる方向を執るものであるかを、たとへ少數でも一部の人々に理解させ、その共鳴を買ひ得たことは、結果から見て確かに期待に背かなかつたやうである。唯私共からいふと、石榑君の如き考へを持つ同志が尠くなかつたであらうに、誰一人敢然として齋藤氏の論難に立ち向ふ者の無かつたことは遺憾と言はざるを得ない。齋藤氏は『アララギ』の代表者であると同時に、新興歌人の人々から言はせれば、舊歌人の代表者でなければならない。從つて同氏を克服し盡さなくては、新興短歌の存在を確立する

譯には行かないのである。然も齋藤氏の言論には幾多の缺陷があつた筈であるが、遂に石榑君一人の戰に終つて、折角の好機會を逃したことは殘念な次第と言はなくてはならない。思ふに新興歌人の力量は、作歌に對する信念の上でも、またその熱情の上でも、同氏等に一籌を輸さなくてはならぬ狀態にあるのであらう。殊に最大の缺陷は、純理で或る點まで人を導いても、その實作が多くの場合これに反する僞價値あるものとなし難いことである。尤もこれらは既に新興歌人の大半の人々はよく認めてゐることで、現在は進展の途上にあるものとして刻苦をつづけてゐるやうであるから、やがてはその言説を裏書きするに足るものを制作される時代が來るであらうことを私共は信じたい。

新興短歌に對して、歌壇の多くの批評は大凡そ非難に傾いてゐるやうである。內容を形式の揚棄といふことをその スローガンに掲げてゐるからである。短歌が短歌として存在するのは、そこに定型があるから、この定型は永久不變のものである。これを變改することは、新しき詩の創造であつて、決して短歌そのものではないといふのである。これに對して石榑君は、定型の變改を行ふのではなく、飽迄も揚棄するのであつて、定型律と對立して發達すべきものであると言つてゐるが、そしてこの言葉は是認してもいいが、そこに實作として示されるものは如何にして見ても定型律に準據したものとは見えないやうである。私共は、定型律に準據する位ならば、從前の歌風に則すべきで、若しそれに不滿がありとすれば、その定型を破壞し、用語を革命して新しき短歌を作ることが自然ではないかと考へるのである。然し、石榑君らから言へば、定型律に準據する所に短歌に對する愛着があるのであつて、全く別のものを創造するといふやうな立場に立つたら、潔く短歌を捨て去るのかも知れない。この矛盾と撞着が石榑君らの新短歌運動に於ける一つの大なる苦痛となつてゐるのではあるまいか。

然し乍ら新興短歌が或る一つの勢力となり行くであらうことは私共にも豫想が出來る。その理由の第一は、時代の苦痛を認識して、被支配者の反抗と鬪爭を極めて赤裸々に表現してゐるからである。勿論、新興短歌と稱してもその包括する所は廣い。さういふ社會思想的の背景を持たず、末梢神經的の感覺歌をも同じ名稱の中に加へてゐるが、これらは區別せられなければならぬものであらう。また社會主義的思想を有つたものでも、甲と乙との藝術に對する態度に異なるものがある。例へば石榑君らの『尖端』一派と、伊澤信平君らの『短歌戰線』とはその主張に尠からず距離があつて必ずしも同一ではない。石榑君らは歌としてのよさは、洗煉されたる用語によつて、その直感が統一されて表現せられなければならぬとして居るのに、伊澤君等は先づ何よりも第一に鬪爭精神の發現が無產者短歌の立場を確保するものであるとして、短歌を手段化せむとするの傾向が見ゆる。從つてこの觀點の相違が、曾ては兩者の間に『新興歌人聯盟』が結成されたにも拘は

らず、忽然として内部から崩壊し去つた一原因となつたのではないかと思ふ。

ただ私共として注意しなければならぬことは、これら諸々の新興短歌が、必ずしも時代流行の風潮に載つて激成されたものでないといふことを認めることである。『黎明』の田邊駿一君は、『藝術と自由』の西村陽吉君を嗤つて、新興短歌の勃興に同君が與り知らぬものの如く否定したが、これなどは新興短歌の歴史過程を顧みぬ所から起つた錯誤であらう。西村君の思想に、それがたとへインテリゲンツイヤの遊戯的なものであつたにせよ、社會主義的傾向のあつたことは決して近頃のことではないのである。成る程西村君は、思想的方面ではこれといふ成果は擧げなかつたらうが、少くとも口語歌といふ一種の武器が新興短歌に無くしてならぬものであることを認めさせた功は沒却出來ないやうに思ふ。現在の新興短歌の製作者は、西村君の如く口語であつて同時に定型を守るといふ側の人ではない。その多くは所謂破調である。然し口語で發想するといふ表現方法は、西村君に依つて力說され、西村君に依つて大成されたと見てもいいのでないか。その恩惠を受け乍ら新興短歌の勃興に與らないといふ批評は、功を人に歸するを惜しむと言はれても爲方があるまい。

私共は新興短歌の勃興と歌壇的進出は、一に時代の然しむる所であらうと思ふのである。『アララギ』によつて風靡した寫生主義は、それを信ずる人にとつては無上の寶典ではあらうが、資本主義制度の下にこの執拗な壓迫から脱出しようと志す者にとつては餘りに無力過ぎるのである。勿論、『アララギ』の人々が說く寫生は、直感の直寫であつて、さういふ人々もまたその表現を寫生に賴るのが最も正しき道とするのであらうが、今やそれは精神の滅びた形骸とのみしか見ないが爲にこれに從はふとはしないのである。殊に新興短歌の重大なる要素として公約されたることは、プロレタリア・イデオロギーをすべてに有つといふことである。これが今までの藝術觀に慊らず、プロレタリアはプロレタリアの藝術觀によつて藝術を製作し鑑賞せねばならぬと言はれるやうになつたのである。この道行は、恐らく一般文壇に無産派の思想が浸潤したのと似てゐやう。歌壇が一般文壇と步調を共にせず、稍おくれて此頃に致つてかういふ現象を呈するやうになつたのは、短歌といふ藝術が極めて制約された形式を有し、傳統的に庇護されるところがあつたからであらう。だが、それも今日では決して安穩ではなくなつた。

さて私共はここで當然の成行として新興短歌の具體的例證を擧げなければならない。如何に外貌を描くとも、例證がこれに伴はなければ何らの意味をなさないからである。然らば作家としてどのやうな人々が數へられるであらうか、試みに言はふなら、『尖端』では石榑茂、前川佐美雄、五島美代子の諸君、『短歌戰線』では伊澤信平、渡邊順三、坪野哲久、淺野純一の諸君、『黎明』では田邊駿一、田邊一子の諸君、『まるめら』では大熊信行、浦野敬、島貫廣吉の諸君、そしてこの他

に猶いくつかの團體があり、新興短歌の勃興運動に參加してその力を致してゐる人々があるやうである。西村陽吉氏の『藝術と自由』の人々、石原純氏の『三角洲』の人々も、その思想的傾向に著しいものを見ないまでも、この機運を釀成する上に、何か役立てる役目を盡して來たことは爭へぬ事實であらう。然してこれらの人々の作品に對する歌壇批評は、思想的に背馳してゐるものは別として、多少の理解を持ち、多少の同情を持つ者にしても多くの場合非難が先に立つやうである。無產派イデオロギーを標榜するものにまだ十分に清算しつくされぬ資本主義的殘滓が見られるといふのであるが、もつと根本的の問題は詩にまで高揚されてゐないといふ致命的批評の行はれてゐることである。この批評を代表するものは、太田水穗氏の『潮音』四月號に現はれた「歌壇時事」の論文中に極めて顯著に示されてゐる。この一文は多分日本新聞に寄稿されたものを轉載されたものであらうが、今それを參考の爲に引くならば、

「新興短歌といふ言葉がこのごろちよい／＼聞えるので、さういふ人達の標榜する作品をしらべて見たのだが、一向短歌らしいものになつてゐない。短句また短文とも云ふべきもので、主觀を貫く感動が無い。ちよつと見ると感動らしく見えるのであるが、感動では無く、陰慘な言葉を綴つたノートブツク風な語錄である。それが直觀的な語錄ででもあればまた相應な面白味が無いではないが、何といふか、先づ以て思案の結果になつた、たど／＼しい語錄の一綴であるのが眼を惹く。これを强ひて短歌の標榜の中に入れようとするのが解釋に苦しむ。歌といふやうな主觀念などは振り落して生活章とか無產派語錄とか勇敢に進出したらばよいと思ふのであるが、そこにはなほ一脈の未練をのこしてゐるところに、この新興短歌の未來の弱點を露顯してゐる。

となして、近世の俳句が短歌から分離し、獨立した藝術形態を作つた點に說き及ぼして「形や名目はどうでもいい。實質がよい詩であれば人は翕然としてここに赴くのである。」と明らかに無產派短歌が詩としての味に甚だ遠いものであることを述べてゐる。『潮音』では尙ほこの外に、「短歌合評」の名において、新興短歌や社會主義の歌や宣傳藝術の問題をも社中同人が論じてゐるが、それらを要約すれば、前に揭げた太田水穗氏の言と略同一で若し相違があるとしても僅な小異を認めるに過ぎないのである。事實、

○　五島美代子

誰一人本當の事を教へて吳れない寂しさの中に私は育つた

○　小池龍

、、、を食物にして大きくなつた身代がなんで自慢にならう

○　渡邊順三

俺の青春は過勞と粗食のなかに日の目もあはずしぼんでしまつた

○　伊澤信平

國許に呼び戻されて行く友よつよくかぶりを振つて鬪爭の中に立ち歸れ

○中止々々を連發する官憲に俺達は、、、、、、する　田邊駿一

○今日の治療代と思つて居る一圓を貸して吳れといふから恨みたくなる　田邊一子

○それならあなたが生れた時に僕はたしかに十二の少年だつた　大熊信行

これらは一例であるが、これを詩として讀むに堪へる作品となし得られるであらうか。取材の上に相違があつても、彼の死んだ若山牧水君が曾つての日の名言であつた『さうですか歌』の範圍を出でないものではないか。文章の一節、語錄の斷片と見られることも止むを得ない。殊に私共から訝しく感じられることはこの中の實に甘つたるいセンチメンタルなものの混入である。斯様なるものは、恐らく既成作家と雖も既に遠い昔に振ひ落してしまつたものであるに拘はらず、これを新興短歌壇の人々の間に見出さうとは意外の感じがしないでもない。斯かる缺陷は夙に作者自身も氣附く所で、聰明なる或る一部の人は、事件報告的短歌、短歌様式を持つた韻文を排し、どこまでもプロレタリア意識の下に、實感味の濃い、感動の直寫された、讀者の心にヿ働きかける力の籠つたものの創作にその努力が向けられなければならぬとしてゐる。『短歌雜誌』四月號で花岡謙二君が「作歌指導者出でよ」と叫んでゐるのも、『黎明』四月號の所説も、或はまた『まるめら』の大熊信行君の「自由律論者への對立」中に於ける言説も、この

懊みを懊みとして明らかに認めてゐる所から生じたものであらう。私共は無產派短歌の動向が今後如何なる方面に動いて行くか指示し得たいが、作者の體驗の深まるにつれて更に飛躍をなすものであらうといふことだけは信じられる。



自傳的に見た日本社會主義運動史（五）

堺利彦

目次

一　××××と中江兆民

我々は既に社會民主黨創立者六人の人物を叙した。次には同黨禁止以後の事實に入るべき順序である。然し猶すこしく、こゝで、××と兆民との關係を語りたい。それには××自身の著『兆民先生』の梗概を作つて見るが一ばん善い。

この書『兆民先生』は、××が『年初めて十八、贄を先生の門に執』り、『教養撫育の恩深く心肝に銘』した所の其の師に對し、『追慕の情を遣る』ため、師の死後約半年の後、一夕、『終宵寢ねず』に書きあげた小著述である。故にこの書は固より、××が『無限の悲み』『無窮の怨み』を以て、彼の『見たる兆民先生』彼の『追慕する兆民先生』を『描き寫』したのであるが、それが同時に亦、甚だ善く彼自身をも描き寫して居るのである。

二　兆民の『少壯時代』

『兆民先生は弘化四年高知城下に生れ』た。『幼名は篤、長じて篤介と改』めた。『年十三にして』父を失ひ、『家甚だ貧、而も母堂貞烈にして氣膽あり。』『先生幼にして穎悟』『母堂屢々』人に『語つて曰く、篤介少時溫順篤厚にして女兒の如く、深く讀書を好みて郷黨の賞讃する所となりき。而して今や即ち酒を被つて放縱至らざる無し、……余の痛心に堪へざる所也。』『然れども先生』は『其生涯を通じて『母堂に事へて

至孝』であつた。

これだけの所、兆民と××と、性質境遇、殆んど精神に同一であつた。只だ酒と放縦との一點に於いては、××　遠く其の師に及ばなかつた。

『先生十七八歳始めて洋學に志し、……和蘭の書を學び、慶應元年十九歳にして高知藩留學生となりて長崎に遊び、……始めて佛蘭西學を修め』『坂本龍馬を崇拜し』た。『居ること二歳』『學大に進』み、後藤象二郎に知られて『江戸に遊』び、『佛蘭西學の泰斗』村上英俊の塾に學び、『王政維新となるや』更に箕作麟祥の塾に入り、後ち大久保、後藤、板垣等の助を得て『司法省出仕』となり、『佛蘭西留學を命ぜられた。』『時に明治四年、先生歳廿五。』

兆民は佛國に於いて『先づ小學校に入り、』『次いで『里昂の某状師に就て學』び、『司法省の派遣……に拘はらず、專ら哲學、史學、文學を研鑽し』『孟子、文章軌範、外史の諸書を佛譯し、』『『チエール、ガンベツタの諸英雄』の行動に『感得する所あり』、『西園寺公望、光妙寺三郎等と『交遊』した。『先生、明治七年……歸朝し、元老院書記官とな』つたが、『元老院幹事陸奥宗光君と善からずして罷め、』『次で外國語學校長とな』つたが、『又幾くならずして罷』めた。『是より先、先生自ら佛學塾を番町に起し』た。

三　『、、の鼓吹者』

『先生の佛國に在るや、深く民主共和の主義を崇奉し、、、、、、、、、の如く、、、、、、、、、の如く』『民權は他人の爲に賜與せらるべき者に非ず、自ら進んで之を恢復すべきのみ、』『古今東西、一たび、、、、、して、能く眞個の民權を確保し得たる者ある乎』と論じ、かくて『先生は、、、、の鼓吹者とな』つた。

『而して先生は……更に、、の、、、、、、たらんとし』たが、『屢々困頓し、蹉跎し、滿腔の不平遣るに所なく、乃ち酒を被り世を罵つて、放縦度なきに至』つた。

『先生壯時より勝海舟翁の知を得て、深く其人物に推服』して居た。『先生又海舟翁の談に依て西郷南洲翁の風采を想望し、欽仰措か』ざるものがあつた。

『明治十四年、自由黨創立の前後より、民權自由の思想は燎原の火の如く、』『河野廣中等の福島事件』『赤井景韶等の高田事件』『富安正安等の加波山事件』『村松愛藏等の名古屋事件』『大井憲太郎等の大阪事件』『其他飯田事件』『靜岡事件』『高崎事件』などの『爆發を見るに至』つたが、それには『先生の手中に運らすの一管、與かつて大に力』があつた。

『而して風雲は漸く急』に、『明治二十年井上伯の條約改正失敗するや、全國の志士……、を抱いて輦轂の下に集る者數百人、政府狼狽して急に保安條例を發布し、疑似の者を捕へて東京三里以外に放つ。而して先生亦逐客となる。』『時に十二月二十五日、朔風凜冽の夕なりき。』

先生歳四十一。』この時、××は（前記の通り）『林有造君の書生』であつたが、彼も亦た『保安條例により退去を命せら』れ、『東海道を徒歩西下』したのであつた。

『翌明治廿一年、先生……東雲新聞を大阪に發行し、自ら之に主筆たり。』『先生神韻の文、天馬の空を行くが如く、名聲忽ち關西に籍甚たり。』××が『先生の門に入れるは實に此時に在り。』前記の『年譜』には『中江篤介先生の學僕に住込めり』とある。

『先生、當時猶ほ甚だ貧』『新聞社より得る所、僅かに五十餘金のみ』『然れども此時や、先生の意氣と文章と正に沖天の勢あり』『日に酣醉淋漓として卓落豪放の態を極め』『其長髮鬖々として、頭に眞紅の土耳其帽を戴き、身に東雲新聞の印半纏を着て出入せしも此時』であつた。

『明治廿二年春、憲法發布せらるゝや、全國の民歡呼沸くが如し。先生嘆じて曰く、吾人賜與せらるゝの、、、……玉耶將た瓦耶、未だ其實を見るに及ばずして、先づ其名に醉ふ、我國民の愚にして狂なる、何ぞ如此くなるやと。』

『先生其著、三醉人經綸問答に於て諷して曰く、世の所謂民權なる者は自ら二種有り、英佛の民權は恢復的の民權なり、……世又一種、、的の民權と稱す可き者有り……と。然り先生は決して、、的民權を以て滿足する者にあらざりし也。』

『嚮に保安條例に拘して退去の命を受くる者、憲法發布に際して皆な解除せられ、政治運動の中心又東京に移れり。時に後藤象二郎君、大同團結を唱道して政界に横行す。』『而して其雜誌『政論』を日刊となすや、先生を聘して主筆たらしむ。先生乃ち……東京に還る。』××も亦それに從つた。

『幾くもなく後藤君、其友を賣つて入閣し、大同團結』も『解體し』た。『先生同志と共に自由黨を再興し、……專ら民黨の糾合を圖り、縱横の策、最も力む。而して議會開設に及んで、大阪より選まれて議員とな』つた。

四　議員と商人

『先生……謂らく、議會劈頭第一の事業は……專制政府の顚覆に在らざる可からず』『吾人は直ちに憲法の改正を請はざる可らず』と。『是れ實に先生の大抱負』であつた。

『然れども當時又一人の先生に聽く者』がなかつた。『而して先生猶意を政界に絕たず、日々握飯を竹皮に包みて議院に出』で『政府在野黨の衝突するや、以爲らく藩閥を殪す此の一擧に在りと。』『然るに『民黨の豬突蠻進して藩閥の壘に肉薄するの時』『自由黨中の所謂土佐派なるもの欵を敵に通じて……九仞の功を一簣に缺き、民黨爲に潰走し、藩閥政府萬歲を謳はんとは。』

『先生此時、眦爲に裂』け、『直ちに「無血虫」なる一文を草して……反覆者を罵倒し、次いで辭表屆を議長……に呈した』が、『其文に

曰く、アルコール中毒の爲め、評決の數に加はり兼ね候に付、辭職仕候と』

『先生議員を能むる後、…自由、改進兩派の聯合を主張し』竟に大隈板垣兩君をして一堂に會見せしむるを得た。』『此聯合や蓋し先生が政治運動に於ける最初の成功にして、又最後の成功』であつた。即ち民黨の聯合は只、『第二議會の解散』と『所謂二十五年の選擧干渉』とを招き得たるに過ぎなかつた。

（先生は少年時代に於いて、（前記の如く）土佐の先輩、坂本龍馬を崇拜し、坂本が薩長二藩の連鎖となつて幕府顚覆を計つた事跡に學び、後に自ら自由改進二黨の聯合を計つたのであつた。然るに××は又窃かに先生の志を繼いで、萬朝報時代に於いて、『奇計を以て犬養と尾崎に說』き、野黨の聯合を計つたりした事、本篇の（一）に記した通りである。）

『先生…家益々貧にして逋債益々多し。（明治）廿五年、小樽の有志、北門新報を創し、先生を聘して主筆たらんと乞ふ。先生…遂に政界と文壇とを退き、家を札幌に賃して紙店を開き、次で北海山林組なる看板を揭げ、貨殖に汲々たるに至れり。』『先生は實に、『方今の世、阿堵物なくして能く何事を爲し得んや』と考へたのであつた。

『廿六年より廿七八年に至る間、…先生、家益々貧に、衣服典し盡し、藏書賣り盡して、晏如たり。』『會て（××に向つて）笑つて曰く、…汝等姑らく待て、予の陶朱翁たる近きに在り、予にして十餘萬金を得ば、新聞起すべし、政界に縱橫すべし、汝を携へて歐米に遊ぶべし、而して大著作を爲すべしと。』『而して先生の一たび牙籌を取るや、酒を廢し、行を愼み、殆ど別人の如し。後ち死に至るまで、曾て一杯を口にせざりき。』

『先生の事業は、日淸戰役の後、會社熱勃興の時に方り、甲武鐵道の爲に少しく利するありしのみ。其他河越鐵道と云ひ、常野鐵道と云ひ、京都パノラマと云ひ、遊廓設置と云ひ、中央淸潔會社と云ひ、某々山林拂下と云ひ、皆な損失に了らざるは無』かつた。

『先生の曾て群馬に娼樓を設けんとするや』××はそれが『先生の德を累』すべきかを論じたが、先生は『現下の社會に公娼の必要なる所以を論ずる滔々數千言』の後、『公娼旣に必要なり、之を營む、何の不可かあらん』『予は旣に商人たり、商人の金儲けは…主義理想に累するなし』と喝破した。

『如此にして先生』は『殆んど倒行逆施に甘んぜんとするの意』あるに至つた。そして自由黨が『提携に托して』伊藤內閣の『奴僕たらんとするの狀』を示した時、『先生憤慨措く能はず、再び起て政界搶攘の事に任ぜんとし、…國民黨を組織し、在野黨聯合の急を說』いたが、『數月ならずして潰散』した。『時に明治三十一年』であつた。

『爾來、先生貧益々甚だし。』『明治三十三年秋、每夕新聞の乞に應じて、其主筆となり、僅に米鹽を支ふ。』『次いで國民同盟會成るや、進んで之に投じ、奔走頗る力』めた。當時、××は先生に向ひ、『國民同盟

會は……帝國主義の團體で』あるのに、『先生の之に與する』は『自由平等の大義に戻るなき乎』と問うたが、先生は笑つてそれを斥けた。『蓋し先生、久しく髀肉の生ずるに堪へず、直情一往、又成敗を論ずるに遑』が無かつたのである。『越えて數月、先生……病を得て卒に起たず。』

五 學問、文章、著作

『先生の學、和漢洋を該ね、諸子百家窺はざるなく。』『佛典語録の類に』於いても『得る所あり、』『漢文に於て』は殊に『深く自ら任ずる所あり、』『漢文の簡潔にして氣力ある、其妙世界に冠絶す』と爲し、『史記』の『雄渾蒼勁、眞に天下の至文也』と嘆賞した。それらの點に於いて××も亦た實に善く其の師を學んで居た。然し先生は自ら佛語に精通して居たに係はらず、××には漢學と共に英語を學ばしめた。そして曰く『汝先づ英書を講じ、英文を作るを習へ、庶幾くば以て世界の人たるを得ん』と。(××の文は兆民の文に髣髴して居た。然し兆民は××に教へて云つた。『文士の苦心は實に前人以外に新機軸を出す處に存す。汝の文、予の文を學び、予の文に似たるの間は、遂に予以上に出る能はざるを知らざる可らず』と。そして××はそれに對し、『嗚呼何ぞ其懇篤なるや』と感激して居る。)

『先生の讀書を好む、渴するが如し。』『而も其文を作るや、興來らざれば筆を下すこと少し。』『予は筆を援るよりも寧ろ鍬を手にすることを好むと。』『先生の翰を揮ふや飛ぶが如く、多くは改竄する所なし。然れども……咄嗟の作と雖も、曾て文字の穩貼を失せる無し。但だ譯書及び碑銘……に至りては、數回の删正を經ることあり。』『先生、文を草するは大抵朝餐後一二時の間に於てし、其間は運動、奔走、接客、飲酒に消し、毎夜二時頃より夢醒めて讀書し、曉に達するを例と』した。

先生の著譯書には、維氏美學、ルソー民約、理學沿革史、理學鉤玄、革命前佛蘭西二世紀事、三醉人經綸問答、平民の目ざまし、一年有半、續一年有半などがある。有名なる『民約』は知らない者がない。『理學』とは哲學の事である。『二世紀事』は『先生得意の筆を以て得意の事を述』べたるもの、『蒼勁跌宕、直ちに史記の壘を摩せんと』するの概がある。『三醉人』は『先生自ら許して』『一時遊戲の作』と云つて居るが、『其縱橫に揮灑し去つて、多く意を經ざるの所、却つて先生の天才を發露し得て餘有り、』『若し夫れ寸鐵殺人の警句、冷罵入骨の妙法』に至つては、『殆ど人目を眩せしむるものがある。『目ざまし』は『平易の文字を以て自由民權を鼓吹』したもので、『その感化する所の大なる、遙かに他の諸書に勝』つて居た。

『一年有半』は先生が喉頭癌に罹り、先生が自ら言ふ如く、餘命『一年半てふ死刑の宣告を受けて以來、』『大いにその『壽命の豐年』を『利用』した隨筆であり、感想錄である。この書が萬朝報の評した如く、『筆路は頗る多岐に渉つて、山あり、河あり、湖あり、大洋あり、花

島あり人物ありで、多恨多情、洵に無限の趣が具はつて』居り、又『東京朝日』が評した如く、『政治論あり、文學談あり、戯曲評あり、人物評あり、……雜々、粒々、恰も居士口頭の怒罵を聽くに似』たものがあり、當時『頓に洛陽の紙價を高からしめた』事は、猶ほ世人の記憶に存して居るであらう。この書の『引』に××は次の如く記して居る。『兆民先生病で泉州堺に在り、余を召して至らしむ、八月四日往て候す、先生數帖の草稿を蒲團の下に取り、莞爾として余に謂て曰く、我病勢日に惡しゝ、意ふに餘命幾何もなけん、若し今にして一言の後人に告ぐる有らずんば、豈に讀書の人たるに在らん哉、故に頃來筆を援て此稿を成せり、我瞑目の後、汝宜しく校訂して以て公にす可しと。……』然し××は『直ちに之を刻するを許せ』と請ひ、『先生哂うて甚だ拒まず』『惟汝善く之を圖れ』とあつたので、××は『同門の先輩小山久之助君に諮』つた後、博文館からそれを發行したのであつた。この書の『第四版小引』には××が次の如く記して居る。『九月七日兆民先生堺を發し、三泊して京に歸る、予匆惶新橋に迎へ謁す、先生病睡頗る脹起し、聲音全く嗄れて又言ふ能はず、』『幾もなくして本書第二版、第三版を重ぬるを告げ、今や第四版の成るに遭ふ、江湖の愛讀如此きは近來の罕なる所……』

『續一年有半』『一名無神無靈魂』は『兆民先生が、其哲理的所見の一斑を說示せられたもので』××はそれに次の如く『引』して居る。『先生の哲學は、實に古今東西の學說以外、宗教以外に一步を拔て、別にナカエニズムとも名くべき一家のシステムを持して居られ、』『之を詳審に論述して一大著作を成さうといふのが、哲學者としての先生が、多年の志願であつ』て、『暇あらば』その事を××『等に語られたことがあつた。』先生は『九月十日に漸く歸京、』『談話は總て筆談といふ有樣で、』それでも『二ヶ月餘りは大丈夫』と云ふので、『夫ならと』『書き初められたのが、此書であ』り、『切開した氣管の呼吸は奄々として、四肢五體は鶴の如く瘦て居るが、一たび筆を取れば一瀉千里の勢ひで、』『大抵は半紙に書』きつゝ、『日に一時間か二時間か』『九月十三日から初めて僅かに十日ばかりで、二十二三日には早や完結を告げ、』『書けば限りがない。……是れ位にして置から、と言つて』××『に渡された』のが、この書の原稿であつて、『先生の哲學の神髓骨子は、正に此書に依て傳へらるゝであらう。』この書の『結論』には、著者自ら記して曰く、『他日幸に其人を得て此間より一のナカエニズムを組織するとが有るならば、著者に取つて本懷の至りで有る。』

『先生は……從來作る所、大抵古人の糟粕に過ぎずして、曾て獨創有るな』きを『深く耻』ぢ、『不朽』なるべき『哲學の組織』を『他日に期』したが、それも『僅かに無神無靈魂の一篇に其鱗片を現はせるのみ』であつた。

六　人物、末期

『先生は實に多感多恨の詩人』であつた。『先生は太白に非ずして少陵』

であつた。『本多佐渡に非ずして、眞田幸村』であつた

『予（××）嘗て曰く、佛國革命は千古の偉業也。然れども予は其慘に堪へざる也と。先生曰く、然り予は、、、也。然れども當時予をして路易十六世王の絞頸臺上に登るを見せしめば、予は必ず走つて劍手を撞倒し、王を抱擁して遁れしならんと。……先生の如何に多血多感忍ぶ能はざるの人なりしかを知るに足るべし。』（この一節、特に深甚の意義を覺える。）

『先生……酒間笑つて予（××）に謂て曰く、……處世の祕訣は朦朧たるに在り。汝義理明白に過ぐ、宜しく呑蕩の二字を以て雅號と爲せと。予曰く、生甚だ朦朧を惜む、乞ふ別に選む所あれ。先生益々笑ふて曰く、然らば卽ち××の二字を用ゐよ、是れ正に呑蕩の意と相反す。予壯時此號を用ゆ、今汝に與へんと。予喜んで賜を拜せり。』

『德富蘇峰君、「一年有年」を評するの文に曰く、……著者（先生を謂ふ）は著書よりも品格に於て高く、人物に於て愛好す可きものあり、著者は眞面目の人也、常識の人也、夫として其妻に眞實に、父として其子に慈愛に、友として其交る所に忠なるの人也。……腹黑きが如くにして極めて初心、面皮硬きに似て頗る薄く、自ら溷世の風波に觸るるに堪へざるの身を以て、強て之を凌がんと欲して克はず、爲めに時に酒を假り、時に奇言奇行を藉り、以て其自ら世と容れざるの悶を排せんと試みたるのみ……と。蓋し知言也。』

『故に見よ、先生の晩年』酒を禁じ、行を愼み、一に自然と家庭と道義に向つて樂地を求め、』『其身を持するや、命に安んじ分を樂み、流離殘敗の餘に處して、嘗て天を怨みず、人を尤めず、悠然晏然として榮辱の外に自適し、死生の表に達觀せることを。』

『先生『一年有半』の稿を起すの前、予（××）其自傳を著はさんことを勸む。先生哂つて曰く、我れ一寒儒の生涯、何の事功か傳ふるに足る者有らん哉、且つ夫れ自傳を草する、勢ひ知人故舊の祕密を暴露せざるを得ず。彼のルーソーの如きは忌憚なきの甚しき者、是れ予の忍ぶ能はざる所也と。予其謙遜にして人情に厚きに服し、強て又請はざりき。』

『一年有半』の中、『夫妻相携へて堺濱を逍遙したる一節』は、蘇峰氏が『轉載せずして已む能はざる』所であつた。『余一夕、妻と倶に歩して海汀に到る。偶ゝ天雨を催し、黑雲四方を蔽ひ、……人をして或は意氣壯ならしめ、或は悽然哀を催さしむ、……此夕余笑ふて妻に謂て曰く、卿年已に四十餘、余死したる後ち復た再嫁の望有るに非ず、余と倶に水に投じて直ちに無事の鄕に赴かん乎如何と、兩人哄笑し、途中南瓜一顆と杏果一籠を買ふて寓に歸る、夜正に九時。』

『先生、明治三十四年十二月（十三日午後）を以て小石川……の自邸に歿す。享年五十有五。……天下知ると知らざると、皆な悼惜せざるなし。』『翌十四日午後、親戚……友人……門人……の諸君、先生の遺骸を大學病院に送り解剖に附す、予（××）も亦從ふて往く。』『此夕、遺骸を棺中に斂む。諸君其頭を抱き、予其兩脚を拱す。[illegible]する所の

男女數十人、歔欷の聲、室内に滿つ。予亦た涙滂沱として禁ぜず、起つて暗中に入て慟哭する者之を久しくせり。』

七　兆民から××への書簡

『兆民先生』の第七八章は、××が『先生曾に予に與ふる所』の『書柬』『十餘通を抜き、聊か評註』を加へたもので、正に××の傳記の一部である。

『明治二十八年春、予の廣嶋新聞に職筆するの時に寄せらるゝ者』には、『折角御出込に相成候上は今暫く御滯在可然、且又新紙の爲めにも今暫く御勉强必要と奉存候』とある。××の『評註』には曰く、『予の初め廣嶋に赴かんとするや、先生懇に其不可を諭す、予聽かずして行く、果して先生の言の如し。而して予の直ちに歸京せんとするや、先生又此書を寄せて慰諭して止まらしむ、予又聽かず、留まる僅に二ヶ月にして京に歸り、中央新聞に入れり。』

『明治卅年冬、松隈内閣殪れ、伊藤博文代りて立つや、中央新聞之が機關たり。予屑しとせずして去らんことを言ふや、先生書あり、曰く『…主義云々御申越　一應御尤之樣に御座候得共御老人も御存在何分此社會は衣食と云ふ必要條件有之幾分の志を曲ぐることは不得已次第にて、…其邊は所謂手加減に御遣り可然歟、唯近日云ふ所の提携又は買收は特に堪き者にて、如何に衣食の爲めとは云へ、左りとは縊死するに劣る事萬々なれば、士君子の宜しく避くべき所に可有之候、此複雜の世に處しては、伯夷柳下惠の中間を行くこと肝要かと愚考仕候…』

『評註』には曰く、『而して予は又々先生の慰諭を聽かずして中央新聞を去る。先生即ち予を黒岩涙香君に介して朝報社に入らしめたり。』

明治三十三年八月『憲政黨諸子が擧て伊藤博文の膝下に拜跪し、其僕從たらんとを希ふや、先生憤怒して書を飛し來る。曰く『…就ては祭自由黨文と題して大兄之椽筆を揮はれ度…』『此事、筆跡亦龍蛇の飛動するが如く』で、××が『同月卅日の萬朝報に自由黨を祭るの一文を掲げしは、實に這の書簡の爲に炎々たるインスピレーションを與へられしが爲め』であつた。

××が『泉州堺に先生の病床を訪ひ、「一年有半」の稿を抱て京に歸る後、先生屢々寄せらるゝの書簡、一點の涙痕あるを見ずして、而も篇々、自ら不遇なる天才の末路を寫出して』居た。例へば『鄙著に付而は種々御配慮、…難產の婦人が穩婆に遇ひたる時は斯く有る可し、…僕に生み落したる畸形兒を御托し申候上は頭を撫し湯を遣はし、可成不具の醜を去り、且つ健全に肥立候樣至願に御座候』など。

『小山久之助君、先生の歸京を聽き、病を扶けて往て謁す、師弟相見て黯然語なき者之を久しくす。幾くもなく小山君先づ死す。』先生はそれについて次の如く××に書き送つて居る。『小山の死後未だ御目に懸らず、小山を哭するの文御掲載相成、此一世の人より誤解せられて、

悪人と信ぜられたる本人も、一種の道楽に悪黨自慢して、其實却て不悪黨なる御論の如く、實に小兒の如く、直情徑行、無邪氣無害之愛すべき一個の變物をよふこそ模寫して御遣はしに相成、本人地下に於てのみならず、彼を愛したる小生に於て涙を擲て謝謝致申候。』

××は『小山久之助君を哭す』と題した一文を萬朝報に載せたので、それが又『兆民先生』に附錄されてゐる。兆民、××、小山、この三人の關係は誠に面白い情趣を示して居る。

××が先生から與へられた書柬を善く注意して見ると、最初の分には『××樣、中江』としてあり、それが中頃には『、、、樣、篤介』となり、終には『××賢兄、兆民』或は『××賢兄、先生』となつて居る。これにも心持の變化が窺はれる。

八　社會主義の養育者

『一年有半』に對する萬朝報の批評文は多分黒岩涙香氏の筆に成つたものと思はれるが、その終に『唯一ツ社會主義、勞働問題に言ひ及ばれなかつたは、余に取つて物足らぬ心地がする』とある。私（堺）自身も矢張りその時、同じ心地のした事を覺えて居る。兆民先生は實際、そこまでは踏みこまなかつたのである。然し××に與へた書柬の一通には、『實に其筋の不學無術なる、社會主義とか民主主義等の字面を畏るゝ虎の如し、安ぞ知らん百歳の後、或は三五十歳の後は、復た此等の語を懼るゝに暇あらざらんとを、呼々』とある。

兆民先生は實際、自分としてに社會主義まで踏みこまなかつたに相違ないが、然し前記の『自由黨左翼』としての社會主義者は、殆んど總て『中江系』であり、殊に酒井雄三郎氏は彼れの直接の門人であり、小島龍太郎氏は彼れの友人（或は後輩）であり、そして最後に、、なる××が現はれたのであるから、彼は矢張り日本社會主義の養育者であつたと云ひ得られる。

九　兆民、××、三申

今、私の手元にある『兆民先生』は小泉三申君の所藏を借りたのであるが、その本には、處々の欄外に三申君の鉛筆の書入れがあつて、甚だ面白く讀まれる。こゝにその數節を寫す。（小泉君が前記の通り××の親友であつた事を記憶せよ。）

『三醉人』の一節を引用してある處の欄外。『兆民の文を讀む、猶××の文を讀むが如し、師弟契合の深き、以て知る可し』（三申の原文は漢文、或は半ば漢文）

兆民先生が大隈板垣を一堂に會見せしめたといふ處。『兩派聯合、維新第二の大業を作す所以、今猶舊の如し、兩派融和の功、憲政運動之を推す。』

兆民先生が『丈夫生れて天下の權を取り、以て其志を行ふ、眞に快心の事、然らずんば則ち退いて水を飲み書を著さんのみ』といふ處。『××常に此言を誦せり』

××が兆民先生に對し、國民同盟會の帝國主義を難じた處。『××當時に於て帝國主義を難ず、他日、、、を以て任ず、其所以久しと謂ふべし』

兆民先生が××に漢籍と英書を學ばしめたといふ處。『××文章之素養卽ち此に在り』

××が先生と佛國革命の慘を語る處。『余嘗て××に謂て曰く、、、、、にして足下に興復の事を托することあらば如何、云々』(所云意味深長。)

蘇峰氏の兆民評の處。『蘇峰の兆民評、移して以て余が××を品するの語となすべし。彼は孝也、悌也、友に忠なり、妻に貞なり』

××が先生から受けた書柬の處。『余は師なく、教を承くべき父兄も亦無し、××兆民師弟の情誼、羨むに堪へたり』

▲正誤。前號本篇の中、六三頁下段十一行目、『學說』は『茶說』の誤。六六頁上段十七行目、『あるや』は『ある也』の誤。

詩（懸賞佳作）

ある北方的な風景

工藤正一

變屈な腦髓の皺に溜つた感情、
員多の紙片をへらへら散らし、
眼に映つた白晝(まひる)の風景。

澁みのある透明な太陽
皮膚のない生活。

この思想（直情的に）

鼬鼠の思想を知つてゐるか、
頸つ玉に噛りついて新鮮な血を啜る思想を、
剃刀のやうな尖鋭な朝の鷄鳴を、
飛鳥のやうに襲ふてくるあいつ、
喉笛を常に目標とするあいつ、
この慓悍な思想は孤共を憂鬱にする。

兵士

白い舗道(ペーヴメント)に兵士がとまつた。白い高層建築が横擲りに兵士を波つて立つた。兵士は引つ攫かれたやうに靑い空に向つて發砲した。つづけざまに。

寂囚

―組詩―

府川惠造

[illegible]

＊
＊＊

東漸のみぎりを受けて
燃え立つか　地に
公孫樹

ひそやかに
おごそかに
踊し出でんとして
今日も赤日の暮れ方をうち默すなり

＊
＊＊

この里に
鰯雲のしんがりが落としていつたのは
いのちの火の消えたばかりの
紋の小鳥であつたか
秋が放つ散彈の終り

寂寥

＊
＊＊

洪水のなごりの海に
なぐさめの虹立つ朝
もろもろの腦裡に巣くふ
幻影をなみする船は
巨寶の皺を伸ばして
さらさらと虛空に鳴つた
錯綜する飛沫を分けて

虹

＊
＊＊

ゆくべき雲は
いつてしまつた
死すべき明るさは

死んでしまつた

どこに惱みと
影があるのか
白薔薇は霜に響いて
蒼涼の氣韻を啣んだ

一切は實にかつちりとしてゐて
無邪氣なゴリラなどが
慘虐な齒をむきだして
笑つてゐるやうではないか

粗砥から
きめのこまかな砥石へと
意志の刄を磨ぐ季節である
微塵ゆるがぬ刹である

寄す

柏　文　彌

秋冷

昨夜はお前のことを考へてひとりで泣けてゐたらしい。
そしてそのまゝ寢入つたらしい。
今朝起きて、流し元にたつと
どうやら頰つぺたに涙痕がこびりついてゐさうなのだ。
それを洗ふのがちよつと惜しまれて
洗面器に水をはつたまゝ、その中を覗いてゐる。

こんな心が

………………
こんな心が、未だ私のうちに殘つてゐやうとは思はなかつた。
こつけいな話だが

この頃お前の寫眞を抱いて寢る夜が多くなつた。

二行で書いた「お前」

疾つくのむかし死んだ子に
いまでも乳を吸はしてゐる女……。

乳

うまれて一月も生きないで
可哀さうに子供は死んでしまつた。——
女は胸をはだけて　私に
茶椀で乳をうけさしてゐる……。

献詩

候御葛稔

母上よ
私の思想は黄色い燈火だ
女によつて怠惰なる性慾を
食物によつて怠惰なる生命を
そしていま私はふるさとの田園のこころに還る

母上よ
私の思想はすべてを肯定する
堆積したノオトと書物　ワイングラス
机上にひろがる怠惰なる時を食べる
そしていま私はふるさとの田園のこころに還る

母上よ
かつて生れて十幾年始めて會つたあなたの顔は
想つてゐたほど華やかなものではなかつた
美しい歌舞伎の話や建物の話　輕井澤や赤倉のことを
私はあこがれをもつて聞く少年であつた
私もあなたも滅多に外に出ることもなかつた
叔母達の家から裏街の二階へ　そして又田園の屋根裏へ移つて
いつた
私はそこから一里半の道を學校へ

あなたは窓から樹木や植物や小鳥を眺めてゐた
私達は健康で清氣があつた
私はあなたに反抗することによつて
あなたは私に反抗することによつて
母上よ
私達はそこに私達の生命のいしずゑを築いた
平凡のなかからの高揚を求めた
そしていまあなたは田園の憂鬱のなかに
そしていま私は都會の憂鬱のなかに
しかも私達のこころは遠くより互にひとつの窓に寄りかかり
私達はそこに私達の生命の礎石をつみあげる
無明のなかからの高揚を求める
私はあなたに溫順であることによつて
あなたは私に溫順であることによつて
母上よ
私の思想はすべてを肯定する
眼には眼をもつて
楯には楯をもつて
そしていま私は宇宙草昧の氤氳を愛する
母上よ
私の思想は黄色い燈火だ
つねに青瞑を求むる手
つねに青瞑を求め得ざる手
そしていま私は宇宙草昧の氤氳を愛する

歸鄕詩篇

野を走る褐色の馬を愛す
さらに無聲なるその影を愛す
さらにその影の氷の如き思想なき思想を愛す
野に立ちて永遠にのびんとする樹木の意志を
しかも永遠に達し得ざる樹木の冷き憂鬱を愛す

野にありて五位鷺　しぎ　つぐみの聲に心和らげり
耕人の沈思に心靜溫なるを覺えたり

ああしかもわれふるさとに歸りて
何事を爲さむとするものぞ
廓寥たる田園にあそびて
怠惰なる時を食まんとするか
母あり
褐色の馬あり
樹木あり
野鳥の聲あり
かかる怠惰なる自然を愛さむとするか
心性　水の如く下流し
われ日夜何事をも思考せざらむことをひたすらに願ふなり
唯に眼に映る物象を展望せむこころなり
野に立ちて褐色の馬の走るを眺め
無聲なるその影を愛す
さらにその影の思想なき思想を愛す
われ　かかる氷の如き矛盾を愛す

DURCH LEIDEN FREUDE

あはれなるひとをみてあはれみのこころおこさず
われをあはれむこころ切なり
位高く大きなるひとをみて尊敬のこころおこさず
われのまづしきこころなつかしむこと切なり
物象　心鏡にうつり
心鏡　物象をうつし
ひとをして右の頰を打たしめて更に左の頰を打たしむるを欲せず
われを愛しむこころ切なり
肯定のための否定にあらず

否定のための肯定なり
われのもとむるものはしかも歎なり
悩みを通じての歎をこそ　われは

だんだら詩集

萩原野呂

ほる・たん・ぼう

俺のおやぢがあんまり
足をひつぱるので
足が抜けた
俺のおふくろがあんまり
手をひつぱるので
手が抜けた
俺があんまり　あんまり
ダダをこねたので
首が飛んだ

にきび

親が子を生んだ
子が孫を生んだ
孫が子を生んだ
子が親を生んだ
やれ　やれ

やに

煙管（きせる）の丸首を嚙ぢりながら
おもうのです
つくづくと
世が厭になりました
色のわかんない
煙草（たばこ）のやにでしょう

日本興業銀行參事 法學士 高平隆雄著

英米の投資銀行と投資證券

（菊判天金美本）

定價貳圓五十錢　送料廿二錢

近來國際金融の發達は著しきものがあるが、我が國としても近く金解禁の時期に當面し一層英米の起債市場と密接なる關係に立つべきは言を待たぬのであつて其の實狀を研究し置くことは單に金融業者に止まらず一般企業者にとりても必要なことである。本書は英米の起債市場の實際を説明するとともに英米の投資銀行が長期金融に際し一般各種公市法人、鐵道會社、公益事業會社、一般工業會社、各種不動産、外國債等に對する投資態度の概要を示してある。本書に依つて英米長期金融の一般構成と其の組織を知り得るとともに外資輸入の必要ある場合の良參考書たるを失はぬ。

最新刊

〔目次〕

第一編英米の投資銀行。 第一章投資銀行の意義。第二章英米投資銀行の特性。第三章英米投資銀行と投資證券の略史。第四章英米投資銀行の種類と範圍。第五章英米投資銀行の證券發行方法。第六章英國のプロスペクタス。第七章米國投資銀行の投資調査。第八章米國の證券セールスマン。第九章英米證券引受制度の概要。第十章倫敦及び紐育兩市場の經濟的考察。**第二編英米の投資證券。** 第一章英國投資證券の種類。第二章米國投資證券の種類。第三章倫敦株式取引所上場の證券種別。第四章米國に於て取引さるる一般證券の種類。

東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

新刊批評

三木清著『社會科學の豫備概念』

大森義太郎

この書を手にしてわたしは何よりも著者の精勵に驚畏する。我々が三木氏によつて『唯物史觀と現代の意識』を贈られてから僅かに一年にもならうか。しかも早く著者は第二の勞作を世に問はれたのである。三木氏はこゝで前著の見解を承け、そして一歩を進められてゐる。

主内容を形づくるものは、この數ケ月の間に、其主宰せられる雜誌『新興科學の旗の下に』に相次いで發表された四つの論文である。それに先行して、別に、三木氏が以前に雜誌『思想』に載せられた二の論文が收められてゐる。この後者は嘗て氏の哲學の主要構成分をなした解釋學的現象學の立場を明かにする。それに對して前者の四論文は、哲學がいま社會科學——現實には、マルクス的なる——の基礎づけをなすべき新たなるベーコン的或はむしろカント的な課題をもつとして、この仕事を果すべく試みられたものである。ただ、中で最後の論文『唯物論とその現實形態』は氏の受けた批判に答へた爭論ふうのものである。

かくのごとき構成をもつたこの氏の近業において我々が興味を掛ける主たる點は、三木氏がマルクシズムを他のイデオロギー、特に他の哲學と聯關せしめつゝ明かにされるところに在る。そしてそれはマルクシズムの生成の過程についても、またその現代の姿に對して、でもある。こゝにおける三木氏の仕事は、氏のこの領域における正確と同時に豐富な知識をもつて、些の危ぶなげも見せない。かうした方面は、必要であるにもかかはらず、わが國のマルクシストがあまり多くは手を染めえなかつた處であつて、それゆゑ、三木氏の業績から我々の受ける示唆は極めて大きい。特にわたしは氏のヘーゲルに關する闡明、またマルクスとの對比に向つて敬意をおくる。——こゝでわたしは第五の論文『有機體說と辯證法』を指して置かう。

これらを通じて、三木氏がはなはだしくマルクシズムに近く來られたことは、この近業を舊著に比べるとき、我々の注意を惹いて止まない。むしろこゝではあらゆる機會にマルクシズムの優越が說かれると云つても必ずしも言ひ過ぎではなからう。しかし、もし我々が氏の哲學的立場の構成分を探るならば、それは專一にマルクス＝エンゲルスの立場に歸することはできない。すでに氏の哲學にもつとも親しい人々から指摘されたやうに、マルクスとハイデッガーとディールタイと三つの構成分を我々は區別すべきであら

ら。ディルタイについてはしばらく措いて、ハイデッガーの立場は、さきに觸れた如くこの新著においても體系的に述べられてゐる。

そこでこの書における三木氏の基礎的な哲學的態度を考へる。と云ふより、いま云つたハイデッガーとそして氏が最近殆んど全く傾倒されるマルクス＝エンゲルスとの連絡が氏にあつて如何に行はれるかを考へる。わたしは次のやうに解釋する。――氏はハイデッガーにおける『存在』と、その『存在』の歷史性の主張を取り來つて、マルクス＝エンゲルスにおける同じく存在と歷史性の主張に赴かれる。かくして、我々は、一切のものの歷史的地盤との緊密なる連繫また從つて一切のものの歷史的限界を說くところに、三木氏の固有の哲學を見るべきであらう。この限りで、氏の主張がハイデッガーと完全に相蓋ふと考へるのは――氏みづから釋明されるごとく――必ずしも當らないであらう。

そこで、三木氏の哲學とマルクス＝エンゲルスの哲學と。上のやうな歷史的制約性の主張は、確かに、マルクス＝エンゲルスが一方において說くところである。しかし、いふまでもなくマルクスシズムは歷史主義、相對主義そのものでは決してない。それゆゑ、いまや三木氏がみづからを相對主義と如何に區別されるかが、我々の大いに關心する問題となる。なぜなら、上の三木氏の哲學的態度は、そのまゝでは、相對主義とも見られうる。相對主義との差、これについては氏は『社會科學の豫備概念』においては答へてをられない。しかしこの解答を約束されてゐる。わたしはこの約束の果される日を性急に待ちつゝあることを書いて置きたい。

最後にひとつ。三木氏も充分に氣づかれてゐるであらうやうに、哲學の路を經てマルクスシズムに到ることは極めて困難である。そしてその困難さは、この路が一見坦々たるごとくして、しかもあらゆる處に陷穽と迷路とが用意されてゐる所に存する。我々はこの路をよく步み拔くひとつの方法は戰鬪的であることである。氏は近業の序に『私は大膽なる旅に、むしろ果敢なる戰にのぼる場合となつた。』と書いてをられる。この言葉にわたしは大いなる期待を掛ける。（東京市神田區一橋通九・鐵塔書院發行・定價貳圓）

『古代研究』の民俗學篇第一冊

折口信夫著

武田祐吉

むかし郷土研究といふ雜誌に、たしか大和の北葛城郡のある地方での事とおぼえてゐるが、豆畑を兎に荒されない爲めに、狐が食つたと兎が云つたと書いて札を立てゝおくといふ意味の報告があつた。それを折口が僕に注意して見せてくれた事があつた。折口といふ人は、かういふ味のわかる人である。歌人で、國文學者で、民俗學者で、國語學者である上から、當然の事ではあらうが、こゝが命であると思ふ。書中にいはゆる、ほうとして生きることの味ひ、かういふ境地の覗ける人

は少ないであらう。その郷土研究に、髯籠の話をつゞけて出したのが、この人の民俗研究の上に地歩を占める最初であつた。かくして原稿の遲いこの人が、いつ書くとしもおぼえぬうちに積みに積んだ研究の報告がこの書を成した。

この一書は二十六の篇から成り立つてゐる。書かれたその時々が明記してないので、どれが古くどれが新しいかといふことは、大體に於いてしか判別しかねるが、ひげこ、幣束、まとい、だいがく、祭屋臺等の形態について意義を求めて、その中に突き進んで行つたものが古く、信太妻、愛護若、鸚鵡小町、餓鬼阿彌蘇生譚の如き文獻を資料として、それらの傳說の本質を明にしようとしたもの、これに次ぎ、琉球や三河遠江の奥山などに殘る行事をもとゝした翁や祭の發生を說いたものが、比較的近時の作品と考へられる。そのほか古人の心のふるさととなる常世の國の興亡、祭つかまつる女性の生活など、かつていかなる學者がこの方面にかくまで深い研究を爲し得たであらうか。文獻の外には一歩も踏み出せなかつた舊式の論證法を全く離れて、現に殘つてゐる民俗の行事のうちから、古風な部分を實感によつて析出し、むしろこれによつて古文獻を解說しようとした態度が、この書のすべてに行き亘つてゐる。

折口の文章は難解だといふ評判である。それはこの人が博識であるのと、論證の步みが大股である爲とであらうと思ふ。この點については既に先達の評言も公にされた後であるから、さし控へるが、それは畢竟含む所が多いからだとも云はれようと思ふ。

近年に於ける日本の民俗學の勃興は、たしかにあらゆる國學の上に影響と刺戟とを與へてゐる。而して著者はその豐富なる古文獻の知識を應用して他人のたやすく企及すべからざるこの雄篇をまとめるに至つた。この書を背景として、古典は新しく讀み直されなければならない。吾人は現代の母としての古代を考へよう。そこには當然この書の態度の如き、現代に殘る行事から入つて行くところの一面がなければならなかつたのである。

著者の古代研究としての發表は民俗學篇第二册と國文學篇第一册とから成るさうで、まづその民俗學篇の第一册が公にされたのである。而して國文學篇も既に出來上つてゐるさうであるから、やがてそのもちあぢを味はふことが出來るであらう。なほこの民俗學篇にも、古語を說いた部分は豐富であるが、別に古代研究の國語學篇といふべき一册が、まとめれば纏め得る筈であることを僕は知つてゐる。その一册が古代研究の上に重要な位置を占めるであらうことは、折口みづからがよく知つてゐるであらう。それを併せ成して名實ともに三部作の體系を完成せられむことを切望する。（東京市麻布區本村町一八大岡山書店發行・定價六圓）

大佛次郎著
「ごろつき船」
金子洋文

「三銃士」を讀んだ翌日私に「ごろつき船」を讀んだ。面白いこと、構想が巨きくてすばらしい點、文章の巧緻、その他あらゆる點から考へて、「ごろつき船」は世界の名作と言はれる「三銃士」と比べて少しも劣つてゐない、面白い點、構想がすぐれてゐて破綻のない點では、「三銃士」より優つてゐると言つてよい。たゞ二三ヶ所見る心理描寫にひつかゝつて流動を妨げてゐる缺點をのぞくと、かうした大衆的な讀物としては完璧に近いものと言つてよからう。

大衆文學は藝術でない方がいゝ。面白くて無為に過ごす時間を樂しませるといゝのだ。私は旅行の時いつでも助かる、汽車の中では絶體に大衆文學がいい。だから汽車を下りる時忘れられる事に大衆文學の面目がある。大佛君の「赤穗浪士」はその點列車に忘れ難い多くのものを含んでゐた、その點知識階級の喝采を博すに充分だつた。が、あれはあれとして大衆文學の性質、機能からすると私はむしろ「ごろつき船」を最上とする。

「ごろつき船」のすぐれた點は構想が巨大で少しも破綻のないことだ、「赤穗浪士」に見る堀田隼人、蜘蛛の陣十郎の不てぎはな進行と解決がない、更に大衆文學に横行する非常人が、荒唐無稽と不自然な感じを少しも與へぬことだ。この缺點はあらゆる日本の大衆作品に見る缺點であつて、讀者が等しくひんしゆくしてゐることだ。

「ごろつき船」にはさうした非常人が可なり活躍してゐる。盗人の佐野屋惣吉がさうだ、啞のアイヌ主水正がさうだ。和尚の歡圓がさうだ。海賊の玄龍がさうだ。これ等の人物はことごとく大衆文學に横行するしれものだ、而かもこれ等のしれものはきまつて傀儡としての面白味より我々に傳へない。

ところが「ごろつき船」に見るこれ等のしれものは充分のリアリテイをもつて生彩をはなつてゐる。この點をあげてもこの作品は新たな刺戟と歡びをおくるに充分である。

大佛君は女を書くことのうまくない人だ、ことに女の心理描寫は面白くない、伊織の妻の糸がさうだ、ことに糸の心理は全篇中で一番まづいところだらうこ、の糸を自殺させたことは讀者をがつかりさせることだらうが、私は殺すことに贊成だ、殺したことによつてはるかに私は面白味を加へた。たゞ糸のかはりにおしまひになつて綾江を中心とした三角關係が點じられて來たのはいかにも殘念である。この點「三銃士」の男女關係の方がはるかに單純瀾熳でよい。大衆文學の戀愛は近代的心理描寫を無視したこの方がよろしいやうに想ふ。（東京市芝區愛宕下町改造社發行定價壹圓八十錢）

新刊紹介

◆**人類學汎論**（第一章序論、第二章人類間の差異、第三章人類の規準、分類、成因第四章人類と動物との差異、第五章人類の祖先と文化、第六章人類の起原及移動、第七章人類進化の動因、第八章人類と自然との關係、第九章萬物一系論、第十章結論。——西村眞次著・東京神田區錦町三ノ一八・東京堂發行・定價參圓五十錢）

◆**不戰條約中「人民の名に於て」の問題**（美濃部達吉編・東京麴町丸ノ內昭和ビル內・日本評論社發行・定價參拾錢）

◆**世界經濟論**（ナヒムソン著・太田黻夫譯・原著者はマルクス經濟學者で、豐富な材料により新舊學派の諸主張を批判した經濟論・東京日本橋區本銀町三・賣文館發行・定價貳圓八拾錢）

◆**武家時代之研究第二卷**（大森金五郎著・源平時代を叙し、平氏の興亡より源賴朝の奧羽征伐に至る、史壇の權威的研究書東京神田區神保町九・富山房發行・定價參圓參拾錢）

◆**岡辰押切帳**（谷孫六著・本鄕區駒込坂下町・大日本雄辯會發行・定價壹圓八十錢）

◆**孔子鑑賞**（大月隆仗著・東京神田小川町四一・敬文館發行・定價壹圓五拾錢）

◆**詩集　高窓**（早津湾二著・東京府下高田町雜司谷五一四・日本詩壇社發行・定價八十錢）

◆**フオードかマルクスか**（ヤコン・ワルヘル著・松山止才譯・東京神田區錦町一ノ一二・上野書店發行・定價九十錢）

◆**コミンテルンと戰爭**（インタナショナル叢書2・今村保男譯・東京神田錦町一ノ一二・上野書店發行・定價八十錢）

◆**詩歌作文類語辭典**（横山青娥著・東京小石川江戶川町十八・交蘭社發行・定價壹圓五拾錢）

◆**植物名彙**（志田義秀、田中徹翁共編・東京市京橋區元數寄屋町三ノ七・北隆館發行・定價拾五錢）

◆**小說集燃ゆる頭**（生田花世著・東京小石川區大塚上町一五・中西書房發行・定價壹圓八十錢）

◆**詩集秋衣集**（田中令三著・東京小石川區小日向臺町二ノ二六・詩洋社發行・定價壹圓五十錢）

◆**勞働者のための勞働法**（奈良正路著・東京市神田區一ツ橋通九・新興科學社發行・定價七十錢）

文藝家主催の改造社十年祝賀會

拜啓

「改造」社創立十年記念として、我々は先日同社より招待を受けましたが、「改造」及び改造社が、現代日本の文藝及び我々文藝家の福利のため貢獻したるものは、可なり大きいと思ひます。それについて、我々文藝家有志は先日の招待に對する答禮と云ふよりも一歩進んだ氣持ちで、改造社々主山本實彥氏を招待して、一夕祝賀の宴を張りたいと思ひます。左記要領御承知の上、振つて御出席下さるやう御案內致します。

(尙ほ此の際我々と懇意なる「改造」記者も招待いたしたいと思ひますゆゑ、御希望あらばその方を御指名願ひます。)

期日　四月廿四日午後六時より

場所　赤坂山王　星ケ岡茶寮

此の案內狀は里見弴、佐藤春夫、菊池寛、德田秋聲の四氏が發起人となつて、同志の文藝家諸氏に發送されたものである。

我社よりはその厚意を謝し、山本、廣田、高平、箕輪が列席した。(尤も山本重彥も招待されたが同人だけはやむなき用事のため欠)かくの如きことは文壇に曾つて見ざるゆかしいことで我社に一つの記錄を與へて下さつた文壇の先輩及中堅の方々の芳情は永く記しておきたい。因に當夜出席して下さつた方々は左の如くである。

泉　鏡花	小島政二郎	德田秋聲	近松秋江
上司小劍	久保田万太郎	長與善郎	室生犀星
岸田國士	犬養　健	川端康成	片岡鐵兵
里見　弴	佐々木茂索	横光利一	池谷信三郎
中河與一	三宅やす子	佐藤春夫	菅　忠雄
菊池　寛	關口次郎	豐島與志雄	宇野千代
山本有三	(順序不同)		



怪奇小説　蟲

江戸川亂歩

一

この話は、柾木愛造と木下芙蓉との、あの運命的な再會から出發すべきであるが、それについては、先づ男主人公である柾木愛造の、いとも風變りな性格について、一言して置かねばならぬ。

柾木愛造は、既に世を去つた兩親から、幾何の財産を受繼いだ一人息子で、當時二十七歳の、私立大學中途退學者で、獨身の無職者であつた。といふことは、あらゆる貧乏人、あらゆる家族所有者の、羨望の的である所の、此上もなく安易で自由な身の上を意味するのだが、柾木愛造は不幸にも、その境涯を樂しんで行くことが出來なかつた。彼は世に類もあらぬ厭人病者であつたからである。

彼のこの病的な素質は、一體全體どこから來たものであるか、彼自身にも不明であつたが、その徴候は、既に已に、彼の幼年時代に發見することが出來た。彼は人間の顏さへ見れば、何の理由もなく、眼に一杯涙が湧き上つた。そして、その內氣さを隱す爲に、あらぬ天井を眺めたり、手の平を使つて、誠に不樣な恥かしい格好をしなければならなかつた。隱さうとすればする程、それを相手に見られてゐるかと思ふと、一層おびただしい涙がふくれ上つて來て、遂には、「ワッ」と叫んで、氣違ひになつてしまふより、どうにもこうにも仕方がなくなる。といつた感じであつた。彼は肉親の父親に對しても、家の召使に

對しても、時とすると母親に對してさへ、この不可思議な羞恥を感じた。隨つて彼は人間を避けた。人間が懷しい癖に、彼自身の恥づべき性癖を恐れるが故に、人間を避けた。そして、薄暗い部屋の隅にうづくまつて、身のまはりに、積木のおもちやなどで、可憐な城壁を築いて、獨りで幼い即興詩を呟いてゐる時、僅かに安易な氣持になれた。

年長じて、小學校といふ不可避な社會生活に入つて行かねばならなかつた時、彼はどれ程か當惑し、恐怖を感じたことであらう。彼は誠に異樣な小學生であつた。母親に彼の厭人癖を悟られることが堪え難く恥しかつたので、獨りで學校へ行くことは行つたけれど、そこでの人間との戰ひは實に無殘なものであつた。先生や同級生に物を云はれても、涙ぐむ外に何の術をも知らなかつたし、受持の先生が他級の先生と話をしてゐる内に、柾木愛造といふ名前が洩れ聞えた丈けで、彼はもう涙ぐんでしまふ程であつた。

中學、大學と進むに從つて、このいむべき病癖は、少しづゝ薄らひでは行つたけれど、小學時代は全期間の三分の一は病氣をして、病後の養生にかこつけて學校を休んだし、中學時代には、一年の内半分程は僞病を使つて登校をせず、書齋をしめ切つて、家人の這入つて來ない樣にして、そこで小說本と、荒唐無稽な幻想の中に、うつら／＼と日を暮らしてゐたものだし、大學時代には、進級試驗を受ける時の外は、殆ど教室に這入つたことがなく、と云つて、他の學生の樣に樣々な遊びに耽るでもなく、自宅の書庫の、買ひ集めた異端の書物の塵に埋まつて、併し、それらの書物を讀むといふよりは、虫の食つた青表紙や、十八世紀の洋紙や皮表紙の匂ひをかぎ、それらの醸し出す幻怪な大氣の中で、益々嵩じて來た病的な空想に耽り、晝と夜との見境のない生活を續けてゐたものである。

その樣な彼であつたから、後に述べるたつた一人の友達を除いては、まるで友達といふものがなかつたし、友達のない程の彼に、戀人のあらう筈もなかつた。人一倍優しい心を持ちながら、彼に友達も戀人もなかつたことを、何と說明したらよいのであらう。彼とても、友情や戀をあこがれぬではなかつた。濃やかな友情や甘い戀の話を聞いたり讀んだりした時には、若し自分もそんな境遇であつたなら、どんなにか嬉しからうと、羨まぬではなかつた。だが、假令彼の方で友愛なり戀なりを感じても、それを相手に通じるまでに、どうすることも出來ぬ障害物が、まるで壁の樣に立ちはだかつてゐた。

柾木愛造には、彼以外の人間といふ人間が、例外なく意地惡に見えた。彼の方で懷しがつて近寄つて行くと、相手は忠臣藏の師直の樣に、ついとそつぽを向くかと思はれた。中學生の時分、汽車や電車の中などで、二人連れの話し合つてゐる樣子を見て、屢々驚異を感じた。彼等の内一人が熱心に喋り出すと、聞手の方は、さもさも冷淡な表情で、そつぽを向いて、窓の外の景色を眺めたりしてゐる。時たま思ひ出した樣に合點々々をするけれど、滅多に話手の顏を見はしない。そして、一方が默ると、今度は冷淡な聞手だつた方が、打つて變つて熱心な口

調で話し出す。すると、前の話手は、ついとそつぽを向いて、俄かに冷淡になつてしまふ。それが人間の會話の常態であることを悟るまでに、彼は長い年月を要した程である。これは些細な一例でしかないけれど、總てこの例によつて類推出來る樣な人間の社交上の態度が、內氣な彼を沈默させるに充分であつた。彼は又、社交會話に洒落（彼によればその大部分が、不愉快な駄洒落でしかなかつたが）といふものの存在するのが、不思議で仕樣がなかつた。洒落と意地惡とは同じ種類のものであつた。彼は、彼が何かを喋つてゐる時、相手の目が少しでも彼の目をそれて、外の事を考へてゐると悟ると、もうあとを喋る氣がしない程、內氣者であつた。言葉を換へて云ふと、それ程彼は愛について貪婪であつた。そして、餘りに貪婪であるが故に、彼は他人を愛することが、社交生活を營むことが出來なかつたのであるかも知れない。

だが、それればかりではなかつた。もう一つのものがあつた。卑近な實例を上げるならば、彼は幼少の頃、女中の手を煩はさないで、自分で床を上げたりすると、その時分まだ生きてゐた祖母が、「オヽ、いゝ子だいゝ子だ。」と云つて御褒美を吳れたりしたものであるが、さうして褒められることが、身內が熱くなる程、恥しくて、いやでいやで、褒めてくれる相手に、極度の憎惡を感じたものである。引いては、愛することも、愛されることも、「愛」といふ文字そのものすらが、一面ではあこがれながらも、他の一面では、身體がキユーッとねぢれて來る程も、何とも形容し難い、いやあな〳〵感じであつた。これは彼が所謂自己嫌惡、肉親憎惡、人間憎惡等の一聯の特殊な感情を、多分に附與されてゐたことを語るものであるかも知れない。彼と彼以外の凡ての人間とは、まるで別種類の生物である樣に思はれて仕方がなかつた。この世界の人間共の、意地惡の癖に、あつかましくて、忘れつぽい陽氣さが、彼には不思議でたまらなかつた。彼はこの世に於て、全く異國人であつた。彼は謂はゞ、どうかした拍子で、別の世界へ放り出された、たつた一匹の、孤獨な陰獸でしかなかつた。

その樣な彼が、どうしてあんなにも、死にもの狂ひな戀を爲し得たか。不思議と云へば不思議であるが、だが、考へ方によつては、その樣な彼であつたからこそ、あれ程の、物狂はしい、人外境の戀が出來たのだとも、云へないことはない。彼の戀にあつては、愛と憎惡とは、最早や別々のものではなかつたのだから。併し、それは後に語るべき事柄である。

幾何の財産を殘して兩親が相ついで死んだあとは、家族に對する見得や遠慮の爲めに、苦痛をしのんで續けてゐた、ほんの僅かばかりの社會的な生活から、彼は完全に逃れることが出來た。それを簡單に云へば、彼は何の未練もなく私立大學を退校して、土地と家屋を賣拂ひ、兼ねて目星をつけて置いた郊外の、淋しいあばら家へと引移つたのである。か樣にして、彼は學校といふ社會から、又、隣近所といふ社會から、全く姿をくらましてしまふことが出來た。人間である以上は、

どこへ移つたところで、全然社會を無視して生存することは出來ないのだけれど、柾木愛造が、最も厭つたのは、彼の名前なり爲人なり知つてゐる、見知り越しの社會であつたから、隣近所に一人も知合ひのない、淋しい郊外へ移住したことは、その當座、彼に「人間社會を逃れて來た」といふ、やゝ安易な氣持を與へたものである。

　その郊外の家といふのは、向島の吾妻橋から少し上流のKといふ町にあつた。そこは近くに安待合や、貧民窟がかたまつてゐる、河一つ越せば淺草公園といふ盛り場をひかへてゐるにも拘らず、思ひもかけぬ所に、廣い草原があつたり、ひよつこり釣堀の毀れかゝつた小屋が立つてゐたりする、妙に混雜と閑靜とを混ぜ合はせた樣な區域であつたが、そのとある一廓に、このお話は大地震よりは餘程以前のことだから、立ち腐れになつた樣な、化物屋敷同然の、だだつ廣い屋敷があつて、柾木愛造は、いつか通りすがりに見つけて置いて、それを借受けたのであつた。

　毀れた土塀や生垣で取まいた、雜草のしげるにまかせた廣い庭の眞中に、壁のはげ落ちた大きな土藏がひよつこり立つてゐて、その脇に、手廣くはあるけれど、殆と住むに耐へない程、荒れ古びた母屋があつた。だが、彼にとつては、母屋なんかはどうでもよかつたので、彼がこの化物屋敷に住む氣になつたのは、一つにその古めかしい土藏の魅力によつてであつた。厚い壁でまぶしい日光をさへぎり、外界の音響を遮斷した、樟腦臭い土藏の中に、獨りぼつちで住んでみたいといふのは、彼の長年のあこがれであつた。丁度貴婦人が厚いヴェイルで彼女の顏を隱す樣に、彼は土藏の厚い壁で、彼自身の姿を、世間の視線から隱してしまひたかつたのである。

　彼はその土藏の二階に疊を敷きつめて、愛藏の異端の古書や、横濱の古道具屋で手に入れた、等身大の木彫の佛像や、數個の青ざめたお能の面などを持込んで、そこに彼の不思議な檻を造りなした。北と南の二方丈けに開かれた、たつた二つの、小さな鐵棒をはめた窓が、凡ての光源であつたが、それを更らに陰氣にする爲に、彼は南の窓の鐵の扉を、ぴつしやりと締切つてしまつた。それ故、その部屋には、年中一分の陽光さへも直射することはなかつた。これが彼の居間であり、書齋であり、寢室であつた。

　階下は板張りのまゝにして、彼のあらゆる所有品を、祖先傳來の丹塗りの長持や、紋章の樣な錠前のついたいかめしい簞笥や、虫の食つた鎧櫃や、不用の書物をつめた本箱や、その他樣々のがらくた道具を、滅茶苦茶に置き並べ積重ねた。

　母屋の方は十疊の座敷と、臺所脇の四疊半との疊替へをして、前者を滅多に來ない客の爲の應接間に備へ、後者は炊事に傭つた老婆の部屋に當てた。彼はさうして、客にも傭婆さんにも、土藏の入口にすら近寄らせない用意をした。土藏の出入口の、厚い土の扉には、内からも外からも錠を卸す仕掛けにして、彼がその二階にゐる時は、内側から、外出の際は外側から、戸締り出來る樣になつてゐた。それは謂

はゞ、怪談の明かずの部屋に類するものであつた。

備婆さんは、家主の世話で、殆ど理想に近い人が得られた。身寄りのない六十五歳の年寄りであつたが、耳が遠い外には、これといふ病氣もなく、至極まめ〳〵した、小綺麗な老人であつた。何より有難いのは、そんな婆さんにも似合はず、樂天的な呑氣者で、主人が何者であるか、彼が土藏の中で何をしてゐるか、といふ樣なことを、猜疑し穿鑿しなかつたことである。彼女は所定の給金をきちんきちんと貰つて、炊事の暇々には、草花をいぢつたり、念佛を唱へたりして、それですつかり滿足してゐる樣に見えた。

云ふまでもなく、柾木愛造は、その土藏の二階の、晝だか夜だか分らない樣な、薄暗い部屋で、彼の多くの時間を費した。赤茶けた古書の頁をくつて一日をつぶすこともあつた。ひねもす部屋の眞中に仰臥して、佛像や壁にかけたお能の面を眺めながら、不可思議な幻想に耽ることもあつた。さうしてゐると、いつともなく日が暮れて、頭の上の小さな窓の外の、黒天鵞絨の空に、お伽噺の樣な星がまたたいてゐたりした。

暗くなると、彼は机の上の燭臺に火をともして、夜更けまで讀書をしたり、奇妙な感想文を書き綴つたりすることもあつたが、多くの夜は、土藏の入口に錠を卸して、どことなくさまよひ出るのがならはしになつてゐた。極端な人間嫌ひの彼が、盛り場を歩き廻ることを好んだといふのは、甚だ奇妙だけれど、彼は多くの夜、河一つ隔てた淺草公園に足を向けたものである。だが、人嫌ひであつたからこそ、話しかけたり、じろ〳〵と顏を眺めたりしない、漠然たる群集を、彼は一層愛したのであつたかも知れぬ。その樣な群集は、彼にとつて、局外から觀賞すべき、繪や人形にしか過ぎなかつたし、又、夜の人波にもまれてゐることは、土藏の中にゐるよりも、却つて人目を避ける所以でもあつたのだから。人は、無關心な群集のたゞ中で、最も完全に彼自身の存在を忘れることが出來た。群集こそ、彼にとつてこよなき隱れ簔であつた。そして、柾木愛造のこの群集好きは、あの芝居のはね時を狙つて、木戸口をあふれ出る群集に混つて歩くことによつて、僅かに夜更けの淋しさをまぎらしてゐた、ポオの Man of crowd の一種不可思議な心持とも、相通ずる所のものであつた。

さて、冒頭に述べた、柾木愛造と木下芙蓉との、運命的な邂逅といふのは、この土藏の家に引移つてから、二年目、彼がこの樣な風變りな生活の中に、二十七歳の春を迎へて間もない頃、淀んだ生活の沼の中に、突然石を投じた樣に、彼の平靜をかき亂した所の、一つの重大な出來事だつたのである。

二

先にも一寸觸れて置いたが、かくも人嫌ひな柾木愛造にも、例外として、たつた一人の友達があつた。それは、實業界に一寸名を知られた父の威光で、ある商事會社の支配人を勤めてゐる、池内光太郎

ふ、柾木と同年輩の青年紳士であつたが、あらゆる點が柾木とは正反對で、明るい、社交上手な、物事を深く掘下げて考へない代りには、末端の神經はかなりに鋭敏で、人好きのする、好男子であつた。彼は柾木と家も近く小學校も同じだつた關係で、幼少の頃から知合ひであつたが、お互が青年期に達した時分、柾木の不可思議な思想なり言動なりを、それが彼にはよく分らない丈けに、すつかり買ひかぶつてしまつて、それ以來引續き、柾木の様な哲學者めいた友達を持つことを、一種の見得にさへ感じて、柾木の方では寧ろ避ける様にしてゐたにも拘らず、繁々と彼を訪ねては、少しばかり見當違ひな議論を吹きかけることを樂しんでゐたのである。又、華やかな社交に慣れた彼にとつては、柾木の陰氣な書齋や、柾木の人間そのものが、こよなき休息所であり、オアシスでもあつたのだ。

その池内光太郎が、ある日、柾木の家の十疊の客間で、(柾木はこの唯一の友達をさへ、土藏の中へ入れなかつた) 柾木を相手に、彼の華やかな生活の一斷面を吹聽してゐる内に、ふと次の樣なことを云ひ出したのである。

「僕は最近、木下芙蓉つて云ふ女優と近づきになつたがね。一寸美しい女なんだよ。」彼はそこで一種の微笑を浮べて、柾木の顏を見た。それは、こゝに云ふ「近づき」とは、文字のまゝの「近づき」でないことを意味するものであつた。「まあ聞き給へ、この話は君にとつても一寸興味がある相なんだから。と云ふのに、その木下芙蓉の本名が木下文子なんだ。君、思ひ出さないかい。ホラ、小學時代僕等がよくいたづらをした、あの美しい優等生の女の子さ。たしか僕達より三年ばかり下の級だつたが。」

・そこまで聞くと、柾木愛造は、ハッとして、俄かに顏がほてつて來るのを感じた。流石に彼とても、二十七歳の今日では、久しく忘れてゐた赤面であつたが、あゝ赤面してゐるなと思ふと、丁度子供の時分、涙を隱さうとすればする程、一層涙ぐんで來たのと同じに、それを意識する程、益々目の下が熱くなつて來るのをどうすることも出來なかつた。

「そんな子がゐたかなあ。だが、僕は君みたいに早熟でなかつたから。」

彼はてれ隱しに、こんなことを云つた。だが、幸なことに、部屋が薄暗かつたせゐか、相手は、彼の赤面には氣づかぬらしく、やゝ不服な調子で、

「いや、知らない筈はないな。學校中で評判の美少女だつたから。久しく君と芝居を見ないが、どうだい。近い内に一度木下芙蓉を見ようぢやないか。幼顏そのまゝだから、君だつて見れば思ひ出すに違ひないよ。」

と、如何にも木下芙蓉との親交が得意らしいのである。

芙蓉の藝名では知らなかつたけれど、云ふまでもなく、柾木愛造に、木下文子の幼顏を記憶してゐた。彼女については、彼が赤面したのも

決して無理ではない程の、實に寂しい思出があつたのである。

彼の少年時代は、先にも述べた通り、極度に内氣な、はにかみ屋の子供であつたけれど、彼の云ふ樣に早熟でなかつた譯でなく、同じ學校の女生徒に、幼いあこがれを抱くことも人一倍であつた。そして、彼が四年級の時分から、當時の高等小學の三年級までも、ひそかに思ひこがれた女生徒といふのが、外ならぬ木下文子だつたのである。と云つても、例へば池内光太郎の樣に、彼女の通學の途中を擁して、お下げのリボンを引きちぎり、彼女の美しい泣き顔を樂しむなどと云ふ、すばらしい藝當は、思ひも及びなかつたので、風を引いて學校を休んでゐる時など、發熱の爲にドンヨリとうるんだ腦の中を、文子の笑顔ばかりにして、熱つぽい小さな腕に、彼自身の胸を抱きしめながら、ホッと溜息をつく位が、關の山であつた。

ある時、彼の幼い戀にとつて、誠に奇妙な機會が惠まれたことがある。それは、當時の高等小學二年級の時分で、同級の餓鬼大將の、口髭の目立つ樣な大柄な少年から、木下文子に（彼女は尋常部の三年生であつた）附文をするのだから、その代筆をしろと命じられたのである。彼は勿論級中第一の弱蟲であつたから、この腕白少年にはもうビクビクもので、「一寸こい」と肩を摑まれた時には、例の目に涙を一杯浮べてしまつた程で、その命令には、一も二もなく應じる外はなかつた。彼はこの迷惑な代筆のことで胸を一杯にして、學校から歸ると、お八つもたべないで、一間にとお籠り、机の上に卷紙をのべ、生れて初めての戀文の文案に、ひどく頭を悩ましたものである。だが、幼い文章を一行二行と書いて行くに從つて、彼に不思議な考が湧上つて來た。「これを彼女に手渡す本人はかの腕白少年であるけれど、書いてゐるのは正しく私だ。私はこの代筆によつて、私自身の本當の心持を書くことが出來る。あの娘は私の書いた戀文を讀んでくれるのだ。假令先方では氣づかなくても、私は今、あの娘の美しい幻を描きながら、この卷紙の上に、思ひのたけを打あけることが出來るのだ。」この考が彼を夢中にしてしまつた。彼は長い時間を費して、卷紙の上に涙をさへこぼしながら、あらゆる思ひを書き記した。腕白少年は翌日そのかさばつた戀文を、木下文子に渡したが、それは恐らく文子の母親の手で燒き捨てられでもしたのであらう。其後快活な文子のそぶりにさしたる變りも見えず、腕白少年の方でも、いつかけろりと忘れてしまつた樣子であつた。たゞ、代筆者の柾木少年丈けが、いつまでも、クヨクヨと、甲斐なく打捨てられた戀文のことを、思ひつゞけてゐたのである。

又、それから間もなく、こんなこともあつた。戀文の代筆が彼の思ひを一層つのらせたのであらう。餘りに堪へ難い日が續いたので、彼は誠に幼い一策を案じ、人目のない折を見定めて、ソッと文子の教室に忍び込み、文子の机の上げ蓋を開いて、そこに入れてあつた筆入れから、一番ちびた、殆ど用にも立ため樣な、短い鉛筆を一本盗み取り、大事に家へ持歸ると、彼の所有になつてゐた小簞笥の開きの中を、

麗に淸め、今の鉛筆を半紙に包んで、まるで神樣でもある樣に、その奥の所へ祭つて置いて、淋しくなるとは、開き戸をあけて、彼の神樣を拜んでゐた。その當時、木下文子は、彼にとつて、神樣以下のものではなかつたのである。

その後文子の方でもどこかへ引越して行つたし、彼の方でも學校が變つたので、いつか、忘れるともなく忘れてしまつてゐたのだが、今池内光太郎から、木下文子の現在を聞かされて、相手は少しも知らぬ事柄ではあつたけれど、その樣な昔の恥かしい思出に、彼は思はず赤面してしまつたのであつた。

雜沓中の孤獨といつた氣持の好きな、柾木の樣な種類の厭人病者は、淺草公園の群集と同じに、汽車や電車の中の群集、劇場の群集などを、寧ろ好むものであつたから、彼は芝居のことも世間並には心得てゐたが、木下芙蓉と云へば、以前は影の薄い場末の女優でしかなかつたのが、最近ある人氣俳優の新劇の一座に加はつてから、グッと頭出して、立女形ではないけれど、顏と身體の壓倒的な美しさが、特殊の人氣を呼んで、一座の女優中でも、二番目位には羽振りのよい名前になつてゐた。柾木は、かけ違つて、まだ彼女の舞臺を見てはゐなかつたが、彼女についてこの程度の智識は持つてゐた。

その人氣女優が、昔々の幼い戀の相手であつたと分ると、厭人病者の彼も、少しばかり浮々して、彼女が懷しいものに思はれて來るのであつた。それが今では、池内光太郎の戀人であらうとも、どうせ彼には出來ない戀なのだから、一目彼女の舞臺姿を見て、一寸女々しい[illegible]持になるのも、惡くないなと感じたのである。

彼等がK劇場の舞臺で、木下芙蓉を見たのは、それから三四日の後であつたが、柾木愛造に取つては、誠に幸か不幸か、それは丁度立女形の女優が病氣欠勤をして、その持役のサロメを、木下芙蓉が代演してゐる際であつた。

二匹の鯛が向き合つてゐる樣な形をした、非常に特徴のある大きな目や、鼻の下が人の半分も短くて、その下に、絶えず打震へてゐる、やゝ上方にまくれ上つた、西洋人の樣に自在な曲線の脣や、殊にそれが、婉然と微笑んだ時の、忘れ難き魅力に到るまで、その昔の俤をそのまゝ留めてはゐたけれど、十幾年の歲月は、可憐なお下げの小學生を、恐ろしい程艷麗な奈き女性に變へてしまつたと同時に、その昔の無邪氣な天使を、柾木の神樣でさへあつた聖なる乙女を、いつしか、妖艷比もあらぬ魔女と變じてゐたのである。

柾木愛造は、輝くばかりの彼女の舞臺姿に、最初の程は、恐怖に近い壓迫を感じるばかりであつたが、それが驚異となり、憧憬となり、遂に限りなき戀戀と變じて行つた。大人の柾木が、大人の文子を眺める目は、最早や昔の樣に聖なるものではなかつた。彼は心に恥ぢながらも、知らず識らず舞臺の文子を汚してゐた。彼女の幻をかき抱き、彼女の幻を打擲した。それは、隣席の池内光太郎が彼の耳に口をつけて、囁き聲で、芙蓉の舞臺姿に、野卑な品

誹を偏へ續けてゐたことが、彼に不思議な影響を與へたのでもあつたけれど。

　サロメが最終の幕だつたので、それが濟むと、彼等は劇場を出て、近處への自動車に這入つたが、池内は殘り心得顏に、その近くのある料理屋の名を、運轉手に指圖した。柾木愛造は池内の下心を悟つたけれど、一度芙蓉の素顏が見たくもあつたし、それに、サロメの幻に壓倒されて、夢うつゝの氣持だつたので、強いて反對を唱へもしなかつた。

　彼等が料理屋の廣い座敷で、上品な劇評などを交はしてゐる内、案の定、そこへ和服姿の木下芙蓉が案内されて來た。彼女は襖の外に立つて、池内の見上げた顏に、ニッコリと笑ひかけたが、ふと柾木の姿を見ると、作つた樣な不審顏になつて、目で池内の説明を求めるのであつた。

「木下さん。この方を覺えてませんか。」

　池内は意地惡な微笑を浮べて云つた。

「エヽ」

　と答へて、彼女はまじまじした。

「柾木さん。僕の友達。いつか噂をしたことがあつたでせう。僕の小學校の同級生で、君を大變好きだつた人なんです。」

「マア、私、思ひ出しましたわ。覺えてますわ。やつぱり幼顏つて、殘つてゐるものでございますわね。柾木さん、本當にお久しぶりでございました。わたくし、變りましたでせう。」

　さう云つて、叮嚀なおじぎをした時の、文子の巧みな嬌態を、柾木はいつまでも忘れることが出來なかつた。

「學校中での秀才でゐらつしやいましたのを、私、覺えてをりますわ池内さんは、よくいぢめられたり、泣かされたりしたので覺えてますし。」

　彼女がそんなことを云ひ出した時分には、柾木はもう、すつかり壓倒された氣持であつた。池内すら彼女の敵ではない樣に見えた。

　小學時代の思出話が、雜談に移つて行つた。池内は酒を飲んで、雄辯に彼の劇通を披瀝した。彼の議論は誠に雄辯でもあり、氣が利いてもゐたが、併し、それはやつぱり、彼の哲學論と同じに、少しばかり上辷りであることを免れなかつた。木下芙蓉も、少し醉つて、要所々々で柾木の方に目まぜをしながら、池内の議論を反駁したりした。彼女にも、劇論では、柾木の方が(通ではなかつたけれど)本物でもあり、深くもあることが分つた樣子で、池内には揶揄をむくひながら、彼には敎へを受ける態度を取つた。お人よしの柾木は、彼女の意外な好意が嬉しくて、いつになく多辯に喋つた。彼の物の云ひ方は、芙蓉には少し難し過ぎる部分が多かつたけれど、彼の議論に油がのつてきた時には、彼女はぢつと話手の目を見つめて、讃嘆に近い表情をさへ示しながら、彼の話に聞入るのであつた。

「これを御縁に、御ひいきを御願ひ致しますわ。そして、時々、敎へ

て頂き度いと思ひますわ。」

別れる時に、芙蓉は眞面目な調子で、そんなことを云つた。それが滿更ら御世辭ではない樣に見えたのである。

池内にあてられることであらうと、いささか迷惑に思つてゐたこの會合が、案外にも、却つて池内の方で嫉妬を感じなければならない樣な結果となつた。芙蓉が女優稼業にも似げなく、どこか古風な思索的な傾向を持つてゐたことは、寧ろ意外で、彼女が一層好もしいものに思はれた。柾木は歸りの電車の中で、「學校中でも秀才でゐらつしやいましたのを、私、覺えて居りますわ。」と云つて彼女の言葉を、子供らしく、心の内で繰返してゐた。

三

それ以來、世間に知られてゐる所では、柾木愛造が木下芙蓉を殺害したまでの、半年ばかりの間に、この二人はたつた三度（しかも最初の一ケ月の間に三度丈け）しか會つてゐない。つまり、芙蓉殺害事件は、彼等が最後に會つた日から、五ケ月もの間を置いて、彼等がお互の存在を已に忘れてしまつたと思はれる時分に、誠に突然に起つたものである。これは何となく信じ難い、變てこな事實であつた。空漠たる五ケ月間が、犯罪動機と犯罪そのものとの連鎖を、プッツリ斷ち切つてゐた。それなればこそ、柾木愛造は、兇行後、あんなにも長い間、警察の目を逃れてゐることが出來たのである。

だが、これは隱れたる事實でしかなかつた。事實は、彼等は、いとも奇怪なる方法によつてではあつたが、その五ケ月の間も、五日に一度位の割合で、着々と芙蓉に會つてゐた。そして、彼の殺意は、彼にとつては誠に自然な經路を踏んで、成長して行つたのである。

木下芙蓉は彼の幼い初戀の女であつた。彼のフェテシズムが、彼女の持物を神と祭つた程の相手であつた。しかも、十幾年ぶりの再會で、彼は彼女のくらめくばかり妖艶な舞臺姿を見せつけられたのである。その上、その昔の戀人が、當時は口さへ利いたことのなかつた彼女が、優しい目で彼を見、微笑みかけ、彼の思想を畏敬し崇拜するかにさへ見えたのである。あれ程の厭人的な臆病者の柾木愛造ではあつたが、流石にこの魅力に打勝つことは出來なかつた。外の女からの樣に、彼女から逃避する力はなかつた。彼が彼女に戀を打開けるまでには、たつた三度の對面で充分だつたことが、よくそれを語つてゐる。

三度とも、場所は變つてゐたけれど、彼等は最初と同じ三人で、御飯をたべながら話をした。引ぱり出すのは無論池内で、柾木はいつもお相伴といつた形であつたが、併し、芙蓉がその都度快く招待に應じたのは、柾木に興味を感じてゐるからだと、彼はひそかに自惚れてゐた。池内が氣の毒にさへ思はれた。芙蓉は、池内に對しては、普通の人氣女優らしい態度で、意地惡でもあれば、たかぶつても見せた。相手を翻弄する樣な口も利いた。その樣子を見てゐると、彼女は柾木の一番苦手な、恐怖すべき女でしかなかつたが、それが柾木に對する

時は、ガラリと態度が變つて、藝術の使徒としての一俳優といつた感じになり、眞面目に、彼の意見を傾聽するのであつた。そして、會ふことが度重なる程、彼女のこの靜かなる親愛の情は、濃かになつて行くかと思はれた。

だが、氣の弱な柾木は、實は大變な誤解をしてゐたのだ。芙蓉の様な種類の女性は、二つ面の仁和賀と同じ様に、二つも三つもの、全く違つた性格を貯へてゐて、時に應じ人に應じて、それを見事に使ひ別けるものだと云ふことを、彼はすつかり忘れてゐた。彼女の好意は、實は男友達の池内光太郎が彼に示した好意と同じもので、彼の、古風な小説にでもあり相な、陰鬱な、思索的な性格を面白がり、優れた藝術上の批判力をめで、たゞ氣の置けない話相手として、親愛を示したに過ぎないことを、彼は少しも氣づかなんだ。彼は自惚れの餘り、池内の立場を憐みさへしたけれど、反對に池内の方でこそ、彼をあざ笑つてゐたのである。

池内の最初の考へでは、愛すべき木念仁の友達に、彼自身の新しい愛人を見せびらかして、一寸ばかり罪の深い樂しみを味はつて見ようとしたまでゞ、その御用が濟んでしまへば、そんな第三者は、もう邪魔なばかりであつた。それに、彼は柾木の小學時代の恥かしい所業については知る所がなかつたけれど、近頃の柾木の様子が、妙に熱つぽく見えて來たのも、いささか氣掛りであつた。彼はこの邊か切上げ時だと思つた。

三度目に會つた時、次の日曜日は丁度月末で、芙蓉の身體に隙があるから、三人で鎌倉へ出かけようと、約束をして別れたので、柾木はその日落合ふ場所の通知が、今來るか今來るかと、待ち構へてゐても、どうした譯か、池内からハガキ一本來ないので、待兼ねて問合はせの手紙まで出したのだが、それにも何の返事もなく、約束の日曜日は、いつの間にか過去つてしまつた。池内と芙蓉との間柄が、單なる知合ひ以上のものであることは、柾木も大方は推察してゐたので、若しかしたら、池内の奴、やきもちをやいてゐるのではないかと、やつぱり自惚れて考へて、才子で好男子の池内に、それ程嫉妬をされてゐるかと思ふと、彼は寧ろ得意をさへ感じたのである。

だが、池内といふ仲立にそむかれては、手も足も出ない彼であつたから、さうして、芙蓉と會はぬ日が長引くに從つて、耐へ難き焦燥を感じないではゐられなかつた。三日に一度は、三階席の群集に隠れて、ソツと彼女の舞臺姿を見に行つてはゐたけれど、そんなことは、寧ろ焦慮を増しこそすれ、彼の烈しい戀にとつて、何の慰めにもならなかつた。彼は多くの日、例の土藏の二階へとぢ籠つて、ひねもす、夜もすから、木下芙蓉の幻を描き暮した。目をふさぐと、まぶたの裏の暗闇の中に、彼女の様々な姿が、大寫しになつて、惱ましくも蠢くものだ。小學時代の、天女の様に清純な笑顔に、ダブツて、半裸體のサロメの嬌笑が浮き出すかと思ふと、金色の刺繡ひで粧をした、サロメの雄大な胸が、波の様に息吐いたり、腿のはいつたくましい二の腕が、

まふた一柄に蛇の踊りを踊つたり、それらの、おさへつける樣な、凶暴な姿態に混つて、大柄な和服姿の彼女が、張り切つた縮緬の膝をすりよせて、ぢつと上目に見つめながら、彼の話を聞いてゐる、いとしい姿が、色々な角度で、身體中のあらゆる隅々が大寫しになつて、彼の心をかき亂すのであつた。考へることも、讀むことも、書くことも、全く不可能であつた。薄暗い部屋の隅に立つてゐる、木彫りの菩薩像さへが、やゝともすれば、惱ましき聯想の種となつた。

ある晩、あまりに堪へ難かつたので、彼は思ひ切つて、兼ねて考へてゐたことを、實行して見る氣になつた。陰獸の癖に、彼は少しばかりお洒落だつたので、いつも外出する時はさうしてゐたのだが、その晩も、婆やに風呂を焚かせ、身だしなみをして、洋服に着かへると、吾妻橋の袂から自動車を傭つて、その時芙蓉の出勤してゐた、S劇場へと向つたのである。

豫め計つてあつたので、車が劇場の樂屋口に着いたのは、丁度芝居のはねる時間であつたが、彼は運轉手に待つてゐる樣に命じて置いて、車を降りると、樂屋口の階段の傍に立つて、俳優達が化粧を落して出て來るのを、辛抱強く待構へた。彼は嘗つて、池内と一緒に、同じ樣な方法で、芙蓉を誘ひ出したことがあつたので、大體樣子を呑み込んでゐたのである。

その附近には、俳優の素顔を見ようとする、町の娘共に混つて、意氣な洋服姿の不良らしい青年達がブラ〳〵してゐたし、中には柾木よりも年長に見える紳士が、彼と同じ樣に自動車を待たせて、そつと樂屋口を覗いてゐるのも、見受けられた。

恥しさを我慢して、三十分も待つた頃、やつと芙蓉の洋服姿が階段を降りて來るのが見えた。彼は躓きながら、慌てゝその傍へ寄つて行つた。そして、彼が口の中で木下さんと云ふか云はぬに、非常に間の惡いことには、丁度その時、違ふ方角から近寄つて來た一人の紳士が、物慣れた樣子で芙蓉に話しかけてしまつたのである。柾木はのろまな子供の樣に赤面して、引返す勇氣さへなく、ぼんやりと二人の立話を眺めてゐた。紳士は待たせてある自動車を指して、しきりと彼女を誘つてゐた。知合ひと見えて、芙蓉は快くその誘ひに應じて、車の方へ歩きかけたが、その時やつと、彼女のあの特徴のある大きな目が、柾木の姿を發見したのである。

「アラ、柾木さんぢやありませんの。」

彼女の方で聲をかけてくれたので、柾木は救はれた思ひがした。

「エヽ、通り合はせたので、お送りしようかと思つて。」

「マア、さうでしたの。では、お願ひ致しますわ。私丁度一度御目にかゝりたくつてゐたのよ。」

彼女は先口の紳士を無視して、さも慣れ〳〵しい口を利いた。そして、その紳士にあつさり詫言を殘したまゝ、柾木に何かと話しかけながら、彼の車に乘つてしまつたのである。柾木は、このはれがましい彼女の好意に、嬉しいよりは、面喰つて、運轉手に兼ねて聞知つた芙

蓉の住所を告げるのも、しどろもどろであつた

「池内さんたら、この前の日曜日の御約束をフイにしてしまつて、ひどこざんすわ。それとも、あなたお差支がありましたの。」

車が動き出すと、その震動につれて、彼の身近く寄り添ひながら、彼女は話題を見つけ出した。だが、彼女は其後も池内と三日にあげず、會つてゐたのだから、これは無論御世辭に過ぎなかつた。柾木は、芙蓉の身體の暖い觸感に、ビク〳〵しながら、差支のあつたのは、池内の方だらうと答へると、彼女は、では、今月の末こそは、是非どこかへ參りませう。など〻云つた。

彼等が一寸話題を失つて、たゞ觸覺だけで感じ合つてゐた時、俄かに車内が明るくなつた。車が、街燈やショーウヰンドウでまぶしい程明るい、ある大通りにさしかゝつたのである。すると、芙蓉は小聲で「マア、まぶしい。」と呟きながら、大膽にも自分の側の窓のシェードを卸して、柾木にも、外の窓のを卸してくれる樣に賴むのであつた。これは別の意味があつた譯ではなく、女優稼業の彼女は、人目がうるさくて、一人の時でもシェードを卸しつけてゐた位だから、まして男と二人で乘つてゐる際、たゞ、その用心に目かくしをしたまでゞあつた。同時にそれは、彼女が柾木といふ男性にたかを括つてゐた印でもあつたのだ。

だが、柾木の方では、それをまるで違つた意味に曲解しないではゐられなかつた。彼はおろかにも、それを彼女が態と作つてくれた機會だと思ひ込んでしまつたのである。彼は震へながら、又一つのシェードを卸した。そして、彼にはたつぷり一時間もたつたかと思はれた程長い間、正面を向いたまゝ、身動きもしないでゐた。

「もうあけても、いゝわ。」

車が暗い町に這入つたので、芙蓉の方では氣疲れの意味で、からかつたのだが、その聲が柾木を勇氣づける結果となつた。彼はビクッと身震ひをして、默つたまゝ、彼女の膝の上の手に、彼自身の手を重ねた。そして、段々力をこめながらそれを押へつけて行つた。

芙蓉はその意味を悟ると、何も云はないで、巧みに彼の手をすり拔けて、クションの片隅へ身を避けた。そして、柾木の木彫りの樣にこわばつた表情を、まじ〳〵と眺めてゐたが、やゝあつて、意外にも、彼女は突然笑ひ出した。しかも、それは、プッと吹き出す樣な笑ひであつた。

柾木は一生涯、あんな長い笑ひを經驗したことがなかつた。彼女はいつまでもいつまでも、さもをかし相に笑ひ續けてゐた。だが、彼女が笑つた丈けなれば、まだ忍べた。最もいけないのは、彼女の笑ひにつれて柾木自分が笑つたことである。あゝ、それが如何に唾棄すべき笑ひであつたか。若し彼があの恥かしい仕草を冗談にまぎらしてしまふ積りだつたとしても、その方が、猶一層恥かしい事ではないか。

彼は彼自身のお人好しに身震ひしないではゐられなかつた。それが彼を驅つた烈しさは、後に彼があの恐ろしい殺人罪を犯すに至つた、最

初の動機が、實にこの笑ひにあつたと云つても差支ない程であつた。

四

それ以來數日の間、柾木は何を考へる力もなく、茫然として藏の二階に坐つてゐた。彼と彼以外の人間の間に、打破り難い厚い壁のあることが、一層痛切に感じられた。人間憎惡の感情が、吐き氣の樣にこみ上げて來た。

彼はあらゆる女性の代表者として、木下芙蓉を、此上憎み樣がない程憎んだ。だが、何といふ不思議な心の働きであつたか、彼は芙蓉を極度に憎惡しながらも、一方では、少年時代の幼い戀の思出を忘れることが出來なかつた。又、成熟した彼女の、目や脣や全身の醸し出す魅力を、思ひ出すまいとしても思ひ出した。明かに、彼は猶ほ木下芙蓉を戀してゐた。しかもその戀は、あの破綻の日以來、一層その熱度を增したかとさへ思はれたのである。今や烈しき戀と、深き憎みとは、一つのものであつたとは云へ、若し今後彼が芙蓉と目を見交はす樣な場合が起つたならば、彼はゐたゝまらぬ程の恥と憎惡とを感じるであらう。彼は決して再び彼女と會はうとは思はなかつた。そして、それにも拘らず、彼は彼女を熱烈に戀してゐたのである。あくまでも彼女が所有したかつたのである。

それ程の憎惡を抱きながら、やがて、彼がこつそりと三等席に隱れて、芙蓉の芝居を、見に行き行きし出したと云ふのは、一見誠に變なことではあつたが、厭人病者の常として、他人に自分の姿を見られたり、言葉を聞かれたりすることを、極度に恐れる反面には、人の見てゐない所や、假令見てゐても、彼の存在が注意を惹かぬ樣な場所（例へば公園の群集の中）では、彼は普通人の幾層倍も、大膽に放肆にふるまふものである。柾木が土藏の中にとぢ籠つて、他人を近寄せないといふのも、一つには、彼はそこで、人の前では押へつけてゐた、自儘な所業を、ほしいまゝに振舞ひたいが爲であつた。そして厭人病者の、この秘密好みな性質には、兇惡なる犯罪人のそれと、どこかしら似通つたものを含んでゐるのだが、それは兎も角、柾木が芙蓉を憎みながら、彼女の芝居を見に行つた心持も、やつぱりこれで、彼の憎惡といふのは、その相手と顏を見合はせた時、彼自身の方で、恥かしさに吐き氣を催す樣な、一種異樣の心持を意味したのだから、芝居小屋の大入場から、相手に見られる心配なく、相手を眺めてゐるといふことは、決して彼の所謂憎惡と矛盾するものではなかつたのである。

だが、一方彼の烈しい戀慕の情は、芙蓉の舞臺姿を見た位で、いやされる譯はなく、さうして彼女を眺めれば眺める程、彼の滿たされぬ慾望は、いやましに、深く烈しくなつて行くのであつた。

さて、さうしたある日のこと、柾木愛造をして、愈ゝ恐ろしい犯罪を決心させるに至つた所の、重大なる機緣となるべき、一つの出來事が起つた。それは、やつぱり彼が劇場へ芙蓉の芝居を見に行つた歸りがけのことであるが、芝居がはねて、木戸口を出た彼は、嘗つての夜

の思出に刺戟されたのであつたが、ふと芙蓉の素顔が垣間見たくなつたので、闇と群集にまぎれて、ソッと樂屋口の方へ廻つて見たのである。

建物の角を曲つて、樂屋口の階段の見通せる所へ、ヒョイと出た時である。彼は意外なものを發見して、ハッとして、再び建物の蔭に身を隱さねばならなかつた。といふのは、そこの樂屋口の人だかりの内に、かの池内光太郎の見なれた姿が立混つてゐたからである。

探偵の眞似をして、先方に見つけられぬ様に用心しながら、ぢつと見てゐると、やゝたつて、樂屋口から芙蓉が降りて來たが、案の定、池内は彼女を迎へる様にして、立話をしてゐる。云ふまでもなく、うしろに待たせた自動車にのせて、彼女をどこかへ連れて行く積りらしいのだ。

柾木愛造は、先夜の芙蓉のそぶりを見て、池内と彼女との間柄が、相當深く進んでゐることを、想像はしてゐたけれど、目の當り彼等の親しい様子を見せつけられては、今更らの様に、烈しい嫉妬を感じないではゐられなかつた。それを眺めてゐる内に、彼の秘密好きな性癖がさせた業であつたか。咄嗟の間に、彼は池内等のあとを尾行してやらうと決心した。彼は急いで、客待ちのタキシーを傭つて、池内の車をつける様に命じた。

うしろから見てゐると、池内の自動車は、尾行されてゐるとも知らず、さもお人よしに、彼の車の頭光の圏内を、グラ〳〵とゆれてゐたが、暫く走る内に、こちらから見えてゐる背後の窓のシエードが、スル〳〵と卸された。いつかの晩と同じである。だが、卸した人の心持は、恐らく彼の場合とは、全く違つてゐるであらうと邪推すると、彼はたまらなくいら〳〵した。

池内の車が止つたのは、築地河岸のある旅館の門前であつたが、門内に廣い植込みなどのある、閑靜な上品な構へで、彼等の媾曳の場所としては、殊に格好の家であつた。彼等が、さういふ場所として、世間に知られた家を、態と避けた心遣ひが、一層小憎らしく思はれた。

彼は二人が旅館へ這入つてしまふのを見届けると、車を降りて、意味もなく、そこの門前を行つたり來たりした。戀しさ、ねたましさ、腹立たしさに、物狂はしきまで興奮して、どうしても、このまゝ二人を殘して歸る氣がしなかつた。

一時間程も、その門前をうろつき廻つたあとで、彼は何を思つたのか、突然門内へ這入つて行つた。そして、「お馴染でなければ」と云ふのを、無理に頼んで、獨りでそこの家へ泊ることにした。

手廣い旅館であつたが、夜も更けてゐたし、客も少いと見えて、陰氣にひつそりとしてゐた。彼は當てがはれた二階の部屋に通ると、すぐ床をとらせて、横になつた。さうして、もつと夜の更けるのを待ち構へた。

階下の大時計が二時を報じた時、彼はムックリと起つて、寢間着のまゝ、そつと部屋を忍び出し、森閑とした廣い廊下を、壁傳ひに影の

如くさまよつて、池內と芙蓉との部屋を尋ねるのであつた。それは非常に難儀な仕事であつたが、スリッパの脱いである、間毎の襖を、臆病な泥棒よりも、もつと用心をして、ソッと細目に開いては調べて行く內に、遂に目的の部屋を見つけ出すことが出來た。電燈は消してあつたがまだ眠つてゐなかつた二人の、囁き交はす聲音によつて、それと悟ることが出來たのである。二人が起きてゐると分ると、一層用心しなければならなかつた。彼は躍る胸を押へながら、少しの物音を立てない樣に、襖の所へピッタリと身體をつけて、身體中を耳にした。

中の二人は、まさか、襖一重の外に、柾木愛造が立聞きしてゐやうとは、思ひも及ばぬものだから、囁き聲ではあつたけれど、喋りたい程のことを、何の氣兼ねもなく喋つてゐた。話の內容はさして意味のある事柄でもなかつたけれど、柾木にとつては、木下芙蓉の、うちとけて、亂暴にさへ思はれる言葉使ひや、その懷しい鼻聲を、ぢつと聞いてゐるのが、實に耐へ難い思ひであつた。

彼はさうして、室內のあらゆる物音を聞き洩らすまいと、首を曲げ、息を殺し、全身の筋肉を、木像の樣にこわばらせ、眞赤に充血した眼で、どこととも知れぬ空間を凝視しながら、いつまでもいつまでも立ちつくしてゐた。

（つゞく）

わが心を語る

廣津和郎

チエホフの幽靈

私は二三年前に『抱月の幽靈』といふ感想を書いたことがある。私が早稻田に在學中、いろいろの先生に教を受けたが、島村抱月氏ほど心に殘る人はなかつた。いや、教を受けたと云つても、氏はその頃文藝協會と藝術座との分裂以前で、教壇に少しも興味がなかつたと見えて、めつたに我々の前に姿を見せたことはなかつた。私は（自分自身缺席勝の生徒だつたので）恐らく氏の顏をほんの指で數へる外見た事がなかつたやうに思ふ。それだのに、氏が吐く溜息の魅力、痩せた身體の上に載つてゐる頭腦の重さを、兩足が支へる力を失つてゐるとでも云つたやうな、なよなよした、立つてゐる事さへ得堪へぬやうな肉體の衰滅の魅力、毎日のやうに知人或は未知の人から來る手紙に、返事を出す興味がなく、さりとて返事を期待してゐる人々には何となく氣の毒で、それを濟まないと思ふ心持に始終責められながら、一日一日、一ケ月二ケ月、一年二年と、歳月かけて積み重ねられて行く、さう云つた些細の事からの重い負擔に惱んでゐるやうな、疲れた、虚無的な眼の魅力――さうした魅力に捕まつてしまつたのだ。そして松井須磨子との戀愛にしても、ほんたうに戀愛を信じてゐるか信じてゐないか、自身でも解らないやうな心持でありながら、醒め切つた情熱の假定に自己を投げ込んで、人生の冒險を實驗して行つた、手の込んだ、孤獨な心境の魅力――實際それ等の魅力に私はすつかり捉はれてしまつたのだ。

だが、こんな行詰りの、それ以上に道の開けやうのない、滅びて行く事に喜びを感ずるやうな魅力に捉へられてゐるといふ事が、私には堪へられない事になつて來た。私は抱月の魅力を頭の中から、叩き捨てたくなつて來た。そして叩き捨てるための自己教訓として、『抱月の幽靈』と云ふあの感想を書いたのだつた。

けれども、氣がついて、それを意識的に捨てようと思ふ努力の、と

もすれば後戻りして行く我ながら儚い弱さ。――私は今でもやつぱり抱月氏のあの細い眼、疲れた鳥の嘴のやうに尖つた鼻、こけた頬、薄い口髭が眼にこびりついてゐる。

いや、私を捉へてゐるものは、單に『抱月の幽靈』のみではない。あの頃むさぼり讀んだ『ツルゲエネフの幽靈』も、『ガンチヤロフの幽靈』も、抱月の幽靈と同じやうに心に殘つてゐる。いや、それからあの泣き笑ひの魅力で私を壓倒したチェエホフでもさうだ。チェエホフも未だに私の心を捉へてしまつてゐる偉大なる幽靈の一つだ。

ツルゲエネフは『人生の幸福とは何ぞや？』と人に訊かれて、『それは悔恨なき怠惰だ』と答へたと云ふ。この世界の大文豪と云はれてゐるツルゲエネフは、老年になつても家をなさず、友人の佛蘭西の批評家の家に寄寓し、心ひそかにその友人の細君に思ひを寄せながら、『人生の幸福とは？』『それは悔恨なき怠惰だ！』などと考へてゐるのである。

『悔恨なき』――さうだ、この言葉の中に、この孤獨の老文豪が、如何にいろいろた反省に、自己を傷ましつづけてゐたかといふ事が解る。人生の幸福とは結局日向ぼつこだ、それも悔恨なき日向ぼつこだ、ああ、日向ぼつこさへも、悔恨なしには許されないのか――さう云つた溜息の魅力がある。『此世に用のない人』とみづから呼んで苦笑してゐた詩人の魅力がある。――そしてかうした魅力の幽靈が、未だに私を捉へて放さないのだ。

世界中で最も頭腦が重かつたと云はれてゐる此作家は、その老年に及んで、リウマチスの手術を受けたければならなかつた。その時、『自分のやうに此世に何の役にも立たない人間は、せめて痛みの記錄でも殘して置く義務がある』と云つて、たうとう麻醉藥を用ひずに手術を受け、その痛みを記憶し、そしてフロオベルの『不遇文士晩餐會』で、そこに集まつた當時の佛蘭西の作家達の前に、詳細にその痛みについて語つたと云ふ。

かうした手のかかつた、持つてまはつた、どうともならない行き詰りの魅力――自由思想家を以て任じてゐた彼が、結局かうした狹い、どうにもならない世界まで落込んで行つて、そこで溜息まじりに自己の姿を眺めてゐる、その佗しい心持の魅力――つまりさういふ個人心理の突きつめから來る魅力の幽靈が、未だに私を襲ふことを止めないのだ。

それからガンチヤロフ！　この驚くべき作家は、露西亞人の大半の性格に根ざしてゐる病菌を發見して、オブロオモフイズムと云ふ名をつけた。朝起きて、寢台から起き出ようとして、片つ方のスリッパを片足で探す時間が三十分、それから又もう一つの足でもう一つのスリッパを探すのが三十分、それで起きるかと思ふと、部屋の隅に蜘蛛の巣を見つけ、下男を呼ぶ。その拍子に、折角スリッパの上まで持つて行つた二本の足を、再び寢床の中に引つ込めてしまふ。……

オブロオモフは美しき戀人を持つてゐた。彼は彼女を愛してゐた。

彼女も彼を愛してゐた。彼女はオブロオモフの頭の好さを認め、彼の才能と力とを信じ、彼が社會に出て、社會のために働き、戰ふ事を希望する。けれどもオブロオモフは、そんな忠告に從ふ氣はない。或日彼女は熱烈にその事を彼に要求した。『さあ、一緒に出て行つて世の中のために働きませう』彼女は彼を急き立てた。彼女の熱情を見ると、彼は何とか答へなければ濟まない氣がした。けれども、彼は何か云はうと思つても、口が懶くて動かなかつた。彼は彼女が唯氣の毒になつた。そして彼女と向き合つてゐるのが苦しくなつて來た。彼はその場を逃げ出さうかと思つた。けれども、逃げようと思つても、足が懶くて動かなかつた。たうとう彼女は悲しげに云つた。『それでは、あたし一人で行きます。……さやうなら』その時始めて彼は『さやうなら』と呟いた。

一體さうした人物の何處が面白いのか、と今の若い人々は訊くかも知れない。さうだ、實際さういふ人物の何處が面白いのか、と私も自分に反問する。そこから何も生れる筈はないではないか。それは何ともかとも仕方がない行止りではないか。――それだのに、私にはやつぱりその魅力が忘れられないのである。それは人間的と云ふ意味の餘りに放恣な擴大のためとも云ひ得るかも知れない。右に行つても、左に行つても、上に行つても下に行つても、その方向を問はず、その個人心理の徹底味を過度に認めようとする習慣のためかも知れない。――そしてそれは決して聰明な習慣ではない。そんな習慣からは、きれいさつぱりと離れてしまはなければならない。自分は今は心底からさう思つてゐる。それだのにこのガンチヤロフの幽靈も亦、絶えず私を襲ふことを止めないのである。

私はこの一二年、築地小劇場でチェエホフ劇の幾つかを見た。『櫻の園』『三人姉妹』――恐らく二度位づつはこれ等の芝居を見てゐるだらう。十九の年から讀み出したアントン・チェエホフは、二十年後の今日になつても、私には益々魅力がある。見る度に私は親しみを覺える。その癖芝居を見た歸りには、『ああ、もうこれでチェエホフも餘り知り過ぎた。もうこの作家の芝居は見に來まい。彼の小説も讀むまい』と思ふ。『チェエホフの幽靈』からほんたうに離れてしまはなければ、手も足も出ないと思ふ。泣き笑ひなどには用はないと思ふ。淡彩のユウモアなどに用はないと思ふ。いくらチェエホフが人間といふものを深く知つてゐたからと云つて、彼の知り方からはもう今後學ぶべきものは何もないと思ふ。

私はこの作家を『臨終に思ひ出す作家だ』と云つたことがある。いよいよ死ぬ時になつて、若し人生の總經驗、總體の姿が、一瞬の間に思ひ出されるものであつたら、その時、太陽、月光、空氣、青空、それから肉親や愛人などと共に、チェエホフの蒼白き笑ひが、浮んで來るかも知れないと思ふ。その位彼は私の心にこびりついてしまつてゐる。彼がコレラ病が田舎に流行した時、その地方にみづから出張して、自費で患者を收容し、彼等の治療のためにせつせと働きながら、

その瞬間では、實際の事を云つて、露西亞の百姓の命の一つや二つ、死んだつて生きたつて、大局に關係はないんだけれど……』などと云つてゐたといふ事も、書物で讀んだのではなく、ほんたうにその姿を見た事があるやうな氣がしてゐる。マキシム・ゴリキイが彼を訪ねた時、頰に興奮の色を帶びながら、ゴリキイに向つて、國家が小學校教師を虐待してゐる事を憤慨し始めた彼、かと思ふと、急に調子を變へて『併し小學校の教師も亦小學校の教師です。何と云ふやくざものばかり揃つてゐるのでせう』と云ひ出した彼、かと思ふと、更に再び調子を變へて、自分の興奮が恥しくなつたもののやうに微笑しながら、『やあ、これはつまらぬことを喋べり出しました。どれ、珈琲でも飲みに行きませう』と立上つて、ゴリキイを食堂に導いて行つた彼。そして彼の所謂『やくざ者』の小學校教師達に、どしどし金をやつてしまつて、『どうして俺はこんなに貧乏なのだらう』と笑ひたから、あの澤山の短篇小說をせつせと書いてゐた彼。……これ等は現實で實際に會つた人々よりも、もつとはつきりした、その時その時の顏の表情までをそつくり見たもののやうに、私の胸にこびりついてゐる。

　それは淋しき聖者の姿だ。亡びて行く時代をどうするといふやうな、さう云つた積極的な動き方はせず、しづかに挽歌をうたつてゐる隱者の姿だ。人の命の儚さと、人生の徒勞とを說いてゐる世捨人の姿だ。――實際、かうした靜かな姿のままで別にその思想を無理强ひしない作家の影響は恐ろしい。思想を以ておそつて來る作家達の傳染性には、それに染むにしても、染まぬにしても、我々は意識的にやれる。ところが、チェエホフのやうな作家は、いつの間にか、知らぬ間に、じりじりとネダに浸み込むやうに、我々の心臟に浸み込んで來るのだ。『臨終になつて思ひ出す』と云つたのは、私のチェエホフに對する嫉妬だつた。けれども、臨終になつて、尙彼の事を思ひ出すに違ひないとしても、併し生きてゐる間、始終彼の事を思ひ出してゐることはもうやり切れない。

　そんなものを思ひ出してゐたら、實際この世に生きて行く上に、始終我手で我身を縛つてゐるやうなものだ。――私は私の人生觀の上に喰ひ込んでゐるチェエホフの幽靈を、がむしやらに捨て去らなければならない。

　最近露西亞でチェエホフの芝居を禁止したといふ事を聞いたが、露西亞通でない私は、その眞僞の程は知らない。併しそれを聞いた時、私は政治的專制が藝術の上に、そんな風に及ぶといふ事に、最初は不愉快を感じた。けれども又考へ直して見れば、それが是認出來ないものではない。私がチェエホフの魅力から逃げ出したい、逃げ出さなければ、新しい生活に這入つて行かれないといふ事を、個人的に感ずる時期に到達したのが、自分で是認出來るとすれば、一つの國の一つの時代が、チェエホフ的魅力の有害を主張する事も、亦是認しなければならないのは當然のことだ。

　その生きてゐた當時の露西亞に絕望しつくしてゐたチェエホフは、

「二十年もしたら露西亜は良くなるだらう」と云つてにこにこしながら死んだと云ふ。扨て露西亜は彼の豫言通りに、彼が生きてゐた當時の露西亜ではなくなつた。そして遲くとも良くなる意思によつて（彼の時分には虚無と絶望とにその萌芽は掻き消されてゐたのだが）今動きつゝある。その新しき露西亜は、この悲しげな豫言者の仕事を、有害と認めて禁止した。彼は墓場の陰でそれを見ながら、或は『さうだ。俺の書いたものは有害だ。俺の書いたものは、新しき諸君に取つては何の役にも立つものではない。どうか僕などの事は考へずに、どんどん進んでくれ給へ』と云ひながら、例の善良な微笑を浮べてゐるかも知れない。

扨て、わが最も敬愛するチェホフの靈よ。私も亦君のその悲しげな笑ひ、君のその聰明な、澄み切つた、そして善良な心臟に、もうつくづく飽きが來たのだ。君の存在を知つたといふ事が、私の心を高めてくれた事は確だが、それと共に、私がどうともかうとも出來ないところに落込むのをも、君は確に手傳つてくれた。――そこで、君は死んだからもういいが、生きてゐる私は、どうしても此行きづまりの穴の中から、這ひ上つて、そして遲れ走せながら、君の時代とは違つた眼、違つた意思で、改めて今の日本を見直し、その進むべき方向を見つけ、それへ向つて進んで行かなければならない。

いつか又違つた心持で、君を見直す事が出來る力が私に湧くまで、どうか君の幽靈をして、僕をおそはしめないやうにして下さい。

久米正雄の挨拶

昨年の秋、丁度私の父が死んだ時のことだつた。澤山の文壇の知己友人達が、通夜の晩に來てくれて、亡き父を送つてくれた。その中に久米正雄君夫妻も見えた。私は丁度久米君の洋行の噂を耳にしてゐたので、彼に向つて云つた。

『いよいよ外國に出かけるんだつてね』

『ああ。まあ行く事にしたんだがね』彼はさう云つて、それから私の顏を眼鏡の底からじつと見て、そして彼特有の笑顏――微苦笑を浮べて『だつて、それより仕方がないだらう。ね――』

私は彼の聲と彼の微苦笑とに、寂しい影を見た。父の死が私を寂しくしてゐたところだつたので、私は彼のその影を感ずると、默つてうなづいて、そのまま彼から眼をそらしてしまつた

――だつて、それより仕方がないだらう。ね。――私は彼の心持が解らない事はないやうな氣がした。

その後彼の送別會の晩だつた。多くの人々が久米君の首途を祝つて、いろいろのテーブルスピーチをやり、彼が外國に行くについて、いろいろの忠告をし、いろいろの注文をし、そして彼が持歸るであらうところの收穫に對し、いろいろの期待を述べた。

それ等澤山の賑かな言葉を、少しうつむき加減にして聞いてゐた久米君は、やがて人々のスピーチがすつかり終つてしまふと、それに

へるために立上つた。彼特有の微苦笑は、相變らず彼の血色の好い顏に浮んでゐたが、併し彼の姿は妙に寂しかつた。何處かに孤影悄然と云つた形があつた。彼は云はうとする言葉をはつきり摑まうとするやうに、一語一語につかへながら、音聲だけは併し彼の例の朗らかさで、

『今皆さんからの、いろいろの御忠告を聞き、いろいろの御期待を聞きましたが、併し今私が外國に行かうといふのは、皆さんの云はれるやうに、そこに希望を抱いてと云つたやうなものではないのであります。何と云つたらいいか、云つて見れば、尻尾を卷いて逃げる、と云つた心持なのです。有らゆる意味で、私といふものが、一つの行きづまりに來てゐるためなのです……』といふ意味の言葉を述べた。

私はその言葉を聞きながら、彼の正直な告白に、ひどく同感されてならなかつた。私の父の通夜の時、『だつて、それより仕方がないだらう。ねー—』と彼が云つたのと同じ心持を、彼は今違つた言葉で、その時よりも詳しく、此處で説明してゐるのだつた。『尻尾を卷いて逃げる』『あらゆる意味で、私といふものが一つの行きづまりに來てゐるためなのです……』それ等の言葉は、彼の正直さのために、眞摯な響を以て、私の胸に迫つて來た。

その時そこには、文壇の諸家が、澤山に居並んでゐたが、それ等の人々の胸に、彼の言葉がどんな風に響いたか、私は知らない。併し丁度私達の年代——大正五六年から八九年頃までの間に、文壇に出た年代の人々——我々と同年代の人々の心には、それが何等かの形で或同感——少くとも或アンダアスタンディングを與へたに違ひないと思ふ。

自然主義の後を受けて、文壇の矢面に立つた人々、丁度今中年期に達してゐる或一團の作家達は、總てめいめいの獨自性と云つたものを磨けば事足りるやうな、一つの自由主義時代に育つた人々だつた。彼等はめいめいの生き方で生き、めいめいの鑿の磨き方で鑿を磨き、そしてめいめいの獨自性を最も強く、最もはつきり出す事に力を注ぎ、そこに信念を持つてゐた。

十年乃至十四五年の間、彼等はさうして彼等の道を踏んで來た。けれども、彼等はその十年乃至十四五年の間に、それが果して自己を磨いて來たのか、それともすりへらして來たのか解らないやうな疲勞を覺えて來た。

實際個性の獨自性とは何なのであらうか？　自己の特色とは何なのであらうか？　そもそも自己とは何なのであらうか　或時は、結局生活とは、自己の探究の外にはない、などと云つた人々もあつた。自己萬能、自己の中には總てのものをうつす鏡がある。自己を掘り下げてぶつかる以外に、人間の事は解るものではない。社會の事は解るものではない。人生とは己れ自身を知る道だ。そんな風に云つた人々もあつた。

そこで、めいめいが、めいめいの思ふ通りにやつて見たのだ。その形、行く道は違ふが、併しめいめいその獨自性を探究する旅に出かけ

た事は同じだつた。私も亦その同じ信念の下に、自分の道を歩いて行つて見た。私の道は、さあ、何と云つたらいいか、自己といふものの本體は何處にあるかと思つて、一枚一枚自己のかぶつてゐる皮を剝いで行く、と云つたやうな行き方だつた。私は時々自分で自分を省みて、『こんな風に自己といふものゝ一皮、一皮を剝いて行つたところで、どうやらそこに何も生れて來るものではないではないか。丁度一皮、一皮ラツキヤウの皮を剝くやうなもので、結局剝いて、剝いて行つた最後には、「無」の外何も殘るものではないではないか』と思つて見たものだつた。

けれども、人間といふものは、自分の歩いて行く道が、平路であれ、險路であれ、それが苦しかれ、愉快であれ、何とかして自分の道を是認しようといふ性向を持つてゐる。そこに持つて來て、例の個性の探究癖である。獨自性の發揮癖である。これが自分の經驗して行く道だ、と思ふ事に、或張りを感じようとする意地である。――さうしたいろいろの心持の押し進めが、次第々々に私を前へ前へと進めて行つた。そして結局眼の前に見えたものは、虛無の洞穴だつた。

いや、そこには辿りついて見れば、我々の先達が既に幾人もゐたのだつた。私が『チエエホフの幽靈』で述べた人々は皆その先達だつたのだつた。島村抱月、ツルゲエネフ、ガンチヤロフ、チエエホフ――それ等の人々が私を慰めた魅力は、總て彼等の心臟の優しさ、溫かさだつた。彼等の物慾のなさ、彼等のつつましやかさ、彼等の上品さだつた。

それは總て美德として賞めたゝへられるべきものだつた。少くとも、我々が在來持つてゐた世界觀からは、『善』と云ふ形容詞、『美』といふ形容詞をつけなければならないところのものだつた。――そして實際美德と呼ばれ、善德と呼ばれてゐたから、倘更悪いのだ。

眞理が相對的なものであり、從つて時代的のものであるといふ事を、ほんたうに理解するといふ事は、なかなか骨の折れる仕事である。我々が或時代に眞理と思ひ込んだものは、それが實際相對的なものに過ぎないものであつても、ついそれを絕對的のものとして信じたがる。今日の『美德』が明日の『惡德』の萠芽を十分に含んでゐても、それが明日になるまでは、その眞相を見る事を、つい拒否したがるものである。

けれども、さうした眞理固執の半面には、又不思議に、それと反對な心的現象を我々は經驗する。十五才の時には眞理と思へず、莫迦莫迦しくさへ感じたものが、二十五才の時にはいつの間にか眞理と思へ、又二十五才の時には到底そんなものを認める筈のなかつたものが、四十才に達すると、いつの間にかそれを認めるやうになつてゐる。それは丁度同じやうに、時代に於てもさういふ事が云へる。十年前には、それを眞理を汚すものであると思はれてゐたものが、十年後にはその汚すものそのものが眞理であつて、眞理であつたところのものは、却つて眞理に取つては、それの發展を阻止する障礙物に過ぎな

いと思はれて來る。
自己の皮をひん剝き、ひん剝きして行つて、終に『無』に達したラツキヤウの『虛無感』――それを人生の眞相と思つてゐた私が、それに不安を覺え出したのはいつ頃であつたか、そして島村抱月の『溺息』、ツルゲエネフの『日向ぼつこ』、チエエホフの『泣き笑ひ』に面をそむけて行かなければならないと思ひ出したのは、いつ頃であつたか、兎に角いつとはなしに、私の心の『眞理』觀は動搖を覺えて來、昨日までの親友の姿が『美』や『善』と見えなくなり、否、寧ろ我をみだす『惡德』の名に於いて呼ばなければならないものに思はれて來たといふ事は、尠くとも四五年前には豫想もつかないことであつた。けれども、嘗ての『眞理』觀に動搖を覺え始めて、新しき道が確に存在してゐるといふ事を感じ始めた時、扨て振返つて見ると、何と自分は遙かに今までの道を歩いて行き過ぎてしまつたことよ。

自分が今までして來た努力、自分が受けて來た教養――それ等が何といふ執念深さで、自分の心に、身體にこびりついてしまつてゐることよ。我々が青年時代から學んだもの、知つたもの、それはみんな歐洲文明の行き詰りそのものだつたのだ。我々は青年期の好新性によつて、丁度十九世紀末の歐洲文化を、殆んど憧憬を以てさへ、取入れたのだ。我々に取つて、新しき興味の對象であつたものは、歐洲に取つては、もう更に新たなものに代らなければならない行詰りそのものだつたのだ。――つまり、我々は行詰りそのものを學んだわけだつたのだ。

學べば學ぶ程、それは今から思へば、惡かつたわけである。知れば知る程、今から思へば、行詰りの度を強めたわけである。――扨てそれ等の總ての、心身にこびりついてゐるものを、すつかり洗ひ落して、もとの白紙に歸るといふ事の、何と努力の要ることよ。

行き道に疲れなかつた足は、そこから引つ返さうとする時、如何に疲れてゐるかが、はつきり解つて來る。

正直に云つて、私の心は、今その疲勞と、洗つても洗つても、洗ひ落ちて行かない過去の汚點とに、惱んでゐる。

天好し、地よし、前よし、後よし、左よし、右よし、この不秩序な自由主義が、何と人を虛無にしか陷れない不自由主義であつた事を知つた時、私は私の周圍に、それ等の自由主義が信奉した過去の眞理『獨自性』の名に於いて、めいめいの道を歩いて行つた人々が、それぞれの行き方で、皆くたくたに疲れ切つてしまつてゐる姿を見る。『神』の聖壇にかしづいてゐた作家、『人類』の聖壇にかしづいてゐた作家、『惡魔』の聖壇にかしづいてゐた作家、『個性』の聖壇、『藝』の聖壇にかしづいてゐた作家、それぞれがそれぞれの行き方で疲れ切つてゐる。中には疲れてゐない人々もゐるが、併しその疲れてゐない人々の昔ながらの作物を見せられる事に、彼等と同時代だつた我々が、最早疲れて來てゐるのである。――何故なら、その行き止るところが解つてゐるから。

芥川君のあの自殺、自由主義文化のものに[illegible]したけれども[illegible]い、その轉換を前にしての、このチャンピョンの自殺は、結局、過去の文化の重荷に動きの取れない、それ故に神經のすりへつて行く、或一團の作家達の苦悶の最も顯著の現れだつた。『點鬼簿』から『齒車』に到る、彼の最後の諸作は、過去の文化の地獄篇である。

扨て、私は久米君の洋行前の挨拶を持出して、隨分長々と自分の感想を書いた。が、それは久米君のあの時云つた言葉が、單に久米君一人の言葉と思へなかつたからである。

何事にも興味を持ち、いかなる事にも理解を持ち、いつまでも物を見究めようとする青年の心持を持つてゐると想像されてゐた久米君が、やはり彼は彼の行き方で、『行き詰り』を感じ、『尻尾を卷いて逃げる』やうな心持になつてゐたといふ事を知つた時、私は人事でない佗しさを感じたのである。

併し誰にしても、いつまでも自分を疲れさせたままにしてゐていいものではない。行詰らせたままにしてゐていいものではない。——久米君にしても、私にしても、丁度今四十歳を前にしての心身の變動期である。世俗に云ふ『中折れ』——その時期である。生理的に云つても、何と云ふ事なく疲勞を感ずる時代である。この時期を突破すれば、肉體の上にも精神の上にも、最も力の籠つた時代が來なければならない。

『疲れ』を感じてゐる時に、歩いて行つた道を引つ返す事が、とても[illegible]い事にならうかも知らない。

いや、『疲れ』と云ふ言葉が惡いのかも知れない。先づこの言葉を私等の『字引』から拔いてしまふ事にしよう。

醫學の語るところに依ると、『疲れ』は疲勞素といふ物質のためださうだ。そして人間の體内には、又その疲勞素を食ひつくす他の物質が絶えず湧き、それと戰つてゐるのださうだ。

我々は我々の『疲勞素』を喰ひつくすところのその物質に信頼を置かう。そして過去を振切つて、新たな一歩を踏み出さう。

（四月二十九日）

藝術の社會的地位について

（游歐雜記の序）

阿部次郎

47

近松が西鶴に比して當時の社會により多く痕跡を印することが出來た理由の中には、云ふまでもなく、もう一つ、彼の藝術には二つの姉妹藝術の聯盟者があつたといふ事實も加つてゐる。それは直接に眼に訴ふる劇（人形芝居）と、耳を通して最も微妙に人心の底に忍び込む術を心得てゐる音樂（義太夫節）とである。さうしてこの二つの聯盟者は、近松以後の淨るりの歷史を規定する最も有力な契機である。脚色が理づめに複雜になつて行く傾向と、音樂——と云ふよりも寧ろ唄、抒情的歌詞——が次第に劇的要素から獨立して、語り物が唄ひ物に變形して行く傾向とがそれである。この事情は近松と、彼の後繼にして競爭者なる紀海音や、彼の後繼者出雲半二等の獨立せる作品とを比較するよりも、寧ろ近松の改作と原作とを對照することによつて、最も鮮かに見ることが出來るであらう。

私は脚色の變化を見るために出雲等の「双蝶蝶曲輪日記」を近松の「壽門松」と對照しようと思ふ。これは固より半二等の「紙屋治兵衞」や「天網島時雨の炬燵」のやうに、近松の作をそのまゝに根幹としてこれを增補し且つ改刪したものではない、從つてこれを改作のうちに入れるのは穩當でないが、獨立せる趣向を立てつゝ而も結局近松を頭にいたゞいてゐるものとして、即離の關係が一層自由なところに、兩者の覘ひ處の相違が益々根本的にあらはれて來るのである。私は特に、双蝶々の第六「橋本」の段をとつて、壽門松の山崎の段と比較する。出雲は趣向の上で故意に近松の裏を行かうとして別な道を辿つてゐるうちに、遂に原作が進みつゝある人情の大道をとり外して、頭で拵へた理詰の義理の小徑に踏迷つてしまふ。裏を行かうとすることそれ自身が既に原作に引廻されることを意味するのであるが、その

ためにお手本となるものゝ魂を取逃がして、外部的緊張を覘ふからくりに變形するにいたつては、遂に藝術的墮落の烙印を捺されても亦如何ともし難いのである。

壽門松、山崎の段の梗概は今更繰返す必要もないであらう。與次兵衞吾妻のために彼等の怨敵薬屋の彦介を傷けた難與平への義理に、與次兵衞は身のあかりをたて兼ねて山崎の家に座敷牢の憂目を見てゐる。其處には嘆きつゝも夫を愛する妻と、吾妻に焦れつゝも女房の實に感ずる夫との間の、人間的な感情のゆきかひがある。身を捨てゝ子を愛しながら猶町人道をたてぬいて必要な金を出してやりかねてゐる父と、婿を救ふために通ひつめる舅との將棋に托しての詰開きがある。死を決して廓をぬけ出して來た吾妻と女房お菊との、自然の情に基く對立と女同士の思ひやりから生ずる悲しい和解とがある。さうして深夜桝落しによそへた父淨閑の教訓によつて、女房お菊は「とまりとまりの朝晩に冷えぬやうに賴」みつゝ夫と吾妻とをおとしてやるのである。さうして落ちて行く二人は——「與次兵衞もありがたき親の恩と妻の思ひ、別れのつらさにうつとりと、氣拔けの如くよろ／＼と、前後もわかず見えければ、是吾妻じや合點か、あれは奥樣お菊樣、さらばとせめて云はんせ、エ、氣の弱いお人やと力をつくる我が身も、人目を深く忍ぶ夜のいざ相駕籠とさゝやきて」見送る人達をあとにするのである。其處には將棋や桝落しのやうな明瞭な趣向があるが、それは父子、婿舅、夫婦、妻妾などの義理と人情とをたぐり寄せ、結び合せ、煎じつめるための手段として、謙遜に主目的に仕へるべき道を踏み外すところまでは行つてゐない。此處では猶魂の眞實が最後の根柢を形成してゐるのである。

双蝶々が近松の山崎を橋本の場にかへてゐるのは、父淨閑宅を別治部右衞門宅に置きかへ、與次兵衞の座敷牢の代りに女房お照（近松のお菊）を「去らるゝとなく去るとなく、呼戻されて明暮に、しんきしんきのぶら／＼病」の位置に立たせるためである。其處に吾妻を連れて與五郎（後の與次兵衞）が相合駕籠で——壽の門松のやうに立去るのではなくて——やつて來る、手附三百兩の殘金を拂はぬ先に駆落して、かくまつて貰ひに來たのである。彼には壽の門松の與次兵衞のやうに「一天下の人よりもそなた一人に恥かしい」といふ心がない。女房の甘さにつけ込んでこれを利用する氣が先に立つ點に於いて、極言すれば母親の臍繰りをくすねるいがみの權太の等類である。「くしやらむしやらも閾高き舅のうちをさし覗き、うまし、書ねは我等が於內儀樣、さいはひあたりに人はなしと、づか／＼入て枕元、どし／＼と足音に、ふと目覺めて見合す顏」——これが夫婦再會の場面である。疑ひもなく作者は此處で與五郎の態度に對する觀客の笑ひを狙ふ

の中に入れてゐるのである。駈落の理由をきいてお照は易々と吾妻をかくまふことを請合ふ——「コレ何じやいのふ、サアそれも皆私がとが、お氣にいるよに生れたら、其御苦勞はさせませぬ」——彼女にはお菊のやうな自然の嫉妬の影だにさゝない、彼女は貞女の人形に過ぎぬ。併しこの人形には人形相應の理論があつて、與五郎を一緒に置くことを肯じない、「お二人ながらかくまへば、主にあひたいばかりに、傾城迄を引入れてと、一途に堅い父様の御叱りはしれてある」からである。與五郎が別に押問答もなく立去らうとするところを、いつの間にか出て來た舅の治部右衞門が呼とめる「連れて走れば同罪遁れず、關破りの與五郎」であることを承知してゐる點に於いて、彼は流石に娘や婿のやうに馬鹿ではないのである。併し彼が與五郎をかくまふにも再び化石した名聞の條件がつく「氣に入らぬ女房を持て貰ふ追從に、かくまつたと云はれては、此橋本治部右衞門人中へ面啓かすまぬ」、故に與五郎はお照が去狀を請かなければならないのである。此處でこの場面には始めて葛藤に似たものが生ずる。さうして多少の躊躇の後、舅の「のつぴきさせぬ詞詰」にまけて與五郎は去狀を書き、吾妻が「こりや吾妻が預ります、私が見る前で渡しては道立たず：：私が預りや事すむ」とこれを收める。これでこの一小節の波瀾には一應の休止が來る。四人の安價な「道」はこれで一通りたつたのである。作者は心に根ざすところ少きこの安價な道立に一小節の峠を構へた。壽門松にあつては極めて重きを置いて描かれてゐる夫婦、妻妾、婿舅の心の交渉は、此處ではたゞ通りすがりに掠められてゐるに過ぎないのである。作者自身が用ゐてゐる「詞詰」といふ言葉が最もよくこの脚色に當嵌る。義理も人情も共に詞詰に外ならぬ。

折しもあれ山崎與次兵衞（後改めて淨閑）白髮あたまのおつぼろ髮、供をも連れず門口におとなふ。三人が奧に隱れて治部が招じ入れる。「何氣なけれど二人共、奧へ入る風見て見ぬ顏、見付られてもさあらぬ風、互に一物ある顏なり」、此處に二老人の狐狸問答が先づ最初のモティフを彈じ出す。與次兵衞の要求するところは、嫁のお照を戾すことである——「嫁にとるからおれが娘、のらめが性根が直らずば、お照で後をたてる所存」。治部右衞門はこれを信じない。金銀を惜んで我子をも見殺しにする親に、何で他人の子であとをたてる所存があらう——此處で舅は急所を突いて對手の鎧元にきり込む。併し與次兵衞淨閑はこれをはづして逆襲を試みる、お照を離す氣がなくば何故に婿の與五郎をひつこんで置くか。それは親の吝さにのつぴきならぬ駈落をした聟の難儀を見かねるからである。「ひつこんだと云はるゝが面倒さに、縁きつてかくまふた」と先刻用意の理窟が此處に使用される。併し作者はこの理詰めな浪人の戰鬪準備にも、竹箆返しを喰ふべき弱點

を拵へて置いたのだつた——「身上が氣違ひで、引込んで無理ひまとり、養ひをとるやうな聟をかへる思案じやの」からいふ町人らしく野卑なる、我子をかくまつてくれることを感謝する氣も氣の毒がる氣もない與次兵衞の言葉に憤激して治部右衞門は「人非人」と罵りかへす。さうしてこの言葉爭ひから、與五郎を助けるための最初の出發點を忘れて、二老人は年甲斐もなく相互の意地のために刀をぬいてきりあひを始めるのである。壽の門松の濡髮と治部右衞門はかうではなかつた、治部右衞門は婿のために金を出させる目的をしつかりと腹の底に持つて、連日將棊にこと寄せては、あらはに云ふことなしにじりじりと攻め寄せる。濡髮は、これに對して、與次兵衞をおとしてやつてから、秘密に金であつかふ策戰を以て相手に對局する。さうして治部右衞門が將棊を投付けるのもこの攻防の主點がせつぱつまつたときの最後の爆發に外ならぬのである。然るに双蝶々の二老人はこの主點を外れた罵り合ひによつて、遂に刀をぬき合ふまでにのぼせ上る。そのために舞臺には立まはりといふ賑かしの餘興が湧いて來るが、二老人の思慮と人物とはこれによつて滅茶々々にされるのである。若し其處に思ひがけぬ仲裁者が現れなかつたら、彼等はそのまゝ切死もしかねまじき形勢である。併し作者は勿論意外の仲裁者を用意してある。相駕籠の片棒をかついで來た甚兵衞老人は吾妻の實の父であつた。彼は彼女の父であるといふ假定のもとに、彼女を思ひきらせることを引受ける。治部右衞門は「一端武士のぬいたる刀」の手前少しくテレながらも、鞘ごとにこれを甚兵衞にあづけて、「吾妻が返答一つに極る」その場の結着を待つために、與次兵衞諸共に奧に入るのである。吾妻の斷念によつて關破りの咎がどう始末されるかは、今や二老人の顧慮の外に置かれる。

甚兵衞一人になつたところに吾妻が出て來る。立聽が自由自在に出來る芝居に於いても、特に先程與次兵衞の來訪を知つてゐてその場の仕儀を案じなければならぬ立場にゐながらも、この場合何にも知らぬ事にされてゐる彼女は「落付し樣子を道に待合す放駒、知らさんと甚兵衞をたづねて出て來るのである。此處には勿論久しき親子の名乘合ひと、思ひきれとの嘆願の場が描き出される。「コレ聞わけてたも聞分てと、すゝり上〳〵わつとばかりにむせ返る、駕籠が涙は息杖の休む隙なき思ひなる」とはいへこの場合吾妻が思ひきることは、事件の解決にとつて何故に必要であるかを彼は說明しない。お照と吾妻とが彼か此かの岐路に立つてゐる點に、現在の問題があるならばそれは問より當然であるが、治部右衞門の白にあるやうに「傾城を請出し、てかけめかけにせう共誰咎めぬ身上」ならば、何を苦んで二人の老人は吾妻の斷念にそれほどの重さを置かうとするのであるか。吾妻といふ妾

があつては女房のお照がいとしぼいといふやうな、德川意識にとつての閑問題が此處で强調されてゐるのでないことは勿論であるとすれば、吾妻の斷念はたゞ身請金が助かるといふ結果を生ずるだけで、この場の主要問題なる關破りの咎は、そのためによくも惡くもならないのである。併し吾妻はこの點については何の反問もしない。彼女はただ與五郎に對する戀と義理とが重つて思ひきられぬ心を訴へる。「よふ思ふても見さしやんせ、お照樣といふ奧樣の、あると知りつゝ逢ふた客、始の勤後の色、めうとになろ共去らさう共、御顏も思やせぬけれど、いやな客から請出すと、まゝならぬ身は是非なくも、つれてのいたる與五郎樣」——此處には明かに壽門松の文句の意識せる模倣がある、而も「與次兵衞樣に逢ひましたは女房にならうとも、手かけ妾にならうとも申し交した事もなく、勤ばかりも馴染だけ夜を日にますおいとしさ」以下數行の原文に比較すれば、何といふ詩と散文との相違であらう。更に彼女が言葉をついで「輕い身ならそもないに、逢ひかゝるから今迄も、重ん節句年の暮、お世話になつた此吾妻、今又私故難儀のお身、任せぬ時に振捨て、どうまあ義理がたつ物ぞ」といふとき、彼女の心に重いものは、戀よりは、重る節句年の暮の御世話で、それさへなければ手輕に思ひきれさうにも響いて來るのである。兎に角彼女は男への情と父への義理とに挾まれて、お定まりの「有あふ刀」拔くより早く自害してこの矛盾から脫れようとする。さうして父と娘とがとめる死ぬるでせり合つてゐるところに、豫定通りに治部右衞門が出て來て吾妻死ぬるに及ばぬといふのである。彼は正代の刀五郎正宗を賣代なして身請金を拂ひ、關破りのとがをさつぱりとぬいた上「與次兵衞に鬱憤いふ」といふのである。この一語が舞臺裏から與次兵衞の出場を促す。彼の「頭まるめた法體姿」が舞臺と見物とを同時に驚かす。「與五郎が惡事を引受、今からおらが與五郎入道、法名もつけておいた譯の淨閑、息子めには名を讓つて山崎與次兵衞」——此處で人物の名が、お照とお菊との差を除いては、壽門松と一致することになる。作者は壽門松の記憶を利用して、此處に一つの末梢的緊張を舞臺の上に拵へ出したのである。茲に至つて種あかしされたところに從へば、彼は最初から吾妻の身請金を出してやる氣で來たのだつた。「ありやうは今日來た心も、息子めが關破る、金でたけりや拔はれぬ、あつかや直に親の手から請出してやるも同然、こなたの手前云譯がすまぬから、氣を揑つて先刻のしだら」——壽門松の淨閑が金を出してやらぬのは「金の罰の當つた奴まだ此上に惜氣もなう、金出して如何なる天罰大難にがな遭ひ居ろかと、可愛いほど猶出しかねる」からであつたが、此處の淨閑は天罰を恐れるのではなくて、相手の氣を兼ねるからその「氣を揑つて」その上で出してやらうとしたのであ

る。併しこの種明しによつて、彼と治部右衞門とのきりあひも、甚兵衞が吾妻に斷念を强ひることも、結局事件そのものから生ずる必然の葛藤ではなくて、作者が詭辯的論理の危い綱を渡つて見物に面白い手品を使つて見せたに過ぎぬことが證明される。假令治部右衞門が娘の緣をきつて與五郎をかくまつたのは、放埓者の絆を去つて、自分をも養つてくれるやうないゝ聟にのりかへようとする魂膽からではないかといふ疑があつたにせよ、この疑に對してむきになつて憤慨する對手の態度を見れば、その底意は既に十分に明瞭でなければならぬ。故に壽門松の淨閑は治部右衞門から將棊を投げつけられるのをきつかけに、自分から折れて出てその眞情を吐露するのである。固よりその眞情が結局治部右衞門の目論見と相違するところから、後者が未解決のまゝすご〳〵と歸つて行くことも、其處に吾妻の出場となり、吾妻とお菊との問答となり、最後に桝落しの說教となつてこの場の解決が始めて出來ることも、壽門松にあつては自然であるが、それはもう一段の曲折を準備してゐる奧深き近松の趣向に於いてこそ當然なのであつて、双蝶々の趣向が治部右衞門の心を見屆けるといふ一點にかゝつてゐる以上、あれだけの問答の後更に罵り合つて刀まで拔く必要は、老人の片意地を除いて果して何處にあるであらうか。彼はその前に既に最後の種明しをすべき位置に立たされてゐたのである。然るに作者はその間に一つの短い立廻りと、久しぶりに名乘り合ふ親子の愁嘆場を挾入することが舞臺を賑かすために必要であることを感じた。かくて立廻りが甚兵衞の登場を誘ひ出し、甚兵衞と吾妻との邂逅が一場中最も重きをなす親子の愁嘆を誘ひ出す。この誘ひ出されたものがそれ自身の舞臺効果を持つことは云ふまでもないが、本筋の進行はただにそのために延期されてゐるばかりではなく、全體としての劇的論理の發展を阻礙されてさへゐるのである。この迂路は結局治部右衞門から兩方を貰らうとする一つの決心を引き出すための用をなしたに過ぎない。而もこの決心は二老人の立廻りの前に直ちに發生すべき順序になつてゐたのである。事件の進行——次に挾入された大小二つの波瀾——さうしてこの波瀾によつて本質的に何の進行をも見ざる解決。戲曲構成のからくり的動機は愈々出でて愈々明かなりといふべきである。

「其處にゐるは吾妻女郎、女房にとも約束しやうが、了簡して爰になつて、あの性根の直るやうに頼みます〳〵、お照を本妻に立て置いて下され」——吾妻に異存があらう筈はない、彼女が前のお照の離縁狀をひきさいて、此處にこの戀の葛藤はめでたく——甚だおめでたく解決される。併し幕はまだこれではしまらない。作者はこれで一場の結末をつけるには未だ活劇の足らぬことを感ずる。近松以後人形芝居と歌舞伎芝居と兩者に共通な紋切り型の幕ぎれを作るために、騷々しい

シュルース・アッコルドの準備が始められる。「なにもかも目出たい事の上盛と、悦びあふは富貴の門口」庄屋名主があはただしく駈つけて、代官所の命令のまゝに治部右衛門淨閑を同道し去る。吾妻與次兵衛（與五郎）のために武家を殺して立のいた濡髮の詮議であろと推察して兩人は狼狽する。様子を見に「まつかせと尻引からげ飛んで行く」甚兵衛。どやどやと押し込んで來る亡八の追手と家宅搜索。押入の蒲團の間にかくれる吾妻與次兵衛。官命と稱して家財道具に封印をつけ亡八の家宅搜索を妨ぐる僞役人の一隊。たゞもう慌しい舞臺の混雜であるが、一騒すんで封印された蒲團を出かねてゐる吾妻與次兵衛を、今は濡髮の兄弟分になつた放駒が救ひに來る。封印は亡八の者を追ちらすために放駒の書いた狂言だつたのである。併し押入れから出された與次兵衛はもう放心してゐる——「親父様はずんぼろ坊、坊主〳〵小坊主、いろいけな事いふた、ほろゝん〳〵〳〵や」。駈出す與次兵衛、留ようとして馬鹿力にひきずられ行く吾妻。茲で漸く幕は下りることを許されて、舞臺は次の「道行菜種の亂咲」にうつるのである。

以上私は近松の壽門松と比較しつゝ双蝶々橋本の段を詳しく解剖した。この面白くもない細説を試みたのは、急がば廻れ勢多のから橋を廻つて、淨瑠璃推移りの経路を追跡するためである。固より時代物を長所とする出雲一座の淨瑠璃の技術を双蝶々のやうな世話物一つによつて概評することが既に無理であるばかりではなく、彼等の作品を見て海音は固より文耕堂半二等の特色を拂拭するの猶更亂暴に過ぎることは、私もよく承知してゐる。併し彼等は近松以後の淨瑠璃といふ一つの流れに漂ふ木の葉である以上、流れの方向を見ようとする者には、一つの木の葉も亦大體の傾向を看取させるには足るのである。双蝶々曲輪日記は吾々に流れの如何なる方向を行きつゝあることを見せるか。それは脚色の複雜變化などが關心の中心となつて、その意味に於いて院本は益々幅廣くなりつゝあることを示す。橋本の一段をとり出しただけでも既にこの傾向は明かであるが、双蝶々の丸本を見ればそれは愈々鮮明を加へるであらう。双蝶々の題名が示すやうに吾妻與五郎の情話は、濡髮長五郎放駒長吉の筋となひ合はされる、而も全體に於ける釣合から云へば後者の方が寧ろ重きをなしてゐるのである。それに壽門松の難與平が八幡の南與兵衛の插話に膨脹する。かくてそれは四年前（延享二年）同じ作者の手になつた「夏祭浪花鑑」のあとを追つて九冊の世話物といふ大きさを持つやうになつたのである。固よりこの世話物の位置の獨立がその結構の複雜を外部から要求する理由となつたことも亦疑ひ難い。凡そ世話物が單獨に一日の興行を充たすやうになつたのは何時からであつたか。元

祿十六年の曾根崎心中が日本王代記の切狂言として舞臺にかけられたことは明かであるが、音樂學校の邦樂年表によればその後の世話物は、或ひは切狂言として明記せられ、或ひは獨立して記載されてゐて他の院本との配合如何は明かでない。併し貞享以來一日の興行が五段續を原則としてゐたことを考へ合せれば、特別の事情なき限り、主として三段から成る近松の世話物は、年表の記載如何に拘らず他の院本と併せ演ぜられたものと見るべきであらう。享保三年の壽門松上中下三段も、恐らくそれだけで一興行を背負つて立つたのではあるまい。ただ近松の力によつて次第に重きを置かれるやうになつた世話物は、彼の死後遂に獨立して五段若くはそれ以上に發展した。さうして責任の重さと分量の膨脹が脚色の複雜を招致したことは、たゞそれだけならば別に怪むにも足りないのである。

併し實際の事情はたゞそれだけではなかつた。世話物のやうに膨脹する必要なく本來五段續を普通とする時代物も亦益々脚色の變化を專らとするやうになつて行くところを見れば、其處には作者と觀客との兩者を通じて、もつと內面的な理由がなければならぬ。この內面的理由は魂の表現が次第に主要關心から遠かつて、脚色の複雜、變化の目新らしさ、舞臺の新趣向などが人心の向背を決する第一契機となり行いたことである。約言すれば刺戟の強い娛樂が民衆の淨瑠璃に對する期待の中心となり、作者も亦これに追隨せるのみならず、寧ろ衣服の流行に於けるが如く自ら先驅して刺戟の上に刺戟を積み重ねて行つたのである。固より刺戟の強さや新しさが演劇のやうな藝術の盛衰を支配することは何時の時代にも變りがないが、それが魂の表現の要求を離れて、これでもかこれでもかの末梢的刺戟の追及として獨立するに從つて、藝術の人生に於ける位置は次第に特殊的になる。それは一般に人生を高める力深める力としての名譽ある地位を捨てゝ、一時の酩酊を準備する人生の酒場──多くの場合に於いては惡酒を賣つて頭痛を製造する人生の酒場──となつてしまふのである。人は最早其處に日常生活の自己との聯絡を求めようとはしない。若くは、舞臺の上に變化せられた自己の姿を發見して、日常生活の煩しさから超脫しようとはしない。單純に人生からきり離された劇場內の狂言綺語によつて一日の娛樂を恣にすればそれでいゝのである。民衆が藝術をかういふ地位に置き、藝術家が偏へに民衆のこの趣味に媚びんとするとき、藝術は社會に働きかける創造的意義を失ふ。それは時代の生活相を反映する機能をさへなくなしてしまつて、たゞその時代の孤立せる趣味を──彼等の喜んで見ようとする夢幻を反映するにとゞまるのである。私は既に近松自身の中にさへこの傾向が含まれてゐることを指摘したが、それは彼の後にいたつて急速に發育する。固よりその

の浄瑠璃が、觀客も作者も、全然この邪路に陥つてしまつたと見るのは誇張であつて、大入のレコードとして傳へられてゐる延享三年の菅原傳授手習鑑や、寛延元年の假名手本忠臣蔵や、寶暦元年の一谷嫩軍記などを讀み、又近松の國姓爺合戰その他のものが繰返し復演されたことを考へ合せれば、人の魂を擱む藝術の正當な力が全然無視されてゐたのでないことは明かであるが、それ等の作品でさへ不自然な曲りくねつた技巧の臭味を多分に含んでゐることは、如何にしても否定し難いのである。所謂時代の趣味も作者の趣向も段々に、琉球組にいふ「嶮しき山のつゞらをりの、かたたへまはり、此方へまはり、くるりくるくるとしたる」ものを愛するやうに傾いて行つた。而もそれは「くるりくるくるとしたる心」を取おとしてゐるがゆゑに、「面白や」といふよりも寧ろ煩はしさが先に立つのである。

固より趣向の複雑脚色の變化はそれ自身で墮落であるといふのではない。それが感情の深さと眞實とを失はずに、自然に人生の複雑と廣さとをとり入れて來るやうならば、趣向脚色の複雑は浄るりの非常な進歩となつたであらう。併し病ひはこの二つのものが分離したところにある。趣向が複雑になるにつれて感情は却つて淺く不自然になつて行つた。脚色の變化が劇しくなると共に人生の相は益々固定したいびつなものにされた。娯樂が主な動機となるときこの偏倚は到底避け得られない。作者が新しい趣向立に肝膽を碎き、近松直後に始まつた合作の風が益々局面の變化を劇しくして行く裏面に、理詰めな不理窟が如何に拵へられた論理を發展さして行つたかは双蝶々橋本の段の一例のみによつても明かであるであらう。併し假に魂の表現を離れて抽象的な劇術といふやうなものがあるとすれば、それは確かに近松以後にいたつて益々發達して行つた。内容の空虚と不自然とが時として注意深き觀客の眼にも隠されるほどに、舞臺の上のさし潮ひき汐の呼吸が巧妙に利用される。魂の葛藤や靜かな奥深い發展がない代りに、舞臺の上には常に目先の賑かさが用意されてある。さうして抒情的若くは叙事的な地の文が次第に分量を減じて、白の受渡しの呼吸一つで行かうとする傾向が非常に勝つて來たことは、例へば双蝶々の第四場米屋の段を讀めば一目瞭然であらう。それは容易に白と卜書きとに分解して普通の脚本の形式を與へ得るほど劇的になつて來てゐるのである。——私がかういふのは、凡そ劇的になるとは双蝶々のやうになることだといふ意味では勿論ない。たゞ劇的な方向は、魂の表現と離れて娯樂に奉仕する動機と結合するとき、その一つの場合としてこのやうな流れを生ずる。近松以後の浄るりは正にこの河床を流れて行つたといふのである。浄るりがこの河床を流れながら益々歌舞伎劇との交渉を親密にして、遂にはその劇としての長所が、困難な約束の下に

ある人形芝居を離れて歌舞伎劇の中に花咲いたことは――かくて淨るり自身の衰微を來したことは、決して不思議ではないのである。それが唄ひ物の分子を減じて語り物の要素を廓大して行つた結果、更に語ることそれ自身よりも舞臺の上の直現を必要とし、人形及び歌舞伎劇と到底離すべからぬものとなつて行つたことは極めて自然である。さうしてこの傾向の中に音曲としての自己崩壞作用がかくされてゐたのである。「淨瑠璃譜」(諸事聞書往來)によれば、双蝶々曲輪日記は「趣向は能けれど、夏祭りと同事、團七に徳兵衞を前髪にせしやうな狂言と、はなはだ不入なり、此趣向歌舞伎にては長吉長五郎とて大入をなし、今も歌舞伎の狂言となり、操りには餘りいださず」とある。併し義太夫年表によれば書卸しから萬延までに繰返されたこと二十一回決して興行回數の少い部類ではない。私も十數年前文樂で故攝津大掾の橋本をきいた。故に私が双蝶々を比較に持つて來たことは決して大勢を見るに不都合な作品を持出したといふことにはならないであらう。寧ろ大勢が歌舞伎との融合に向ひつゝあつたのである。

　さうして別に唄ひ物としての要素が獨立するに從つて、段物としての淨るりが次第に分解し行くべき自然の約束が他の一面に準備されてゐる。

蘇峰自叙傳（追憶記）

蘇峰　徳富猪一郎

第十二　熊本、東京、京都

前記の如く予が熊本を出發以前に、予の從兄横井時雄氏——當時伊勢時雄氏——は、既に上京してゐた。又た予と縁續きである金森通倫氏は、既に京都に赴いてゐた。予は別に彼等と何等の聯絡はなく、只だ父母にその志を告げ、父母の許を得て上京する事となつた。許可とは云ふけれ共、父母も當初よりその積りであつたらうから、實は双方の考が合致したと云つてもよからう。

扨予が上京するに就いては、誰か予を伴ひ行く人があらうと吟味したが、伯父矢島直方——母の兄——の知人にて、古莊一雄氏が近々上京するとの事にて、予は愈々その人に伴ひ行かるる事となつた。古莊氏は當時司法省の役人であつたが、先輩井上毅氏等とも懇意であつて、先づ前途有望の少壯官吏であつた。彼は眉目秀麗の漢にて、若き夫人と共に、今日の言葉で云へば、ホネームーンとでも云ふべきものであらうか、結婚間もなく歸鄕したものらしい。彼女も又た熊本人であつた。

予は明白に出立の日を記憶しないが、非常に暑き日であつたから、多分七月か八月かであらう。予が出立とて家には父の友人や親類なども來つて賑かであつた。併し予は何よりも彼等が斯く騷ぎ廻るのを苦々敷思つたから、挨拶もそこ〳〵にして家を立つたことを覺えてゐる。多分父母とは大江の宅にて別れ、

予を船まで送つて來たのは予の義兄河田精一氏であつたらうと思ふ。當時熊本から東京に行くには、熊本を去る二里程の百貫と云ふ港から、小蒸汽に乘り長崎に抵り、長崎から飛脚船に乘り神戸に至り、それから又たその飛脚船にて横濱に著し、彼是一週間乃至十日を費してゐる。熊本から長崎迄の航路は五十里足らずであるが、その船は當時に於てさへも、極めて小さき船にて、船の中にて立つことさへも出來ぬ程であつたれば、今日からみて、如何にその小さき船であつたかゞ、思ひやらるゝ。とても今日では、斯る船は利根川上下の船にさへも見出されまいと思ふ。

兎も角も予は古荘夫婦に連れられて、その船に乘つた。予は水俣から熊本通ひには、屢々和船には乘つてゐるが、小なりと云へ共蒸氣船なるものには初めて乘つた。其の臭氣が堪へ難く、殊に暑くはあるし、兎も角も御馳走にて、腹は一杯であるし、船が非常に動き出したから、自然船暈を感じた。今更致方もないから、予は着てゐた木綿飛白の單衣の兩襟をあけて、その内に半ば顏を突き込み、腹の中のものを殆どその間に吐き出した。而してそしらぬ顏をしてそのまゝ澄してゐた。それが長崎に至る頃には、肌と着物の間に固着して殆んど乾飯の如くガラガラとなつてゐた。我慢は予が持前の性質にて、自業自得なれば致方もなかつたが、今更思ひ出して笑止に堪へない。神戸に上陸して古荘氏夫婦に布引ノ瀧抔も連れられて見物した。その砌り男子が琉球人の如く、髮を束ねてそれに簪をさしてゐた。古荘氏はその漢を指し、あれが熊本にて上田休兵衛といふ有名の漢であると語つた。上田は多分東京からの歸途であつたらうと思ふ。彼は翌十年の西南の亂に、鎭撫隊を作つて活動したが、後に明治政府の爲に刑死せられた。

斯くて予等は東京に着し、三等煉瓦の西紺屋町の旅館に着し、其處にて鮪の刺身にて晝食を喰ひ、それから古荘氏に伴はれて神田裏猿樂町なる予の伯母藤島氏の邸に入つた。爾來古荘氏とは幾十年か會期がなかつたが、氏は大審院の判事となり、今は京都に隱居した。氏は國民新聞の愛讀者にて、屢々詩を寄せ、又た予と書翰を往復したる事がある。

當時東京には母方の親戚には藤島氏があり、父方の親戚には江口氏があつた。藤島氏は予が母の姉にて、その子正健氏は、當時大藏省に奉職し、殊に有力なる松方氏や得能氏などの知遇

を得、可成り羽振りをきかしてゐた。伯母は予が母の姉妹中、最も特色ある女にて、殆んど社會主義の實行者であつた。卽ちその子正健氏の俸給は固より、あらゆるものを以てこれを人に施す事を樂とした。そこで藤島氏の家には、伯母を賴りて來る書生など尠からず、予は固より姪であれば、當然の權利でもあるかの如くその家に寄寓してゐた。

父方の親類江口氏は、高廉と云ひ、予が父の弟であつた。當時叔父は官を罷めて本所側なる新大橋の袂に寓居してゐた。叔父は德富家から出て、江口家を嗣いだのである。その養子實は妻の弟高確氏は警視廳に奉職し、川路氏の信用篤く、これ又た警視廳で羽振りをきかしてゐた。――高確氏は江口家の子であつたが、幼少の爲に叔父が高確氏の姉に配し、江口家を相續した――叔父の實子高寬、高達、高邦及び純吉何れも福澤門下で、就中高邦氏は最も福澤翁の愛顧を受け、一時は東京府會議員などをした事もあつた。純吉氏は予より一歲の弟で、當時は尙ほ高確氏の家にあり、何處かの學校に通つてゐた。當時高確氏は本所綠町に居た。予は神田猿樂町から新大橋の附近、本所綠町の間を屢々往來した。今から考ふれば隨分御苦勞の事であつた。右の次第で順序から云へば、予は當然慶應義塾に入るべきであつた。併し如何なるわけか予は熊本に居る時からが福澤流は蟲が好かなかつた。熊本などにても福澤流は殆んど或部分を風靡してゐたが、それでも予は何やら氣に喰はなかつた。それで年長の江口兄弟の云ふ事も別段敬服もしなかつた。當時高達氏は何處かの私立學校の教師で、叔父の寓居と近き處の二階に間借りをしてゐた。彼は兄弟の中にて最も溫厚であつたから、且又た予が叔父の寓居を見舞ふ際に、屢々面會の機會があつたから、予は『酒好人に與ふるの書』と題して、懇々酒の害を書き、忠告じみたる手紙を送つたことがある。彼と予とは年齡も頗る相違してゐたから、定めて生意氣な小僧と考へたであらうが、江口親子兄弟はよればさわれば酒を吞んでゐた。何れもその道にかけては豪の者であつたらしい。只だ兄の高寬氏だけは醉うたこともなく、この人は眞面目一方の人であつたらしく思はれた。

慶應義塾已に面白からずとすれば、私立學校では、中村先生の同人社しかなく、そこで江口高確氏の知人橫尾東作と云ふ人の紹介にて同人社に赴き、一寸試驗を受けてみたが、これも面

白くなく、この方から斷つた。築地あたりの宣教師の學校はどうであらうといふ話もあつたが、それも氣に喰はず、彼是して遂に東京英語學校——今の一高前身——に入ることゝなつた。これは吾が從兄横井時雄氏が當時開成學校——今の帝大前身——に入學しつゝあつたから、その階梯の學校即ち今日の第一高等學校の前身東京英語學校に入るのは、寧ろ當然の順序であつたと思はれる。兎も角も入學は叶ひ出席することゝなつた。當時開成學校と英語學校とは、何れも神田の一橋外にあつた。横井氏は當初神田美土代町にゐたがやがて藤島氏に來り寓し、藤島家の座敷には、横井氏と予とが陣取り、主人の正健氏はかへつて狹き室に押込められてゐた姿であつた。予等は伯母の姪とて斯る勝手な振舞をしたものであらうが、今更思ひ出せば慚愧に堪へない。

予は當時數へ年の十四歳で、曾つて神田美土代町の横井氏の寓居から、横井氏及び他の一人と、三人一輛の車に乘つて上野に赴いたことを覺えてゐる。當時は相乘り車とて二人乘りの車があつたが、二人は予を眞中に乘せて、三人乘りとして出掛けた。それをみても如何に予が小さかつたことがわかる。

過日内村鑑三翁に面會した時に、翁が云はるゝには、德富さんに珍らしきものをお目にかけよう。いつぞや或人が予に明治九年頃の東京英語學校一覽表を呉れたが、それをみてゐる中に君の名が出てゐる。しかも君は餘程不勉強であつたものとみえて、名が尾に出てゐる。との事であつた。別に殊更不勉強といふわけではなかつたが、予が學校に通つたのは、恐らく二ケ月とは經たなかつたであらう。予は何れを見ても面白くなく、英語學校などとて、只だ教場にて、教師の顏をみる位では書物を習ふばかりで、何等身に益する事はないと考へたから、當時金森氏等が京都の新島襄氏に就いてゐることを知つてゐるから、寧ろそれに赴んと考へ出した。横井氏は東京に出掛けに京都に立寄り、新島先生に面會してゐたやうだが、別にその時迄は新島先生に多く敬服してゐるやうな話も聞かなかつた。

何はともあれ、予は横井氏には相談せず、金森氏と書面を往復し、種々事情を糺してみた。而して一人自ら東京を去つて京都に赴かんと決心した。併し斷つておくが、予は決して傳道師などにならんが爲に、京都に赴かんとするではなかつた。予は熊本にゐる時分から新聞に多大の興味を持ち、東京日々新聞な

どを愛讀してゐた。又た當時熊本にて發行する白川新聞、熊本新聞の類もよく讀んでゐた。東京に來てからも新聞とか雜誌とかには特別の興味をもつてゐた。されば福澤翁が箕浦勝人氏を編輯長として『家庭叢談』なるものを發行した時にも、裏猿樂町から兩國藥研堀なる報知社まで、その創刊號を需めるべく、炎天に汗を揮つて出掛けたことを記憶してゐる。たゞ予は學校は書物を讀むところと云ふよりも、寧ろ師に就いて學ぶ處であるといふ考をもつてゐたから、その場所を東京に於て見出さず、京都に於て見出さんと欲したのである。予の學校の觀念は、兼坂先生の塾が、其の基礎となつてゐた。

扨予は內々出立の準備をした。最早や明治九年も秋風訪れ、霜が降らんとする頃であつた。予は汽船問屋に就いて、ほど橫濱出帆の汽船を問合せておいた。何時も橫井氏と每朝相携へて學校に赴いたが、その日に限つて何かの口實を設け、予一人後に止つた。而して忙しく鉛筆にて橫井氏に書置きを認めた。如何なることを認めたかそれは記憶してゐない。荷物は既に我が手に提げられる丈の小さき行李に入れてしまつた。而してかねて藤島正健夫人に預けておいた三十圓の金を、如何なる理由を以てしたのであるかそれは記憶せぬが、ともかくも取り返した。而して自分で車を呼び來り、三十圓の金を懷中し、小さき行李を携へて車に乘つて、新大橋の向側なる江口叔父の寓所に至つた。斯くてその車を待たせつゝ、叔父に向つて斯々の譯にて京都に赴くことを告げたるに、叔父は以ての外の事とて、直ちにそれを差止めた。予は當初よりこの叔父はよく予を了解してゐて呉れたとは思はなかつたから、今更叔父と爭うたとて致方はないと考へ、叔父の云ふにまかせてゐた處が、叔父は何處かに出掛くるといふ事にて、蕎麥でも喰つて行けといふ事であつたから、蕎麥の馳走に與りそのまゝ車に乘つて新橋停車場に乘りつけた。それから橫濱の旅館に赴き、一宿し、その翌日か若くは翌々日かに乘船した。實は追手が來ないかと懸念したが、遂にその事もなかつた。橫濱市中を徘徊する內、或る寫眞屋の店頭にて、一枚の寫眞に、當時有名の人々の顏を合せ撮りたるものを購ひ、それを熟視し、せめて他日は、其中に伍する樣になりたいものと考へた。その寫眞は今尚ほ藏してゐる。

(昭和三年六月二十九日　大森山王草堂に於て)

第十三　同志社と新島先生

予は心細くも汽船に乘込んだ。最初は甲板の上などを往來してゐたが、やがて動搖甚だしく、遠州灘では頗るやられた。神戸に着したのは、午前二時頃であつたと思ふが、はしなく或る年長の書生と同行した。彼は予よりも若干多く英語を知り居たものとみえ、言葉の中に何やら英語をさしはさんでゐた事を記憶する。神戸からその書生と別れ京都に向つたが、その時は京都の停車場は未だ出來上つてゐなかつた。

斯くて予は相國寺門前の同志社に赴き金森氏を訪ね、斯々の次第にて來たと云ふことを陳述し、そのまゝ携へ來れる小さなる行李を、同志社の一室においた。その夜は祈禱會があるとて、金森氏は、予を御所内の元柳原家の邸である同志社教師デビス氏の宅へ伴つた。當時御所内には中山家の邸もあり、それには同志社の教師にして醫者なるテーラ氏が住んでゐた。而して前に申す通り、柳原家の邸にはデビス氏が住んでゐた。扨その夜の祈禱會にて別に予の目につくものはなかつたが、たゞ一人の婦人が、日本服の上に何やら西洋婦人の帽子をかぶり、不思議な風采をしてゐた者を見掛けた。それが即ち新島先生夫人であつた。祈禱會の後に各々の感話をしたが、予も亦た立つて一場の談をした。如何なる事をしやべつたか少しも記憶してゐない。併しそれは多少感動を與へたものと見えて、金森氏は特別に予の爲に祈禱を初めた。その祈禱が何事であつたかは、これ亦た記憶してゐない。その夜は無事であつたが、その翌日、新島先生から、今夜先生宅に話に來れと云ふ案内があつた。斯くて予は先生の申された通りに出掛けた。當時先生は烏丸通りの寺町東へ入る町に借家しておられた。普通の京都の家にて、入口の土間を上れば、そのとりつきが先生の書齋であつたかの如く覺えてゐる。而してその次の室が日曜には教會の代用をなして、其處で先生は日曜の說教をしてゐた。尤も會衆は多くて二三十名に過ぎなかつたから、別に差支へもなかつたであらう。先生は一見した處、如何にも親切で溫厚で立派な人格者らしく思はれた。別に特徴と云ふ程の事はなかつたが、眉の上に大なる傷痕があつた。先生は西洋流のナイトガウンを着、房のついた帶をしめてゐた。何やら小なるストーブがあつたと覺えてゐる。先生は種々予に是迄の成行きを訊ねた。而して薩摩芋にて作りた

る羊羹幾片れか御馳走し、當時初めて流行しつゝあつた紀州メンネルのシャツ二個を惠まれた。それは予は夏仕度して國を出た以來、殆ど着物には頓着なく、定めて予が寒さうな風をしてゐたのをみて、豫め予に與ふべく準備をして置れたものであらう。此の如くして予と新島先生との長き間の交際は初まつた。

予は別段新島先生には失望しなかつたが、同志社には失望した。同志社は明治八年に開業したといふことで、創立から既に一年を經てゐるが、何事も不整頓であつた。我等が熊本にて學んだる洋學校に比ぶれば、とても比較にはならなかつた。第一閉口したのは食物であつた。當時同志社は同志社トレーニングスクールと宣教師等は稱して、新島先生と山本覺馬氏と結社して創つたと云ふが、それは表向き日本政府に對する御申譯で、その實は米國宣教師の全權の下にあつたといふも差支へなかつた。新島先生も日本人には味方といふ味方を殆んど持たなかつたから、斯くあつたのも致方あるまい。食堂の事は先に云つた醫師テーラ氏が監督してゐた。されば日本人の食性などは、全く無視して、我等にとつては意外なる食物を與へた。第一主なるものは、マッシと云つて、皮ぐるみに挽きたる小麥の粉をねりたるものであつた。それを大なる鉢に盛つて出した。若干砂糖が入れてあつたやうでもあるが、更に甘美味きものではなかつた。その次が豌豆を煮たるものであつた。それは豌豆の皮がドロドロになる位に煮たものであつて、それにも若干砂糖を入れてあつたやうだが、毎日の食物としては可成り閉口した。その次は麥の中に牛肉の塊を入れて煮、而してその牛肉は引き出して細かく切り、菜葉と共に汁をこしらへ、麥は各々の茶碗に盛つて喰べた。而して一週間に一回パンを各々二切づゝ給與せられた。それが非常なる馳走であつた。予は子供の時から麥飯が先天的の嫌であつて、殆んど麥が一粒飯碗の中に入つてゐれば全部箸をおくといふ次第で、親類の家などに泊つてゐる時に、麥飯を出されると、一日位は平氣で絶食してゐた。子供の時に家にやつた手紙に『今度は麥飯無之、御安心被下度候』といふ文句を認めてやつた事さへあつた。然るにその麥を、麥飯ともつかず、たゞザラ〳〵煮たものをすゝり込むことは、予にとつては尠からざる苦役であつた。やがて食堂問題が持ち上り米飯を一杯づゝ給與せらるゝ事となつた。その爲に、成可く後に食堂に出て、他人の喰ひあましたる食をもあはせて喰ふ工夫をした

者もあつた。副食物などは茄子とか胡茄子とか冬瓜とかあらゆる野菜に、肥料にするホシカよりもやゝ少しく上等なる小鰯の煮干しを加味したるものであつた。恐るべきは習性だ。予が今日迄、ガブ〳〵のむところの汁物を好んでとるやうになつたのは、全く同志社の食堂から來たものと思はる

扨又た教場の方は如何と云ふに、我等には宣教師の連中の授業は殆んどなく、我等の先生と仰ぐ者は、熊本洋學校から來た我等の先輩であつた。この意味に於ては熊本洋學校の延長と云つても差支へあるまい。予の同志社に赴いた時には、既に所謂熊本バンドと稱する洋學校から廢校と共に移轉し來つた連中が澤山同志社に來つて、殆んど從來の同志社生を壓倒してゐた。我等は京都彼等の爲に風采も言語も半ば以上熊本化してゐた。我等は京都に居て、京都言葉を使ふ必要を感じなかつた。在校の上方及び他地方の人も、餘りに熊本バンドが有力なる爲、熊本流の訛を模倣する程に至つた。若し予が熊本人でなかつたならば、さぞ憤慨したであらうが、熊本人であつたが爲に、その點丈は別に憤慨心は起らなかつた。併し迷惑を感じたのは、書物の不足であつた。予等は米國にて出版したるギヨーの『コンモンスクールーチオグラフィ』なるものを讀む事となつたが、人は多く書物は少く、その爲に時間割してその書物を讀む事となり、時間の都合にて、或は午後の十時から十二時になる者もあり、午前の二時から四時となる者もあり、それには何れも當惑した。而してその書物のやりとり、時間の分配等にて仲間の中に隨分悶着が起き、必ずしもそれが理由と云ふではなかつたらうが、その爲に教師と喧嘩をして學校を飛出した者さへあつた。これと同時にパーレーの萬國史を授つた。これは專ら舊約書を引用したるものにて、兒童に課すべき書物で我等にはあまりに子供らしく、馬鹿らしく思へたから、予が發議にて何ぞ役に立つ歴史ととりかへる事を主張し、その爲に予は大阪に赴き、當時熊本洋學校の教師であつたゼンス氏が、大阪英語學校の教師となつてゐたから、彼よりして書籍代を借り受け、兎も角も四五冊のウイルソン氏の萬國史を購ひ、それを持歸り、それを課程の讀本とした事を記憶してゐる。

予が熊本なる兩親に諮らずして、しかも東京なる叔父の意見に逆いて同志社に奔りたる事は、兩親にとつて定めて意外であつたかも知れぬ。兩親は兎も角も緣家、親類に對して兩親の面

日を潰すやうな結果があつたかも知れぬ。又た實學黨の主なる父の友人達に對しても、父の顏が潰れるやうになつたかも知れぬ。それは止むを得ないわけである。從つて何時の間にか予が東京から拵へ來れる三十圓の金は、旅費となり食費となり――當時授業料は一ヶ月五十錢で殆んど勘定の外であつた――餘すところ幾何もなくなつた。而してやがて熊本には神風黨の亂があつた。明治九年十月二十四、二十五日の事にて、多分予が京都に着して間もなき後の事であらうと思ふ。予は、予が自由行動の結果として、今更學校の送金を家より仰ぐ事も出來ず、さりとて宣教師に頭を下げ、他の同學生の如く、門番とか、掃除番とか、その他あらゆる名義をつけて學費の援助を仰ぐことも屑しとせず、心中聊か困らないこともなかつたが、ゆくところまでゆけばどうにかなるであらうと思ひ、絕對の儉約をなし、蒲團なども藁蒲團を誂へ、着物は一度着たらばそれがきれて繩の如くなる迄、殆んど更へないといふ程度で、湯などにも殆んど入らなかつた。されば同棲の者共も、予の傍に近付くを厭ふ程であつた。併し別に吝くさき事をするのではなく、只だ着物は殆んど身體に固着したもの丶如く特別なる必要なき限りは、帶をも解かず起臥してゐた。されば翌年と覺えるが、吾父は、予の從兄たる江口高廣の熊本から東京往復に際して、特に京都に立寄つて、予の狀況を視察すべく依賴されたる報告書によれば、「猪一郞さんはまるで乞食のやうな風をしてゐる」と云うたさうであるが、全くそれ程でなくもそれに近かつたに相違あるまいと思ふ。予は必ずしもそれを誇としたわけではなかつたが、左樣なる事に氣を附くる遑はなかつたものと思はる丶。

熊本から予に手紙が來たのは、多分明治十年一月の末頃と思ふ。それは予の長姉山川常子よりの手紙で、世の中も段々騷がしくなれば、よく／＼氣を附けて貰ひたいと云ふことで、その時には何かものを添へてあつたやうだが、何物を添へてあつたかそれはよく覺えてゐない。熊本では、昨年秋から冬にかけての神風黨の騷ぎから、當年は鹿兒島事件が正に起らんとする時であつたから、その模樣を告げ知らしたものであらう。兎に角にその時に若干の學費が送つて來たと覺えてゐる。予は一ヶ月位は餘儀なく予のゐる黌の掃除番といふ名義で實際どれ程掃除をしたか記憶してゐないが、三、四圓の報酬を得たやうだ。併しそれ以來は兎も角も吾家から學費を送り來つて、別に自ら支ふ

ろに困難ではなかつた。予は今に於ても吾が父母の甚だ寛大にしてよく吾を理解したる事を感謝してゐる。

當時の同志社は、全く米國の學校にて祭日とて休むでなく、日本の國旗を掲ぐるではなく、天皇陛下の萬歲を唱ふるでもなく、土曜は朝から休日であり、日曜は休日と云はんよりも、寧ろ說敎を聽く日であり、每朝課業の初めにすべての人が講堂に集り、新島先生を初め、敎師から順番に五分か十分づゝの話をきく、且つ祈禱があり、三度の食事に食堂で祈禱があり、中には敎室にて各級の課業を初むる前にも祈禱あり、金曜の夜は祈禱會とて、特にその集りがあり、又た夜就寢の前三十分は、各々祈禱の爲に保留する時間としてあり、一切を勘定すれば、一週間の中に祈禱の時間は頗る多くあつた。されば食堂の祈禱の時などには兩手を網の目の如くにして、目をふさぎ、祈禱最中に、今度の副食物は何んであるかと、盛んに吟味してゐる連中も少くなかつたやうだ。宣敎師の中には、所謂女敎師なる者もあり、若くは宣敎師の夫人もあり、學生の中には、さう云ふ人々に接近し、專らその人々の好意に與る事を光榮とし、誇りとなしつゝある者も皆無ではなかつたやうだ。予が同志社に至つて第一線に立つたのは、宣教師の態度であつた。彼等の或者が傲慢無禮であるかの如く感じた。これは恐くは予が偏見であらう。概して同志社の敎師たる諸宣敎師は、人格者が多かつた。他の外人に比して其の人格は、優りてはをるとも、劣りてはゐなかつた。併し當時は斯く感じた。

第二は學生の中に頻りに宣敎師殊にその夫人等に向つて、胡麻をする輩を不快に感じた。彼等は日本男兒の眞面目を汚す者ではないかと感じた程であつた。それから何事もアメリカ、アメリカと云ひ、日本の事を全く忘れてゐるやうであるのを、これ亦た頗る不快に感じた。それを今から考ふれば、如何にも子供らしき事であるが、新島先生夫人の風采が、日本ともつかず、西洋ともつかず、所謂鵺の如き形をなしてをり、且つ我々が敬愛してゐる先生に對して、我々の眼前に於て、あまりに馴々しき事をして、これも亦た癪にさわつた。是亦た、餘計なる事であつたが、自分の勉强などは第二として、斯る事に不快を感じたり、反動心を生じたりするのは、自ら愚の至りと思ふが、當時に於ては、全くその通りであつた。予が新島先生から洗禮を受けたのは、前に申した先生の借家で、明治十年の春の末

か夏の初であつた予と覺えてゐる。卽ち數へ歳十五であつた。同時に受洗した者には、伊勢みや子、卽ち予の從兄である横井時雄氏の妹もゐたかと覺えてゐる。予は何故に先生から洗禮を受けたかと云ふ事を明白には意識してゐない。只だ予はすべての事に不平であり、不安であり、不快であり、不足であつたけれ共、新島先生に對しては、日一日と敬愛の情をたゝへて來たのではないかと思ふ。予が先輩の熊本バンドの中には、先生を以て平凡とし、先生を以ておとなし過ぎるとなし、先生を以て弱き人となし、先生を以て學識淺薄の人となし、教場にて先生をやりこめたりする事を得意がる者も全くないではなかつたやうだ。併し予は當初より先輩諸氏が買つてゐる相場以上に、新島先生を買つてゐたと信じてゐる。元より先生に對しても遺憾の點は少くなかつたと思ふが、それにも關らず新島先生は、予の先生たる丈の立派な人物であると云ふ事を、認めてゐたやうである。先生から洗禮を受けるやうになつたのは、恐らくはそれが主なる理由ではなかつたかと思ふ。云はゞキリストを信ずると云ふよりも、新島先生を信ずると云ふことで、キリストを經由して神に近付くと云ふよりも、新島先生を經由して神に近付くと云ふ事であつた。

當時我等の屬したる教會は、京都の第二公會と云つた。當時教會の名なく、公會と稱してゐた。併し予は同志社に於て何物を最も多く得たかと云へば、國民的精神を得た事である。若し予が同志社の如き宣教師學校に入らなかつたならば、これ程迄に自國を愛するの心は多く出なかつたではあるまいかと思ふ。云はゞ同志社に入りて初めて我が日本帝國の有難さを知つた樣な心持がする。或時第二公會に於て新島先生の説教の後、その場所はしかと覺えてゐないが、日本帝國外のある處の飢饉か何かの救助金を募集する事になり、各々少しづゝの醵金を、當時レプタ箱と稱する箱に投じた。然るに予はその時聲を顫はして立上り云つた。『今我國にては戰爭があつて、予が郷里熊本には、これが爲に非常なる不幸に陷つてゐるものがある。それ等に對して救助する事をせず、緣もゆかりもなき他方の人の不幸を救ふのは、前後緩急を過りたる事で、如何に結構でも予一人としては賛成出來ぬ。故に予は投金する事をお斷りする。併し若し西南の役に於て不幸に罹りたる者を救ふならば、自分丈のことはする積りである』と。

斯くてその後に、この救助金を募る時に、予は人知れず五十錢を投じた。五十錢の少きを笑ふ勿れ。當時前にも云ふ通り、月謝が五十錢であつた位で、五十錢は予にとつては、大金ではないが、決して小金ではなかつた。此の如く予は同志社に於て見る事、聞く事、することなす事、前後緩急をあやまつたる事の多きを思ひ、予は自分の流儀で何事でもやりつくる事にした。

（昭和四年七月二日　大森山王草堂に於て）

第十四　同志社在學中の記憶（一）

話前に返る。明治九年の末には、學校も休暇となり、その休暇を利用して先輩の連中は、何れも諸方に傳道に出掛けた。予も一人學校に止るよりも何處にか出掛けんとて、先輩金森、市原二氏に伴はれて、伊勢に赴くことになつた。二人の外に井手義久君及び予が從弟の藤島武彥君がゐた。武彥君は余の伯母藤島老夫人の末子で、予より一歳年下であつたが、彼はなか〳〵の俊才であり、又た予などよりも餘程早熟であり、實は伯母も手に餘つてゐたから、彼是相談の上、武彥氏を同志社に送ることとしたのは、予が東京を飛出すより二三ヶ月以前の事であつた。而して武彥氏を連れて京都に行つたのは、大久保眞次郎とて、當時北里柴三郎氏等と共に、醫科大學に學んだる、而して共に藤島老夫人より愛顧を受けたる學生の一人であつた。尙ほ大久保の事に就いては、後に語る事があるから、此處に斷つておく。

予等五人は赤毛布を頭から被つて、東海道を三條の橋を經、粟田口から蹴上まで來た時に、後から頻りに我等の名を呼ぶ者がある。それは同志社からの使で、目下伊勢方面では一揆が起つて、とても傳道抔の沙汰ではないと云ふ事であるから、我等は餘儀なく引返したが、そのまゝ止む事でなかつたから、今度は奈良に赴く事となつた。奈良にては猿澤池の畔なる或る旅店に止宿したが、旅店の者は何の爲に年末に來たのであるか聊か不思議に考へてゐた樣だ。

扨て金森、市原の兩先輩は、それ〳〵傳道をやらんとしても、別に手掛りとてはなく、只だ相手かまはず人さへみれば耶蘇教の說法をするといふ事であつたが、遂に各々が數百部携へて來れる『眞の神を知るの近道』と題する小冊子を、町家に分配することこそよからんとて、多分大晦日の夜と覺えてゐるが、各々

か夏の初であつた乎と覺えてゐる。卽ち數へ歲十五であつた。同時に受洗した者には、伊勢みや子、卽ち予の從兄である橫井時雄氏の妹もゐたかと覺えてゐる。予は何故に先生から洗禮を受けたかと云ふ事を明白には意識してゐない。只だ予はすべての事に不平であり、不安であり、不快であり、不足であつたけれ共、新島先生に對しては、日一日と敬愛の情をたゝへて來たのではないかと思ふ。予が先輩の熊本バンドの中には、先生を以て平凡とし、先生を以ておとなし過ぎるとなし、先生を以て弱き人となし、先生を以て學識淺薄の人となし、教場にて先生をやりこめたりする事を得意がる者も全くないではなかつたやうだ。併し予は當初より先輩諸氏が買つてゐる相場以上に、新島先生を買つてゐたと信じてゐる。元より先生に對しても遺憾の點は少くなかつたと思ふが、それにも關らず新島先生は、予の先生たる丈の立派な人物であると云ふ事を、認めてゐたやうである。先生から洗禮を受けるやうになつたのは、恐らくはそれが主なる理由ではなかつたかと思ふ。云はゞキリストを信ずると云ふよりも、新島先生を信ずると云ふことで、キリストを經由して神に近付くと云ふよりも、新島先生を經由して神に近付くと云ふ事であつた。

當時我等の屬したる教會は、京都の第二公會と云つた。當時教會の名なく、公會と稱してゐた。併し予は同志社に於て何物を最も多く得たかと云へば、國民的精神を得た事である。若し予が同志社の如き宣教師學校に入らなかつたならば、これ程迄に自國を愛するの心は多く出なかつたではあるまいかと思ふ。云はゞ同志社に入りて初めて我が日本帝國の有難さを知つた樣な心持がする。或時第二公會に於て新島先生の說教の後、その場所はしかと覺えてゐないが、日本帝國外のある處の飢饉か何かの救助金を募集する事になり、各々少しづゝの醵金を、當時レプタ箱と稱する箱に投じた。然るに予はその時聲を發はして立上り云つた。『今我國にては戰爭があつて、予が郷里熊本には、これが爲に非常なる不幸に陷つてゐるものがある。それ等に對して救助する事をせず、緣もゆかりもなき他方の人の不幸を救ふのは、前後緩急を過りたる事で、如何に結構でも予一人としては賛成出來ぬ。故に予は投金する事をお斷りする。併し若し西南の役に於て不幸に罹りたる者を救ふならば、自分丈のことはする積りである』と。

斯くてその後に、その救助金を募る時に、予は人知れず五十錢を投じた。五十錢の少きを笑ふ勿れ。當時前にも云ふ通り、月謝が五十錢であつた位で、五十錢は予にとつては、大金ではないが、決して小金ではなかつた。此の如く予は同志社に於て見る事、聞く事、することなす事、前後緩急をあやまつたる事の多きを思ひ、予は自分の流儀で何事でもやりつくる事にした。

(昭和四年七月二日　大森山王草堂に於て)

第十四　同志社在學中の記憶(一)

話前に返る。明治九年の末には、學校も休暇となり、その休暇を利用して先輩の連中は、何れも諸方に傳道に出掛けた。予も一人學校に止るよりも何處にか出掛けんとて、先輩金森、市原二氏に伴はれて、伊勢に赴くことになつた。二人の外に井手義久君及び予が從弟の藤島武彦君がゐた。武彦君は余の伯母藤島老夫人の末子で、予より一歳年下であつたが、彼はなか〳〵の俊才であり、又た予などよりも餘程早熟であり、實は伯母も手に餘つてゐたから、彼是相談の上、武彦氏を同志社に送ることとしたのは、予が東京を飛出すより二三ヶ月以前の事であつた。而して武彦氏を連れて京都に行つたのは、大久保眞次郎とて、當時北里柴三郎氏等と共に、醫科大學に學んだる、而して共に藤島老夫人より愛顧を受けたる學生の一人であつた。尙ほ大久保の事に就いては、後に語る事があるから、此處に斷つておく。

予等五人は赤毛布を頭から被つて、東海道を三條の橋を經、粟田口から蹴上まで來た時に、後から頻りに我等の名を呼ぶ者がある。それは同志社からの使で、目下伊勢方面では一揆が起つて、とても傳道抔の沙汰ではないと云ふ事であるから、我等は餘儀なく引返したが、そのまゝ止む事でなかつたから、今度は奈良に赴く事となつた。奈良にては猿澤池の畔なる或る旅店に止宿したが、旅店の者は何の爲に年末に來たのであるか聊か不思議に考へてゐた樣だ。

扨て金森、市原の兩先輩は、それ〴〵傳道をやらんとしても、別に手掛りとてはなく、只だ相手かまはず人さへみれば耶蘇教の說法をするといふ事であつたが、遂に各々が數百部携へて來れる『眞の神を知るの近道』と題する小冊子を、町家に分配するこそよからんとて、多分大晦日の夜と覺えてゐるが、各々

手分けをして出掛くる事となつて、予も亦た若干の分け前を受け取つた。出掛くる前には、屋外なる人靜かなる處にて、何やらん金森氏が熱烈なる祈禱をした樣に覺えてゐる。予は元來喧嘩でもする時には、隨分思ひ切つた事を云ふけれ共、本來はハニカミヤにて、人に對して物を云ふ事はあまり好まず、わけて見ず知らずの處に飛込んで、說教などする事は、とても予の持前の性質ではない。併し予も仲間が働く時に、一人安閑としてゐるわけにはゆかず、且つその時分には予自身も若干傳道心があつたやうだから、奮つてそれを受取つた。

而して軒別にそれを分配したが、大晦日の事とて、何れの町家も明皎々と灯をつけ、取引きの人々が出入しつゝある際なれば、この小僧も掛け取りか仕拂かの使であらうと、向うでは先知してそれぞれの挨拶をなしたから、その受け答には、かへつて此方が閉口した程であつた。



同志社在學中 德富初子（湯淺）德富健次郎、德富猪一郎

その夜は首尾よく配り終つたが、それから又明けて明治十年の元日から予は三笠山の麓なる家々にそれを配つた。その邊では奈良名物の墨や筆を賣る家もあり、予に向つて『無代で頂くのも氣の毒ぢや』とて、墨などを呉れた者などもあつたやうだ。兎に角予は自費にて出掛けたのであつたが、論功行賞の際、予も一かど働きたりと云ふ事にて、旅費丈は補助を受けた樣に覺えてゐる。それも三圓か五圓であつたらう。その當時では、宿泊料は先づ二十錢內外であつたかと覺えてゐる。

明治十年は日本の歷史に於ても多事多故の年であつた。明治天皇には年の一月二十四日東京御發輦二月の五日には京都大阪間の鐵道開通式あり、京都七條の停車場に御臨幸あつて、親しくその典を擧げさせ給うた。當時予は脊低くて、とても龍顏を拜する事が出來なかつたから、金森氏の肩に乘つてや

うやくその志を遂げた。卽ち明治五年五月十八日熊本に於て小島より熊本に向はせ給ふ途上に拜し奉つた以來第二回目である。やがて西南の戰爭は出で來つた。陛下は京都に御駐蹕遊され、三條、木戶、伊藤等の諸大官も供奉のまゝ滯在した。又た大久保內務卿も東京から出掛けて來た。謂はゞ政府の臨時本據は東京より京都に移り、而して大阪が征討軍の大本營地であるかの如き姿となつた。この半年間は、同志社に於ける敎育よりも、寧ろ同志社外に於ける敎育が、予の一生の運命には影響が多かつた樣に覺えてゐる。予は熊本にゐる時分から、熱心なる新聞雜誌の愛讀者であつたから、東京に赴いてからは勿論、同志社に來たりてもその方には中々熱心であつた。予は自分の學費さへも不足勝ちであつたから、自分で新聞雜誌を購うて讀む事は出來なかつたが、苟も讀み得らるゝ丈は熱心に讀んだ。當時同志社には日々新聞、報知新聞、朝野新聞、大阪なる大阪日報及び京都の新聞等が來てゐた樣だ。それは讀書室に備へてあつたから、何れも人々は爭ひ讀んで、予一人これを專らにするわけにはゆかなかつたが、併し恐くはすべての學生の中で予程熱心に熟讀したるものはなかつたとは云はぬが、少かつたらうと思ふ。

當時の新聞は戰爭の記事が專らであつて、殊に日々新聞の福地氏の如きは、山縣參軍の幕下にあつて、單に新聞紙の特派通信員と云ふばかりでなく、公の幕僚にも働いたらしく思はれる。末松謙澄氏の如きも當時は記者であつた乎、官吏であつた乎、何れにしても兩者を兼ねてゐた如くであつた。その外日々新聞の通信員には、現樞密顧問官久保田讓男の兄弟久保田貫一氏があつた。報知新聞では犬養毅氏が年少從軍記者として盛に戰報を送つてゐた。朝野新聞では成島柳北氏が軍事通信の目的にて京都迄出掛けてゐたが、むしろその紙面は軍事よりも、今日で云ふ社會記事の方が振つてゐたやうだ。同年五月二十六日には木戶松菊先生が京都にて逝いた。やがて日々新聞にはその社說欄に木戶公の評傳が出た。これなどは予が最も愛讀したるものであつた。又た福地氏が戰地より歸るや、彼は一布衣の身を以て謁見仰付けられ、親しく戰況を奏上した。此事の如きは予の頭腦に少からざる刺戟を與へたやうに覺えてゐる。予は何時頃より新聞記者たらんと心掛けた乎。明白に意識してゐない。併し明治十年——予が十五歲の時——の初には已にその志が確立してゐたと云ふことを疑はない。

予は毎日の新聞を耽讀するばかりでなく、是非古き新聞を讀んでみたいといふ志を起し、當時京都に博物館と稱する書籍館の如きものがあり、その樓上には古き新聞が積んであつたから、予は一人自ら此處に赴き明治八年頃の東京日々新聞等を引張り出し、その中から面白き論説等を見出せばこれを寫し取り、それが薄葉紙の小冊子に幾冊か出來てゐた。それは大江義塾に於て、學生の或者に分ち與へたから、今は手許にないが、少くともその寫しとつた二三の文章はよく記憶してゐる。同志社の課業には殆んど予の興味をひくものはなかつた。予は新島先生からガノーの物理學と、英語にて代數を授けられた。又た四福音書の調節とでも云ふべきハーモニーやら、又た四福音書中の馬太傳か馬可傳か何かの講義を聞いた。予が先輩等は、バーンズの註釋書を使用し、新島先生はデーン・アルフォードの註釋書を使用してをられた。當時政府の取締りが厳重で、聖書は同志社内にて教授する事を憚り、同志社と道を隔てたる一小家屋――當時それを三十番と稱してゐたが、その三十番――で教授せられた。聖書の講義等の時には小さきストーブをめぐつて、新島先生を中に圍んで何れも聽いてゐたが、予は成可く後にすはり、先生には背をむけて、その講義中には外の事を考へてゐたから、その講義が何事であつたかは實は何等の印象も止めてゐない。

十年の夏は如何にして暮したか、何等の記憶もない。只だ同志社の夏休みは、學生よりも寧ろ學生を教へる宣教師本位であつたから、隨分長きものであつた。休暇は六月の十二、三日頃から、九月の中旬迄あつたらしく覺えてゐる。宣教師は何れも比叡山に天幕生活に赴くか、若くは六甲か有馬邊に赴いたやうである。予は元來宣教師とは疎遠であつたから、彼等が如何に生活してゐるかさへも知らない。たゞはつきりと覺えてゐないが、十年の夏休みの全部でなくとも、その一部分は同志社教師デビス氏の留守宅に中島力造氏と暮したのではないかと思ふ。

中島力造氏は熊本バンドの來る以前よりの同志社學生にて、丹波福地山の出身であつた。非常なる勉強家であつて後には倫理學者として知られた人であるが、何故かすべての人より頗る嫌はれてゐた。所謂總スカンの標本であつた。同志社の學生の便所の壁には、何れの便所の壁にても、凡そ中島氏に就いて惡口を書かない者はなかつた。その中に餘りに甚だしき文句があつたとて、毎朝の祈禱會の或日、新島先生から總ての生徒に向つ

て警告せられた。但し斷つておくが、予は人の惡口を便所の壁に落書するが如きことは、元よりいさぎよしとする者でもなく、又た中島力造氏をも何故に他の人が嫌ふ乎。否、他の人程彼を嫌ふべき理由を見出さなかつた。故に予は彼の誘引に應じて共に夏期の或期間を共に暮す事を辭しなかつた。併し二人で暮してみれば隨分心細かつた。當時の御所内は、至る所に軒傾き壁崩るゝ廢屋や、昔ながらの公家の庭園の跡にて氣儘に成長したる老木があり、晝さへも明るき氣持はしなかつたが、夜は誠に靜かであつた。幾つとなく明間があり、廊下がある。しかも半ば破れたる柳原家の舊邸に中島氏と二人留守する事は、夜などは餘りに淋しく感じない事もなかつた。併しその際予は中島氏から種々世間の話を聞いた。中島氏は予よりも年長であり、同志社に來る前に大分世間を渡つて來た。即ち予が聞いた話は世間話であるが、予の如く家庭から學校に眞直ぐに來た者には、聞く事が悉く意外であつた。併しこの間に於て、何の問題であつたか知らぬが、一度中島氏と喧嘩をおつぱじめ、予が喰つてかゝり、やうやく大澤善助氏が仲裁した事があつた乎と覺えてゐる。大澤善助氏は當時その養父と共に新島先生の教會の一員であつて、一時は同志社の賄なども受け負うてゐたのではないかと思ふが確かでない。何れにしても當時同氏は、同志社や新島先生の家に出入りしてゐた。

戰爭がそろ〳〵下り阪となつた頃、予の伯父矢島直方は東京から京都にやつて來た。伯父は戰爭の初期にはその郷里に居り、無遠慮に馬に乘つて往來したから、當時の所謂賊軍の爲に嫌疑を受け、捕へられて熊本の協同隊の本營に送られたが、その隊長が偶然にもその知人であつたが爲に、隊長の方から懇願的に立退きを希望し、護衛の人を付けてこれを戰線外に送り出し、そのまゝ東京に赴き、今やその歸途に京都に立寄つたのである。矢島伯父は從來東京、福岡等に官遊し、熊本にゐる日が少かつたから、予は親しく伯父と相知る機會がなかつたが、實はこの際初めて膝を交へて話したのである。當時伯父の隨行者には大久保眞次郎がゐた。彼は前に記した如く藤島家に出入りする醫科大學生で、嘗て藤島武彥を同志社に伴ひ來りたる者であつたが、よくは聞かぬが、今度は醫科大學を飛出し、伯父の隨行者として來たとの事である。

（昭和三年七月四日　大森山王草堂於にて）

森口繁治著

憲政の原理と其運用

（菊判 四四六頁）

定價參圓五拾錢
送料貳拾四錢

憲政治下に在りながら、我國より甚しきは稀である。憲政の原理と其運用に就て正當な知識を持てる人の少きで、制度の靜的な法律學的技巧論としての憲法學の著書に對し、制度の根本的な要請としての其精神論をなすことが主眼とされ、又其原理を基礎として發展し生長する動的な憲法政治論をなすを目的としたもので、我國憲法政治に關する學術書中最も類書の少ないものである。本書は斯學の權威森口教授が其蘊蓄を傾けての快著である。

憲政の原理と其運用の徹底的知識は本書の中にのみ見出さる。

最新刊

【內容】

第一章 立憲政治の特徴。第一節 立憲政治は公民自治の政治。第二節 立憲政治は法治政治。第三節 立憲政治は責任政治。第二章 君主。第一節 憲政に於ける君主の地位。第二節 立憲君主としての天皇と吾が國體との調和。第三章 議會。第一節 議會略史。第二節 議會の性質。第三節 議會の構成。第四節 議會の作用。第四章 內閣 附、樞密院。第一節 國務大臣及び內閣。第二節 議院內閣政治。第三節 樞密院。第五章 選擧。第一節 選擧人、選擧權及び被選擧權。第二節 選擧資格并に被選擧資格。第三節 選擧の方法。第四節 選擧の取締。第六章 政黨。第七章 憲政と地方自治。索引。

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

世界大衆文學全集

第十六回配本（二冊）

ヅーゼ作・小酒井不木譯（價五拾錢）

スペードのキング 四枚のクラブ

探偵小説界に赫然光芒を放つ北歐の名作家ヅーゼの代表作が、吾探偵小説界の權威故小酒井不木氏に依つて、而も遺稿として〻々に與へられたことは、悼しくも又忘れることの出來ぬ記錄である。ヅーゼの作は堂々たる本格小説であるが、其テンポは探偵小説ファンを唸らせるに十二分の魅力があり、其ミステリーは鎖の輪を解すやうに一つ一つ解けながら、最後まで讀者を五里霧中に彷徨せしめ、其片言隻句には漂渺たる神韻を藏してゐるに至つては、何人の追隨をも許さぬ彼獨自の世界である。本書はこゝにその二傑作を上げて、百萬諸君とともに故小酒井博士を哀悼し、探偵小説界の帝王ヅーゼに親しまう。

諸名家傑作・東健而譯（價五拾錢）

世界滑稽名作集

笑ひの王國――何と朗らかな春のやうな聲であらう。そこには、清新な希望、幸福、健康、快樂團欒等の花が咲き亂れてゐる。本篇は、トウエーンの姪で伯父さんより遙に文章が旨くて、感情の尖鋭なウエブスター女史や、腹の皮をよらせる魔術師として、奇拔なプロットを豐富に持つコーヘンや、現代第一のナンセンス・リテラチュアのリーコックや、ハイカラで輕快で洒脫味たつぷりの滑稽論文の權威ステワートや英國第一の人氣者ウオドハウス等のお歷々の傑作中の傑作として、選りに選つた十二篇を收錄し、閻魔大王でも腹の皮を痛くすると云ふ奇拔な趣向である。諸君よ、頸と腹の皮に御用心。

東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

山岳七權威執筆

本誌七月號の偉觀

『改造』七月號は『山岳號』とし、我國の登山七權威總出の執筆。久しい間苦慮された一粒選りの世界的名叙述で銷夏第一等の讀みもの。配するに幽邃壯嚴の寫眞を以てす。

秋の尾瀬と鬼怒沼　武田久吉
冨士の冬　槇有恒
ドゥフィネ行　松方三郎
溪谷の趣味　冠松次郎
題未定　木暮理太郎
マッターホルンの麓　浦松佐美太郎
アメリカの氷河　小島烏水



掃溜の疑問

横光利一

一

霖雨の底で夜のレールが曲つてゐた。壊れかかつた幌馬車が影のやうに、煉瓦の谷間の中を潜つていつた。混血兒の春婦がひとり、弓門の壁に身をよせて雨の街角を見詰めてゐた。彼女の前の瓦斯燈の傘の上には、アカシヤの花が積つたまま腐つてゐた。狹い建物の間から、霧を吹いたヘッドライトが現れると、口を開けた醉漢を乘せたまま通り過ぎた。

參木は春婦の前を横切ると露地の中へ這入つていつた。その露地の奧の煤けた酒場では、彼の好む臟物が鍋の中で煮えてゐた。客のない酒場の主婦は豆ランプの傍で、硼酸で眼を洗ひながら雨の音を聞いてゐた。參木は高重の來るまでここで、老酒を命じて飲み始めた。二人はこれから工場の夜業を見に廻らねばならぬのだ。

臟物のぐつぐつ煮えた鍋の奧では、瘤まで剃つた支那人の坊主頭が、瀬戸物のやうな鈍い光りを放つてゐた。主婦の眼にあてたガーゼから流れる水音が、酒と一緒に參木の

脊骨を慄はせた。彼の前では、煉瓦の柱にもたれた支那人が眼を瞑つたまま煙管を吸つてゐた。煙管の針の先きで、飴のやうな阿片の丸が慄へながら、ぢいぢいと音を立てた。豚の足は所々に亂毛をつけたまま、捩れた蹄を鍋の中から出してゐた。

「おい。」と不意に高重は云つて參木の後へ現れた。

參木は石を投げ込まれたやうに、振り返つた。高重は呼吸を切迫させて立て續けに云ひ出した。

「君、僕の後から從けて來てゐる奴があるからね、宜敷く頼むよ。どうも、明日が危い。明日、奴らは始めるらしい。今夜はこれから警官の所へ廻つて、善良な顏をしとかなくちやならんのだ。いや早どうも、眼が廻る。」

いよいよ罷業が始まるのだ。

「ぢや、これから直ぐあなたはいらつしやるんですか。」

「うむ、行かう。」と高重は云ひながら、參木の盃をとつて傾け出した。

「しかし、いよいよ始まつたとした所で、始まつたら始まつたでどうにかなるさ。そこは支那魂と云ふ奴で、ね、君、不思議なもので、僕はこれでも、會社がひつくり返らうとしてゐるのに、夕べ現像した水牛の寫眞の方が氣になるんだ。」

「それほどの程度で濟ませるなら、ここで酒でも飲んでる方がいいでせう。」

「いや、まアさう云つて了つちやお了ひさ。僕の會社に罷業が起れば、彼の會社は將棊倒しだ。僕の此の腕一本は、今の所、支那と日本の實權を握つてゐるのと同じだからね。僕を煽てて酒を飮ましちや、國賊だよ。」

「ぢや、もう一杯、國賊になるために、」

二人は首を寄せて飮み始めた。高重は片腕を捲くし上げると、盃を舐めながら、ぶるぶる慄へて落ちさうな阿片の丸を睨んでゐた。虫の食つた肝臓が皿の上に盛り上つて並べられた。阿片の匂ひが酒の中へ混つて來た。うす鈍い光りを放つて寢てゐた坊主頭が、煉瓦の柱の角から脱れると、瘤にひつかかつて眼を醒した。豆ランプが煤けたホヤの中で鳴り始めた。

「あ、さうだ、君に云ふのを忘れてゐた。」と高重は云ふと、突然眉を顰めて默り出した。

「競子の婿が死んだんだ。」

參木は暫く高重の盃に當てた脣を眺めてゐた。

參木は急に廻轉を停めた心を感じた。と、動き出した巨大な勢力が、彼の胸の中を駈け廻つた。彼に喜びの感動とは反對に、頭を垂れ

たが、次の瞬間、彼はぢりぢり沈んで行く板のやうな自分を感じた。

——俺が競子の良人に變るとしても、金がない。地位がない。能力がない。ただ有るものは、何の形もない愛だけだ。——

ふと、彼は高重の沈默の原因を自分に向けた嫌惡だと解釋した。と、俄に、怒りが腹の中で立ち上つた。彼は競子を——高重の妹を、押し除ける作用で充血した。と、今迄、彼女のために跳ね續けて來た女の動作が、浮き上つて亂れ出した。お柳、オルガ、お杉、宮子、と泡立ちながら、——

「さて、いよいよこれから、夜業の番か、おい君、今夜は危いから、僕から放れてひとり行つちや、お了ひだよ。」

高重はポケットのピストルに觸りながら、立ち上つた。參木も彼の後から出ていつた。彼は嫁いだ競子をひそかに愛してゐた空虛な時間に、今こそ、決然と別れを告げねばならぬ、と決心した。

——まア、いくらでも、お目出度くめそめそしたけりや、するがいい。

雨の中を一組の日本の巡羅兵が、喇叭の穴を小脇にかかへて通つていつた。高重は參木の方へ傾くと、小聲で云つた。

「君、今度の罷業は大きくなるよ。」

「大きけりや、大きいだけ、面白いぢやないですか。」

「それも、さうだ。」

二人は黃包車に乘ると飛ばし出した。

二

圓筒から墜落する瀧の棉。奔るローラー。奔流する棉の流れの中で、工人達の夜業は始まつてゐた。岩窟のやうな機械の櫓が、風を跳ね上げながら、振動した。舞ひ上る棉の粉が、羽搏かれた羽毛のやうに、飛び廻つた。噴霧器から噴き出す霧の中で、ベルトの戰線が霞み出した。嚙み合ふ齒車の面前を、隊伍を組んだ絲の大群が疾走した。

參木は高重につれられて梳棉部から練條部へ廻つて來た。繁つた鐵管の密林には、霧が枝々にからまりながら流れてゐた。雜然と積み重つたローラの山が、その堆積のままに廻轉した。

參木は突擊して來る音響に耳を塞いだ。と、捻られた氣流が、無數の層を造つて、鐵の中から迫つて來た。

高重は棉の粉を顏面に降らせながら、傍の工女を指差して云つた。

「どうだ、これで一日、四十五錢だ。」

棉を冠つて群れ動く工女の肩が、魚のやうにベルトの瀑布の中で交錯した。搖れる耳環が、機械の隙間を貫いて光つて來た。

「君、あそこの隅にスラッピングがあるだらう。その横で、ほら、こ

ちらを向いた。」と高重は云ふと默り出した。

絡つたパイプの蔓の間から、凄艶な工女がひとり、參木の方を睨んでゐた。參木は彼女の眼から、狙はれたピストルの鋭さを感じると、高重に耳打ちした。

「あの女は、何者です。」

「あれは、君、共産黨の芳秋蘭さ。あの女が右手を上げれば、此の工場の機械はいつぺんに停るんだ。」

「それが分つてゐる癖に、何ぜそのままにしとくんです。」

「所が、それを知つてるのは、僕だけなんだ。實は、僕はあの女と競爭するのが、樂しみなんだ。いづれあの女も殺されるに定つてゐるから、見ておき給へ。」

參木は暫く芳秋蘭の美しさと闘ひながら、彼女の動作を見詰めてゐた。汗と棉とが彼の首條へ流れ出した。廻るシャフトの下から、油のにぢんだ手袋が延び出て來ると、參木の靴の間でばたばたした。高重は參木の肩を叩いて支那語で云つた。

「君、これで此の工場の賃金は、外國會社のどこよりも高いんだ。それにも拘らず、まだ一割増の要求なんだ。僕の困るのも、分るだらう。」

實は周圍の工女に聞かすがために、參木に云つた高重の苦しさを、參木は感じて頷いた。すると、高重は再び日本語で、彼に向つて力をつけた。

「君、此の工場を廻るには、ニヒリズムと正義とは、禁物だよ。ただ豪快な惡だけが、機關車なんだ。いいか、勝てば官軍、負ければ賊軍。押すんだ。」

二人は練條部から打棉部の方へ廻つて來た。廊下に積み上つた棉の間には、印度人の警官がターバンを並べて隱れてゐた。

「參木君、此の打棉部には危險人物が多いから、ピストルに手をかけてゐてくれ給へ。」

圓弧を連ねたハンドルの群れの中で、男工達の動かぬ顏が流れてゐた。怒濤のやうな棉の高まりが、機械を嚙んで慄へてゐた。

參木はその逆卷く棉にとり卷かれると、いつものやうに思ふのだ。——生産のための工業か、消費のための工業か、と。さうして、參木の思想は、その二つの廻轉する動力の間で、へたばつた蛾のやうに、のた打つのだ。彼は支那の工人には同情を持つてゐた。だが、支那に埋藏された原料は、同情の故をもつて埋藏を赦すなら、どこに生産の進歩があるか、どこに、消費の可能があるか。資本は進歩のために、あらゆる手段を用ひて、埋藏された原料を發掘するのだ。工人達の勞働が、もしその資本の增大を憎むなら、反抗せよ、反抗を。

——參木はピストルの把手を握つて工人達を見廻した。しかし、ふと彼は、彼自身が、その工人達と同樣に、資本の增大を憎まねばならぬ一人であることを思ひ出した。

と、彼の力は機械の中で崩れ出した。

何を自分は擊たうとするのか。擊つなら、彼らの擊たうとするそのものだ。——所詮、彼は母國を狙つて發砲しなければならぬのだ。

しかし、彼は考へた。

——もし母國が、此の支那の工人を使はなければ、と。

もし母國が支那の工人を使はなければ、彼に代つて使ふものは、英國と米國にちがひないのだ。もし英國と米國が支那の工人を使ふなら、日本は、やがて彼らのために使用されねばならぬであらう。

參木は取引部へ到着した今日のランカシアーからの電文を思ひ出した。ランカシアーでは、英國棉の振興策を講じるため、工業家の大會が開催された。その結果、マンチエスターの工業家の集團は、ランカシアーと共同して、印度への外國棉布の輸入に對し、關稅の引き上げを政府へ向つて要求した。

參木は此の英國に於けるマーカンチリズムの活動が、何を意味するかを知つてゐる。それは、明らかに、日本紡績への壓迫にちがひないのだ。彼らは、支那への日本資本の發展が、着々として印度に於ける英國品——ランカシアーの製品のその唯一の市場を奪つてゐることに、恐慌を來してゐる。しかし、支那では、日本の紡績內に、此の支那の工人達のマルキシズムの波が立ち上つてゐるのである。母國の資本は今は挾み擊ちに逢ひ出したのだ。參木には、ひとり喜ぶ米國人の顏が浮んで來た。さうして、より以上にますます喜ぶロシアの顏がレセ・フエールの顚落とマルキシズムの擡頭。その二つの風の中で、飛び上つてゐる日本の昆蟲。——參木は今はただピストルを握つたまま、ぶらりぶらりとするより仕方がないのだ。彼の狙つて擊ち得るものは、最早頭の上の空だけだつた。しかし、危險は、此の工場內にゐる限り、刻々彼自身に迫つてゐるのだ。何故に此の無益な冒險をしなければならぬのか。——ただ自分の愛人の兄を守るためのみに。——彼は高重の肩を見る度に、彼から壓迫される不快さに搖すられて步を進めた。

そのとき、河に向つた南の廊下が、眞赤になつた。高重は振り返つた。

と、窓硝子が連續して穴を開けた。

「暴徒だ。」と彼は叫ぶと、梳棉部の方へ疾走した。

參木も高重の後から馳け出した。梳棉部では、工女の悲鳴の中で、電球が破裂した。棍棒形のラツプボーンが、飛び廻つた。狂亂する工

女の群は、機械に挾まれたまま、渦を卷いた。警笛が悲鳴を裂いて鳴り續けた。

參木は搖れる工女の中で暴れてゐる壯漢を見た。彼は白い三角旗を振りながら、機械の中へトップローラを投げ込んだ。印度人の警官は、背後からその壯漢に飛びつくと、ターバンを揺らして、横に倒れた。雪崩れ出した工女の群は、出口を目がけて押しよせた。二方の狹い出口では、犇めき合つた工女達がひつ掻き合つた。電球は破裂しながら、一つ一つと消えていつた。廊下で燃え上つた落棉の明りが、破れた窓から電燈に代つて射し込んで來た。

ローラの槓は、格鬪する人の群に包まれたまま、輝きながら明滅した。

參木は廊下の窓から高重の姿を見廻した。巨大な影の交錯する縞の中で、人々の口が爆けてゐた。

棉の塊りは、動亂する頭の上を、躍り廻つた。長測器が梁にあたつて、ガラスを吐いた。カーデングマシンの針布が破れると、振り廻される袋の中から、針が降つた。工女達の悲鳴は、墜落するやうに高まつた。逃げ迷ふ頭と頭が、針の中で衝突した。噴霧器から流れる霧はどよめく人の流れのままに、流れてゐた。

廊下へ逃げ出した工女らは、前面に燃え上つた落棉の焔を見ると、逆に、參木の方へ崩雪れて來た。押し出す群れと、引き返す群れとが打ち合つた。と、その混亂する工女の渦の中から、彼は、閃めいた芳秋蘭の顏を見た。もし此の暴徒が、工人達の中から發したものなら、どうしてそれほど彼女は困憊するだらう。參木は思つた。――これは不意の、外からの暴徒の闖入にちがひないと。

參木は近づいて來た芳秋蘭を見詰めながら、廊下の壁に沿つて立つてゐた。すると、工女の群は參木を取り包んだまま、新しく一方の入口から雪崩れて來た一團と、衝突した。參木は打ち合ふ工女の髮の包ひの中で、揉まれ出した。彼は搖れながら、芳秋蘭の行衞を見た。彼女は悲鳴のために吊り上つた周圍の顏の中で、浮き上り、沈みながら、叫んでゐた。彼は彼を取り卷く渦の中心を、彼女の方へ近づけやうと焦り出した。火は落棉から廊下の屋根に、燃え擴つた。吐け口を失つた工女の渦は、非常口の鐵の扉へ突きあたつた。が、扉は一團の塊りを跳ね返すと、更に焔の屋根の方へ、搖れ返した。參木は最早や、自分自身の危險を感じた。彼は此の渦の中から逃れて場内の暴徒の中へ飛び込まふとした。しかし、彼の兩手は、押し詰めた肩の隙からも拔けなかつた。背後から呻き聲の上る度每に、彼の頭はひつ掴かれた。汗を含んだ薄い着物が、べとべとしたまま吸ひつき合つた。彼は再び芳秋蘭を搜してみた。振り廻される剪髮の波の上で、刺さつ

た花が狂ふやうに渦巻いてゐた。燈を受けて煌めく耳環の群團が、踵を返して噴き上る魚のやうに、沸騰した。と、再び、搖り返しが、彼等の周圍へ襲つて來た。彼は突然、急激な振幅を身に感じた。と、眼前の渦の一角が、陷沒した。人波がその凹んだ空間へ、將棋倒しに、倒れ込んだ。新しい渦卷の暴風が、暴れ始めた。飛び上つた身體が、背中の中へ辷り込んだ。起き上つた背中の上へ、背中が落ちた。と、參木の前の陷沒帶の波の端から、芳秋蘭の顏が、浮き上つた。參木は弛んだ背中の間をにぢりながら、彼女の方へ延び出した。彼は彼女の肩へ頭をつけた。が、彼の無理な動搖は彼の身體を、舟のやうに傾かせた。彼は背後からの壓力を受け留めることが出來なかつた。彼は斜めに肩と肩との間へ辷り込んだ。と、續いて芳秋蘭の身體が崩れ出した。彼は彼女を抱いて起き上らうとした。が、上から人が倒れて來た。彼は頭を蹴りつけられた。身體が振動する人の隙間を狙つて沈んでいつた。彼は秋蘭を抱きすくめた。腕が足にひつかかつた。沓が脇の下へ刺さり込んだ。しかし、參木には、最早や背中の上の動亂は、過去であつた。二人は海底に沈んだ貝のやうに、人の底から浮き上る時間を待たねばならなかつた。彼は苦痛に抵抗しながら、身を竦めた。秋蘭の頭は彼の腹の横で、藻搔き出した。彼の意識は停止した音響の世界の中で、針のやうに、秋蘭に向つて進行した。

非常口が開けられると、渦巻いた工女は廣場の方へ殺倒した。倒れた頭が、一つづつ起き上つた。參木は起き上らうとして膝を立てた。と、秋蘭は彼の上衣に摑まつて叫び出した。

「足が、足が。」

彼は秋蘭を抱きかかへると、廣場の方へ馳け出した。

三

參木は秋蘭の隣室で眼を醒した。彼は煙草を吸ひながら窓から下を見降した。

朝日を受けた街角では、小鳥を入れた象牙の鳥籠が兩側の屋根の上まで積もつてゐた。その鳥籠の街は深く鳥のトンネルを造つて曲つてゐた。街角から右へ賣卜者の街が竝んでゐた。春服を着た支那人の群れは、道いつぱいに流れながら、花を持つて象牙の鳥籠の中を潜つていつた。彼らのその絹の音を聞くやうな長閑な流れに從ひ、街は廻りながら、池の中へ中心を集めてゐた。

參木は昨夜の運命が自分をどうしてここまで運んだか、忘れ出した。彼は雨の中を、秋蘭の云ふままにただ馳けたのだ。彼は醫院へ馳け込んだ。彼は彼女の足が、ただ所々擦りむけて筋が捻られただけにも拘らず、彼女を乗せて自動車を走らせた。彼は云つた。

「どうぞ、お宅まで、御遠慮なく。」

彼は彼女を鄭重にすることが、龍子を吐き出す最高の機會だと觀測した。思慮は一切、過去の總てを悲劇に導いて來ただけではないか。彼は彼自身を煽動しながら、秋蘭の部屋まで這入つていつた。しかし、彼の喜びは、その壁の中でも進行した。

彼女は彼に、隣室の客間を指差して云つた。

「どうぞ、あちらが、空いてゐますから。」

彼が彼女を、禮節よりも愛した原因は、その秋蘭の眼であつた。彼女は彼に云ひ續けた。

「どうぞ、あちらへ、ここは、なるだけお見せしたくはありませんの。」

「ぢや、もうこのまま、これで。」

「いえ、あたくし、もう暫くゐらつしていただきたいんでございます。それに、ここは支那街でございますわ。今頃からお歸りになりましては、またあたくしがお送りしなければならないんですもの。」

彼は彼自身の欲するものを退けて來たのは、過去であつた。帆は上げられて辷つてゐる。彼は自身の足音に惡の響きを感じながら、隣室に下つた幕を上げた。そこで、彼は、いつになれば彼女から愛の言葉を聞かされるかを待つことが、どれほど自身を侮辱する結果になるかを考へつつ、眠りに落ちた。

しかし、今は、朝だ——

池の中で、旗亭の風雅な姿は積み重なつた洋傘のやうに歪んでゐた。その一段毎に、鏡を嵌めた陶器の階段は、水の上を光つて來た。人で埋づた華奢な橋の欄干は、鯉で埋つた水面で曲つてゐた。

人の流れは祭りのやうに駘蕩として、金色の扁牌の下から流れて來た。

參木はその人の流の上に棚曳いたうす霧の晴れていくのを見てゐると、秋蘭と別れる時の近づいたのを感じた。彼は秋蘭の部屋の緞帳を揺すつた。彼女は古風な水色の皮襖を着て、紫檀の椅子に凭りながら、手紙の封を切つてゐた。彼女は朝の挨拶を濟すと、足の痛みの柔ぎを告げて禮を述べた。

「もし夕べあなたが、あたくしの傍にゐて下さらなければ、」

と、彼女は云つた。さうして、彼女は彼に異國の友を一人持ち得た喜びを述べると、食事を取りに附近の旗亭へ案内したいと云ひ出した。

「しかし、あなたのそのお傷では？」と彼は云つた。

「いえ、あたくし達はもう日本の方に、そんなに弱い所ばかりお見せしたくはありませんの。」

秋蘭に参木を促すと、先に立つた。二人は街へ降りた。石疊の狹い道路は迷宮のやうに廻つてゐた。頭の上から垂れ下つた招牌や幟が、日光を遮り、その下の家々の店頭には、反りを打つた象牙が林のやうに並んでゐた。参木は此の異國人の混らぬ街を歩くのは好きであつた。象牙の白い磨ぎ汁が石疊の間を流れてゐた。その石疊の街角を折れると、招牌の下に翡翠の滿ちた街並が潜んでゐた。眼病の男は翡翠の中に埋もれたまま、朝からぼんやりと明りの方を向いてゐた。

参木は象牙の挽粉で手を洗ふ工人の指先を眺めながら、彼女に云つた。

「あなたは、これから、どつかへお急ぎになる所ぢやありませんか。」

秋蘭は彼の言葉が、何を意味するかを見詰めるやうに、彼を見た。

「いえ、あたくし、今日はこの足でございませう？」

「しかし、此處までいらつしやれるなら、もうどこへだつて大丈夫だと思ひますが。どうぞ僕のために御無理をなさらんやうに。」

参木は秋蘭が何者であるかを氣附かぬらしく裝ひながら、風鈴の鳴る店頭へ眼を移した。秋蘭は暫く彼の横顔を眺めてゐた。が、彼女は急所を見拔かれた女のやうに、優しげに顔を赧らめると参木に云つた。

「あなたは、もうあたくしが、どんな女だか、すつかり御存知でゐらつしやいますのね。」

「知つてゐます。」と彼は答へた。

しかし、秋蘭は落ちついて笑つてゐた。

彼は云つた。

「實は、僕は、そのためにあなたをお助けしなければならないとも、思はないでもなかつたのです。しかし、昨夜の騷動はあれは外からの暴徒だと思ふんですが、もしあなたがあの出來事を豫想してらつしたのだとすれば、あれほどの騷ぎにはならなかつたと思ふんです。」

「さうです、あれは全く不意の出來事でございましたの。あたくしたちは、お國の方の工場に、、、、ことを願つてゐます。しかし、それはあたくしたちの手で起さなければ、あたくしのやうに、お國の方に御迷惑をおかけするやうな結果になるだけだと思ひますの。」

逆に、参木の顔は赧らみ出した。彼は笑ひながら、彼女に云つた。

「では、どうぞ、度々。」

秋蘭は朗かな歯並を見せて動搖した。しかし、参木は不意に憂鬱になり出した。――何を自分は狙つてゐたのか、と考へたのだ。彼の彼女を追つ馳けた苦心の總ては、火事場の泥棒と同樣ではなかつたか。」彼が彼女を送つたのは、自分の卑屈を物語つただけではなかつたか。

――しかし、彼はすでになされた反省の決算を思ひ出した。今は、彼

はただ此の支那街の風景の中を、支那婦人と共に漫歩する樂しさに放心すればそれで良いのだ。

翡翠に飾られた店頭の留木には、首を寄せ集めた小鳥のやうに銀色の支那沓がとまつてゐた。象牙の櫛が軒を竝べて溢れてゐた。壁に詰つた印肉の山の下で、墨が石垣のやうに竝んでゐた。佛像を刻む店々の中から、楔の割れる音が響いて來た。人波の肩の間で、首環賣りがざくざくと玉を叩いた。參木は秋蘭の方を見た。と、彼女の水色の皮襖は、羽根を擴げたやうに連つた店頭の支那扇の中で、搖れてゐた。

二人は旗亭の迂る陶器の階段に足をかけた。參木は秋蘭の腕を支へた。彼女は彼によろめきかかると笑つて云つた。

「まア、あたくし、まだあなたに、御迷惑をおかけしなければなりませんのね。」

「どうぞ。」

「あたくし、こんな身體で、よく勞働が務まると御感心なすつて下さいまして。」

「いや、もう、打たれてゐるだけです。」

「でも、あたくしたちは、ほんとうはまだまだ駄目なんでございますの。あたくしなんか、こんなに威張つたりしてゐましても、もう直ぐからして美しい着物を着てみたくてなりませんの。」

參木は階段の中途で、此の支那婦人の繊細な苦悶に觸れるのは苦痛であつた。階段の立面に嵌つた鏡の上では、一段毎に浮き上る秋蘭の笑顏が、フイルムのやうに彼を見詰めて變つていつた。と、ふと參木は、高重の云つた言葉を思ひ出した。——

「此の女も、いづれ誰かに殺されるから、見て置き給へ。」

ばつたりフイルムが切れて艷麗な秋蘭の顏が無くなると、白蘭の繁つた階上から、緑色の陶器の欄干が現れた。

「僕があなたとお近づきになつたことで、もしあなたに御迷惑をおかけするやうな結果にでもなりますなら、僕はこれ限り職業を變へてもいいとも思ふんですが、どうぞ、御遠慮なく。」

「いいえ、あなたこそ、御遠慮なく。あたくしにはあなたが日本の方だとは思へませんの。無論あたくしたちは、日本の工場と爭はなければなりませんわ。でも、それがあなたとそんな、爭ひになることだとは思へませんの。」

參木は黒檀の椅子に腰を降ろすと、いつの間にか愛の中で漂ひ出した日本人に氣がついた。と、彼は再び懸崖に落ち込んだ。彼が競子を蹴つたのは、彼が彼女のために亂されたからではなかつたか。彼が秋蘭に溺れたのは、競子を蹴つて逃げ出すためではなかつたか。しか

し、今また彼は、駆け込んだ秋蘭のために誘され出した彼に、今は彼自身がどこにあるのか分らなくなり出したのだ。と、彼に引き下つたやうに身構へると、突然秋蘭に向つて云ひ始めた。

「僕はあなたが、僕を日本人ではないと仰言つて下さるお心持ちには感謝しますが、しかし、實は、僕はあなたの仰言りたくなささうな日本人だと思つてゐます。しかし、僕が日本人だと云ふことは、あなたのお氣に觸る部分の日本人と一緒ではありません。たゞ僕はロシアのマルキストのやうに、自分を世界の一員だと思ふことが出來ないだけです。あなたたちマルキストは、西洋と東洋との文化の速度を、同じだと思つてらつしやるやうにお見受けするんですが、僕はそこの誤謬から、たゞ秀れた犠牲者を出すことだけが唯一の生産のやうに思はれるんです。」

すると、秋蘭は彼と太刀を合すやうに、急に笑顔を消して彼に向つた。

「それは、あたくしたちにも、今の所いろいろな誤謬がございますわ。でも、その國には、その國の原料と文化とに從つたマルキシズムの運用法がございますわ。譬へば、あたくしたちが、中國人の經營する工場へ鬪爭力を注ぐよりも、先づ、、、、、工場へと云ふやうに、自然により強力な方向へ動いて参りますの。」

「しかし、それに、あなたたちが、中國に新しい資本主義をお建てになるのと同様ぢやありませんか。外國資本の生産能率を駆逐すれば、それだけ中國の資本主義が發展するにちがひないと思ふんですか。」

「それは、今はあたくしたちは、出來得る限り默認しなければなりませんわ。あたくしたちにとつて、中國の資本主義より、外國の資本主義を恐れなければならないことの方が、より當然なことぢやございませんか。」

參木は、最早や秋蘭との愛の最後を感じると、ますます頭を振つて斬り込んでいきたくなつた。

「勿論、僕はあなたが、日本人の工場をお選びになつたと云ふことには、少しも不幸を感じてゐないのです。たゞ、僕はあなたと同様な中國人ではないと云ふことに、働き場を無くした國民の悲哀を感じてゐるだけです。僕は日本を愛してゐます。しかし、それが直ちに中國との鬪爭になることだとは、あなたたちのやうには思へませんね。」

「それはあなたが、東洋主義者でいらつしやるからだと思ひますわ。もうあたくしたちは、東洋主義がどれほどお國のブルジョアジーに貢獻したかと云ふことを、清算しなければならないときです。あたくしたちは、もう、、の、、、、、、、以外の人々には、、、することが出來なくなつてをりますの。」

「あなたが僕を、あなたのお思ひになるやうな東洋主義者になすつたのは殘念ですが、僕が日本を愛したいと思ふのは、あなたが中國をお愛しになるのと何の變りもないのです。僕は自分の母國を愛する感情が、それがブルジョアジーを愛するのと同じ結果になると云ふ狀態には、幾分迷惑を感じてゐるものなんですが、しかし、だからと云つて母國を愛せずに、中國を愛しなければならぬと云ふ理由が、今の所、どこに有るのか分りませんね。」

「それは、あなたがお國をお愛しなすつてゐらつしやることではなくつて、ただお國の味方をなすつていらつしやるだけだと思ひますわ。もしあなたが、ほんとうにお國をお愛しなすつてゐらつしやいますなら、お國のプロレタリアをお愛しになるに違ひないと思ひます。あたくしたちがお國に、、するのは、お國のプロレタリアにではありませんの。」

「しかし、僕は中國の人々が日本のブルジョアジーに反抗するのは、結果に於て日本のプロレタリアを虐めてゐるのと同樣だと思ふんですか。」

秋蘭は咳き上げて來た理論に詰つたやうに、眼を光らせた。

「どうしてでございませう。あたくしたちはお國のプロレタリアのためには、中國を解放しなければならないと思つてゐるものでございますけど、」

「しかし、それは日本にプロレタリアの時代が來なければ、」

「さうです、あたくしたちはお國にプロレタリアの時代の來るために、お國のブルジョアジーに反抗してゐるんでございますわ。」

「しかし、それには中國にもプロレタリアの時代が來なければ、」

「それは勿論、あたくしたちはそのために絶えず活動してゐるんぢやございませんか。その第一に、今もあたくしたちはあなた方の工場に、、、を起さうと企んでゐるんでございますの。多分もう今頃は、、、、、、、されてゐる頃かと思はれますが、どうぞ暫く、お國のプロレタリアートのために、御辛棒をお願ひします。」

秋蘭は頭を下げた。しかし、參木には新しい疑問が雲のやうに起り出した。彼は云つた。

「僕はさきにも申し上げた通り、あなた方がわれわれの工場の機械を、、、になると云ふことには、御同情しなければならないと思つてゐます。しかし、中國がいま外國資本を排斥することから生じる得は、中國の文化がそれだけ各國から遲れていくと云ふことだけにあるんぢやないかと思ふんです。これは勿論重々失禮な云ひ草だと思ひますが、しかし、優れたコンミニストとしてのあなたの此の客觀的な平凡な問題に對しての御感想は、最も資本の輸入の必要に迫られてゐる中

國であるだけに、一應受け給つておきたいと思ふんです。」

秋蘭は頭腦の廻轉力を示す機會を持ち得たことを誇るかのやうに、靜やかに支那扇を擴げながら微笑した。

「ええ、それは、あたくしたちの絶えず考へねばならぬ中心問題の一つでございますわ。でも、それと同時にそんな問題は、列國ブルジョアジーの掃溜である共同租界の人々からは、考へて頂かない方が結構な問題でもありますの。これは勿論失禮な云ひ方ですが、あたくしたち中國人にとつて、殺倒して來る各國、、の、、から逃れるための方法としてでも、マルキシズム以外の思想が存在するとお思ひになりまして。」

參木は最早や彼女の思想を尊重せざるを得なくなつた。しかし、彼女の云ふ彼の「掃溜の疑問」は、依然として首を振つた。

――問題はそれではないのだ。掃溜が問題なのだ。と。

事實、各國が腐り出し、甦生するかの問題の鍵は、此の植民地の集合である共同租界の掃溜の底に、落ちてゐるにちがひないのだ。參木は運び出されたスープの湯氣の上へ延びながら、笑つて云つた。

「どうも、僕は昔から、相手の人を尊敬すると、不思議に頭が廻轉しなくなる癖があるんです。どうぞ、お怒りにならないやうに。」

すると、秋蘭の皮襖の襟からは、初めて、典型的な支那婦人の都雅な美しさが、匂ひのやうに流れ出した。

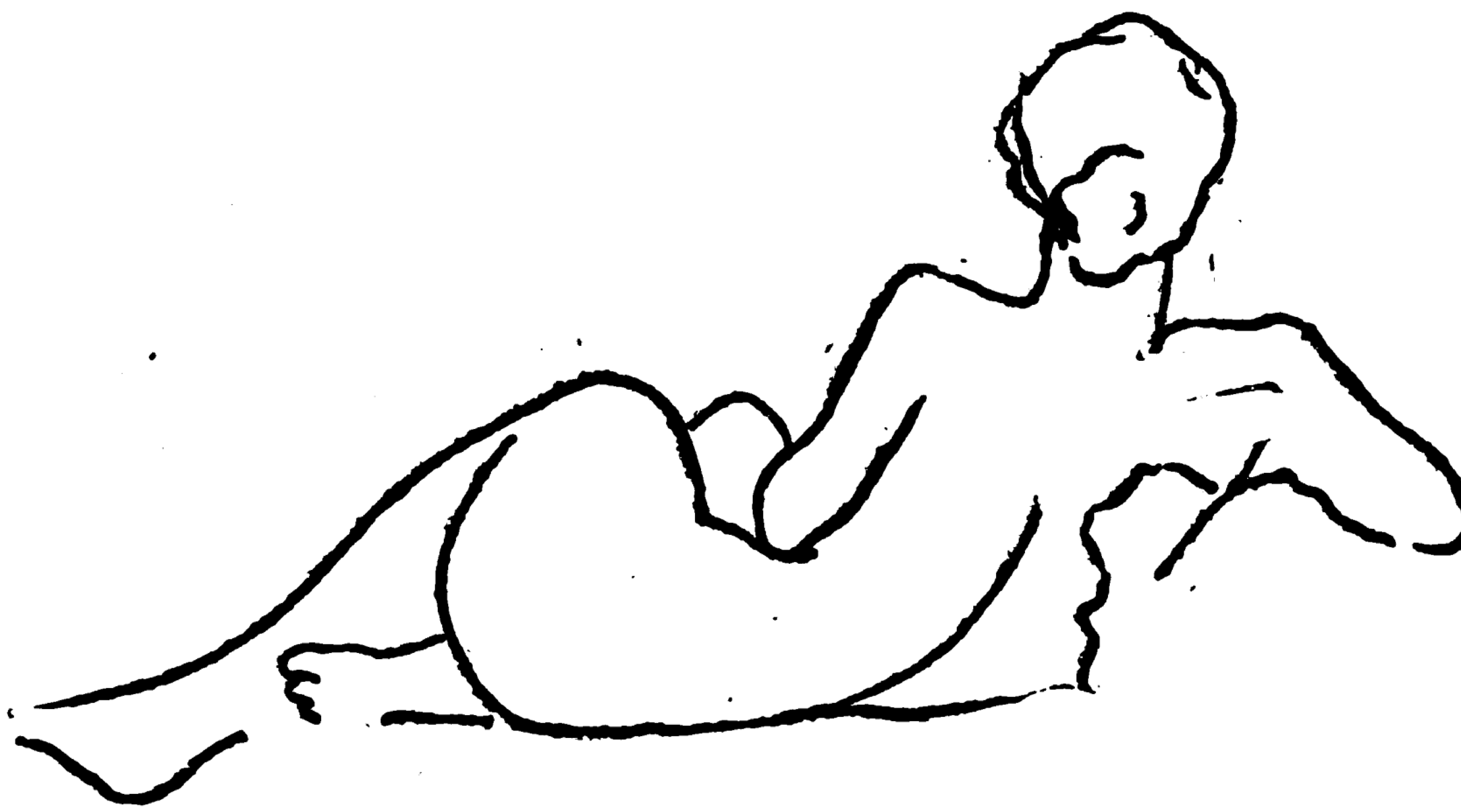
「あたくし、今日はあなたとこんな愉しいお話をしたいとは思ひませんの。もつと、あなたのお喜びになるやうな、御歡待をしなければと思ふんですけど。」

「いや、もう僕はあなたから、東洋主義者にしていただいたことだけで、結構です。」

「まア、」

「しかし、もともと僕はあなたをお助けしようなどと殊勝な心掛けで御介抱したのではありません。もしさうなら、あのときあなた以外の多くの者にも、同樣に心を働かせてゐた筈だつたと思ひます。それに、特にあなたを見詰めて動き出したと云ふ僕の行動は、マルキシズムとは全く反對の行動だつたにちがひないんです。ぢや、もうこれだけ自分の下等さを御報せすれば、もう一度お眼にかかりたいとは思はないでせうから、さやうなら。」

參木は懺悔を終へた教徒のやうな誇りに疲れながら、辷る陶器の階段を降りていつた。と、秋蘭の扇はばつたり黒檀の圓卓の面へ投げ出された。(或る長篇の第三篇)



卍（まんじ）

谷崎潤一郎

その十五

ところがその電話のありましたのんが二時頃のことで、それから三十分もした時分に、もう光子さんが來やはりましてん。私はまた、なんぼ病院が急いてたかて、いッつも出る時には一時間も二時間も待たしやはるよつて、どないしても來るのは夕方か晩ぐらゐになるやろ、まさかこないに早いとは思ひもよりませなんだのんに、門のベルがジイジイ鳴つて、上り口のたたきの上を蹈む草履の音が、……それが前にも云ひましたやうに日照りつづきの夏のことで、玄關から奥の間まですつかり開け切つてありましたよつて、すうッと表から吹き込んで來る風と一緒になつかしい香が廊下を傳て來ますねん。あいにく夫はまだ歸つて來てませんし、立ち上つたまま何處ぞ逃げ道でも搜すみたいにうろうろしてますと、取り次ぎに出た女子衆がパタパタ走つて來て、「奥樣！　奥樣！」云ふたなり顔の色變へてるのんで、「分つてる、分つてる、光子さんやろ」云ひながら自分で玄關へ出て行こととして、「あの、ちよつと、ちよつと、……」と誰を呼ぶのか分らんことを云ひながら、「あの、……ちよつと待つとくなはれ云うて、下の八疊へ通しといて」と云

ひ附けといて、二階へ上つて寢室のベッドの上で暫く動悸のしづまるのを待つてから、……それからやつと起き上つて、顏色の青いのを隱すために頰紅を少し濃いめにつけて、白葡萄酒を一杯飮んで、思ひ切つて降りて行きましてん。

わたしは仕切りの簾の向うに派手な模樣がチラチラして、ハンカチで汗をおさへながら据わつてはるらしい姿を見ると、もうまた胸がどきんどきん云うて來ましたが、光子さんの方でも簾越しに此方を見てなさつて、這入つて行くのを待ち構へたやうに、「今日は」云うてニコニコ笑ひなさるのんです。「あて、姉ちやんにあんなり御無沙汰してしもて、惡いとは思ててんけど、あれからあとにいろいろな事あつたりして、……それに姉ちやんあの晩の事どない思てはるねんやろ、きつと腹立ててはれんやろか思つたのんで、つい閾が高なつてしもて、……」と、遠慮しいしい此方の顏色うかがうてはそない云ひなさんのんが、やつぱり馴れ馴れしい昔の口調で、「なあ、姉ちやん、あんた今でも怒つてなはんの?」と、私の眼の中を覗き込みなさるのんです。私は無理に「德光さん」と改まつて呼びかけて、「今日はそんなお話するつもりでお目にかかつたんと違ひます」云うてやりましてん。「さうかて姉ちやんがあの時のことを勘忍したげる云うてくれへなんだら、あてかて話出來へんもん。」「いいえ、いいえ、私は中川の奧さんのことに就いて○○病院から頼まれましたさかい、そのことだけ聞くやうに夫の許しを得たあるのんです。そやよつてに何卒その外の話はせんといて頂戴。それからあのう、先度のことはみんな自分が馬鹿だしたよつて、誰を恨んだり怒つたりすることはあれしませんけど、あんたも今更わたしのことを『姉ちやん』やなんて云はんといて頂戴。そんでないと、私ここにゐられへんやうになりますさかい。……」そない云ふと今度はさすがに萎れ返つて、うつむいたまま紐のやうに捩ぢくつたハンカチをぐるぐる指に卷きつけながら、思はせぶりに涙ぐむやうな風をして見せて、そんなり物も云ひなされしませんねん。「あんたかつて、めつたにそんな話しに來たんと違ひますやろ? さあ、用件の方を聞かして頂戴。」「あて、姉ちやんにそない云はれたら……」と、やつぱり光子さんは「姉ちや……」云ふ言葉を使て、「……云ひたいことも胸につかへてしもてちよつとも出エへんねんけど、ほんま云うたら、さつきのあの電話のことなあ?……あれほんまは、中川の奧樣と違ひまんねん。」「ふーん、そんなら誰のことですねん?」――その時光子さんは眼と眼の間に皺を寄せてくすツとけつたいな笑ひやうをしたと思たら、「あてのことやわ」云ふのんです。「そしたら、病院に入院してる云ふのんは、あんたのことだつか?」――まあ、此の人は…何處まで厚かましいねんやろ! 自分が綿貫の種を宿してどうにも始

窮に困つたのんで、又してもうちを利用しに來るとは！　さんざん人に苦水を飲ましときながらまだ足らんのか。――私は癇ちゆうが立て來るのをじつと押し鎮めて出來るだけ空惚けて聞いてやりました。「ふん、そやねんわ」と、光子さんは頷いといてから、「入院さしてほしい云うてるねんけど、入院さす譯に行かん云はれてんわ」と、なんや褄目の合はんこと云うて、それからぼつぼつ話し出すのを聞いてみますと、あの私から借つた英語の本見て幾通りもの方法をやつてみたところが孰れも鹽梅よう行かんらしいので、ぐずぐずしてたら人目につくやうになつて來るし、氣が氣でなうて、綿貫の知つてる人に道修町の藥屋の番頭さんあんのを幸ひ、その本に書いてある處方に從うて、藥をもろて飲んだんやさうです。尤も番頭さんには事情を明かしたんやなうて、ただ必要な藥品だけもろて、それを綿貫――とは云ひませんけど、きつとさうにきまつてますねん。――が調合したので、間違うてたんかどうか、よんべ俄かにお腹が痛なり出して、胃が惡いのや思てお醫者さん呼んでる間にえらい出血した。そんでお醫者さんに譯を話して、どうぞ家の者には内證でどないぞして欲しい云うてお梅どんと二人で頼みますと、出入りのお醫者さんでんねけど、「難儀ですなあ」云うてためいきつくばつかりで、「これはどうも私には困ります、きつと手術して出さんといかんでせうが、何處ぞ專門の病院で心易い所があつたらそこ行つて相談して御覽。私は應急の手あてだけしときます」云うて體よう逃げてしもたのんで、○○病院やつたら院長さん知つてるからどないなとしてくれはるやろ思て、今朝になつてから出かけて行つて診察してもろたら、そこでも同じこと云うてなかなか聽いてくれはれへん。なんでもそこの院長さん云ふのは今の病院建てる時に徳光さんのお父さんからお金を出して貰やはつたんやさうで、光子さんとお梅どんとで掌を合はすやうにして頼むと、「弱りましたなあ、弱りましたなあ」云うて、「前やつたらこんなぐらゐのことは何處の醫者でも引き受けたんですが、御承知の通り此の頃は世間がやかましいのんで、迂濶なことすると私一人ぢやない、お宅の不名譽になるやうな事が起らんとも限らんので、さうなつたらお父樣に對して申し譯ありません。それにしても何で今迄放つといたんです、こないならんうちやつたら、――せめて一と月も前やつたらどないなとしたげたのに」云ふのんですけど、そないしてるあひだも時々お腹が痛なつて出血するのんで、ここで何ぞの事でもあつたら病院に嫌疑がかかりますし、さうかて苦しんでるものを默つて見てる云ふ譯に行かんし、「いつたい誰に敎へてもろてどんな藥を飲んだんか云うて下さい。それ隱いたかて出來るだけ秘密にはしときますけど、萬一問題になつた場合にその人が證人にさへなつてくれたら手術したげる」云ふもんですさ

かい、私から本を借つて斯う斯うした云ふことを話して、私がいツつもその本の方法を實行して目的を達してるもんですから、自分も鹽梅行くやろと思た云ふやうなことをしやべつてしもた。そしたら院長さんは暫く考へてて、こないな事はお醫者さんやなうても、經驗のあるしいろとの方が却つて手輕うに埒ようやれる、西洋の女やらはこないこないして、人の手を借らんと自分で始末してしまふのんが常識みたいになつてるさかい、私が熟練してるのんならいつそ私にしてもろたらえゝのやけど云うたりして、兎に角事件がむづかしなつても私が責任を負うてくれたら手術したげる、それがイヤやつたら本を貸したのが災難やと思てどないぞしてくれたらどやろ。お醫者さんと違て私やつたら知れる心配も少いし、知れたところで大した問題になれへんやろ。——そない云はれたんやと、まあ光子さんは云ふのんです。「なあ姉ちやん、あて姉ちやんにそんなことして貰おとは思てエへんけど、こんなりにしといたら時時痛み出してたまらんし、恐い病氣になつたりすることもある云はれたのんで、姉ちやんが責任負ふ云うてくれたら手術して貰へるのんやけど……」「責任負ふ云うたかつて、どないしたらえゝのん？」と聞いてみましたら、病院へ行て、院長さんの前で誰ぞ第三者に立ち會うてもろて約束するか、さうでないのんなら後日のためにちよつと一と筆書いて欲しい云ふのんですが、そんなことうつかり出來しませんし、それに光子さんの云ふことが何處までほんまか、よんべ出血した云ふ病人が別に窶れたふうもなうて出歩いてるのもをかしいし、さつきの電話は病院で醫局の人にかけてもろた云ふのんですけど、そんな人が中川の奥樣の名を騙る筈もなし、何ぞまた譯でもあるやうな氣がしてめつたなこと云はれへん思てるうちに、「ああ痛、……又痛なつて來た」云うてお腹をさすり出したのんです。

（つゞく）

故郷（當選）

明石鉄也



一

Y驛——其處で乘りかへだつた。

小さなトランクをさげて恭二は列車をおりた。そして、改札口へなだれよせる人ごみの流を逆にわけて、構内の外れにあるS線のプラットフォームへといそいだ。

そこには、七輛ばかりの貨車と客車とをつなぎあはせた舊型の汽車がころがつてゐた。

すゝけたドアをひらいて、恭二はかたいベンチに腰をおとした。乘客は百姓ふうの男が二人むかう隅におしだまつてゐるきりだつた。

やがて、汽笛の音が鳴りひゞいた。さつき乘りすてた列車が恭二の眼の前をゆるく通りすぎていつた。その窓々からのぞくさまざまな旅客の顔を、恭二はぼんやりと見送つた。

ガランとした構内には夕陽が赤々とながれこんで、鐵柱の細長い影がプラットフォームや線路の上に屈折して横たはつてゐた。

Sゆきの汽車はなかなか出なかつた。乘客の少ないのを幸ひに、恭二は一晝夜ゆられ通して疲れきつた身體をベンチの上に投げだした。

「えらい出んな。俺アあ小半時から待つとるぜ。」

「うん……まんだ二十分からある。いんだら暗アなつとるぜ。駐在さんが心配だな、二日も留守にしたんで……。」

むかう側の二人が、ぼつりぼつり話しはじめた。恭二はなつかしい氣持でその話に耳をかたむけた。

恭二の故郷は此處から三里あまり、半島の中程にあるT村だつた。故郷とはいふものゝ、父の顏を知らない恭二は、四ツの年に京都の伯父の家へ養子にもらはれて、それから殆ど二十年にもなる今日までに、歸つたのは三回きりだつたし、いつでも四五日の逗留が關の山だつた。

いまT村にはまる一年以上病の床に苦しみつゞけてきた母がゐる。もともと脾弱な體質だつたが、去年の春恭二が學聯事件に連座したといふことも母の病の因をつくつたに違ひない。恭二も亦その拘留ちうに病を得て、この三月までずつと小田原の療院にゐたものだから、母を見舞ふこともゆるされなかつた。そして又、恭二が惡い病魔におそはれたといふことが、母の病氣を一層つのらせたやうであつた。

恭二の病が一まづ全治したと聞くと、代筆の母の手紙は必ず次の言葉でむすんであつた。

——とにかく、いちど歸つてきてください。こちらの汐風はあなた樣のおからだにも何よりのお藥と存じますから。

院長も病後少なくとも一年以上の靜養を極力すゝめたが、三・一五事件で投獄された多くの同志のことを考へると、のう／＼と故郷の海で日を送る氣にもなれなかつた。

メーデーには、恭二はまだ疲れやすい身體を先頭にたてゝ、歌をうたひ××をふつた。そして越中島についた時は、鳥打の庇から靴の尖まで全身埃にまみれて、べつたりと地べたに安座をかいたまゝ、しばらくは起ちあがることも能きなかつた。

彼が電報をうけとつたのはその夜のことであつた。

——ハハヤマヒオモシカヘリマツ

「おばあ、早や來るだがん、きやあ、汽車出ちやうぞ。」

さきに跳びこんできた女の子が、首を突きだして大聲にせきたてた。

うろたへて乘りこんだ婆さんは、背の風呂敷包をおろしもしないで日にやけた額の汗をぬぐつた。ひどいトラホームらしく、赤くたゞれた眼に眼脂をためてゐた。

恭二は、どつか見覺えのある婆さんだと思つたが、どうしても考へだせなかつた。

夕映えのなかを汽車はゴトゴト搖れていつた。煤煙と一しよに小蠅の群が窓から舞ひこんだ。

見渡すかぎり一面の桑畑で、その遥かな彼方を松の防風林が縁どつてゐた。

線路にちかい砂丘の墓場から、子供等は汽車にむかつて萬歳をあびせかけた。

途中、二つの停車場では、受けとつたタブレットをぶらさげたままで驛長が驛の名を呼びつゞけてゐた。

夕焼けは次第に薄れていつた。

O驛につくと、晝寢の後のやうな電燈がともつてゐた。人氣の少ない改札口で、出迎へてくれた叔父の顔がすぐ眼にとまつた。二人はただにつこりして會釋をかはしたゞけだつた。

驛の入口に、空の荷車を曳いた男の子が立つてゐた。それが從弟の茂といふのだつた。

「荷物は？」

「これッきり。」

トランクを差し出してみせて、恭二は叔父と聲をあはせて笑つた。

「おゝ、島屋のお父ッつあんだないか。」

「あ、お婆さん。Yゆきか？」

「おゝ、ちよつと仕入れ物にイ。」

「大きな荷を背負つて……。どい、出つさい。ちようど車が空いとる所だ。これを迎へに來たけど、荷はこれ一ッだッちゆうけん……。」

「ほう、お前が北の恭やんか。はーん、大きうならんしたのう。あじな別の人間になつて……。」

赤眼の婆さんはまぢ〱と恭二の顔を透かしみた。女の子も婆さんの背からぢつと覗いてゐた。恭二は帽子をとつて頭をさげたが、それでもまだ、どこの婆さんだか思ひだせなかつた。

車をさきにして、叔父と恭二と婆さんと女の子とは並んで歩きだした。茂と婆さんは跣だつた。

「お母さんはどんな工合ですか。」

「うん、急にどうといふでもないけんどな。お前に會ひたがつとるんだ。この夏は大丈夫だと醫者も言ふんだが。さあ、何分にも衰弱がえらいもんだからなあ。」

「ほんに、北のおッ母が長わづらひでなあ。心配しやんすわい。」

「えゝ……。」

恭二は六年も會はぬ母の顔を想ひ描いた。

それは恭二が三高に入學した年の夏休みだつた。制帽制服姿の彼を自慢に、母は近所隣りを引つぱり廻したものだ。

「今度は愈々大學だなあ。兄貴がえゝ見せしめだ。お前だけは偉い者になつてくれ。」

何度となく母は繰り返した。

恭二は一番の末ッ子で、長男の久一との間に二人の姉妹があつた。姉の町子は近村の駐在所に、妹の絹子は煎餅に嫁いでゐた。久一は蠶業を廢學して歸ると、僅かばかり殘つてゐた田地を賣拂つて飲料にしてしまつた。やがて義弟の勸めで巡査になり一家は持つたが、母との間はいつまでも旨くゆかなかつた。

それから、母は引き網に出たり、養蠶の手傳をしたり、いりぼし（ひぼし）を賣りに歩つたりなどして漸く口を凌いできたのだつた。

「お前が大學を卒業して、立派な嫁を貰ふまでは、妾ア死んでも死なんけん。」

晴ればれと笑ひながら、母はさう云つた。

恭二も、早く成功して幸福な家庭をつくり、母を迎へて長年の辛苦に酬いたいと思つてゐたのだつた。

それが………。

叔父は車を止めさせて提灯に灯を入れた。

夕闇のなかに、砂地の縣道が白く眞直につゞいてゐた。まだやつとO村を出たばかりの處で、これからさき小一里からの道のりだつた。

「ほんにだぞ、お前、夜も日も寢ずに世話をして、そんで元も子もなしだけんなあ……。」

婆さんはさつきからの話の續きで、蠶さんのことをこぼしてゐた。

「でも、お前の家は早かつたけえ、えゝ方だぜ。少し遲れて、これから上る處でア、まんだ値がさがるわい。」

「さうかなあ。何だつちつたつて、去年の大方半値だけんの……。みんながもう夏蠶を飼ふ氣もせんッちつとる。」

婆さんは、それが叔父のせいでもあるかのやうに、頭をふり〳〵むつとした調子で言つた。

「夏蠶飼はんちつたつて、今更他に仕事もないだないかえ。それでも蠶さん飼うた家は桑が安かつただけ助かつたわけだ。家見たいに桑を賣るだけの者アそりやえらい目こいたわい。一貫が五錢ちゆう相場でア肥代にもならせんでの。」

ちよつと話をとぎつて、叔父は恭二に尋ねかけた。

「こんなあんばいでア蠶では暮らせんぞい。何時になつたら、この繭の値ッちゆうもなあ出るだらうなあ。」

「さうですね。……。」

恭二は言葉をにごした。

「ほんに、一昨年よりや去年、去年よりや今年ッちゆう工合に、悪うなる一方だけんなあ。」

鐵のやうに頑丈な叔父の體格だつたが、その聲はどつか力なく暗か

つた。

——苦しいのだ。何處でも苦しんでゐるのだ。さうだ、僕の故郷でも。

恭二は胸の中で強く呟いた。

「ほい、村の火が見えだしたぞい、恭ちやんよ。」

默りこくつてゐる恭二に呼びかけて、婆さんが顎をしやくつた。

「お、あれが門永の松だ。」

叔父が指さしてみせた。

前方に、光の少ないT村の屋並が黒々と横たはつてゐた。

今まで、二人きりで騒いでゐた茂と女の子とは、いきなり車の傍たかく馳けだした。

二

恭二の生家は、莚を敷いた六疊の臺所と擦りきれた疊敷きの八疊の居間としかない藁屋根の一棟だつた。それは村の裏通りになつてゐて後はすぐに桑畑だつた。

門といふのも名ばかりの、丸太ン棒を二本うち込んだもの丶間を入ると、半分あけた破れ障子の蔭に見覺えのある屏風が立て丶あつた。それは五燭の電燈の光に一層赤ちやけてすゝけてみえた。

「あ、兄さんが見えたつぜ。」

紺がすりを着た娘が緣側に飛び出してお辭儀をした。

「どんな工合だ？」

叔父はトランクを緣側に置きながら尋ねた。

「とてもえゝやうだつぜ。さつきから待つて待つて、待ちなさるこつた。」

「さうか、はツはツはツは。さあ、恭、はや上つてあげえ。」

恭二はズボンの埃を拂つて靴をぬいだ。叔父と茂とは井戸端で足を洗つた。

母は夜具の上に身體を起こしてゐた。

「お母さん………。」

母はチラと恭二を見て、また顏に袖をあてゝしまつた。恭二もそれ以上、口がきけなかつた。

母は思つたよりもひどく痩せ衰へてゐた。ボロ／＼の着物をつけた骨と皮の姿は、全く眼もあてられなかつた。

「よう、戻つて、きたなあ。お前も、からだが、悪いに、つかれただらあな。」

母はやうやく顏をあげて、聞きとれぬほど小さな聲できれぎれに言つた。

「え丶、僕はもう大丈夫です。」

恭二は俯向いたまゝでそれだけ言つた。彼は母の顏をみつゞけることが能きなかつた。母の顏はまるで土いろだつた。眼と頰は落ちくぼみ、耳の下から顎にかけて幾すぢとない縱皺がたるんでゐた。白髮はバラ〳〵にもつれみだれてゐた。――それは生きた『顏』といふよりも何か『影』のやうなものに感じられた。

「まあ、今度は、當分、ゆつくりして、ごすだらあな。皆も淋しいけなあ。」

「え丶、お母さんがすつかり良くなるまで居ます。」

恭二は、さう言はずには居れなかつた。

「それがえゝ。毎日、海へ行つてみい、お前の身體も、すぐに元氣になるけえ。この夏一杯、眞ッ黒けに燒けるがえゝぞ。」

母はうれしさうな顏で笑つたが、それは笑聲のやうにも聞こえなかつた。

「あの、澄や、あの菓子を恭にやつてごせえや。」

枕もとに座つてゐた娘は、從妹の澄子といふのだつた。彼女は立ち上つて、佛壇から菓子箱をおろして來た。

それを機に、恭二は佛壇の前に跪いて、父の位牌に線香をたいた。

「これア町が持つて來てごした。食へ、澄も食へ。」

干菓子の箱を恭二の前に押して、母はしきりにすゝめた。

素直に彼はその一ツをつまんで、こぼれおちる粉を掌にうけながら食べた。

疲れたのか、母は蒲團の上に横になつた。澄子が薄い掻卷をかけてやつた。

「兄やん、すい風呂がわいたけん、おいでつて。」

茂の高い呼び聲が庭の闇の中で聞こえた。

「あ、それがえゝ、疲れがなほるけん。御飯も家の方で仕度をしとる筈だけえ、いつておいで。」

澄子がませた口調で言葉を添へた。

恭二は洋服のまゝで茂の後につゞいた。

「兄やんは家を覺えておいでるかや。」

茂は恭二の腕にぶらさがるやうにもたれかゝつて離れた。

「道は忘れらまつた。お前がまだ七ッ八ッの頃に行つたッきりだからなあ。」

「ふうん、さうかや。私ア兄やんの顏おぼえとつたがなあ。」

「さうかい。」

恭二は思はず微笑した。暗い裏道の砂を踏みながら、彼はこの懷ッこい少年に沁々と肉身の愛情を感じるのだつた。

叔父の家は半町と離れてゐなかつた。軒のひろい葡萄棚には見覺えがあつた。
「恭やん、戻らさんしたッてのう。御苦勞だつたなあ。」
庭の眞ン中で風呂を焚いてゐた叔母が人のいゝ笑顏で迎へた。
「母が色々と御厄介になりまして。」
恭二は心から禮をのべた。
「何がいの。忙しいもんで碌に世話もでけんだぜ。」
「まあ一風呂あびて、汗を流すがえゝ。洋服は座敷にぬいどけ。」
井戸端で魚の料理をしながら叔父が聲をかけた。
叔父の家も普請は彼の生家と同じだつた。たゞ疊には薄縁が敷いてあつたので大分小ざつぱりとしてみえた。
「汗のついた物は縁に出しときないや。洗つといてあげるけん。洋服でア窮屈だらうけえ、あがつたら、汚いけどお父ッつあんの着物を着ないや。」
「えゝ……。」
恭二は狹い据風呂の中にうづくまつた。盛りあがる湯のために、鐵砲釜がジュンジュンと音をたてた。
「ぬるいこたアないかや。」
一抱への松葉を持つて來て、茂が釜の上から投げこんだ。釜の中がボウッといつて焔の舌がゆれた。舞ひあがつた灰が、さかんに頭の上から降りかゝつた。
「いゝよ、いゝよ。ほら、こんな灰神樂だ。」
恭二は明るく笑つた。
頭に蔽ひかぶさるやうに大きな杏の枝がさし出てゐた。以前に、よくその杏の實をふるひ落して食つたことなど思ひ出された。枝葉のすき間から星が覗いてゐた。松葉の匂ひのする湯に首までつかつて、恭二は妙に感傷的な氣持になつてゐた。
風呂からあがると、叔父の他所ゆきらしい縞の單衣を着せられた。
「大きな男にならんしたなあ。お父ッつあんの丈が丁度えゝが。」
「私ア兄やんの胸までかない。」
恭二の傍に並んで、茂が片手をあげて計つた。
「さあ、腹がすいたどらア。何もないが。」
叔父は盃をさした。ことはる氣にもなれないので、恭二は強い地酒を口にした。二杯で眞赤になつてしまつた。
「ほう、お前はいけんのだなあ。兄貴の弟にも似合はんのう。はッはッはッはッは。」
さう言つて高々と笑ふ叔父も、もう赤銅いろになつてゐた。
「兄貴もどうやら身がきまつたの。出世して部長になつたッぜ。だ

ね、やつぱり、おッ母とは合はんで困つたもんだ。」
「S署に勤めてるさうですね。時々は家に來ますか。」
「この前、おッ母がえらい悪くなつて使をやつたらちよつと顏を出した。その他には寄りつかんな。人はえゝ人だけんどなあ。」
「ほんに、えゝ人だがな。妾らにはほんにしんびよな。どがしてかな。」
山盛りにした茶碗を膳の上に並べながら叔母が口を出した。
「やつぱり酒のわざだ。」
叔父は最後の盃をグッと傾けて倒さに伏せた。
「飯は麥飯だ。まあ、魚でもなめてくれえ。」
膳の上は全部いきのいゝ魚づくめだつた。下手糞な料理でも、味は素敵だつた。
「筆子さんはわけもわからん遠方だし、兄やんはあんなだし、町子さんはちよい〳〵みえるけど子供が多うてゆつくりもでけんしなあ。義姉さんも淋しいわいな。今度は當分居つてあげないよ。」
「えゝ……。」
「京都には寄らなんだか。」
「はあ、下車しないで、すぐ乗り換へました。」
「さうか。」
「だんだ叔父つあんたも、恭子と二人の何かにえらい氣つかひだつたあな。」
「…………。」
「京都と東京とは、どつちがえゝかな。」
今まで口を出す折がなくて猫の背を撫でたり抱いたりしてゐた茂がだしぬけに尋ねた。
「はッはッはッはッは……。」
何か救はれたやうな氣持ちで、恭二は皆と聲を合せて笑つた。
その時、澄子が小走りに歸つてきた。
「あだん、えらい面白げだなあ。……あんなあ、伯母さんがなあ、兄さんに早や戻つてごせつてえや。」
「あ、さう。」
恭二はすぐさま腰をあげた。
「ほんにだ。あがに待つて待つて、あげな電報までうたせなさつたほどだ。早やいんであげるがえゝわいな。」
しんみりと伯母が言つた。
「君はもう休んで下さい。今夜から僕が看病するから。」
恭二は、また附いてゆかうとする澄子に謝つた。
「いゝんや。下の物の世話なだアやつぱり澄の方がえゝでの。澄、お

前からちいと泊つてあげ。」

膳を片づけながら叔母が言つた。

「私も行く。」

猫を投りだして茂が起ちあがつた。

「もう遲いけえ、お前は明日にせえ。兄やんは今度は長いこと居なるのだけえ。」

「あだん、好かんなあ。」

茂は、てれたやうに呟くと、また猫の首をつまんで抱きあげた。

家に歸る途中、恭二はいろいろ病氣のことを澄子に尋ねた。

「やつぱり胃腸だらうね。」

「えゝ。それに大分神經氣なでなあ。兄さんのことを、とても心配してたなあ。」

「さうか……。僕の所へ來た手紙は君がみな書いてくれたんだね。」

「えゝ。兄さんのことは誰にも內緒にしてこせつて、何遍も妾に賴んでだつぜ。町子姉さんは新聞で知つておいでるけど、他の者は誰も知らんふうだツぜ。」

いつのまにか大人になつてゐる從妹の考へ方に恭二は少なからず驚かされた。

歸つてみると、母の床の兩側に、繼ぎはぎだらけの夜具が二つ敷いてあつた。恭二はそのまゝもぐりこんでしまつた。

彼は母と話すのが辛かつた。話したいであらう母の心はよくわかつてゐた。本當は自分も話し合ひたかつた。だが、話が當然おちてゆくであらう問題に今觸れることは苦しかつた。それは又、母の身體にも障るだらうと思つた。

「もう十時だから、今夜は默つて睡ませうね。僕も疲れてるから。」

母はおとなしくうなづいた。

澄子は水を汲んで母に散藥を飮ませた。

「これ催眠劑だツぜ。睡られんもんだけえ、伯母さんは毎晩飮んどられるん。」

「胃に惡くないやうにしてあるんだらうね。」

「そがだらアな。醫者が調合してくれたんだけえ。」

土瓶の水を貰つて、恭二もアダリンをかぞへた。

天井のない屋根裏に煤けた蜘蛛の巣が一面に垂れてゐた。大きな黑ずんだ梁の木が縱橫にわたしてあつた。そして、この暗い部屋ぢうに長い病氣の臭がこもつてゐた。

やがて、母と澄子の寢息が聞こえはじめた。その寢息を聞いてるだけでも、年老いて病む人と若くて健かな人との、生命力の差といふものがハツキリ感じられた。

仰向いても、母に背を向けても、恭二の眼蓋の裏には、蝋細工の死面のやうな母の寝顔がコビリついて離れなかつた。

——いつまで生きられるだらうか。

いくら考へまいとしても、絶えずさうした言葉が頭をもたげてきた。

遠く近く、重苦しい海鳴りが傳はつてきた。

父が亡くなつてからでも二十年、子供たちの下積みになつて苦しみつゞけてきた母の生活、而も何一つ酬いられたことのない貧と苦との母の生涯をおもうと……。

恭二は眠れなかつた。

どつかで鶏がないた。

恭二は又アダリンを掌にのせた。土瓶にはもう水がなかつた。彼はそのまゝポリポリと噛んで呑みおろした。

三

「あら恭さん、久しぶりだつたなあ。」

一汗だくになつて姉が訪ねて來た。二人の子供を連れた上に、背にも赤ん坊をおぶつてゐた。

「大變だね。」

恭二は縁側に立つて、姉の赤ん坊をおろしてやつた。赤ん坊の顔は、また甘い乳の香がした。

「叔父あんだぜ、敏夫や。」

姉は汗をふきながら、恥かしさうにしてゐる子供達に笑ひかけた。咲子に敏夫、赤ん坊は菊子といふ名だつた。恭二はどの子供も今あふのが初めてだつた。

「隆夫や春江は？」

「もう小學校に通つとるのだぜ。そりや大きうなつた。」

「町か、子供らも早や上がれ。」

蒲團の上に坐つて母が聲をかけた。

「どうだいな、加減は。えらい顔色がえゝぜ。あら、髪も綺麗に撫でつけて。」

姉はぢつと母の顔を眺めた。

「うん、こないだから、とても氣持がえゝんだわいや。便所にも行けるしの。」

「へえ、そりやそりや。恭さんに會へたけえだらうぜ。」

姉は恭二をふりかへつて笑つた。

姉は以前とちつとも變らなかつた。その頃は年よりも老けてみえたが、それから三人の子供を生んだ今はどつちかといふと却て若やいで

みえた。なりふり構はぬ、引ッつめ髪で白粉ッけなしだつた。
「今日は、澄子さんは？」
「あれにや長々世話して貰つたゞ、こないだから、また工場に通つとる。」
「ああ、絲とりに。あれは、ほんにしんびよな娘だわなあ。」
と、言葉を切つて、
「ほんとうは、Sの義姉さんが看てあげにやならんのだになあ。子供もなし……。妾らは、他所へ行つとるもんだし、子供の世話はやけるし、心に、思つとつてもなあ……。子供を連れて來て、却て面倒をかけるやうなものだけえ。」
さう言つて、姉は菊子に乳房をふくませた。
敏夫と咲子とは、いつのまにか隣の子供と三人、庭で砂遊びに餘念がなかつた。
「もうちいと、兄さんがシッカリしてごすとえゝだけどな……。」
姉の言葉は、恭二の胸にピシピシとひゞくものを包んでゐた。病の床について働けないやうになつてからの母の生活費は、薬代から何からすつかり姉の家で支拂つてくれてゐるといふことを、恭二は母自身の口から先日聞いてゐたのだつた。たとへ一人は養子にやらねばならなかつたとは言ふものゝ、立派な男の子を二人も持つてゐて、嫁にやつた娘の婿に養つて貰ふのは、母は勿論心外なことだらうし、恭二にしても姉の前に返す言葉がなかつた。
「恭さんは、京都の家に行つて居つたけえ知るまいが、昔からほんにお母さんは苦勞のしどほしだぜ。恭さんを養子にやることに決めなさつたのも、一つはお前のため、一つは家が苦しかつたけえだ。兄さんを中學に出してからは、妾らア毎日ほんに食ふや食はずだつたッぜ。食ふちッたつて、甘藷か馬鈴薯だつた。麥の飯を食うのは、三日に一遍ぐらゐだつたつぜ。なあ、お母さん。兄さんが專門學校に入つてからは、縣の奬學金を借りて居つたが、それは高が知れたもんだつた。妾らが長い間そんな辛い目を堪へて來たッちゆうのも、兄さんが早く錢儲けをしてくれるのを樂しみにしてばッかりの話だが、それに、兄さんは途中であんなふうに、ぐれてしまつたのだぜ。戻つてからも、毎日毎日朝から醉ひつぶれて正體がなかつた。ほんになあ、妾アほんの着のみ着のまゝで嫁にやられたけえ。筆子さんもその通りだつたッぜ。」
姉は聲をうるませた。母は夜具に顔をうづめてすゝり泣いてゐた。
姉は寢入つた菊子を膝に抱いたまゝ言葉をつゞけた。
「それからッちゆうものは、お母さんはお前一人が樂しみだつたわい。養弟の家にやつたッちゆても、腹を痛めたわが子に違ひないけえ

なあ。……お前が、お前が大學をやめさせられた時にやア、妾アほんに、お母さんが氣が狂はねばえゝがともつたッぜ。……そんなこたア村の者はまんだ誰もしらんけど、お前までが學校を途中でやめたッちゆうことが門永や村の者に知れてみない、それこそ、お母さんも妾らも會はす顏がないわいや。……お前も知つとるだらうけど、京都の家でアお前を大學までは行かせることが能けんで、門永から毎月だいぶん補助して貰つとんなさるんだッぜ。それも返さにやなるまいし…………。お前ア酒も飲まんし、女にしくぢるやうなこともないし、今のうちに、あんな危ないことを止めさへすりや、必ず出世も能けるし、錢儲けも能ける。あんまり錢儲け錢儲けッて言ふやうだけど、妾らが、あんまり、貧乏に苦勞して來たけえなあ。どうぞ、そうしてくれえ。一度でもえゝけん、お母さんをえゝ目に會はしてあげてくれえ。」

はては姉もボロボロと涙をおとした。

母は一層はげしくすゝりないてゐた。

恭二は、心臓を燒鏝で抉られるやうな苦しさをおいつと堪へつゝけてゐた。

「死んだお父ッつあんにも面目ないわいや。……あそこに隣の子が遊んどるが、あれア 妹に貰つた婿の子だがの、なんでも隣の長男は海軍に入つとつたが、えらい辛いとかで艦から海に跳びこんで逃げたのだそうな。それから十三年にもなるが、まんだ行衛がわからんッちゆうぜ。村の者アみんながもう死んだもんと思つとるが、それでも親は、必ず生きとると言つて、いまだに今日戻るか明日戻るかと待つとんなさる。……お前も、今みたいな危ないことをしとると、お母さんが隣のと同じ苦勞をしなさらにやならんのだッぜ。……お前の考へとるこたア、それアえゝことにや違ひなからうが、とても妾ら貧乏人の暮しが一度にみんな樂になるこたアないし、妾らの生きとる間にそうなるでもあるまいし、それに、お母さんにそんな苦勞をかけてまで、せんでもえゝだないかえ。そんな阿呆氣もない大きなことを言はいでも、お母さん一人を安心させてごせれば、それでえゝだがなあ。」

言ひ終つて、姉は大きく吐息をついた。

「ほんに、恭や、さうしてごせえ。今まで、町にも誰にも言はなんだが、お前も悪い病氣をした後だけえ、そげな、いらんことに頭をつかつたりすると、よけえにいけまいけんなあ。」

やうやく泣きやんだ母が、眼を押し拭ひながら言つた。

「えゝ………。」

それより他に、恭二は言葉が出なかつた。

息のつまるやうな沈默がつゞいた。

「お母さん、島屋の兄やんは？」

砂あそびにも倦きたらしく、敏夫と咲子とが縁側の下まで來て膝をかけた。

「お〻、もう學校から戻つとんなさる頃だけえ、お前らア行つてみい。」

さういつて、姉は洟をかんだ。

子供たちは又三人連れで驅けだしていつた。

「子供の時が一番え〻なあ恭さん。」

姉がにつこりした……。

「可子さんも來といでるだか。どがなかいな、お母の工合は。」

おなじ汽車に乘りあはせた赤眼の婆さんだつた。

「あ、お婆さんか。御蔭でなア、ようなつたでな。」

姉が菊子を下に寢かして挨拶した。

「そりやえ〻のう。かんたも遠い所を、しんぴよに見舞はさんすのう。……恭やん、こないだの晩は。だんだん。お蔭で荷なしで樂に戻れたわいの。」

「い〻え……。」

「まあ、上らさんせ。」

母がす〻めた。

「あい、だんだん。ほんに、顏色がえ〻ぜ。恭やんはたうとう大きな學校を卒業して、今度はゆつくり居つて看病しなさるだけえ、病氣も治る筈だわなあ。かんたは果報者だ。」

婆さんの言葉に恭二はハツとした。だが、村の人々に恭二が大學を卒業した、と苦しい答をしてゐるらしい母の心は素直にうなづけた。すまないと思ふばかりだつた。

それから、婆さんは、胃腸には何を煎じて飮めばい〻とか、もう蠶さんを飼つたつて食つてゆかれんとか、それでも他に道がないから今度も梅雨蠶を飼ふことにしたとか、一時間あまり悠長に喋つていつた。

杖をついて歸つてゆく婆さんの屈んだ後姿を見送りながら、恭二は姉に尋ねた。

「この前は、小さな女の子を連れてゐたが、あれは何處の婆さんだね。」

「あれはお前、竹中の婆さんだがな。もう八十近いのにあの元氣でなあ。」

母が羨ましさうに言つた。

竹中の婆さんと聞いても分らぬらしい恭二を見て、姉が詳しく說明してくれた。

「それ、家の本家の良吉つつあんたあ。あ、お前は知らんたあ、本家

のお父ッつあんと一緒にアメリカに稼ぎにいつとつた人だ。本家は長い間、小母さんと末子の丑松と二人暮しだつたゞらう。お前は見たこともなからうが、お父ッつあんと良吉ッつあんとは、ずつとアメリカで働いとんなつたゞ。その良吉ッつあんの嫁さんの母親だがな、あの婆さんが。」

「ほあ、さう。」

「嫁さんは八年前に貰はれてアメリカに行つとんなつたが、一昨年、連合の良吉ッつあんが、材木を切る機械に捲き込まれて死んぢやつたのだそうな。その時は、もう二人も子供が出來とつたになあ。お父ッつあんもえゝ年だし、いつまで居つても仕方がないもんだけえ、去年の正月みんなで戻つて來なさつたがな。溜めた金といふほどのものもなかつたそうな。……戻つてから大きな問題が起つてな。なんでも、アメリカに居る間、良吉ッつあんが死んでから、お父ッつあんと嫁さんと仲が良かつたちゆうんで小母さんがえらい元氣だつたッぜ。それで、嫁さんは子供を連れて竹中に歸なせられてしまひなつたゞ。何十年ッて留守をしてをつた小母さんにしてみれば、それアえらい腹が立つたゞらうが、嫁さんも氣の毒でならん。去年の盆には、上の女の子だけが、本家に置いてある良吉ッつあんの位牌を拝みに行つたそうな。それも小母さんの留守に、コッソリとな。いぢらしいッちッて、本家のお父ッつあんが妾に話してきかせなさつたことがあるわい。…………ほんに、世の中ッてなんでこんなに不幸なことばつかしあるだらうなあ。」

「ほんになあ……。」

母も暗い聲で呟くのだつた。

四

「それぢやア駄目だ。」

兄はだいぶ醉が廻つたとみえて、官服の白い上衣をぬいで言葉を繼いだ。

「いま時の百姓は、困る困ると言ひながらも、働くことが嫌ひなのだ。そりや、誰だつて遊んでる方がえゝからなあ。」

「今だつて冬の間は、夜業に繩をなつたり、草鞋をこしらへたりはするが、それが昔ほどの金目にならんのだがな。そげな事をしても、おひつかんのだがな。」

叔父が情なささうに答へた。

「それでも何かの足しにやなるぜ。それから肥料だつて、人糞が一番よう利くのに、此の節はやれ何とかアンモンだとか、やれ何とかソーダとか言つて、金のかゝる人造肥料を使つとる。それや、その方が使

ふにも便利だし、汚くもないだらうが、それぢやア駄目だよ。」
「それや、人糞はえゝにはえゝが、此の邊の村だけだアとても足らん。どうしてもSかYまで汲みに出んならんだらう。さうなりや、車を買はんならん、それを牽かせる牛も飼はんならん。そげな元手があるもんか。その上、車にも牛にもえらい税がかゝるだぜ、お前。」
いつもは默り屋の小父だが、酒のせいか、なかなか頑強に言ひ張つた。
「何といつても、此頃の百姓さんは贅澤だよ。百姓の娘でも、他處ゆき衣をみると、どこのお孃さんだかともうけえな。食ひ物でも、此の濱地方は、以前にや甘藷ばつかし食つとつたもんだが、どうして今時ア麥や米を買うて食うけんなあ。すべてが、その調子だ。」
「そげなこと言つたつて、お前、いつまでも、十年二十年の昔と同じ工合に、甘藷ばつかし食つとつちや、生きとる甲斐がないぜ、お前でも好かんだらア。はッはッはッは。」
「それが、いかん。百姓は何日までも百姓らしくして居らにや。そこが、百姓の尊い所だ。」
「はッはッはッはッはッ……。」
一度に三人が笑つた。
「そんなことなら、百姓なんか、やり手がないわいや。」
叔父が、まだ笑ひながら言つた。
「だから、どしどし稼ぎに出ればえゝ。アメリカでも、滿洲でも、大阪や東京の方でも、世界は廣いもんだ。何も生れた土地にへバリ附いとらんでもえゝがな。」
「さあ、稼ぎに出るにしても、その用意が大變だがな。まとまつた金がなけにや出れんだッぜ。よし、出たにしても、良吉ッつあんみたいに、長いこと知らん處で汗水たらして働いても、機械で八ッ裂きにされたり、あそこのお父ッつあんみたいに、髮が眞つ白けになつて戻つても、持つてきた金で何時まで食へるかいや。裏の息子は大阪にいつたが、三年とたゝぬ間に青い顏して舞ひ戻つて來た。肺病だッちゆうんで、あの家にや誰も寄りつかんことになつてしまつたぜ。……それに、俺らが村を出るとなると、まづ借金を拂はにやならんしなあ。」
叔父は、兄に盃を返して、話をつゞけた。
「この二年といふもの、借金だらけだぜ。その利子を拂ふことも能けん。役場で貸せるやうになつたッちゆうけど、何だか手續きが面倒くさいし、條件がむづかしいしの。門永に收める分は大年拂ひだが、一割の利子で翌る年の六月まで待つて貰ふけど、此頃みたいな鹽さんの値でア損ばかりしとるしなあ。小作料ッちゆうのは、畑で玄米六升だぜ。一升二十九錢としても、なんぼだ、一圓七十四錢からになるな。

畑に九畝九分まで桑を作つとるが、一畝に二百株から二百二十株くらゐ植ゑて、春の葉が三十貫、夏の葉が二十貫ほどとれる。それで、お前、こないだのは、一貫五錢ッちゆう値だけんの。それにや、一俵三圓八十錢の人造肥料を春の芽出しにやり、刈株にや、一升三十錢からの硫曹液をかけ、十貫が六圓五十錢のシメカスや五圓五十錢のアンモンをやらにやならぬ。そうして、食ふや食はずで朝から晩まで働き通して、結局借金を增やすッちゆうことになるだけんなあ。……桑畑にしとると、年ぢう何も他の物ァ作れんしのう。今年は桑をやめて藷を植ゑた者もだいぶでけたぜ。そうすりや、その後にや麥が作れるけんな。此の邊にや、砂地だけん田はなし、せめて麥でも食ひ料に作らんと、それこそ干ぼしになるわい。はッはッはッは。ほんに、百姓はえらい目だ。俺もお前に頼んで、巡査さんにして貰ひたいわい。」

「はッはッはッはッ。それが、え丶かも知れんな。」

「はッはッは。お巡りさんばかりになつちやうでせうよ。」

と、興味深く兄と叔父の話に耳を傾けてゐた恭二は、この時初めて口を出した。

「だが、畑を作る人もなくちやならないんだが、どうしたら百姓をつゞけてゆけますかねえ。」

「さあ、それだいや。……蠶さんの値段が惡いとか、肥料が高いとかいふのは、俺らやア、どうとも手の出しやうがないけえな、やつぱり小作料をまけて貰ふとか、利子のいらぬ金をなんぼでも要るほど貸して貰ふとかする他に道はないッちゆうことになる。同じ縣下でも、DとかHとかCとかでは、農民組合ッちゆうもんがあつて、それで、だいぶ小作料が安くなつたつて話だがな。畑の惡いくせに、小作料はこの濱地方が一番高い方だぜ。小作料をまけて貰つたつて知れたもんだが、まあ當分そうでもする他に仕方があるまいなあ。」

「さうですね。」

恭二は、眞ッ直に叔父の眼を視かへした。彼は、ゴツゴツと言ひ廻しの下手な叔父の話を聞いてゐて、貧乏に苦しみきつてゐる叔父たちの間から必ず盛り上つてくるに違ひないもの丶胚種を視いだしたのだつた。

「あ丶丶。晝酒ですつかり參つた。何だか空が廻つてきたけえ、よばれ立ちするかな。」

兄はサーベルを着け上衣を引ッかけて起ちあがつた。

「僕もちよつと役場まで行くから一緒に出ませう。」

「役場？　何しに？」

叔父が坐つたま丶で見あげた。

「調べものがしたいから。」

「あひかはらず勉強ぢやのう。」
兄は軒下から自轉車を曳き出しながらからかつた。
役場の前で二人は別れた。曇り空の下を、自轉車に乘つてゆく白服の後姿を見送つて、恭二はわびしい氣持がした。
役場には、昔のまゝに、よく肥つた助役が居た。
「やあ、暫くぶりだつたなあ。今度は目出度く卒業だそうで。」
「………」
恭二は返答に當惑してしまつた。
「おッ母が惡いそうだが、どうだな。」
「えゝ、もう殆ど全快しました。………實は、此の村の産業やら經濟狀態を調べてみたいと思ふのですが、何か統計のやうなものがありましたら見せていたゞけないでせうか。」
「そうだなあ。T村だけのはないが、A村として概略をまとめたものがあるけえ、そんなのを調べたらえゝだろう。何にするだ？」
「え、ちよつと、ついでゝすから、暇つぶしにみて置きたいと思ひまして。」
もとは××××だつたといふ噂の助役は、横柄な恰好で、四五冊の綴込みを片隅のテーブルに投げだした。
恭二は、四時間ほどかゝつて、それを大急ぎで調べた。

それは、いづれも、所謂模範村に近づかうとして修正を加へた調査なのだから、よつぽど割引して考へねばならぬものだつたが、一見して、産業狀態の低落と、經濟狀態の窮迫が十分に想像された。
T村ほか四ヶ村の大字を含むA村の最近の諸統計の摘要をあげてみれば左の通りである。（次頁）

特に注意しておくが、此の統計は凡て昭和元年度現在のもので、昭和二年、同三年の狀態は、叔父の話にもあつた如く、此の統計よりも殆ど幾何級數的と言つてもいゝ位の比率で低落してゐるし、なほ低落しつゝあるのである。

五

恭二の家から、裏の桑畑を二町ばかり拔けると、紺碧の夏の海が展けてゐた。
白い渚が尨大な半圓を畫いてゐた。その一端は左の前方に青黒く突き出た8半島との間に海峽を抱き、右端は何處までも迂曲を續け遠く陽炎のなかに消えて、その空のあたり、ちようど、此處から海を隔てた遥か眞正面に、端麗なD山が雲を拔いて聳えてゐた。
七月の太陽に燒けた子供たちが、素ッ裸で海と戯れてゐた。

面積 ○、二四方里

耕地區分

	田	畑	計
自作地	一五、〇町	六一、五町	七六、五町
自作兼小作地	四二、六	一二七、七	一七〇、三
小作地	二六、一	四五、一	七一、三
計	八三、七	二三四、三	三一八、〇
農家一戸當耕地	一六畝	四四畝	六〇畝

耕地所有者	
五反歩未満	三二二戸
一町歩未満	八二戸
一町五反歩未満	四五戸
二町歩未満	二八戸
二町歩以上	一六戸

現在戸數	現住人口 男	女	計	十年前ニ比シ増△減	一戸數一人口
六六三	一、八二五	一、九九七	三、八二二	△三〇	一一

動態 婚姻 四五組 離婚 八組 出生 人口百ニ付 四人一 死亡 人口百ニ付 三人九

職業別人口

		戸數	人口 男	女	計
農業	自作	二八	二五〇	二六五	五一五
	自作兼小作	二八〇	七八三	八五四	一、六三七
	小作	二一八	四三四	四七五	九〇九
	計	五二六	一、四六七	一、五九四	三、〇六一
商業		三五	一二八	一二五	二五三
工業		三二	一〇二	一一〇	二一二
漁業		六〇	一〇六	一二九	二三五
其ノ他		一〇	二二	三九	六一
計		六六三	一、八二五	一、九九七	三、八二二

海外渡航人員

米國	ブラジル	歐州	濠洲	計
一八七	四	八	三五	二三四

農業

種別	作付反別	價額
繭 春蠶	—	一五五、五五三圓
繭 夏秋蠶		七三、九四五
桑苗	—	二、八〇〇
米	九五、八町	四九、七四一
麥	九五、〇	二四、〇四六
甘藷	四三、五	三八、六三八
瓜類	二、七	一、二五〇
實棉	七、〇	一、八〇〇
其ノ他	—	四、三八五
計		三五二、一五八圓

畜産	水産	工産
三、〇七五圓	九、〇四五圓	一一、五〇六圓

生産總額 三七五、七八四圓（前年ニ比シ 九六、八六七圓減）現住一戸當 五六七圓 現住一人當 九八圓

金肥消費高 計	農家一戸當消費高
六九、二二〇圓	一三二圓

諸税收入

國税

種目	金額
田租	五六三圓
營業税	一、一八六
宅地税	七九
烟雑地税	五〇五
所得税	二、〇七九
資本利子税	一
—	—
計	五、一八四

縣税

種目	金額
地租割税	一、五九[illegible]
特別地税	一、一三[illegible]
戸數割税	三、一一一
營業税	[illegible]
雑種税	三、四七一
營業税附加税	八[illegible]
所得税附加税	一一〇
計	一〇、六〇七

村税

種目	金額
地租附加税	九一八圓
特別地税附加税	五八九
國税營業税附加税	八二一
所得税附加税	三二四
戸數割附加税	一六、七三六
縣税營業税附加税	五三五
縣税雑種税附加税	二、七[illegible]
計	二、四五八

戸數割一戸當 最高 一、三〇四圓九四〇 最低 〇圓五〇〇 平均 二、六四五八〇

故郷――その文字を書く度に、その言葉を呟く毎に、曾て恭二の胸にうかんだものは、この雄大な風景と肉身の面影とであつた。

だが、いま彼が故郷と呼ぶ時、彼の頭に燒きつけられるものは、腐つた繭と蛹との惡臭にみちた醜惡な風景であつた。その中で、過勞と粗食と負債と疾病とに踠き苦んでゐる肉身の生活であつた。彼の故郷も亦、現代の資本主義制度のもとにおいて、必然に衰微の道を辿る農村の一つに他ならなかつたのだ。それは當然のことだつた。だから又、彼の故郷に、、、、が勃發せねばならぬといふことも當然の理であつた。

かうして、恭二にとつては、故郷はもはや懷古的な搖籃の地としてではなく、闘爭の一戰野として考へられるやうになつた。

だが、また一方、母や姉や兄や義兄たちのことをおもふと、この鐵のやうな意志も兎角にぶりがちだつた。

――兄たちは警察をやめねばならぬやうになるかも知れない。さうなつたら、どうして食つてゆくだらうか。

――姉はあれほど賴んでゐたのに嘸なさけながるだらう。お母さんはどんなに悲しむだらう。また病氣が惡くなるかも知れない。

恭二は胸が疼いた。

と言つて、彼は故郷をこのまゝに見すてる氣持にはどうしてもなれなかつた。心底から肉身を愛し故郷を愛するが故に。

濱邊の松林を歩きながら、恭二はレーニンの言葉を低く呟いた。

――、、、、、は、神經のかはりに、ふとい針金を持たねばならぬ。

太陽の光。濤。潮風。強烈な松脂の匂が強く恭二の鼻をうつた。何か電流のやうなものが彼の全身を奔つた。

故郷における闘爭の火蓋を切るために、恭二は二ツの方針を決定した。

a　門永生糸工場にストライキを、、させること。

b　農繁期の、、、、を通じて農民組合を結成すること。

門永生糸といふのは、工場はS町にあるが、T村の大地主門永の經營であつて、百四十人の女工を使つてゐた。澄子もその一人だつた。

澄子は毎朝四時すぎに家を出て、一里もある工場まで歩いて通つた。そして夜は八時頃に歸つてきた。歸つて暫くは、緣側にべつたり腰をおろしたまゝ動かなかつた。

恭二は、さうした人の姿を見ることは全くつらかつた。

澄子の、繭の臭に泌みた手をとつて、恭二は言葉をかけた。

「メチャクチャに疲れてるね。何時間働いてるんだい。」

「朝の五時から夜の七時まで。」

「へえ。驚いたね。休みの時間は？」

「ひる飯の時に半時間あるだけ。あとは堅い腰掛けにかけ通しだッぜ。えらいわ。」

澄子は疲れた笑顔をうかべた。

「寄宿舍のやうなものでもあるだらう？」

「えゝ、あるぜ。八十人ほどは其處に泊つとるのだけど……。」

「君はどうして入らないんだい。毎日往復二里ぢや大變だらう。殊に夜つかれてから一里の道を、空き腹かゝえて歸るなア想つたゞけでも參るなあ。」

「そりや寄宿舍に入ると樂だけどたア……。寄宿舍はとッても……それこそメチャクチャだッぜ。」

澄子は何か言ひ難さうにして俯向いた。その意味は恭二にはすぐわかつた。工場監督のやうな奴が、家を離れて働きに來てる女工たちを、誘惑したり脅かしたりして散々に弄ぶ。――それは、何處の女工たちからでもよく聞かされる話だつた。

「ふうん、さうかい。それでみんながよく我慢してるね。よつぽど賃銀でもいゝのかい？」

「はッはッは。妾らア一生懸命にやつて、一番えゝ日が七十錢。一升の繭の糸をとつて五錢五厘だもんな。おまけに、よく罰金ッてものを取られるッぜ。糸の取り方の悪いところがあると。だけん、日によると四十錢位になることもあるぜえ。」

「工場で働いてる者に男の人はゐないかね？　例へば運搬夫とでも言ふやうな。」

「五六人居るッぜ。此の村の者も二人いつとる。……それでな、こないだも、もうちいとえゝ工合にして貰はうッて、妾らだけで相談してみたけど、どうしたらえゝかわからんでなあ。」

澄子の言葉の裏の意味をつかんで、恭二はキッパリと言つた。

「よし。僕はその男に會はう。此の村から行つてる人に。君、紹介してくれないか、すぐに。」

「えゝ、此の近所だけん。まあ、ちよつと待つて、飯を食はにや……。」

澄子は緣側から上つて、臺所の戸棚を探しはじめた。

叔父も叔母も茂も、まだ畑から歸つて來なかつた。夕暮れの軒端で蚊の群がワンワン翅音を鳴らしてゐた。

「廣谷ッて人の方がシッカリしとるけえ、その人を呼んで來りやえゝなあ。兄さんは此處に待つとんなさいよ。」

夕飯を水でかきこんだ澄子が、まだ口の邊を拭ひながら出て來た。

「うん。それから何處か歩きながら話すことにしよう。」

彼の言葉がまだ終らないうちに澄子は馳け出した。

「よく解つた女だ。」

彼は思はず呟いた。

かうした田舍にでも、新しい時代の光りは既に光しはじめてゐると彼は思つた。

澄子が紹介した廣谷といふ男はやはりT村の小作人の次男であつた。色の淺黒い、痩せてはゐるが、いかにも精悍な青年にみえた。

「ぢや、八幡さまの境内へでも行きませうか。澄子さんはお母さんの所へ行つてゝくれ給ひ。どうだ、ストライキになつたら勇敢にやるかい？　澄子さん。」

さう言つて、恭二は廣谷の顏を覗つた。彼は微笑してゐた。

「そりや、やるわいな、妾らの爲だもん。」

澄子もニツコリして、だが眞劍な口調で言つた。

恭二は廣谷と肩を並べて歩いた。薄暗い畑道の通りすがりに、廣谷は何人となく野良がへりの人々と挨拶をかはした。

踏切を越えると八幡の社だつた。境内は眞暗だつた。

「從妹の話では、工場のやり方はずゐぶんひどいらしいし、女工さん達の間でもかなり不滿の聲が高いやうですが、どうです、一ツ頑張つていたゞけませんか。」

恭二は、だしぬけに口を切つた。それは彼の癖で、何か重大な要件を纏まうとする場合に、たいてい見込みがあると思へば、いきなり眞ツ正面からピシツと切り出すのだつた。

「寄宿舍の事件でも暴けば社會的に大きな問題となるでせうし、だいたい女工の勞働條件といふものが劣惡きはまるものですね。あなた達のは、どうなつてるんですか。」

「實際、なつて居らんです。俺らも五時から七時までですが、女工が徹夜をやる時には、俺らも徹夜です。一日九十錢貰つて、トラツクで來る繭の運搬から分配、出來上つた生絲の積出し、その他に工場の罐焚や掃除まで、六人が交替でやらねばならんです。それで、何とかせずには居れんと、みんなが解つとるですが、さて何からどうしていゝか解らんもんですけえ。」

「さうですか。實に、ひどいなあ。よし、やりませう。……何處かで、もつとよく話しあつて、打ち合はせませう。T村にあなたと一緒に働いてゐる人がもう一人あるさうですね。その人たちと當分相談をつゞけてゆきませう。早い方がいゝ。今だつたら、彼奴らも閉口しますよ、きつと。繭ツてものが、蛹が出たら駄目ですからね。五六日頑

張れたら大丈夫勝利です。たゞ問題は、最もいゝ……機會を捉へて、なるべく全部の女工の不平を、バラ〳〵にしないで一つに固めてしまふことですね。」

「それは旨い工合にゆきさうです。」

「それだけで十分。他のやり方は解りさへすりやいゝんです。

「ぢや、やりませう。」

廣谷の聲は氣味の悪い程の熱情を帶びてゐた。

「君は、何ですか、勞働運動について何かお讀みになつたんですか。」

恭二は引き返す途中で尋ねてみた。

「いや、別に。僕の友達から、いつか勞働運動のこと、といふよりも、大阪の工場のことや勞働者のことやストライキの話などを聞いたことがあるもんですけゑ。それも、詳しいことは知らんのですが………。」

「その友達は村に居るのですか？」

「えゝ、あの鳥屋の裏隣りです。大阪の工場で働いて肺病になつて戻つた男です。」

恭二は、いつか叔父が話した男だなと思つた。

「あ、さうですか。ひどく悪いのですか。」

「え、此頃はほとんど會はんですけど、戻つた時から寢たぎりで……

……。時には庭に出とることもあるッちゆう話ですが。」

廣谷は聲を落として言つた。

「氣の毒ですね。……犠牲者の一人だ。」

恭二は後の言葉を、獨りごとのやうに呟いた。

「何よりも先づしつかりした組合を作らなけア駄目ですね。その生絲工場の、、の後も、すぐ組合の組織にかゝらねばなりませんね。今度の、、、、、、、すれば、此の地方の色々な工場や農村でも、いままで、、、、、、、、、、、するに違ひありません。僕も暫く此方に居ることに決めて、此の秋には是非農民組合を作らねばならぬと考へてゐるのです。その、、、とでも言ふべきものですから、今度のストライキの、、は、、に、、が大きいんですね。」

「ほんに。シッカリやりませう。」

廣谷は、もう一度、力強く繰り返した。

六

ちようど恭二が夕飯を終へて母の藥を煎じてゐるところだつた。廣谷からの使が自轉車で飛びこんで來た。足立といつて、廣谷と一緒に働いてゐる村の青年だつた。

恭二は、彼を井戸端に呼んだ。母に聞かせたくなかつたからだ。

足立の傳言はかうだつた。
「今日の晝休みに女工たちを全部集めて、例の八ヶ條の歎願條項を工場長に叩きつけることにしたのです。みんな大喜びで、わい／＼騷ぎ立てましたッぜ。だが、歎願書を見た工場長はビックリして、何の返答もなく、交渉に行つた廣谷と俺とをやめさせたのです。それで、いよいよ罷業にうつッて、さつき、×××寺に引きあげたところです。」
足立は、ひどく昂奮してゐた。
「それで、何人引きあげた？」
恭二は性急に尋ね返した。
「女工が百三十六人に、俺らが六人。」
「さうか、大丈夫だ。こッちの勝利だぜ君ッ！」
恭二は微笑して、足立の兩肩を前後に搖つた。
「すぐ來て貰へますか。」
「行きませう。×××寺と言つたね。君ア自轉車だから、さきに行つて氣勢をあげてゝくれ給ひ。引きあげた連中を一人でも歸しちゃ駄目だぜッ。」
足立はうなづいて自轉車に跨つた。
恭二は洋服を着ると、母には、ちよつとSの兄の家へ行くからと言つて靴をはいた。
島屋に寄つて、夜に母の處に行つてゝくれるやうに賴むと、大急ぎでSへ向かつた。
夜道の埃を浴びながら、彼は走るやうにして步いた。
彼は、久しぶりに、全身の緊張し切つた快感を味はつた。
×××寺といふのは、Sの入口にあつた。工場とはすぐ眼と鼻の間だつた。
寺の門を入ると、庭一杯に黑々と集まつてゐる女工達の甲高い騷ぎ聲がきこえた。廣い緣側の上に、ずらりと腰かけてゐた。
廣谷も澄子も笑顏で恭二を迎へたがみんな昂奮してゐた。
「ねえ、澄子さん。めい／＼緣の上に起つて、演說でも何でもいゝから、氣焰をあげさせてくれ給ひ。」
「よし、俺が皮切りにやつたる。」
足立が、元氣よく緣の上に飛びあがつた。
恭二は廣谷と二人で庫裡の方へ行つた。
「ほんに、あの××（工場監督の姓）ちゅう人ア、メチヤなことをやりますの。私も話をきいて腹が立ちましたわい。ひとの大事な娘さんをなあ。」
頭の禿げた和尙が、親切に茶をすゝめてくれた。
「とんだ御迷惑をかけます。」

恭二は丁寧に頭をさげた。

「なにがいな、あんた。しつかり頼みますわい。」

さういふ和尚を、廣谷は不思議さうに眺めた。

本堂の方で、何かさかんに喚いてゐる足立の聲がきこえた。拍手の音が交つた。

「なかなか要領よくやつてるらしいな。初陣にしちや上出來だ。」

恭二は廣谷と眼を合はせて笑つた。

恭二は、廣谷から、いろ／＼と今日の情報をきいた。丁度、一昨日から夜業を始めてゐた所だ。恭二には勝利の確信があつた。先の八ケ條に更に馘首反對の一ケ條を追加して、今夜のうちに、二回目の交渉をすることに決めた。

要求條項は左の九ケ條だつた。是非この最初の爭議を勝たせたいために、要求は能きるだけ低くしてあつた。

一、××工場監督を罷免すること。

二、繭一升の糸取代を七錢にすること。

三、罰金制を全廢すること。

四、夜業手當を二割増額すること。

五、運搬夫の賃銀を二割値上すること。

六、勞働時間を一時間短縮すること。
　　及び休憩時間を一時間にすること。

七、寄宿舍・工場の衛生施設を完備すること。

八、勞働組合加入の自由を與へること。

九、交渉委員二名の解雇を即時取消すこと。

恭二が惧れるところは、交渉委員の不馴れだつた。彼は廣谷と足立といま一人の男を二回目の交渉委員とし、細々と注意を與へて直ぐに出かけさせた。

いま一つ、恭二が心配したのは當局の彈壓だつた。一應の理由と集會屆は出してある筈だつたが、どうしたものか、まだ警官の姿は一ツも見えなかつた。しかし、やがて、十人位でも繰り出したなら、今の氣勢はペチヤンコになつてしまひはせぬか。朴訥な此の地方での最初の爭議であるだけに、その點は非常に危く思はれた。

恭二が庭の方に歸つてみると、十七八の女工が物凄い演説をやつてゐた。よく透る美しい聲で、工場監督を痛烈に槍玉にあげてゐた。顏は暗くてわからなかつたけれど、髪を引ッつめに結つた、背の高い娘だつた。その演説は最初とは思はれないほど立派なアヂだつた。寺の門のあたりに、だいぶ集まつてゐた町の人々も、耳をすまして聞いてゐる様子だつた。

「おい、あれ誰だい？」

恭二は縁側に近よつて澄子に尋ねた。

「宮川律子さん。妾も初めてきいたけど、ほんに上手だなア。」

「感心してないで、君もやらなけア いかんぜ。」

「もう済んだ。メチヤクチヤを喋つてやつた。」

澄子は小聲で笑つた。

女工たちの拍手の波と共に律子の演説が終つた。すると、すぐ又かはりの女工が立つた。

「えらい、これほどの元氣があらうとは思はなかつたよ。」

「みんな、今迄辛抱に辛抱をつゞけて來たのだけえな。一生懸命だわいな。」

澄子の言葉は强かつた。

やがて、廣谷たちが歸つて來た。明朝六時に回答するとの結果だつた。

「要求條項が一つ缺けてもみんな罷業を續けるちッとるッて、あんたの言葉通りおびやかして置きましたぜッ。」

足立が得意げに、ニコニコして言つた。

そこで、その夜は本堂に籠城することにして、寄宿しないで家から通つてる女工五十二名の家へ、安心させるために、男四人が手分けして自轉車で廻つた。廣谷と足立とは澄子たちと共に、近くの女工の家族が心配して訪ねて來るのに應待して了解を得ることにした。

和尚は電燈のない本堂に蠟燭を立て並べてくれた。恭二は、小僧に二三軒の菓子屋から駄煎餅を買ひ集めさせて、みんなに配つた。

女工たちは、ギッシリと本堂一杯に詰まつて、煎餅を嚙ぢりながらはしやいでゐた。十五六から二十一二までの年頃だつた。

警官がちよつと顏を出したが、廣谷が風紀問題を起こした工場監督の排斥といふ點を强調して、巧みに追ひ返した。

澄子と律子とは、組合組織の準備のために、女工百三十六名、運搬夫六名の、罷業員の名簿を作つた。

家庭訪問に廻つた四名が歸つたのは午前二時過ぎだつた。その一人から、恭二は、彼の母がまた惡くなつたこと、島屋の叔父から是非歸つてやつてくれとの傳言があつたことを聞かされた。

廣谷も足立もみんなが歸つてみるやうにすゝめた。恭二自身も暫く迷つた。だが、明朝の回答時間までは歸らないことにした。

しかし、それは決して犠牲的とか英雄的とか呼ばるべき氣持ではなかつた。恭二はたゞ此の爭議に勝ちたかつたのだ。彼には既に見透しがついてゐた。夜業まで續けねばならぬ時節の工場にとつて、殆ど全員に近い此の罷業はさう長くは堪へられるものではない。殊に最初の爭議だ。品物は生命の短かい繭だ。奴等は今夜のうちに凡ゆる手段に

よつて、切り崩しと臨時傭ひとに奔走するだらう。二三日だけ完全に頑張り通したなら、後は聞かずとも知れてゐる。恭二はその勝利の快感を味はひたかつたのだ。

「いくら家の人が迎ひに來ても、どんなに警官が脅かしても、一歩も此の境内から離れてはいけない、一人も此の團結を破つてはいけない。たゞ、今夜だけ此處に居さへすれば必ず勝つんだ。このことを、よく皆の人に解るやうに傳へてくれ給ひ。」

かう言つて恭二は廣谷たちに賴んだ。

幸ひに、此の地方では、、、、、、、、、、がまださう巧妙でなかつたらしい。恭二たちにとつて、實に長かつた一夜は無事に明けはなれた。朝空に、煙の上らぬ生糸工場の煙突がポカンとして立つてゐた。恭二は一睡もしなかつた眼でそれを眺めながら、心地よげに微笑した。

重なり合つて眠つてゐた女工たちは、恭二の言葉に從つて、洗面をすますと一齊に境内の掃除を始めた。澄子たち七八人は、和尚の寄附した米で握り飯を作つた。

愉快な朝食を終つて交渉委員は出かけた。

待つこと二十五分。委員は吉報そのものゝやうに飛び込んで來た。

「要求條項九ケ條全部承認！」

同盟罷業が高く振りかざされた。わあ――ッとあがつた喊聲。女工たちは抱きあつて、明るい叫び聲を交してゐた。

廣谷にストライキ後の注意を殘して、恭二は病床の母の許へ急いだ。

七

母はまた寢たッきりで、床の上に身體をおこすこともできなくなつてしまつた。病氣が良くなつてから、一月あまりも醫者の藥をやめて煎じ藥の手前療治ばかりにしてゐたのがもとでブリ返したらしいし、恭二のストライキ事件を神經に病んだのも惡かつたらしい。

澄子は又すぐに工場を休んで母の世話をみてくれた。毎日々々、灸りつけるやうな暑さが續いて、母の苦しみは眼もあてられなかつた。その額から胸の脂汗を、澄子は絕えず拭ひとつてやつた。一帶が砂地なのだから、下からの火照りまでが部屋の中を蒸して、夕方すぎるまでは健康な身體でも半病人の態だつた。

あの、あつけないほど巧くいつたストライキは、よく訪ねてくれる廣谷や律子や足立たちとの間の愉快な話題となるのだつたが、あのストライキのために、恭二が所謂社會主義者だとの噂は地方全體に擴まつてしまつた。青年たちや一部の人々は相當理解をもつてゐたけれ

ど、まだ大部分の人々は、社會主義者と云へばまるで强盗か殺人犯のやうに考へてゐた。これまで愛想よく話しかけた近所の人々でも、此頃は道で行き逢うと傍道へ外れてしまふやうになつた。そんなことぐらゐは、恭二も豫じめ覺悟してゐた。たゞ、それが、肉身たちにつらい思ひをさせるやうになるのを恐れてゐた。いや、それも、恭二が、故郷を鬪爭の一戰野だと考へた以上、そのとき旣に決心はつけてゐた筈だつた。

――運動の障礙となるやうな凡ゆるプチブル的な感情は克服しなければならぬ。

彼は幾度となく自分に鞭うつてきた。その時毎に一應の克服はするが、その度毎に、苦惱は彼の心臟を切りさいなんだ。

ストライキから四日目の午後、村役場の助役と駐在所の巡査とが二人づれで恭二を訪ねて來た。

その用件といふのが實にふるつてゐた。

肥ッちよの助役が言ふのだつた。

「實は、門永さんの御言葉で來たのだが、あんたは、毎月門永さんから學資金の補助をうけて居つたなあ、あれを至急返却して貰ひたいッちゆうこつた。」

「へえ、そりや又どうしたわけですか、急に藪から棒で、面喰らつたせいか見當がつきませんが。」

「その、なんでも、門永さんも此頃ア大分苦しいらしいで、それに、こないだのストライキでも莫大な損害だつたげな、その穴埋めにでも……。」

「はッはッはッはッは………。」

恭二は思はず吹きだしてしまつた。

「そッ、そりや、御同情しますが、はッはッはッは………、僕のやうな奴に、それを至急返せッて仰言つても仕様がありませんね。京都の養父の方へ掛合つていたゞくのが當然ぢやないでせうか。」

「あんたでは駄目かの。」

「とても駄目ですね。」

「それが駄目なら駄目でもえゝが、そのかはり、至急この村から京都か東京へ立ちのいて貰ひたいッちゆうこッたがな。」

――こーの野郎ッ！

恭二は、すまして扇子を使つてる肥ッちよの横面を張り飛ばしてやりたかつた。

「へえ、どうも重ねがさね驚き入りましたね。だが、一應は驚き入りましたが、考へてみると、此奴も亦、へんてこな御註文ですね。いつたい、門永さん氣は確かですかい？本氣でそんな事を言ふやうな奴ア

どう考へても馬鹿か氣違ひですね。」

恭二は、全くあきれ返つたといふ風だつた。

「ば、ばかな事を言ふな。借した金を返却せん時ア家を差押へる手續きもあるのだぜ、おい。」

「それア知つてゐます。だが、門永の奬學金は、そんな性質の物ぢやありません。返却の期限もなけりや利子もありません。あれは月に五圓でも三圓でも一圓でも返してゆけばいゝんです。その點、僕も有難いと思つてゐますよ。だが、そりや個人としての問題でしてね。別に、役場や駐在所のお方の御指圖をうける筋のものではないと思ひますが。いかゞでせうね、駐在所の旦那。」

恭二は、緣側に腰かけて風を入れてゐた巡査に笑顏を向けた。

「さあ、………どうかな。」

巡査は、あはてゝパチンと扇子を疊んだ。

「僕もよく知らないから、まあ、署長さんに詳しく聞いて來てください。」

「そりや、まあ、別としてもだな。」

と、肥ッちよは一層難かしい顏つきになつて一膝のり出した。

「今度は私個人としての意見ですぜ。な、よう聞いてください。」

助役は馬鹿に丁寧な言葉を使ひはじめた。

「あんたは、社會主義者たッちゆうが、私はそんな人に此の村に居て貰ひたくありませんのだ。此の村は昔から誠實・勤勉・質朴の氣風を誇りにしとるのです。それを、あなたは突然やつて來て、破壞してしまはうとしなさるのだ。靑年どもを都會の惡風に染まらせようとしなさるのだ。」

「どうも………。僕ア決して惡人でないんです。强盜でもなけりや人殺しでもありません。×××のやうなことさへやつたことアないんです。」

その言葉に、助役はカッとした樣子だつた。

「お默んなさい。あなたは、それより、もつと恐ろしい惡人だ。こないだのストライキでもお前がやつたのだ。此の近在で、あんなストライキいふやうな、忌まはしいことがあつたのは初めてだ。お前は危險思想を宣傳しに戾つたのだらう。本當なら、お前はとうに縛られるところだ。それを、お前の兄が部長しとるもんだけえ大目にみてあるのだぞ。足もとの明るいうちに逃げるがえゝ。特に、、、、、、、、、×××だ。お前のやうな奴が此の村にうろついとるのは村の迷惑だわい。」

「よく解りました。僕が檢束も拘留もされずにゐるのが、兄のためだなんて、兄こそいゝ迷惑だらうと思ひます。まあ、とにかく、只今の

御話はみんなひつくるめて、初めの御言葉どほり、あなた個人としての非常な御意見として承つておきました。お二方とも、この暑さに、どうも御苦勞さまでした。」

恭二は鄭重に頭をさげた。

助役と巡査が荒々しく出てゆくと、澄子は湯呑みを片附けながら、そつと恭二の耳に囁いた。

「伯母さんか。」

今まであんまり緊張だつたので、母の方はウッカリしてゐたが、母はさつきからの話をきいて、床の中で泣きくづれてゐるのだつた。

恭二はそのまゝヂッと俯向いたきり動かなかつた。

「恭や………。」

母は細い聲で呼んだ。

「…………。」

「お前は、どうしても、あんなあぶないことが、やめられんのかえ。……お前が、いのちをなげだしてまで、つゞけてゆくしごとだけえ、えゝことにやア、ちがひなからア。………お前は、妾が、いちばん、ようしつとるわいや。お前は、まちがつたことや、わりいことはする子ではない。………妾も、もう、それをやめえとは、いはん。は………だけどなア、せめて、妾がいきとるあひだゝけは、やめとつてごぜんか。………ちいとのまだ。ほん、ちいとのまだ。………妾ア、お前が、しばられたりするところオ、みたり、きいたり、ようせんけえ。」

そのあとの言葉は咽び聲にきこえなかつた。澄子も聲をあげて泣いた。

恭二は、ヂイッと、庭の松のてつぺんを視つめてゐた。ちよつと眼を動かしても、ポタポタポタと涙がこぼれおちそうだつた。

「兄やん、これ借りて來たけん、僕うちにいかいや。」

茂が門のところに立つて空氣銃をさしあげてみせた。

「よしッ。」

恭二は、グッと眼を一撫ですると、下駄をひつかけた。

「さあ、行かう行かう。」

彼は、茂の手を引つぱつて、馳けだした。

——無理もない、無理もない。お母さん、あなたの言葉は當然すぎるほど當然だ。あなたの氣持は解りすぎる位よくわかる。

恭二は、馳けながら、胸のなかで叫んだ。

——だが、この運動ばかりはやめられない。ほんとうに、お母さんの生きていらつしやる期間はもう知れてゐる。悲しいが、仕方がない。その、ほんの僅かの間ぐらゐ、やめてゐてもよさそうなものだ。

それが當然かも知れない。だが、だが、どうしても、どうしても、僕にはそれが能きないんです。まるで、つかれたやうな氣持だ。ゆるしてください、お母さんお母さん、あなたが一番よく知つてゝくださる、僕はお母さんを愛してゐます。あゝ、こんなにも愛してゐる。僕は誰にでも向かつて斷言できる、僕は世間のどんな息子よりも親おもひである！と。」

「居るがん！　居るがん、兄やん。」

茂が彼の袖を引きとめて左手の屋根の上を指さした。

一發。二發。三發。四發。續けさまに撃つたが當らなかつた。雀はみんな飛び立つた。

「やあ、下手だなあ。あ、あすこにも居るがん。」

塀の上だ。

四發。五發。やつぱり駄目だつた。

「丸が無アなるぜ。私に撃たせて。」

「待てッ。」

恭二は、どうしても一羽撃ち落とさねばおけない氣持になつてゐた。

松の枝。納小舍の屋根。みんな駄目だつた。

「それ、もどして、よう。」

「待てッたら。」

茂は泣き出しさうな顏をして、恭二の後について來た。

たうとう海邊に出て、舟小屋の棟から一羽射おとした。

「やつた、やつた。」

茂が馳けつけて捕へて來た。眼ン玉に血のりがついてゐた。それをみると恭二は急にいやアな氣がした。

「馬鹿ッ！」

恭二は、自分自身の未だ清算し盡されてゐないインテリ的な贅物をわらつた。

彼は熱い砂の上に腰をおろして、レーニンのやうに強く大きな海をながめた。勞働者の大い心臟のやうに燃えさかる八月の太陽を仰いだ。

「あれ、お父ッつあん乘つとる舟だつぜ。」

茂の指さすあたりには、五六艘の小舟がうかんでゐた。此の頃、叔父は雇はれて、夜なかの一時から午後の二時すぎまで手繰り網に出るのだつた。そして歸るとすぐ、日暮れまで畑の水汲みだつた。

恭二は又、骨をけづるやうな叔父たちの勞働を考へずには居られなかつた。

「あれえ、社會主義者が居る〳〵。」

「あれが、社會主義者だッぜ。監獄に入れられるもんだッぜ。」
突然、後で甲高い聲がした。七ッ八ッの子供たちが四人、恭二の方をチロチロとながめてゐた。
「茂、歸らう。」
恭二は起ちあがつた。
「こらッ。なぐるぞッ、だらずッ。」
茂は、立ち去りながら、子供たちに拳骨をふりあげてみせた。
「やあい、社會主義者ッ。」
「社會主義者の弟ッ。」
子供たちは、後から喚きたてた。
恭二は、後もふりむかずに歩つた。
「兄やん、ほんに、社會主義者か？」
しばらくして、茂は悲しげな眼で恭二を仰ぎみた。
「さうだよ。僕は、、、、、、だ。」
「なに？　米盜人？」
茂の偶然な洒落の皮肉さに、恭二は苦笑した。
「嘘オ。兄やんは、そげな悪者でアない。なあ？」
茂は、恭二の顏をのぞきこんで言つた。

八

義兄の持つて來た西瓜の片が附くと、叔父は、三人だけの相談があるからと言つて、茂と叔母を外に出した。
「かへつて、あらたまると話しにくいですがなア。」
と、義兄は團扇で蚊を追ひつゝ、官服の膝をくづした。
「あんたが、生糸工場のストライキに關係されてから、要視察人ッちいふものゝ名簿にあんたの姓名が載つたわけですが、さうなると、まづ兄さんがどうも工合が悪いですなア。それア、兄弟だからッて、人おのおの別の思想を持つのは當りまへですけどな。そこが、世間ッちゆうものは、理屈どほりにいかんものでしてな。それで、少くとも、兄さんが今のまゝでS署に勤められることが能けんことになるですがな。私もまあ同じことになりますが、私はとにかくとして、心配なのは兄さんですい。折角あゝやつて身も固まつて、これからつていふところで、そんな風になると、また前のやうにグレてしまはれるか知れんともふですがな。それも、私が氣をまはすだけでアない、こないだ私の所に巡視に見えた時にも、もつとも醉が廻つてからでしたが、もう巡査をやめるッて、言つとられましたけんな。ほんに、あの人は、氣の弱い性質だけえ、心の内ではいろ〳〵と心配しとられることだと

おもひますぜ。こんな事ア私が言ふまでもない、あんたも知つとられるだらうが、どうでせうな、せめて、こつちに居られる間だけは運動をやめとつて貰へんでせうかな。」

義兄は、恭二の顏をまともにもよう見ないで、澁茶にのどをうるほした。

かう言ふ調子で頼むやうに責められるのが、恭二には何よりつらかつた。彼は母の前とおなじやうに、返す言葉もなく俯向いてゐるより他しかたがなかつた。

「あんたが此のまゝ運動をつゞけて居られると、そのうち必ず、兄さんなり私なりが、あんたに繩をかけにやアならん時が來る。私アそれが悲しいがな。兄さんでも同じことだともふ。ことに、お母さんが、それを聞かれたら、どんな氣がすられるだらう。考へたゞけでもゾッとしますぞい。なあ、お母さんは先がみぢかい。そこを考へてなあ。」

義兄は縋るやうな眼で、ソッと恭二を視た。

——その通りです。

恭二は心の内でうなづいた。

「どうでせうなあ。」

「…………。」

恭二は默りつゞけてゐた。

叔父はゴクリと唾を呑みこんで口をいれた。

「俺が差し出がましいことをいふのも何だが、俺にや、恭がどうしても運動を止めれん氣持がようわかるともふな。俺は此頃びつくりしとるのだが、恭はほんの百姓みたいに俺らの暮しのえらいことをよう知つとるんだわい。それから、俺らアこれ迄は、たゞ暮しが一年一年にえらアなつてくるッちゆことは實際だけえ知つとつたが、どうしたらえゝかてんでわからなんだ。それが、恭が戻つて來て、ちよい／＼話しとるうち、そのどうすりやえゝかッてことが、ぼんやりとではあるが自分で解つて來たやうな氣がする。さうなつてから初めて、生意氣げな言ひ方だが、俺ア恭ッて男がほんとうに解つたわい。ふだん、何も言はずに居るが俺ア感心しとるぜ。俺アまんだ恭ほど、その運動に夢中にやアなれんが、恭ほどの氣持になると、とても、なんぼチョットの間でも止めるわけにやアいかんともふな。」

「そりや、私もな、恭さんのしなさることが惡いとは言はんですぜ。貧乏人をみんな幸にするッてことは、勿論、立派なことに違ひないが…………。」

「いんや、俺の言ふのは、そげな理クツではないだッぜ。あら理クツなし、何ッて言ふかな、…………から、ヂリイッと、腹の底から湧いて來るやうな、まあ、氣持ッて言ふかなあ。」

叔父は、何か恥しげにチョット口をつぐんだ。
「まあ、そりや、とにかくとして、先刻の話だがの、恭がその運動を止めれんッちゆうのも尤もだし、あんたや、久一やの言ふ所も道理だとすればだな、俺ア恭が此の村を去つたらどうかと思ふがなあ。」
「ふうん、それもえゝが、お母さんが氣の毒ですなあ。」
「それあ氣の毒だ。また、恭もつらいだらア。けど、これより他、道がないでないかの。恭も今度ア大方まる四ケ月も居つて姉の世話をみてやつたし、姉も此頃は又ようなつて、今のところ差しあたり危いッてこともないあんばいだ。そりや年寄りのことだけえ、どうせ長アはないだらアが、そげなこと言つとつた日にや切りがないわな。恭が東京の方に居つても、悪げになりや又この前みたいに電報うてア二日で戻れるけえな。その方がえゝでないかの。いまみたいに、恭が居るために却て姉に餘計苦勞させるより、恭が一旦いんだ方が、俺アどうもえゝと思ふがなあ。」
さう言ひ終つて、叔父は額の汗を拭うた。
「そうですな。それがえゝかも知れませんな。」
義兄は恭二の顔色をうかゞつた。
「さうです。僕が、どうしても、故郷で運動してはいけない、となれば、僕の執る道はその一ツだけです。再び東京の運動の中に飛びこむまでゝす。今日まで、特に此方に歸つてからといふものは、僕は必死の力で僕の感情をおし殺して來ました。この前のストライキで勞働組合はどうやら一ツ出來上りそうですが、その發會式もまだですし、今ひとつ、農民組合がしッかりした根をおろすまでは、僕はどんなことがあつても故郷を離れまいと思つてゐたのです。ゆうべも、その前の夜も、僕の家の中に石を投げこんだ奴がありました。役場の小使たちでした。先日は、助役が變な理屈をこねて脅しに來ました。その連中が、誰の手先に操られて踊り、どんな油をさゝれて動くか、チヤンと解つてゐるんです。それは却て僕の決心を固くしてくれるんです。しかし、その度に傍で泣きむせぶ母のいたましい姿か、ともすれば僕の決心をにぶらしがちだつたんです。僕アこれ迄にも、何度東京に逃げ歸らうとしたか知れません。だが、故郷の人々の、この底知れぬ暗い生活をまざまざと見せつけられては、どうしても、今年一杯は此處を離れるわけにいかないと考へなほしてゐたんです。
だが今、僕は決心しました。明日の夜でも東京へ立ちませう。實際、僕がヤクザなために、叔父さんにも義兄さんにも、母の面倒をかけッぱなしですみません。その上に、また義兄さんの職務上にまで御迷惑をかけることは今の僕には能きなくなりました。卑怯といふ人があるでせうが、運動をつゞける以上は、僕は當分故郷を離れざるを得ま

せん。また、此處にも僕は頼むべき數人の人々を見出してゐます。僕が居なくても、その人々だけで運動はつゞけられると思ひます。必要の時には、あちらから僕の知人を送つてもいゝんですから。今はまだ大部分の村の人々は、僕たちを理解してくれないやうですけれど、これはたゞ時間の問題にすぎません。僕の故郷にも、運動は益々進展してゆく確信を僕は得ました。僕は故郷をほんとうに愛してゐるからこそ、その確信を得たことを喜ぶのです。

殊に、さつきの御言葉で、叔父さんがあんなにもよく僕を解つて下さつたことを知つて嬉しく思ひます。叔父さんのこれからの道も僕には明るく豫想されます。

厚かましいけれど、僕が出た後は、母のことをお二人に御願ひしなければなりません。」

恭二は、たうとう聲がうるんでしまつた。

叔父も義兄も、默つたまゝ、うなづいてくれた。

恭二は、うら盆十三夜の澄みわたつた月影を踏んで歸つた。

その夜も、晩く、恭二の家の裏障子にまた石を投げこむ奴があつた。

小石はバラバラッと障子を破つて臺所にころげこんだ。恭二は、今までのやうに、飛び出して叱り散らす氣にもなれなかつた。

「社會主義者奴ッ！」

「國賊奴ッ！」

「犬に代つて成敗してやるぞッ！」

「社會主義者の外道ッ！」

一晩ごとに人數が増して、その夜は八九人が、てんでに怒鳴りたててゐた。

恭二は蒲團のなかで苦笑するばかりだつた。

「恭や。……恭や。」

母が眼をさましました。

「はあ……………。」

「お前は、どげなわりいことをして、あがに、にくまれるだらう」

「いゝえ、お母さん。なんでもありません、おやすみなさい。きれいなお月さまなので、犬ころが吠えてるのですよ。ほられ、障子に美しい松の影がうつッてるでせう。」

恭二は優しく答へるのだつた。

九

夜明けごろ、恭二は夢に母の死に逢つて泣いた。

夢はさめても、悲しさは消えなかつた。

──今日わかれては、生きてまた母とあへるだらうか。
今度電報をうけて歸れば、母はもう亡くなつてゐるかも知れない。
もう一生涯、いつまで待つても永遠に母に會へないといふことになつてしまへば……。考へたゞけでも、悲しい。『悲しい』では現はせない悲しさだ。いや、考へるから一層悲しいので、實際その時になればそんなでもないかも知れない。
或はまた、母は生きながらへても、自分がさきに斃れてしまふのかも知れない。母はどんなに悲しむだらう。
母はもつと早く死んでゐた方がよかつたかも知れない。僕がちようど大學に入つた時くらゐに死んぢまつた方が、母にはむしろ幸福だつたかも知れない。
母の生涯。なんといふぢめぢめと暗い道だ。
何ひとつ酬いられることもなく疲れはてゝ死んでしまふ。
この優しい母が死んでしまふ。
──今日わかれては、生きてまた母とあへるだらうか。
恭二は、枕に頬をあてゝ、いつまでも泣きつゞけた。泪はあとからあとからと頬をすべつて枕をぬらした。
「馬鹿な！」
恭二は、ふと、自分の醜態に氣づいて聲をたてた。彼は、わざと夢の悲しさをひきのばし、わざと夢の泪をおとしつゞけて、感傷の甘さに耽つてゐた自分の姿に、獨りで顔を赧らめた。
彼は起つて、井戸端に出た。釣瓶には初秋の水が溢れた。水には朝燒けが眞紅に揺れた。
彼は今日渾身の勇氣をふるつて、今夜の上京を母に告げねばならなかつた。
だが、母の悲嘆の姿がまざまざと眼にうかんで彼はどう覺悟を定めても口に出せなかつた。
たうとう晝まへになつて、恭二は叔父の許に馳けつけた。
「どうだ、荷は出來たか。」
叔父は肌ぬぎで煙管をくはへてゐた。
「いや、荷ツて、歸つた時のやうにトランク一ツですが……。どうも母に知らせにくゝつてね。叔父さんから一ツ、あまり吃驚させないやうに、うまく話していたゞけないでせうか。」
「よしよし。」
叔父は笑ひ顔ひとつしないで承諾してくれた。彼の氣持をすぐ解つてくれる叔父が嬉しかつた。
「兄さん、また行きなさるだつて？」
「もつと、居んないやい。」

「はんにな、盆でもようにしまつて、涼し氣がたつてからにしやんすとえゝになあ。」
澄子と茂と叔母が口々に言つた。
「はあ、いろいろな事情で。後をまたどうかよろしくお願みします。」
恭二は叔母に向かつて頭をさげた。
「あゝゝ、えゝともいな。能けるだけのこたアするけんな。心配しやんすなよ。」
また眼がしらが熱くなるほどにやさしすぎる叔母の言葉だつた。
彼は茂と澄子をつれて、最後の墓參りにいつた。その間に、叔父の言葉をきいた母の昂奮もしづまるだらうと思つたからだつた。
砂丘の上にある墓地は、うら盆のことゝて、隅々までよく掃除がゆきとゞいてゐた。周圍に松をめぐらして、涼しい風もあつた。
一片の父の白骨に向かつて、恭二は花をそなへ香をたき水をさゝげて合掌した。
「兄さん。」
「なに？」
「律子さんは、兄さんをおもつとんなさるけどな。」
だしぬけに、澄子は石塔の間に立つたまゝ、さう言つた。
「さう？」
「………。」
「それから？」
「それツきり。」
「なあんだ。僕も律子さんは好きだよ。」
「あらア、兄やんは。」
茂はひやかしてやらうとしたが、恭二も澄子も眞面目な顏で向きあつてゐるので、急に口をつぐんでしまつた。
「僕がまだ故鄕にとゞまつてゐるのなら、その戀愛は進展したかもしれぬが、もう駄目だね。」
「どうして？」
「僕は今夜出發するからさ。律子さんも上京するのなら別だがね。僕たちの戀愛は、運動の推進力の一ツとならなくちや價値がない。」
「………。」
「君はまた突然に變なことを言ひだしたものだね。君がさうして立つてゐる姿をみて、僕は久しぶりに健康な性慾を感じたよ。」
恭二は朗かに笑つた。三人はまたうちつれて砂丘を馳けくだつた。
家に歸ると、母は叔父と向かひあつて座つてゐた。
「お前、こんや、いくだツちゆうな。」
恭二をみて、母は靜かに言つた。

「えゝ、みんなに、あまり迷惑ばかりかけるものですからね。また、すぐ歸つて來ますよ。わづか、二十四五時間ですもの。」

「さうかいや。お前、からだに、氣イつけにや、いけんぞ。」

「えゝ、今度は此處の海邊にも四ヶ月も居ましたからね。そりや大丈夫です。ごらんなさい、こんなに眞ッ黒け。」

恭二は、あまり黑くもない二の腕から背にかけて、衣物をぬいてみせた。

「何より、お母さんが早く丈夫になつてください。汽車にのれるやうにおなりんなすつたら、僕ア直ぐ東京からお迎へに參りますよ。その御年で、東京を知らないッてんぢや、御自慢にもなりませんや。はッはッはッは。」

「さうなりや、えゝだけどのう。」

母も淋しく笑つた。

「此の秋は肥んなるわいな。夏は儂らでもやせるけなあ。それでも、よう此の夏を凌いで來なつたことだわいな。もう大丈夫だぜ。」

叔父が元氣をつけるやうに言つた。

「…………。」

母は俯向いてしまつた。

此の地方には山がないので、蜩の聲はきこえなかつたが、蟋蟀の花になゝめに赤々とすべりおちる夕陽は、もうすでに秋の黄昏の色をみせてゐた。

その日の夕飯は、お別れだといふので、叔父の一家族も恭二の家にあつまつた。

一合の酒に、叔父も叔母も恭二も茂も潤子も、みんなが眞ッ赤になつて、なかなか賑やかだつた。いつも道化者で通つてゐる茂は、この時だけは、すつかり恭二にお株をうばはれてしまつた。

母は、みんなの笑聲をきいても浮かぬ顏をしてゐた。

それをみて、恭二も、仕舞ひには道化てみせる氣がなくなつた。

出發の時刻が近づくと、たうとう、母はまた夜具につつぶしてしまつた。

恭二は、一刻も早く此の家を出てしまひたい氣持がした。と同時にまた、いつまでも母の傍にゐたい氣持だつた。

時刻はきた。恭二は母の肩に手をかけて、思ひきつて別れの言葉をのべた。

「では、お母さん、行つてまゐります。一日も早く丈夫になつてください。必ずお迎へにまゐりますから。」

彼の聲はふるえてゐた。母は頭もあげ得ないで、急に聲をあげてはげしく泣きだした。恭二の掌に、痩せ細つた肩の骨がいたいたしく

答えた。
恭二は靴をはいた。
「お母さん、さようなら。」
もいち度、そう言つて、恭二は後も見ずに急いで門の外に出た。
「あゝ、恭や、もう、行つちやうだか……。」
絶え／＼に顫える母の聲だつた。恭二の靴はピタリと釘づけになつた。
振りかへると、母は縁側の上に這ひつくばつて泣き入つてゐた。それを叔母が後から抱へて、床の中へ連れもどさうとしてゐるらしかつた。
だが、恭二はそのまゝ道を急いだ。
叔父はトランクを持ち、澄子と茂とは各々小さな包みをさげてゐた。
みんなが、默りこんでゐた。
母の最後の言葉が、姿が、恭二の耳に、眼にコビリついて離れなかつた。
——生きてまた會へるだらうか。
ふと、今朝の悲しみが、また彼の胸におちた。しかし、それは今朝のやうに甘いものではなかつた。涙は出ぬかはりに、肋骨が張り裂けるほど苦しかつた。
村はづれに廣谷たちが待つてゐた。恭二は廣谷と足立とに話しておきたいことがあつたので、見送つてくれるやうに澄子から傳へて貰つたのだつた。だが、其處には廣谷と足達だけではなく、女工達も集まつてゐた。男が六人、女は四十人あまりも居た。
「やあ、こいつアどうも。」
恭二は面喰らつて足をとめた。
五十人あまりの一團は、道幅一杯にひろがつて、埃をたてながら急いだ。
「急なのでね、道中でしか話のできないのは殘念だが、要點はかうだ。とにかく、ドシ／＼運動をすゝめて貰ひたいんだね。それから、此の秋から冬にかけて、是非、農民組合を作りたいね。僕、向かうに着くと直ぐ同志をよこすからね。その人が來たら至急君の所の發會式をやるんだ。そしてと、これからの爭議は、例の時のやうに旨くはいかないよ、必ず。爭議に、最も大切なのは團結だ。こりや言ふまでもないが。どんな奴が打ッつかつて來てもビクともせぬ團結が僕たちの生命であり、力なのだからね。ざつと、そんなものだね。絶えず手紙は出すからね。それで連絡はとれるだらうとおもふから。」
それだけ口早やに言つて了ふと、恭二はふいと空を仰いだ。今迄ち

つとも氣がつかなかつたが、十四日の月がまるかつた。

「ほう、月が出てたね。」

恭二のとぼけ方がおかしかつたと見えて、みんながドッと笑つた。そのなかに、一きは美しい笑ひ聲をきいて、恭二は律子も來てゐることを知つた。振りかへると、ツンとした律子の顔はすぐ眼についた。しきりに澄子と話してゐた。

天と地の間には月の光が充ちわたつて、盆踊りの大太鼓がきこえてゐた。

「今夜は踊りがあるんだね。いゝ月夜だ。僕たちも此處で輪になつて踊るか。」

恭二は傍の足立に話しかけた。

「そうだな。だが、世の中がこれぢやア踊る氣にもなれんけえ。」

早立が歎くやうに答へた。

「けど、別嬪と踊るなアよからアが。」

誰かが、まぜッかへした。

「そ、そげな性根だけん、いつまでもウダツがあがらんだわいや。」

さう言つて、足立はペッと唾をはいた。

「さう怒るなよ、君。それも闘爭の間に、ちよつと娛樂として踊る。生活に多少のうるほひを持たせるッて程度にやつたらいゝんだらう。」

恭二は、だいぶ輕い氣分になつてゐた。

〇の驛に着いたのは、發車に三十分前だつた。

みんなは狹い、待合室のベンチを全部占領して、ガヤ〳〵話しあつてゐた。

恭二は、此の驛に降りた時のことを想ひ出した。

「おい、茂、お前は大きな荷車を曳いて出てゝくれたなあ。」

茂も叔父も笑つた。

故鄕の四ケ月の生活が、素晴らしい速力で恭二の眼前をよぎつた。

——收穫はあつたさ。豐かなる哉、秋だ。たとへ故鄕をおはれても、これだけの收穫を持つてゆけば十分だ。東京の同志へのいゝ土産だ。

恭二の心は明るかつた。

「兄さん。」

澄子は、いきなり何か薄ッぺらな紙包みを恭二のポケットに突ッ込んで言つた。

「これ、律子さんの贈り物。」

「さう。ありがたう。」

恭二は、別に手もやつてみないで澄子に禮をのべた。彼は律子の顔をさがした。律子はツト横を向いてしまつた。高い鼻だつた。

改札前、恭二は一人づゝ握手して硬つて別れの挨拶をした。どの掌にも熱い血汐が感じられた。

「姉のこたアひきうけた。お前こそ身體に氣をつけて、運動してごせえ。」

と、叔父がはげましてくれた。

「もつと居んなるとえゝになあ。さむしいわ。」

と、茂は涙ぐむでゐた。

「早や、またお出で。待つとるけん。伯母さんのことは大丈夫だッぜ。」

と、澄子。

「お母さんの世話は、妾も手傳はせて貰ひますけえ。シッカリ運動をやつてください。身體を大事に。」

と、律子。

恭二はふと思ひ出してポケットの贈り物をひき出してみた。五圓札一枚。彼は感心した。

――徹底した娘だ。

「贈り物まで、ありがたう。」

律子は默つたまゝ眼を伏せて微笑した。

汽車に乘るとすぐ發車だつた。

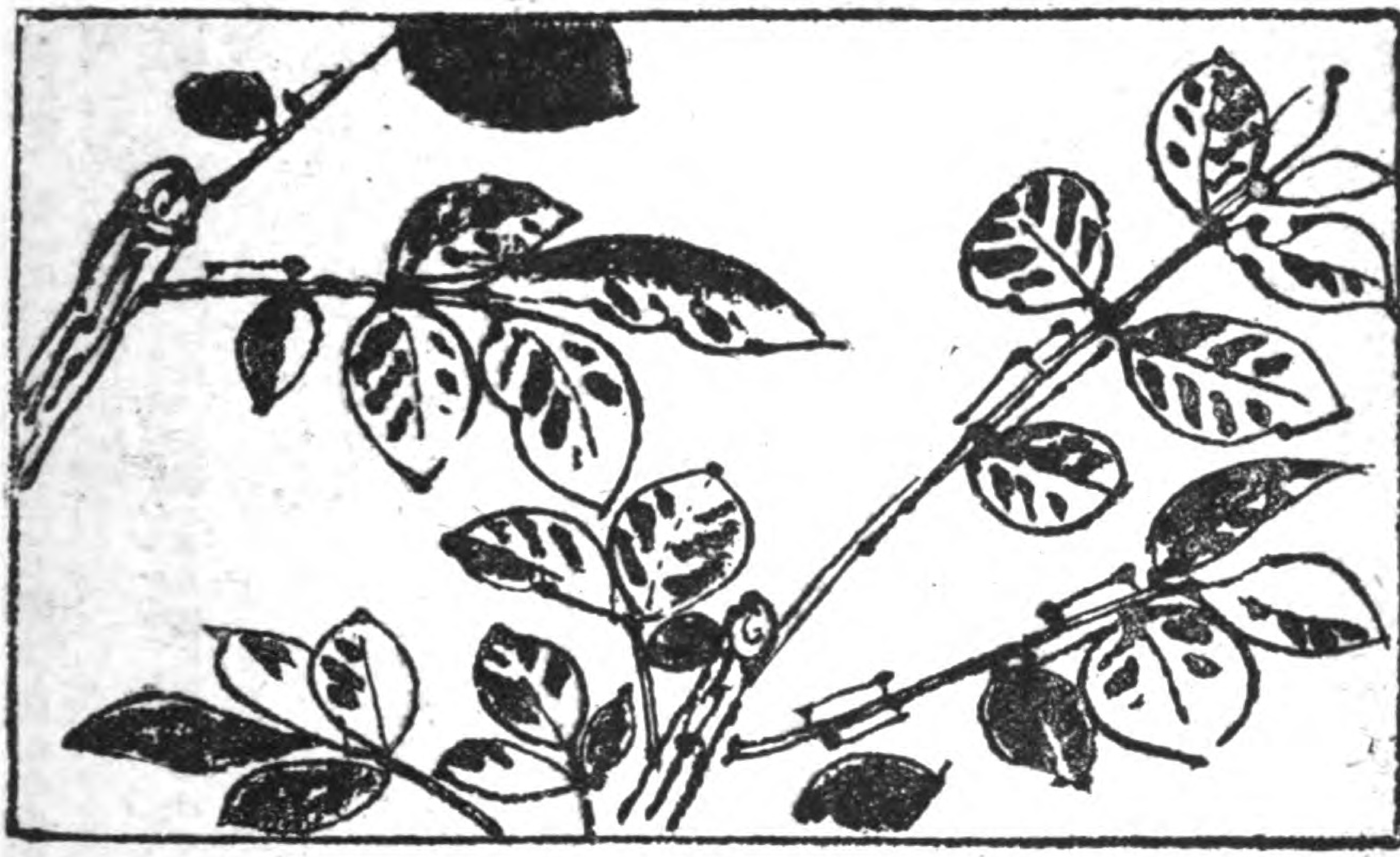
たつた一ツの爭議で堅く腕を組み合つた同志たちの。その雄々しい顔が改札口に重なりあつて、萬歲!! と叫んだ。

――故郷は甦るに違ひない!

恭二は、凡ての苦惱を忘れて感激に燃えた。

汽車は次第に速力を増して奔りだした。

(千九百二十八年十一月二十七日――三十日午前七時)



大地

里見弴

二の一

無人の境を行く勢で迫り近づいた火も、明方前には全く鎭つて、十中八九助からないものと諦めをつけてゐた番町の本邸に、大震後三日目の旭が照り輝いて來た。それでもまだ、待ちに待つてゐる千葉は歸つて來ず、とり〴〵の噂ばかりで、湘南の實相も知れないのに、いよ〳〵昌造も、途中行き違ひになるまでも、自身出向くよりほかはないと決心した。それには、一應赤坂の母親を見舞ひ、隼夫の借着でもなんでも、もうちつとはきりツとした身仕度もしたいと思つて、そつちへ出かけて行つた。

無事といつても、あちこち壁のはげ落ちたりしてゐる階段を、老母は手摺をたよりに、あぶなつかしい足どりで、よち〳〵とおりて來た。

「まア、お前さん、どうおしだつたい」

それが癖の、大業な言葉使ひに引きこまれまいとして、わざとそつけなく、

「御無事で結構でした」

「お前さんのゐなすつたとこは、ぐしやツと潰れちやつたんだつて？」

「いゝえ、そんなでもなかつたんですけど……。それより、逗子が心配ですから、これから行つて來やうと思つてます」

「まだ、健ロンとこの千葉は歸らないのかい？……どうしたつてんだらうね」

「千葉君は歸らないでも、もう少しはつきり、彼方の樣子が知れさへすれア……。兎も角、自分で出かけて行くのが一番たしかです」

「それアさうだけれど、近いとこぢアなし、第一一人ぢアあぶないやうな話だよ」

みんなよつて相談の上、こつちの書生を借りて行くことにし、二人の、三度ぶりほどにあたる握飯を用意させる間に、隼夫の洋袴のわるくなつたやつを、丈が違ふので、膝きりに切り縮めたり、シャツに肩あげをして貰つたりして、どうやら十五里ばかりの遠道をするに適はしいやうな身なりが出來あがる頃には、夙に午もすぎて、生憎、ちよつとはあがりさうにもないがびしよ／＼降りになつて了つた。一旦脫ぎすてた着物の袂に手を入れて、昨夜番町の佛間から持つて出た珠數を、はたに見られないやうに、鷲掴みにして、だぶ／＼な洋袴の衣嚢にしまひこむやうな心の狀態には、內々この雨も辛かつた。――理由なく、氣は衰へ、胸は重かつた。

それでも、世話好きな隼夫が、わざ／＼屋根裏の物置を探し廻つて山登りに使ふやうな、大きなルック・サックを持ち出して來て、米から炊きあげたばかりの握飯包みを詰め、途中で要りさうなものを、何や彼と、行き屆いた氣くばりで入れてくれたりして、いざ出かけるといふばかりに支度が備つた。と、急に、夕方のやうな薄暗さが來て、雨もどしや降りに變つた。雨具なしには、半町も行かないうちに肌まで濡れそびれるにきまつたおもての樣子を眺めながら、昌造は、穿き馴れない草鞋の足の裏から、虫でも匍ひのぼつて來るやうな、焦燥と不安とを感じてゐた。

……門から玄關までの鋪道に、音もなく、敷地に乘り入れて來た自轉車。出がけには確に被つてゐた帽子はなく、後鉢卷で眦は吊りあがり、蒼白く、唇の色まで變つた千葉だつた……。

「來た、來た！」

思はず昌造は躍りあがり、雨のなかに飛んで出た。

「御無事です、みなさん御無事です！」

さう叫びながら、乘り捨てに自轉車をおッぽり出した千葉と、胸を合せて、がつしり昌造は抱き合つてゐた。

「御無事です！」

「さうか、さうか！」

「一人のこらず、みなさん御無事です！」

「さうか、さうか！」
濡れとほつたシャツ一枚の背なかを、力まかせに、ピタリ〳〵叩き續けながら、「さうか、さうか！」
「御無事です、御無事です！」
「さうか、さうか！」
どしや降りの雨に頭からうたれながら、摺り合せる頬に、涙は生温かく、髭がジヤリ〳〵音をたてた。兩方から、早口に、いつまでもただ同じ言葉を繰り返すだけで、不思議な亢奮は見るまに亢まり、仕舞には聲をあげて泣くばかりだつた。力のかぎり抱きより、お互の髭面をジヤリ〳〵と摺り合せながら……。
健吉が出て來て、强いて沈めた下聲で、何か叱るやうなことを云ひながら、やつと二人を引き離し、腕を把つて、うちのなかへつれこんだ。隼夫も二階から駈けおりて來て、千葉の顏色を見ると、引きちぎるやうにづく濡れのシャツを脱がせ、洋袴を押しおろし、平手で體ぢうピタ〳〵叩きたてた。その間も、どうこらえやうにも、昌造の涙はとまらなかつた。それがいかにも口惜しくて、これがもし、一人殘らず死んでたのなら、昨日心に契つた通り、毛筋一本搖がせはしないのだけれど、生きてたからいけないのだ、一人殘らず生きてるなんて…………、そんなことを思つて、またしても肚の底から衝きあげ、湧き返して來る涙に溺れた。
……母親は、ストツピースの上に、假に安置した佛壇の前に、首を垂れ、合掌して、念佛も聲にはならなかつた。……いつの間にか昌造も、そのうしろに立つて、同じことをしてゐた。
……千葉は、ゴシ〳〵體ぢうタホルでこすり廻された揚句、ゆかたの上から毛布で捲きくるめられて、ソフアに横たはりながらも、亢奮から、寸時も休まず喋り續けてゐた。——要するに、極樂寺の、壬之助の妻子も、逗子の、昌造の家族も、一人殘らず怪我ひとつしてゐない。そのくせ建物を見れば、グシヤツといつてゐる。天祐だ。逗子では、子供たちはみんなおもてで遊んでゐた。おしげだけがうちにゐて、茶の間で壓されたが、二十分ほどで、隣の植木屋に掘り出された。少しは腰を痛めたが、それも歩行に差支るほどではない、——さういふ、極めて簡單な事實で、落ちついて話せば、幾言も費すには當らないのだけれど、往々繰り返しもあり、別にさう詳しく話すでもないのに、どこで伸びるともなく長い物語になつた。昌造にもまた、それがちつとも長たらしくは感じられなかつた。聞いても聞いても、聞きたらないくらゐだつた。初めは靜に、優しく注意してゐた健吉も、仕舞には、癇癪聲に怒鳴りつけて、頭から毛布をひつかぶせて了つた。
……昌造には、錯覺的に、不思議な感銘が殘つた。——この人、千

葉君の恩は一生忘れまい。どんなにでもしてこの人の恩には報いやう、と。――まるで、この人が、逗子まで行つてくれたおかげで、――ただそれだけの理由で、一家の者に、怪我ひとつなくてすんだかのやうに……。

とかくしてゐる間に、雨の日の早い暮色も迫つて來たし、逗子でも、驛前の運送屋のギヤレーヂに、取り敢ず雨露だけは凌いでゐると聞いて、昌造の出發は、明日の朝に繰り延すことにした。それに千葉が、いくらはたから健吉たちが制めても、迎ひの一行に案内役ともなり、もう一度むかうまで行かないでは氣がすまない、と云ひ張つてもゐた。

「今日歸つて來たばかりで、勞れてるのに、君、そんな必要ないよ」

昌造も、さう云つて好意を謝したが、

「ちつとも勞れてやアしませんよ。歸りがおそくなつて、それは申譯ないんですけれど、その代り昨夜は、あつちでゆつくり寢て來てゐるんですもの。明日の朝お伴して行くくらゐ、なんでもありやアしません」

「だつて、ほかに附合つて貰ふ人がないわけぢアなし、そんな無理をしなくつたつて……」

「いゝえ。それに、僕、昌一さんともちやんとお約束をして來たんです。昌一さん、東京へ行つたら、すぐパヽをつれて引ッ返して來てくれつて、さう仰有るんですもの、えゝ、おつれしますとも！　すぐまた御一緒に歸つて來ますからつて、僕、ちやアんとさういふお約束がしてあるんです。ですから、どうしても、もう一遍僕をやつてください。僕の方からお願ひするんです。それでないと……」

人見知りのひどい昌一が、前に二三度しか會つたことのない千葉を捉えて、そこまで踏ン込んだ口を利いたかと思ふと、さんざ泣いた揚句の澁い目のなかが、もう一度また熱くうるんで來た。それと同時に、是が非でも、昌造と同行しなければ氣がすまないと云ふ千葉の強情も嬉しく、有難くうけずにはゐられない志として、改めてしつくり胸に來た。

食卓には、蠟燭の灯をふやし、心ばかりの祝ひだと云つて、母親がわざ〱日本酒をとつてくれた。本邸の方で、使の者から家族の無事を告げ知らされた壬之助も、駈けつけて來て加はつた。丁度そこに、また、大磯の別莊に行つてゐた次女、藤井の萬喜子やその子供たちも潰れた家のなかで、兎も角も無事だつたといふ報知が來て、これで一族に、たゞ一人の死者もなかつたことがわかり、貧しい夜食も、晴々と賑はひ盛つた。昨日の午後から丸一日、昌造の胸のなかを去來してゐた比叡山などは、どこへけし飛んで了つたか、忽ちもう影も止めては

ゐなかつた。

飯がすんでからも、家族の者をどうして東京までつれて來るか、その相談で、男の兄弟たちは、なほ食卓の周りに殘つた。壬之助は、極樂寺の別莊の被害の狀態から云つて、無理をしてまで、慌たゞしく引きあげて來るには及ばない。雨露さへ凌ぐに足りるならば、なんとか運輸の便が開けるまで、彼方に落ちついてゐた方がいゝ。殊に自分は病弱で、徒歩で迎ひに行くことなど思ひもよらないから、もし君たちの足手まとひにならないで、樂につれて歸れるやうだつたら、それをしも可厭だと云ふのではないが、厄介だつたら、よく自分の考へを傳へて、寧ろもう暫く彼方で世間の鎭まるのを待たせたい。――かういふ意見だつた。昌造の方は、然し、事情も別だつた。ギヤレーヂが貸りられることにきまつたのも、今朝千葉が彼方をたつて來る前の話で、それまでの二晩は、八幡の境内に野宿で過したといふのだし、四人の子供の一番下は、滿一年と三四月のまだほんの稚いものだし、××騷ぎで人心恟々としてゐるともいふし、途中多少の危險は冒しても、――不便や困難などはもとより覺悟の上で、一日も早く東京へつれて出たかつた。よしんば、事情として、つれて出られないまでも、昌一が千葉に云つたといふひと言で、今夜すぐにもたつて行きたいくらゐの氣持だつた。從つて、もし壬之助に、うちの者も是非一緒につれて歸つてくれ、と頼まれたとしたら、實際には、厄介に違ひないのだけれど、さう云はれないことで、却つて昌造は面白くなかつた。事情の違ふことも承知してゐながら、この兄の落ちつきぶりが、何か、薄情のやうに思へてならなかつた。

「ぢアまア君の方は、臨機應變つてことにして、兎に角、僕は……」

「君の方だつてさうだよ。特別なんとかまた事情でも變つて來りやア別だが、この混雜の最中に、何もわざ〱東京までつれて來る必要はないよ。却つて彼方に置いた方が安全なくらゐだよ。僕アさう思ふね」

「自動車小屋ぢア、あんまり安全つてわけにもいかないから、斷然僕はつれて來るよ。田舍ぢア、何をどうしようつたつて、かうなると、まるで無理つてものが利かないからね」

いつになく昌造も、やゝ棘々しく云ひ返して、あとは、明日一緒に行つてくれるといふ千葉や長谷部の方へ、くるりと椅ごと向き返つて、

「自動車が駄目つてことになれば、人力よりほかにどうも仕樣がないわけだね」

「人力だつて、乘つて行けるところと、おりて歩かなきやアならないところと、半分々々か、わるくすれア、歩くところの方が多いくらゐかも知れませんよ」

千葉はなほ續けて、地割や、龜裂、陥落、往來をいつぱいに塞いだ崩潰家屋、餘震にそれと見別けかねる行手、——いくらか大袈裟ではないかと思はれるほどに、それら途中の惨狀に就いて繰り返し繰り返し述べたてた。

「然し、さうかつて、ほかに仕樣がないぢアないか」

「え丶、ですけど、第一俥夫が承知しますかどうか。逗子あたり、一軒だつて平氣で立つてるうちはないんですから、他人のことどころぢアない、自分とこの……」

「だから、それア、いづれこつちからつれてくのさ」

「俥夫をですか」

「さうさ。二臺ありやアいゝやね。女房と嬰兒を乘せて、ひと一臺にくたびれたのが代りばんこに乘るんだ。何もさう急ぐこたアない。おそだちの早泊りで、一日五里づゝとしたつて、三日目にやア樂に歸つて來られるんだから……」

「なに、なか一晩泊る氣なら樂ですけれど、とてもそんな、宿屋だアなんだつて、贅澤なこたア云へませんぜ」

「それアさうだらう。一晩や二晩なら、寺の本堂だらうと、百姓家の納屋だらうと、なんだつて構やアしないよ」

「小さい方たちは、吾々の自轉車の前ンだつて乘せられるし……」

長谷部も口を入れて、「さア裏も探つてみませう。きつとどうにかなりますよ」

やがて、使に呼ばれて來た出入りの俥宿の主人に事情を告げ、いくらか迷惑がるのを無理に頼んで、翌朝五時までに、威司達者さうな挽子を二人よこして貰ふやうに話をきめた。さうなると、同勢五人で、日いつぱいに彼方へ着くとしても、その間の食物の用意だけでひと通りの騷動ではなかつた。××騷ぎに一番神經質になつてゐた鮎子などは、獵銃を擔ぎ出して來て、是非持つて行くやうにと勸めたりした。

二の二

學生時代には、歩くことが好きで、かれこれ鐵道線路と並行してゐるやうなくだらない道中を、わざ〱鎌倉まで徒歩で行つたりしたこともある昌造だが、こゝ數年、自動車が安くなつてからは、急に無精になつて、全く自信のもてない寢足だつた。それに臨道のためにも、出來るだけ精力の貯蓄が必要だつたので、乘れる限りは俥に乘る算術をした。

「旦那、地震は、沖津さんでお會なすつたんですか」

生温かく、深い朝霧のなかを、六本木から日ヶ窪の方へおりて行く時、いきなりさう云つて俥夫が話しかけた。昌造は、ちよつと鬱い

て、
「え？　どうして知つてるんだい」
「前の晩おそく、あッしがお送りいたしました」
「あゝ、さうかい。それアちつとも氣がつかなかつたが、あん時の、……へえ、さうかい」
「何しろ、あれから、十二時間たつかたゝないうちに……」
「さうさ。それを思ふと、まるで夢みたいぢアないか。いゝ月夜だつたよ、ねえ」
「さよです。こんなことにならうたア、だアれも、夢にも思やアしません」
「然し、不思議な緣だね。あの晩送つて貰つたお前に、今度はまたこんなことで世話になるなんて……。さうかい、お前だつたのかい。これア奇緣だ」
十年の知己にでも邂逅つたやうな、親しみと懐しさが湧いた。あの晩、當節めづらしい達者な樣子だ、と思つただけに、なほその感が深かつた。
もう一人のも、六尺ちかい屈強な若者だつた。面長なところが似てゐるつもりなのだらう。自らエス・ハートを以つて任じ、女子供を救ひに行く、といふ役廻りを、適材適處だと云つて、ひとりで嬉しがり、はしやぎ切つてゐた。金で雇つた人間にもせよ、生面の同行者の、二人が二人ながら、少しも齪々なところのないのは、昌造としても嬉しかつた。
どうかと思はれた空も、蒼々と晴れあがつて、蒲田あたりに來かゝつた頃には、そろ〳〵日蔭が戀しかつた。あけ放したまゝの電車の停留所にはいつて、早速もう辨當を開いた。上り下りの避難者たちもみんなさうするとみえて、そこらぢう、竹の皮や新聞紙がいつぱい散らかつてゐた。
「あんまり食つちまふなよ。まだ先が長いんだから」
「なアに、大丈夫ですよ。この分なら、三時、……さう、まア四時半か五時頃までにやア彼方へ着いちまひますよ」
「冗談いつちアいけないぜ」
と、千葉が萬事心得顔に、「どこまでもこの分でいけるもんなら、大層手を振つて自動車が通るよ。先へ行くほどこの分でなくなるんだ」
「それにしたつて……」
「まア〳〵、あの分へ差しかゝつてから、えばるんならえばつて貰はふよ」
「エス・ハートだ。御心配にやア及びませんよ」
腕が細いだけで、洋服と云つてもいゝくらゐ、襟にミシンの筋を入

れたりした白の法被の、逞しい腕をとんと叩いてみせた。

六郷の橋袂が、みんな力を協せて、一挺づゝ俥を舁いて渡らなければならないやうな難所の初りで、だん〳〵に道中の困難はふえる一方だつた。××騒ぎで氣の立つてゐる自警團も、その一つに數えられないでもなかつた。純白、、、であるといふ印に、行く先々で、白いのや赤いのや、いろ〳〵の布を渡し、やれ腕へ捲けの、後鉢卷にしろのと、云ふことが區々で、そのたんびに、乗り物からはおろされ、わるくすると、脱刄を提げたりした血の氣の多さうな若者の前で、執拗い訊問をうけなければならなかつた。自轉車の連中が、面倒臭がつて、突ッ走つてぬけやうとでもしようものなら、素早くギヤの間に竹槍をさし込み、轉落の憂目をみせずには措かなかつた。

神奈川のはいり口あたりに、三四人の××の、、が、薪ざつぼうよりも無雜作に積重ねてあつた。烈しい日射の下に、暗紫色の水袋のやうに脹れあがり、羽音だけでもすさまじい銀蠅、青蠅だつた。——見詰める遑もなく、昌造は瞑目合掌し、口のうちに念佛を唱えてゐた。

「およしなさい、旦那！」

あとから空車を引いて來た小柄な方の車夫が、いきなり耳もとに、壓し低めた叱聲を響かせ、自分は素早くあたりを見廻しながら、ぐいと昌造の腕を引ッ張つた。……その意味はすぐ嚥み込めた。氣がつけば、我ながら、いかにも危險きはまる所作たつた。慌てゝ解かうとする手頸に、いつ衣嚢から取り出したものか、ちやんと珠數がかゝつてゐた。……埃ッぽく、白々と延びた街道に、とは云へ仕合せなことには、近い人影もなかつた。

「おのんなさいまし」

「うん」

自轉車の二人はもとより、荷物だけ積んだエス・ハートとも、だいぶ間が離れたらしかつた。その距離を縮めやうと、我が影さへ踏むとは見えないほどに、白パッチ、白足袋の脛を伸した車上に、耳を切る風よりほかには音もない眞晝の沈默、昌造はなほ、三四箇の、無緣佛の冥福を祈りつゞけた。

水上の重油が、炳かな夏の陽の下にさへ、微な焔を現し、黑煙を天に棚引かせてゐる横濱市中の堀割を見おろしながら、道を山手にとつて進んだ。程ケ谷の出はづれ、纔に昔の東海道らしい面影を殘した松並木にかゝつて、二度目の食事をした。まだやつと半分道、それにこれから先が大變と聞かされてゐるので、持つて來た辨當は出來るだけあとの用心に殘すやうにし、百姓家で馬鹿高い生玉子など頒けて貰つて來たりして、補ひをつける算段をした。饑た避難者たちの掠奪が、沿道の百姓にまで、早くもさういふ狡猾心を植ゑつけてゐた。沿道

南の避暑地から逃げて來たらしい陽焦のした若者のなかには、海水着一枚といふ哀な姿のもあつた。帽子代りに、大きな蓮の葉を、手拭で頭に結びつけて行く男女の一群もあつた。さういふなかにも、たまには、知つた顔を見かけた。奈良に住んでゐる高部の父親が、パナマに紋着の羽織といふ、いかにも周圍と調和しない身裝で、不安さうに俥に搖られて行つた。××銀行の高級の知人からは、亡父の親友で、殆んど親類同樣に交際つてゐたもとのその銀行の頭取、○○男爵が、二宮の別莊で壓死し、自分も同室で二三時間屋根の下に悶搔き苦しみ、命からがらいま東京へ引き返すところだと、亢奮に蒼白んでの話を聞かされたりした。

進むに從つて、災害は大きく、道は困難だつた。乘つて行くところか、みんなよつて俥を舁きあげなければ通れないやうな、地割や、崩潰家屋に出會つた。道際に、乘り捨てたまゝの自動車があつても、誰も顧る者もなかつた。下腹のでくんと飛び出した田舍の子供が、把柄に手をかけて、得意さうに、またいくぶん羞しさうに、あたりを盜視してゐるくらゐのことだつた。

日盛りの暑さも暑く、汽車で通つてもさうだが、程ケ谷、戶塚間の長丁場に、昌造もだいぶ參つて來た。長谷部や千葉の自轉車を代りがはりに借りて、先へ駈けぬけて置いては、日蔭で一行の追ひついて來る間を休んだりした。そこへ通りかゝる學生風の男などには、家族の無事は知れてゐながらも、なほ更に彼方の樣子を尋ねてみないではゐられない氣持だつた。

戶塚まで漕ぎつけて、たうとう俥夫が音をあげて了つた。挽くのなら、この先なん里あらうと厭ひはしないが、からのべつに舁いで通らなければならないのだとすると、とてもやりきれないし、時間もおそくなる。荷厄介に彼方まで俥を持つて行くより、いつそこゝらに預けて置いて、から身で道を急ぎ、明日、奧さんやお子さんたちは、背に脊負つても必ずこゝまでおつれして來、これから先を乘つて行つて頂く。その方が、どう考へても利口さうだ。――かういふ申出だつた。もとより昌造にも異存はなかつた。この際のことだから、責任はもてないと云ふのを、無理に積み込んで、俥は二臺とも驛前の自動車屋に預け、荷物を各自の肩に乘せた。

この驛の構內には、機關車と、それにつながる貨車が三四臺、見事に橫倒しになり、あとの客車だけ、脫線しながらも、あぶなく土の上に立つてゐた。聞くと、發車して間もなくの緩い速力だつたので、怪我はあつたが、死人までは出さずにすんだといふ話だつた。いつかもう黃色つぽく、斜になつて來た陽の光のなかで、あの、汽車からも見える櫻並木の土手で、殘り尠なになつた第三回目の辨當を開いた。

「ちつと急がないと、途中で暗くなるぜ。夜になられると、こいつ、自轉車の前燈くらゐなことぢア心細いからね」

「ラスト・ヘヴイをかけれア、なに、大丈夫日のくれ〴〵までにやア着きますよ」

「然し、まだだいぶあるぜ」

「昌造さん」

千葉は、馴々しく名を呼んで、「あなたに自轉車を提供しますから、これからさき乘つていらつしやい。大船までは、さうおりて擔がなきやアならないやうなところもなかつたと思ひますから。だけど、あれから先、小袋阪が難所ですよ。なんのこたアない、鵯越をやらなきやアなりませんぜ」

「でもなんでも、鎌倉までたどり着いちまやア、あとはもうひと息だよ。……さ、出かけようか」

が、大船であと先ばら〴〵になつた一行がひと纏りに落ち合つた時には蒼々たる暮色が分譲地の夏草の茂みの上に展がつてゐた。長谷部は、途中道際に突ッ立つてゐる男があるのにぎよッとして、夢中で怒鳴りつけたら、聲も立てずに、一目散に雜木山へ逃げ込んで了つた。××に違ひない。——顏色を變へてそれを話し、

「これから先は、あんまりばら〴〵にならないやうに、用心して行きませう。土地の人たちも、だいぶ騷いでるやうですから」

さう云つて、強いて健吉が持たしてよこした獵銃を、自轉車のサドルの下から解いて、吊革で斜に肩にかけたりした。誰の氣持も同じとみえて、いつどこから一緒になつたともなく、行くほどにひと纏りの人數が殖えて來た。圓覺寺の前へかゝる頃は、もうとつぷりと暮れきつてゐたが、あと先を見透すと、かれこれ二十人あまりが列をなして續いてゐた。それがお互の顏も見分けかねる暗さのなかで、平氣で、親しげに口を利き合つた。

「なんでも構はねえから、うんと大勢一緒にゐるやうに見せちやうんだね」

「あんたの持つてる電燈なんざア、明るいから、探海燈みたいに、ピカリ〴〵あつちこつちイ向けてやるんですね」

「それより、點けたり消したりして、なんでも大勢ゐるやうに見せかけるんだよ。こいつア、昔ッからの兵法にもあるこつたからね」

「軍歌でも唄はふか」

學生らしいのが二三人、聲を揃えてやりだしたが、節を知らない人間の方が多かつた。で、いつの間にか、ウワア、ウワアと、誰にでも出來る喚聲に變り、景氣をつけながら進んだ

「駄目だ、駄目だ、そつちイ行つちア遠廻りだ」

踏切を越えやうとする先頭へ、うしろから聲をかける者があつた。
「隧道をぬけれアすぐだ。なアに、汽車が通るわけぢアなし、ちつともあぶねえこたアねえだよ」
「だけど、やつら、あつちこつち追かけ廻された揚句、隧道ンなかイでもかゞんでやアしねえかな」
「そんな馬鹿なことがあるもんかな」
然し、一行は、それでちよつと足をとめた。闇の夜にもなほ暗く、あんぐり口をあけた隧道へは、いくら大勢でもちよつと足が向かなかつた。一人二人、踏切を越えて、眞ツすぐ行く者があつた。
「おーい。ばら〳〵になつちア駄目だよ。行くなら行くで、みんな揃つて隧道をぬけてこうぢアないか」
「えゝ、有難うございますけれど、僕のうちは、ついこの先なんです」
「なアんでえ」
その間の抜けた呟きがみんなを笑はせた。
「さア、行から、行から！」
「景氣をつけようぜ、景氣を！」
「ウワア！　ウワア！」
長谷部は、昌造のそばへ來て、肩に背負つた鐵砲をはづし、肩に擔つた。
「おそくなりましたね」
「何時頃だい？」
「八時すぎましたよ」
「彼方へ着くと、かれこれ十時近くなるかな」
「ウワア！　ウワア！」
「もうぢきですよ」
「汽車のぢアないけど、逗子の手前に、また三つばかり隧道があるぜ」
「あゝ、さうでしたかね」
「ウワア！　ウワア！」
事なく隧道もぬけて、やがて鎌倉の停車場前に出た。高張の下に椅子を据えて、白服の海軍士官や水兵が、何か忙しさうにあちこちしてゐた。何事かと、そばへよつて行つてみると、大きな掲示板があつて、明日から、海軍の方で、東京、横須賀間の海上輸送を始める。希望者は、何時までに、横須賀のどこそこへ來い。明日の出船は、何時艦、何、何、驅逐艦、何、何、といふ風なことが書き連ねてあつた。
「や、これア有難い！」
思はず昌造は歡聲をあげた。

「俺に乘せてつてくれりやアそれア一番世話なしだア」

明日からの困難な旅を覺悟して來てゐた若者たちにとつては、いくぶん張合のぬけた氣持もあつたのだらう、昌造ほどには、この思ひがけない吉報に動じなかつた。

「君！」

と、昌造は、千葉の肩を叩いて、「君すまないが、時間や場所を尋きとめて、なほ詳しいことを、序に士官にでも聞いといてくれないか。無論誰でも乘せてくれるんだらうけれど、蓋め切符みたいなもんでも下げて貰ふ必要なんぞないのか、荷物なんかも、少しぐらゐは持つて乘つても構はないのか……」

「えゝ、よござんす」

へと〳〵になつて、昌造は、道際の松並木の下へ身を投げ倒した。龍鬚が背なかに冷たく、痛にくしや〳〵した。

「もうなんにも飲むもの殘つてなかつたかなア」

「水ならありますよ。たゞの水なら」

長谷部が、エス・ハートの背なかに背負つたルツク・サツクのなかから、大きな水筒を取り出して來て、蓋に注いでくれた。

「おくたびれでせう」

「普段まるツきり歩かないもんだから粗」

「でも、もうひとのしでさア」

「君たち、腹がすいたらうねえ」

「ありますよ。まだおむすびが少しぐらゐ殘つてる筈ですよ」

「僕アいゝんだ。君たち、頭數に一つづゝでも行き亙るんだつたら食べないか」

「おい、ハートさん。まだお辨當殘つてたらう？　食つちまはふぢアないか」

みんなが第四回目のたしない食事をしてゐる間、昌造は、じん〳〵鳴る足を、二本揃へて松の幹へ立てかけ、苦しい息を喘いでゐた。なに、今だつて、十五里やそこら、いざとなれア大したこつちアない、とたかをくゝつてゐたのだが、――おまけに、明日のことを思つて、途中疲れるだけは、努めても俥や自轉車に乘るやうにして來たのだが、それでこの參り方だつた。

(今からこんなこつちア仕様がない。普段から、ちつと運動するやうにしようよ)

暗い空を見あげて、いかにも懈怠めいた氣持にもなつたが、同時にまた、あと一時間かそこらのうちに、女房子の無事な顔が見られると思ふと、勞れきりながらも心は勇んだ。

名越の踏切を越したあたりで、握飯や麥湯の接待をしてゐる、御

階級らしい一家族があつた。意地きたなく、そこでもまた馳走にあづかつた。ゆかたがけの主人が、いろ〳〵東京の方の様子を尋ねるのに、長谷部か、自轉車であちこちして得た廣い見聞を、細かに話して聞かせてゐたのも、いくぶんのお禮心だつたらう。

また歩きだしてから、昌造が、

「然し、艦で歸るとなると、戸塚に預けて來た君たちの俥に困つたね。一旦東京へ歸つて、御苦勞でも、もう一度またあすこまで取りに行つて貰ふよりほか仕様があるまいね」

「いえ、なに、それアわきアありませんがね。折角あすこまでよッち〳〵挽いで來て、なんのお役にも立たなかつたのが、いかにも殘念ですよ。且またですな……」

ハートは、そこで急に活辯口調を眞似て、「全く無駄なお金も頂戴しなきやアならないわけですからな。かうと知つたら、はなッからから身で來るんでしたつけ」

それから、千葉や長谷部と明日の手筈を相談した。俥は、いづれ改めて取りに來るにしても、一家の者の當分の着更だけでも、相應かさばるに違ひないから、一應みんなで横須賀まで送つて行つて貰ひ、ハートなり、俥宿の息子だといふ無口な若者なり、どちらか一人だけつれて艦に乘らう。そのあと、三人は、すぐ鎌倉へ引き返して、極樂寺の方の處置に當つたらどうか。王之助の意を傳へて、では當分こつちにゐようと云へばそれでもよし、また、艦で歸れるものならすぐにも歸りたい、といふ氣持だつたら、明後日の便を待つて、一緒につれ歸ることにしたらよからう。——この、昌造の提言に、誰も別だん異議はなかつた。

隧道をぬけ、踏切を越えると、千葉は、一足先に行つて、一行の來着を知らせて置かう、と云つて、自轉車に飛び乘り、風のやうに闇に消えて行つた。

昌造の、熱をもつてづきん〳〵する足もおのづと速まつた。二年間住み馴れた逗子の町へはいると、有繫に、我が家へ歸りついた安堵の氣持だつた。潮氣を含んだ生温かい微風も、わざ〳〵濱から出迎へに來てくれたかといふ風に、懷しく嬉しかつた。

臺所を働いてゐた女中の生家にあたる、驛前の運送屋に着いた時には、もう十時をすぎてゐた。往來からまる見えのギヤレーヂのなかに、青い蚊帳が垂れ、薄暗く提灯の灯がとぼつてゐた。

「ずいぶんお待ちンなつていらしつたんださうですけれど、待ちくたびれて、子供さん方は、みなさんもうぐつすりおやすみんなつちやいましたよ」

千葉が一二間むかふから、いきなりから聲をかけてよこした。子供

はさうとしても、無論出逢へてゐるものと思ひこんで來た妻のおしげは、然し、どこにも見當らなかつた。書生や女中たちが、何かきまりわるげな、初對面の人にでも接するやうな樣子で、默つて頭をさげたばかりだつた。

納屋をさし覗くと、末の子を胸の下に、やつと半身起き直つたばかりらしいおしげの姿だつた。その周りに、足の踏みどもないくらゐ、三人の子供たちの、頭や手足が散らばつてゐた。三和土へぢかの茣蓙の上に、ぴつちり三枚ほどの布團が敷き並べてある、——そこへ、土足のまゝ昌造は、蚊帳の裾を掻いくゞつてはいつた。

おしげは、頑に笑顔を拒むやうな頬の堅さで、まぶしさうにすぐ目をそらして了つた。はたに見る目はあらうとも、互に相抱かないまでも、手ぐらゐは把り合つて、言葉より先にまづ涙だらう、といふ昌造の豫想は、もの〻見事に裏切られて、はッと胸が冷た。——普段からの、うちをそとの振舞が、遂にこんな時、夫婦、親子別々の、よけいな苦勞もしなければならないやうな結果へも導くのだ。それまではまだい〻として、早速自分で飛んで歸る代りに、まづ人を見せによこすとは！　怪我でもあつたらどうする！　一人でも死んでゐたらどうする！　——おしげの表情なり態度から、この激しい非難が、矢のやうに昌造の胸へ來てさ〻つた。

ほかの惡德の數々なら、身に覺えもあるけれども、反省の心うすい自分とは、嘗て思つたことがなかつた。それが卽ち、無反省な生れつきだ、と云はれ〻ばそれまで、いづれは比較的な問題だが、反省の鈍さは、いやになるほど周圍に見ても、自分より鈍い反省の人を、三十六歳の今日まで、昌造は、畏友の一人か二人にしか見出した覺えはない。それを、度を以つて云ふならば、百倍も稀薄なおしげから、無言のうちに嚴しく強要されたのだ。なさるべくして、而も放慢、懈怠のあつた反省なら、その征矢に射竦められるか、さもなければ、痛手に堪えかねて、猛然として逆襲的態度に出ただらう。——昌造は、たちかけた腹の底が、ふとたわいなく脫け落ちたやうに、寂しく悲しかつた。負ふに價せず、當つて傷け得ない矢のもとに、けれども昌造は、おだやかに轉び伏して、もう一度また己の心に、再々々の吟味を加へてみた。この、下僕のやうな謙虛が、果して良人の德であるかどうか。否といふ答が、その吟味の結果であることは、ほどしない先から見當がついてゐたくらゐのものだつた。娶つて後の五年ほど、うち打擲こそ一度も加へたことはないが、敎へたり、叱つたりする形で、もつと美しい良人の德を備へてゐた彼が、どうしてこれほど隱忍の惡德に染んで了つたのか。反省の心うすく生れついた者には、手の懈によつて、婦の性質を感知させるよりほかに道がないことを、——或はまた、それすらも結局の役にはたゝないことを、數知れぬほどの機會に、しみ〴〵と敎え込まれたからではないか。

書生や女中たちの態度も、今はすつかり腑におちた。今日は、恐く非難すべき、無反省の良人が歸つて來るぞ。——この、おしげの無

言の言葉が、暗々に、彼等の主人を他人のやうに見せたのだ。それぐらゐは隱忍の惡德に馴れた良人にとつて、なにほどのことでもない。たゞこの呪禁が、稚い子供たちの心にだけは響いてゐてくれるな！

「みんなよく眠てゐるな」

一人々々、子供たちの寢顏をぢッと見て廻つた。安眠、と云ふより、空眠だつた。空ッぽになつて眠てゐた。

「お歸ンなさいまし」

その時になつて、やつとおしげが、呟くやうな低聲で、――膝頭にゆかたを引き合せながら坐り直した。

「吃驚したらう」

「…………」

「でも、大したことでなくつてよかつたね」

「えゝ」

軈て頰に、笑ひらしいものゝ影が動いて、「あなたもまア御無事で結構でした」

その裏には、前に來た時の千葉の報告のしかたが、はつきり映し出されてゐた。

「あゝ。……相憎離れてゐたんで、いろ〳〵心配をかけたらうね」

「いゝえ。……子供たちに間違さへなけれア、もうそれで結構なんです。一人でもどうかしたひには、第一あなたに申譯がないと思つ……」

「おもてに出てゐてくれたのが仕合だつたんだね」

もう一度また、一人々々子供たちの寢顏を見て廻つた。

「大勢つれていらしつて、あの人たち一體どこで寢かすおつもりなんです？」

「そんなこと、どうにでもなるさ」

家を出て、運送屋の主人に會ひ、いろ〳〵世話になつた禮を述べてから、四人が身を横たへるに足るだけの場所を才覺して貰ふやうに頼んだ。隣の、葦簀がけの氷屋へ、交渉に行つてくれて、その店さきでよければ、とすぐ話はまとまつた

「氣の毒だけれど、君たち、今晩はこゝで辛抱して貰ふんだな」

「えゝ、結構ですとも！　これだつて、まる〳〵の野天よりやアよつぽどましですよ。それに縁臺はあるし……」

「子供たちは、どうせ掛けてやしないんだから、布團はあれらの持つて來たまい」

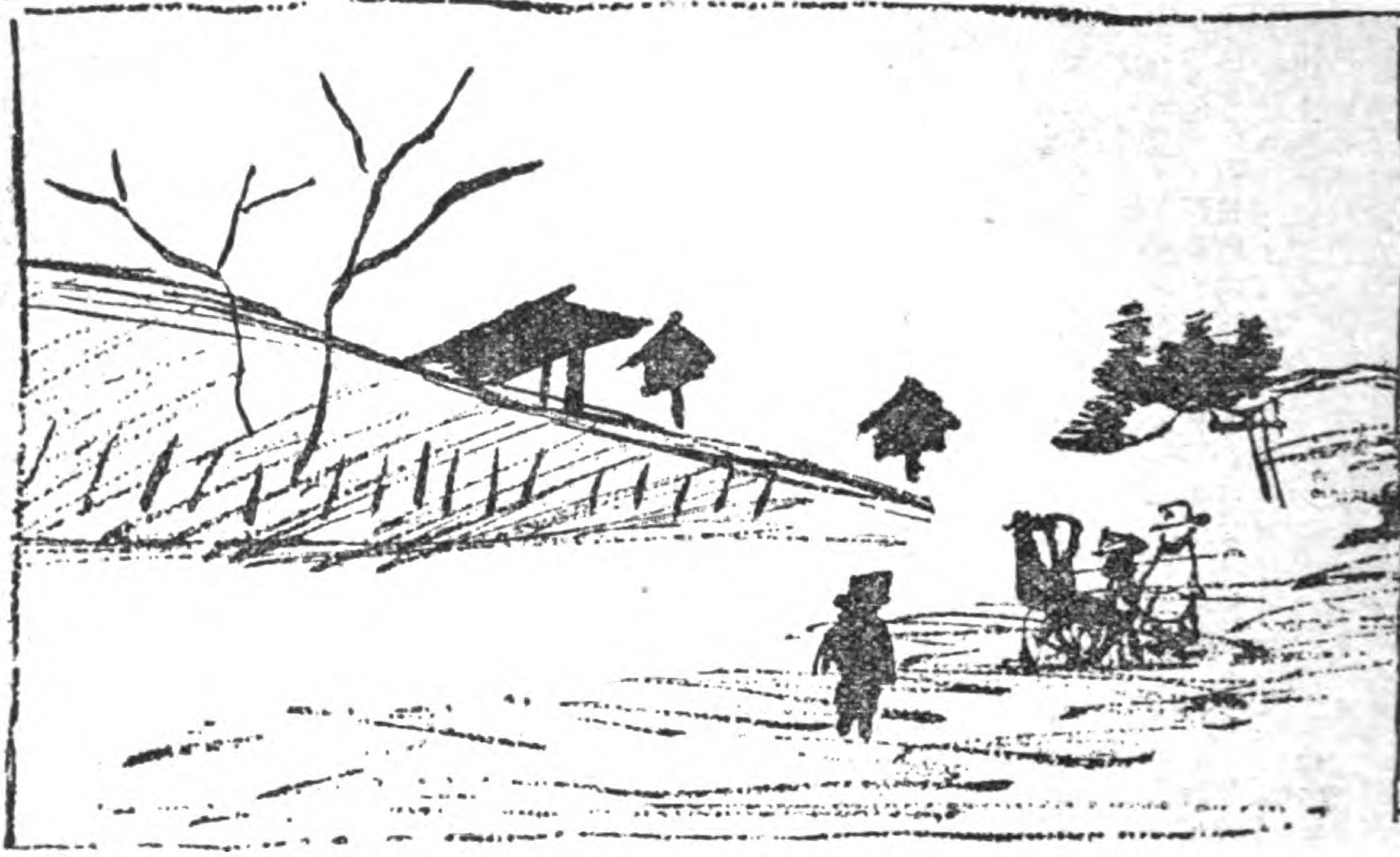
「なアに、そんなものが要るもんですかね」

道傍の井戸に手汲ポンプを押し、逞しい上體を拭いてゐたハートが、振り返つて云つた。「こつちとら、無論野宿の覺悟で出て來てるんですもの」

十一時すぎてから、昌造も、子供たちの足もとに、着のみ着のまゝの身を横たへ、力いつぱいの大欠伸をした

蚊帳ごしに見あげる空には、白々と天の川が流れてゐた。

二の二終り　――つゞく――



三つの遺骨

三宅やす子

一

英子の職業は細い針のやうな些細なものだつた。がそれで全身を貫ぬかれると、身體中が激しく痛み出した。三年の後英子は其痛みに堪えられなくなつた。

「子供が二人になつたら、もう「淑女の友」の方はよしますわ」

簡單な報告を、「何故？」と謙一は失望の面で受けとめた。

「そんな事つて無いよ。折角やつてる仕事を。どうかして家の都合をつけておやりよ」

「だつて無理なんですもの」

廢めたら其月末から、別の無理が生じる事は、もう彼女は云つて居られなくなつた。

「僕の仕事の苦しみを、解つて貰へるのが、一番嬉しかつたんだが──」

「解りましたわ。解り過ぎる位──でも私のはやめても其日から食べられないつていふのと譯が違ふのね。それでさへも、僅か許りの給料を貰ふつてことは、こんなに厭な思ひを我慢しなければならないつて事が、解つてますわ。男の方は大變だわ」

「それだけわかつてるなら、もう少し續けておくれ」

「一人の子ならまだ出來ます。これから二人になつたら、仕事のために、子供を病氣にしてしまひさうでね」

「また君の、强迫觀念がはじまつた」

家庭を持つて居る女が、外に出て働く苦勞なんか、一生かゝつても男にわかる筈はない——英子は爭はなかつた。そして仕事を續けて見た。其結果は、英子の極度の疲勞だけがのこされた。

隙間だらけの古い借家は、幼兒を感冒にかゝらせるには最適當だつた。冬の間二人の子供は風邪をひきつゞけた。永い看病の日が英子を倦怠させた頃、急に醫者が云つた。

「これは——百日咳になりましたな」

「晝間は外で遊ばせてもよござんす。なるべく空氣のきれいなところで、夜は溫かにしてお上げなさい」

英子は少し許り聞いて居た知識で、轉地をさせたいと、謙一に云つた。

「贅澤な事を云ふもんぢやない。それに英子が留守にしてしまつたら、家が第一困るぢやないか」

上の子の百日咳はすぐに下の子にも傳染した。然し、病氣の經過は半ば以上過ぎた。

或日英子は淑女の友社から取次電話で呼び出された。

「來月號の口繪にしたいのです。現代風俗をいれるので、中流家庭のところに寫眞を撮らせて頂き度いのですが、お子さんも一緒に」

無論寫眞師が來るものと思つて、英子は氣輕く承諾の返事をした。

(現代中流家庭の典型つてわけなのね。それに違ひない。主人の稼ぎで足りなくて、女中を使つて女房が內職をする。良人はそれで學位とかいふ肩書がある國家のはした使用人。うまく出來てるわ。)自問自答して英子は苦笑した。

寫眞師は然し、此「中流家庭」を訪問しなかつた。といふのは、寫されるべき家庭の夫人が、寫眞を掲載する雜誌の使用人であつたことに基因した。

「どういふ風に撮つて頂くか、やはり御相談してからがいゝと思ひますから、宜しかつたらこちらにお子さんを連れて來て頂き度いのです」

「宜しかつたら」といふのは此場合枕詞の役でしかなかつた。月に數回出社するのを久しく行かなかつたのだから、當然出て來て可い時分だ、とも聞えた。

「私は出て行く義務がある。でも此子供達は——」

子供が病氣だつたから出社しないと云つたのは、口實位に見られて居るのだ。英子は、憤りを良人にまで傳へ度くなかつた。謙一に怒り

出されると彼女は板ばさみになつて面倒だと思つた。

「今日は子供たちを連れて、淑女の友社に行つて來ます」

「風が寒かないかい」

「もう五月ですもの、いゝ時候ですわ」

青葉の中に五月幟の鯉がうなつて居た。

英子は子守の背に一郎を背せて上の兒の悦子も連れて郊外の雜誌社に出掛けた。

社長の指圖でテニスコートのベンチに子供等を腰掛けさせて、英子が其傍に立つて一枚の寫眞がとられた

「どうも、遠方を有り難う。あちらでお茶をあがつてらつしやい。」

英子は辭がゆきづまつた。

編輯室では久し振りに社員に挨拶をした。一郎がヒーッと咳をした。

「百日咳ですか。それはそれは、此風にいけませんでしたね」

風は午後から烈しく吹いて居た。主筆の敬子女史は編輯室の窓をしめさせた。「お寒いといけない」

いたはられるほど、反對に英子は物悲しくなつた。はつきり斷り切れなかつた彼女の性格が情なかつた。

其夜から一郎は發熱した。

毛細氣管枝炎と診斷された。醫者は英子の耳に肺炎と云ふ病名を聞かせないだけの話で、危險は刻々にせまつて居た。

「駄目ね。もう」人が居なくなると英子は泣いた。

「今から力を落すのは早い。盡すだけ盡して——」

「誰かもつといゝお醫者にかけてやり度い」

「かうなればもう、醫者の力ぢやないよ」

「でも——親の身になればどんな費用をかけても、生きて居るうちにいろ／＼な事がして見たいんです」

「ぢやあ笄町にでも相談して御覽」

親戚の紹介で翌朝小兒科の泰斗と云はれて居るT博士が來診した。

瓦のくづれた四間の借家は、恐らくT博士の立會に臨んだ患家の中で、最もみすぼらしいものに屬するに違ひなかつた。彼はすり切れた疊の上に、すゝめられた座蒲團を敷いた。

「久濶でした」主治醫はT博士に挨拶をして譲一を紹介した。

「笠原博士です」

Tは四間の借家の主人に對するおじぎを輕く一つして、氣取つた手つきで診察を終つた。

「お忙しいところをどうも有り難うございました」

重病の子の父らしい感謝の言葉を耳に入れた儘、Tは主治醫に向つ

て云つた。

「難物ですなあ」

「……」主治醫は弱つた顏をした。速度のはやい病兒の呼吸が、スウ、スウときこえる。

T博士はポケットから煙草を出して火をつけた。謙一は、ハッとしてTの顏を見た。悠然とふかす煙が、のぼつたところで、謙一は立つてたてつけの惡い障子を四五寸開けた

二三言、主治醫に注意めいた事と、謙一夫婦に「お大切に」といふ挨拶を殘して、T博士の姿は威勢のいゝ車と共に街に走つて出た。

「そら御覽。英子のいふ「いゝ醫者」のしてくれた事は何だと思ふ」

英子はかすかに頷いた。

だがもう一度「いゝ醫者」のK博士が淑女の友主筆の敬子女史の心配で一郎を見舞つた。Kは

「營養のいゝお子さんだな」と云ひ乍ら診察をして、

「今夜が一番大切ですよ。それさへ通りぬけたら」と云つて歸つた。

其晩は通り越したけれど、もう次の晩までは越せなかつた。

「とう／＼腦に來ました」

激しい苦惱をみまもつて居た主治醫が云つた。

「もう駄目なら、一度抱いてやり度うございます」

英子は度々兩腕をのばした。

「まあ、しづかに――搖つてお子さんが苦しいです」

臨終にかけつけたのは英子の母のお久だつた。母と云つても英子の家に時々遊びに來る公の「お母様」とは別の人だつた。

お久は英子の結婚の時に、一寸したひがみから謙一に面白くない態度をとり、意地から英子の家に出入しないで居たのが、一郎の病氣が重いときいて案じて最近訪ねて來て、用があるなら手傳つてゆかうと云つた。

「今は手が足りてるからいゝの」英子はお久が眼の前に居るのが苦痛だつた。

「でもね。一郎の着物がないから――萬一の時に着替へさせるのが無いの。これを縫つて來て頂戴な――裏に白をつけて、なるべく急いで縫つて頂戴」さう云つて歸らせた。

お久は着物が仕立上ると、いそいでやつて來た。冷くなつた一郎の身體に新らしいお召の袷が着せられた

「これを縫ひ乍ら、一針縫つては神に祈り、二針ぬつては佛にいのつて居たのに」

お久は人目もかまはずに泣いた。

「あなたはもう疲れてるから早くおやすみなさい。今晩私がお線香を

絶やさずに、一郎ちやんのお守をして居るから」

生前二三度英子がお久の家に遊びに連れて行つたたけだつたが。臨場にも骨揚にも、お久は英子の代りに行つた。いつとなく讓一とお久の會話が滑かになつた。

初七日の手傳ひをすませて、歸る時にお久はしんみりして英子に話しかけて居た。

「ほんとにあとを大切にね。あなたが身體を惡くしたら大變だから」

「え、諦めてるから――」

「でも一郎ちやんは短い生命だつたけど、大きな教訓を遺していつてくれたんだものね。一郎ちやんの力は私達忘れてならない事だからね」

「…………」

英子は唇を嚙んだ。大きな教訓――何が教訓だ。力だ。義理で結ばれた人間より、肉親の眞實の愛が強いなんて、わかり切つたことを、愛兒の死で證明して貰はなくても――それよりも、氣輕く出入の出來なかつた、嫂の家に、大手を振つて遊びに來られるきつかけを、あの子の死で作つてくれなくても――お久はそれで諦めをつけるなら、勝手につけるがいゝ。

一郎の生命は、――しみつたれた安月給に戀々として居た英子の職業が奪つたのだ。英子が職業に就いて居なかつたら、もつと暢んびり病兒の看病も出來たのだ。風の吹く日に子守の脊中で、「ねむいよ」とうと〱して居た一郎の顔が、永久の悲鳴のやうに、ボカリと英子の眼に映つて來る。一郎はまだ苦しいといふ言葉を覺えて居なかつたのだ。

だが、誰か英子に安月給を取らせなければならないやうにしたのか。讓一の業績は日に日に積み重ねられてゆくけれど、彼は依然として大學の一助手で、某省のはした囑託であつた。其内、助教授にするといふ、讓一の先輩近藤博士の誓言は、博士の白髪と共に、古色を帶びてゆく感じだつた。

二

不幸な事に、一郎の死んだ當時、英子の胎内に、新らしい生命が育つて居た。

「悲しんではならない。歎くと胎兒に影響する」

それが英子の自分に云つて聞かせる理論だつた。「理論」はいつも「實際」を征服してはくれない。彼女は一月餘り、食物がよく喉を通らなくて、毎日床の中で、蒲團を頭からかぶつて泣いて居た。夕方讓一の歸る時刻が近づくと、床を片附けて何げない顔をして居る。いつも英

子の顏は蒼かつた。
或る日、彼女は、自分よりも血色の悪い良人を出迎へた。
「どうかなすつて？」
「ア、追々に話すよ」
彼は容易に話さなかつた。が漸く切り出した。
「今日コールに逢つたらね」
コールと云ふのは近藤博士のあだ名だつた。近藤の尊敬して居る泰西の博物學者の名を、彼が舊式に發音してコールと呼ぶのを彼自身の象徴として簡便に使ふ符號である。
「僕に××試驗所の技師になれつて云ふんだ」
「で、それはいけないの？」
「莫迦、情ない奴だなあ。僕が役人になつて、毎日めくら印を押して一生暮せる人間だと思つてくれるのかい」
「そんな事思やしないけど——今だつて××試驗所に行つてらつしやるんですもの」
「あつちが本官になれば、大學の方の縁は切れる。尤も講義は今迄通りやるけれど、永久に講師で直接關係のない事になる」
「名目なんぞ、どうでもいゝぢやないの？」
「さうぢやないんだ。大學を離れる事は、僕の研究の致命傷だ。あらゆる研究の便宜はなくなつてしまふのだ。研究室を持たないで何が出來るものか。財産のないものにとつて、自分で莫大な費用を使へない限り、大學の實驗室以外で業績は擧げられないんだよ。それを今更役所なんかに——役人に許される範圍の研究なんて、高が知れたもんだ」
英子は默つて聽手になつた。
「技師になれば俸給も、今より少し割がよくなると云ひやがつた。計算して見たらたつた十圓だ。よくも恥知らずにそんな事が云へると思つた」
「結局承知なすつたの？」
「厭だと云へば兩方とも辭職するより他はない。そしたら明日から妻子を路頭に迷はせるんだから……」
「…………」
「皆コールの計畫的な事なんだ。わかつてるんだ。よつぽど辭表をコールの鼻面にたゝきつけてやらうかと思つた——自分獨りならどんな事でも出來るけど」
英子はやはり默つて居た。
「さうなれば春の休も暑中休暇もなくなる。毎日厭な化石のやうな教授連を對手にさせられて、せめて自分の慰められて居た春の寫生旅

行くもう出來ない──英子かも少し收入が多くなつてくれないかなあ」

「駄目よ。そんなこと。ほんとはもう、淑女の友の方だつて、斷然よさうと思つたんだけど」

「何故？　一郎が居なくなつたんだもの。よす事は無いぢやないか」

一郎が居なくなつたにつけて、行き度くないのだとは、謙一には話せなかつた。

「早く君が、小說で原稿料でもはいるようになつて與れると可い、と思つたりするよ」

「そんな事、まだいつの事だか──夢みたいな事は考へない方がいゝのよ」

「冗談だよ。小說で金を取つて與れなくても可いから、うんと小說が上手になつてほしいな。家の中なんか、うつちやらかして可いから、小說を勉強してくれないか」

「途中で書くのをやめて居たから駄目ね」

「そんな事をきめる事は無い」

謙一は一本のビールに調子づいて居た。

「まるで話にもならない、醜い暗鬪で、日本の學界は出來上つて居るんだ。今までに、どれだけ有爲の若い人が、犧牲になつて居るかわからない。みんな老獪な教授連が、彼等の地位を自ら護るために、あらゆる術策をめぐらして居るのだ。それでは神聖な學術の研究なんぞ、いつになつたつて出來やしない。僕は義憤を感じる。洗ひざらひ書いてやり度い、でもそれは許されない事だ。小說なら可いんだらう。さういふ現象を取扱つた小說なら、何を書いたつて許される筈だ。僕が材料を話すから、英子書いておくれ。書けるだけの腕前に是非なつてくれよ」

「だつて、そんな事──難しいわ。とても私には難しい事よ」

「さうかなあ──なら可いよ。いまに辭職してから、僕がすつかり事實で素つぱぬくから──その方が小說よりまはりくどくないや」

生活の爲めには、彼の云ふ「神聖な學術の研究」も、遂に青年の夢想境以上の價値を、實際に齎らさなかつた。

彼は其夏「××試驗所技師に任ず」「高等官七等に敍す」二枚の辭令紙を受取つて、机の抽出にほうり込んだ。

さうして彼は毎日、滿員電車の車掌台に、振り落されさうにつらまつて、滿々たる不平を毎日往復した。

間もなく生れた子は男の兒だつた。

「一郎ちやんの代りが出來てほんとによかつたわね」

親戚知己はさう祝つた。投げやりに育てられて逝つてしまつた一郎

の代りに、次男清次は大切にされた。英子が職業を思ひ切りよく捨てることも、子供の愛のために謙一からやつと肯定された。

それほどにして、兩親の全力を盡した子は、生後半年程經つと不思議な症狀を現はした。

一日に一回兩手を頭に近づけて痙攣のような發作をするとが、習慣的にやまなかつた。醫者から腦水腫らしいと診斷されて、涼しい山間に轉地をすゝめられたのは、謙一が夏期の出張に遠い旅に出た後だつた。英子は長女の悦子と子守を連れて、狂人のなほると傳へられて居る高尾山の麓の宿屋に移つた。

狂人の收容されて居る小屋には、その宿屋から食事を運ぶ位の距離しかなかつた。英子たちの毎日見聞するものは、狂人と其周圍の人許りだつた。

「でも奧樣。」宿の女中は自慢して話す。

「こゝの瀧の御利益は大したものでございます。昨日もお山を降りた女の方――奧樣御覽になりませんでしたか。うちのお上さんと話してゆきましたの。八年もお惡かつたのがすつかり癒つてうちに歸りましたよ――でもとても癒らない方はお氣の毒でね。今店で晝寢をしてる方は、これからお山に行くんださうですが、七人の子供さんが七人共亡つて、それを苦にしてお上さんが病氣で死んで、あのお爺さん、とうく毎日默つてふさぎ込んでる氣違ひになつたんださうですよ」

どんな話も英子には、胸にこたへて痛かつた。

秋になつて山を降りた。其年が暮れ、三つの春を迎へても清次は立てない。口も利かない。夜中になるとどこかに苦痛があるらしく號泣して止まなかつた。「英子さんも大變だね」親類の人はかげ口をした。

「清次さんは大きくなつたらどこかの療養所にいれるといゝ」

英子は身重の身體で、夜中度々起きて抱いて居ると、二階にいつも獨りで眠つて居る謙一が、あまりの號泣のしかたに堪へかねて、階段の上から

「どうした」と聲をかける。「え、もうだき」

英子は自分も泣き出しさうになる。

「罰だ。罰だ。」謙一は彼自身のうめき聲を發しる。

「自然が我々の性慾に課した天罰なんだ。皆何もしらずに性慾のとりこになつて、あとからこんな罰に遭ふんだ」

彼は終夜眠れないで神經衰弱になつて居る。

英子は獨りで「イヽエ」とふみとゞまり度かつた。なほ云へば「あなたには性慾の罰かもしれないけれど、私は何んの罰を受けるのですと云ひ度かつた。

「頭を使ふから、女から性慾的な表現をされる事だけは、死ぬより厭や

だ。それだけはしないと約束してくれ」

それが結婚の初めに謙一から云ひ渡された事だつた。英子は何の事だか譯がわからずに承諾した。笑ふな、と云はれた者は、可笑しくないようにするのが賢明なやり口だ。可笑しくなつたら笑はずには居られまい――英子は笑つてならないものが、可笑しくならない修養を積んだ。其くせ、笑ふといふのは口をゆがめて、聲を出す事だ、と敎へられた。敎へられた「笑ひ」に何の可笑しさが湧かう。彼女は謙一と一緒に性慾享樂の天罰を受けるには、死ぬまで上告する權利があつた。

今は英子には何も他の望みはない。只一度で可いから夜の十二時から朝の五時頃まで、通して眠つて見度い慾望だけだつた。

此簡單な願ひは、淸次が生きて居る限り、彼女には到底許されない、大それた望みだつた。誰が母以外に、此苦しみを受けてやるものがあらう。父でさへ、うらみを「自然」に歸する他には、手の下しようもないのである。地獄のような夜が續いた。

櫻が盛りになつて、滿都の人が花に浮れて居る時分だつた。其頃やうやく步行が出來るようになつた四歲の淸次は、部屋の中で前のめりして轉んだ。打つたのは前額で、ひどい怪我だつた。

手當をして怪我はなほつたが、再び起てなかつた。食物を口の傍に持つて行つても決して口を開かなかつた。

「マン、マンマ」

それが四年の間に發音した彼の凡ての言葉だつた。ママは食物とも母とも通じる。それでよかつた。淸次は母と食物とに終始して、不幸な、然し最幸福な一生を終つた。

英子の希望で亡兒を解剖に附する事にした。亡兒の苦痛の原因を知つて見たいといふのは、傍から白痴だの低能だのといはれた口惜しさもあつた。

大學の病理敎室の一室で、英子は我子の解剖を待つて居た。彼女は壁にかゝつて居る敎授誰々、助敎授誰々といふ名を無意識に讀んで居た。壁にかけた肖像を見た。

彼女の五臟に、變な響が傳はつて來る。鋸でゴシゴシと骨をひく音だ。ほとばしる鮮血が彼女の眼の前に流れる。メスの光り、血なまぐさいにほひ。

彼女の幻想から堪へられなくなつて、卓上にうつぶした時、

「大變お待たせしました」

と執刀のN敎授が室にはいつて來た。

「大變時間をとりました。脊椎まで解剖したもので――貴重な材料です。腦が硬化したんです。書物では見て居たけれど、實際には初めて見ました」

N教授はこまかく報告をした後、

「淸次君の大腦廻轉は非常に優秀なものです。天才の腦です。あゝいふ方が出來たのは、其血族の强みです。つまり非常に天才の腦を持つて居られたのにそれが順に發育しないで、硬化して行つたんですね、だから頭痛がひどかつたに違ひない、夜泣はそのためです」

英子は歸りに案内をされて、解剖室を覗いた。ガランとした廣い室には縫合を終つた淸次の屍體が手術臺の上に乘せてあつた。

「これが硬化した腦です。」

英子はピンセットでさわつて見た。カチカチとした手ごたへがあつた。

「こゝは柔いでせう、ところ〲硬くなつて――こゝは思考を司る處、この邊は下肢の運動を司るところです。心臟や肺臟も見せませうか」

血なまぐさくて英子はハンケチを顏にあてた。

「もう澤山でございます」

遺骨は長男一郞の墓を掘つて、一緒に埋めた。

淸次が持つて遊んだ陶製玩具の金魚とねぢれて形がかはつて殘つた牛乳の硝子瓶と――それが彼の屍體を燒いて遺つた骨片と一緒に、灰の中から拾ひ出されて小さな箱に入れられて、土の中に埋つた。

灰が散つてまた靑空になつた。

英子は時々あの日N教授との對話を、牛が草をかむように、吐き出してはこなして見る。

「あの兒が胎内に居る時、長男を亡しまして、それから一ケ月あまり私は何も食べられない狀態でございましたの。よく流産しなかつたと不思議な位でしたが、あんな事で胎兒に故障が出來たのではないでせうか。淸次は生れる時豫定より四十日も遲く生れて、おくれた程の發育をして居ませんでした」

「さういふ事もないとは云へませんが、――然しさう簡單には云へますまい。先天的に我々の知り得ない事が色々あるのですから」

それは英子をなぐさめるための言葉ではなかつたらうか。N教授がかりに、全く先天的のものだと斷定しても――と英子はそこで、はきり彼女の結論をつかんだ。

「私はさうは信じない。一郞さへ死ななかつたら、淸次は普通に生れて來たに相違ない」

三

二年後。

英子は前年の大患の後、また元の健康體になつては居ない。腎臟は、

妻の病氣で心身共に苦勞をした。從つて人生に對する考へ方まで、一變して居る。

「英子、今やつて居る仕事が片附いたら、二三日どこかに靜養に出かけようか。子供等を連れて——長岡溫泉あたりが靜かでいゝな」

「どこでも可いわ。久しく汽車に乘つた事も無いから、それだけでも愉快ですもの」

「永い間、うちは病人があり過ぎたね。去年の英子の大病だつて、全く過勞の結果だつたね。僕もつくぐ其事がわかつた。あんまりあせつて、物事をするのはよくないんだね」

「さう云つて下さるやうになつて、私もどんなに安心だか——」

「今迄むきになつて、コールや其一派の惡らつを憤慨して居たけれど僕も齡を取つたと見えて、あんな奴を相手にする氣もなくなつた」

「憤慨したつて、しようがない話なんですもの」

「僕の云ふ意味は——徒に吾々を苦しめる學界には見切りをつけて、廢めてしまはうといふのさ」

「やめて?………」

「と云ふと君はすぐ驚いて、さう詰問的な顏をする——やり度い事はいくらでも、際限がないけれど、ほんとはこれからが、僕のほんとうの研究なんだけれど——そんな事に執着しまいと思ふんだ。ろくに研究の便宜の得られない役所になんかこびりついて居ても、凡夫の悲しさ、不愉快な事だらけでやり切れないから、廢めるに限る」

「やめて如何なさるの?」

「まあ」讓一は寂しい苦笑を、頰一ぱいに漂はせた。

「今直ぐといふ譯ではないけどね——何とか方針が立つたら、方面違ひの仕事でも何でも入れて貰ふ。但し、其前に僕は、十何年間胸に疊み込んだ、血を吐くやうな思ひを、洗ひざらひ吐き出して見せる」

「さう?——M大佐の事御存じ?」

「此間N新聞に書いて、筆禍を買つた人だらう」

「えゝ、あゝして首になるのも莫迦らしいわね」

「莫迦らしいと思ふかい」

二人の間には、各異つた沈默が流れる。

「恩給はいつでしたつけ。今年の秋ね」

「恩給?」

讓一は意外だといふ表情を誇張した。

「恩給なんぞあてにしてるのか。情ない女だなあ——恩給なんて卑くそ位のもの要らないぢやないか」

「さうかしら——でも折角、もうぢき貰へるまでになつて——誰にもおじぎしないで、勞力なしに貰へるお金を」

「ところが勞力の有り過ぎた結果の涙金なんぞ、貰つて腹が立つばかりで、有り難くも何ともない」
「大きくお出になつたわね。活計向には些細な感情は禁物よ。洗ひざらひも結構だけど、家族の事も考へて頂戴。いつか倉田さんの事、あなたがお話しになつたわね」
「倉田が何なのだ」
「倉田さんでせう。コールの冷酷に憤慨して斷然辭表をたゝきつけたつて人。あの日は倉田さん、それやあ興奮して、歸りにうちに寄つて私に話しましたわ。『近藤さんは蒼い顏をして、ブル〳〵つて顫へたんですよ。奧さん』つて身振りまでして見せたのよ。辭表をたゝきつけた時は、痛快だつたに違ひないのよ。生活を棒に振ればどんな痛快な離れ業だつて出來ますわ。其代り痛快の代償は大きいわ」
「…………」
「あれから倉田さん、樺太に行つて暫くは氣持のいゝ生活か出來たかも知れないけれど、寒い處で病身の奧さんは亡つてしまふ、倉田さんも胸の方が惡くなつて、やつぱり東京に舞ひ戻りでせう――お母さんのない不幸な二人の子を、此さき倉田さんが育てゝゆかなければならないのよ。それでコールの方はどうかつてば、あの時ほんの一分間、――三十秒かも、知れないわ。其瞬間顏面を蒼くしただけで、蚊に食はれたほどの影響もなく、至極健在で、『倉田君、子供は大きくなつたですか』よ。倉田さんだつてやり切れないでせうよ」
「君のいふ理屈は通つてるよ」讓一は冷靜に、「成程コールはどんな事にもビクともしないさ。もと〳〵冷血なんだから――それで構はない。僕は、僕の云ひ度い事を云はなければ、腹の蟲がおさまらない」
「どうぞ御自由に――妻子のある事をお忘れにならない程度で」
「勿論」讓一は悲痛な面をゆがめた。
「僕の生命にして居た「研究」さへ捨てる氣になれば、生きてゆく位の事はどうにでもなる。たとへば食へなくなつたら、寄席の藝人になつて、高座で人の面白がる話を聽かせて居たつていゝだらうぢやないか」
「ま、、、、ッあなたが？　落語家？」
「無論弟子入りをしてね。小勝のところにでも行つて――學者の落語家なんて、一寸毛色が變つてゝ、使ひ手がないとも限らない」
「本氣でそんな事、思つてらつしやるの？」
「眞面目な話だよ――大學教授の亡者共を相手にして居るより、八さん熊公の方が、どんなに愉快だか……」
「さう〳〵、あなたは、あの低能な區役所の溝さらひ人夫が御親友だ

つたわね」

「あの男だつて偽學者より、よつぽど偉いよ」

「然し」謙一は話を替へた。

「君が原稿料をとるやうになつたのは愉快だ。大の男のボーナスより多い金をとる女房を、僕はとも角尊敬する」

「冷かさないで下さい」

「冷かしてやしない。物質の助けをしてくれる妻は、本當の意味で男のよき内助者だ。此上も少し僕をわかつてくれたら申分はない」

英子は去年の大患後、家庭内の勞働をやめて、机に向ふ時間が多くなつた。ある地方新聞の連載物の稿料が、新年にまとまつてはいつた時だつた。

「私は只もつと暮しがらくになり度いの。そしてもつと廣い家に越し度い」

「家なんかどうでも可いよ」

「家さへもつと便利に住めたら、私ももつと仕事が出來ます。家のもの風邪なんかひかないし」

「贅澤だよ」

「贅澤で云つてるんぢやありません」

「そんな事より少しでも貯蓄をする事だ――萬一の時に自分たちをたすけてくれるものは――」

「わかつてます」

「どうだか――君はどん底の貧乏の味を知らないからいけなんだ」

「貧乏の味なら、いやになる程味つてます」

「ちやあ聞くがね、今日食べものがなくて、如何することも出來ない饑じい目に遭つた事があるかい――無いだらう。僕なんか親が一時無收入の状態が續いた時、丁度育つ盛りの少年時代に、幾日そんな目に遭つたか知れない。毎日焼芋でやうやつと腹をこさへたよ。其焼芋も買へなくなると、默つて空腹を抱えて居るんだ」

「……まあ」

「小學校にゆくのに、履いてゆく草履がない。仕方がないから休んで居た」

「……………」

「それが順にまた職について、やつと安心になつた時に、突然お父さんが上海で死んでしまつたんだ。僕は十七だつた。僕はアメリカに密航して、皿洗ひで勉強しようと思つた。既に逃げ出さうと決心したところに、叔父さんが學資を出して下さる事になつたもんだから、高等學校にはいつたんだが、あれが幸か不幸か、今になつてはわからない」

ふと謙一は襟を合せた。

「今夜は莫迦に寒いね。何だか背中がぞく〳〵する」

「薄着してらつしやるんぢや無い？　それとも風邪をおひきになつたのかしら。溫かにしてもうおやすみになつたら」

英子は良人の身邊の心くばりをして、彼女と子供との寢室に退いた。

翌朝、謙一は起き上れなかつた。醫者は

「此頃また、惡性の感冒が流行してますから御用心なさらないといけません。」と云つた。

平野水、牛乳、食パン。

ほしいと云はれただけのものを盆にのせて運んで來た英子に突然彼は云つた。

「チフスになつたやうだよ」

「またあなたの大げさな御心配よ」

「いや、たしかにさうだ。汗が出ない。昨夜は一生懸命に發汗しようとした。が駄目なんだ。此脈を見て御覽。九度七分も熱があるのに、此少い脈を」

謙一の眼は座つて居た。英子はゾッとした。

「そんな事があるものですか、あなたの氣のせいよ。――でもそんなに氣になるなら、河田さんを呼んで、診て頂きませうか」

「直ぐに、河田を呼んでおくれ」

內科の河田博士は、謙一の同期の親友だつた。

「オイ、いやに元氣がないぢやないか」

其夜すぐに來診した河田は、いきなり調子づけて病室に闖つた。

「君は坊ちやんを二人亡くしてから、神經を起していかんよ。もつと元氣になり給へ」

「アゝ」

「まあ拜見するかね」

診察をし乍ら、河田の顏は曇つた。診察を終ると、彼は默つてゴシゴシ手を洗つた。

「チフスだらう」

待ち構へて謙一が訊いた。

「いゝや。まだ何とも云はれないがね。」

英子はハッとした。謙一は覺悟をして默つて居る。

「今度病氣がなほつたら」河田は陽氣に云つてのけた。「一つ氣らくに、大に靜養し給へ」

「長岡温泉に行く約束をしたんだが、とう〳〵……」

語尾がふるえて、消え入るやうにとぎれた。

「元氣を出し給へ。元氣を――郊外に家でも建てる氣はないか。吾々四五人で氣の利いたアパートもいゝね。」

「ハヽヽヽヽ」謙一は低く笑つた。其笑聲は英子を不覺な涙に誘つた。

翌日近藤博士が聞き傳へて、見舞に來た。

「や、奥さん。もう此處で失禮します」

近藤は玄關に立つた儘

「笠原君はどうですか」

「ハイ――何分熱が高うございますので……」

「去年は奥さんが大病をなすつて、今度は謙一君ですな。御夫婦お揃ひで仲が善いですな。アハヽヽ」

「もう病氣は澤山でございます」

「いや、お互にそれで御同情があつて、いゝかも知れませんよ。アハヽヽ」

近藤は英子が見せる不快の表情に氣がつかないらしかつた。氣がつかないのは丁度彼が其時縮緬の袱布から、奉書の包を出して居たから、だともいへる。

「これはほんの心許りのものです。何なりと謙一君に買つて上げて下さい」

英子は押問答をして、近藤の聲を謙一の耳に入れ度くなかつた。

「御叮嚀に」と輕く頭をさげて、さつさと受取つて彼を歸らせた。泣くり出して謙一の枕許にそつと靜息をうかゞふと、眠つて居たと思つた謙一は、パチッと眼を開いた。

「今のは誰？」

「コール」

「何しに來た」

「お見舞ですつて、お金を持つて」

「いやに笑ふ奴だな」

二人共默つた。

數日後の朝である。××研究所附屬病院の一室で、謙一はやがて家から來る筈の英子を待つて居た。

「葛湯を一杯くれませんか」

看護婦は葛湯を作つてのませた。

「有り難う――英子はまだ來ませんか」

「もう、追つつけ、いらつしやる時分でございますよ」

病人は眼を閉ぢた。再び彼が眼を開いた時、英子は枕許ににつこりして立つて居た。

「今朝は御氣分がよささうね。葛湯を召し上つたつて、看護婦が感心でましたよ」

「……」謙一は寂しい顏で妻を見て居た。

「いろ〳〵話があるから、さつきから待つて居たよ」
英子はドキッとした。
「もつと早く來ようと思つたんですけど、今夜歸らなくていゝように、あとの事をして來たもので」
「泊つてゆけるのかい」
「えゝ、もう子供達の風邪は大丈夫ですから」
寒いから病院に寢るのは英子の身體によくないし、子供達もかあいさうだと謙一が云ひはつて、毎晩彼女を歸らせた、が、もう今朝は英子の傍を離れて貰ひ度くないほどに、心持が迫つて居るらしかつた。
「今朝廻診の時に少しはいゝと云つてくれたが」
「…………」
「それも一時の氣休めらしい。殘念だけど、今度はもう癒る事は出來ないらしい」
「そんな事が――そんな事があつてたまるものですか――大丈夫。ほんとに大丈夫」
「昨夜から自分にも眼に立つて衰弱が感じられる。今朝は此通り蒲團が重くてたまらない。支へをしてるのだよ」
「……」病人の膝のあたりは高くさゝへがしてあつた。
「今夜は英子に泊つて貰ひ度かつたんだ」
「づつと泊つて居ますわ」
「いや、それもながい事ぢやないから――今朝はどうしても君が來る迄しつかりして居なければ、と思つて、今葛湯を無理に飲んだのだよ」
「…………」
「永い間、英子には苦勞をかけた。いろんな無理も云つた。何とか不足も云つたけれど、どうぞ許してお吳れ。ほんとは隨分好きで……好きで愛して居たんだ」
英子は息がつまつた。良人の手をとつて云つた。
「有り難う」
ぢつと妻の顏を見て居る謙一の顏が、英子の網膜に涙でかすんで來た。
「ねえ、僕はほんとに君が好きだつたんだよ」
英子は再び良人の手をとつて、彼女の胸にあてた儘泣いた。
「私も」とは何故云へないのだらう。云へないのは苦しかつた。でも云ふのはそれよりも苦しい僞りだつた。同棲十年の間、良人はいつも信賴する異性だつた。戀しい――といふには距離があるようだつた。
「青い本箱の右の抽出に」謙一は苦しさうに、時々とぎれて物を云ふのである。
「金がはいつて居る。それを話して置き度かつたから」

「右の抽出ですね」英子は大きく頷き乍ら、乏しい中から、英子の知らない金まで用意しておいた良人を痛ましい眼で見た。

「子供達を頼むよ」

「大丈夫。それは、ほんとに御心配なく」

「それを信じて居る」謙一は嬉しさうにニッとした。

「もつとそれより、仰しやり度い事はないの？」

遺言めいた事を、ひき出す惨酷さを意識しながら、今の場合、英子はさう訊くより仕方がなかつた。

「……無いよ」

「何でも伺つて置きますわ」

「……もう何も無い」

「何も？　さうでせうか。私は伺つて置き度い――仰しやり度い事を何も云はずに、いらつしやるなんて――私がもつと先になつてから、きつと、あなたの仰しやり度い事を云つて見せます」

「あゝ其事なら」寂しい微笑を力なく浮べて

「いゝよ。もうそんな事――今になつては恨みもない。不平も無い」

「だつて……」

「ほんとに何も心配して呉れなくても可いんだよ。丈夫にして。幸福に暮してお呉れ……」

英子は、それでも良人の表情から、何ものかを探りたさうにした。

「……只」

「只？」

「残念なのは…コールの葬式を見ないで死ぬことだ――それより外にもう云ふ事はない。學問の研究だなんて、今になつて考へて見れば人間のして居る事に何程の價値があるものぢやないと知つた。あくせくするのは、少しでも優良な子孫を遺すつて事になるのだね」

英子は謙一の言外の意味を、胸の中に疊み込まうとした。

「こんな話をして、頭がなほ變になつて來た」

「よしませうね。取越苦勞よ。でもかうやつて伺つておいた方が、用心していゝのかもしれませんわね」

英子は笑ひにまぎらせようとした。

「さう〱」謙一はいくらか氣が輕くなつたように

「蜜柑が食べたくてたまらない――いよ〱駄目だとなつたら、思ひ切り蜜柑を食べさせておくれ」

其午後、病人の意識はもう混亂して來た。英子の氣懸りは、蜜柑だけに殘つた。

彼女は一切の終らないうちに、病人の最後の望みをかなへさせ度かつた。然し、さうして同時に死の宣告を與へるには忍びなかつた。

それもう時機の問題にまでせまつて來た。

主治醫M博士は、氣の毒さうに英子に告げた。

「御遺言でもあつたら今のうちにおきゝになつておいた方がよいと思ひます」

彼女はM博士に云つて、甘い蜜柑の一袋をむいた

「蜜柑召し上らない」

英子の胸がふるえた。謙一は嬉しさうに赤坊のように口を開いた。かはき切つた唇の中に、甘酸い蜜柑の汁が、滴れさうになつた瞬間。

「蜜柑だね」　念を押す聲が、意外に明瞭だつた。英子はギクッとした。

「…………」

「いゝのかい食べても」

(よかつた)英子は心を撫でた。彼にはまだ生きたい希望があるのだ。覺悟はしててもまだ、蜜柑が病氣にさはりはしないかといふ事を恐れて居る。

「え、大丈夫。Mさんがいゝつて仰しやいましたの」

謙一は頷いて、安心さうに睡つた。

「もう一つ、おいしさうに、汁をすゝつた。

食鹽注射、人工呼吸、あはたゞしい變化はそれから數時間後に起つた。見舞にかけつけて別室に遠慮して居た人たちが、順次に告別した。其後の一切の事務を多勢の友人に一任して、英子は家に歸つて暫く寢ることになつた。

「奧さん一寸」　念を押すように一人が呼びとめた。

「葬儀委員長は、近藤先生ですね。何と云つても永い間、笠原君が助手をして居られたのだから──」

英子は二分間許り默つて、靜かに答へた。

「今までの仕來りのおありになります通りに」

「通知狀は近藤先生と、御親戚はどなたを入れます」

「それに誰もお入れにならないように。耐三の名が一つあれば澤山ですから。」

友人が怪しむほどに、彼女は主張した。

××研究所長は、満次の解剖に執刀したN博士だつた。謙一とは殆同期だつた。

「惜しい人を殺しました」　Nは所長の權限内での最善の便宜をはかつた。そして云つた。

「笠原君は當然教授になつて居る筈の人だ。大學の講師で一生を終ら

せたくなかつた。せめて今からでも教授にするように計らつておあげにならなければ――近藤さんが盡力なすつたらいゝんでせう。大丈夫でせう？」

勿論賛成者があつた。然し極めて常識的な斷案が下された

「教授會にかけなければ――今の場合それは間に合はない」

英子にしてみれば死後の名稱はどうでもよかつた。にも拘らず、煮え切らない人の態度は腹が立つた。

悔みに自宅に來た人達は同じようにくり返した。

「もう少しのところだつたんです。何しろ停年制はもうすぐ實施にならうといふのに――」

先驅教授の後釜をねらふのが謙一の意志ではなかつた。一緒に仕事をして居ながら、全然無理解で居られる事の苦痛と、寂寞とそれ許りでなく、事毎に壓迫される不愉快に堪へ切れなかつたのだ、と察して居た人は少數だつた。

「でも扶助料がおありになるでせう？」

女は女らしい事を、英子に同情して訊いた夫人の質問も多かつた。

「あと半年許り年限が足りないさうでございます」

答へる事とは離れて、彼女は、恩給までつとめてほしいと云つた時の、淺ましい彼女自身の姿を恥ぢた。

「そんな筈はありませんがね、えゝとあれは明治何年からでしたつけ」

「判任官の間は二年で一年と計算するんださうでございますから」英子は事務的に切上げる。

「すると一時扶助料でございますね」相手は倦きない。

「さあどうですか。其邊の事は存じませんの」

謙一の勞苦の結晶の僅かの金を、此際あてにする事は、彼の死骨をスープにして飲むのに等しかつた。

葬式の日は、朝から雪が降つた。

雪がチラ〳〵する中を、英子は、やゝ深い墓地の穴をみつめて立つて居た。

骨箱が穴の中に落ち込んで行つた――

一塊の土を、英子は握つた

「左樣なら」と心の中で發音した。

「永久に左樣なら」

彼女はそこで手に持つた土塊を、骨箱の上らしいところに投げ入れた。

くら〳〵と眼まひがしさうになつたのを、ふみ留つた。人々が驚いて

「大丈夫ですか」と彼女の肩を支へた。

「え、もう大丈夫」

につこりして、彼女は心の中でくり返したのである。

「お金の苦しみのないところで、永久に安らかにお眠りなさい、あなたは冷酷な學界の腐敗を憎惡して、いつも死身になつて闘つた。老朽した教授連を、何故そんなに、むきになつて對象にしなければならなかつたのです。貨幣の價値をなくしてしまつたルーブル紙幣みたいな連中を、貨幣の價値通りに扱つて、眞正面からぶつかつたあなたは、無駄な骨折をしたのぢやなかつたでせうか――其人達だつて生きてゆかなければ――生きるためには自分の地位を守らければ――只私はあなたや二人の子供の命を短くしたものが、所詮は生活苦だつた事が口惜しい。私達の健康まで、どん底に苦しめて、最後に私の抱いたものは、三つの遺骨でございました」

彼女は、良人と最後の物語りをするような氣持になつて、佇み作ら考へつゞけた。

「私達の子供だけは、ほんとに生きさせませう。乞食になつても、賣笑婦になつても、自分の生きる道を行かせませう。左様なら、永い苦鬪と悲慘の、あなたと私の生活よ。左様なら靜かにお眠りなさい。」

バラ／＼と四方から土塊が投げ込まれた。近親知己のすゝり泣きが溢れた。

「理學博士笠原讓一之墓」

墨の匂ひのしたゝるような、新らしい墓標が、柔らかな土の上に押し立てられた。

雪がハラ／＼とかゝつた。

「お母ちやん。オチヨーチキは濟んだの？」

洪子は不意に鐵槌を下されたのを感じた。三つの遺骨を土に埋めた彼女のひしがれた力には、重すぎる鐵槌を。

（一九二九、五）

編輯室より

◇政局一向に展開せず、そろそろ梅雨期に入り鬱陶しいものが更にまた一つ殖えてくる。たまらない。

◇だが何といつても新緑の世界は我々を暗示し、そして緊張せしめる。堀切君の東京市長は氣持ちのいいものであるが、義一君もいつそのこと森恪でも拓殖省に据えて見たら五月らしい氣分も湧るといふもの。

◇日本大衆黨も脈背がぜひ必要とあらば元氣のいい、胃膏のない、三十代、四十代の新鋭を持つて來た方が無産黨らしい。鬚のついた者はもうこのごろは流行らない。

◇さるにても民政黨の勢都主義は歯がゆきかぎりだ。何故に國民の中に熱意を以つて聽へて行かないのか、自己の具體的經綸を提げて戰つて行かないのか、揚足取りといたづらな批評では今時の大衆はすこしも動かない。

◇金解禁もどうやらお流れとなるらしいとの巷評とりどり。解禁を斷行する勇氣がないのか、もしくは解禁後の難局を切りぬける自信と準備が田中内閣にないのか。やるならスパリとやつてのくべしだ。

◇「改造」七月號は「山岳特輯」とする。しかし總ての方面に於て新鮮の氣に溢つる雜誌としたい。論文欄に於て、創作欄に於ても充實せる力作の發表が出來ることと思ふ。そして政界、經濟界の動きをモット突き込んで鋭利に批判する。

◇「文藝評論」の懸賞應募は先きほど締切りました。今後は斷じて受付けません。

◇昭和四年四月號に發表すべき第三回の懸賞創作を募集します。第二回の應募の條件と同じくで十一月卅日を締切りとします。委細は來月號の本誌に詳記します。

◇改造五月號懸賞詩入選の工藤正一君は自分の詩が本誌に登載されることを喜びつつ盲腸炎で四月廿八日青森病院で死んだ。まだ廿三歳の師範出の青年であつたが。

◇近ごろ「改造」の名を騙り原稿を依頼したり金の無心を吹きかけたりするものがあるそうだ。どうか不審なものがありましたら一應本社に照會して下さることをお願します。

◇久しく準備していた「浮世繪全集」も近く出版したい。また「コナンドイル全集」「若山牧水全集」「日本探偵小説全集」「小酒井不木全集」「日本地理大系」も出版される。日本探偵小説全集」の第一回配本は「谷崎潤一郎集」「大下宇陀兒集」の二冊です。

改造定價

冊數	定價	郵稅
壹冊	五拾錢	參錢
半ヶ年	參圓	郵稅不要
壹ヶ年	六圓	郵稅不要

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す
▲增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す
▲外國よりの御註文は郵稅實費を申受く
▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は一割增の事
▲御拂込は振替によらるゝを最も便利とす

昭和四年五月十八日印刷納本
昭和四年六月一日發行

定價五拾錢（郵稅三錢）

編輯兼發行人 東京市芝區愛宕下町四ノ六 山本三生
印刷人 東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二
印刷所 秀英舍

發行所 東京芝區愛宕下町四ノ六 改造社
振替東京 八四〇二
電話芝(43) 一二二一 一二二三 一二二二 一二二四

現代日本文學全集（第二篇）

第卅一回配本
六月上旬開始

坪内逍遙集

文豪の代表的傑作選集出づ！



（脚本）
役の行者
桐一葉
名殘の星月夜

（飜譯脚本）
ハムレット
ヹニスの商人

（舞踊脚本）
新曲浦島
お夏狂亂

（小説）
諷誡京童
細君
一讀三嘆當世書生氣質
（その他）

明治、大正、昭和の文壇に獨歩最高の地位を占むる巨匠が全文藝的作品の結晶を見よ。

發兌
東京芝區愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二

改造文庫

布裝上製　百頁十錢　（裝幀恒川義雄）

第一部
第十篇　社會主義の發展　エンゲルス著　堺利彦譯（1）
第十一篇　マルキシズム認識論　デイツゲン著　石川準十郎譯（1）
第十二篇　辯證法的唯物觀　デイツゲン著　山川均譯（2）
第十三篇　哲學の實果　デイツゲン著　山川均譯（1）
第十四篇　神と國家　バクーニン著　本莊可宗譯（1）
第十五篇　婦人論　ベーベル著　山川菊榮譯（6）
第十八篇　エミール（上卷）　ルーソウ著　内山賢次譯（4）
第十九篇　エミール（下卷）　ルーソウ著　内山賢次譯（4）
第二十篇　國家論　オッペンハイマー著　廣島定吉譯（2）
第二十一篇　金融資本論　猪俣津南雄著（4）
第二十二篇　日本開化小史　田口卯吉著（1）
第二十三篇　日本經濟論　田口卯吉著（1）
第二十四篇　日本經濟學說の要領　經濟的帝國論　瀧本誠一著（2）
第二十五篇　日本商業史　横井時冬著（4）
第二十六篇　日本工業史　横井時冬著（4）
第二十七篇　經濟學の實際知識　高橋龜吉著（2）
第二十八篇　リッケルト論文集　リッケルト著（2）
第三十篇　女工哀史　細井和喜藏著（4）
第三十二篇　社會進化と婦人の地位　ラッパポート著　山川菊榮譯（2）
第三十六篇　幸德秋水集　幸德秋水著（2）
第三十七篇　中江兆民集　中江兆民著（2）
第三十八篇　財產起原論　レヴインスキー著　貴島克己著（1）
第三十九篇　組織論　レーニン著　鈴木厚譯（3）

第二部
第十三篇　俳諧七部集　萩原蘿月校（3）
第十四篇　蕪村七部集　萩原蘿月校訂（2）
第十六篇　神皇正統記　宮地直一校註（3）
第十七篇　奥の細道　芭蕉翁文集　萩原蘿月校訂（3）
第三十五篇　北村透谷選集　島崎藤村編（1）
第三十六篇　樋口一葉選集　島崎藤村編（1）
第三十七篇　平凡　二葉亭主人著（1）
第四十篇　坊つちやん　夏目漱石著（2）
第四十一篇　草枕　夏目漱石著（2）
第四十二篇　それから　夏目漱石著（3）
第四十三篇　一握の砂　悲しき玩具　石川啄木著（2）
第四十四篇　我等の一團と彼　雲は天才である　石川啄木著（1）
第四十五篇　山陰土產その他　島崎藤村著（2）
第四十六篇　作曲白秋民謠集　北原白秋著（2）
第四十七篇　獄中記　オスカア・ワイルド著　神近市子著（2）
第四十八篇　厭世家の誕生日　佐藤春夫著（1）
第四十九篇　日輪　横光利一著（1）
第五十篇　勞働者の居ない船　葉山嘉樹著（1）
第五十一篇　海に生くる人々　葉山嘉樹著（2）
第五十二篇　小公子　バアネット著　若松賤子譯（2）
第五十三篇　ホワイトファング　ジャック・ロンドン著　堺利彦譯（3）
第五十七篇　自選歌集　川のほとり　小泉千樫著（2）
第五十八篇　自選歌集　松の芽　中村憲吉著（2）
第五十九篇　自選歌集　海山のあひだ　釋迢空著（4）
第六十篇　自選歌集　立春　木下利玄著（2）
第六十二篇　自選歌集　人間往來　與謝野晶子著（2）
第六十三篇　自選歌集　槻の木　窪田空穂著（2）
第六十四篇　自選歌集　野原の郭公　若山牧水著（2）
第六十六篇　自選歌集　空を仰ぐ　土岐善麿著（2）

以下續刊

數字は定價を示す。1は拾錢を2は貳拾錢を3は參拾錢を以下之に倣ふ。
送料1は二錢、2四錢、3六錢、4八錢、6十二錢。

發行所　東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

『小酒井不木全集』豫約募集

特徴　日本最近の犯罪

第一巻　殺人論及毒と毒殺

殺人論

序論　殺人の動機　死に就ての考察　殺人の方法　共謀殺人　屍體の現象　屍體の隱匿　犯跡の隱蔽　**探偵總論**　個人鑑別法の一（屍體の身許鑑定）　個人鑑別法の二（犯人の身許鑑定）　死因の鑑定　自殺他殺の鑑別　血痕及び毛髪の鑑定　心理的探偵法

毒と毒殺

「歴史的考察」　毒と迷信　毒と犯罪
「科學的考察」　毒と其作用　毒殺の鑑定
「文學的考察」　文學に現れたる毒　毒と探偵小說　其他

近代犯罪研究

性的犯罪　變態心理と犯罪　自白の心理　近代犯罪の

第二巻　犯罪文學研究及近代犯罪事實談

犯罪文學研究

日本の犯罪文學　櫻陰、鎌倉、藤陰の三比事　探偵小說としての三比事　詐欺騙盜を取扱つた文學（晝夜用心記と世間用心記）　暗號解讀　江戸時代の怪異小說　近松巢林とシエクスピア　「マクベス」の研究　ポオの「マリー・ロオジエー事件」の研究　其他

近代犯罪事實談

プランセス街の祕密　髑髏の身許鑑定　名探偵ブルックスの功名　指紋による犯人の鑑定　足跡の鑑定　血痕及毛髪の鑑定　硫性投注　ペルとランドルー　不具と犯罪　犯罪者のジエーキール・ハイド性　主權者殺

し　他十數篇

第三卷　短篇探偵小說集

呪はれの家　通夜の人々　按摩　虚實の證據　遺傳　手術　痴人の復讐　暴風雨の夜　難題　戀愛曲線　肉腫　三つの痣　安死術　祕密の相似　直接證據　桐の花　死の接吻　印象　卒倒　愚人の毒　メヂユーサの首　ある自殺者の手記　二重人格者　赦罪　死屍蠟燭　見得ぬ顔　二人の思想家　闘爭　鼻に基く殺人

ドウーゼ原作

スミルノ博士の日記（飜譯長篇）

第四卷　長篇探偵小說集

疑問の黑枠（最長篇）

大雷雨夜の殺人（長篇）

戀魔怪曲（長篇）

紅色ダイヤ

暗夜の格闘

髭の謎

頭蓋骨の祕密（以上中篇）

チエスタトン原作

孔雀の樹（飜譯長篇）

第五卷　生命神祕論及闘病術

生命神祕論

第一章序論　第二章生命　第三章宇宙の觀察　第四章生物界の觀察　第五章人體の觀察　第六章性と愛　第七章生殖と遺傳　第八章生と死　第九章結論

闘病術

闘病術提要　肺結核とはどんなものか　病氣の惡化する人の心　治癒する人の心　性慾の問題　食物　藥劑に對する態度　醫師に對する態度　靈妙なる自然治癒力　健康の創造　病に打克つた人々　私の病歴

他十七章

闘病雜感

第六卷　學者氣質及不木軒隨筆

學者氣質

觀察力　想像力　探偵小說　實驗　讀書　先入見と誤

謬　忍耐力　偶然と幸運　休養と娯樂　病苦　貧苦
迫害　魔法　豫言　不可思議　名譽　金　道義　常識
科學と文藝

牛涎漫語

物眞似人眞似　古今物忘れ　水中の屁こき學者　知識
遊戯　心靈界の奇現象　傳說と科學　不老不死靈藥ロ
ーマンス　他八篇

西洋醫談

ギリシア古代の寺院參籠　ヒツポクラテスの誓詞　錬
金術　「ペスト」小史　デ・フオーの「倫敦疫病日誌」
外科手術の今昔　英國の醫風　King's Evil　妖婆の鍋
其他

不木軒隨筆

知識と誤謬　音樂と治療　夏四題(天才論)　「怒」　姙
婦の精神感動と胎兒　死の刹那の感じ　くさめ　血液
の不思議　其他

第七卷　醫談女談

趣味の醫學

子を求める術　怪物の出產　催情藥　隆鼻造鼻術　指
切り　髮切り　毛髮フエチシズム　木乃伊と古代醫學

酒・女・煙草　理想的美人の條件　男女童貞鑑別法　他
十三篇

女性の異常心理

死の悲哀と性的興奮　美貌を欲する心　性的早熟　生
むを欲せぬ心　他六篇

日常生活と變態心理

夢と迷信　夢はどうして起るか　夢の正體　他四篇

彗星放語

科學文明の弱點　學者と空想　傳記の興味　幸運の爲
に　虛僞と眞實　他三篇

妻及び母の科學

第一章性の科學　第二章妻の生理及び心理　第三章母
の生理及び衛生　第四章產殖の科學　第五章性病とそ
の害毒　第六章遺傳の科學

第八卷　病間錄

喀血　モルヒネ　からす　梟と蝙蝠　體內音　讀書
雨　檢溫器　强心劑　花　猫　其他　他數十篇

新道話　俳句　日記　書簡　自傳　傳記

略年譜――著作年表

「日本探偵小說全集」豫約募集

第一篇　森下雨村集

怪盜　狂笛　綠の殺人

第二篇　江戸川亂步集

惡夢　恐ろしき錯誤　二廢人　火星の運河
お勢登場　毒草　雙生兒　木馬は廻る　人
でなしの戀　D坂の殺人事件　映畫の恐怖
一人二役　屋根裏の散步者　接吻

第三篇　小酒井不木集

抱きつく瀕死者　人工心臟　肉腫　無名の
脅迫狀　謎の咬傷　劇場の事變　指紋研究
家　いたづら蛩　印象　猫と村正　妲妃の
殺人　刹那の錯誤　眠り藥　癡人の復讐
姙術魔　邂逅　二十年後　得意な容疑者
懷疑狂時代　白癡の智慧　紫外線

第四篇　甲賀三郎集

從弟の死　氣早の惣太　拾つた和銅開珍
原稿料の袋　電話をかける女　戀を拾つた
話　運命の罠　黑衣を纏ふ人　女を搜せ
夜光珠を繞る女怪　金魚の頭

第五篇　谷崎潤一郎集

祕密　柳湯の事件　或る少年の怯れ　人面
疽　金と銀　呪はれたる戲曲　ハッサン・カ
ンの妖術　友田と松永の話

て云つた。

「難物ですなあ」

「……」主治醫は弱つた顏をした。速度のはやい病兒の呼吸が、スウ、スウときこえる。

T博士はポケツトから煙草を出して火をつけた。謙一は、ハツとしてTの顏を見た。悠然とふかす煙が、のぼつたところで、謙一は立つてたてつけの惡い障子を四五寸開けた

二三言、主治醫に注意めいた事と、謙一夫婦に「お大切に」といふ挨拶を殘して、T博士の姿は威勢のいゝ車と共に街に走つて出た。

「そら御覽。英子のいふ「いゝ醫者」のしてくれた事は何だと思ふ」

英子はかすかに頷いた。

だがもう一度「いゝ醫者」のK博士が淑女の友主筆の敬子女史の心配で一郞を見舞つた。Kは

「營養のいゝお子さんだな」と云ひ乍ら診察をして、

「今夜が一番大切ですよ。それさへ通りぬけたら」と云つて歸つた。

其晚は通り越したけれど、もう次の晚までは越せなかつた。

「とう〳〵臨終に來ました」

激しい苦惱をみまもつて居た主治醫が云つた。

「もう駄目なら、一度抱いてやり度うございます」

英子は度々兩腕をのばした。

「まあ、しづかに——却つてお子さんが苦しいです」

臨終にかけつけたのは英子の母のお久だつた。母と云つても英子の家に時々遊ひに來る公の「お母樣」とは別の人だつた。

お久は英子の結婚の時に、一寸したひがみから謙一に面白くない態度をとり、意地から英子の家に出入しないで居たのが、一郞の病氣が重いときいて案じて最近訪ねて來て、用があるなら手傳つてゆかうと云つた。

「今は手が足りてるからいゝの」英子はお久が眼の前に居るのが苦痛だつた。

「でもね。一郞の着物がないから——萬一の時に着替へさせるのが無いの。これを縫つて來て頂戴な——裏に白をつけて、なるべく急いで縫つて頂戴」さう云つて歸らせた。

お久は着物が仕立上ると、いそいでやつて來た。冷くなつた一郞の身體に新らしいお召の袷が着せられた

「これを縫ひ乍ら、一針縫つては神に祈り、二針ぬつては佛にいのつて居たのに」

お久は人目もかまはずに泣いた。

「あなたはもう疲れてるから早くおやすみなさい。今晚私がお線香を

絶やさずに、一郎ちやんのお守をして居るから」

生前二三度英子がお久の家に遊びに連れて行つただけだつたが、燒場にも骨揚にも、お久は英子の代りに行つた。いつとなく謙一とお久の會話が滑かになつた。

初七日の手傳ひをすませて、歸る時にお久はしんみりして英子に話しかけて居た。

「ほんとにあとを大切にね。あなたが身體を惡くしたら大變だから」

「え、諦めてるから――」

「でも一郎ちやんは短い生命だつたけど、大きな教訓を遺していつてくれたんだものね。一郎ちやんの力は私達忘れてならない事だからね」

「…………」

英子は唇を噛んだ。大きな教訓――何が教訓だ。力だ。義理で結ばれた人間より、肉親の眞實の愛が強いなんて、わかり切つたことを、愛兒の死で證明して貰はなくても――それよりも、氣輕く出入の出來なかつた、娘の家に、大手を振つて遊びに來られるきつかけを、あの子の死で作つてくれなくても――お久はそれで諦めをつけるなら、勝手につけるがいゝ。

一郎の生命は、――しみつたれた安月給に戀々として居た英子の職業が奪つたのだ。英子が職業に就いて居なかつたら、もつと暢んびり病兒の看病も出來たのだ。風の吹く日に子守の背中で、「ねむいよ」とうと〱して居た一郎の顏が、永久の悲鳴のように、ポカリと英子の眼に映つて來る。一郎はまだ苦しいといふ言葉を覺えて居なかつたのだ。

だが、誰が英子に安月給を取らせなければならないようにしたのか。謙一の業績は日に日に積み重ねられてゆくけれど、彼は依然として大學の一助手で、某省のはした囑托であつた。其内、助教授にするといふ、謙一の先輩近藤博士の誓言は、博士の白髮と共に、古色を帶びてゆく感じだつた。

二

不幸な事に、一郎の死んだ當時、英子の胎内に、新らしい生命が育つて居た。

「悲しんではならない。歎くと胎兒に影響する」

それが英子の自分に云つて聞かせる理論だつた。「理論」はいつも「實際」を征服してはくれない。彼女は一月餘り、食物がよく喉を通らなくて、毎日床の中で、蒲團を頭からかぶつて泣いて居た。夕方謙一の歸る時刻が近づくと、床を片附けて何げない顏をして居る。いつも英

子の顏は蒼かつた。

或る日、彼女は、自分よりも血色の惡い良人を出迎へた。

「どうかなすつて？」

「ア、追々に話すよ」

彼は容易に話さなかつた。が漸く切り出した。

「今日コールに逢つたらね」

コールと云ふのは近藤博士のあだ名だつた。近藤の尊敬して居る泰西の博物學者の名を、彼が舊式に發音してコールと呼ぶのを彼自身の象徴として簡便に使ふ符號である。

「僕に××試驗所の技師になれつて云ふんだ」

「で、それはいけないの？」

「莫迦、情ない奴だなあ。僕が役人になつて、毎日めくら印を押して一生暮せる人間だと思つてくれるのかい」

「そんな事思やしないけど――今だつて××試驗所に行つてらつしやるんですもの」

「あつちが本官になれば、大學の方の緣は切れる。尤も講義は今迄通りやるけれど、永久に講師で直接關係のない事になる」

「名目なんぞ、どうでもいゝぢやないの？」

「さうぢやないんだ。大學を離れる事は、僕の研究の致命傷だ。あらゆる研究の便宜はなくなつてしまふのだ。研究室を持たないで何が出來るものか。財產のないものにとつて、自分で莫大な費用を使へない限り、大學の實驗室以外で業績は擧げられないんだよ。それを今更役所なんかに――役人に許される範圍の研究なんて、高が知れたもんだ」

英子は默つて聽手になつた。

「技師になれば俸給も、今より少し割がよくなると云ひやがつた。計算して見たらたつた十圓だ。よくも恥知らずにそんな事が云へると思つた」

「結局承知なすつたの？」

「厭だと云へば兩方とも辭職するより他はない。そしたら明日から妻子を路頭に迷はせるんだから……………」

「……………」

「皆コールの計畫的な事なんだ。わかつてるんだ。よつぽど辭表をコールの鼻面にたゝきつけてやらうかと思つた――自分獨りならどんな事でも出來るけど」

英子はやはり默つて居た。

「さうなれば春の休も暑中休暇もなくなる。毎日厭な化石のやうな敎授連を對手にさせられて、せめて自分の慰められて居た春の寫生旅

行か、もう出來ない――女子がも少し收入が多くなつてくれないかなあ」

「駄目よ。そんなこと。ほんとはもう、淑女の友の方だつて、斷然よさうと思つたんだけど」

「何故？　一郎が居なくなつたんだもの。よす事は無いぢやないか」

一郎が居なくなつたにつけて、行き度くないのだとは、謙一には話せなかつた。

「早く君が、小說で原稿料でもはいるようになつて吳れると可い、と思つたりするよ」

「そんな事。まだいつの事だか――夢みたいな事は考へない方がいゝのよ」

「冗談だよ。小說で金を取つて吳れなくても可いから、うんと小說が上手になつてほしいな。家の中なんか、うつちやらかして可いから、小說を勉强してくれないか」

「途中で書くのをやめて居たから駄目ね」

「そんな事をきめる事は無い」

謙一は一本のビールに調子づいて居た。

「まるで話にもならない、醜い暗闘で、日本の學界は出來上つて居るんだ。今までに、どれだけ有爲の若い人が、犧牲になつて居るかわからない。みんな老獪な教授達が、彼等の地位を自ら護るために、あらゆる術策をめぐらして居るのだ。それでは神聖な學術の研究なんぞ、いつになつたつて出來やしない。僕は義憤を感じる。洗ひざらひ書いてやり度い、でもそれは許されない事だ。小說なら可いんだらう。さういふ現象を取扱つた小說なら、何を書いたつて許される筈だ。僕が材料を話すから、女子書いておくれ。書けるだけの腕前に是非なつてくれよ」

「だつて、そんな事――難しいわ。とても私には難しい事よ」

「さうかなあ――なら可いよ。いまに辭職してから、僕がすつかり事實で素つぱぬくから――その方が小說よりまはりくどくないや」

生活の爲めには、彼の云ふ「神聖な學術の研究」も、遂に青年の夢想境以上の價値を、實際に齎らさなかつた。

彼は此夏「××試驗所技師に任ず」「高等官七等に叙す」二枚の堅い紙を受取つて、机の抽出にほうり込んだ。

さうして彼は每日、滿員電車の乘客に、振り落されさうにつらまつて、滿々たる不平を每日往復した。

間もなく生れた子は男の兒だつた。

「一郎ちやんの代りが出來てほんとによかつたわね」

親戚知己はさう祝つた。投げやりに育てられて逝つてしまつた一郎

の代りに、次男清次は大切にされた。英子が職業を思ひ切りよく捨てることも、子供の愛のために謙一からやつと肯定された。

それほどにして、兩親の全力を盡した子は、生後半年程經つと不思議な症狀を現はした。

一日に一回兩手を頭に近づけて痙攣のような發作をするとか、習慣的にやまなかつた。醫者から腦水腫らしいと診斷されて、涼しい山間に轉地をすゝめられたのは、謙一が夏期の出張に遠い旅に出た後だつた。

英子は長女の悦子と子守を連れて、狂人のなほると傳へられて居る高尾山の麓の宿屋に移つた。

狂人の收容されて居る小屋には、その宿屋から食事を運ぶ位の距離しかなかつた。英子たちの毎日見聞するものは、狂人と其周圍の人許りだつた。

「でも奧樣。」宿の女中は自慢して話す。

「こゝの瀧の御利益は大したものでございます。昨日もお山を降りた女の方――奧樣御覽になりませんでしたか。うちのお上さんと話してゆきましたの。八年もお惡かつたのがすつかり癒つてうちに歸りましたよ――でもとても癒らない方はお氣の毒でね。今店で晝寢をしてる方は、これからお山に行くんださうですが、七人の子供さんが七人共亡つて、それを苦にしてお上さんが病氣で死んで、あのお爺さん、とうく毎日默つてふさぎ込んでる氣違ひになつたんださうですよ」

どんな話も英子には、胸にこたへて痛かつた。

秋になつて山を降りた。其年が暮れ、三つの春を迎へても清次は立てない。口も利かない。夜中になるとどこかに苦痛があるらしく號泣して止まなかつた。「英子さんも大變だね」親類の人はかげ口をした。

「清次さんは大きくなつたらどこかの療養所にいれるといゝ」

英子は身重の身體で、夜中度ゝ起きて抱いて居ると、二階にいつも獨りで眠つて居る謙一が、あまりの號泣のしかたに堪へかねて、階段の上から

「どうした」と聲をかける。「え、もうぢき」

英子は自分も泣き出しさうになる。

「罰だ。罰だ。」謙一は彼自身のうめき聲を發しる。

「自然が我々の性慾に課した天罰なんだ。皆何もしらずに性慾のとりこになつて、あとからこんな罰に遭ふんだ」

彼は終夜眠れないで神經衰弱になつて居る。

英子は獨りで「イヽエ」とふみとゞまり度かつた。なほ云へば「あなたには性慾の罰かもしれないけれど、私は何の罰を受けるのです」と云ひ度かつた。

「頭を使ふから、女から性慾的な表現をされる事だけは、死ぬより厭

だ。それだけはしないと約束してくれ」

それが結婚の初めに謙一から云ひ渡された事だつた。英子は何の事だか譯がわからずに承諾した。笑ふな、と云はれた者は、可笑しくないようにするのが賢明なやり口だ。可笑しくなつたら笑はずには居られまい――英子は笑つてならないものが、可笑しくならない修養を積んだ。其くせ、笑ふといふのは口をゆがめて、聲を出す事だ、と敎へられた。敎へられた「笑ひ」に何の可笑しさが湧かう。彼女は謙一と一緒に性慾享樂の天罰を受けるには、死ぬまで上告する權利があつた。

今は英子には何も他の望みはない。只一度で可いから夜の十二時から朝の五時頃まで、通して眠つて見度い慾望だけだつた。

此簡單な願ひは、淸次が生きて居る限り、彼女には到底許されない、大それた望みだつた。誰が母以外に、此苦しみを受けてやるものがあらう。父でさへ、うらみを「自然」に歸する他には、手の下しようもないのである。地獄のような夜が續いた。

櫻が盛りになつて、滿都の人が花に浮れて居る時分だつた。其頃やうやく歩行が出來るようになつた四歳の淸次は、部屋の中で前のめりして轉んだ。打つたのは前額で、ひどい怪我だつた。

手當をして怪我はなほつたが、再び起てなかつた。食物を口の傍に持つて行つても決して口を開かなかつた。

「マン、マンマ」

それが四年の間に發音した彼の凡ての言葉だつた。ママは食物とも母とも通じる。それでよかつた。淸次は母と食物とに終始して、不幸な、然し最幸福な一生を終つた。

英子の希望で亡兒を解剖に附する事にした。亡兒の苦痛の原因を知つて見たいといふのは、傍から白痴だの低能だのといはれた口惜しさもあつた。

大學の病理敎室の一室で、英子は我子の解剖を待つて居た。彼女は壁にかゝつて居る敎授誰々、助敎授誰々といふ名を無意識に讀んで居た。壁にかけた肖像を見た。

彼女の五體に、變な響が傳はつて來る。鋸でゴシゴシと骨をひく音だ。ほとばしる鮮血が彼女の眼の前に流れる。メスの光り、血なまぐさいにほひ。

彼女の幻想から堪へられなくなつて、卓上にうつぶした時、

「大變お待たせしました」

と執刀のN敎授が室にはいつて來た。

「大變時間をとりました。脊椎まで解剖したもので――貴重な材料です。腦が硬化したんです。書物では見て居たけれど、實際には初めて見ました」

N教授はこまかく報告をした後、

「清次君の大腦廻轉は非常に優秀なものです。天才の腦です。あゝいふ方が出來たのは、其血族の強みです。つまり非常に天才の腦を持つて居られたのにそれが順に發育しないで、硬化して行つたんですね、だから頭痛がひどかつたに違ひない、夜泣はそのためです」

英子は歸りに案内をされて、解剖室を覗いた。ガランとした廣い室には縫合を終つた淸次の屍體が手術臺の上に乘せてあつた。

「これが硬化した腦です。」

英子はピンセットでさわつて見た。カチカチとした手ごたへがあつた。

「こゝは柔いでせう、ところぐ\硬くなつて――こゝは思考を司る處、この邊は下肢の運動を司るところです。心臟や肺臟も見せませうか」

血なまぐさくて英子はハンケチを顔にあてた。

「もう澤山でございます」

遺骨は長男一郎の墓を掘つて、一緒に埋めた。

淸次が持つて遊んだ陶製玩具の金魚とねぢれて形がかはつて殘つた牛乳の硝子瓶と――それが彼の屍體を燒いて遺つた骨片と一緒に、灰の中から拾ひ出されて小さな箱に入れられて、土の中に埋つた。

櫻が散つてまた青葉になつた。

英子は時々あの日N教授との對話を、牛が草をかむように、吐き出してはこなして見る。

「あの兒が胎内に居る時、長男を亡しまして、それから一ヶ月あまり私は何も食べられない狀態でございましたの。よく發達しなかつたと不思議な位でしたが、あんな事で胎兒に故障が出來たのではないでせうか。淸次は生れる時豫定より四十日も遲く生れて、おくれた程の發育をして居ませんでした」

「さういふ事もないとは云へませんが、――然しさう簡單には云へますまい。先天的に我々の知り得ない事が色々あるのですから」

それは英子をなぐさめるための言葉ではなかつたらうか。N教授がかりに、全く先天的のものだと斷定しても――と英子はそこで、はつきり彼女の結論をつかんだ。

「私はさうは信じない。一郎さへ死ななかつたら、淸次は普通に生れて來たに相違ない」

三

二年後。

英子は前年の大患の後、まだ元の健康體になつては居ない。謙一は、

妻の病氣で心身共に苦勞をした。從つて人生に對する考へ方まで、一變して居る。

「英子、今やつて居る仕事が片附いたら、二三日どこかに靜養に出かけようか。子供等を連れて――長岡温泉あたりが靜かでいゝな」

「どこでも可いわ。久しく汽車に乘つた事も無いから、それだけでも愉快ですもの」

「永い間、うちは病人があり過ぎたね。去年の英子の大病だつて、全く過勞の結果だつたね。僕もつくぐ其事がわかつた。あんまりあせつて、物事をするのはよくないんだね」

「さう云つて下さるやうになつて、私もどんなに安心だか――」

「今迄むきになつて、コールや其一派の惡らつを憤慨して居たけれど僕も齡を取つたと見えて、あんな奴を相手にする氣もなくなつた」

「憤慨したつて、しようがない話なんですもの」

「僕の云ふ意味は――徒に吾々を苦しめる學界には見切りをつけて、廢めてしまはうといふのさ」

「やめて？……」

「と云ふと君はすぐ驚いて、さう詰問的な顏をする――やり度い事はいくらでも、際限がないけれど、ほんとはこれからが、僕のほんとうの研究なんだけれど――そんな事に執着しまいと思ふんだ。ろくに研究の便宜の得られない役所になんかこびりついて居ても、凡夫の難しさ、不愉快な事だらけでやり切れないから、廢めるに限る」

「やめて如何なさるの？」

「まあ」謙一は寂しい苦笑を、頰一ぱいに漂はせた。

「今直ぐといふ譯ではないけどね――何とか方針が立つたら、方面違ひの仕事でも何でも入れて貰ふ。但し、其前に僕は、十何年間胸に疊み込んだ、血を吐くやうな思ひを、洗ひざらひ吐き出して見せる」

「さう？――M大佐の事御存じ？」

「此間N新聞に書いて、筆禍を買つた人だらう」

「えゝ、あゝして首になるのも莫迦らしいわね」

「莫迦らしいと思ふかい」

二人の間には、各異つた沈默が流れる。

「恩給はいつでしたつけ。今年の秋ね」

「恩給？」

謙一は意外だといふ表情を誇張した。

「恩給なんぞあてにしてるのか。情ない女だなあ――恩給なんて鼻くそ位のもの要らないぢやないか」

「さうかしら――でも折角、もうぢき貰へるまでになつて――誰にもおじぎしないで、勞力なしに貰へるお金を」

「ところが勞力の有り過ぎた結果の淡命なんぞ、貰つて腹が立つばかりで、有り難くも何ともない」
「大きくお出になつたわね。活計向には些細な感情は禁物よ。洗ひざらひも結構だけど、家族の事も考へて頂戴、いつか倉田さんの事、あなたがお話しになつたわね」
「倉田が何なのだ」
「倉田さんでせう。コールの冷酷に憤慨して斷然辭表をたゝきつけたつて人。あの日は倉田さん、それやあ興奮して、歸りにうちに寄つて私に話しましたわ。『近藤さんは蒼い顔をして、ブル／＼つて顫へたんですよ。奥さん』つて身振りまでして見せたのよ。辭表をたゝきつけた時は、痛快だつたに違ひないのよ。生活を棒に振ればどんな痛快な藝當だつて出來ますわ。其代り痛快の代價は大きいわ」
「……………」
「あれから倉田さん、樺太に行つて暫くは氣持のいゝ生活が出來たかも知れないけれど、寒い處で病身の奥さんは亡つてしまふ、倉田さんも胸の方が惡くなつて、やつぱり東京に舞ひ戻りでせう――お母さんのない不幸な二人の子を、此さき倉田さんが育てゝゆかなければならないのよ。それでコールの方はどうかつてば、あの時ほんの一分間、――三十秒かも、知れないわ。其時間顔面を蒼くしただけで、蚊に食はれたほどの影響もなく、至極健在で、『倉田君、子供は大きくなつたですか』よ。倉田さんだつてやり切れないでせうよ」
「君のいふ理屈は通つてるよ」謙一は冷靜に、「成程コールはどんな事にもビクともしないさ。もと／＼冷血なんだから――それで構はない。僕は、僕の云ひ度い事を云はなければ、腹の蟲がおさまらない」
「どうぞ御自由に――妻子のある事をお忘れにならない程度で」
「勿論」謙一は悲痛な面をゆがめた。
「僕の生命にして居た「研究」さへ捨てる氣になれば、生きてゆく位の事はどうにでもなる。たとへば食へなくなつたら、寄席の藝人になつて、高座で人の面白がる話を聴かせて居たつていゝだらうぢやないか」
「ホヽヽヽッあなたが？　落語家？」
「無論弟子入りをしてね。小勝のところにでも行つて――學者の落語家なんて、一寸毛色が變つてゝ、使ひ手がないとも限らない」
「本氣でそんな事、思つてらつしやるの？」
「眞面目な話だよ――大學教授の亡者共を相手にして居るより、八さん熊公の方が、どんなに愉快だか……」
「さう／＼。あなたは、あの低能な區役所の溝さらひ人夫が御親友だ

つたわね」

「あの男だつて偽學者より、よつぽど偉いよ」

「然し」謙一は話を替へた。

「君が原稿料をとるやうになつたのは愉快だ。大の男のボーナスより多い金をとる女房を、僕はとも角尊敬する」

「冷かさないで下さい」

「冷かしてやしない。物質の助けをしてくれる妻は、本當の意味で男のよき内助者だ。此上も少し僕をわかつてくれたら申分はない」

英子は去年の大患後、家庭内の勞働をやめて、机に向ふ時間が多くなつた。ある地方新聞の連載物の稿料が、新年にまとまつてはいつた時だつた。

「私は只もつと暮しがらくになり度いの。そしてもつと廣い家に越し度い」

「家なんかどうでも可いよ」

「家さへもつと便利に住めたら、私ももつと仕事が出來ます。家のものも風邪なんかひかないし」

「贅澤だよ」

「贅澤で云つてるんぢやありません」

「そんな事より少しでも貯蓄をする事だ――萬一の時に自分たちをたすけてくれるものは――」

「わかつてます」

「どうだか――君はどん底の貧乏の味を知らないからいけなんだ」

「貧乏の味なら、いやになる程味つてます」

「ぢやあ聞くがね、今日食べものがなくて、如何することも出來ない餓じい目に遭つた事があるかい――無いだらう。僕なんか親が一時無收入の狀態が續いた時、丁度育つ盛りの少年時代に、幾日そんな目に遭つたか知れない。毎日焼芋でやうやつと腹をこさへたよ。其焼芋も買へなくなると、默つて空腹を抱えて居るんだ」

「……まあ」

「小學校にゆくのに、履いてゆく草履がない。仕方がないから休んで居た」

「…………」

「それが順にまた職について、やつと安心になつた時に、突然お父さんが上海で死んでしまつたんだ。僕は十七だつた。僕はアメリカに密航して、皿洗ひで勉強しようと思つた。既に逃げ出さうと決心したところに、叔父さんが學資を出して下さる事になつたもんだから、高等學校にはいつたんだが、あれが幸か不幸か、今になつてはわからない」

ふと謙一は襟を合せた。

「今夜は莫迦に寒いね。何だか背中がぞく〳〵する」

「薄着してらつしやるんぢや無い？　それとも風邪をおひきになつたのかしら。温かにしてもうおやすみになつたら」

英子は良人の身邊の心くばりをして、彼女と子供との寢室に退いた。

翌朝、謙一は起き上れなかつた。醫者は

「此頃また、惡性の感冒が流行してますから御用心なさらないといけません。」と云つた。

平野水、牛乳、食パン。

ほしいと云はれただけのものを盆にのせて運んで來た英子に突然彼は云つた。

「チフスになつたやうだよ」

「またあなたの大げさな御心配よ」

「いや、たしかにさうだ。汗が出ない。昨夜は一生懸命に發汗しようとした。が駄目なんだ。此脈を見て御覽。九度七分も熱があるのに、此少い脈を」

謙一の眼は座つて居た。英子はゾッとした。

「そんな事があるものですか、あなたの氣のせいよ。――でもそんな氣になるなら、河田さんを呼んで、診て頂きませうか」

「直ぐに、河田を呼んでおくれ」

內科の河田博士は、謙一の同期の親友だつた。

「オイ、いやに元氣がないぢやないか」

其夜すぐに來診した河田は、いきなり調子づけて病室に座つた。

「君は坊ちやんを二人亡くしてから、神經を起していかんよ。もつと元氣になり給へ」

「アヽ」

「まあ拜見するがね」

診察をし乍ら、河田の顏は曇つた。診察を終ると、彼は默つてゴシゴシ手を洗つた。

「チフスだらう」

待ち構へて謙一が訊いた。

「いゝや。まだ何とも云はれないがね。」

英子はハッとした。謙一は覺悟をして默つて居る。

「今度病氣がなほつたら」河田は陽氣に云つてのけた。「一つ氣らくに、大に靜養し給へ」

「長岡温泉に行く約束をしたんだが、とう〳〵……」

語尾がふるえて、消え入るやうにとぎれた。

「元氣を出し給へ。元氣を――郊外に家でも建てる氣はないか。吾々四五人で氣の利いたアパートもいゝね。」

「ハヽヽヽ」謙一は低く笑つた。其笑聲は英子を不覺な涙に誘つた。

翌日近藤博士が聞き傳へて、見舞に來た。

「や、奥さん。もう此處で失禮します」

近藤は玄關に立つた儘

「笠原君はどうですか」

「ハイ——何分熱が高うございますので……」

「去年は奥さんが大病をなすつて、今度は謙一君ですな。御夫婦お揃ひで仲が善いですな。アハヽヽ」

「もう病氣は澤山でございます」

「いや、お互にそれで御同情があつて、いゝかも知れませんよ。アハヽヽ」

近藤は英子が見せる不快の表情に氣がつかないらしかつた。氣がつかないのは丁度彼が其時縮緬の袱布から、御禮の包を出して居たから、だともいへる。

「これはほんの心許りのものです。何なりと謙一君に買つて上げて下さい」

英子は押問答をして、近藤の聲を謙一の耳に入れ度くなかつた。

「御叮嚀に」と輕く頭をさげて、さつさと受取つて彼を歸らせた。送くり出して謙一の枕許にそつと寝息をうかゞふと、眠つて居たと思つた謙一は、パチッと眼を開いた。

「今のは誰？」

「コール」

「何しに來た」

「お見舞ですつて、お金を持つて」

「いやに笑ふ奴だな」

二人共默つた。

數日後の朝である。××研究所附屬病院の一室で、謙一はやがて家から來る筈の英子を待つて居た。

「葛湯を一杯くれませんか」

看護婦は葛湯を作つてのませた。

「有り難う——英子はまだ來ませんか」

「もう、追つつけ、いらつしやる時分でございますよ」

病人は眼を閉ぢた。再び彼が眼を開いた時、英子は枕許ににつこりして立つて居た。

「今朝は御氣分がよささうね。葛湯を召し上つたつて、看護婦が喜んでましたよ」

「……」謙一は寂しい顏で妻を見て居た。

「いろ〳〵話があるから、さつきから待つて居たよ」
英子はドキッとした。
「もつと早く來ようと思つたんですけど、今夜歸らなくていゝように、あとの事をして來たもので」
「泊つてゆけるのかい」
「えゝ、もう子供達の風邪は大丈夫ですから」
寒いから病院に寢るのは英子の身體によくないし、子供達もかあいさうだと謙一が云ひはつて、毎晩彼女を歸らせた、が、もう今朝は英子の傍を離れて貰ひ度くないほどに、心持が迫つて居るらしかつた。
「今朝廻診の時に少しはいゝと云つてくれたが」
「…………」
「それも一時の氣休めらしい。殘念だけど、今度はもう癒る事は出來ないらしい」
「そんな事が——そんな事があつてたまるものですか——大丈夫。ほんとに大丈夫」
「昨夜から自分にも眼に立つて衰弱が感じられる。今朝は此通り蒲團が重くてたまらない。支へをしてるのだよ」
「……」病人の膝のあたりは高くさゝへがしてあつた。
「今夜は英子に泊つて貰ひ度かつたんだ」
「づつと泊つて居ますわ」
「いや、それもながい事ぢやないから——今朝はどうしても君が來る迄しつかりして居なければ、と思つて、今葛湯を無理に飲んだのだよ」
「…………」
「永い間、英子には苦勞をかけた。いろんな無理も云つた。何とか不足も云つたけれど、どうぞ許しておくれ。ほんとは隨分好きで……好きで愛して居たんだ」
英子は息がつまつた。良人の手をとつて云つた。
「有り難う」
ぢつと妻の顏を見て居る謙一の顏が、英子の網膜に涙でかすんで來た。
「ねえ、僕はほんとに君が好きだつたんだよ」
英子は再び良人の手をとつて、彼女の胸にあてた儘泣いた。
「私も」とは何故云へないのだらう。云へないのは苦しかつた。でも云ふのはそれよりも苦しい僞りだつた。同棲十年の間、良人はいつも信頼する異性だつた。戀しい——といふには距離があるようだつた。
「青い本箱の右の抽出に」謙一は苦しさうに、時々とぎれて物を云ふのである。
「金がはいつて居る。それを話して置き度かつたから」

「右の抽出ですね」英子は大きく頷き乍ら、乏しい中から、英子の知らない金まで用意しておいた良人を痛ましい眼で見た。
「子供達を頼むよ」
「大丈夫。それは、ほんとに御心配なく」
「それを信じて居る」謙一は嬉しさうにニッとした。
「もつとそれより、仰しやり度い事はないの?」
遺言めいた事を、ひき出す慘酷さを意識しながら、今の場合、英子はさう訊くより仕方がなかつた。
「……無いよ」
「何でも伺つて置きますわ」
「……もう何も無い」
「何も? さうでせうか。私は伺つて置き度い——仰しやり度い事を何も云はずに、いらつしやるなんて——私がもつと先になつてから、きつと、あなたの仰しやり度い事を云つて見せます」
「あゝ其事なら」寂しい微笑を力なく浮べて
「いゝよ。もうそんな事——今になつては恨みもない。不平も無い」
「だつて……」
「ほんとに何も心配して呉れなくても可いんだよ。丈夫にして。幸福に暮してお呉れ……」
英子は、それでも良人の表情から、何ものかを探りたさうにした。
「……只」
「只?」
「殘念なのは…コールの葬式を見ないで死ぬことだ——それより外にもう云ふ事はない。學問の研究だなんて、今になつて考へて見れば人間のして居る事に何程の價値があるものぢやないと知つた。あくせくするのは、少しでも優良な子孫を遺すつて事になるのだね」
英子は謙一の言外の意味を、胸の中に疊み込まうとした。
「こんな話をして、頭がなほ變になつて來た」
「よしませうね。取越苦勞よ。でもこうやつて伺つておいた方が、用心していゝのかもしれませんわね」
英子は笑ひにまぎらせようとした。
「さう〳〵」謙一はいくらか氣が輕くなつたように
「蜜柑が食べたくてたまらない——いよ〳〵駄目だとなつたら、思ひ切り蜜柑を食べさせておくれ」
其午後、病人の意識はもう混亂して來た。英子の氣懸りは、蜜柑だけに殘つた。
彼女は一切の終らないうちに、病人の最後の望みをかなへさせ度かつた。然し、さうして同時に死の宣告を與へるには忍びなかつた。

それももう時機の間題にまでせまつて來た。

主治醫M博士は、氣の毒さうに英子に告げた。

「御遺言でもあつたら今のうちにおきゝになつておいた方がよいと思ひます」

彼女はM博士に云つて、甘い蜜柑の一袋をむいた

「蜜柑召し上らない」

英子の聲がふるえた。謙一は嬉しさうに赤坊のように口を開いた。かはき切つた唇の中に、甘酸い蜜柑の汁が、溢れさうになつた瞬間。

「蜜柑だね」　念を押す聲が、意外に明瞭だつた。英子はギクッとした。

「…………」

「いゝのかい食べても」

(よかつた)英子は心を撫でた。彼にはまだ生きたい希望があるのだ。覺悟はしててもまだ、蜜柑が病氣にさはりはしないかといふ事を恐れて居る。

「え、大丈夫。Mさんがいゝつて仰しやいましたの」

謙一は頷いて、安心さうに味つた。

「もう一つ」

おいしさうに、汁をすゝつた。

食鹽注射、人工呼吸、あはたゞしい變化はそれから數時間後に起つた。見舞にかけつけて別室に避難して居た人たちが、順次に告別した。事後の一切の事務を多勢の友人に一任して、英子は家に歸つて暫く寢ることになつた。

「奧さん一寸」　念を押すように一人が呼びとめた。

「葬儀委員長は、近藤先生ですね。何と云つても永い間、笠原君が助手をして居られたのだから——」

英子は二分間許り默つて、靜かに答へた。

「今までの仕來りのおありになります通りに」

「通知狀は近藤先生と、御親戚はどなたを入れます」

「それに誰もお入れにならないように。榊三の名が一つあれば澤山ですから。」

友人が怪しむほどに、彼女は主張した。

××研究所長は、淸次の解剖に執刀したN博士だつた。謙一とは殆ど同期だつた。

「惜しい人を殺しました」　Nは所長の權限内での最善の便宜をはかつた。そして云つた。

「笠原君は當然教授になつて居る筈の人だ。大學の講師で一生を終ら

せたくなかつた。せめて今からでも教授にするように計らつておあげにならなければ——近藤さんが盡力なすつたらいゝんでせう。大丈夫でせう?」

勿論賛成者があつた。然し極めて常識的な斷案が下された

「教授會にかけなければ——今の場合それは間に合はない」

英子にしてみれば死後の名稱はどうでもよかつた。にも拘らず、煮え切らない人の態度は腹が立つた。

悔みに自宅に來た人達は同じようにくり返した。

「もう少しのところだつたんです。何しろ停年制はもうすぐ實施にならうといふのに——」

先輩教授の後釜をねらふのが謙一の意志ではなかつた。一緒に仕事をして居ながら、全然無理解で居られる事の苦痛と、寂寞とそれ許りでなく、事毎に壓迫される不愉快に堪へ切れなかつたのだ、と察して居た人は少數だつた。

「でも扶助料がおありになるでせう?」

女は女らしい事を、英子に同情して訊いた夫人の質問も多かつた。

「あと半年許り年限が足りないさうでございます」

答へる事とは離れて、彼女は、恩給までつとめてほしいと云つた時の、淺ましい彼女自身の姿を恥ぢた。

「そんな筈はありませんがね、えゝとあれは明治何年からでしたつけ」

「判任官の間は二年で一年と計算するんださうでございますから」英子は事務的に切上げる。

「すると一時扶助料でございますね」相手は倦さない。

「さあどうですか。其邊の事は存じませんの」

謙一の勞苦の結晶の僅かの金を、此際あてにする事は、彼の死骨をスープにして飲むのに等しかつた。

葬式の日は、朝から雪が降つた。

雪がチラ〳〵する中を、英子は、やゝ深い墓地の穴をみつめて立つて居た。

骨箱が穴の中に落ち込んで行つた——

一塊の土を、英子は握つた

「左樣なら」と心の中で發音した。

「永久に左樣なら」

彼女はそこで手に持つた土塊を、骨箱の上らしいところに投げ入れた。

くら〳〵と眼まひがしさうになつたのを、ふみ留つた。人々が危いて

「大丈夫ですか」と彼女の肩を支へた。

「え、もう大丈夫」

につこりして、彼女は心の中でくり返したのである。

「お金の苦しみのないところで、永久に安らかにお眠りなさい、あなたは冷酷な學界の腐敗を憤慨して、いつも死身になつて鬪つた。老朽した教授連を、何故そんなに、むきになつて對象にしなければならなかつたのです。貨幣の價値をなくしてしまつたルーブル紙幣みたいな連中を、貨幣の價値通りに扱つて、眞正面からぶつかつたあなたは、無駄な骨折をしたのぢやなかつたでせうか——其人達だつて生きてゆかなければ——生きるためには自分の地位を守らければ——只私はあなたや二人の子供の命を短くしたものが、所詮は生活苦だつた事が口惜しい。私達の健康まで、どん底に苦しめて、最後に私の抱いたものは、三つの遺骨でございました」

彼女は、良人と最後の物語をするような氣持になつて、佇み乍ら考へつゞけた。

「私達の子供だけは、ほんとに生きさせませう。乞食になつても、賤業になつても、自分の生きる道を行かせませう。左様なら、永い苦鬪と惡戰の、あなたと私の生活よ。左様なら靜かにお眠りなさい。」

バラバラと四方から土塊が投げ込まれた。近親知己のすゝり泣きが洩れた。

「理學博士笠原謙一之墓」

墨の匂ひのしたゝるような、新らしい墓標が、柔らかな土の上に押し立てられた。

雪がハラハラとかゝつた。

「お母ちやん。オチヨーチキは濟んだの？」

英子は不意に鐵槌を下されたのを感じた。三つの遺骨を土に埋めた彼女のひしがれた力には、重すぎる鐵槌を。

（一九二九、五）

編輯室より

◇政局一向に展開せず、そろそろ梅雨期に入り鬱陶しいものが更にまた一つ殖えてくる。たまらない。

◇だが何といつても新緑の世界は我々を暗示し、そして緊張せしめる。堀切君の東京市長は氣持ちのいいものであるが、義一君もいつそのこと拓務省に据えて見たら五月らしい氣分も出るといふもの。

◇日本大衆黨も黨首がぜひ必要とあらば元氣のいい、肩書のない、三十代、四十代の新鋭を持つて來た方が無産黨らしい。箔のついた者はもうこのごろは流行らない。

◇さるにても民政黨の消極主義は齒がゆきかぎりだ。何故に國民の中に熱意を以つて訴へて行かないのか、自己の具體的經綸を提げて戰つて行かないのか、揚足取りといたづらな批評では今時の大衆はすこしも動かない。

◇金解禁もどうやらお流れとなるらしいとの巷評とりどり。解禁を斷行する勇氣がないのか、もしくは解禁後の難局を切りぬける自信と準備が田中內閣にないのか。やるならスパりとやつてのくべしだ。

◇「改造」七月號は「山岳特輯」とする。しかし総ての方面に於て新興の氣に當つる雜誌としたい。論文欄に於て、創作欄に於ても充實せる力作の發表が刊來ることと思ふ。そして政界、經濟界の動きをモツト突き込んで鋭利に批判する。

◇「文藝評論」の懸賞應募は先きほど締切りました。今後は斷じて受付けません。

◇昭和四年四月號に發表すべき第三回の懸賞創作を募集します。第二回の應募の條件と同じくで十一月卅日を締切りとします。委細は來月號の本誌に詳記します。

◇改造五月號懸賞詩入選の工藤正一君は自分の詩が本誌に登載されることを喜びつつ盲腸炎で四月廿八日青森病院で死んだ。まだ廿三歳の師範出の青年であつたが。

◇近ごろ「改造」の名を騙り原稿を依頼したり金の無心を吹きかけたりするものがあるそうだ。どうか不審なものがありましたら一應本社に照會して下さることをお願します。

◇久しく準備していた「浮世繪全集」も近く出版したい。また「コナンドイル全集」「若山牧水全集」「日本探偵小說全集」「小酒井不木全集」「日本地理大系」も刊行される。日本探偵小說全集」の第一回配本は「谷崎潤一郎集」「大下宇陀兒集」の二冊です。

改造定價

冊數	壹冊	半ヶ年	壹ヶ年
定價	五拾錢	參圓	六圓
郵稅	參錢	郵稅不要	郵稅不要

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切れの時は發送を停止す

▲増大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す

▲外國よりの御註文は郵稅實費を申受く

▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は一割増の事

▲御拂込は振替によらるゝを最も便利とす

昭和四年五月十八日印刷納本
昭和四年六月一日發行

編輯兼發行人 東京市芝區愛宕下町四ノ六 山本三生
印刷人 東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二
印刷所 秀英舍

定價五拾錢(郵稅三錢)

發行所 東京芝區愛宕下町四ノ六 改造社
振替東京 八四〇二
電話芝(43) 一二二一 一二二二 一二二三 一二二四

現代日本文學全集（第二篇）

第卅一回配本 六月上旬開始

坪内逍遙集

文豪の代表的傑作選集出づ！



（脚本）
役の行者
桐一葉
名殘の星月夜

（飜譯脚本）
ハムレット
ヱニスの商人

（舞踊脚本）
新曲浦島
お夏狂亂

（小說）
諷誡京童
細君
一讀三歎當世書生氣質
（その他）

明治、大正、昭和の文壇に獨歩最高の地位を占むる巨匠が全文藝的作品の結晶を見よ。

發兌 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

改造文庫

布裝上製　百頁十錢　（裝幀　恒川義雄）

第一部

- 第十篇　社會主義の發展　エンゲルス著　堺利彦譯（1）
- 第十一篇　マルキシズム認識論　ディッゲン著　石川準十郎譯（1）
- 第十二篇　辯證法的唯物觀　ディッゲン著　山川均譯（2）
- 第十三篇　哲學の實果　ディッゲン著　山川均譯（1）
- 第十四篇　神と國家　バクーニン著　本莊可宗譯（1）
- 第十五篇　婦人論　ベーベル著　山川菊榮譯（6）
- 第十八篇　エミール（上卷）　ルーソウ著　内山賢次譯（4）
- 第十九篇　エミール（下卷）　ルーソウ著　内山賢次譯（4）
- 第二十篇　國家論　オッペンハイマー著　廣島定吉譯（2）
- 第二十一篇　金融資本論　猪俣津南雄著（4）
- 第二十二篇　日本開化小史　田口卯吉著（1）
- 第二十三篇　日本經濟論　田口卯吉著（1）
- 第二十四篇　日本經濟學說の要領　經濟的帝國論　瀧本誠一著（2）
- 第二十五篇　日本商業史　横井時冬著（4）
- 第二十六篇　日本工業史　横井時冬著（4）
- 第二十七篇　經濟學の實際知識　高橋龜吉著（2）
- 第二十八篇　リッケルト論文集　リッケルト著（2）
- 第三十篇　女工哀史　細井和喜藏著（4）
- 第三十二篇　社會進化と婦人の地位　ラッパポート著　山川菊榮譯（2）
- 第三十六篇　幸德秋水集　幸德秋水著（2）
- 第三十七篇　中江兆民集　中江兆民著（2）
- 第三十八篇　財產起原論　レヴインスキー著　貴島克己著（1）
- 第三十九篇　組織論　レーニン著　鈴木厚譯（3）

第二部

- 第十三篇　俳諧七部集　萩原蘿月校（3）
- 第十四篇　蕪村七部集　萩原蘿月校訂（2）
- 第十六篇　神皇正統記　宮地直一校註（3）
- 第十七篇　奥の細道　芭蕉翁文集　萩原蘿月校訂（3）
- 第三十五篇　北村透谷選集　島崎藤村編（1）
- 第三十六篇　樋口一葉選集　島崎藤村編（1）
- 第三十七篇　平凡　二葉亭主人著（1）
- 第四十篇　坊つちやん　夏目漱石著（2）
- 第四十一篇　草枕　夏目漱石著（2）
- 第四十二篇　それから　夏目漱石著（3）
- 第四十三篇　一握の砂　悲しき玩具　石川啄木著（2）
- 第四十四篇　我等の一團と彼　石川啄木著（1）
- 第四十五篇　雲は天才である　山陰土產その他　島崎藤村著（2）
- 第四十六篇　作曲白秋民謠集　北原白秋著（2）
- 第四十七篇　獄中記　オスカア・ワイルド著　神近市子著（2）
- 第四十八篇　厭世家の誕生日　佐藤春夫著（1）
- 第四十九篇　日輪　横光利一著（1）
- 第五十篇　勞働者の居ない船　葉山嘉樹著（1）
- 第五十一篇　海に生くる人々　葉山嘉樹著（2）
- 第五十二篇　小公子　バアネット著　若松賤子譯（2）
- 第五十三篇　ホワイトファング　ジャック・ロンドン著　堺利彦譯（3）
- 第五十七篇　自選歌集　川のほとり　小泉千樫著（2）
- 第五十八篇　自選歌集　松の芽　中村憲吉著（2）
- 第五十九篇　自選歌集　海山のあひだ　釋迢空著（4）
- 第六十篇　自選歌集　立春　木下利玄著（2）
- 第六十二篇　自選歌集　人間往來　與謝野晶子著（2）
- 第六十三篇　自選歌集　槻の木　窪田空穂著（2）
- 第六十四篇　自選歌集　野原の郭公　若山牧水著（2）
- 第六十六篇　自選歌集　空を仰ぐ　土岐善麿著（2）

以下續刊

數字は定價を示す。1は拾錢を2は貳拾錢を3は參拾錢を以下之に倣ふ。
送料1は二錢、2四錢、3六錢、4八錢、6十二錢。

發行所　東京芝區愛宕下町　**改造社**　振替東京八四〇二

し　他十數篇

第三巻　短篇探偵小説集

呪はれの家　通夜の人々　按摩　嚴實の證據　遺傳手術　痴人の復讐　暴風雨の夜　難題　戀愛曲線　肉腫　三つの痣　安死術　祕密の相似　直接證據　桐の花　死の接吻　印象　卒倒　愚人の毒　メヂユーサの首　ある自殺者の手記　二重人格者　赦罪　死體蠟燭見得ぬ顔　二人の思想家　闘爭　鼻に基く殺人

ドウーゼ原作
スミルノ博士の日記（飜譯長篇）

第四巻　長篇探偵小説集

疑問の黒枠（最長篇）
大雷雨夜の殺人（長篇）
戀魔怪曲（長篇）
紅色ダイヤ
暗夜の格闘
髭の謎
頭蓋骨の祕密（以上中篇）
チエスタント原作
孔雀の樹（飜譯長篇）

第五巻　生命神祕論及闘病術

生命神祕論

第一章序論　第二章生命　第三章宇宙の觀察　第四章生物界の觀察　第五章人體の觀察　第六章性と愛　第七章生殖と遺傳　第八章生と死　第九章結論

闘病術

闘病術提要　肺結核とはどんなものか　病氣の惡化する人の心　治癒する人の心　性慾の問題　食物　藥劑に對する態度　醫師に對する態度　靈妙なる自然治癒力　健康の創造　病に打克つた人々　私の病歴

闘病雜感

他十七章

第六巻　學者氣質及不木軒隨筆

學者氣質

觀察力　想像力　探偵小説　實驗　讀書　先入見と誤

認　忍耐力　偶然と幸運　休養と娯樂　病苦　貧苦　迫害　魔法　豫言　不可思議　名譽　金　道義　常識　科學と文藝

牛涎漫語

物眞似人眞似　古今物忘れ　水中の屁こき學者　知識遊戯　心靈界の奇現象　傳說と科學　不老不死靈藥ローマンス　他八篇

西洋醫談

ギリシア古代の寺院參籠　ヒッポクラテスの誓詞　鍊金術　「ペスト」小史　デ・フォーの「倫敦疫病日誌」　外科手術の今昔　英國の醫風　King's Evil　妖婆の鍋　其他

不木軒隨筆

知識と誤謬　音樂と治療　夏四題（天才論）「怒」　妊婦の精神感動と胎兒　死の刹那の感じ　くさめ　血液の不思議　其他

第七卷　醫談女談

趣味の醫學

子を求める術　怪物の出産　催情藥　隆鼻造鼻術　指切り　髮切り　毛髮フェチシズム　木乃伊と古代醫學

酒・女・煙草　理想的美人の條件　男女童貞鑑別法　他十三篇

女性の異常心理

死の悲哀と性的興奮　美貌を欲する心　性的早熟　生むを欲せぬ心　他六篇

日常生活と變態心理

夢と迷信　夢はどうして起るか　夢の正體　他四篇

彗星放語

科學文明の弱點　學者と空想　傳記の興味　幸運の僞に　虚僞と眞實　他三篇

妻及び母の科學

第一章性の科學　第二章妻の生理及び心理　第三章母の生理及び衛生　第四章産殖の科學　第五章性病とその害毒　第六章遺傳の科學

第八卷　病間錄

喀血　モルヒネ　からす　梟と蝙蝠　體内音　讀書　雨　檢温器　强心劑　花　猫　其他　他數十篇

新道話　俳句　日記　書簡　自傳　傳記

略年譜――著作年表

小酒井不木全集豫約規定

〆切六月二十五日限

□體　裁　本文四六判ルビ附九ポイント、各冊紙數平均五百頁、總クロース上製

□頒布方法　全八卷豫約者にのみ頒つ。締切期日迄に最寄り書店又は本社へ直接御申込下さい。

□刊行期日　昭和四年五月第一回を刊行し、爾後毎月一冊づつ刊行、昭和四年十二月完結。

□申込方法　先づ御申込の際申込金として金壹圓を御拂込み下さい。これは最終の會費に充てるのですから、最初の月の會費は別に御拂込願ひます。尙申込金は中途御解約の方へは御拂戻し致しません。（前金一時拂の方は申込金を要しません）

□會　費　（一）每月拂一冊に付壹圓、（二）一時拂（全八卷）七圓五十錢。

□送本料　會費の外に送本料を申受けます。壹冊に付十四錢。尙書留送附を希望せらるる向は別に書留料十錢を御增し下さい。東京市內六錢、書留六錢增。

□拂込方法　振替貯金又は爲替でその月の一日迄に着金するやう御拂込下さい。但郵便切手代用は一割增に願ひます。

發行所　東京市芝區愛宕下町四ノ六　改造社

日本探偵小説全集豫約規定

〆切六月二十五日限

□體　裁　本文菊半截八ポイント、總ルビ付一冊紙數平均四百頁以上、裝幀淸麗無比。

□頒布方法　全二十卷、豫約者にのみ頒つ。

□刊行期日　昭和四年六月第一回を刊行し爾後毎月一冊づつ刊行し昭和五年三月を以て完結す

□申込方法　先づ御申込の際申込金として金壹圓を御拂込み下さい。これは最後の月の會費にあてるのでありますから、最初の月の會費は別に御拂込みを願ひます。尙申込金は中途御解約の方へは御拂戻し致しません。（前金一時拂の方は申込金を要しません）

□會　費　（一）每月拂壹圓（一冊五十錢、二冊一組）（二）一時拂（全二十卷）九　五十錢

□送本料　會費の外に、送本送料を申受けます。壹組に付十二錢。東京市內六錢。

□拂込方法　振替貯金又は爲替でその月の一日迄に着金するやう御拂込み下さい。

發行所　東京市芝區愛宕下町四ノ六　改造社

「日本探偵小説全集」豫約募集

第一篇　森下雨村集

怪盜　狂笛　綠の殺人

第二篇　江戸川亂歩集

惡夢　恐ろしき錯誤　二廢人　火星の運河　お勢登場　毒草　雙生兒　木馬は廻る　人でなしの戀　D坂の殺人事件　映畫の恐怖　一人二役　屋根裏の散歩者　接吻

第三篇　小酒井不木集

抱きつく瀕死者　人工心臟　肉腫　無名の脅迫狀　謎の咬傷　劇場の事變　指紋研究家　いたづら蟹　印象　猫と村正　姐妃の

殺人　刹那の錯誤　眠り薬　癡人の復讐　姙術魔　邂逅　二十年後　得意な容疑者　懷疑狂時代　白癡の智慧　紫外線

第四篇　甲賀三郎集

從弟の死　氣早の惣太　拾つた和銅開珍　原稿料の袋　電話をかける女　戀を拾つた話　運命の罠　黑衣を纏ふ人　女を捜せ　夜光珠を繞る女怪　金魚の頭

第五篇　谷崎潤一郎集

祕密　柳湯の事件　或る少年の怯れ　人面疽　金と銀　呪はれたる戲曲　ハッサン・カンの妖術　友田と松永の話

第一二篇　角田喜久雄集

發狂　下水道　ひなげし　恐水病患者　秋の亡靈　豆菊　底無沼　救ひ　現場不在證明　あかはぎの拇指紋　梅雨時の冒險

第一三篇　水谷準集

夢男　追ひかけられた男の話　七つの國　お・それ・みを　空で唱ふ男の話　月光の部屋　蠟燭　竹の間事件　盲晝家　孤兒　好敵手　北極莊綺譚　實は動く　ジャズ泥棒　酒壜の中の手記　手袋　爪痕　あの男　首　砂丘廢人　戀人を喰べる話　蜘蛛　驛夫

第一四篇　平林初之輔集　橋本五郎集

初之輔集　豫審調書　犧牲者　祕密　山吹町の殺人　誰が何故彼を殺したか　動物園の一夜　假面强盜　私はかうして死んだ

五郎集　レテーロエンラカーボ　赤鰻のはらわた　勇氣　探偵開業　塞翁苦笑　自殺を賣る話　素的な素人下宿の話　屑花NOI　海龍館事件　靑い手袋　お靜樣の事件　ペリカン

第一五篇　山下利三郎集　川田功集

利三郎集　頭の惡い男　ある哲學者の死　小野さん　第一義　裏口から　素晴らしや亮吉　愚者の罪　地球滅亡前　亮吉何をする　規則違反　虎狼の街

功集　町の出來事―探偵眼　癖　五十錢銀貨　乘合自動車　愛を求めて　迷子札　犧牲　僞刑事―郊外の出來事―夜廻　酩酊　偶然の一致―赤鬼退治　生靈　復仇　二萬圓　晴の泥棒試驗　血痰の壺

第一六篇　久山秀子集　濱尾四郎集

秀子集　チンピラ探偵　浮かれてゐる隼　隼の勝利　隼の解決　濱のお政　隼登場　隼の萬引見物　隼のお正月

四郎集　彼が殺したか？　惡魔の弟子　黄昏の告白

第一七篇　長谷川伸集　山本禾太郎集

伸集　舶來巾着切　掏摸の家　その他

禾太郎集　童貞　ぼんぷの箱　當選美人の死　小坂町事件　閉鎖を命ぜられた妖怪館の窓

第一八篇　國枝史郎集　渡邊溫集

史郎集　沙漠の寶庫　奥さんの家出　その他

溫集　少女　譃　風船美人　赤い煙突　戀勝敗　遺書に就いて　兵隊の死　父を失ふ話　シルクハット　可哀想な姉

第一九篇　牧逸馬集　城昌幸集

逸馬集　釘抜藤吉物語　水晶の座　死三題　百日紅　一九二七年の出來事　幽明　民さんの戀　舞馬

昌幸集　その暴風雨　怪奇の創造　都會の神祕　神ぞ知食す　切札　殺人淫樂　チャマイカ氏の實驗　シャンプオオル氏事件の顚末　祕密を賣られる人々　妄想の囚虜　鑑定料　寶石　月光　晶杯　七夜譚　東方見聞　薄暮　運命の拋物線　不思議

第二〇篇　佐藤春夫集　芥川龍之介集

春夫集　指紋　陳述　發見　家常茶飯　女誡扇奇譚

龍之介集　開化の殺人　開化の良人　妙な話　黑衣聖母　影　奇怪な再會

マルクス＝エンゲルス全集 第十一卷

剰餘價値學說史

第三卷

久しく待たれたる剰餘價値學說史第三卷出づ。本學說史は實に『資本論』の第四卷とも見るべきもの。在來の諸經濟學說に對する批判の形式を具備し、經濟學の中心問題たる剰餘價値に關する詳細なる歷史的研究にその重點を置く。謂はばマルキシズムの經濟學史的理論として重要視せらるゝ書である。譯者はそれ〲斯界の俊豪、蓋し本全集中の壓卷である。（六百頁）

第八回配本

五月下旬

目次（一斑）

第一章 トマス・ロバート・マルサス―**第二章** リカード學派の解消―**第三章** 經濟學者に對する反對論―**第四章** ジョージ・ラムゼイ―**第五章** シェルビュリエ―**第六章** リチャード・ジョーンズ―**第七章** 利潤利子および俗流經濟學―**附錄**

次回配本豫告 第三卷（イギリス勞働階級の狀態。哲學の貧困。以下十數篇）

約五百八十頁 目下印刷中

東京市芝區愛宕下町 **改造社** 振替東京八四〇二番

LITICS, LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS, ETC.
RICE: FIFTY SEN A COPY, SIX YEN A YEAR
FFICE: KAIZOSHA, ATAGOSHITA-MACHI SHIBA-KU, TOKIO.

株式會社秀英舍工場